

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）

— 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 V —

（伊集院IC～市来IC）

いち の ほん
市ノ原遺跡

（第 1 地点）

（日置郡市来町）

2003年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



古代掘立柱建物跡検出状況

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C～市来 I C間）建設に伴い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成 9 年度に実施した市ノ原遺跡第 1 地点の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が数多く発見されました。

なかでも、掘立柱建物跡 15 棟と多数の墨書土器等は古代における南九州の様相を知る上で注目されています。

本書は、地域の先史・歴史時代の解明に貴重な手がかりを提供するものと考えており、文化財保護と学術研究のため、多くの方々に活用していただければ幸いです。

なお、この発掘調査を実施するにあたって、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所や地元の皆様に多大な御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

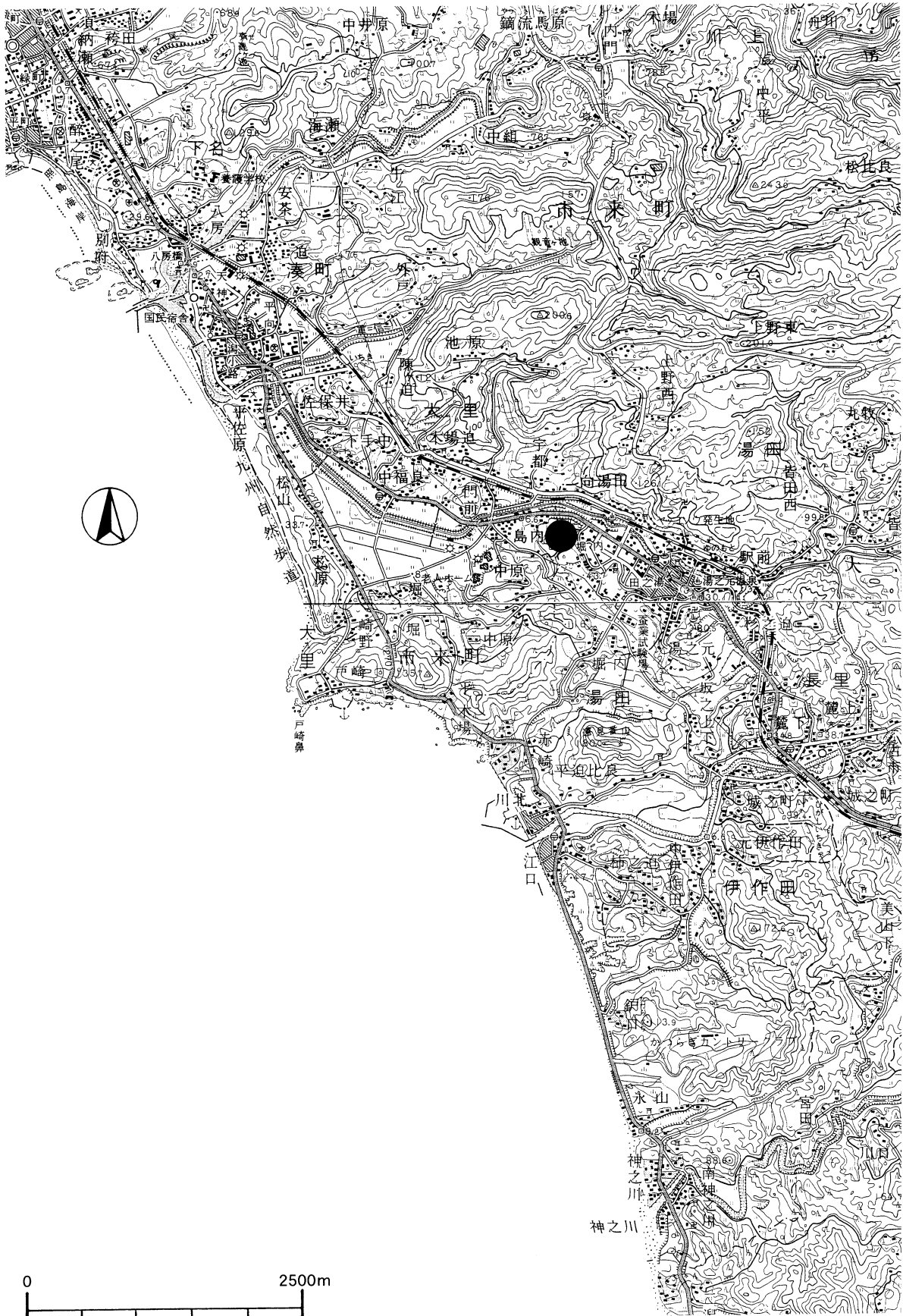
平成 15 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

報告書抄録

ふりがな	いちのはら いせき だいいちちてん							
書名	市ノ原遺跡第1地点							
副書名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	V							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第49集							
編著者名	元田順子・牛ノ濱修・繁昌正幸・寺原徹							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 TEL0995-48-5811							
発行年月日	西暦 2003年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号					
いちのはらいせき 市ノ原遺跡 第1地点	かごしまけんひおき 鹿児島県日置 郡市来町大字 おおさとあざうえの はら 大里字上ノ原 まえ 前	463612	29-67	31° 40′ 20″	130° 19′ 30″	確認調査 19961001 ～ 19961213 本調査 19970421 ～ 19980316	12,000m ²	南九州西回 り自動車道 鹿児島道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
市ノ原遺跡 第1地点	官衙跡または 居宅跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世～近世・近 代	集石9基・安山岩 集積1基 埋壺 掘立柱建物跡15 棟・土坑28基・溝 状遺構2条 道跡3条・近世墓 12基	前平・春日・深浦・ 黒川・石鏃・石匙・ 削器・石斧・石皿 弥生土器 成川式土器 土師器・須恵器・ 内黒土師器・土師 甕・青磁 青磁・白磁・羽釜・ 染付・薩摩焼・銅 銭・鉄製品	玦状耳飾 緑釉陶器・耳皿 越州窯系・墨書土 器 龍泉窯系・景德鎮 窯系			



第1図 市ノ原遺跡第1地点位置図

例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設（伊集院 I C～市来 I C間）に伴う市ノ原遺跡第 1 地点の埋蔵文化財報告書である。
- 2 発掘調査は、建設省 鹿児島国道工事事務所（現 国土交通省 鹿児島国道事務所）の委託事業として、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査については、市来町教育委員会の協力を得た。
- 4 本書の遺物実測・原稿執筆は、元田順子・牛ノ瀨修・繁昌正幸・寺原徹が担当し、編集は、元田順子が行った。ただし、付編の14C年代測定については(株)パリノサーヴェイ、近世人骨については小片丘彦氏・峰和治氏・竹中正巳氏（鹿児島大学歯学部）の分析報告である。また、石器実測・トレースの一部を(株)文化財環境整備研究所（現 (株)九州文化財研究所）に委託した。
- 5 出土遺物の整理復元作業等は、県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行い、遺物写真の撮影及び現像・焼付は、鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎が行った。
- 6 発掘調査にあたっては、石野博信（徳島文理大学文学部教授）、小片丘彦（鹿児島大学歯学部教授）、永山修一（ラ・サール学園教諭）、平川南（国立歴史民俗博物館教授副館長）、本田道輝（鹿児島大学法文学部助手）、山本信夫（太宰府市教育委員会文化財調査係長）各氏の協力を得た。なお、指導・助言者の所属は、発掘調査当時のものである。
- 7 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致し、本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。
- 8 本遺跡の出土遺物は県立埋蔵文化財センターが一括して保管し、一部は鹿児島県上野原縄文の森展示館に展示している。

本文目次

序 文

報告書抄録

例 言

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第2章 調査の経過	6
第1節 調査に至るまでの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の概要と経過	9
第3章 位置及び環境	11
第4章 発掘調査の概要	15
第1節 調査の方法	15
第2節 層位	18
第3節 IV層の調査	23
第4節 III層の調査	43
第5節 III・IV層の石器	59
第6節 III a層の調査1	85
第7節 III a層の調査2	94
第8節 II層の調査1（古代）	100
第9節 II層の調査2（中世）	180
第10節 近世・近代の調査	188
第5章 まとめ	201
付 篇	205
図 版	214

挿図目次

第1図	市ノ原遺跡第1地点位置図	
第2図	西回り自動車道遺跡位置図	5
第3図	市ノ原遺跡及び周辺遺跡位置図	14
第4図	市ノ原遺跡第1地点調査範囲図	16
第5図	市ノ原遺跡第1地点グリッド図	17
第6図	基本土層柱状図	18
第7図	土層断面図(1)	19
第8図	土層断面図(2)	20
第9図	土層断面図(3)	21
第10図	遺構概略位置図	22
第11図	Ⅲ層とⅣ層の集石配置及びⅣ層集石の実測図	24
第12図	Ⅳ層土器出土状況	25
第13図	Ⅳ層出土土器：Ⅰ・Ⅱ類(1)	26
第14図	Ⅳ層出土土器：Ⅱ類(2)	28
第15図	Ⅳ層出土土器：Ⅱ類(3)	29
第16図	Ⅳ層出土土器：Ⅲ類	31
第17図	Ⅳ層出土土器：Ⅳ類	32
第18図	Ⅳ層出土土器：Ⅴ・Ⅵ類	33
第19図	Ⅳ層出土土器：Ⅳ～Ⅵ類底部	34
第20図	Ⅳ層出土土器：Ⅶ～Ⅹ類	35
第21図	Ⅳ層出土土器：Ⅹ類	36
第22図	Ⅳ層出土土器：ⅩⅠ類	37
第23図	Ⅳ層：136出土状況	38
第24図	Ⅳ層出土土器：ⅩⅠ～ⅩⅢ類	39
第25図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構	43
第26図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(1)	44
第27図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(2)	45
第28図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(3)	46
第29図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(4)	47
第30図	Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(5)	48
第31図	Ⅲ層集石(1)	50
第32図	Ⅲ層集石(2)	51
第33図	Ⅲ層土器出土状況	53
第34図	Ⅲ層出土土器：ⅩⅣ・ⅩⅤ類	54
第35図	Ⅲ層出土土器：ⅩⅥ・ⅩⅦ類	55
第36図	Ⅲ層出土土器：後期ⅩⅧ～ⅩⅨ類	56
第37図	Ⅲ層出土土器：晩期ⅩⅩ～ⅩⅩⅣ類	57
第38図	Ⅲ・Ⅳ層石器出土状況	60
第39図	石鏃(1)	61
第40図	石鏃(2)	62
第41図	石匙	64
第42図	削器(1)	65
第43図	削器(2)	66
第44図	石槍・石錐・石錘・玦状耳飾・異形石器	67
第45図	礫器・剥片・軽石	68
第46図	石核(1)	69
第47図	石核(2)	70
第48図	磨製石斧	71
第49図	打製石斧(1)	72
第50図	打製石斧(2)	73
第51図	打製石斧(3)	74
第52図	石皿(1)	75
第53図	石皿(2)・研磨器・礫器	76
第54図	磨石兼敲石(1)	77
第55図	磨石兼敲石(2)・磨石	78
第56図	凹石(1)	79
第57図	凹石(2)・敲石(1)・その他の石器	80

第58図	敲石(2)・細石核・用途不明石器	81
第59図	埋壺検出状況(1)	86
第60図	埋壺検出状況(2)	87
第61図	埋壺(1)	88
第62図	埋壺(2)	89
第63図	Ⅲa層出土土器(弥生土器)(1)	90
第64図	Ⅲa層遺物(弥生時代)出土状況	91
第65図	Ⅲa層出土土器(弥生土器)(2)	92
第66図	Ⅲa層遺物(古墳時代)出土状況	95
第67図	Ⅲa層出土土器(古墳時代)(1)	96
第68図	Ⅲa層出土土器(古墳時代)(2)	97
第69図	Ⅲa層出土土器(古墳時代)(3)	98
第70図	Ⅱ層検出遺構配置図	101
第71図	掘立柱建物跡実測図(1)	103
第72図	掘立柱建物跡実測図(2)	104
第73図	掘立柱建物跡実測図(3)	105
第74図	掘立柱建物跡実測図(4)	106
第75図	掘立柱建物跡実測図(5)	107
第76図	掘立柱建物跡実測図(6)	108
第77図	掘立柱建物跡実測図(7)	109
第78図	掘立柱建物跡出土遺物	113
第79図	土坑(1)	116
第80図	土坑(2)	117
第81図	土坑(3)	118
第82図	土坑内出土遺物(1)	120
第83図	土坑内出土遺物(2)	121
第84図	溝状遺構	123~124
第85図	Ⅱ層土師器出土状況	126
第86図	土師器：坏(1)	127
第87図	土師器：坏(2)	128
第88図	土師器：埴(1)	129
第89図	土師器：埴(2)・Ⅲ	130
第90図	充実高台：埴	131
第91図	土師器：鉢	132
第92図	土師器：甕(1)	133
第93図	土師器：甕(2)	134
第94図	土師器：甕(3)	135
第95図	土師器：甗(1)	136
第96図	土師器：甗(2)	137
第97図	Ⅱ層内黒土師器出土状況	138
第98図	内黒土師器：埴(1)・蓋	139
第99図	内黒土師器：埴(2)	140
第100図	内黒土師器：鉢(1)	141
第101図	内黒土師器：鉢(2)	142
第102図	Ⅱ層赤色土師器出土状況	143
第103図	赤色土師器	144
第104図	内赤土師器	145
第105図	外赤土師器	146
第106図	Ⅱ層須恵器出土状況	148
第107図	須恵器(1)：坏・壺	149
第108図	須恵器(2)：壺	150
第109図	須恵器(3)：甕	151
第110図	須恵器(4)：甕	152
第111図	須恵器(5)：甕	153
第112図	須恵器(6)：甕	154
第113図	須恵器(7)：甕	155
第114図	Ⅱ層越州窯青磁他出土状況	156
第115図	越州窯青磁・緑釉陶器	157
第116図	焼塩土器・圧痕土器	158
第117図	土錘・粉痕土器・耳皿・紡錘車	160

第118図	石製品・金属製品・鞆羽口	162
第119図	Ⅱ層墨書土器出土状況(1)	171
第120図	Ⅱ層墨書土器出土状況(2)	172
第121図	墨書土器(1)	173
第122図	墨書土器(2)	174
第123図	墨書土器(3)刻書土器	175
第124図	Ⅱa層遺物(中世)出土状況	179
第125図	糸切底土師器	180
第126図	播鉢・捏鉢・羽釜・中世染付	181
第127図	竜泉窯青磁：皿	182
第128図	竜泉窯青磁：碗(1)・盤	183
第129図	竜泉窯青磁：碗(2)	184
第130図	白磁	185
第131図	近世墓壇(1)	189
第132図	近世墓壇(2)	190
第133図	近世墓壇(3)	191
第134図	近世墓壇内遺物(六道銭)	191
第135図	道跡	192
第136図	陶磁器	194
第137図	薩摩焼(1)	196
第138図	薩摩焼(2)	197
第139図	薩摩焼(3)	198
第140図	五輪塔・金属器	199
第141図	古代建物配置(案)模式図	204

表目次

第1表	南九州西回り自動車道路(伊集院IC～市来IC)建設に伴う発掘調査遺跡一覧表	4
第2表	周辺遺跡(1)	12
第3表	周辺遺跡(2)	13
第4表	Ⅳ層土器観察表(1)	40
第5表	Ⅳ層土器観察表(2)	41
第6表	Ⅳ層土器観察表(3)	42
第7表	安山岩集積遺構出土遺物観察表	48
第8表	Ⅲ層土器観察表	58
第9表	Ⅲ・Ⅳ層石器観察表(1)	82
第10表	Ⅲ・Ⅳ層石器観察表(2)	83
第11表	Ⅲ・Ⅳ層石器観察表(3)	84
第12表	埋壺観察表	89
第13表	Ⅲa層(弥生時代)観察表	93
第14表	Ⅲa層(古墳時代)観察表	99
第15表	掘立柱建物跡観察表(1)	110
第16表	掘立柱建物跡観察表(2)	111
第17表	掘立柱建物跡観察表(3)	112
第18表	掘立柱建物跡出土遺物観察表	113
第19表	土坑出土遺物観察表	122
第20表	古代遺物観察表(1)	163
第21表	古代遺物観察表(2)	164
第22表	古代遺物観察表(3)	165
第23表	古代遺物観察表(4)	166
第24表	古代遺物観察表(5)	167
第25表	古代遺物観察表(6)	168
第26表	墨書土器観察表(1)	176
第27表	墨書土器観察表(2)	177
第28表	墨書土器観察表(3)	178
第29表	中世遺物観察表(1)	186
第30表	中世遺物観察表(2)	187
第31表	近世墓壇内出土銅銭観察表	188
第32表	近世～近代遺物観察表(1)	199

第33表	近世～近代遺物観察表(2)	200
------	---------------	-----

図版目次

巻頭図版	古代掘立柱建物跡検出状況	
図版1	遺跡遠景・土層	214
図版2	集石	215
図版3	安山岩集積遺構・縄文時代遺物出土状況	216
図版4	弥生・古墳時代遺構・遺物検出状況	217
図版5	古代掘立柱建物跡検出状況(1)	218
図版6	古代掘立柱建物跡検出状況(2)・溝状遺構	219
図版7	古代掘立柱建物跡検出状況(3)・古代遺物出土状況(1)	220
図版8	古代遺物出土状況(2)	221
図版9	古代土坑検出状況(1)	222
図版10	古代土坑検出状況(2)	223
図版11	近世墓壇検出状況(1)	224
図版12	近世墓壇検出状況(2)近世遺構・遺物指導風景	225
図版13	Ⅳ層出土土器(1)	226
図版14	Ⅳ層出土土器(2)	227
図版15	Ⅳ層出土土器(3)	228
図版16	Ⅳ層出土土器(4)	229
図版17	安山岩集積遺構出土遺物	230
図版18	Ⅲ層出土土器	231
図版19	石鏃	232
図版20	石匙・削器・石槍・異形石器等	233
図版21	磨製石斧・礫器・軽石製品	234
図版22	打製石斧(1)	235
図版23	打製石斧(2)	236
図版24	石皿・研磨器・敲石	237
図版25	礫器・敲石・磨石・凹石	238
図版26	Ⅲa層出土(弥生・古墳)土器(1)	239
図版27	Ⅲa層出土(弥生・古墳)土器(2)	240
図版28	Ⅲa層出土(弥生)土器	241
図版29	Ⅲa層出土(古墳)土器	242
図版30	古代土坑内遺物・土師器(1)	243
図版31	土師器(2)	244
図版32	土師器(3)	245
図版33	土師器(4)	246
図版34	内黒土師器(1)	247
図版35	内黒土師器(2)・赤色土師器	248
図版36	須恵器(1)	249
図版37	須恵器(2)	250
図版38	越州窯青磁	251
図版39	紡錘車・土錘・焼塩土器・用途不明土器	252
図版40	墨書土器・耳皿・須恵器・土師器(糸切底)・青磁・白磁	253
図版41	墨書土器	254
図版42	刻書土器	255
図版43	羽釜・播鉢	256
図版44	青磁	257
図版45	白磁	258
図版46	染付	259
図版47	薩摩焼	260
図版48	染付・薩摩焼・石塔	261
図版49	原石・小石・滑石片	262
図版50	糲痕土器・種子	263

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月から国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島IC～市来IC間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度から文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査が行われ、その結果を受けて16か所の遺跡について本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷……伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や、近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが、青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平……伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原……伊集院町下谷口の標高90～100mの山合いの谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代（早期・後期）、

弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは縄文時代早期で、遺構は道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。

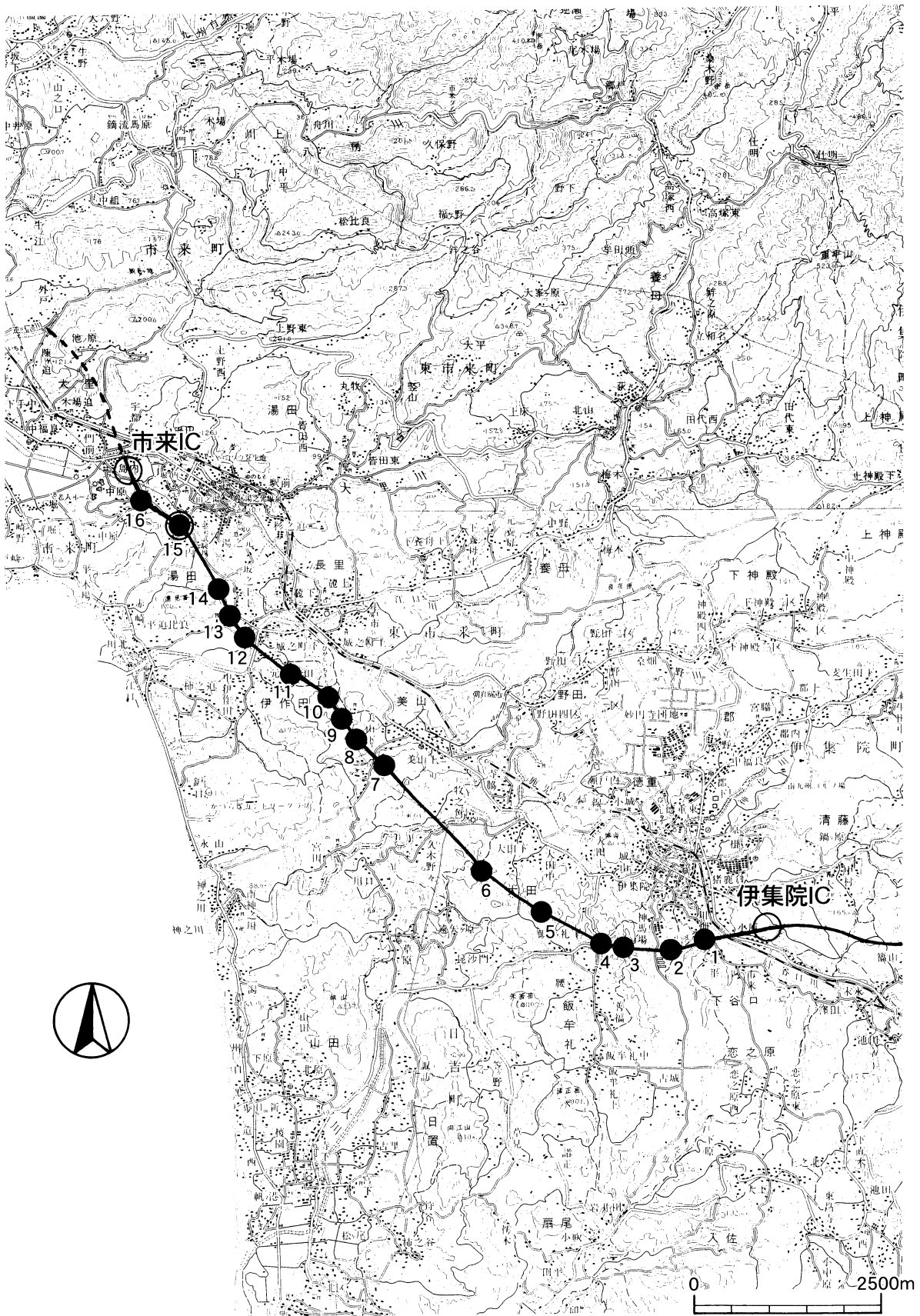
- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器（甕・壺・徳利・土瓶・捏鉢・播鉢・動物形土製品）、瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦）や窯道具が多量に出土した。
- 8 池之頭……東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や、中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式・黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山……東市来町美山字雪山の標高95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・播鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引……東市来町長里字猿引の標高110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原……東市来町伊作田字犬ヶ原の標高66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主となるのは平安時代で、掘立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鞆羽口・鉄滓・鉄製品）や多くの土師器・須恵器と共に発見された。
- 12 向柵城跡…東市来町伊作田の標高50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ形石器、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帯曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城であることがわかった。
- 13 堂園平……東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭

器・ナイフ形石器・台形石器と、細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式・轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。

- 14 今里……………東市来町伊作田字今里の標高65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原……………市来町大里字上ノ原前から東市来町湯田字市ノ原に至る標高50mの台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・埋壺、古墳時代の住居跡、古代～中世の建物群、近世の街道跡など多時期にわたり、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原……………市来町大里字上ノ原前の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式・轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

第1表 南九州西回り自動車道鹿兒島道路（伊集院IC～市来IC）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
1	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認H8.10 本 H8.10～11	1,250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 泉理文セクター報告書31 2001刊行
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認H8.10～12 本 H8.12～H10.7	14,000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩) 古代～近世	磯群・剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 縄文(細石刃) 堅穴住居跡・集石・連穴土坑・前平式土器 土師器・青磁 土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁 土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピソット・溝状遺構
3	下永迫A	伊集院町下谷口	確認H9.10 本 H10.5～7	2,600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器
4	柳原	伊集院町下谷口	確認H9.11 本 H10.7～10	6,000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピソット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認H9.2 本 H9.5～H10.3	6,000㎡	三垣・桑波田 寺原	旧石器(早・後) 縄文(古墳)	剥片・碎片 遺跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
6	大田城跡	伊集院町大田	確認H8.12～H9.1 本 H9.12～H10.3	4,000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器(早)	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石鏃・磨石
7	堂平窯跡	東市来町美山	確認H10.2 本 H10.8～12	3,500㎡	池畑・繁昌・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	江戸	窯跡・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
8	池之頭	東市来町美山	確認H9.8 本 H10.8～11 H12.7～8	7,500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器(細石刃) 縄文(早・後・晩)	細石刃(細石刃) 集石・前平式・吉田式・石板式 成川式土器
9	雪山	東市来町美山	確認H12.6 本 H12.6～8	2,700㎡	宮田洋一・三垣	縄文(早) 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具
10	猿引	東市来町長里	確認H12.5 本 H12.5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器(前) 縄文(前)	磯群・ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・剥片 曾畑式
11	六ヶ原	東市来町伊作田	確認H9.2 H10.6 本 H11.12～H12.2	2,000㎡	池畑・三垣 牛ノ原・橋口・大窪	旧石器(縄文) 縄文(早・後)	細石刃(細石刃) 掘立柱建物跡・鍛冶炉跡・土師器・硫黄・滑石
12	向楯城跡	東市来町伊作田	確認H8.11～12 本 H9.4～H10.3 H10.7～8	14,000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文(草創・早・後) 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ形石器 石鏃・隆帯文・前平式・市来式 堅穴住居跡・成川式 空罎・帯曲輪・曲輪・堀切・堅穴状遺構・掘立 柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認H8.11～12 本 H10.5～11	2,000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・後)	尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・敲石 磯群・細石刃(細石刃) 集石・吉田式・塞ノ神式・縄文 土坑・土師器・須恵器
14	今里	東市来町伊作田	確認H8.11 本 H9.4～11	14,000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早・前・後・晩)	剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認H8.10～12 本 H8.12～H11.7	62,000㎡	繁昌・西園・宮田茂樹 池畑・繁昌・西園・寺師・前野・森 田・宮田洋一・八木澤・中原・藤野・ 三垣・元田・西村・寺原・宮田茂樹・ 松村・松崎	旧石器(ナイフ) 旧石器(細石刃) 縄文(早～晩) 弥生 古代～中世 近世	泉理文セクター報告書33 2002刊行 磯群・ナイフ形石器・尖頭器 細石刃(細石刃) 集石・土師器 縄文(早～晩) 堅穴住居跡・土坑・成川式 堅穴住居跡・焼土・溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉
16	上ノ原	市来町大里	確認H8.11 本 H10.7～9	2,000㎡	繁昌・宮田茂樹 上之園・栗林	縄文(早) 古墳 古代～中世	集石・土坑・塞ノ神式 堅穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁



第2図 西回り自動車道遺跡位置図

第2章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発の調整を図っている。

この事前協議制に基づき、建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所は、「南九州西回り自動車道鹿児島道路建設事業」の計画に基づき、鹿児島IC～市来IC間において計画した事業に先立ち、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育庁文化課（現文化財課、以下文化財課）に照会した。これを受けて文化財課が平成3年6月に伊集院IC～市来IC間の分布調査を行ったところ、市ノ原遺跡を含む27か所の遺物散布地・確認調査の必要な地点がわかった。この結果を受けて鹿児島国道工事事務所・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、当該地域内遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することとした。

調査は平成8年10月1日から平成8年12月13日まで市ノ原遺跡第1地点から第5地点までの確認調査を行い、それぞれの遺跡の範囲や性格が把握された。市ノ原遺跡第1地点はこの調査結果を受けて、現状保存や設計変更が不可能であることから、翌平成9年4月21日から平成10年3月16日まで12000㎡を対象として、埋文センターが記録保存のための緊急発掘調査（本調査）を実施した。

整理作業及び報告書作成作業は、平成10・13・14年度に埋文センターで実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査（平成8年度）

起因事業主体	建設省鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
調査企画	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
〃	〃	主任文化財主事	
〃	〃	兼 調 査 課 長	戸崎 勝洋
〃	〃	調 査 課 長 補 佐	新東 晃一
〃	〃	主任文化財主事	
〃	〃	兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当	〃	文 化 財 主 事	繁昌 正幸
〃	〃	文 化 財 調 査 員	宮田 茂樹
調査事務	〃	主 査	前屋敷裕徳
〃	〃	主 事	中村 和代

発掘調査（平成9年度）

起回事業主体	建設省鹿児島国道工事事務所				
調査主体	鹿児島県教育委員会				
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉元	正幸
調査企画	〃			尾崎	進
〃	〃				
〃	〃				
〃	〃				
〃	〃				
調査担当	〃				
〃	〃				
調査事務	〃	主	査	前屋敷	裕徳
〃	〃	主	査	政倉	孝弘
現地指導者	太宰府市教育委員会文化財調査係長			山本	信夫
〃	鹿児島大学法文学部助手			本田	道輝
〃	徳島文理大学文学部教授			石野	博信
〃	ラ・サール高校教諭			永山	修一
〃	鹿児島大学歯学部教授			小片	丘彦

報告書作成（平成10年度）

起回事業主体	建設省鹿児島国道工事事務所				
報告書作成主体	鹿児島県教育委員会				
報告書作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉永	和人
報告書作成企画	〃			尾崎	進
〃	〃				
〃	〃				
〃	〃				
〃	〃				
報告書作成担当者	〃				
報告書作成事務	〃				
〃	〃				
		主	査	有村	貢
				政倉	孝弘

報告書作成（平成13年度）

起回事業主体	国土交通省鹿兒島国道事務所		
報告書作成主体	鹿兒島県教育委員会		
報告書作成統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
報告書作成企画	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
〃	〃	主任文化財主事	
〃	〃	兼 調 査 課 長	新東 晃一
〃	〃	調 査 課 長 補 佐	立神 次郎
〃	〃	主任文化財主事	
〃	〃	兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成担当	〃	文化財 研究員	元田 順子
報告書作成事務	〃	総 務 係 長	前田 昭信
〃	〃	主 査	今村孝一郎

報告書作成（平成14年度）

起回事業主体	国土交通省鹿兒島国道事務所		
報告書作成主体	鹿兒島県教育委員会		
報告書作成統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
報告書作成企画	〃	次長兼総務課長	田中 文雄
〃	〃	調 査 課 長	新東 晃一
〃	〃	調 査 課 長 補 佐	立神 次郎
〃	〃	主任文化財主事	
〃	〃	兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成担当	〃	文化財 研究員	元田 順子
〃	〃	文 化 財 主 事	繁昌 正幸
〃	〃	文化財 研究員	寺原 徹
報告書作成事務	〃	総 務 係 長	前田 昭信
〃	〃	主 査	脇田 清幸

指導・助言者（50音順・敬称略）：石野博信・井上喜久男・上園博文・上田耕・牛嶋茂・尾関清子・小片丘彦・我那覇生純・上村俊雄・河口貞徳・柴田博子・高倉洋彰・竹中正巳・常田和彦・堂満幸子・徳重和幸・永山修一・本天道輝・前川要・松川博一・峰和治・宮下貴浩・百瀬正恒・山崎純男・山本信夫・渡辺芳郎

第3節 調査の概要と経過

市ノ原遺跡第1地点は平成8年度（平成8年10月1日～平成8年12月13日）に確認調査を行い、その結果に基づいて平成9年度（平成9年4月21日～平成10年3月16日）に本調査を行った。

S T A No. 9 と No. 12 を基準に10m間隔のグリッドを設定し、そのグリッドに沿って5か所のトレンチ（8m×2m…3か所、6m×2m…1か所、9m×2m…1か所）を設けて確認調査を行った。

その結果、古代と思われる土師器・須恵器等多数がⅡ層から、縄文時代後期・晩期の遺物がⅢ層から、早期の遺物がⅢ・Ⅳ層からそれぞれ出土した。経過は日誌抄により月毎に略述する。

月	調 査 の 経 過
平成 9年 4月	21日より本調査開始。（担当 寺師・藤野） 重機による表土除去、南西部斜面の竹木除去・焼却。3か所トレンチを設定・掘り下げ。 Ⅱ層上部から青磁・土師器等多数出土。Ⅲ層から黒曜石が出土。22日上園博文氏（東市来町職員）・徳重和幸氏（東市来町教委）来訪。
5月	グリッド・レベル杭設定。1～3トレンチ調査。1TのⅢ層上面で柱穴検出。2Tで土坑検出。4・5T設定。5TⅢ層から深浦式土器出土。B・C-17・18区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。遺構・遺物はなく、確認トレンチにてシラスまで調査終了。G・H・I-4～6区表土除去・Ⅱ層調査。土師器等遺物多数出土。Ⅲ層上面遺構検出。
6月	G～K-3・4区Ⅱ・Ⅲ層調査。Ⅱ層から土師器等遺物多量に出土。Ⅲa層上面で溝状遺構・柱穴を検出・掘り下げ、実測・写真撮影。Ⅲ層上面コンター図作成。 H～L-5・6区Ⅱ層調査。J-5区遺物出土状況写真撮影。
7月	G～K-5～7区Ⅱ～Ⅲ層調査。土師器・須恵器・内黒土師器等多数出土。H～K-4・6区柱穴検出・掘り下げ・実測。Ⅲa層上面精査・土坑検出・掘り下げ。4日異形石器出土。3号土坑内出土土師器の実測・写真撮影。18日高倉洋彰（西南学院大学文学部教授）来訪。
8月	G～K-5・6区Ⅲa層調査 J-6・7区Ⅱ・Ⅲ層調査。溝状遺構（近世遺構）検出。 F～H-2・3区Ⅱ～Ⅲa層調査・遺物出土。柱穴検出。21日Ⅲa層から頁岩製石匙が出土。 H-5区Ⅲa層上面精査・柱穴検出・掘り下げ。25日G-5区柱穴2基内から土師器碗・土師器坏出土。28日遺構内から土製紡錘車出土。
9月	E～G-4～6区Ⅱb・Ⅲa層調査。土師器・須恵器・墨書土器等多数出土。G-4区Ⅲa層炭化木出土。E・F-5・6区Ⅱa～Ⅲa層調査。土師器等遺物多数出土。柱穴・土坑掘り下げ・実測。11日上村俊雄氏（鹿児島大学教授）来訪。
10月	南東部斜面側とG-11・12区、D・E-12区、D・E-14・15区にトレンチ設定・Ⅳ層以下の下層確認。一部縄文早期土器出土。F-12区Ⅲ層で埋壺出土・実測・写真撮影。南側調査区柱穴の実測。14日掘立柱建物跡及び調査区航空撮影。9日永山修一氏（ラ・サール学園）竹山秀司氏（南日本新聞伊集院支局）・16日山本信夫氏（太宰府市教委教育部文化財課文化財調査係長）・松川博一氏（叻古都太宰府保存協会学芸員）遺構・遺物指導。常田和彦氏（吹上町教委）来訪。
11月	A～E-13区トレンチ設定・掘り下げ。遺物は出土せず。南側調査区柱穴の実測。E-11・12区1・2・A・B号集石検出・実測。F～K-4区Ⅲb層調査。山形押型文土器・吉田式土器出土。3号掘立柱建物跡実測。柱穴半裁・断面実測。11日宮下貴浩氏（金峰町教委）・21日山崎純男氏（福岡市教委文化財課大規模事業担当）現地指導。27日石野博信氏（徳島文理大学文学部教授）現地指導。

12月	1・4～8・13・14号掘立柱建物跡実測・写真撮影・柱穴半裁・断面実測。E～G-7区Ⅲ層調査。土師器，墨書土器等出土。E・J-3～5区Ⅲa～Ⅳ層調査。Ⅲ層から中期・後期の土器，Ⅳ層から集石検出，貝殻条痕文土器・黒曜石出土。I・J-5区Ⅵ層調査終了・写真撮影。G-2・F-5区Ⅲ層から石匙・スクレイパー出土。集石実測。
平成10年1月	F・G-2区，D～F-7・8区，H-3～6区・Ⅱ～Ⅳ層調査。一部トレンチによる下層確認調査。D-8区から五輪塔空風輪出土。近世土坑検出・掘下げ・写真撮影・実測。F-2～4区Ⅴ層調査。縄文時代早期土器出土。6日上田耕氏（知覧町教委）20日峰和治氏（鹿児島大学歯学部助手）我那覇生純氏（鹿児島大学歯学部学生）来訪。27日小片丘彦氏（鹿児島大学歯学部教授）・峰和治氏（鹿児島大学歯学部助手）・竹中正巳氏（鹿児島大学歯学部助手）・我那覇氏（鹿児島大学歯学部学生）による人骨取り上げ。
2月	近世土坑の実測。E～K-3～6区Ⅲa～Ⅳ層調査。K-5区・G-4区で集石検出。貝殻条痕文土器・黒曜石出土。G-4区Ⅲ層安山岩集積遺構検出・実測。土層断面写真撮影・実測。J-4区掘立柱建物跡検出・写真撮影・実測。4日内村文化財課長来訪。12日永山修一氏（ラ・サール学園教諭）遺物指導。竹山秀司氏（南日本新聞伊集院支局）来訪。
3月	H・I-3～5区Ⅳ層調査。貝殻条痕文土器・黒曜石・鉄石英等出土。J-4区集石7～9号検出・実測。調査区完掘状況写真撮影。G-4区土層断面実測。11日上村俊雄氏（鹿児島大学教授）来訪。16日全ての調査を終了する。

報告書作成業務（平成10・13・14年度）

以下の計画に基づいて報告書作成業務を遂行した。

年 度	担 当 者	事 業 内 容
平成10年度 (4～9月)	寺師 孝則	<ul style="list-style-type: none"> ・遺構・遺物図面の整理 ・古代土師器の分類・選別・接合 ・内黒土師器一部実測
平成13年度 (通年)	元田 順子	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文時代～古代の遺物分類・選別・復元 ・実測・縄文～古代の石器分類・選別・石器実測委託 ・土層断面図・コンター図作成
平成14年度 (4～12月)	元田 順子	<ul style="list-style-type: none"> ・古代～近世の遺物分類・選別・復元・実測 ・遺構・遺物トレース ・遺構・遺物観察表・ドット図作成 ・写真撮影・文章作成・校正・製本

第3章 位置及び環境

市ノ原遺跡第1地点は、日置郡市来町大字大里字上ノ原前に所在する。

市来町は、薩摩半島の北西部、吹上浜の北端に位置する。北は串木野市・薩摩郡樋脇町、東は東市来町に接し、西は東シナ海に面している。鹿児島市から西方へ約32kmに位置し、市来町の総面積は3,156㎡で、北東から南西にかけて細長い。人口7,219人（平成12年10月1日 国勢調査による）である。1889年（明治22）市来郷の湊町・湊村・大里村・川上村を合わせて西市来村として発足、1930年（昭和5）に町制を施行し、市来町と改称し、現在に至っている。

市ノ原遺跡のある市来町の地形は、大きく山地、シラス台地、沖積平野・砂丘の三つに区分される。町全体は北東が高く、南西に低い地形である。北東部は八重山山塊に属する丘陵で、重平山付近に発する八房川が南西に流れながら、狭い谷底平野を形成している。大里川は南東部から北西へ流れて、湊町付近で八房川と合流し、東シナ海に注いでいる。重信川を含めた三河川が合流する南西部は、沖積平野を形成している。水田は主としてこの三河川の流域に沿って開け、畑地はその丘陵に分布しているが、大半はシラス台地である。

シラス台地は、錦江湾奥部にある始良カルデラから噴出した火砕流が堆積した台地で、シラスは約24,000年前の火山噴出物で「入戸火砕流堆積物」と呼ばれている。東シナ海に沿った砂丘は、吹上浜と呼ばれ、日本三大砂丘の一つで、串木野市島平から加世田市小湊に至る約30kmの遠浅海岸である。冬は北西の風が強く、海岸の砂は内陸部に吹き溜まり、最大幅2km、最高所47m（金峰町竹原）という吹上砂丘ができた。

遺跡は、第1地点～第5地点まであり、市来町大里から東市来町湯田へ延びる。大里川の河岸段丘左岸にある標高40～50mのシラス台地上にある。調査面積は62,000㎡である。南側には標高137mの山塊があり、その南は急崖をなし沖積平野を望み吹上浜へと続いている。第1地点は、標高約42mの台地西端にあり、市来町で一番広い大里田圃を望むところであり、調査面積は2,000㎡である。

市来町では、最近発掘事例が増え、旧石器時代から遺跡が知られ、登録された遺跡数は56か所を数える。

旧石器時代の遺跡では、松尾平遺跡で台形石器・ナイフ形石器・剥片尖頭器が、上城詰城跡で台形石器・ナイフ形石器が出土している。また、細石刃核・細石刃が瀧之段遺跡・才野ヶ原遺跡から出土している。細石刃核・細石刃は市ノ原遺跡でも出土している。

縄文時代では、草創期の石鏃41点が出土して一躍注目された瀧之段遺跡や、草創期の丸ノミ形石斧が採集された小原遺跡が知られている。そのほか、縄文時代後期の標識土器を出土した市来貝塚（川上貝塚）が知られている。市来貝塚は1920年に発見され、山崎五十磨・寺師見國・河口貞徳等の調査をふまえ、1990・1992年には町教育委員会で重要遺跡確認を行い、石鋸・人骨・貝輪など貝製品・骨角器などが市来式・鐘崎式・指宿式土器や石器と共に大量に出土している。

平安時代では、「日置厨」の墨書土器が出土した安茶ヶ原遺跡があり、鎌倉時代には市来院が置かれていた。

無形民俗文化財では国指定の七夕踊りがあり、毎年8月7日に近い日曜日に開催され、多くの観客が参加し、マスコミ等も賑わしている。

第2表 周辺遺跡(1)

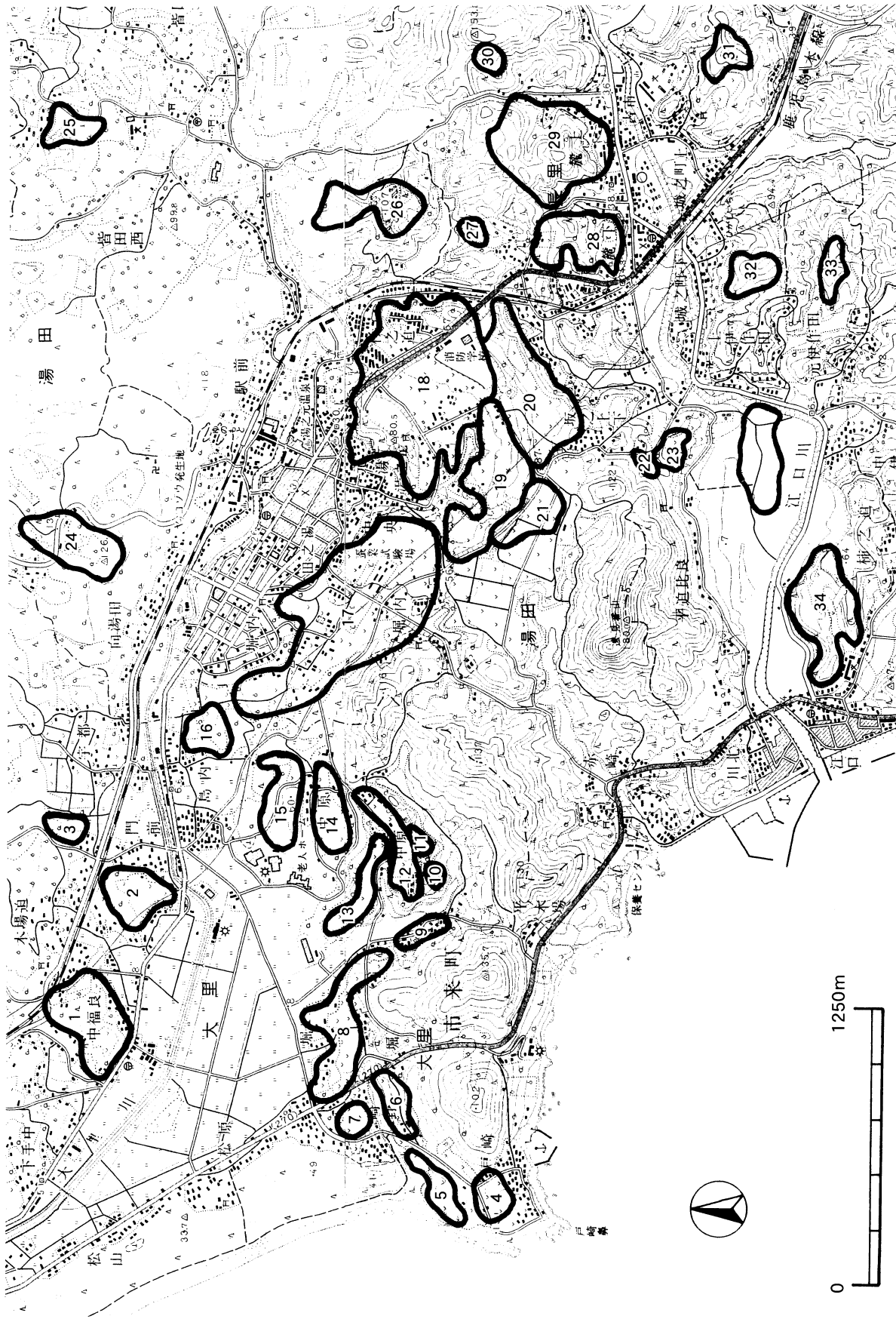
番号	遺跡名	遺番 跡号	地形	所在地	時代	遺構・遺物・備考	文献
1	上城詰城跡	28-3	台地	市来町大里上城詰城ほか	旧石器・縄文・ 弥生・中世	台形石器・縄文土器・白磁・青磁	⑥
2	鍋ヶ城跡	28-7	台地	市来町大里木場迫	縄文(草・早・ 晩)平安(9 C後半)中世 (12~16C)	白鳥平式・須恵器・白磁・青磁	⑦
3	本寺屋敷	28-51	段丘	市来町大里本寺屋敷	古墳・中世・ 近世	成川式土器・土師器・五輪塔	
4	戸崎原	28-46	段丘	市来町大里戸崎原ほか	旧石器・縄文・ 古墳・中世	細石刃核・土器・成川式土器・ 土師器・土錘	②
5	戸崎平	28-45	丘陵	市来町大里戸崎平ほか	中世	土師器・土錘	
6	深田前迫	28-44	丘陵	市来町大里深田前迫ほか	古墳 中・近世	成川式土器 土師器・陶器・磁器	
7	崎野堀	28-43	丘陵	市来町大里野崎堀ほか	弥生・古墳 中・近世	土器 土師器・白磁・染付・陶器	
8	田中堀	28-42	段丘	市来町大里田中堀ほか	縄文~近世	土器・土師器・陶器	
9	上平山	28-41	段丘	市来町大里上平山	弥生・古墳	土器	
10	下諏訪	28-11	台地	市来町大里中原	縄文	土器片・打製石斧	①
11	中諏訪	28-12	台地	市来町大里中原	古墳	土師器・須恵器	①
12	西ノ鼻	28-39	台地	市来町大里西ノ鼻ほか	古墳 中・近世	土器 土師器・陶器	
13	半崎堀	28-40	台地	市来町大里半崎堀	弥生~近世	土器・土師器・陶器	
14	東園	28-38	台地	市来町大里東園ほか	古墳 中・近世	土器 土師器・陶器	
15	妙見前	28-37	台地	市来町大里妙見前ほか	古墳 中・近世	土器 青磁・陶器	
16	上ノ原	28-13	台地	市来町大里島内	縄文・古墳・ 古代・中世	塞ノ神式・轟式・磨製石斧 竪穴住居跡・土師器・須恵器・ 青磁・滑石製石鍋	①
17	市ノ原	29-60	台地	市来町大里字上ノ原前~ 東市来町湯田上市ノ原ほ か	旧石器・縄文・ 弥生・古墳 古代~中世・ 近世	ナイフ形石器・台形石器・細石 刃核・集石・土器・石器 竪穴住居跡・埋壺・土坑・成川 式土器・焼土・溝・須恵器・街 道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉	本報告書
18	諏訪原	29-61	台地	東市来町湯田諏訪原ほか	古墳・中近世	土師器・陶器・染付	
19	森藪平	29-62	丘陵	東市来町長里森藪平ほか	弥生・古墳	弥生土器・土師器・須恵器	
20	浦田	29-63	台地	東市来町長里浦田ほか	古墳・中世	土師器	
21	今里	29-67	台地	東市来町伊作田今里ほか	旧石器・縄文・ 古墳・古代~ 近世	尖頭器・ナイフ形石器・細石刃 核・集石・前平式・深浦式・出 水式・石匙・成川式土器・土師器・ 須恵器・青磁・陶器	③

第3表 周辺遺跡(2)

番号	遺跡名	遺番 跡号	地形	所在地	時代	遺構・遺物・備考	文献
22	堂園平	29-90	丘陵	東市来町伊作田堂園平	旧石器 縄文・古代	礫群・ナイフ形石器・尖頭器・ 細石刃核・集石・吉田式・塞ノ 神式・轟式・黒川式・土坑・土 師器・須恵器	②
23	向椿城跡	29-17	台地	東市来町伊作田字上椿	旧石器・縄文 古墳・中世・ 近世	剥片尖頭器・ナイフ形石器・剥 片・隆帯文・石鏃・前平式・市 来式・竪穴住居跡・成川式空堀・ 曲輪・竪穴状遺構・炉跡・青磁	
24	市右衛門堀	29-59	丘陵	市来町湯田市右衛門堀ほ か	弥生・古墳 中世	土器・土師器・染付・磁器	②
25	勝橋	29-55	丘陵	市来町湯田勝橋	弥生・古墳	土器	②
26	古城跡	29-13	台地	東市来町長里字古城原	縄文(晩)・弥 生・古墳・南 北朝	土器 弥生土器・成川式土器・石塁	④
27	番屋城跡	29-10	丘陵	東市来町長里字番屋城	南北朝～室町	消滅	
28	平之城跡	29-11	台地	東市来町長里字平之城	南北朝～室町 ・近世	空堀・古墓塔 製鉄炉・炉壁・鉄滓・流動滓	④
29	鶴丸城跡	29-5	丘陵	東市来町長里鶴丸小学校 一帯	平安・南北朝 ～室町	空堀・土塁・礎石	④
30	得仏城跡	29-15	丘陵	東市来町長里字得仏城	中世		④
31	総陣之尾	29-14	台地	東市来町長里字陣之尾	中世		
32	犬ヶ原	29-65	丘陵	東市来町伊作田犬ヶ原	旧石器・縄文 古代～中世	細石刃核・細石刃・黒川式・石鏃・ 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・ 硫黄	⑤
33	金木山	29-66	丘陵	東市来町伊作田金木山	古墳・近世	土器・陶器	
34	伊作田城跡	29-12	台地	東市来町伊作田字浜之丸	中世(南北朝 ～室町)	伊崎田道材居城・帯曲輪・曲輪	④

引用文献

- ① 市来町『市来町郷土誌』1982
- ② 鹿児島県教育委員会『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(Ⅰ)』
(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』61) 1992
- ③ 鹿児島県立埋蔵文化財センター『今里遺跡』(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』33) 2002
- ④ 鹿児島県教育委員会『鹿児島県の中世城館跡』(『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』40) 1987
- ⑤ 鹿児島県立埋蔵文化財センター『犬ヶ原遺跡』(『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』50) 2003
- ⑥ 市来町教育委員会『上城詰城跡』(『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』7) 2000
- ⑦ 市来町教育委員会『鍋ヶ城跡』(『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』4) 1997



第3図 市ノ原遺跡及び周辺遺跡位置図

第4章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

平成8年10月1日から平成8年12月13日まで行なった市ノ原遺跡全体の確認調査を受けて、平成9年度には本調査を行なった。

市ノ原遺跡は、総延長が約3kmにも及ぶため、途中の谷および迫によって地点を5つに分けて、北側の本遺跡から、第1地点・第2地点・……として第5地点までを設定した。なお、字毎に遺跡名を付けなかったのは、市ノ原遺跡全体が市ノ原台地のほぼ全部の地域に及ぶため、個別の字名を付けることで、遺跡の全体的な性格などが不明確となり、ひいては遺跡の全体像がぼやけて市ノ原台地全体の時期的な使われ方の解明に支障を生ずる可能性があったためである。また、小字名毎に遺跡名を付けようにも、多くの数の字名があることから、遺跡の名称として混乱を招くと判断したためである。

グリッドは、STANo.9とSTANo.12を南北方向の基準線として設定し、調査範囲の南端を東西方向の基準線とした後、10m間隔で杭を打ってグリッドとした。

グリッドナンバーは、南北方向を南側から1・2・3・……として20までを付け、東西方向を東側からA・B・C・……としてLまでを付けて、G-5区のように呼称することとした。

調査は、確認調査によって遺構・遺物の残存状態が良いとの結果が得られていた南側の下段部分から開始した。そして、調査の進行を見極めた上で、北側の確認調査に入ることにした。

調査は南西部斜面の竹木を除去、焼却して通行用の道を確保した後、下段部の表土剥ぎと併行しながら5か所にトレンチを設定して掘り下げを行ない、調査を開始した。

表土剥ぎ取りが終了した段階で、先程のグリッドを設定して行き、本格的な調査に入って行った。場所にもよったが、当初はトレンチ調査ですぐにシラス層に達し、部分的に包含層の残存が良好でない箇所も見られた。

ただ、下段面部は、部分的に削平を受けてはいるものの、全体的に良好な状態で包含層と遺構の面が残存しており、掘立柱建物跡や柱穴、土坑、溝状遺構などの古代～中世にかけての遺構を始め、それより下面の縄文時代の集石なども検出された。また、南側斜面部およびそのすぐ下の部分からは古代と推定される土坑や近世の土壙墓なども、調査の後半には検出された。

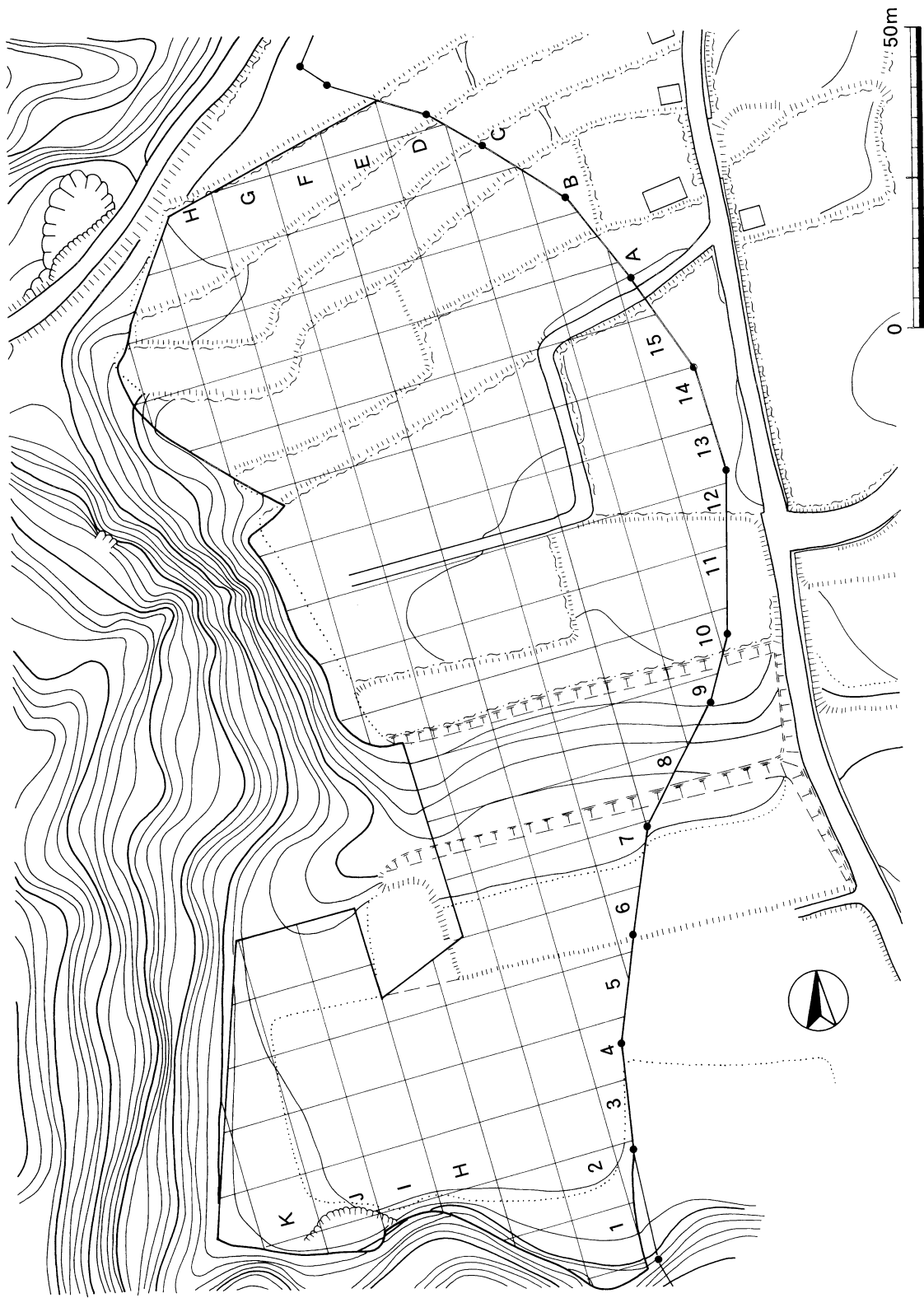
さらに、上段部からは弥生時代前期と考えられる埋壺が4基まとまって検出されたのを始め、縄文時代の集石も2基検出されるなど、上段部から南側は多くの成果が得られた地域と言えるであろう。

これに対して、上段の北側は、トレンチを設定して掘り下げを行ない、4本の近世以降と考えられる道跡を検出したため、拡張して表土剥ぎを行なって調査したが、すぐにシラス層となり、その他の遺構ばかりでなく、遺物包含層もまったく確認されなかった。

これらの調査が終了した段階で、さらに下の層の確認を行ない、縄文時代草創期およびそれ以前の旧石器時代の遺物・遺構の有無について詳細な調査を行なった結果、これらの時代のものは遺構・遺物共にまったく確認されなかったため、市ノ原遺跡第1地点の調査は完全に終了することとなった。



第4図 市ノ原遺跡第1地点調査範囲図



第5図 市ノ原遺跡第1地点グリッド図

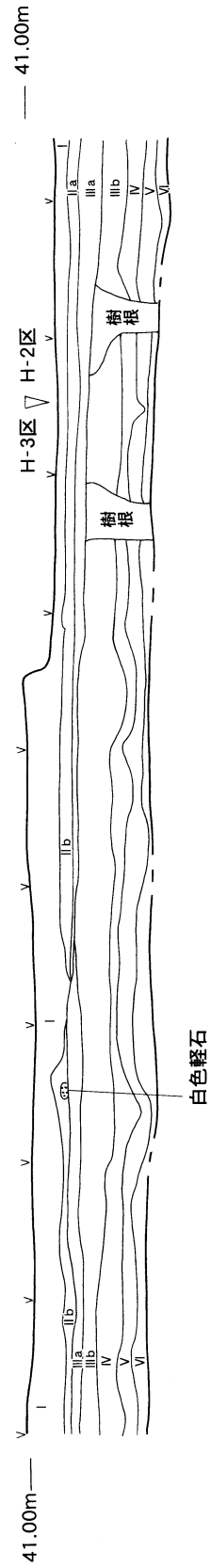
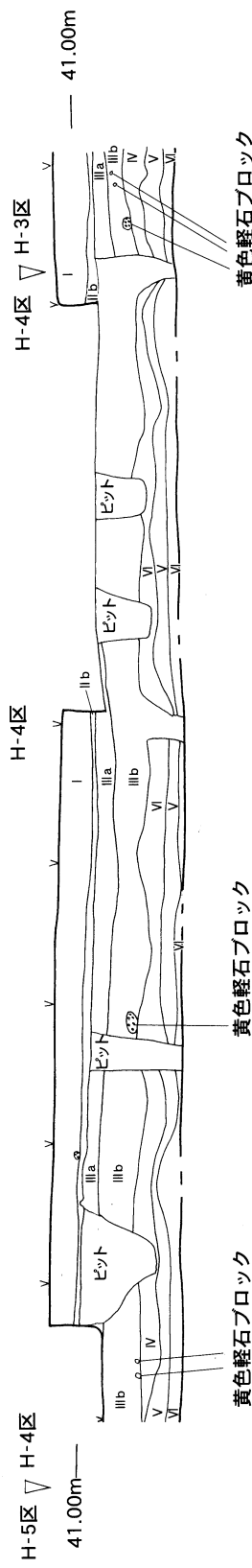
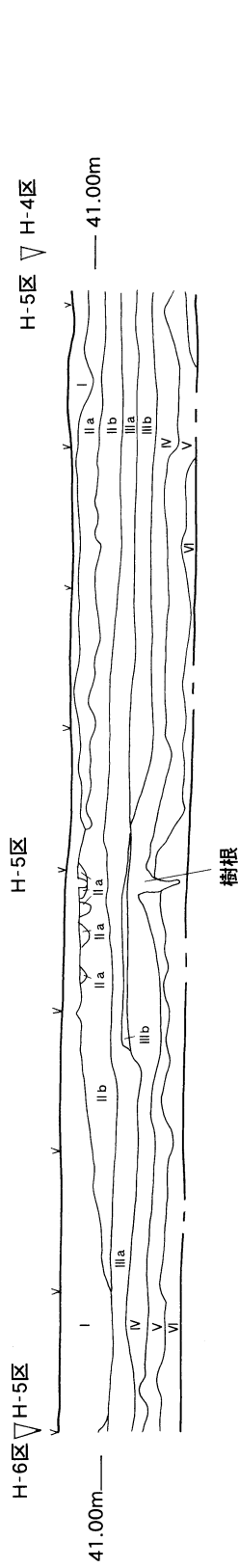
第2節 層位

市ノ原遺跡第1地点は、発掘対象地域が約12,000㎡にもおよぶため、場所によっては層序に若干の相違はあるものの、基本的にはI層の表土・耕作土からIX層のシラス層まで9層に区分できる。

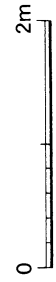
本遺跡の地形は、調査対象地のほぼ中央部が高く、それより北及び南にかけては割合に急傾斜で下っている。後世、畑や果樹園として開墾した際に局所的に削平を受けたため、層の欠失した箇所も見られる。平成8年度の確認調査によって、中央部の北側、15区より北側はすぐにシラス層となり、包含層は完全に削平を受けていた。また、中央部付近も、A～C-8～15区近くでは表土下はほぼシラス層となった。中央部の南側は、8～11区の北半にかけて削平を受け、シラスとなる。したがって、II層以下の遺物包含層として調査可能な地域は、8区南半より南側で地形的に急傾斜となる直前の平地と、中央部のD～H-11～14区ということになった。

I 層	表土。耕作土。黒褐色土。色調により2～3層に区分できるが、直接遺構等とは無関係なため分層は行なわなかった。近・現代の遺物を含む。	I 層
II 層	黒色腐植土でやや粘質を帯びる。多くは削平されているが、部分的には厚く残る。色調によりa・bの2層に区分できる。	II a
II a	淡黒色腐植土。やや粘質。中世の遺物包含層。	II b
II b	黒色腐植土。粘質。古代・中世の遺物包含層。	III a
III 層	明茶褐色シルト質土。約6,300年前の鬼界カルデラ噴出起源のアカホヤ(幸屋火砕流)。土質によりa・b・cの3層に区分できる。	III b
III a	黄橙色火山灰の腐植土。縄文時代前期～古墳時代の遺物包含層。	III c
III b	黄橙色火山灰土。一部、灰色を呈する。	IV
III c	黄橙色軽石。	V a
IV 層	暗茶褐色火山灰土。やや灰色を帯びた有機質の火山灰で、比較的細粒。縄文時代早期の遺物包含層。	V b
V 層	黒褐色火山灰土。	VI
V a	黒褐色火山灰土。濃い黒色で粘質が強く、直径5mm前後の軽石を含む。	VII a
V b	黄色火山灰土・軽石。約11,500年前の桜島噴出起源の薩摩火山灰(P14)。部分的にしか見られない。	VII b
VI 層	暗茶褐色粘質火山灰土。極めて微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達。	VII c
VII 層	茶褐色粘質火山灰土。微粒で粘質が強く、乾くとクラックが発達。色調によりa・b・cの3層に区分される。	VIII a
VII a	茶褐色粘質火山灰土。	VIII b
VII b	暗褐色粘質火山灰土。	IX
VII c	茶褐色粘質火山灰土。	
VIII 層	淡褐色シルト質土。入戸火砕流起源の二次シラス。色調によりa・bの2層に区分。	
VIII a	黄色シルト質土。やや腐植化している。	
VIII b	淡黄色シルト質土。やや腐植化。	
IX 層	淡白色シルト質土。入戸火砕流起源の一次シラス。	

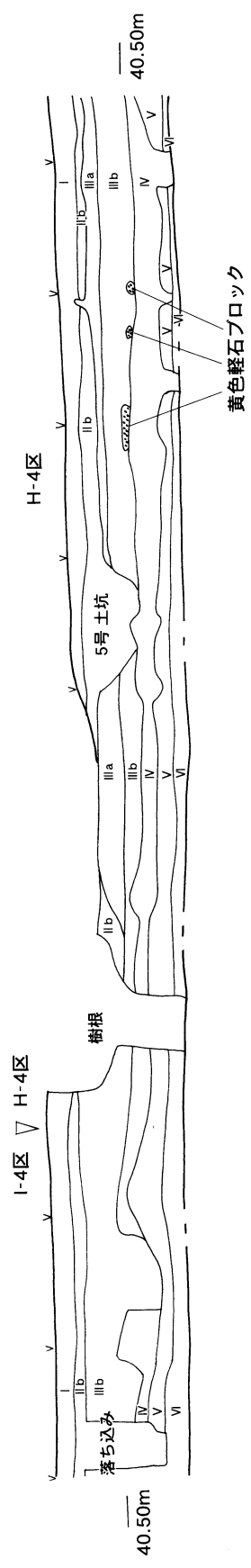
第6図 基本土層柱状図



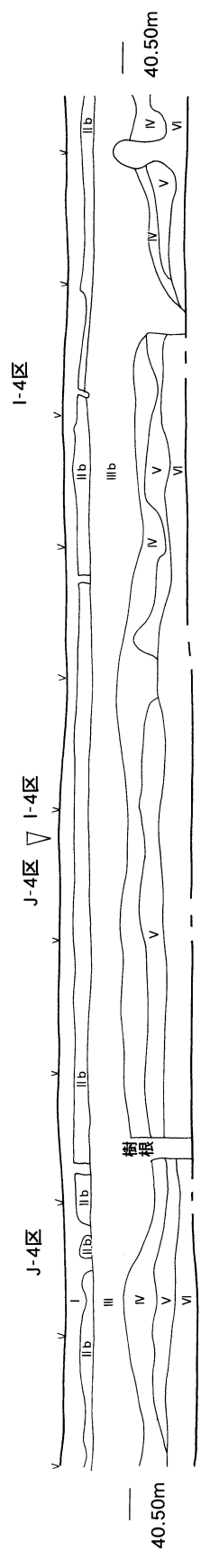
H-2~4区 東側土層断面図 ③



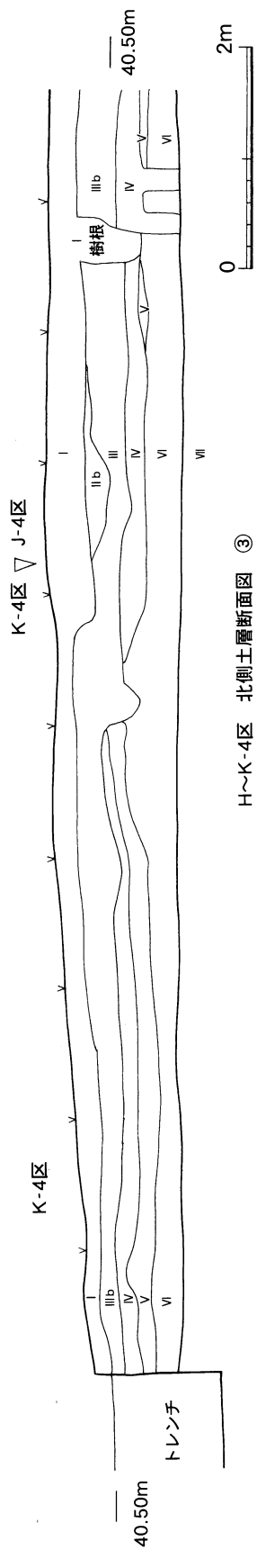
第7図 土層断面図(1)



H~K-4区 北側土層断面図 ①

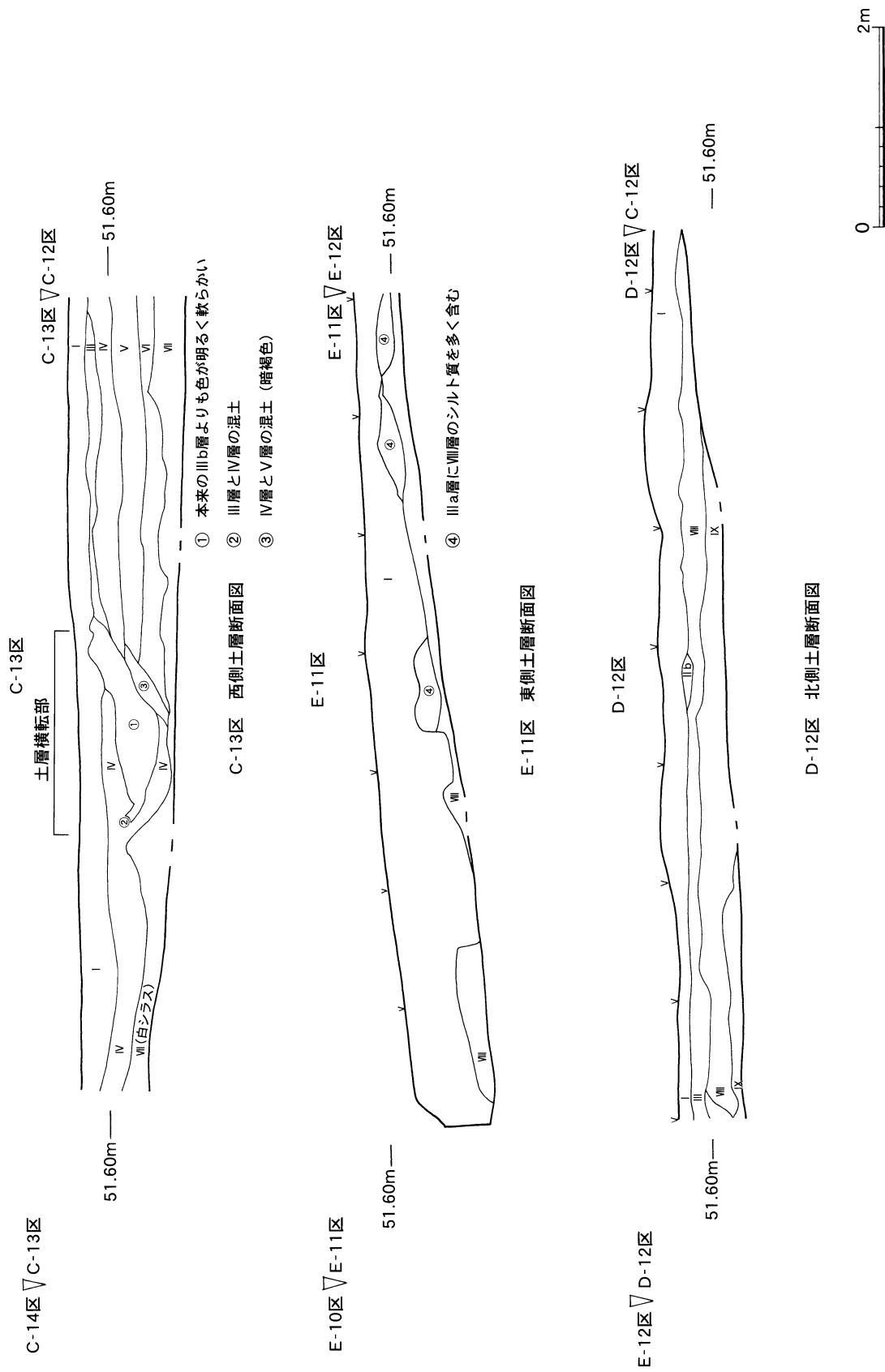


H~K-4区 北側土層断面図 ②

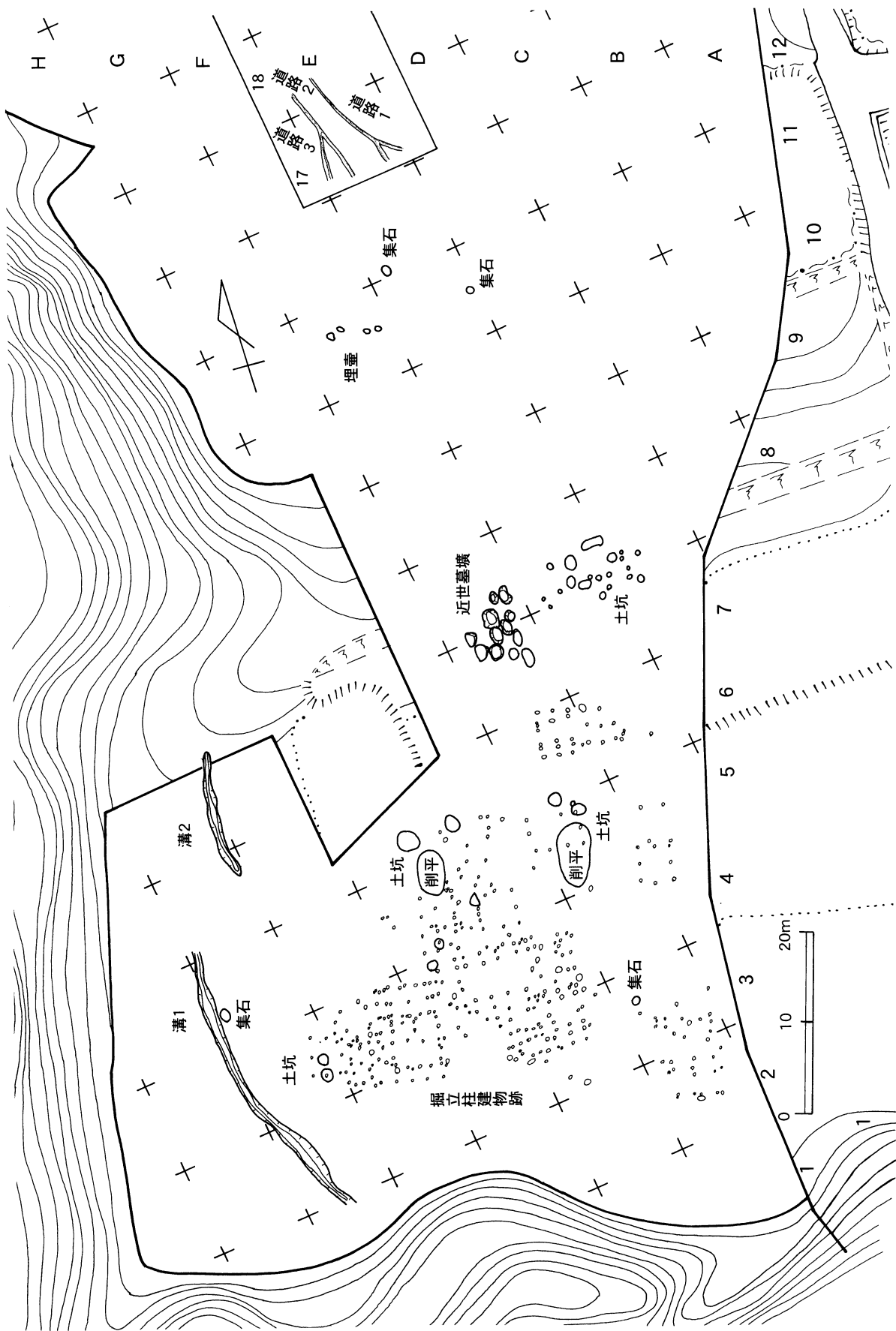


H~K-4区 北側土層断面図 ③

第8図 土層断面図(2)



第9図 土層断面図(3)



第10図 遺構概略位置図

第3節 IV層の調査

主に調査区西側のIV層から縄文時代早期の遺構・遺物が出土した。遺構は集石が3基検出された。遺物は貝殻条痕文系円筒土器が多く出土したが、そのうちの144点を図化した。

1. 遺構

集石（第11図）

集石はIV層で3基検出された。安山岩礫を多く用いており石器は含まれていなかった。ほとんどが熱を受けた跡を顕著に残す。

1号集石はF-3区から検出された。安山岩を主体としたこぶし大の礫140個で構成されている。礫は熱を受けており、1個あたりの重量は平均217g、最大は750gだが500gを越えるものは4個だった。礫の集中部分の東側に約30個の礫が散在している。長径約256cm、短径約148cmの掘り込みがみられる。

4号集石はJ-5区で検出された。明褐色の目の細かい同一種類の安山岩を中心に構成されている。最終的に残された石は79個だが接合したところ、52個の石が使用途中に破碎した結果であることがわかった。餅形の扁平礫か、角礫が主に使用されている。一個体分の重量は平均約1,424g、最大の礫は約6,260gと極めて大きな礫を使用している。円礫は3点出土したが、明確な研磨・敲打の痕跡は観察できなかった。礫の集中部は隙間なく敷き詰められたような形状を呈する。

5号集石はH-5区のIV層から検出された。安山岩を主体としたこぶし大の礫28個で構成されており散在している。1個あたりの礫の重量は平均約220gで最大は1,090gである。掘り込みはみられなかったが北側に礫が集中している。

2. 土器

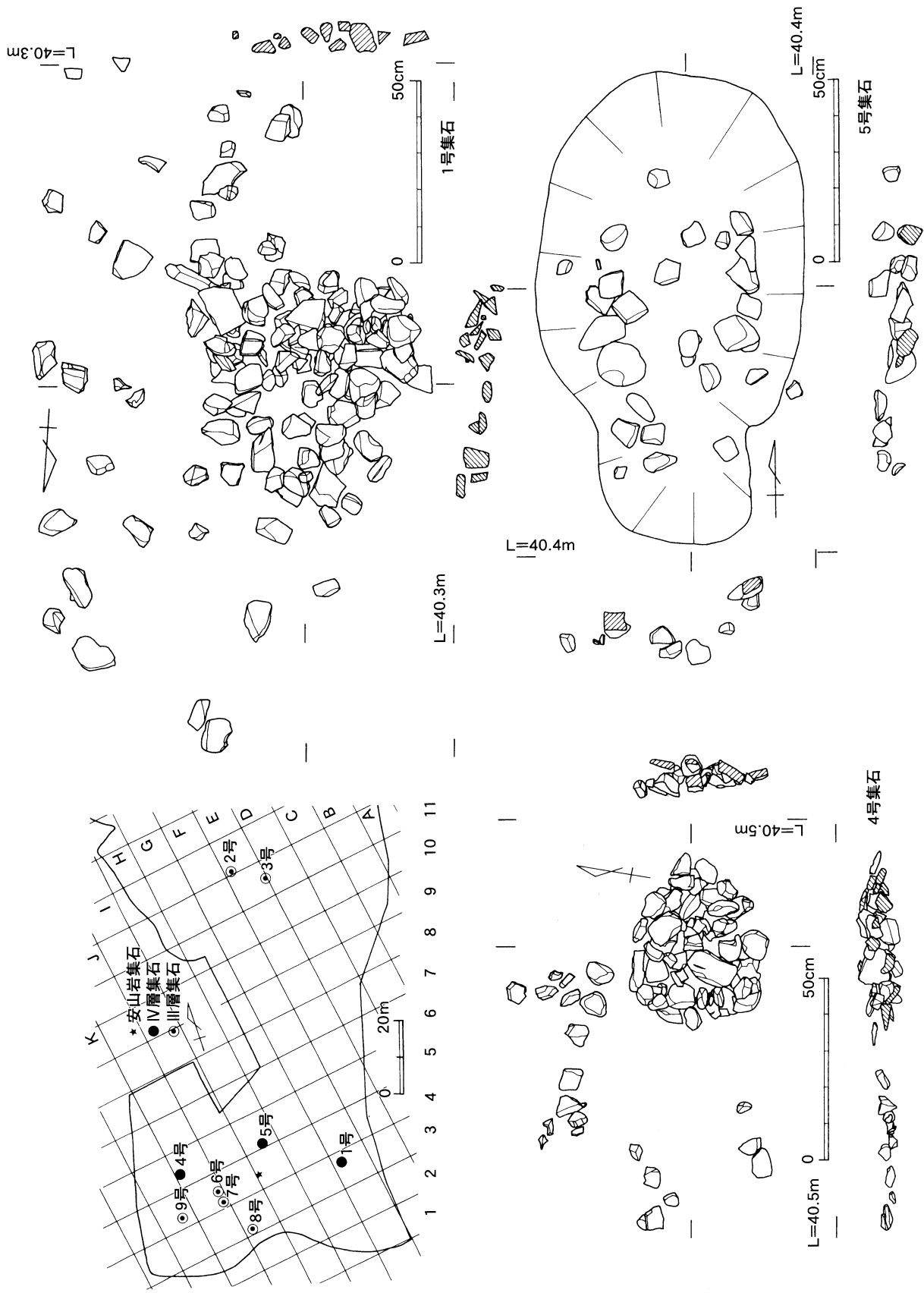
土器は貝殻条痕文系円筒土器を中心に144点を図化した。形状からI類からⅧ類に分類した。I類からX類は縄文時代早期前葉の貝殻条痕文系円筒土器である。Ⅺ類は押型文土器、Ⅻ・Ⅼ類は縄文時代早期後葉の土器である。

I類土器（第13図 1・2）

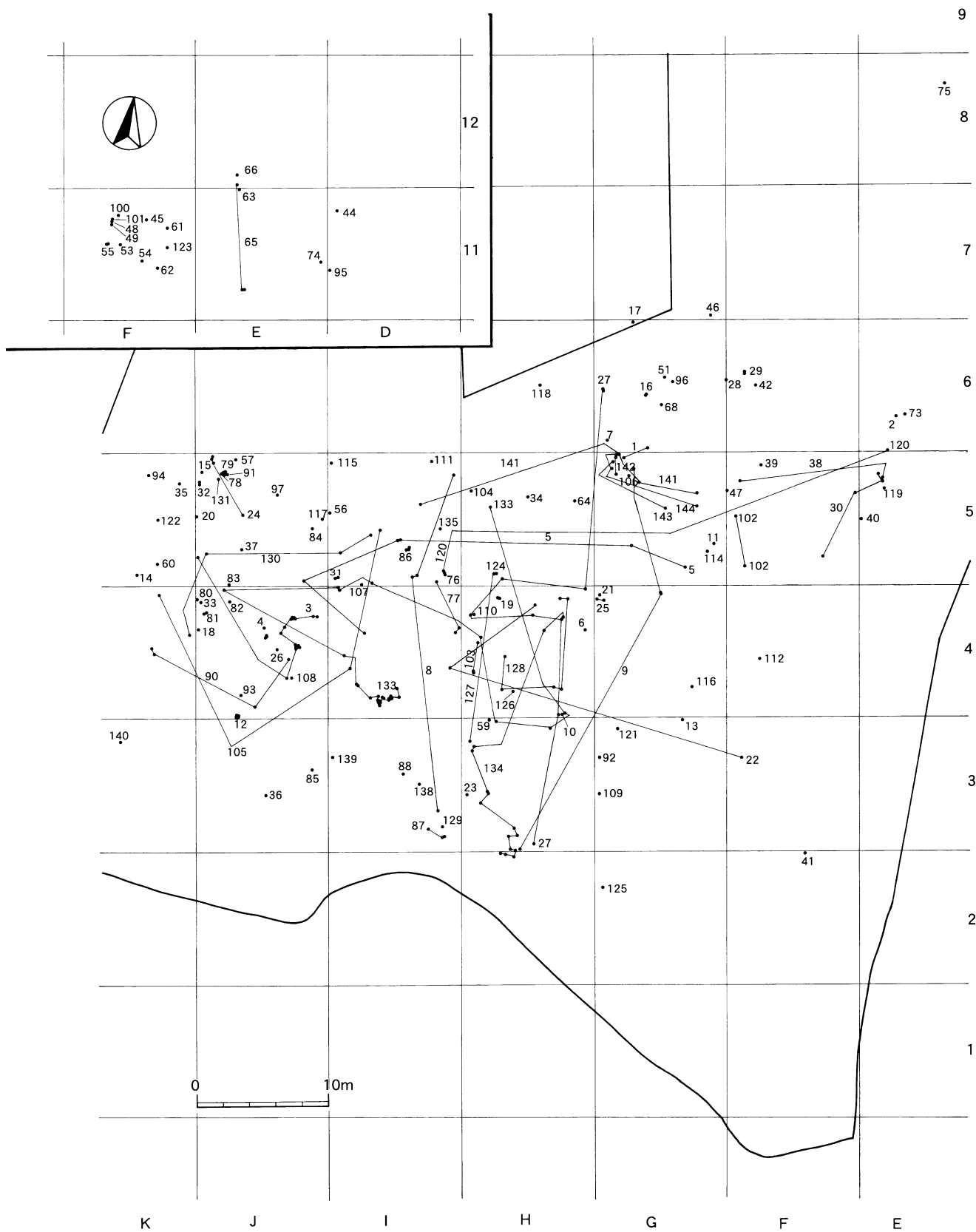
1と2はI類土器である。口縁部は先細り、口唇部外縁にアナガラ属と思われる貝殻の肋3条による連続刺突文がみられる。胴部外面は口唇部と同一と思われる施文具で横位または斜位に条痕が施されている。内面はナデ調整が施されている。1は胎土中に長石を多量に含む。2は口唇部の刺突が押引状になっている。また、胎土に直径2～3mmの白色粒を多く含む。

Ⅱ類土器（第13～15図 3～37）

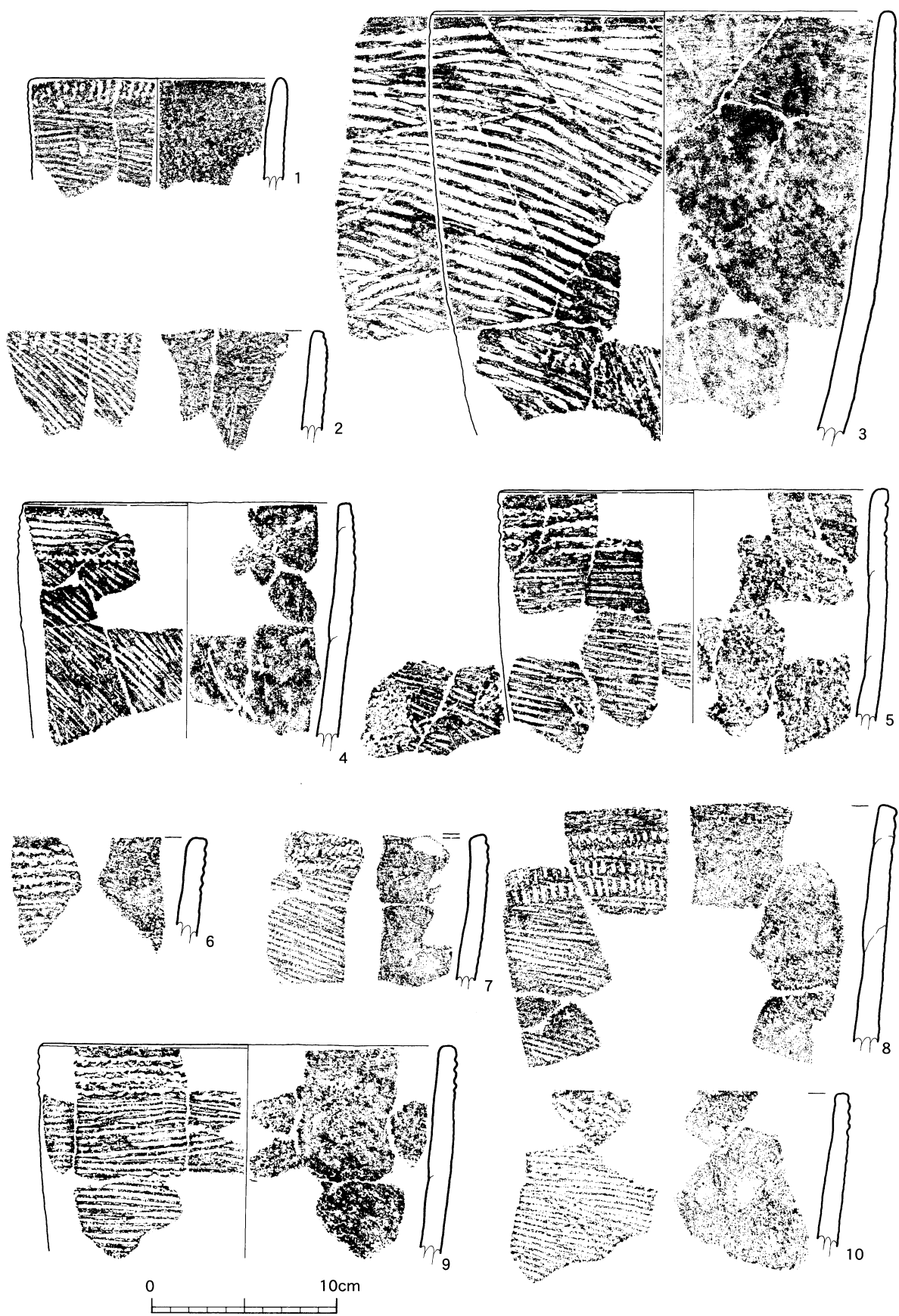
3から37はⅡ類土器である。縄文時代早期土器ではⅡ類が最も多く出土している。器形は円筒形で器厚が1～2cmと分厚い。口唇部は内面にかけて丁寧に磨かれ、平坦に調整されている。口唇部外縁は貝殻による横位または斜位の連続刺突文が巡るものと条痕文のものがみられる。胴部外面は貝殻条痕が横位または斜位に明瞭に施されている。底部は両面ともミガキ状のナデがかけられ、内面は胴部と底部の境界に分厚く粘土が盛られ、断面は曲線を呈している。胴部と底部は底部周縁に胴部下端を巡らせた形で接着している。3は口唇部外縁の刺突文がみられない。8の口唇部外縁は



第11図 III層とIV層の集石配置及びIV層集石の実測図



第12図 IV層土器出土状況



第13図 IV層出土土器：I・II類(1)

連点文が4条巡っている。

10は口唇部外縁に貝殻腹縁による押引文がみられる。11は口唇部外面直下に貝殻の肋3条による斜位の貝殻押引文を巡らせ、その下に刺突文を施している。胴部は貝殻条痕が明瞭に残る。12は口唇部外面直下に肋5条による斜位の貝殻刺突文を巡らせ、その下に貝殻条痕が施されている。内面及び口唇部は約5mmほどの幅の道具でミガキ状のナデが全体にかけられている。13は口縁部外面直下に横位の貝殻刺突文を巡らせ、その下に斜位の連続貝殻刺突文が施されている。14は口唇部外面直下に貝殻の肋3条による斜位の貝殻押引文が2条巡っている。15は胴部にある貝殻条痕の上から斜位に1条の貝殻刺突文が観察される。16から26は円筒形土器の胴部で外面に斜位または横位の貝殻条痕文が施される。27・28は胴部から底部にかけて残存している。胴部に斜位の貝殻腹縁7条の貝殻条痕がみられるが、胴部の接地部分は同じ施文具と思われる貝殻条痕が外面を一周している。29は胎土に直径2mmほどの白色石粒を含む。胴部の接地部分に斜位の貝殻刺突文が巡る。30は底部の外縁に厚さ約2cmの粘土を巻いて、胴部の立ち上りとした様子がうかがえる。胴部は接地部分まで貝殻条痕が施される。32から36は底部である。貝殻の肋4条から7条を施文具として使用した貝殻条痕が施されている。底部内面から胴部にかけて、粘土を肥厚させ、胴部立ち上がりの断面を曲線に仕上げている。37は胴部の接地部分がナデで調整されている。

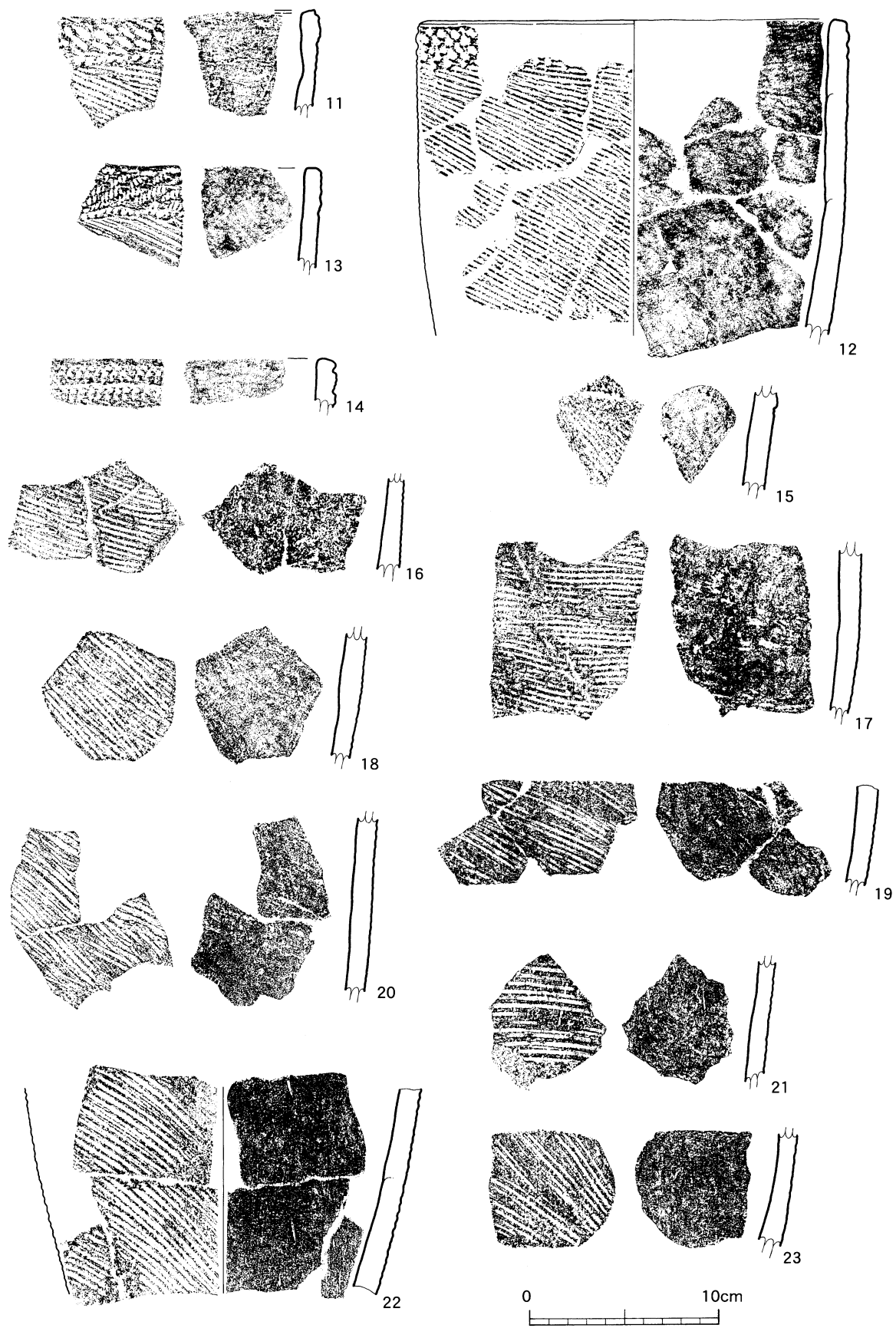
Ⅲ類土器（第16図 38～51）

38から51はⅢ類土器である。38は口縁部であるが、口唇部は先細る。口縁部外面に棒状の施文具による連続刺突文が巡っているが、一部は胴部にまで刺突文が施されている。胴部は貝殻腹縁による浅い条痕がみられる。胎土に多量の長石を含む。39の内面は斜位のケズリが見られる。40は口縁部外面に2列の連続押引文が巡る。41は横位の明瞭な貝殻条痕の上から縦位に連点文が2条施されている。内面は斜位にケズリが入る。42から51は角筒土器である。口縁部は波状で、口唇部はわずかながら内傾する。42の口唇部は平坦面に貝殻腹縁による条痕状の刻目が入る。口縁部は肋4条で貝殻押引文が施され、その下に横位の貝殻刺突文が1条巡る。胴部は貝殻条痕文が明瞭に施文され、肋3条を上から下に向かって押し引いた貝殻押引文が縦に1条施文されている。43は波状口縁をもち、その肋3条の貝殻押引文の直下に横位の貝殻刺突文2条が巡る。角の部分に貝殻押引文が1条縦にはいり、それから角の両側に向かって条痕文が2条ずつ斜め下方向に施文されている。44は口縁部に肋4条の緻密な貝殻押引文が巡り、その直下から横位に貝殻条痕文が施される。45の口縁部は貝殻押引文の直下に同じ施文具と思われる横位の貝殻押引文が1条巡る。46は胴部である。横位の貝殻条痕文に肋2条の連点文が縦に1条施されている。内面は上方にむけてのケズリが見られる。47は角筒の角の部分である。角の部分に貝殻の肋2条による連点文が縦に1条施されている。48は角の部分が屈曲せず、湾曲している。また、貝殻条痕文の上から波状文が1条縦に施されている。49は浅い貝殻条痕文の上から貝殻の肋2条の条痕がみられる。50も貝殻条痕文が浅く明瞭ではない。角の部分に貝殻の肋2条による連点文が縦に1条施されている。

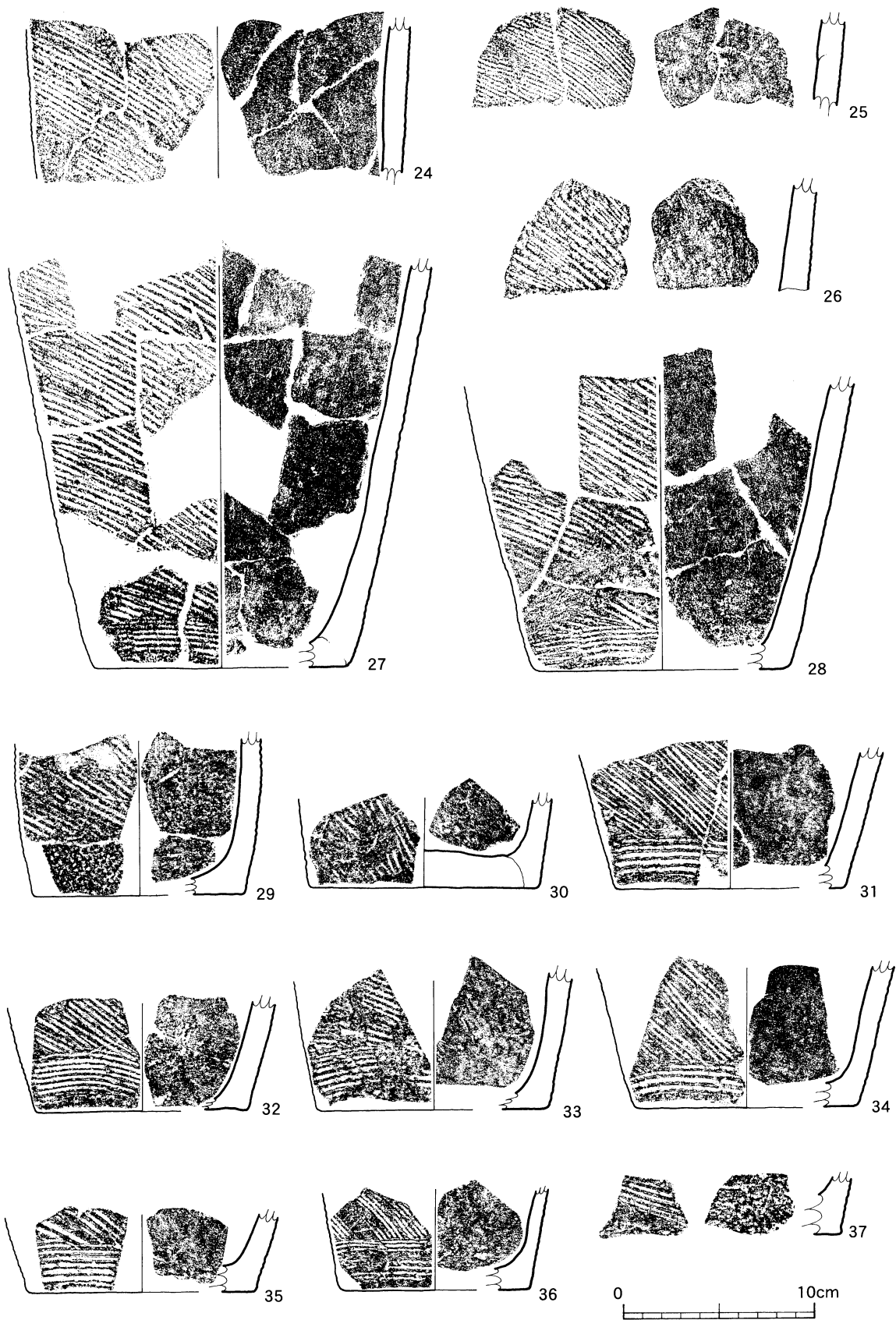
Ⅳ類土器（第17図 52～75）

52から75はⅣ類土器である。Ⅳ類は52～54のⅣa類と55から75のⅣb類にわかれる。

52から54の器形は円筒形で、貝殻腹縁による条痕が顕著にみられる。条痕の上から貝殻刺突文が斜位に施されている。



第14図 IV層出土土器：Ⅱ類(2)



第15圖 IV層出土土器：Ⅱ類(3)

55から75はIVb類である。そのうち55から67の器形は円筒形、もしくは底部形状がレモン形と思われる。口唇部は平坦でアナダラ属と思われる貝殻腹縁による刺突文がみられる。口縁部外面は1～3列の貝殻刺突文が巡る。胴部は貝殻復縁による条痕文が施され、その上から貝殻腹縁による刺突がなされる二重施文である。内面は縦位か横位の丁寧なナデ調整が施される。底部端部から上部に向かって浅い短沈線が巡る。底部外面は丁寧なナデ調整である。55から58は口縁部である。55の器形はほぼ円筒形で外面の貝殻条痕が縦位に施されている。その上から口唇部外縁に貝殻腹縁の肋7条を横位に使用した貝殻刺突文が4列巡る。その下に同じ施文具を使用した縦位と斜位の組み合わせによる菱形文様が施されている。口唇部は平坦で極浅く刻目文がみられる。胎土は粒子が細かく強固で、焼成は非常に良い。56の器面内部は篋状施文具で横位のナデ調整がみられる。口唇部は平坦で浅い刻目が施される。外面は斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文が連続して施される。胎土は粒子が非常に細かく目視では観察できない。焼成は非常に良い。57は貝殻腹縁の肋6条を施文具として、縦位に施文した様子がかがえる。58は両面とも暗赤褐色で内面のナデはミガキに近い。外面は口唇部に3列の貝殻刺突文、胴部に同一施文具による縦位・斜位の刺突文が施されている。横位の刺突文に対して縦位の刺突文は幾分押引気味である。59は貝殻条痕文と内面のナデが粗く、胎土に石英を多量に含む。60は胴部である。内面に縦位のナデ調整が施され、外面に縦位・斜位の押引文に近い刺突文による菱形文様の間にクサビ形貼付文がみられる。61は胎土に白色粒を含む。62は一部に煤を残す。方形状の刺突文を縦位に施す。63は押引文に近い貝殻刺突文が垂直方向に連続して施されている。64は貝殻条痕文が縦位に施されている。65は胴部から底部が残存している。押引文に近い貝殻刺突文が縦位に2本ずつ連続で施されている。

68から75は角筒土器である。68は口縁部である。波状口縁で口唇部の器厚は2.5mmと非常に薄い。細長いクサビ形貼付文が縦位に2列施されているのがみられる。角部にも同様の施文がなされている。71はクサビ形貼付文の間に貝殻刺突文による菱形文が施されている。74・75は底部である。外面は丁寧にナデられ、底部端部から上部にむかって短沈線が密に施文されている。

V類土器 (第18図 76～79)

76から79はV類土器である。器形は円筒形で口縁部はわずかに外傾している。口唇部は平坦でアナダラ属と思われる貝殻腹縁による刺突がみられる。口縁部外面は1・2列の貝殻刺突が巡り、その直下にクサビ形貼付文が2列に巡る。胴部は貝殻腹縁による押引文が巡る。内面は丁寧なナデ調整が施され、口縁部付近は横位に、胴部は斜位に調整されている。76・77は同一個体の可能性もある。クサビ形貼付文は上部が施文具により平坦に調整され、クサビの稜は幾分丸みを帯びている。クサビの左側縁は施文具による条痕が1条みられ、右側縁は貝殻腹縁による押引が1条みられる。78・79も同一個体の可能性がある。76に比べクサビは小さく、わずかに左に傾斜している。

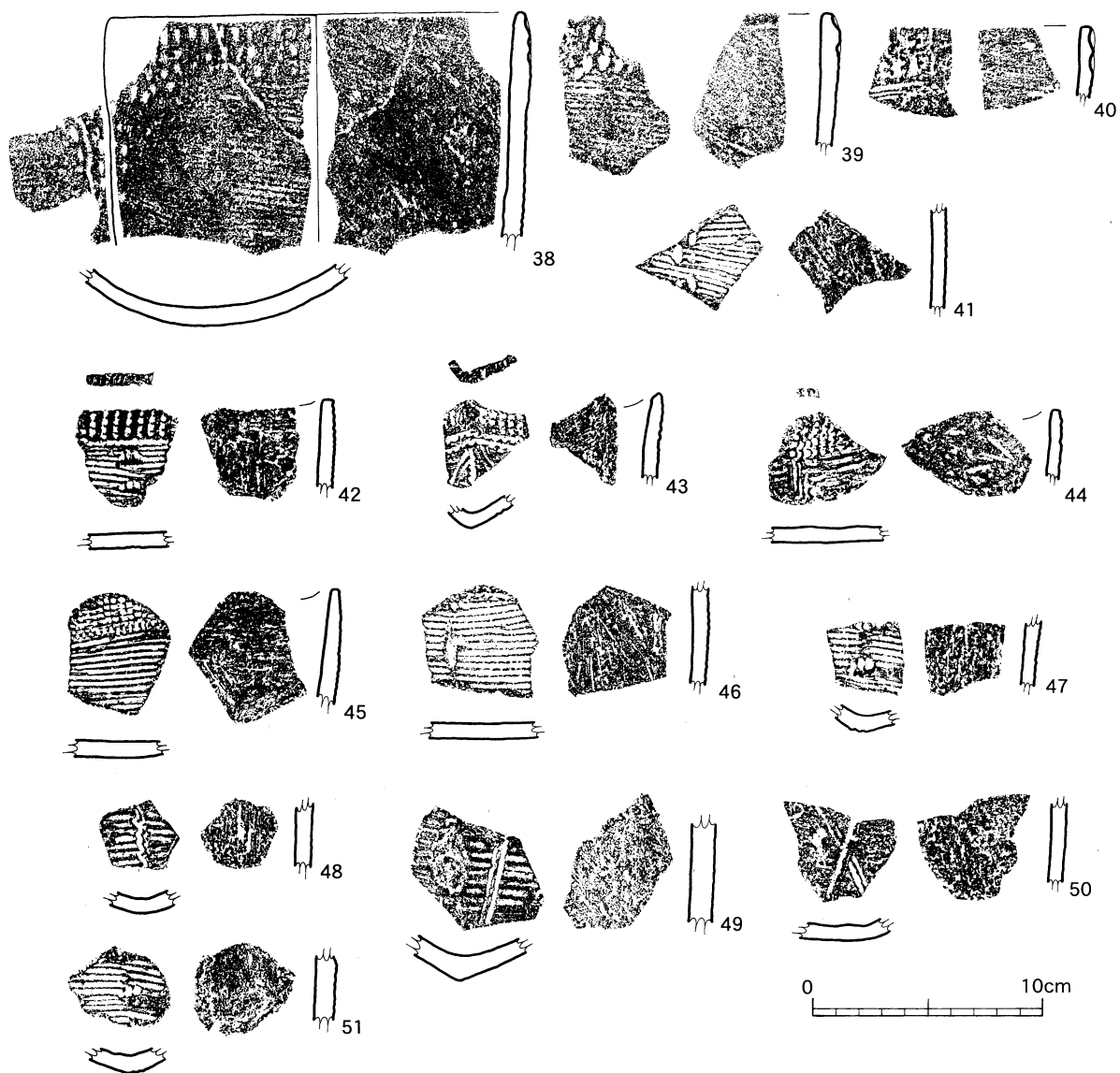
VI類土器 (第18図 80～91)

80から91はVI類土器である。器形は円筒形で口縁部はわずかに外傾している。口唇部は平坦でアナダラ属と思われる貝殻腹縁による刺突がみられる。口縁部外面は2・3列の貝殻刺突文が巡り、その直下から胴部にかけて貝殻復縁による押引文が巡る。内面は丁寧なナデ調整が施され、口縁部付近は横位に、胴部は斜位に調整されている。80は擦切による補修孔が見られる。補修孔は外面のみから穿たれ、擦切の範囲は外面で縦1.8cm、横0.4cm、内面で縦0.46cm、横0.2cmである。82・84

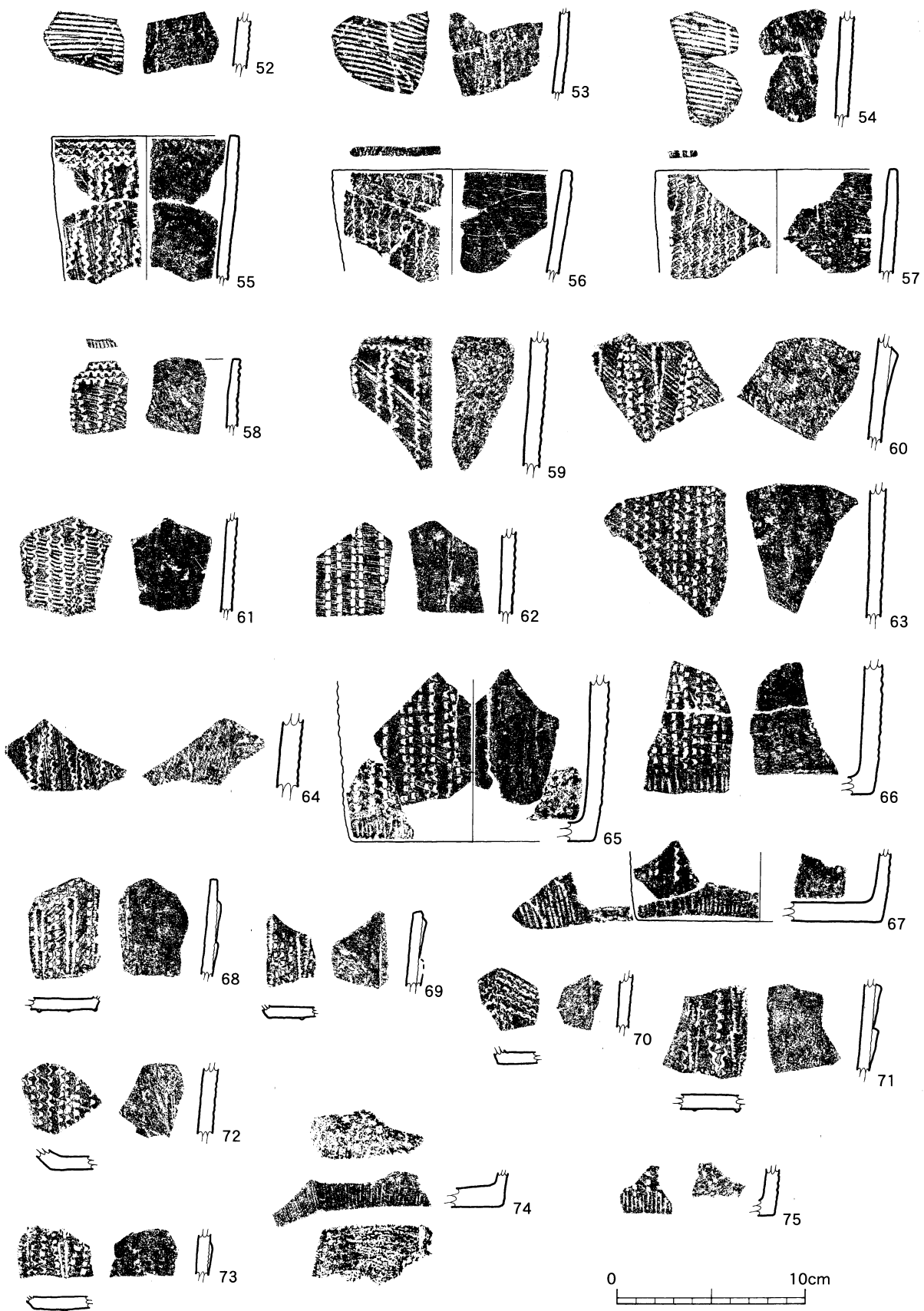
は口縁部の押引文が斜位に施されている。86は口縁部の押引文が斜位に施されている。使用された貝殻復縁の幅が大きく、より大きな貝が使用されている。87は胴部だが接合面で破碎している。接合面はほとんど平坦である。施文具は2.7cm幅の貝殻復縁である。89・90は押引文が粗く、上部の施文帯と下部の施文帯の間に5mm程度の間隔があいている。91は底部である。底部外面は丁寧なナデ調整が施され、底部端部から縦位に浅い短沈線が巡る。

IV～VI類土器底部（第19図 92～97）

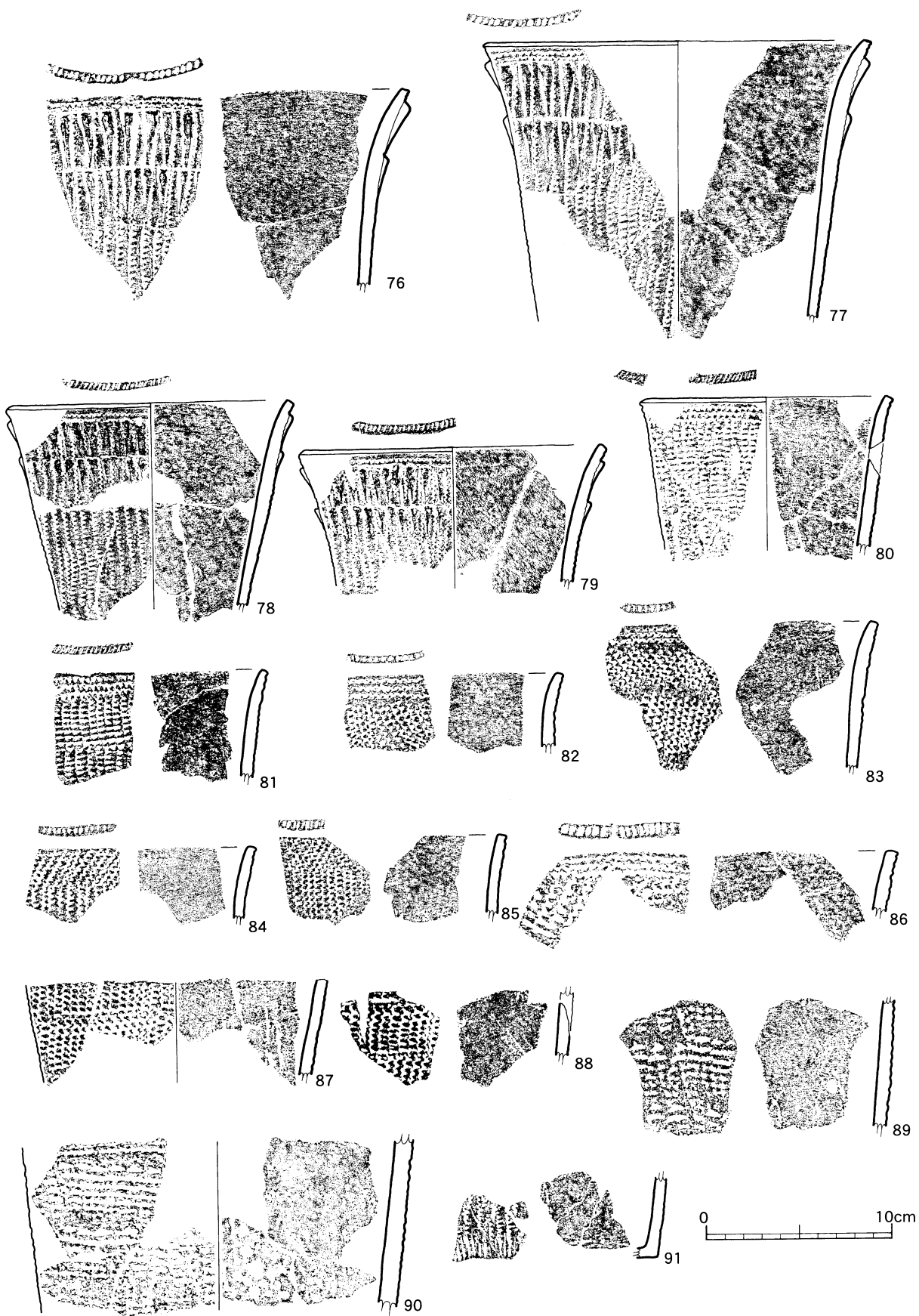
92から97はIV～VI類土器の底部である。円筒と角筒がみられる。95を除き両面とも丁寧なナデ調整が施され、胴部端部から上部に向かって短沈線が巡る。また底部から胴部への立ち上がりはほぼ直角である。95は内面に貝殻条痕による調整がみられ、底部から胴部への立ち上がりが幾分緩やかである。



第16図 IV層出土土器：Ⅲ類



第17圖 IV層出土土器：IV類



第18圖 IV層出土土器：V・VI類

Ⅶ類土器 (第20図 98~101)

98から101はⅦ類土器である。98は口縁部で口唇部は外に開く。口縁部外面に貝殻刺突文が4列巡る。口唇部に貝殻刺突文が刻まれる。99から101は胴部で外面に綾杉状の貝殻条痕文が施される。

Ⅷ類土器 (第20図 102)

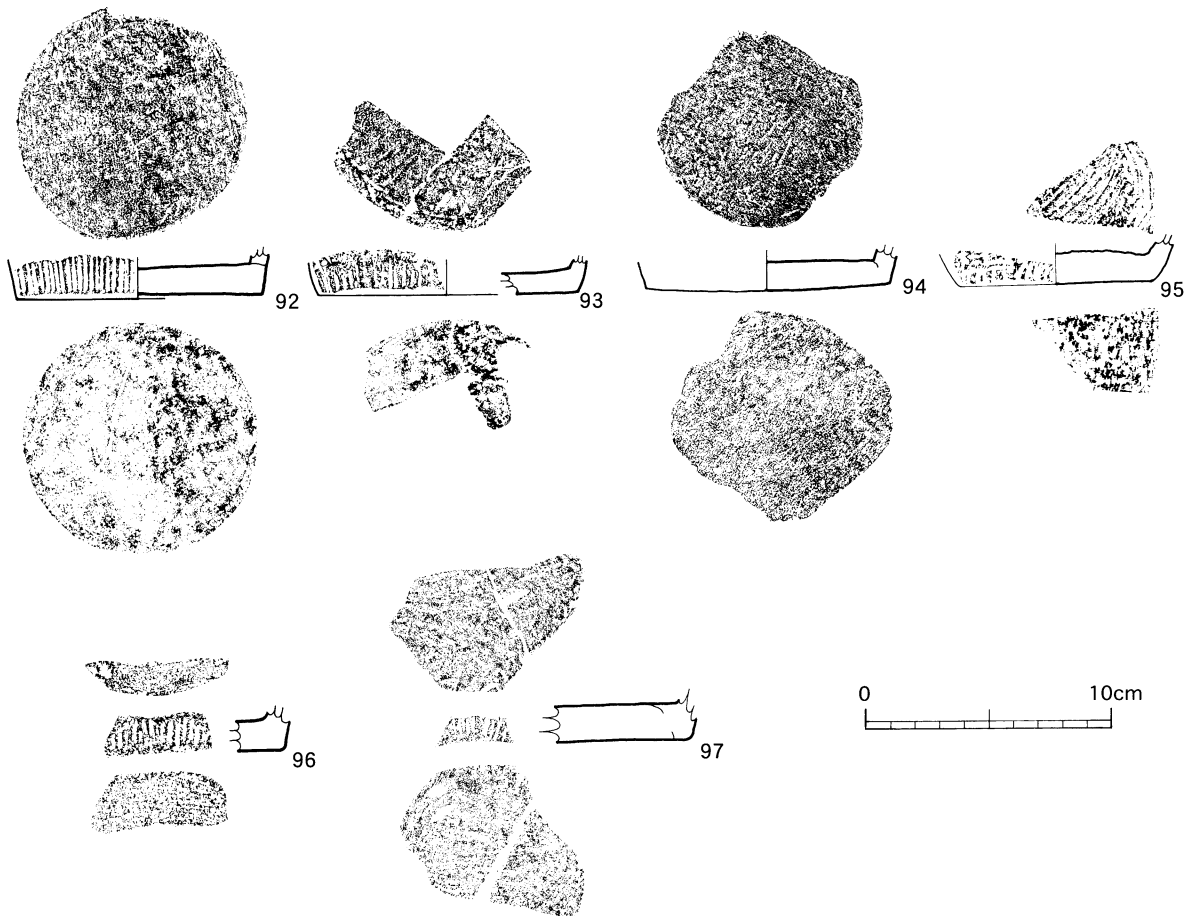
102はⅧ類土器で、小さめの貝殻復縁を用いた貝殻刺突文を胴部の上部から下部にかけて縦位・斜位・縦位と繰り返す文様パターンがみられる。口唇部は平坦にナデられている。

Ⅸ類土器 (第20図 103)

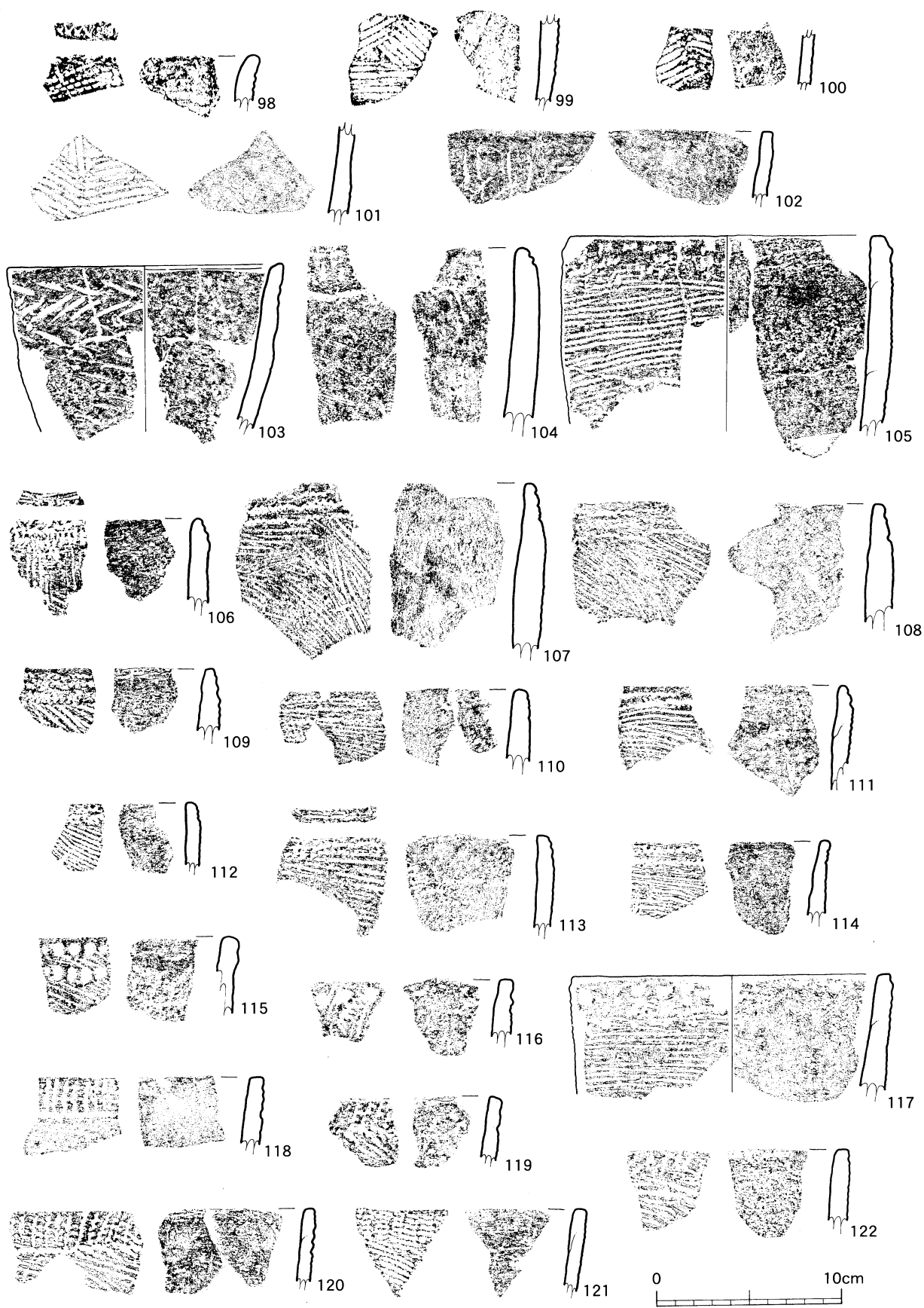
103はⅨ類土器である。103は横位に羽状沈線が口縁部を巡る。胴部は斜位の沈線が粗略に施される。

X類土器 (第20・21図 104~131)

104~131は縄文時代早期と思われるが型式不明の土器を列記した。そのうちの104から122は円筒土器の口縁部である。口唇部が先細り、胴部に貝殻条痕文が施される。わずかに内傾する。104と105は口縁部外面に連続刺突文を巡らせる。106は胴部に縦位の貝殻条痕がみられる。107・108は口縁部外面に横位の貝殻沈線文を3列巡らせる。109は口縁部の刺突文が密である。112は口縁部外面に貝殻復縁の肋らしい刺突文がみられるが、施文具は不明である。114から122は口唇部がわずかに外傾する。115は貝殻の頭頂部分による連続押圧文が口縁部外面を2列に巡る。118から123は器厚



第19図 IV層出土土器：Ⅳ～Ⅵ類底部

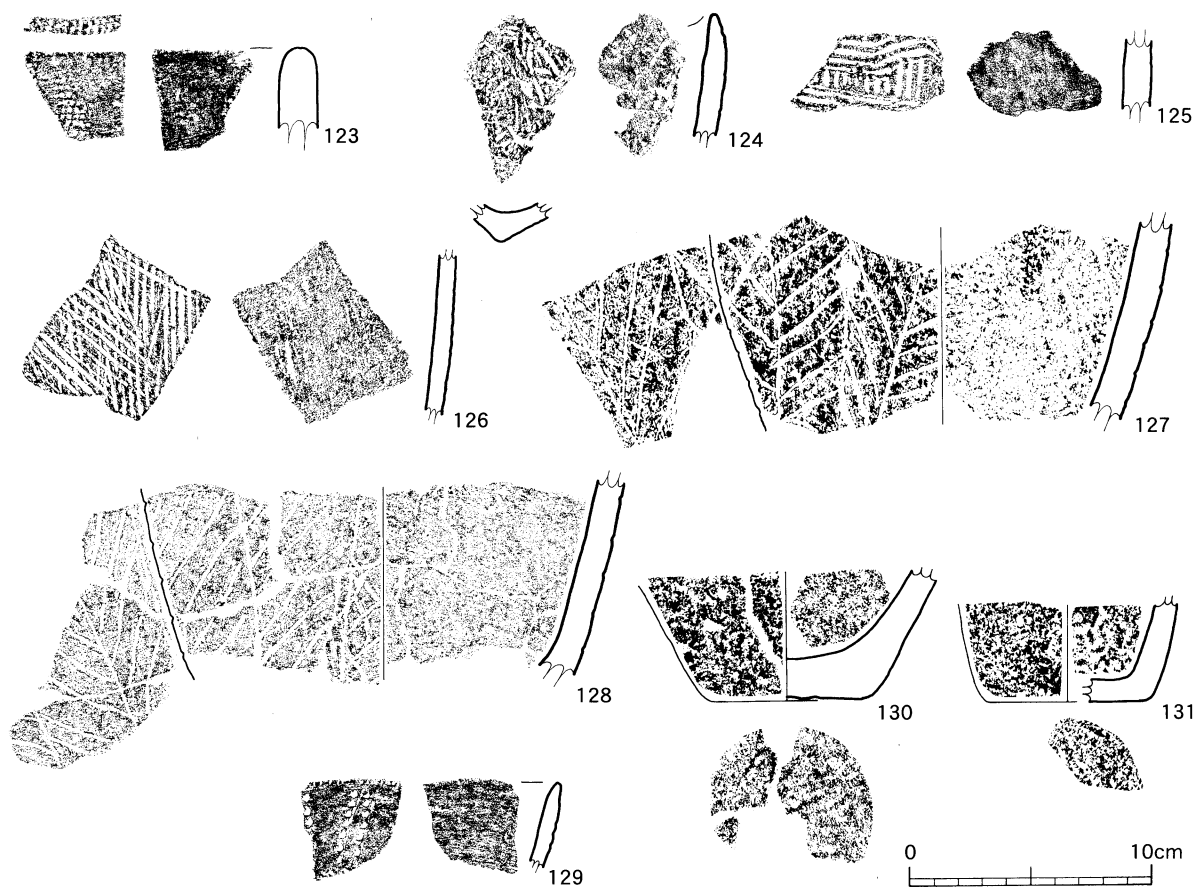


第20図 IV層出土土器：Ⅶ～Ⅹ類

が最大で1.6cmと非常に厚い。口唇部は丸く、内縁はナデ、外縁は貝殻復縁による刺突文が施されている。外面は口唇部と同一と思われる施文具による連続刺突文がみられる。124は角筒土器の角の部分である。胴部の器厚0.9cmに比べて、角の器厚は1.5cmと厚い。内面はナデ調整が施され、外面は口縁部に貝殻押引文、胴部に斜位と縦位の条痕がみられる。口唇部は角の部分のみ残存するが、尖り気味である。125は内面に縦位のミガキ状のナデ、外面は横位の貝殻条痕文2列の間に縦位の貝殻条痕文がみられる。126の内面は縦位のケズリが、外面は斜位の貝殻条痕文が施されている。円筒形と思われるが、部分によって器厚に差があり、2角の可能性もある。127・128はバケツ状の器形で、外面に羽状の沈線文がみられる。器壁はもろい。129は竹管と思われる連点文が斜位に2列みられる。口唇部は尖り、細かい刻目がみられる。焼成は非常に良い。130・131は無文で胴部から底部にかけて残存する。130の胴部はバケツ状に開き、底部の器壁が厚く、内面の底部から胴部への立ち上がりは角部を分厚くして湾曲して仕上げられている。131は円筒形で胴部に比べて底部の器壁が薄い。

XI類土器（第22・23図 132～136）

132から136は押型文土器である。いずれも外面のみの施文であり、焼成は良好である。132は長径6.5mm・短径4.0mmの楕円押型文である。内面はナデられている。133から135は山形押型文である。133は底部にかけてややすぼまった円筒形で口唇部は平坦である。134の口唇部は外傾している。文様帯は口縁部からやや下がった部分から胴部にかけてみられる。135は山形押型文の胴部から底部



第21図 IV層出土土器：X類



第22図 IV層出土土器：XI類

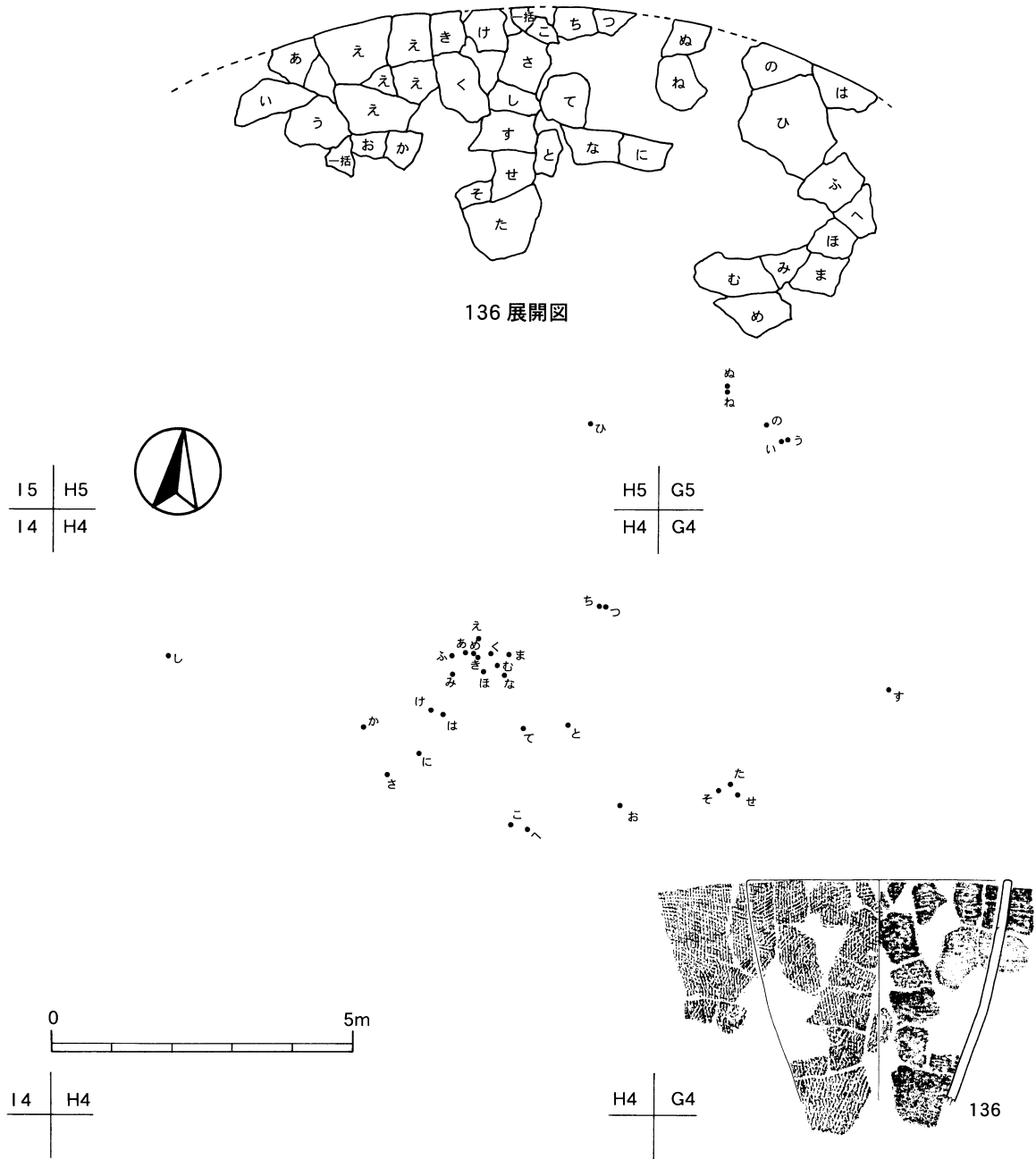
である。文様帯は底部端部から幾分上がったところから胴部にかけて施される。内面に指押さえ痕がみられ、底部外面には簾状の圧痕がみられる。136は格子目押型文土器である。口唇部は平坦にナデられ、口縁部から胴部上部にかけて直立しているが、胴部中間でわずかに屈曲している。

XII類土器（第24図 137～140）

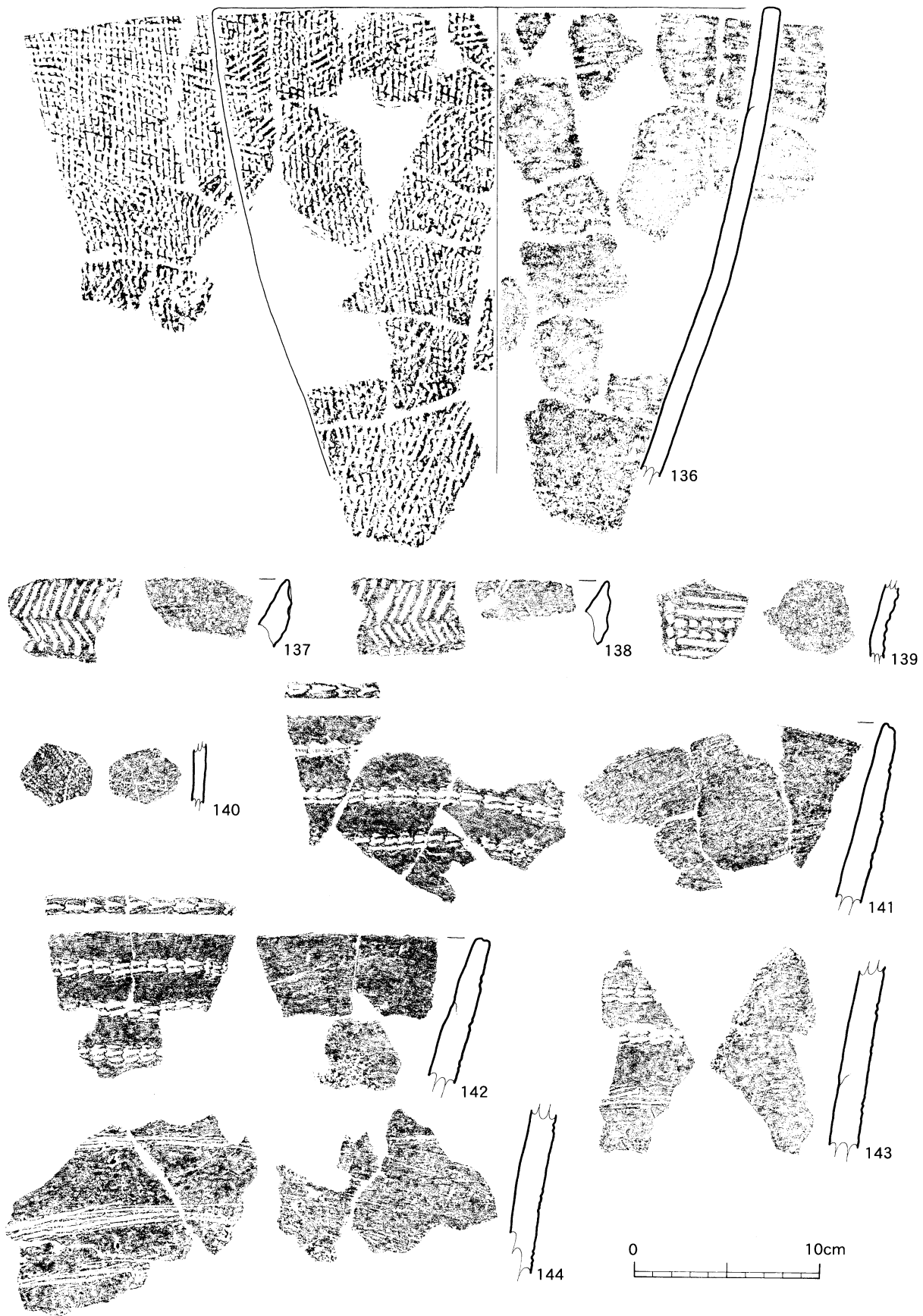
137から140はXII類土器である。沈線文と撚糸文がみられる土器を集めた。137と138は口縁部で口唇部は尖り、口縁部は外傾し、沈線文が羽状に巡る。140は細かな撚糸文が斜位にみられる。

XIII類土器（第24図 141～144）

141から144はXIII類土器である。いずれも分厚く外面に連点文と数条の沈線が巡る。内面はナデ調整がある。142は口唇部の平坦面に貝殻の肋2条と思われる施文具で連続刺突文が施される。



第23図 IV層：136出土状況



第24図 IV層出土土器：XI～XIII類

第4表 IV層土器観察表(1)

遺物番号	区	層	注記番号	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	雲母	火山ガラス	その他	挿図
1	G 6	Ⅲa	43745	I	口縁部	普通	赤褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ	○		○				13
2	E 6	Ⅳ	43558	I	口縁部	普通	灰褐色	灰褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○					13
3	J 4	Ⅲb	44211	Ⅱ	口縁部	良好	淡黄色	淡黄色	貝条	ナデ	○	○					13
4	J 4	Ⅲa	44238	Ⅱ	口縁部	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	貝条・貝刺	ナデ	○		○	○			13
5	I 4	Ⅲa	44642	Ⅱ	口縁部	良好	淡灰褐色	暗灰褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○				白色粒	13
6	H 4	Ⅲa	42714	Ⅱ	口縁部	良好	淡灰黄色	淡黄色	貝条・貝刺	ナデ	○	○				白色粒	13
7	G 6	Ⅳ	43770	Ⅱ	口縁部	良好	暗黄橙色	暗黄橙色	貝条・貝刺	ミガキ状ナデ	○	○	○				13
8	I 5	Ⅲa	19794	Ⅱ	口縁部	良好	淡茶褐色	淡褐色	貝条・刺突	ナデ	○	○	○				13
9	H 3	Ⅲa	44696	Ⅱ	口縁部	良好	暗褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ナデ	○					白色粒	13
10	H 4	Ⅲa	44782	Ⅱ	口縁部	良好	暗黄橙色	暗赤褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				13
11	G 5	Ⅳ	43569	Ⅱ	口縁部	良好	褐色	明褐色	貝条・貝刺	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
12	J 4	Ⅲa	44287	Ⅱ	口縁部	良好	明褐色	淡灰褐色	貝条・貝刺	ミガキ状ナデ	○	○			○		14
13	G 3	Ⅲa	43291	Ⅱ	口縁部	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	貝条・貝刺	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
14	K 5	Ⅲa	20651	Ⅱ	口縁部	良好	明褐色	明褐色	貝条	ミガキ状ナデ		○	○				14
15	J 5	Ⅲa	44021	Ⅱ	胴部上部	良好	明褐色	明褐色	貝条・貝刺	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
16	G 6	Ⅳ	43778	Ⅱ	胴部	良好	暗橙色	明灰褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○		○				14
17	G 6	Ⅲa	33437	Ⅱ	胴部	良好	明褐色	褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
18	J 4	Ⅲa	44340	Ⅱ	胴部	良好	黄橙色	灰褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
19	H 4	V	44945	Ⅱ	胴部	良好	淡黄橙色	淡黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
20	K 5	Ⅲa	44055	Ⅱ	胴部	良好	黄橙色	暗黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
21	G 4	Ⅳ	45096	Ⅱ	胴部	良好	淡黄褐色	灰黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
22	I 5	Ⅳ	41408	Ⅱ	胴部	良好	暗黄褐色	灰黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
23	H 3	Ⅲa	42867	Ⅱ	胴部	良好	橙色	暗褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				14
24	J 5	Ⅲa	44002	Ⅱ	胴部	良好	明褐色	明褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
25	G 4	Ⅳ	45095	Ⅱ	胴部	良好	明黄褐色	暗褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
26	J 4	Ⅲa	44143	Ⅱ	胴部	良好	淡黄褐色	灰黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○		○				15
27	G 6	Ⅲa	43729	Ⅱ	胴部~底部	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
28	G 6	Ⅳ	43444	Ⅱ	胴部~底部	良好	黄褐色	暗黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
29	F 6	Ⅳ	43532	Ⅱ	底部	良好	橙色	灰黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ		○	○				15
30	F 5	Ⅳ	42653	Ⅱ	底部	良好	淡黄色	淡黄色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
31	I 5	Ⅲa	40953	Ⅱ	底部	良好	暗黄褐色	灰黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
32	J 5	Ⅲa	44028	Ⅱ	底部	良好	暗黄褐色	暗褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
33	J 4	Ⅲa	44344	Ⅱ	底部	良好	明黄褐色	明黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○					15
34	H 5	Ⅲa	43855	Ⅱ	底部	良好	褐色	黒褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
35	K 5	Ⅲa	44084	Ⅱ	底部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○		○				15
36	J 3	Ⅲa	42829	Ⅱ	底部	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	貝条	ミガキ状ナデ	○	○	○				15
37	J 5	Ⅲa	40189	Ⅱ	底部	良好	明赤褐色	暗褐色	貝条	ナデ	○		○				15
38	F 5	Ⅳ	43562	Ⅲ	口縁部	普通	暗褐色	灰黄褐色	貝条・刺突	ケズリ	○	○	○				16
39	F 5	Ⅲa	42134	Ⅲ	口縁部	良好	暗褐色	灰黄褐色	貝条・刺突	ケズリ		○	○				16
40	E 5	Ⅳ	42644	Ⅲ	口縁部	良好	褐色	褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○	○	○				16
41	F 2	Ⅲa	42175	Ⅲ	胴部	良好	暗黄褐色	灰黄色	貝条・貝刺	ケズリ		○	○				16
42	F 6	Ⅳ	43536	Ⅲ	口縁部	良好	明黄褐色	褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○	○	○				16
43	G12	Ⅳ	38631	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	貝条・貝刺	ケズリ		○	○				16
44	D11	Ⅲa	38785	Ⅲ	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○		○				16
45	F11	Ⅲa	39106	Ⅲ	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	貝条・貝刺	ケズリ		○	○				16
46	G 7	Ⅲa	33194	Ⅲ	胴部	良好	灰黄褐色	褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○		○				16
47	F 5	Ⅲa	42326	Ⅲ	胴部	良好	黒褐色	褐色	貝条・貝刺	ケズリ		○	○				16
48	E 6	Ⅳ	39771	Ⅲ	胴部	良好	明黄褐色	明黄褐色	貝条・流水文	ケズリ		○	○				16
49	F11	Ⅲa	39745	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	貝条	ケズリ	○	○	○				16
50	J.K	表		Ⅲ	胴部	良好	黄褐色	黄褐色	貝条	ケズリ	○	○	○				16
51	G 6	Ⅲa	43618	Ⅲ	胴部	良好	褐色	褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○	○	○				16
52	F11	表		Ⅳ	胴部	良好	淡赤褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○	○	○				17
53	F11	Ⅲa	39204	Ⅳ	胴部	良好	淡褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ケズリ	○	○	○				17
54	F11	Ⅲa	39242	Ⅳ	胴部	良好	淡赤褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17

第5表 IV層土器観察表(2)

遺物番号	区	層	注記番号	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	雲母	火山ガラス	その他	挿図
55	F11	Ⅲa	39207	Ⅳ	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
56	I 5	Ⅳ	41140	Ⅳ	口縁部	良好	灰黄褐色	淡黄色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
57	J 5	Ⅳ	41841	Ⅳ	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
58	E 1	Ⅲa	38858	Ⅳ	口縁部	良好	明赤褐色	明赤褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
59	H 3	Ⅲa	44591	Ⅳ	胴部	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
60	K 5	Ⅲa	44063	Ⅳ	胴部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝条・貝刺・クサビ	ナデ	○	○	○				17
61	F11	Ⅲa	39092	Ⅳ	胴部	良好	明赤褐色	暗赤褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○			白色粒	17
62	F11	Ⅲa	39087	Ⅳ	胴部	良好	暗赤褐色	淡黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○			白色粒	17
63	E12	Ⅲa	39190	Ⅳ	胴部	良好	黄褐色	黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
64	H 5	Ⅲa	43975	Ⅳ	胴部	良好	赤褐色	赤褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
65	E12	Ⅲa	39235	Ⅳ	胴～底部	良好	黄褐色	灰褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
66	E12	Ⅲa	39186	Ⅳ	胴～底部	良好	黄褐色	灰黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
67	H 4	表		Ⅳ	胴～底部	良好	黄橙色	黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
68	G 6	Ⅲa	43640	Ⅳ	口縁部	良好	暗黄褐色	暗黄褐色	貝条・貝刺・クサビ	ナデ	○	○	○				17
69	G12	Ⅵ	38632	Ⅳ	口縁部	良好	褐色	褐色	貝条・貝刺・クサビ	ナデ	○	○	○				17
70				Ⅳ	胴部	良好	褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
71				Ⅳ	胴部	良好	黒褐色	褐色	貝条・貝刺・クサビ	ナデ	○	○	○				17
72				Ⅳ	胴部	良好	褐色	黒褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○			白色粒	17
73	E 6	Ⅲa	41396	Ⅳ	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	貝条・貝刺・クサビ	ナデ	○	○	○				17
74	F11	Ⅲa		Ⅳ	底部	良好	淡黄褐色	暗黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				17
75	E 8	Ⅱ	42442	Ⅳ	底部	良好	褐色	褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				17
76	I 5	Ⅳ	40317	Ⅴ	口縁部	良好	淡褐色	淡赤褐色	貝刺・クサビ・貝押引	ナデ	○	○	○				18
77	I 4	Ⅲa	44600	Ⅴ	口縁部	良好	淡黄褐色	淡赤褐色	貝刺・クサビ・貝押引	ナデ	○	○	○				18
78	J 5	Ⅳ	41834	Ⅴ	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝刺・クサビ・貝押引	ナデ	○	○	○				18
79	J 5	Ⅳ	41837	Ⅴ	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝刺・クサビ・貝押引	ナデ	○	○	○				18
80	K 4	Ⅲa	44345	Ⅵ	口縁部	良好	暗黄褐色	淡黄褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
81	J 4	Ⅲa	44096	Ⅵ	口縁部	良好	淡灰黄褐色	淡灰黄褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
82	J 4	Ⅲa	44131	Ⅵ	口縁部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
83	J 5	Ⅲa	44983	Ⅵ	口縁部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
84	J 5	Ⅲa	41517	Ⅵ	口縁部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
85	J 3	Ⅲa	44167	Ⅵ	口縁部	良好	淡灰黄褐色	淡黄褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
86	I 5	Ⅳ	41684	Ⅵ	口縁部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
87	I 3	Ⅲa	44672	Ⅵ	胴部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
88	I 3	Ⅲa	44411	Ⅵ	胴部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
89		表	表一括	Ⅵ	胴部	良好	淡赤褐色	淡褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
90	J 4	Ⅲa	44145	Ⅵ	胴部	良好	淡灰赤褐色	淡赤褐色	貝刺・貝押引	ナデ	○	○	○				18
91	J 5	Ⅲa	41555	Ⅵ	底部	良好	淡褐色	淡黄褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				18
92	G 3	Ⅳ	45108	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	淡赤褐色	褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
93	J 4	Ⅲa	44245	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	褐色	褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
94	K 5	Ⅲa	44316	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	暗褐色	褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
95	J 5	Ⅲa	38884	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	褐色	暗褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
96	G 6	Ⅲa	43619	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	淡褐色	淡褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
97	J 5	Ⅲa	41524	Ⅵ～Ⅶ	底部	良好	暗褐色	暗褐色	短沈澱・貝押引・ミガキ	ナデ	○	○	○				19
98				Ⅶ	口縁部	良好	褐色	赤褐色	貝条	ナデ	○	○	○				20
99	E11・12	表		Ⅶ	胴部	良好	淡褐色	褐色	貝条	ナデ	○	○	○				20
100	F11	Ⅲa	39055	Ⅶ	胴部	良好	褐色	暗褐色	貝条	ナデ	○	○	○				20
101	F11	Ⅶ	39743	Ⅶ	胴部	良好	暗褐色	褐色	貝条	ナデ	○	○	○				20
102	F 5	Ⅳ	42663	Ⅷ	口縁部	良好	淡褐色	暗褐色	貝刺突	ナデ	○	○	○				20
103	H 4	Ⅲa	44579	Ⅸ	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	貝刺突	ナデ	○	○	○				20
104	H 5	Ⅲa上	17992	X	口縁部	良好	淡赤褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
105	I 4	Ⅲa	44620	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ		○	○				20
106	G 5	Ⅳ	43765	X	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ	○						20
107	I 5	Ⅲa	44969	X	口縁部	良好	褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ	○		○				20
108	J 4	Ⅲa	44366	X	口縁部	良好	褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ		○	○				20

第6表 IV層土器観察表(3)

遺物番号	区	層	注記番号	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	雲母	火山ガラス	その他	挿図
109	G 3	Ⅲa	45102	X	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ		○	○				20
110	H 4	Ⅲa	44561	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ		○	○				20
111	I 5	Ⅲa	41153	X	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○					20
112	F 4	Ⅳ	41901	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○		○				20
113	GH5		ベルト拵	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
114	G 5	Ⅳ	43357	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○					20
115	I 5	Ⅳ	43995	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
116	G 4	Ⅲa	42973	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
117	J 5	Ⅳ	40092	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
118	H 6	Ⅲa	43692	X	口縁部	良好	暗褐色	淡褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
119	E 5	Ⅳ	42253	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○		○				20
120	E 6	Ⅲa	43490	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○					20
121	G 3	Ⅲa	43287	X	口縁部	良好	暗褐色	褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
122	K 5	Ⅲa	44075	X	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				20
123	F11	Ⅲa	39232	X	口縁部	良好	暗黄橙色	暗黄橙色	刺突文	ナデ		○	○				21
124	H 5	Ⅲa	43328	X	口縁部	良好	暗黄橙色	灰黄褐色	貝条・貝刺	ナデ	○	○	○				21
125	G 2	Ⅲa	42789	X	胴部	良好	暗褐色	褐色	貝条	ミガキナデ			○				21
126	H 4	Ⅲa	44534	X	胴部	良好	淡黄橙色	暗黄橙色	貝条	ケズリ	○	○	○				21
127	H 3	Ⅲa	44592	X	胴部	良好	褐色	暗褐色	刺突文	ナデ		○	○				21
128	H 4	Ⅲa	44585	X	胴部	良好	褐色	暗褐色	沈線	ナデ		○	○				21
129	I 3	Ⅲa	44679	X	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	刺突文	ナデ		○	○				21
130	J 4	Ⅲa	44341	X	底部	普通	暗橙色	黒褐色	無文	ナデ	○	○	○				21
131	J 5	Ⅲa	44038	X	底部	普通	淡黄褐色	淡黄褐色	無文	ナデ	○		○				21
132	H 6		3号土坑	X I	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	楕円押型文	ナデ	○	○	○				22
133	H 4	Ⅲa	44781	X I	口縁~胴部	良好	淡褐色	淡褐色	山形押型文	ナデ	○	○	○				22
134	H 4	Ⅲa	44518	X I	口縁~胴部	良好	淡黄色	淡褐色	山形押型文	ナデ	○	○					22
135	I 5	Ⅳ	40310	X I	底部	良好	淡褐色	淡褐色	山形押型文	ナデ			○				22
136	H 4	Ⅲa	44767	X I	口縁~胴部	良好	暗褐色	褐色	格子目押型文	ナデ	○	○	○				24
137		表		X II	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	条痕	ナデ	○	○	○				24
138	I 3	Ⅲa	3836	X II	口縁部	良好	褐色	淡褐色	条痕	ナデ	○	○	○				24
139	I 3	Ⅲa	2429	X III	胴部	良好	暗褐色	褐色	条痕・連点文	ナデ	○	○	○				24
140	K 3	Ⅲa	1820	X III	胴部	良好	褐色	褐色	縄文	ナデ	○	○	○				24
141	G 5	Ⅲa	42339	X III	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	連続刺突	ナデ	○	○	○				24
142	G 6	Ⅲa	43552	X III	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	連続刺突	ナデ	○	○	○				24
143	G 5	Ⅲa	43387	X III	胴部	良好	褐色	暗褐色	連続刺突・条痕	ナデ		○	○				24
144	G 5	Ⅲa	43650	X III	胴部	良好	褐色	暗褐色	連続刺突・条痕	ナデ	○	○	○				24

第4節 Ⅲ層の調査

1. 遺構

1) 集積遺構

H-4区から安山岩の集積が検出された。

掘立柱建物跡の調査後、Ⅲ層の掘り下げを行なっている最中に、割合に大きな安山岩の剥片が1か所からまとまって出土したため、周囲を慎重に掘り下げを行った結果、土坑のプランが検出され、その中に幾層にも重なっている集積として検出されたものである。

土坑の掘り方は、ほぼ南北方向を長軸として約90cmあり、ほぼ東西方向の短軸は74cmであり、少々崩れた形はしているものの、概略、楕円形状をしている。また、深さは33cmあり、緩やかなU字状をしていると言えよう。

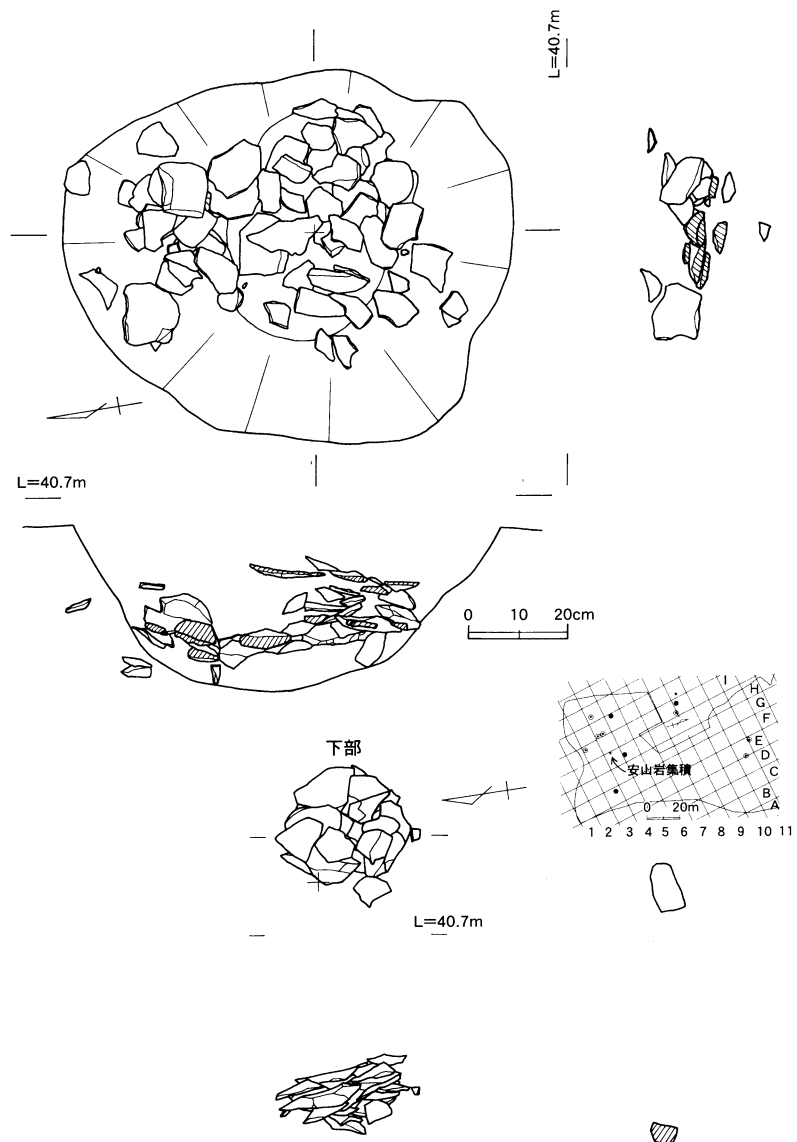
剥片の堆積は、下部では隙間なく丁寧に重ねているものの、上部にいくほど開いたような状況に積み重ねてあり、これが何を意味しているかについては判断できなかった。また、土坑の掘り方の中心部よりも、全体的に南東部に偏ったところを中心として積み重ねており、この理由も詳らかににはできなかった。

いずれにしても、何らかの意図をもって集積されたものと考えられ、類例がそれほど多くないことから、貴重な遺構として捉えられる。

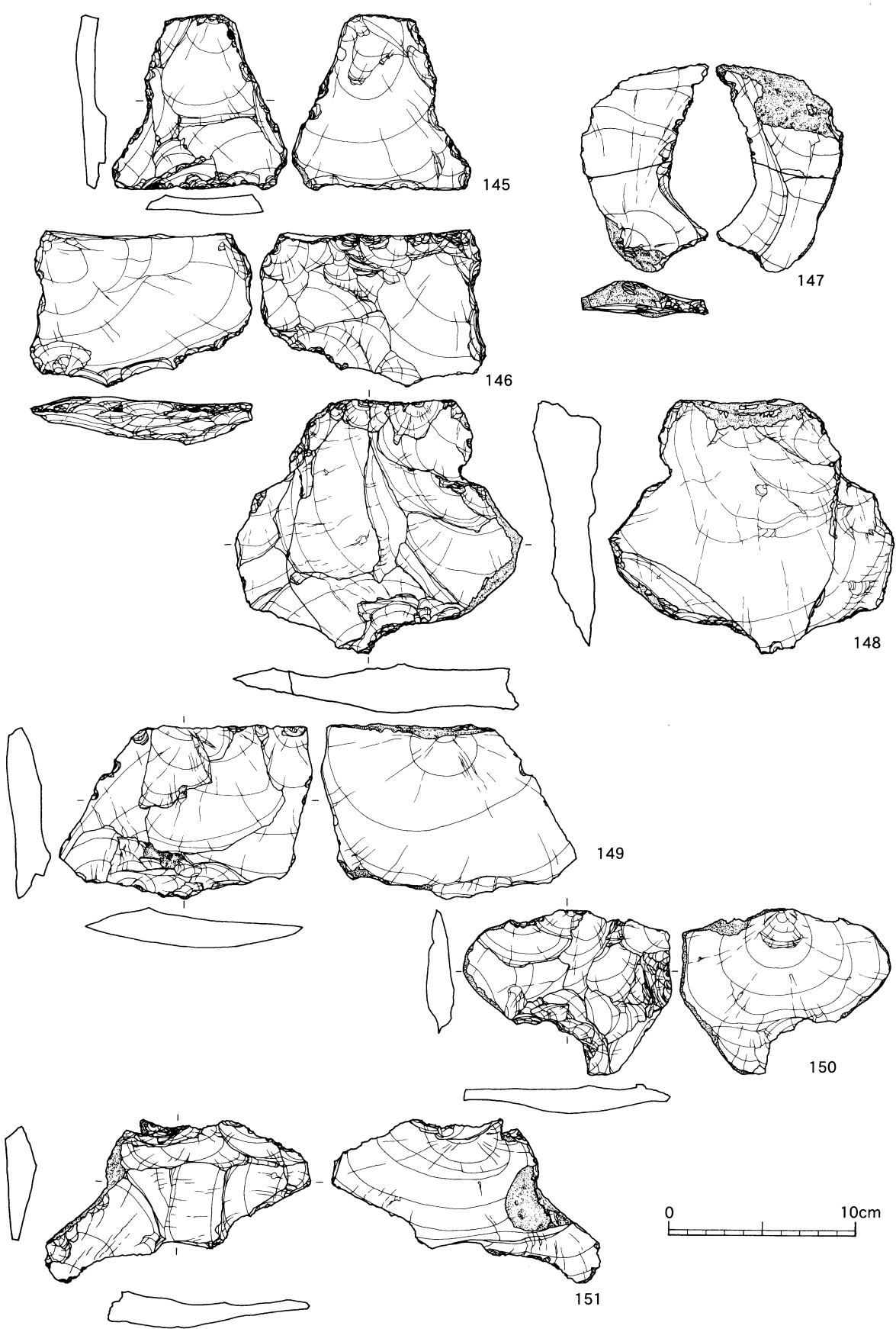
この遺構に集積された剥片はいずれも安山岩であり、2次的に造作を行なって、石器として使用するために集積されたものと考えられる。

剥片の形状はいろいろであるものの、厚さはいずれも厚いところで5mm~20mm程度であり、長さも5cm~10cm程度と割合に揃っていることから、取り出した後は、すぐにでも次の加工の工程に移行することができるようになっていると考えられる。

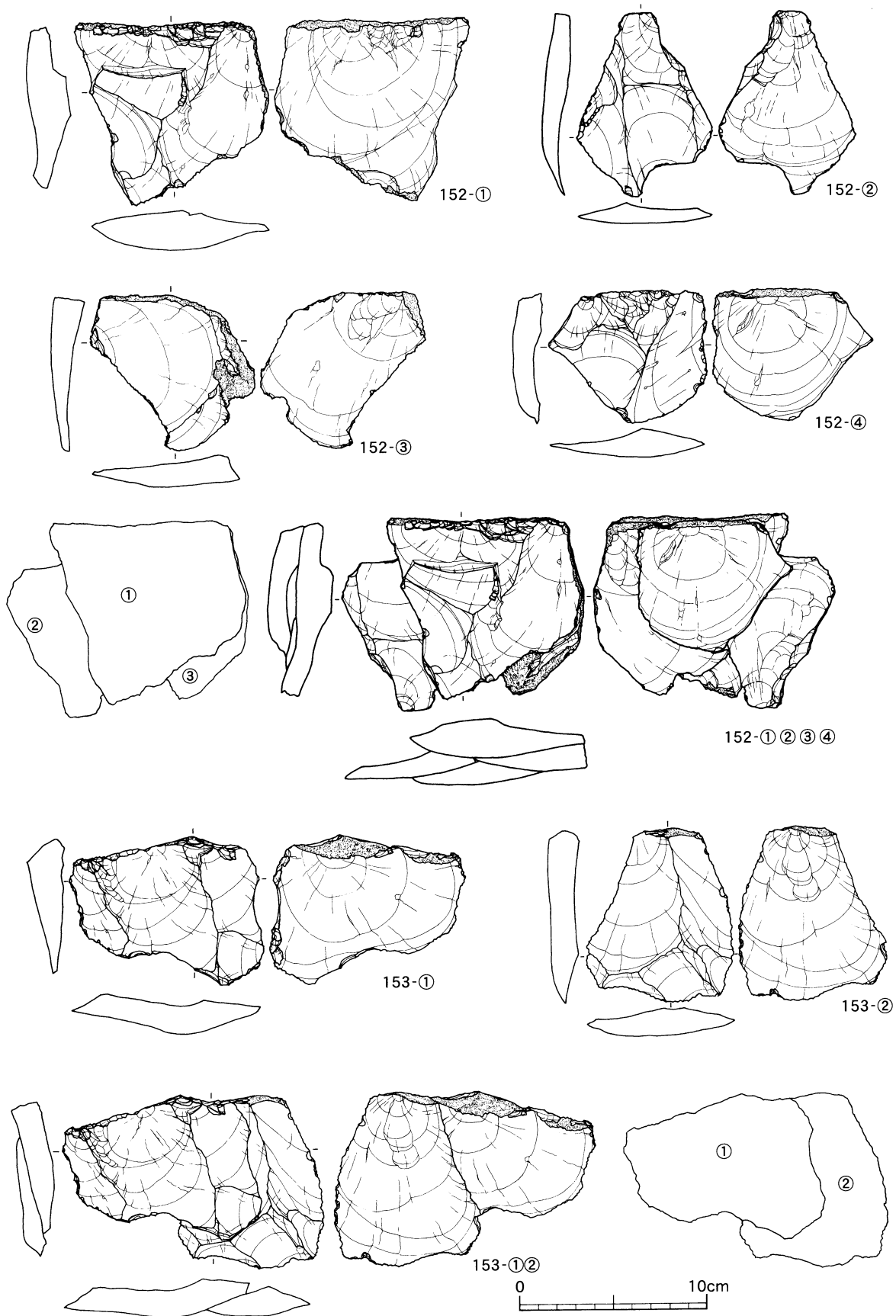
いろいろな形状があることから推定すると、いろいろな種類の剥片石器を作るために準備さ



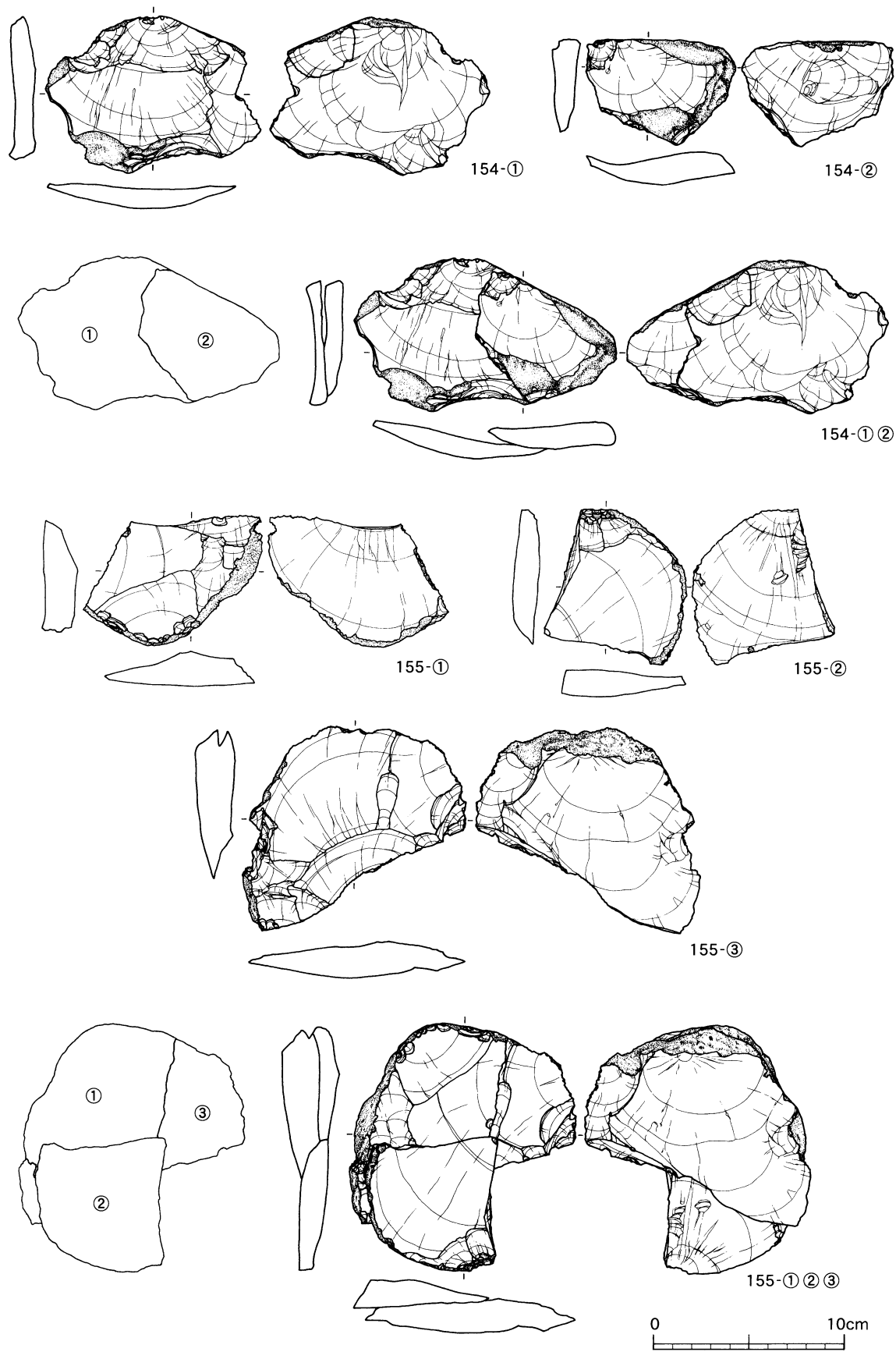
第25図 Ⅲ層出土安山岩集積遺構



第26圖 III層出土安山岩集積遺構遺物(1)



第27图 III層出土安山岩集積遺構遺物(2)



第28図 Ⅲ層出土安山岩集積遺構遺物(3)

れた剥片といえるかもしれない。

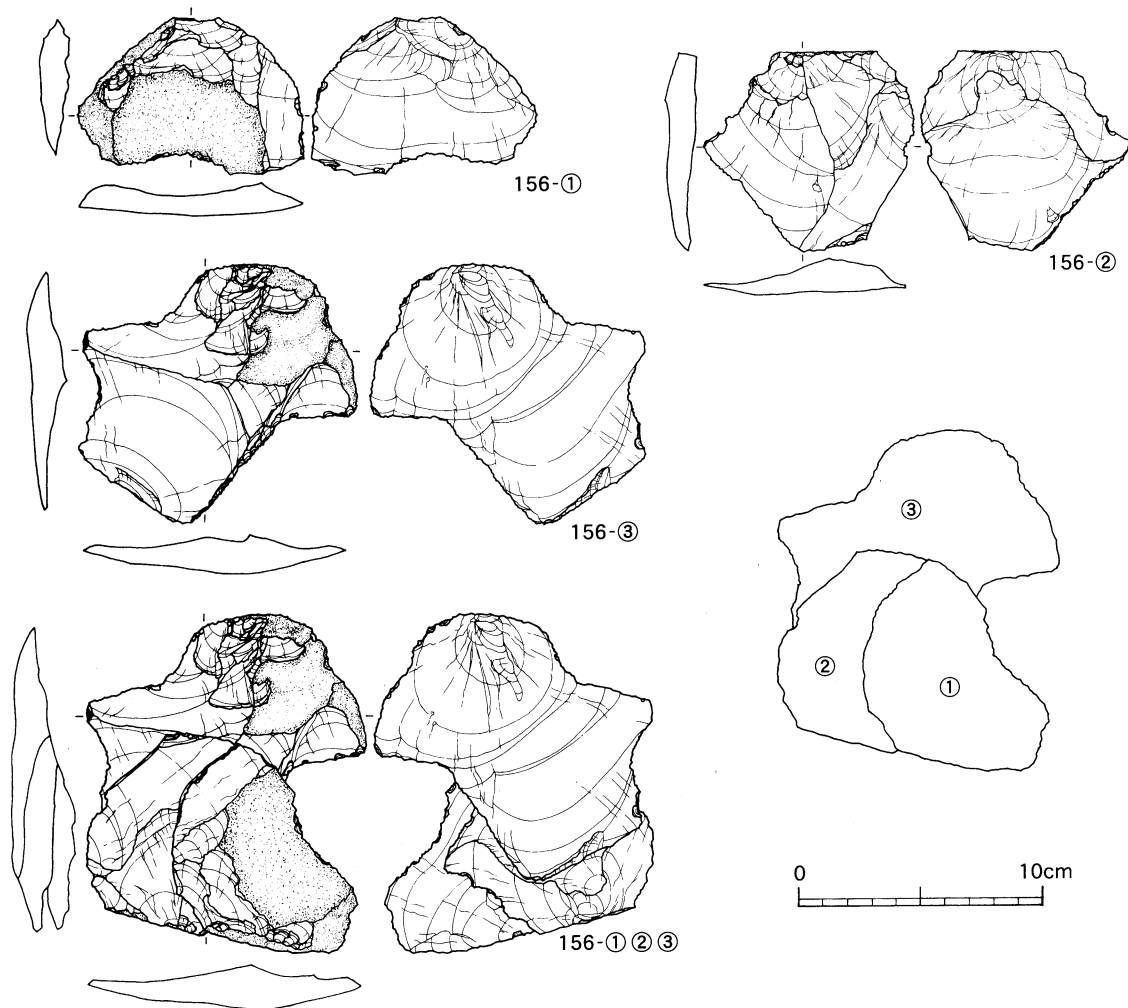
集積内からは、硬質の安山岩を素材にした大型剥片99点が検出された。また円形の自然川原石を利用した安山岩を素材にした敲打痕のある磨石1点が検出された。

剥片は、ほとんどのものが10cm内外で、自然面を敲打点にして加撃を加え、横剥ぎの剥片を剥出している。石材は安山岩であるが、色調・硬度などから4～5個体の個数と考えられる。

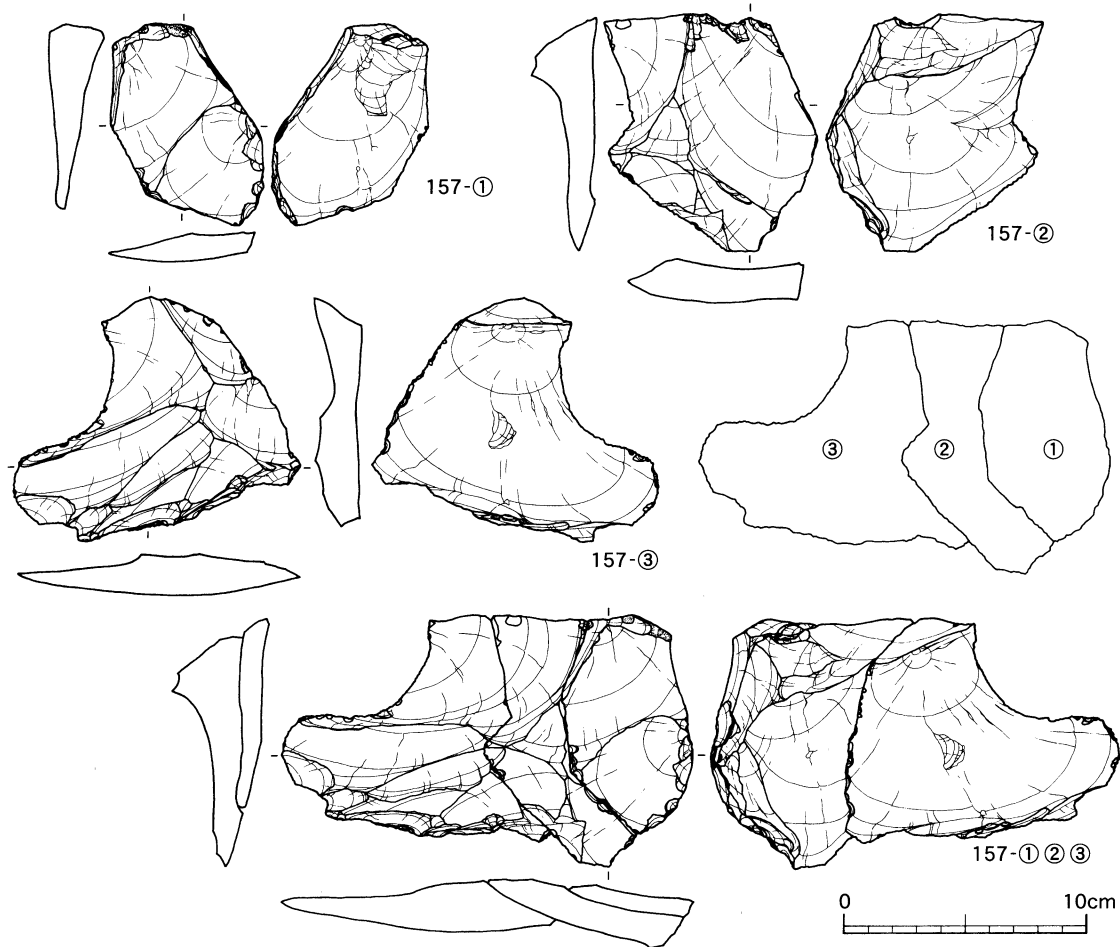
石核は少なく、152から157のように、剥片が接合するものがみられる。

145は側縁部に二次加工を施し、刃潰しを行ったものである。146も刃潰しを施している。147は一部、自然面を残した剥片であり、やはり刃潰しを施している。148から151も刃潰しを施した剥片である。

152から157は接合資料である。152は4点の剥片が接合した。4点のうち152-②は他の剥片とは上下逆方向からの加撃によって剥出している。153・154は敲打面に自然面が残ったもので、2点が接合している。156は縞状の脈がみられる安山岩で、3点が接合した。両端に自然面がみられ、原石は人頭大の円礫であることがわかる。



第29図 III層出土安山岩集積遺構遺物(4)



第30図 III層出土安山岩集積遺構遺物(5)

第7表 安山岩集積遺構出土遺物觀察表

遺物番号	接合資料	小番号	注記番号	器種	石材	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	挿図
145			80	二次加工剥片	安山岩	9.20	9.35	1.60	119.30	26
146			41	石器	安山岩	8.30	10.80	2.40	211.60	26
147			22	使用痕剥片	安山岩	11.10	6.75	1.90	73.30	26
148			9	石核	安山岩	13.50	15.30	3.60	568.00	26
149			102	剥片	安山岩	9.25	13.50	2.40	242.00	26
150			34	剥片	安山岩	8.80	11.10	1.55	121.00	26
151			21	剥片	安山岩	8.70	14.20	1.90	125.20	26
152	接合資料 1	①	50	剥片	安山岩	9.70	10.30	2.35	180.80	27
		②	42	剥片	安山岩	9.80	7.20	1.60	75.70	27
		③	77	剥片	安山岩	8.25	8.80	1.75	101.30	27
		④	101	剥片	安山岩	6.95	8.50	1.60	83.60	27
		①②③④	50.42.77.101	剥片	安山岩	10.30	12.80	3.60	441.40	27
153	接合資料 2	①	12	剥片	安山岩	7.90	10.40	2.30	136.60	27
		②	15	剥片	安山岩	9.30	7.90	1.70	107.60	27
		①②	12.15	剥片	安山岩	9.30	13.90	2.35	244.20	27
154	接合資料 4	①	74	剥片	安山岩	8.20	11.30	1.40	109.20	28
		②	1	剥片	安山岩	5.40	7.80	1.70	61.70	28
		①②	74.1	剥片	安山岩	12.60	7.70	2.00	170.98	28
155	接合資料 3	①	96	剥片	安山岩	6.70	9.30	2.00	99.30	28
		②	94	剥片	安山岩	8.00	7.40	1.40	76.10	28
		③	99	剥片	安山岩	10.60	11.60	2.10	214.10	28
		①②③	96.94.99	剥片	安山岩	12.85	11.80	3.10	389.50	28
156	接合資料 5	①	29	剥片	安山岩	6.40	9.20	1.40	73.10	29
		②	47	剥片	安山岩	8.00	8.50	1.50	90.40	29
		③	37	剥片	安山岩	10.50	11.30	1.60	136.40	29
		①②③	29.47.37	剥片	安山岩	13.75	11.40	2.50	299.90	29
157	接合資料 6	①	75	剥片	安山岩	7.20	6.35	2.30	77.80	30
		②	97	剥片	安山岩	9.70	8.80	2.70	166.30	30
		③	87	剥片	安山岩	10.00	11.70	2.00	164.10	30
		①②③	75.97.87	剥片	安山岩	10.35	16.90	4.00	408.20	30

2) 集石

Ⅲ層から集石が6基検出された。南側の下段部および中央の上段部で確認されたものである。それぞれについて、概略説明を行なう。

2号集石は、E-12区で確認された。27個から成り、火熱の使用により石の表面が焼けたり、割れたりしている。掘り込みは捉えることができなかった。礫は72cm×59cmの範囲に集中して見られ、高低差は23cmある。石材は安山岩および砂岩と見られ、角礫である。軽石も含まれていることが特徴である。

3号集石は、E-11区で確認された。36個から成り、掘り込みは捉えられなかった。72cm×59cmの範囲に及ぶが、形態的には集中しているものとして捉えられる。高低差は25cmあり、いずれも安山岩を主とする角礫である。礫に混じって、前平式土器の破片も出土しているが、このことからこの集石の時期を前平式期のものと考えすることはできないであろう。

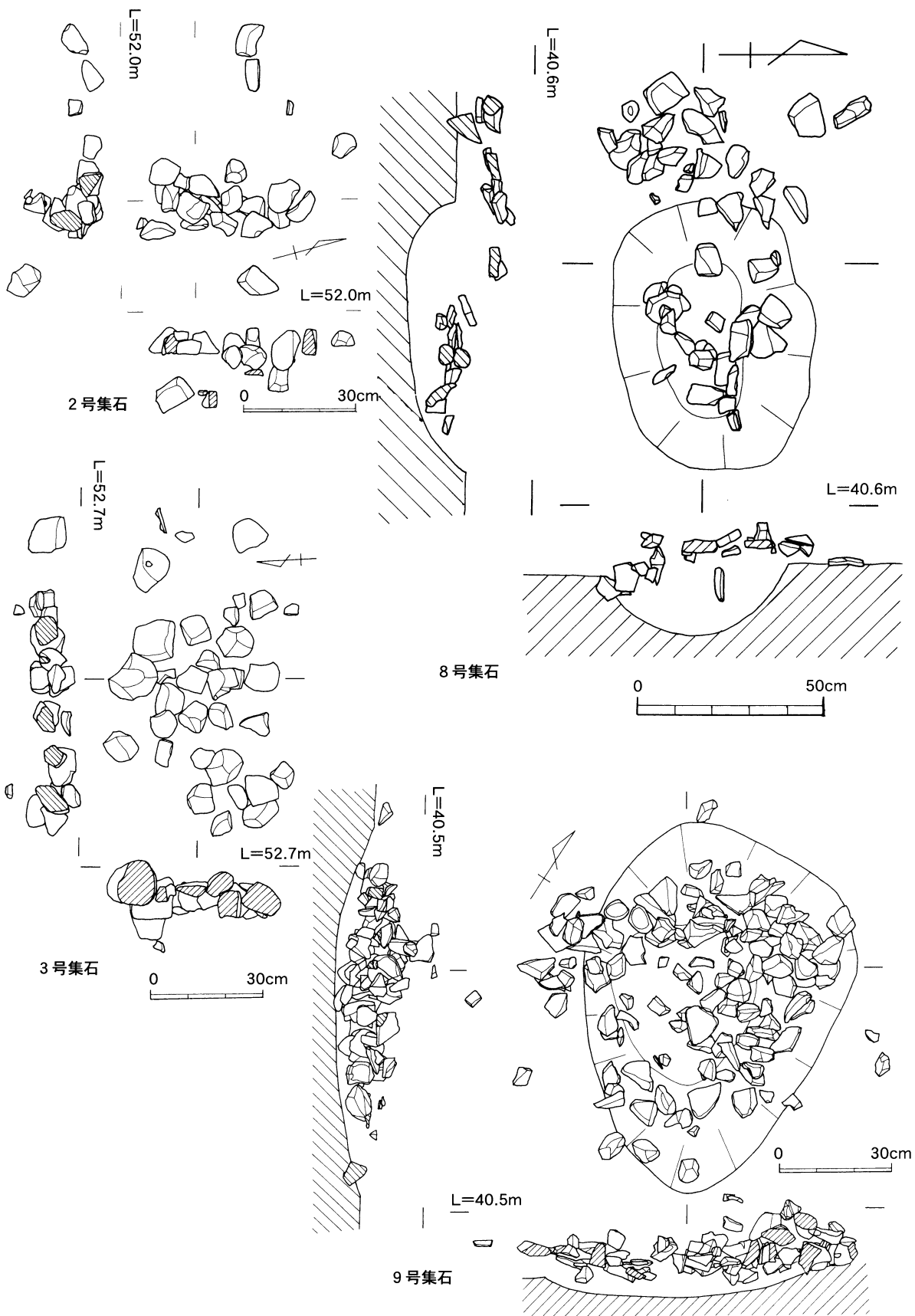
6号集石は、J-4区で確認された。45個から成り、掘り込みは確認できなかった。118cm×88cmの範囲に散らばった状態で確認され、集中度は弱く、散在するタイプとして捉えられる。安山岩を主体にしており、いずれも角礫である。高低差は28cmである。

7号集石は、J-4区で確認された。69個から成り、掘り込みは見られなかった。190cm×144cmの範囲に散らばって確認された。7号集石よりも個数が多いことにもよると思われるが、広く散らばってはいるものの、割合に集中するタイプと考えられる。安山岩を主とする角礫から成っており、高低差は30cmである。

8号集石は、I-3区で確認された。43個から成り、表面が火熱を受けて赤化したり、焼けたりしている様子が観察される。安山岩を主体とした角礫が多く、98cm×75cmの範囲に緩やかに広がった状態で検出されたことから、散在するタイプと捉えられる。土坑を伴い、東西方向の長軸は72cm、南北方向の短軸は55cmであり、形状的には角張ってはいるが、楕円形と言えるであろう。深さは21cmで、緩やかなU字状といえる。ただ、土坑と集石は若干位置的にずれているように思われることから、礫全体がこの土坑と不可分な関係にあるか否かについては不明である。ただし、集石としての使用を考えるならば、この土坑と礫はレベル的にも、また、在り方の状態から見ても一体の物と考えて差し支えないと思われる。

9号集石は、K-3区で確認された。116個から成り、土坑を伴っている。土坑は、ほぼ南北方向の長軸が約100cm、ほぼ東西方向となる短軸は73cmで、平面的には菱形に近い。また、深さは28cmで、非常に浅い土坑である。礫は安山岩の角礫が主体となって116cm×87cmという広い範囲ではあるが、集中した状態と言える。

これらはⅢ層で検出されたことから、一部に前平式土器が入るものの、混入と考えられ、アカホヤ堆積後の縄文時代前期以降のものと考えられることができる。



第31図 Ⅲ層集石(1)



第32図 III層集石(2)

2. 土器

XIV類土器 (第34図 158)

158は外面に双交弧文が4条横位に巡る。弧文は約2cm長さで9mm幅を1単位とする。

XV類土器 (第34図 159~173)

159から173がXV類土器である。外面は磨いた上に器壁から微隆起線文を横位・縦位・斜位に盛り上げ、その両脇に刷毛状の施文具で条痕が1・2条ずつ施されている。口唇部は外傾し、平坦面を成形してから口縁部の調整がなされている。内面は横位の粗いミガキが見られる。

X VI類 (第35図 174)

174はX VI類土器である。口縁部は直行し、外面に2条の刻目突帯がみられる。内面は斜位の条痕で調整される。口唇部は爪状の施文具による刺突文が約1cm間隔で施されている。

X VII類 (第35図 175~199)

175から182は口縁部である。口唇部がキャリパー状を呈し、突帯や条痕文・刺突文が施されている物が多い。175は口唇部直下に2条の波状の条痕が施され、その下に縦位の条痕文が見られる。175は176と同1個体の可能性がある。179は口唇部内面に貝殻復縁による連続刺突文が見られる。口唇部外縁に1条の突帯が巡り、その直下に波状の突帯が施されている。底部は上げ底である。

X VIII類土器 (第36図 200~207)

200から207は口縁部外面の上部に沈線あるいは凹線による緩やかな弧を描く直線やZ字状の文様の繰り返しが見られ、口縁部端部には短い刻みが入る。胴部にも浅い沈線が巡らされ、底部は極めて安定した平底である。

X IX類土器 (第36図 208~212)

208から212は口縁部端部が内傾する幅に変化を付け、沈線及び連続刺突文を施す。頸部から胴部はくの字状に屈曲し、屈曲部に沈線を巡らす。底部にかけては丸く大きなカーブでゆったりすぼまる。両面ともミガキがみられ、焼成は良好である。210・212には沈線に囲まれた部分のみ縄文を残す、いわゆる磨消縄文がみられる。193から199は底部である。両面に貝殻を施文具にした条痕がみられる。

X X類土器 (第36図 213)

X X類土器は1点の出土である。213は胴部に横方向を主体とする沈線がみられる。焼成は良好で強固である。

X X I類土器 (第37図 214)

214はX X I類土器である。214の口縁部は平坦に調整され、外面に幅2mmほどの沈線が約3mm間隔で施されている。

X X II類土器 (第37図 215~220)

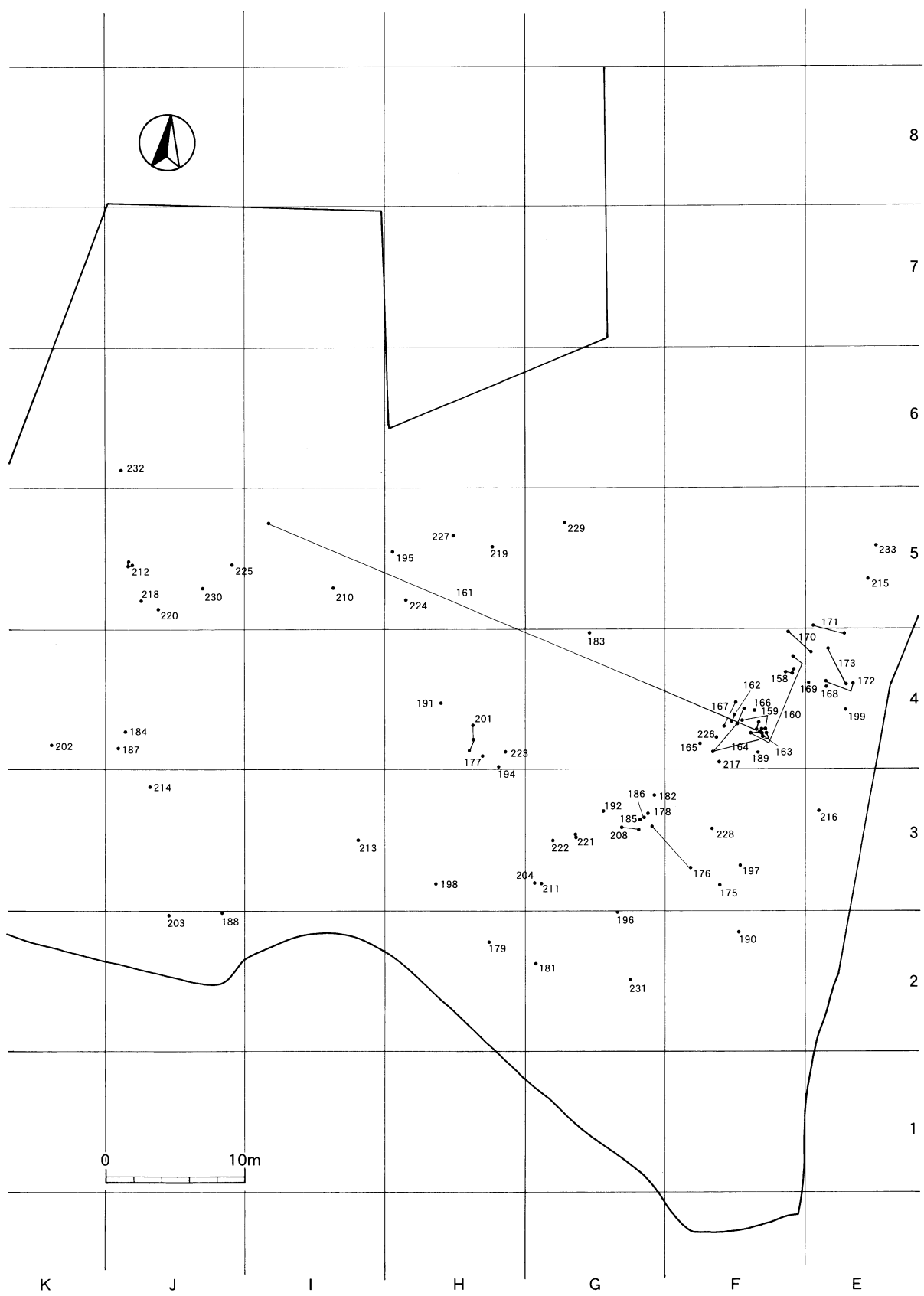
215から220は縄文時代晩期の遺物とみられる。口縁部から胴部の出土だが、両面とも丁寧に磨かれている。215は浅鉢とおもわれるが頸部の屈曲が顕著である。218は両面と研磨されているが外面の調整がやや粗く、粘土塊が付着している。口縁部調整は特にない。

X X III類土器 (第37図 221)

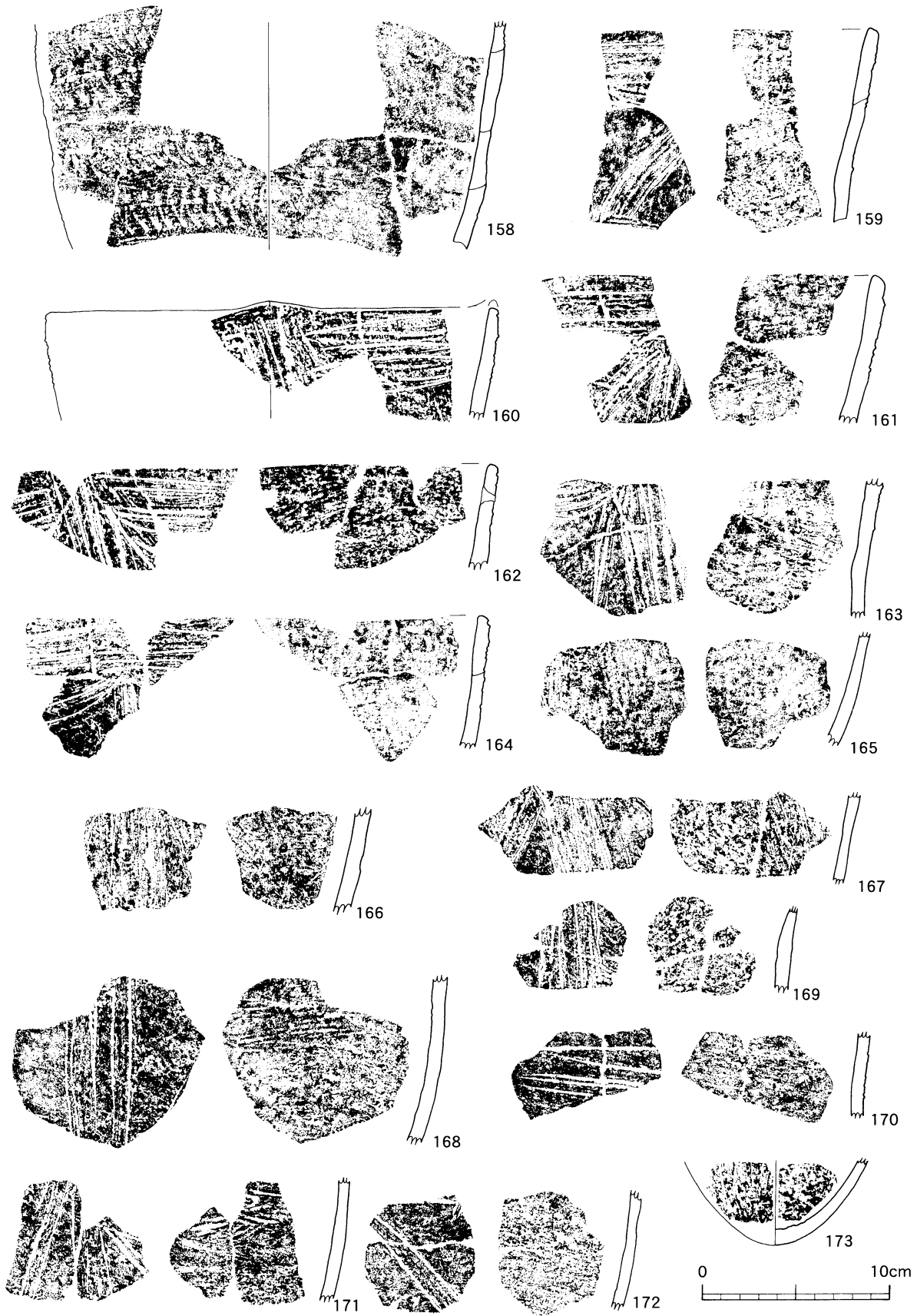
221と222は浅鉢の胴部である。両面とも磨かれ、下部に煤が付着している。223から226は粗製の鉢である。外面は横位に粗く撫でられ、口縁部がわずかに肥厚している。

X X IV類土器 (第37図 227~233)

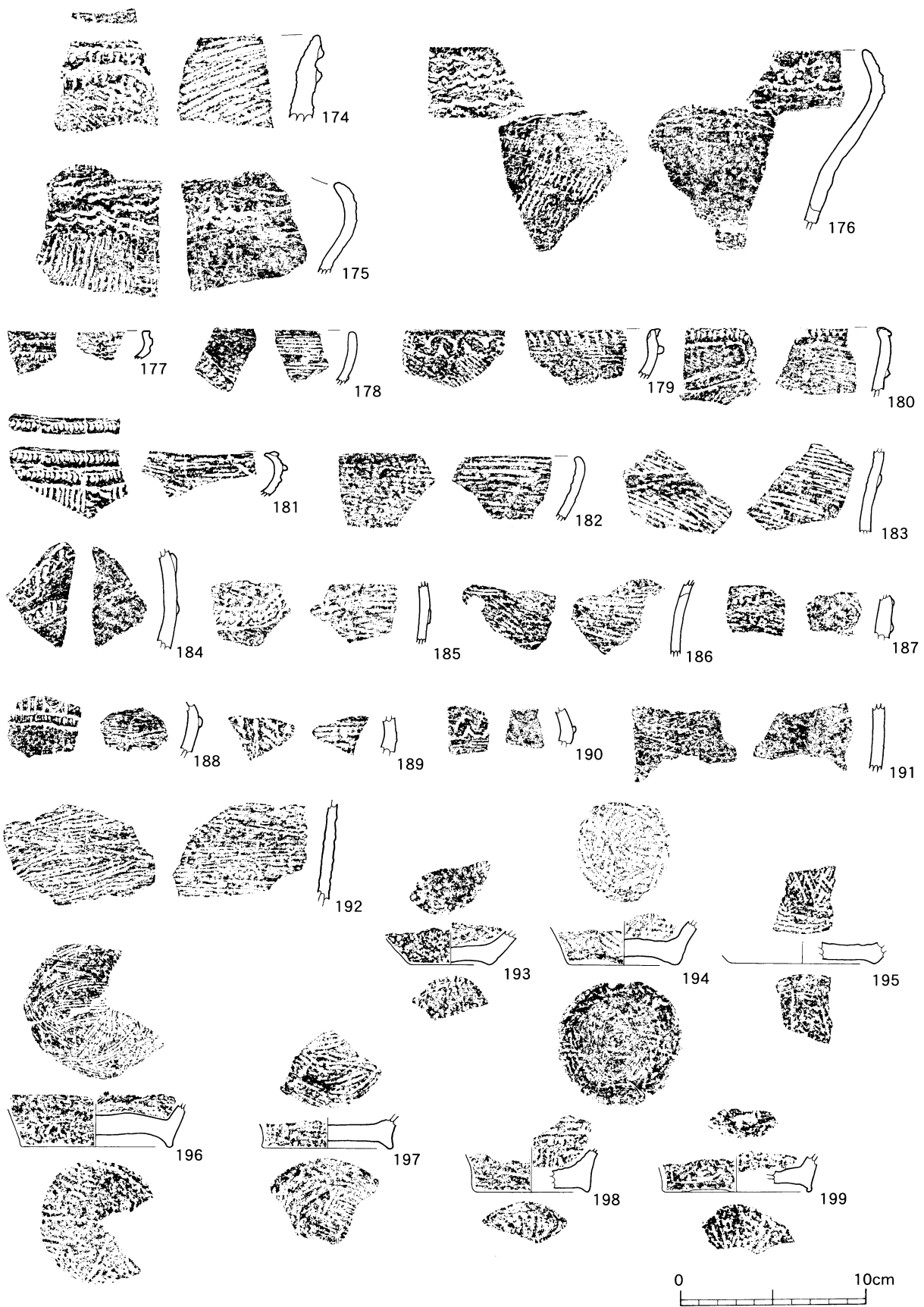
227から233は前期から晩期と思われる型式不明の土器をまとめて記載した。227の内面は淡灰褐色で指頭による縦位のナデがみられ、外面の調整は粗い。228は口縁部である。口唇部は外傾し、外縁に連続刺突文がみられる。229は外面に浅い横位の沈線文がみられる。230は胴部から底部にかけて残存している。両面とも粗く研磨され、胴部と底部の接合面で欠損したと思われる。231は縄状の組織痕が外面にみられる。2.5mmの縄2本を撚ったLLの縄である。



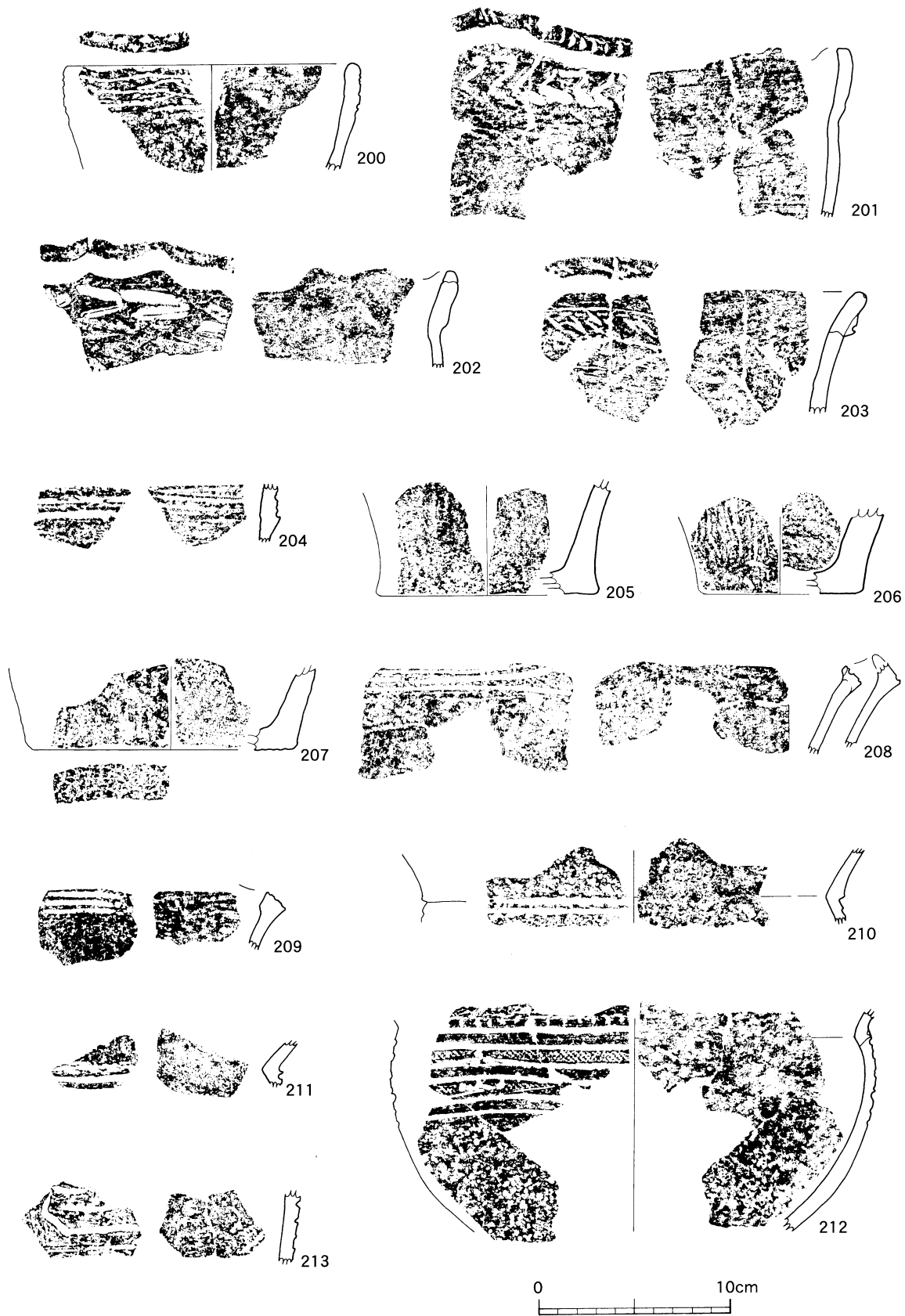
第33図 III層土器出土状況



第34图 Ⅲ層出土土器：XIV・XV類



第35圖 Ⅲ層出土土器：XVI・XVII類



第36図 III層出土土器：後期XVIII～XIX類



第37図 Ⅲ層出土土器：晩期・XX~XXIV類

第8表 III層土器観察表

遺物番号	区	層	注記番号	類	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	火山ガラス	その他	備考	挿図
158	F 4	Ⅲa	41664	XV	胴部	普通	暗褐色	暗褐色	双交弧文	ナデ	○	○	○				34
159	F 4	Ⅲa	41618	XV	口縁部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
160	F 4	Ⅲa	41620	XV	口縁部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
161	F 4	Ⅲa	41623	XV	口縁部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
162	F 4	Ⅲa	41628	XV	口縁部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
163	F 4	Ⅲa	40733	XV	胴部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
164	F 4	Ⅲa	40726	XV	口縁部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
165	F 4	Ⅲa	41605	XV	胴部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
166	F 4	Ⅲa	41649	XV	胴部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
167	F 4	Ⅲa	40824	XV	胴部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
168	E 4	Ⅲa	41061	XV	胴部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○		白色粒		深浦 34
169	E 4	Ⅲa	40639	XV	胴部	普通	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
170	E 4	Ⅲa	40629	XV	胴部	普通	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
171	E 5	Ⅱb	38587	XV	胴部	普通	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
172	E 4	Ⅲa	40582	XV	胴部	普通	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
173	E 4	Ⅲa	40615	XV	底部	良好	暗褐色	暗茶褐色	条痕・微隆起線文	ナデ・ミガキ	○	○	○				深浦 34
174	D14	Ⅵ	39074	XVI	口縁部	普通	暗黄褐色	明褐色	刻目突帯・条痕	条痕	○	○	○				中期 35
175	F 3	Ⅲa	41578	XVI	口縁部	普通	暗灰褐色	灰褐色	波状文・条痕	波状文・条痕	○	○	○				春日 35
176	F 3	Ⅲa	40405	XVI	口縁部	普通	黄褐色	灰黄褐色	波状文・条痕	波状文・条痕	○	○	○				春日 35
177	H 4	Ⅲa	10855	XVI	口縁部	普通	黄褐色	黄褐色	連続刺突	ナデ	○	○	○				春日 35
178	G 3	Ⅲa	43095	XVI	口縁部	普通	暗褐色	黄褐色	刻目突帯	条痕	○	○	○				春日 35
179	H 2	Ⅲa	44712	XVI	口縁部	普通	明黄褐色	黄褐色	波状突帯・条痕	刻目突帯・条痕	○	○	○				春日 35
180				XVI	口縁部	良好	明黄褐色	明黄褐色	刻目突帯・条痕	連続刺突	○	○	○				春日 35
181	G 2	Ⅲa	42202	XVI	口縁部	良好	黒褐色	黄褐色	刻目突帯・条痕	ミガキ	○	○	○				春日 35
182	G 3	Ⅲa	43068	XVI	口縁部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
183	G 4	Ⅱb	37787	XVI	胴部	普通	黄褐色	黄褐色	突帯・条痕	条痕	○	○	○				春日 35
184	J 4	Ⅲa	44106	XVI	胴部	普通	灰黄褐色	黄褐色	刻目突帯・条痕	条痕	○	○	○				春日 35
185	G 3	Ⅲa	43091	XVI	胴部	良好	赤褐色	明黄褐色	刻目突帯・条痕	条痕	○	○	○				春日 35
186	G 3	Ⅲa	43093	XVI	胴部	普通	黄褐色	黄褐色	突帯・刺突	条痕	○	○	○				春日 35
187	J 4	Ⅲa	44110	XVI	胴部	普通	黄褐色	黄褐色	刻目突帯・条痕	ナデ	○	○	○				春日 35
188	J 2	Ⅲa	44957	XVI	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	刻目突帯・沈線文	条痕	○	○	○				春日 35
189	F 4	Ⅲa	40739	XVI	胴部	普通	暗褐色	暗褐色	刻目突帯・沈線文	条痕	○	○	○				春日 35
190	F 2	Ⅲa	42177	XVI	胴部	普通	明赤褐色	赤褐色	波状突帯・条痕	ナデ	○	○	○				春日 35
191	H 4	Ⅲa	3177	XVI	胴部	普通	暗灰褐色	褐色	条痕	ナデ	○	○	○				春日 35
192	G 3	Ⅲa	43047	XVI	胴部	良好	灰黄褐色	黄褐色	条痕	条痕	○	○	○			滑石	春日 35
193				XVI	底部	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
194	H 4	Ⅲa	44649	XVI	底部	普通	黄褐色	黄褐色	条痕・ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
195	H 5	Ⅲa	43129	XVI	底部	普通	明黄褐色	明黄褐色	条痕・ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
196	G 2	Ⅲa	42918	XVI	底部	普通	褐色	黒褐色	条痕・ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
197	F 3	Ⅲa	41581	XVI	底部	普通	黄褐色	黒褐色	条痕	条痕	○	○	○				春日 35
198	H 3	Ⅲa	44694	XVI	底部	普通	明褐色	明褐色	条痕・ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
199	E 4	Ⅲa	40570	XVI	底部	普通	橙色	明赤褐色	条痕・ナデ	条痕	○	○	○				春日 35
200	F 6	Ⅱb		XVII	口縁部	普通	明赤褐色	褐色	沈線・ナデ	ナデ	○	○	○				南福寺 36
201	H 4	Ⅲa	2767	XVII	口縁部	良好	黒褐色	褐色	沈線・凹線・連続刺突	ミガキ	○	○	○				南福寺 36
202	K 4	Ⅲa	44918	XVII	口縁部	良好	赤褐色	明赤褐色	凹線文・ミガキ	ナデ	○	○	○				南福寺 36
203	J 2	Ⅲa	44861	XVII	口縁部	普通	赤褐色	褐色	連続刺突・ナデ	ナデ	○	○	○				南福寺 36
204	G 3	Ⅲa	42909	XVII	胴部	普通	黄褐色	明黄褐色	沈線・ナデ	条痕	○	○	○				南福寺 36
205	E 6	表		XVII	底部	普通	褐色	明褐色	条痕	ナデ	○	○	○				南福寺 36
206	F11	Ⅲa	38717	XVII	底部	普通	明黄褐色	明黄褐色	ミガキ	ナデ	○	○	○				南福寺 36
207	K 3	表		XVII	底部	普通	明赤褐色	明赤褐色	ミガキ	ナデ	○	○	○				南福寺 36
208	G 3	Ⅲa	43085	XIX	口縁部	良好	明黄褐色	明黄褐色	磨滑織文・沈線・ミガキ	ミガキ	○	○	○				西平 36
209				XIX	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	磨滑織文・沈線・ミガキ	ミガキ	○	○	○				西平 36
210	I 5	Ⅲa	40917	XIX	胴部	良好	黄褐色	灰黄褐色	磨滑織文・沈線・ミガキ	ナデ	○	○	○				西平 36
211	G 3	Ⅲa	34176	XIX	胴部	良好	黄褐色	明黄褐色	磨滑織文・沈線・ミガキ	ミガキ	○	○	○				西平 36
212	J 5	Ⅲa	40212	XIX	胴部	良好	黄褐色	明黄褐色	磨滑織文・沈線・ミガキ	ミガキ	○	○	○				西平 36
213	I 3	Ⅲa	42844	XIX	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	沈線・ナデ	ナデ	○	○	○				縄文後期 36
214	J 3	Ⅲa	2539	XXI	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	ミガキ・沈線	ミガキ	○	○	○	○			上加世田 37
215	E 5	Ⅱb	38505	XXII	口縁部	良好	暗黄褐色	淡黄褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
216	E 3	Ⅲa	40553	XXII	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
217	F 4	Ⅲa	41201	XXII	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
218	J 5	Ⅲa	40194	XXII	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
219	H 5	Ⅲa	19036	XXII	口縁部	良好	暗褐色	茶褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
220	J 5	Ⅱa	6911	XXII	口縁部	良好	暗褐色	暗褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			入佐 37
221	G 3	Ⅲa	43038	XXIII	胴部	良好	黒褐色	暗褐色	ミガキ	ナデ	○	○	○	○			黒川 37
222	G 3	Ⅲa	24600	XXIII	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			黒川 37
223	H 4	Ⅲa	2712	XXIII	胴部	普通	暗褐色	茶褐色	ミガキ	ナデ	○	○	○	○			黒川 37
224	H 5	Ⅲa	14100	XXIII	口縁部	普通	暗褐色	暗褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○			黒川 37
225	J 5	Ⅲa	40237	XXIII	口縁部	普通	暗褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○			黒川 37
226	F 4	Ⅲa	40844	XXIII	口縁部	普通	暗褐色	茶褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○			黒川 37
227	H 5	Ⅲa	43858	XXIV	口縁部	普通	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○		白色粒	不明 37
228	F 3	Ⅱa	22624	XXIV	口縁部	良好	暗褐色	淡褐色	刺突	ナデ	○	○	○	○			不明 37
229	G 5	Ⅱa	11450	XXIV	胴部	良好	茶褐色	茶褐色	圧痕	ナデ	○	○	○	○			不明 37
230	J 5	Ⅲa	6819	XXIV	胴部	良好	淡赤褐色	黒色	条痕	ナデ	○	○	○	○			不明 37
231	G 2	Ⅲa	42206	XXIV	底部	良好	暗茶褐色	黒褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			不明 37
232	J 6	Ⅲa	25152	XXV	口縁部	良好	淡赤褐色	淡赤褐色	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○			不明 37
233	E 5	Ⅱb	38522	XXV	口縁部	良好	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	○	○	○	○			不明 37

3. III・IV層の石器

第38図～第57図は縄文時代の石器である。時期の区分については、取り上げの際の層の認定に疑問のあるものが少なくないことから、石器として一括して考察を加えることとした。

本遺跡から、石器は石鏃・石匙・削器・石槍・石錐・石錘・異形石器・玦状耳飾・礫器・軽石製品・剥片・石核・打製石斧・磨製石斧・石皿・研磨器・磨石兼敲石・敲石・凹石・磨石・細石核・原石と多数の剥片・細片が出土した。ここでは石器197点を図化または図版に掲載した。

また、石器の石材は黒曜石・安山岩・頁岩・チャート・ホルンフェルス・タンパク石・石英・軽石等あり、黒曜石については目視による観察から以下の8種類に類別した。

- I類 ガラス質が強く光を通す。透明に近いものと黒色が強いものとが見られるが、気泡・不純物を共に含む。三船産黒曜石に類似する。
- II類 不透明な暗灰色で風化面は黄褐色になる。不純物をほとんど含まない。
- III類 不透明で艶のない黒色を帯び、部分的に褐色の縞模様が入る。上牛鼻産黒曜石に類似する。
- IV類 不透明で艶のある黒色を帯び、不純物をほとんど含まない。
- V類 暗灰色で梨肌を呈する。不純物をほとんど含まない。長崎県針尾島産黒曜石に類似する。
- VI類 艶があり、黒色で滑らかなガラス質を呈する。
- VII類 真っ黒で艶はあるが光を通さない。気泡や不純物を多量に含む。日東産黒曜石に類似する。
- VIII類 白灰色の磨りガラス状である。大分県姫島産黒曜石に類似する。

石鏃（第39・40図 234～304）

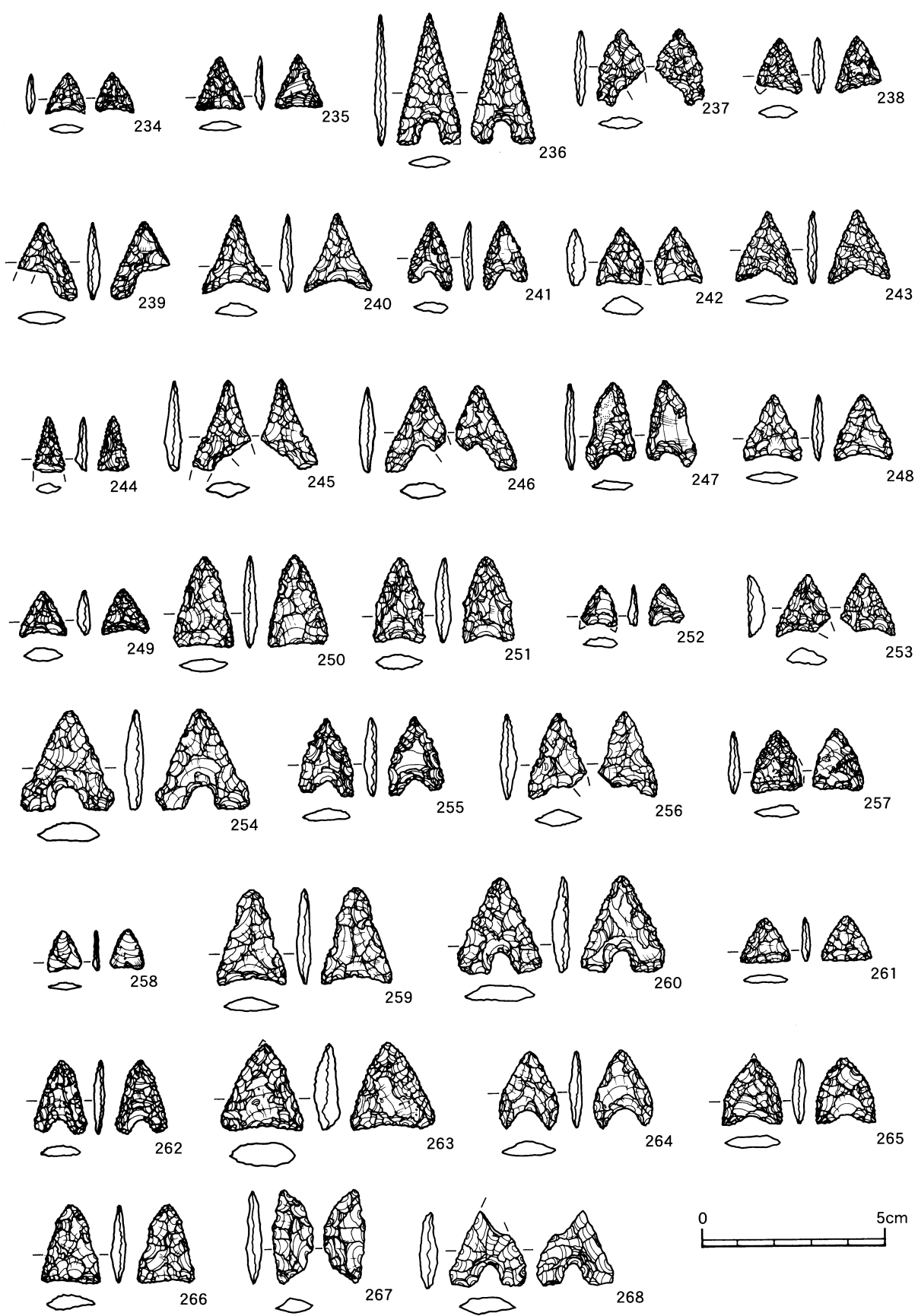
234～304は石鏃である。234と235・242・249・258・261は小型の三角形鏃である。234と258は殊に小さく、全長は共に1.10cmであり、後者は最大幅は0.90cmに過ぎない。早期前半に位置付けられている。その他は前期以降のものと考えられ、形状もさまざまである。236は全長が3.60cmもあり、早期の小型の三角形鏃とは対照的である。凹基式、平基式、長脚鏃など基部もバラエティーに富んでいる。247は裏面に広い剥離面が見られることから剥片鏃と考えられる。255は脚部の形が左右で異なる。263は最大厚が0.70cmであり、厚いものである。285と286は五角形鏃として捉えられる。289と298も剥片鏃といえよう。293は左右が非対称となるものである。295は長脚鏃である。287は基部が割合に大きく凹み、全体の形状は丸みを帯びている。

石匙（第41図 305～311）

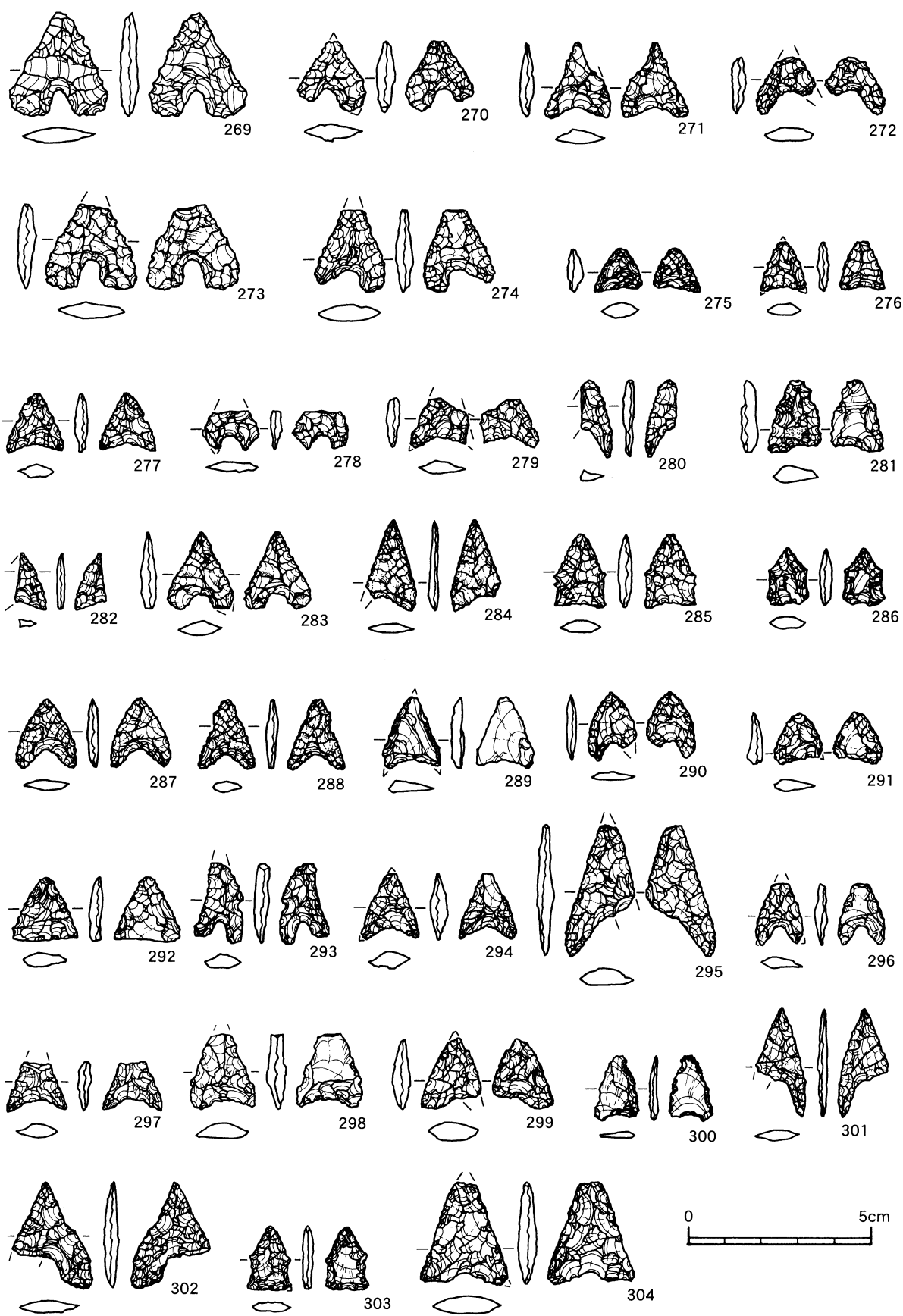
305～311は石匙である。305・309・311は横長、それ以外は縦長の石匙と考えられる。305は最大幅が10.20cmもある長いものである。安山岩集積遺構内出土の石材が類似することから同一母岩の可能性もある。306は一部自然面の残る抉りの小さい剥片利用のものである。307は最大厚が1.65cmある非常に厚いもので、側面の一部には自然面が残っているのが見られる。308は剥片を用いて極めて簡易に作ったと考えられる石匙である。309は破片であるが、形状が石鏃とは異なることから石匙の刃部と推定した。311も両端部が折損しているが、その形状から石匙と判断した。305とは異なったタイプの横長の石匙といえるかも知れない。

削器（第42・43図 312～329）

312～329は削器である。剥片を利用した313や314のようなものと、316のように石塊を用いたよ



第39図 石鏃(1)



第40図 石鏃(2)

うなものなどが見られる。形状もバラエティーに富んでおり、使用された部分もさまざまである。321は先端部の欠損した石槍のようにも見えるが、下部を使用していることから削器と判断した。325は四角形の剥片の1辺を調整して削器としたものである。326は丁寧な作りによって削器としてゐる。328と329には一部に自然面が残る。

石槍 (第44図 330~336)

330~336は石槍である。330~332は特に丁寧な作りの石槍である。全長が3~4cmあるものが多いが、335は6.70cmの長さがあり、本遺跡出土のものとしては最大のものである。334は破片であるが調整の手法などにより、石槍と判断したものである。

石錐 (第44図 337)

337は石錐である。本遺跡出土のものとしては、唯一のものである。全長は4.20cmあり、先端は3mm程度である。

石錘 (第44図 338・339)

338と339は石錘である。前者は礫の長軸方向の両端を欠いたうえに、1平面に十字の凹みを最初は縦方向に、その後横方向にいずれも浅く入れることによって抜け落ちるのを防いでゐる。後者は短軸方向の両端を打ち欠いている。重さは前者が17.20g、後者は38.00gと差異が顕著であるが、これは固定する網の大きさや重さなどによるものと考えられる。

玦状耳飾 (第44図 340) 縦長の玦状耳飾で半欠となっている。長さは10.90cm、現存幅は2.70cm、最大厚は0.40cmの蛇紋岩製である。折れ口は丁寧に磨いている。

異形石器 (第44図 341) 341は異形石器である。黒曜石製で、3方向に突起がある。

剥片 (第45図 343・344) 343と344は剥片である。いずれも一方の面に剥離面が残っている。

軽石加工品 (第45図 345) 345は軽石の加工品と考えられる。軽石の自然礫を拾ってきて、多少磨るなどの加工が施されているようにも思われる。

石核 (第46・47図 346~352)

346~352は石核である。石材は針尾島・上牛鼻産類似の黒曜石に加えて鉄石英やチャートも見られ、さまざまなものを用いている状況がわかる。ただ、形状はいずれも立方体に近い形をしているものがほとんどであることから、利用する剥片の取り方には傾向性が見られることが考えられる。

磨製石斧 (第48図 353~364)

353~364は磨製石斧である。形状が整って規格性のあるものが多いものの、中には358のようにゆるい弧状の自然礫を用いて、局部的に磨って石斧としたものも見られる。撥形に刃部が開くもの、刃部のみで基部を欠くものなど、使用により折損あるいは欠損したものも多く見られ、時期差を表している可能性がある。

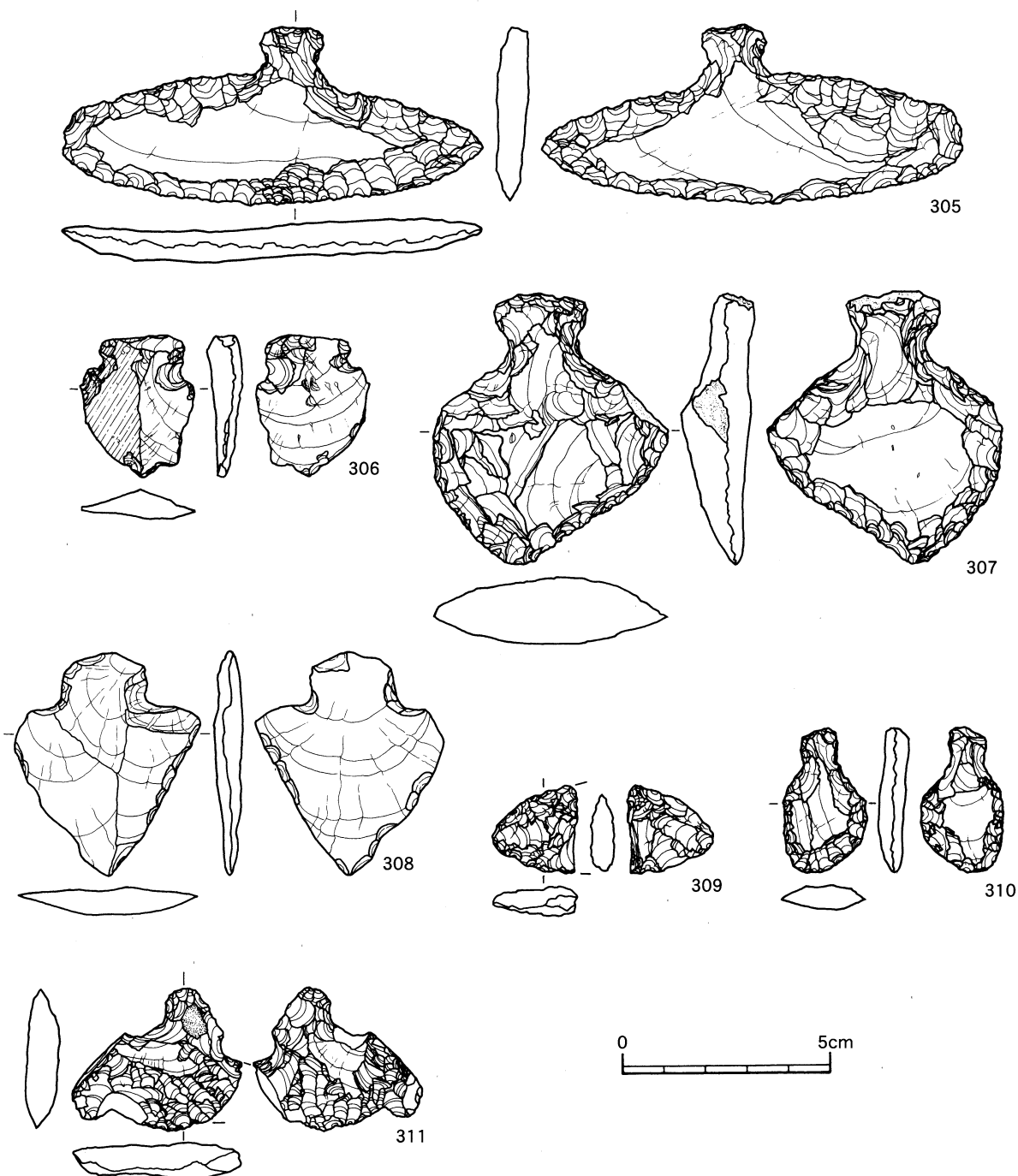
打製石斧 (第49~51図 365~390)

365~390は打製石斧である。石材は安山岩または頁岩が用いられており、統一性が考えられるものの、形状は撥形、棒状、靴形などバリエーションが豊富である。365と366は刃部が撥形に開くタイプである。前者は基部を、後者は刃部を欠損する。367と368も同様のタイプと考えられるが、367は全長が11.60cmと365などに比べると割合に小型である。369と370は棒状のタイプである。いずれも途中で折損していることから、使用によるものと考えられる。371~390は基部と刃部の途中

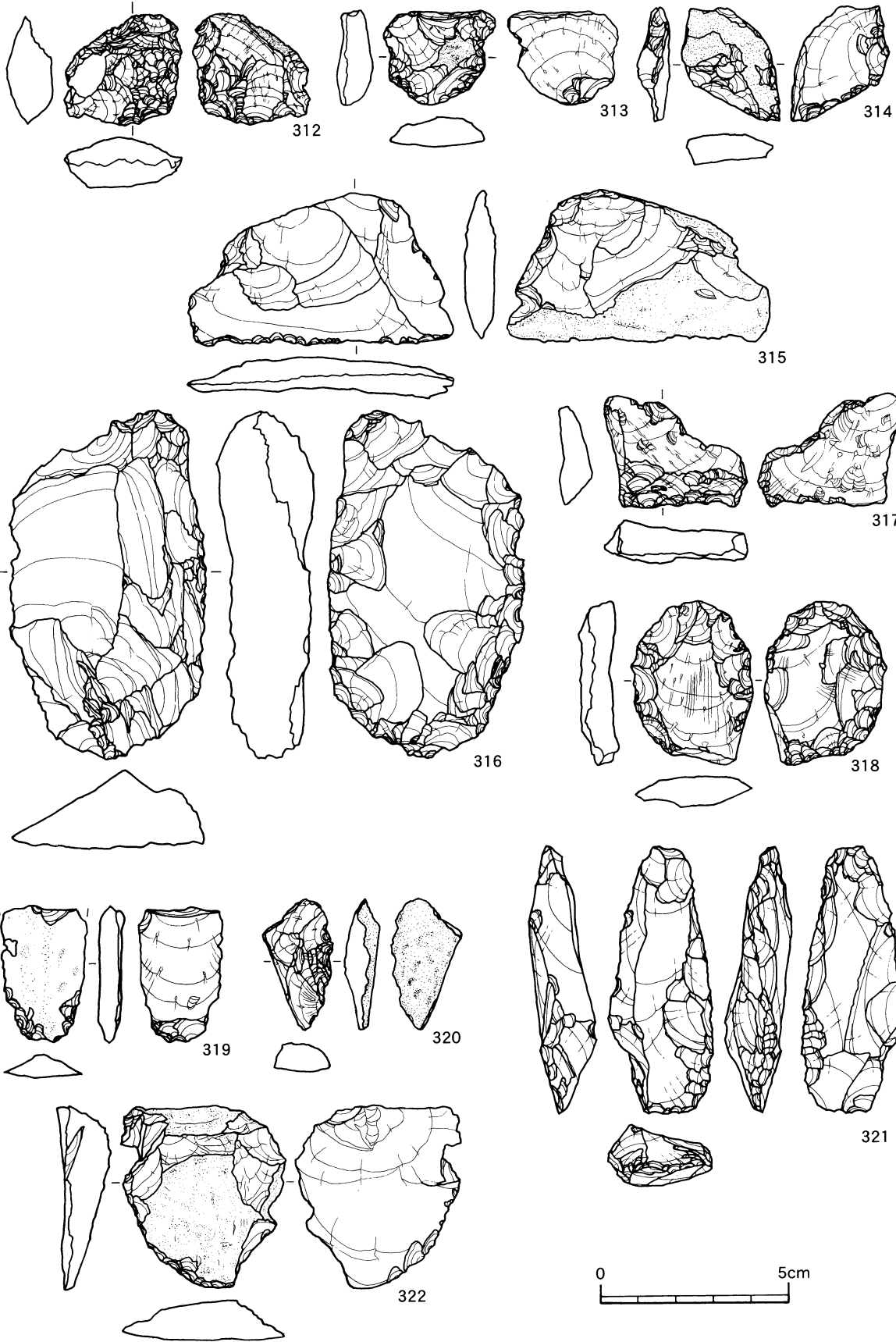
に挟りがあり、形状としては靴形を呈する。刃部が大きく開くもの（371～373など）のほか、基部と刃部の最大幅がそれほど変わらないもの（374～379など）、384などのように基部と刃部に角度が付いているものなどがある。また、389のように刃部の先端を欠くものも見られる。

石皿（第52・53図 391～397）

391～397は石皿である。中には破損により砥石のように見えるものもあるが、使用面が凹んだり凹みの形状が直線的でなく、弧状であることなどから石皿と判断した。使用面はそれほど凹んでい



第41図 石匙



第42图 削器(1)

ないことが特徴と言えるかもしれない。割合に安定した、底面の平たい石材を使用しているが、そのほとんどが破損しており、使用によるものなのか、また、大きく破砕したものの転用なのかは判然としない。

研磨器 (第53図 398)

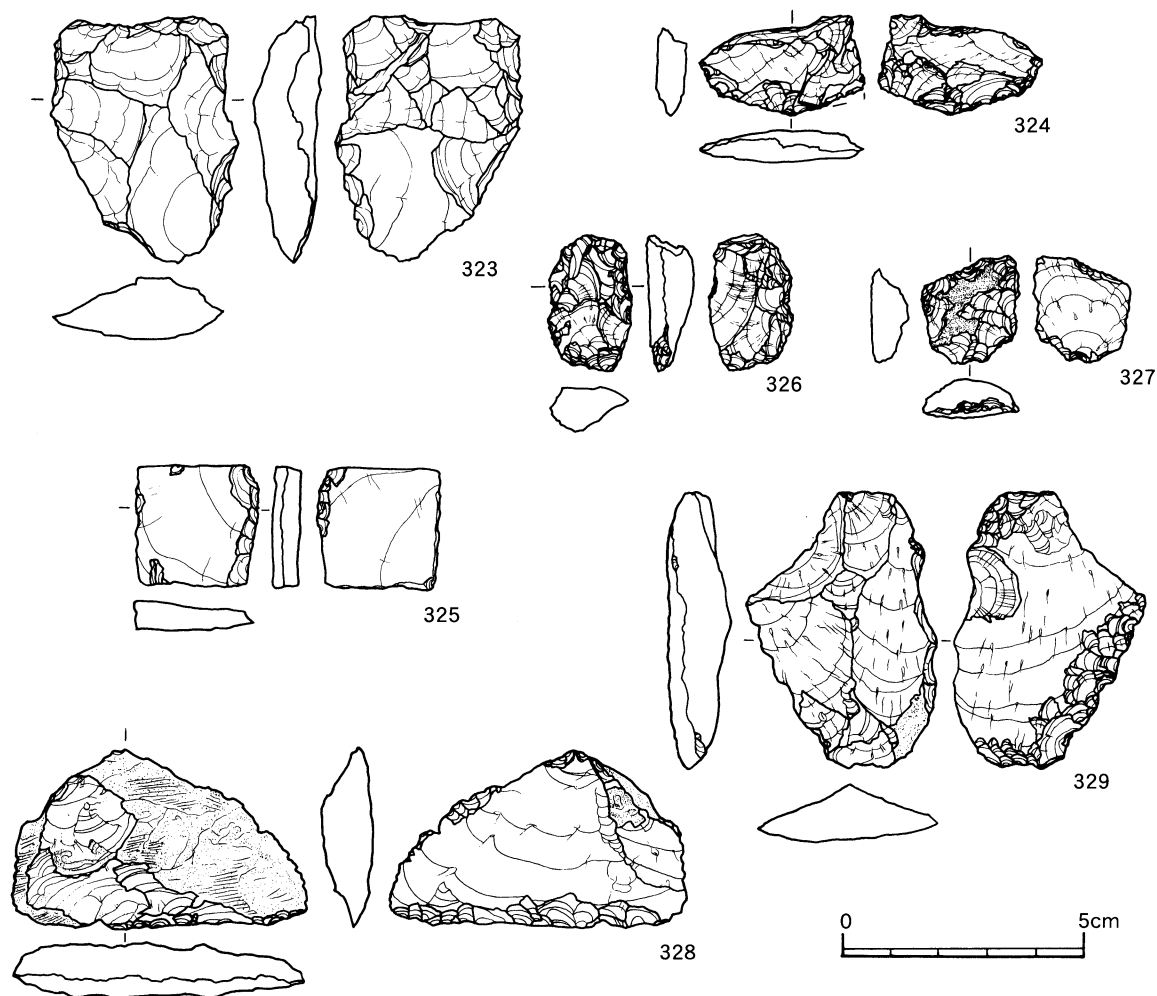
398は研磨器と考えられるもので、安山岩製である。表裏2面を主に使用しており、欠損品ではあるが、幅はこの程度であると考えられることから、それほど大きなものの研磨に使用されたとは考えにくい。

礫器 (第45図 342・第53図 399・400)

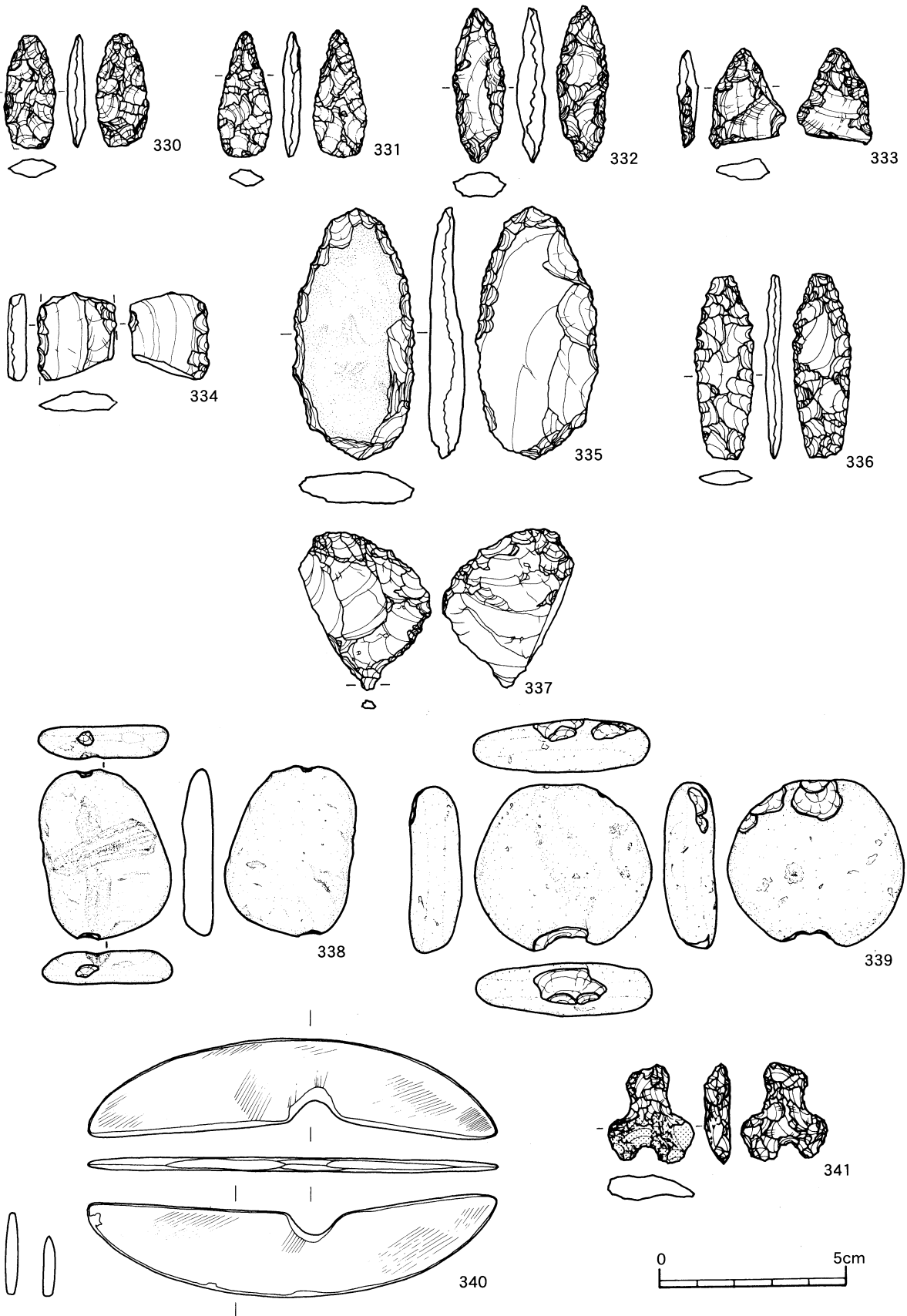
342と399と400は礫器である。342は礫器が中心部分で折損したものが接合したものである。399と400は円礫あるいは角礫の一辺を加工して刃をつけて使用したものと推定される。400は基部を欠くものか不明確ではなく、この形状の角礫に刃部を付けて使用したものの可能性もある。

磨石兼敲石 (第54・55図 401~405)

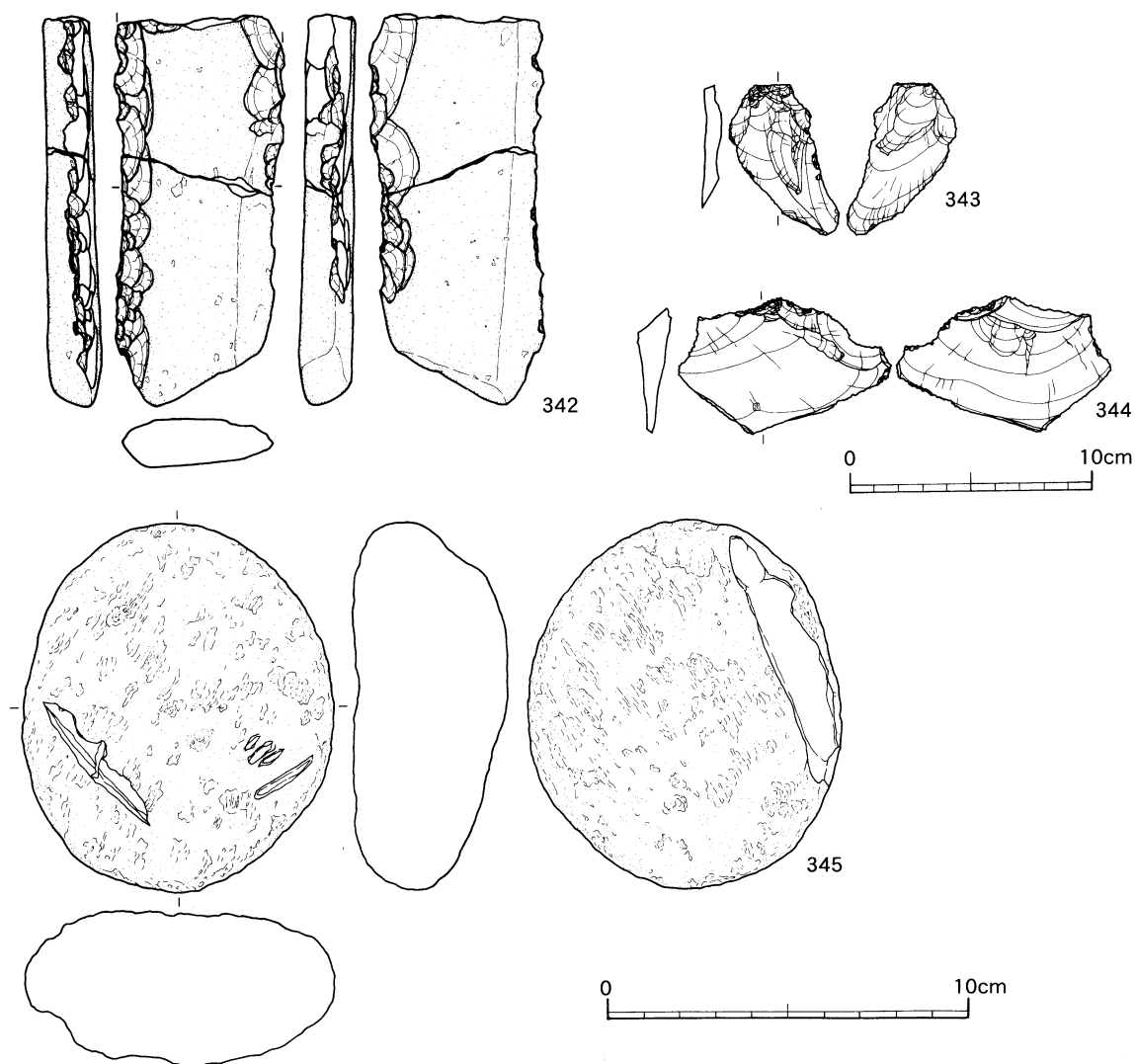
401~405は磨石を兼ねた敲石である。基本的に円礫の広い面を磨石として使用し、側面を敲打して敲石とする。404は楕円形の礫を用いており、長軸方向の両端とそれに続く側面を部分的に敲石



第43図 削器(2)



第44図 石槍・石錐・石錘・玦状耳飾・異形石器



第45図 礫器・剥片・軽石

として使用し、広い面の全面及び一方の斜面を磨石として使用している様子が観察される。

磨石 (第55図 406~410)

406~410は磨石である。円形及び角の取れた角状の礫を用いており、中には406のように火熱によってヒビの入っているものも見られるが、これは磨石としての使用後に火中に投げられたか、集石の一部として転用されたものと考えられる。

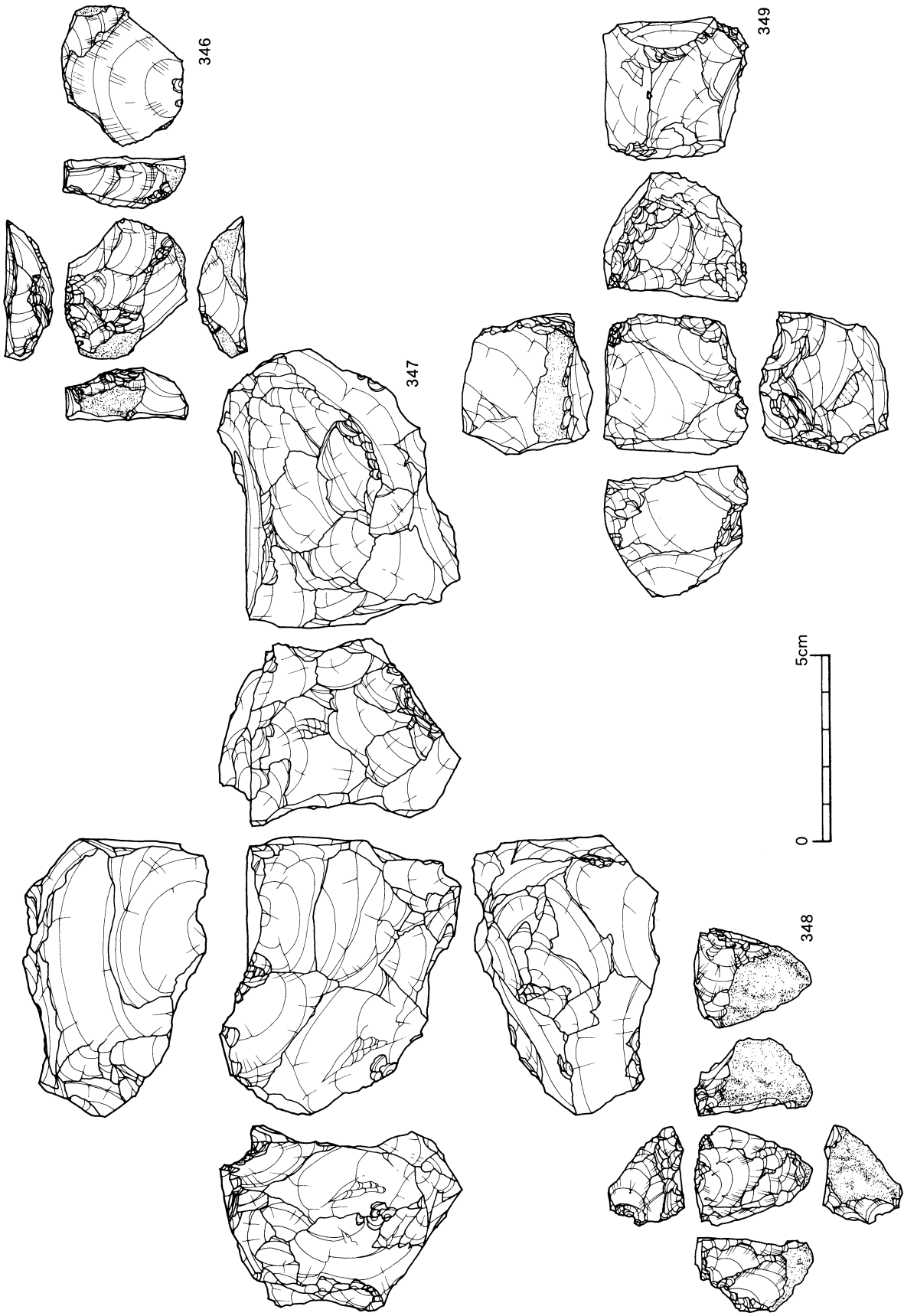
凹石 (第56・57図 411~415)

411~415は凹石である。自然の円礫を用いて、広い面を連続的に敲打することで凹んだと考えられ、凹みの深いものも見られる。

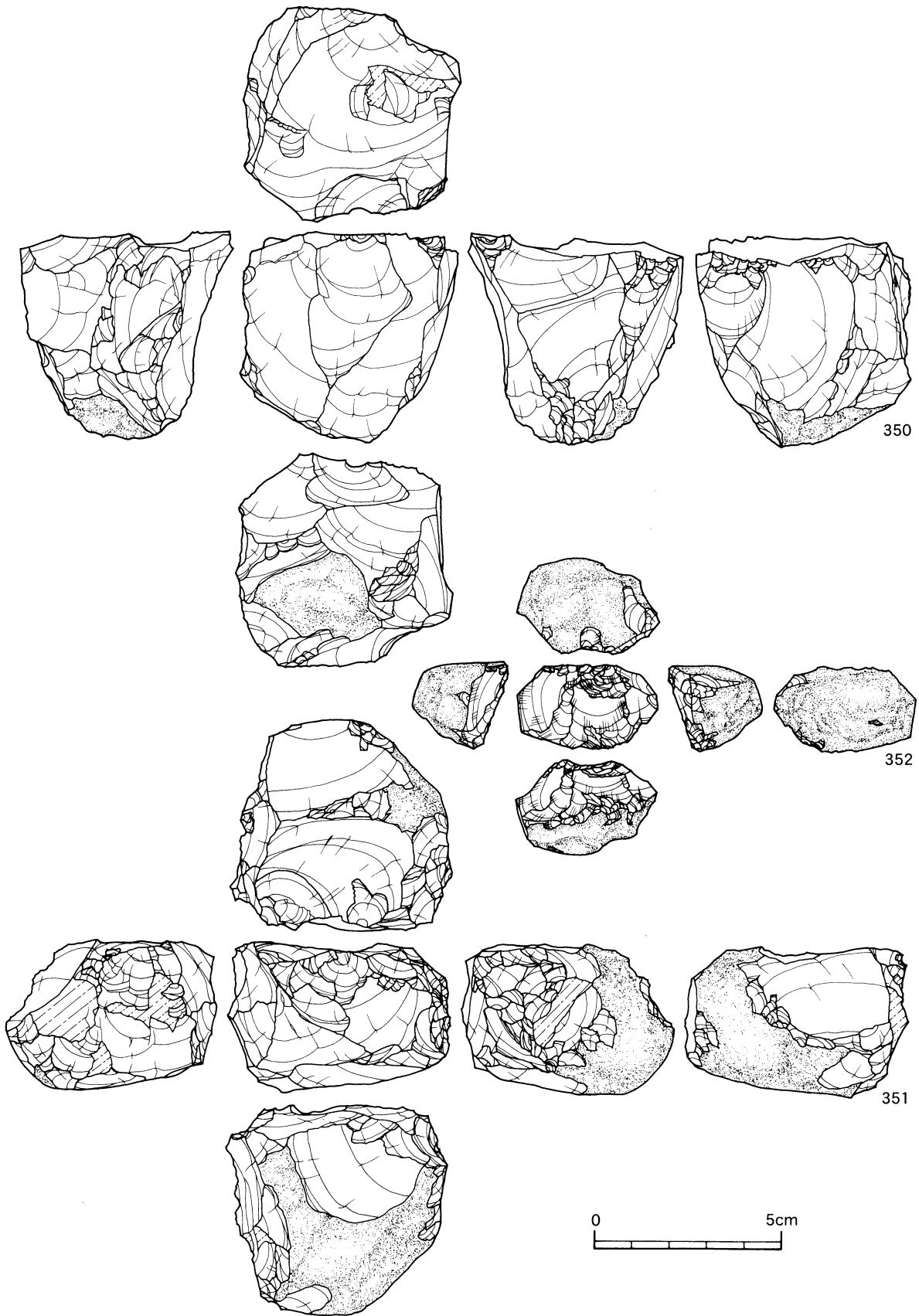
敲石 (第57・58図 416~421)

416~421は敲石である。短い棒状の円礫を使い、長軸方向の両端を主として利用し、部分的には広い面も一部敲打しているようすが見られる。419~421は石英製の敲石である。いずれも小型で数か所の使用痕を持ち、剥片石器製作用とみられる。

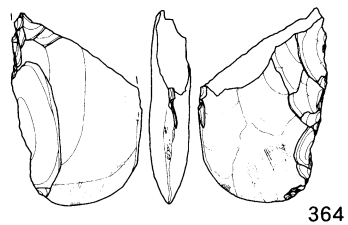
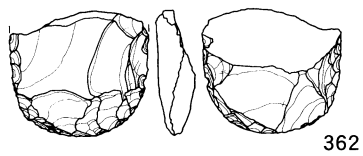
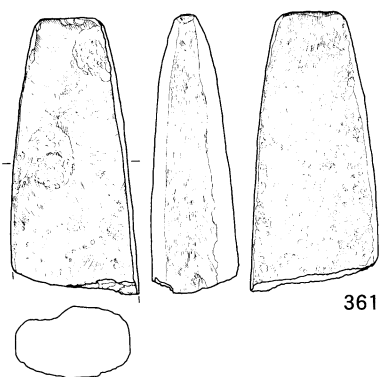
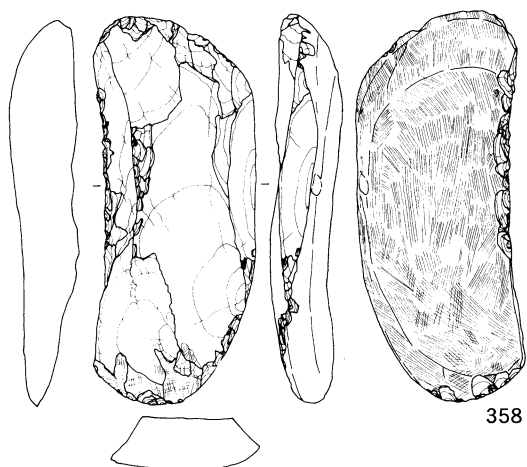
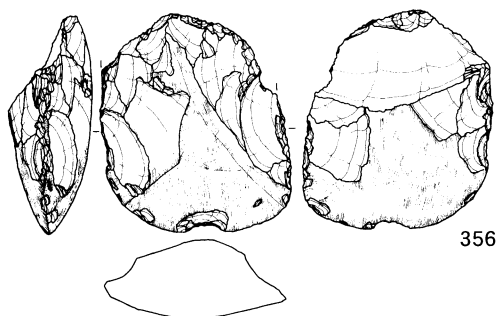
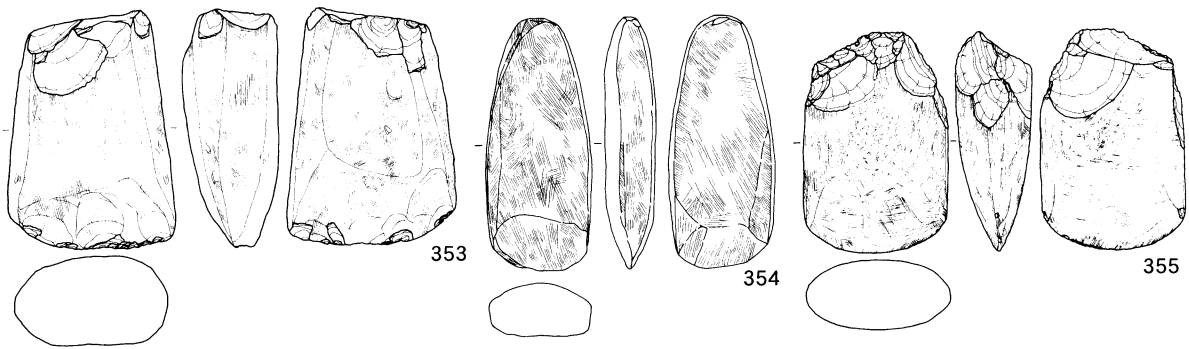
その他の石器 (第57図 422・第58図 423)



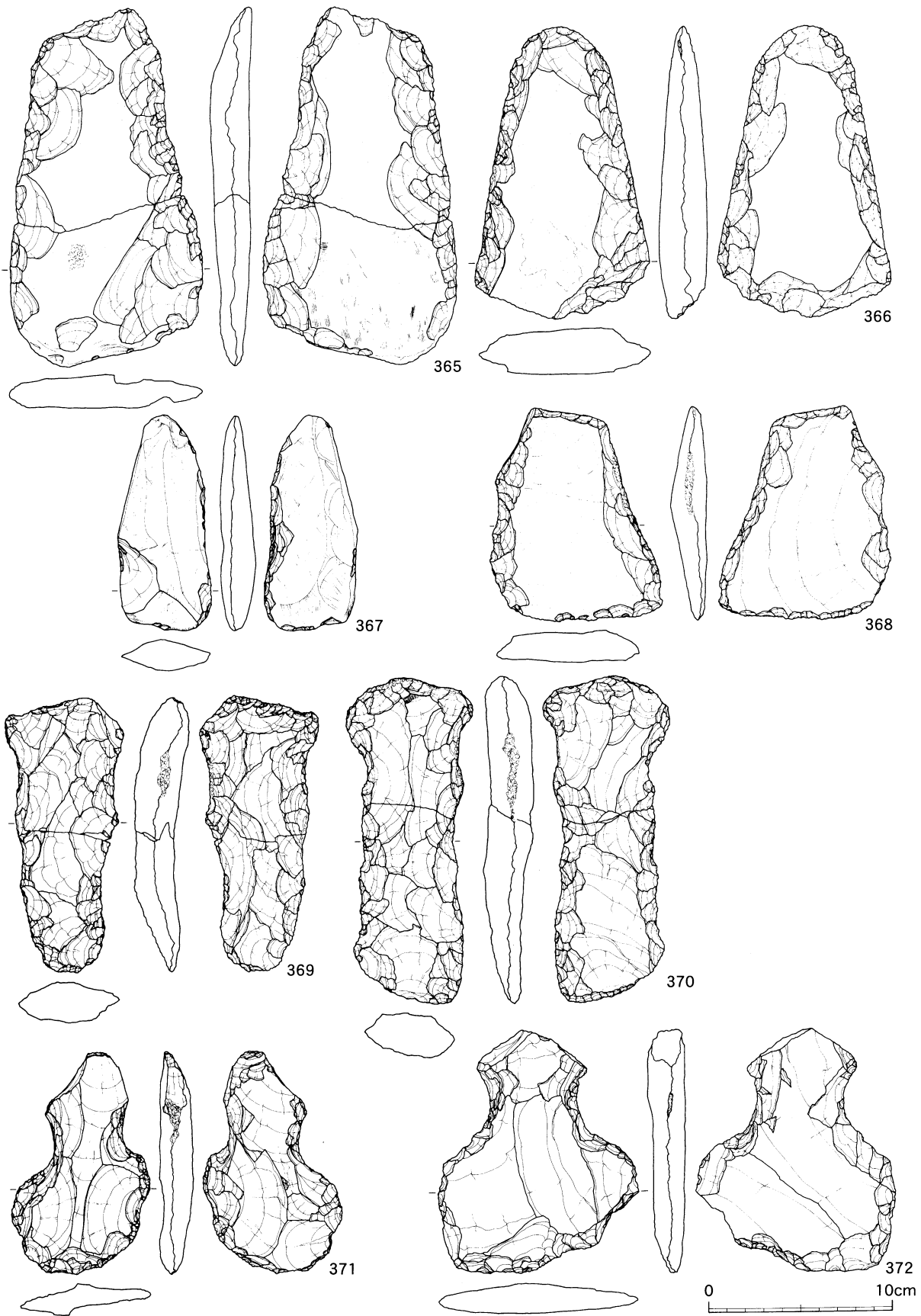
第46图 石核(1)



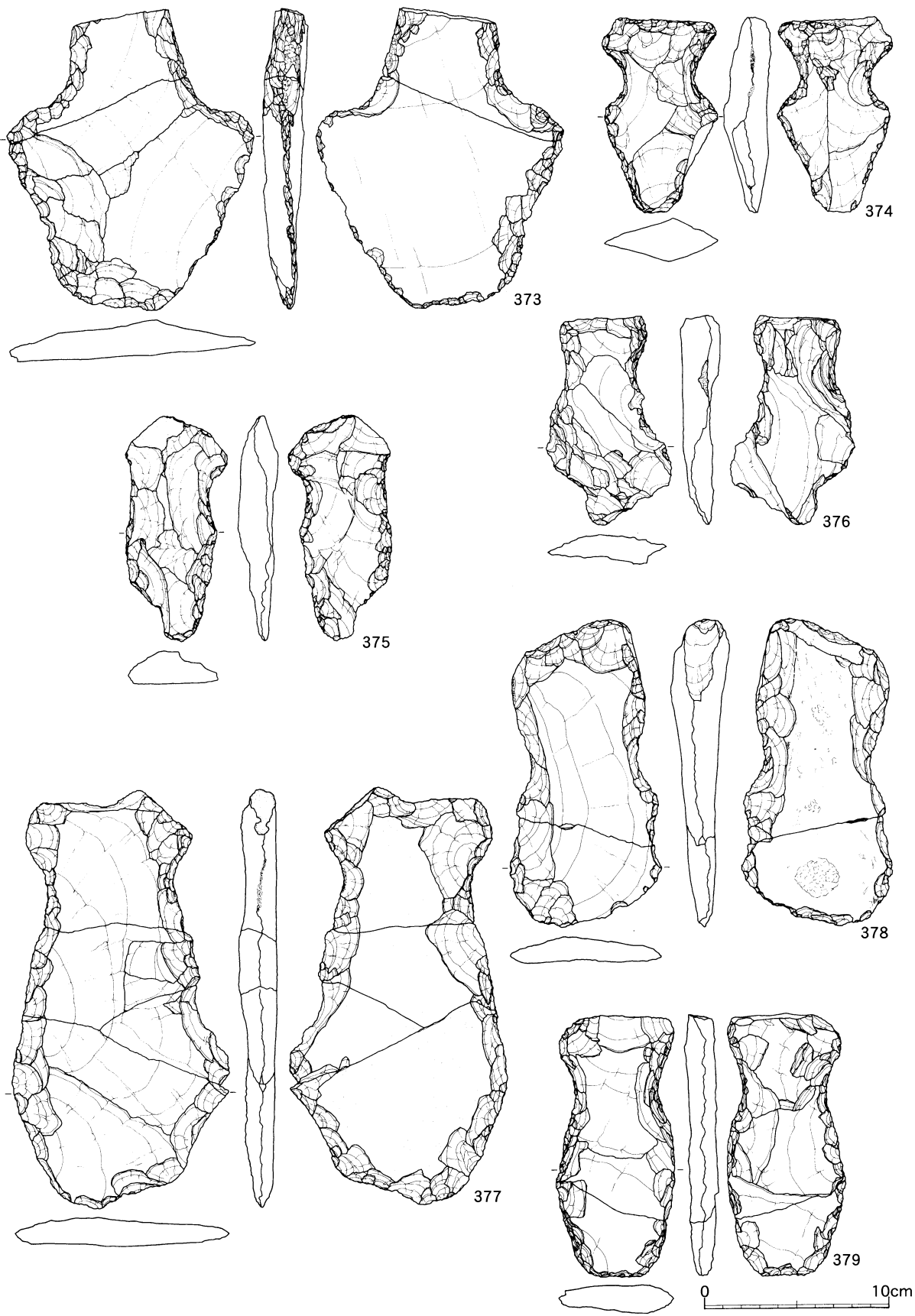
第47図 石核(2)



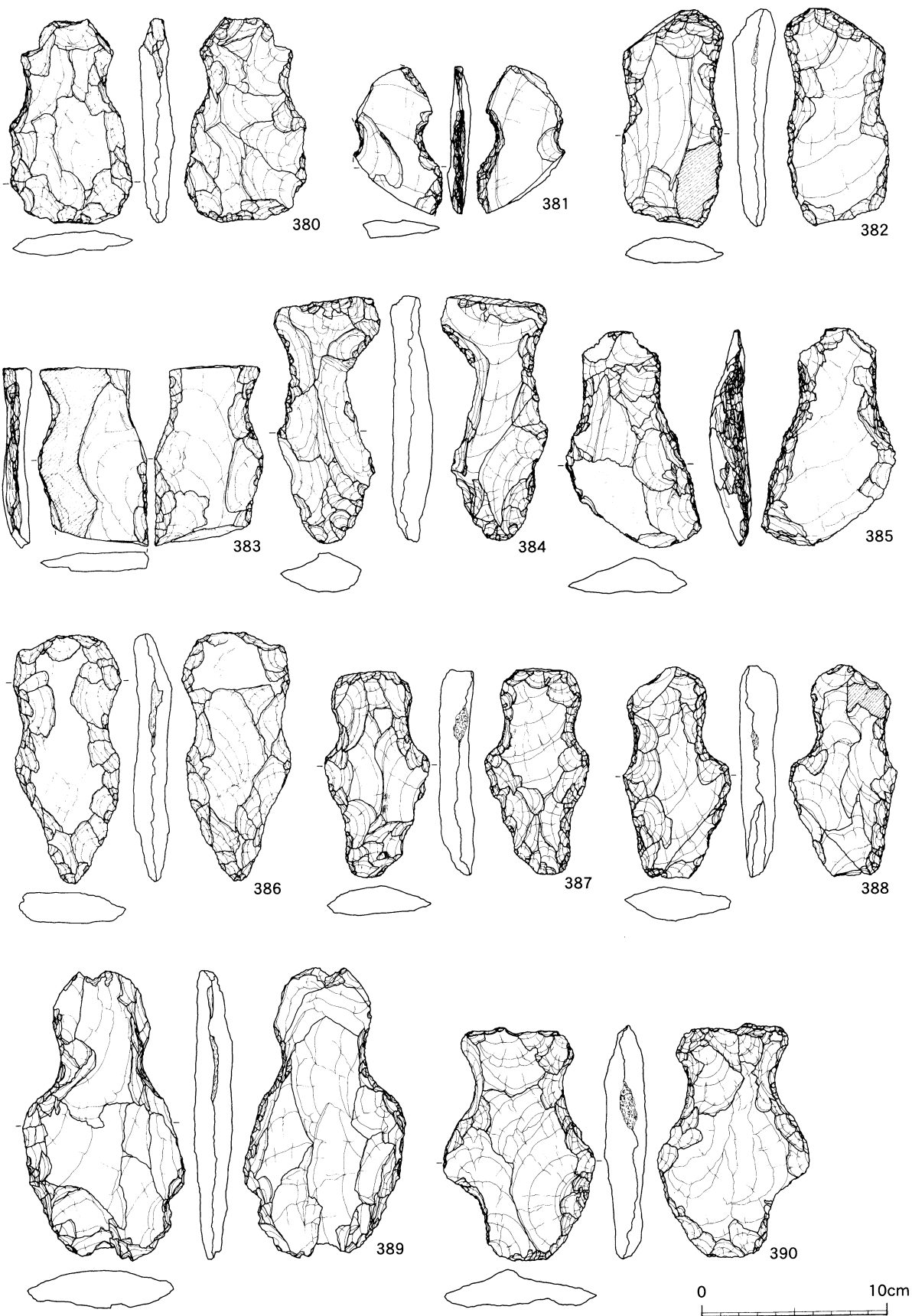
第48図 磨製石斧



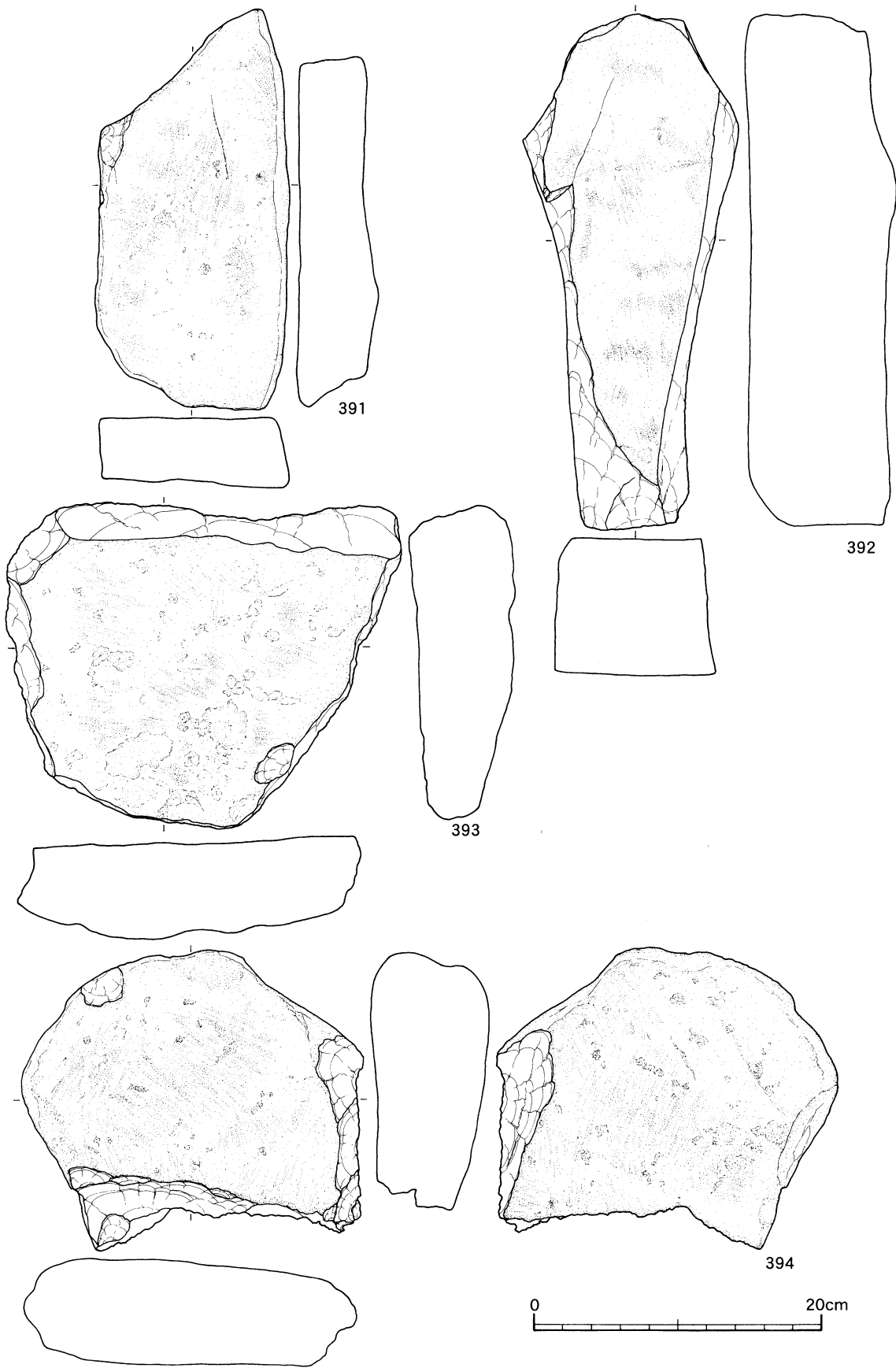
第49図 打製石斧(1)



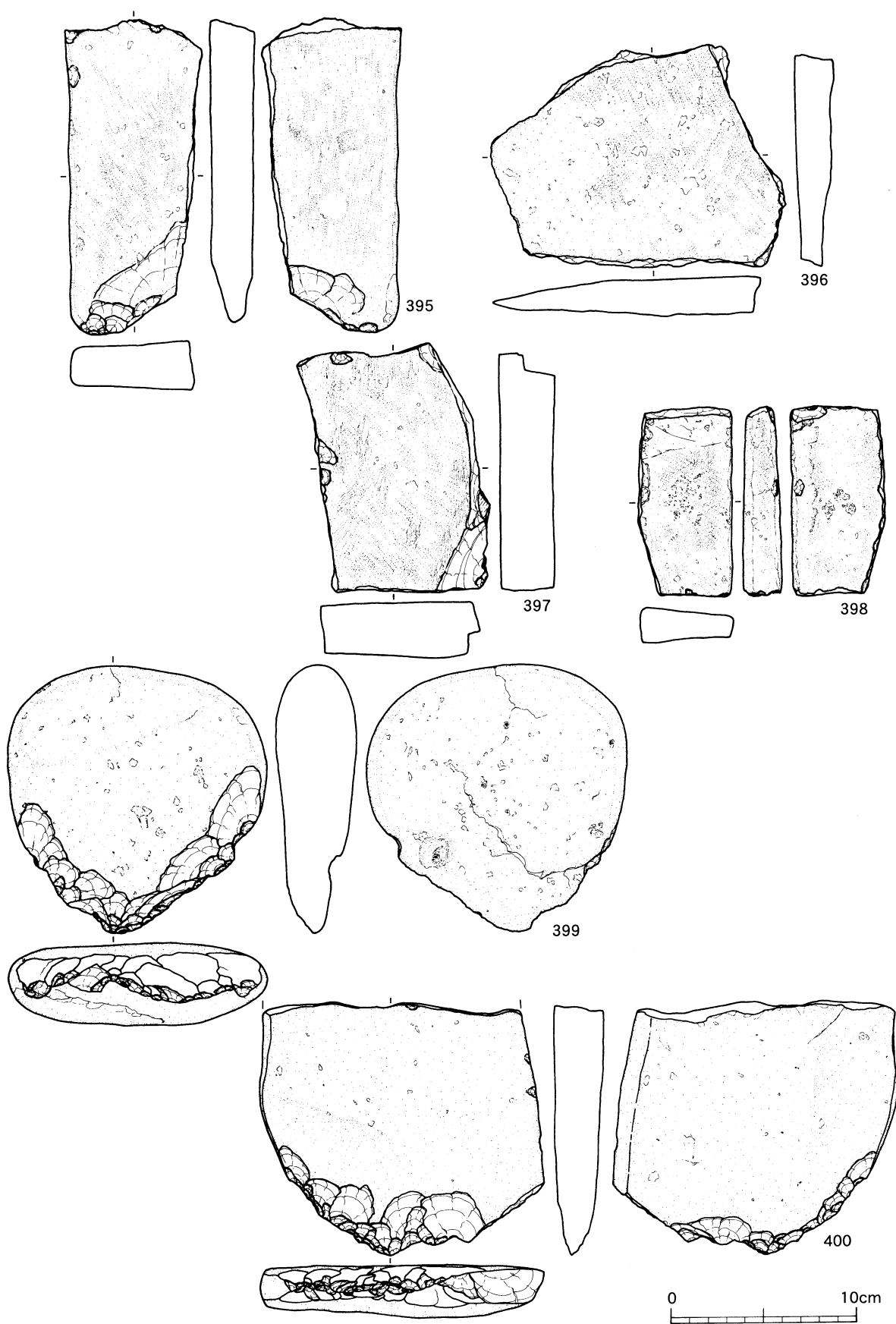
第50図 打製石斧(2)



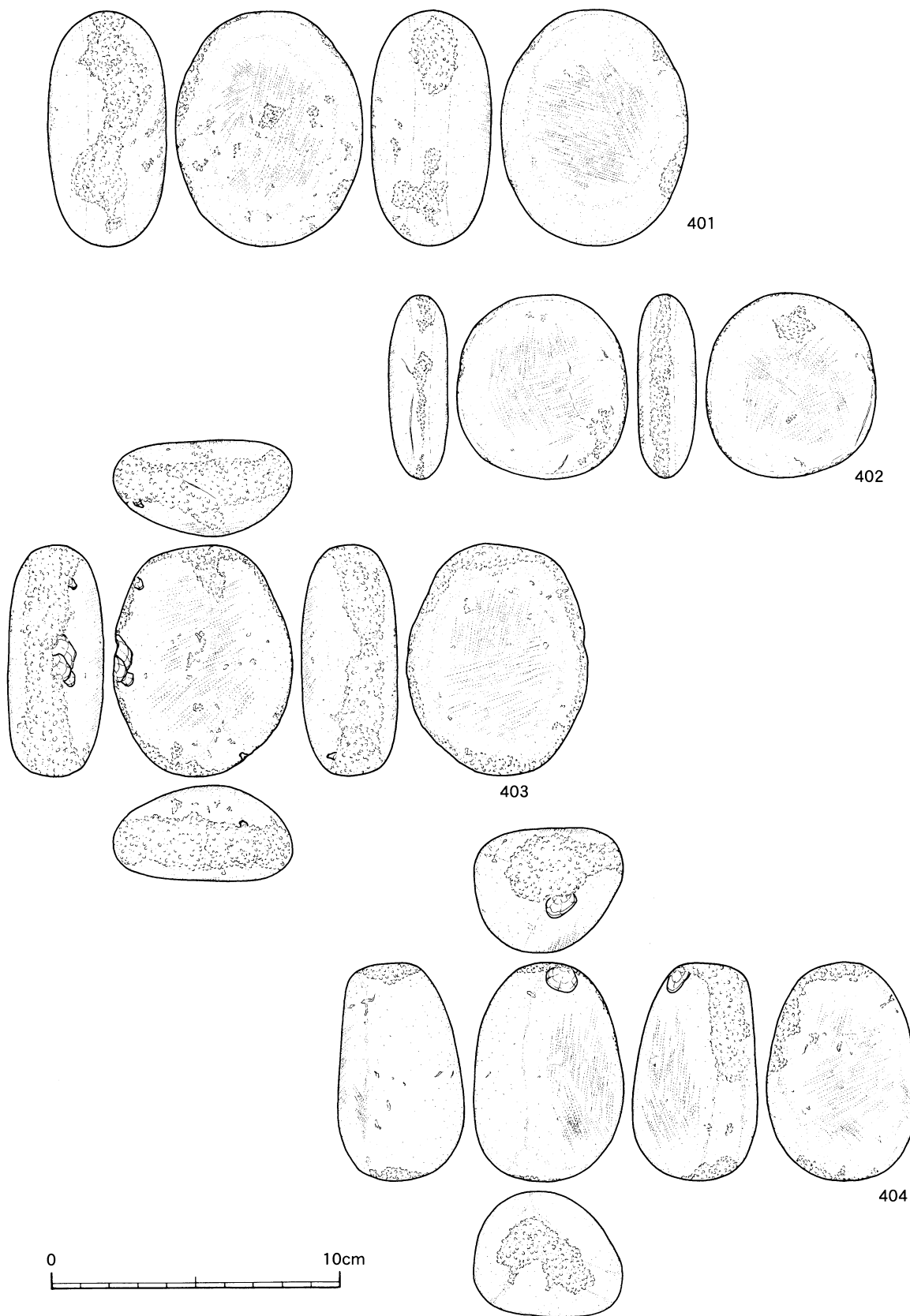
第51図 打製石斧(3)



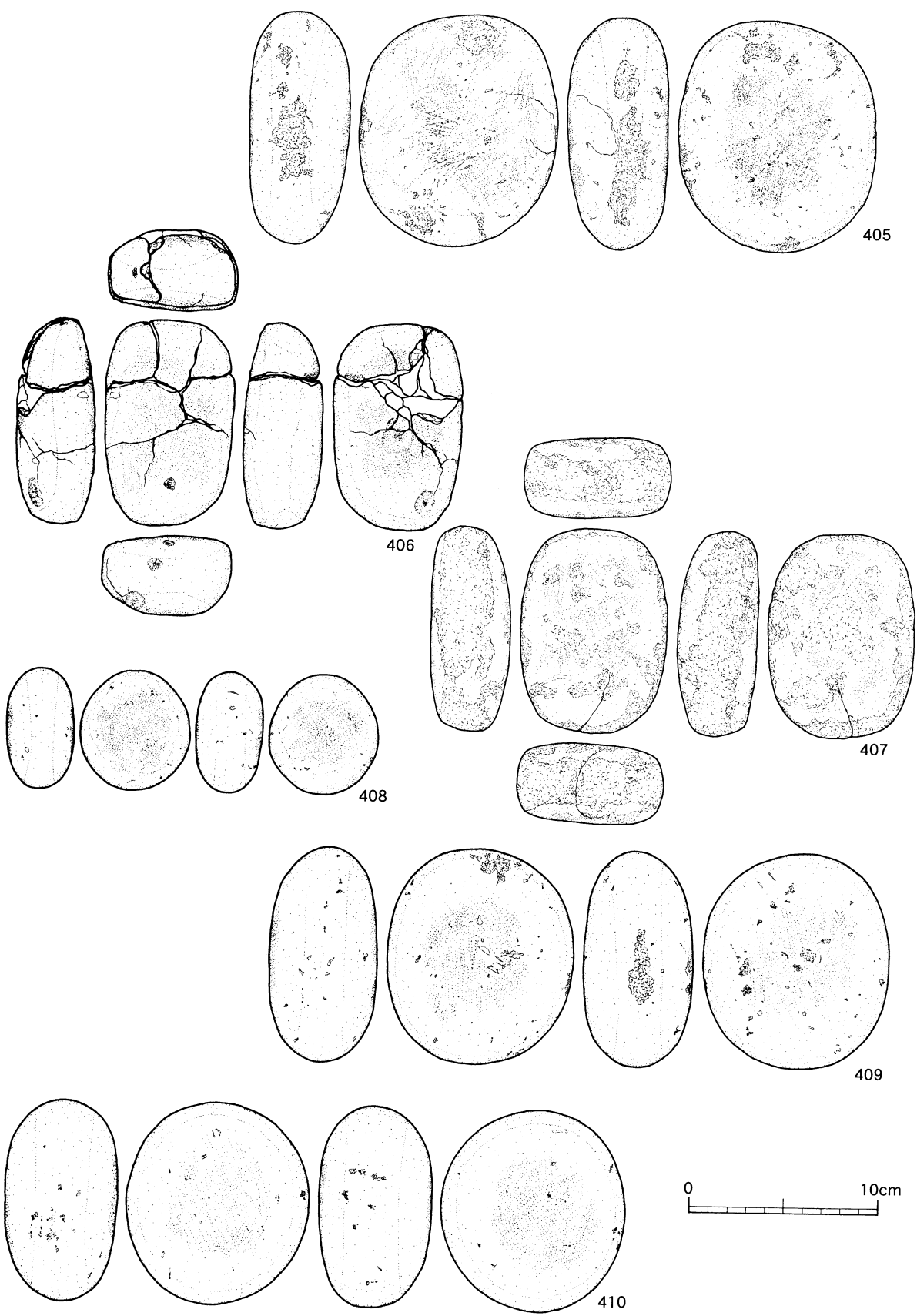
第52図 石皿(1)



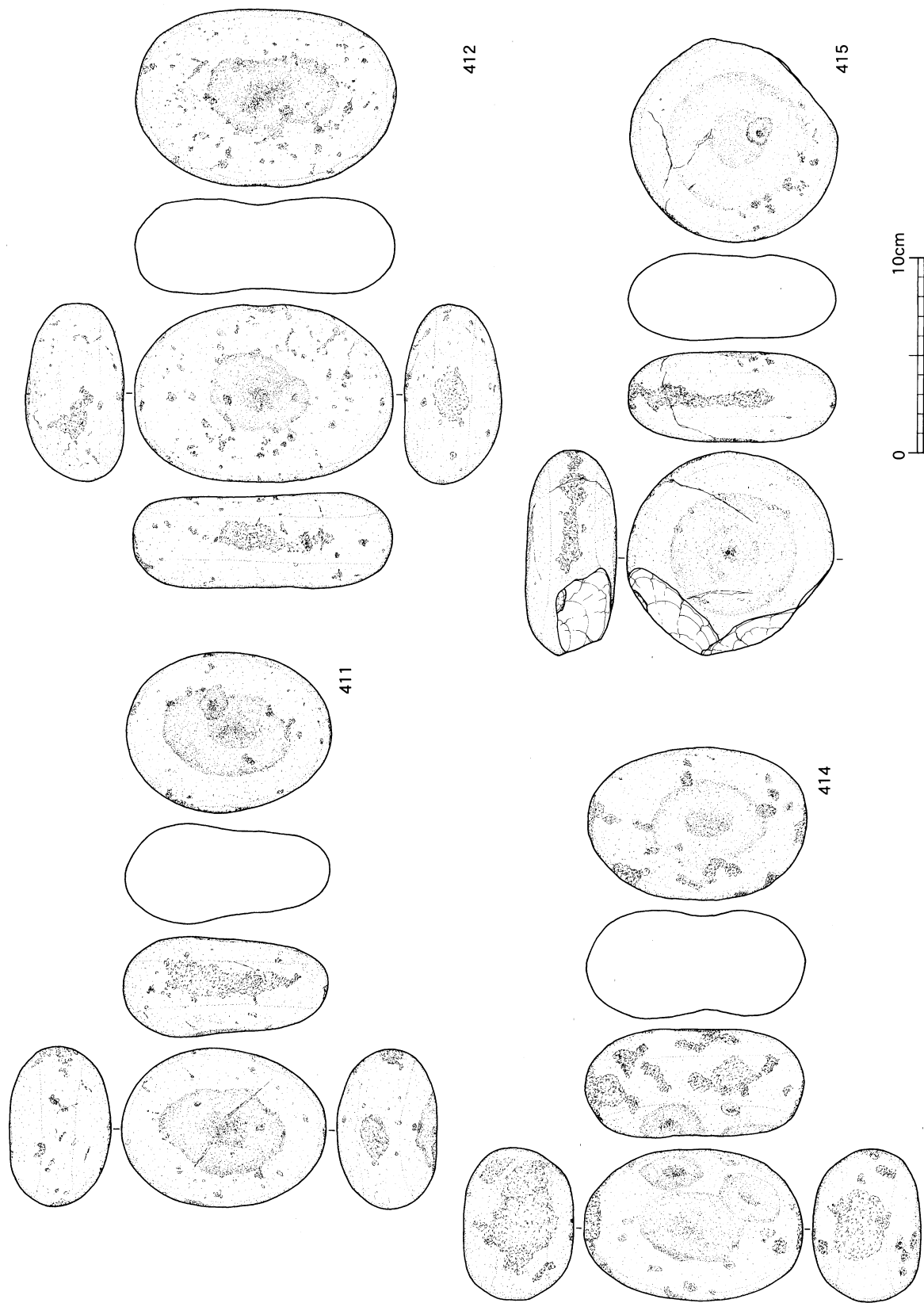
第53図 石皿(2)・研磨器・礫器



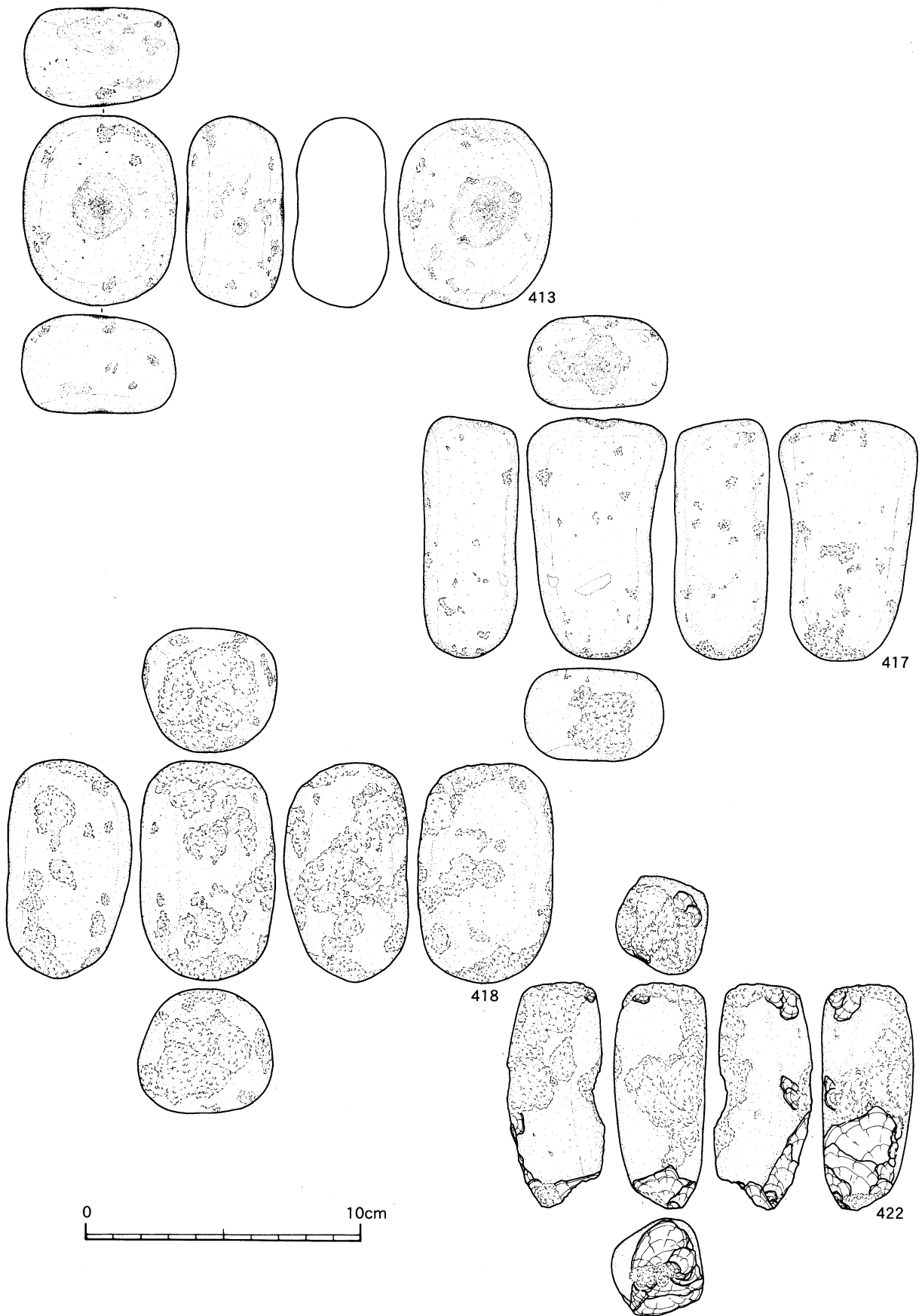
第54図 磨石兼敲石(1)



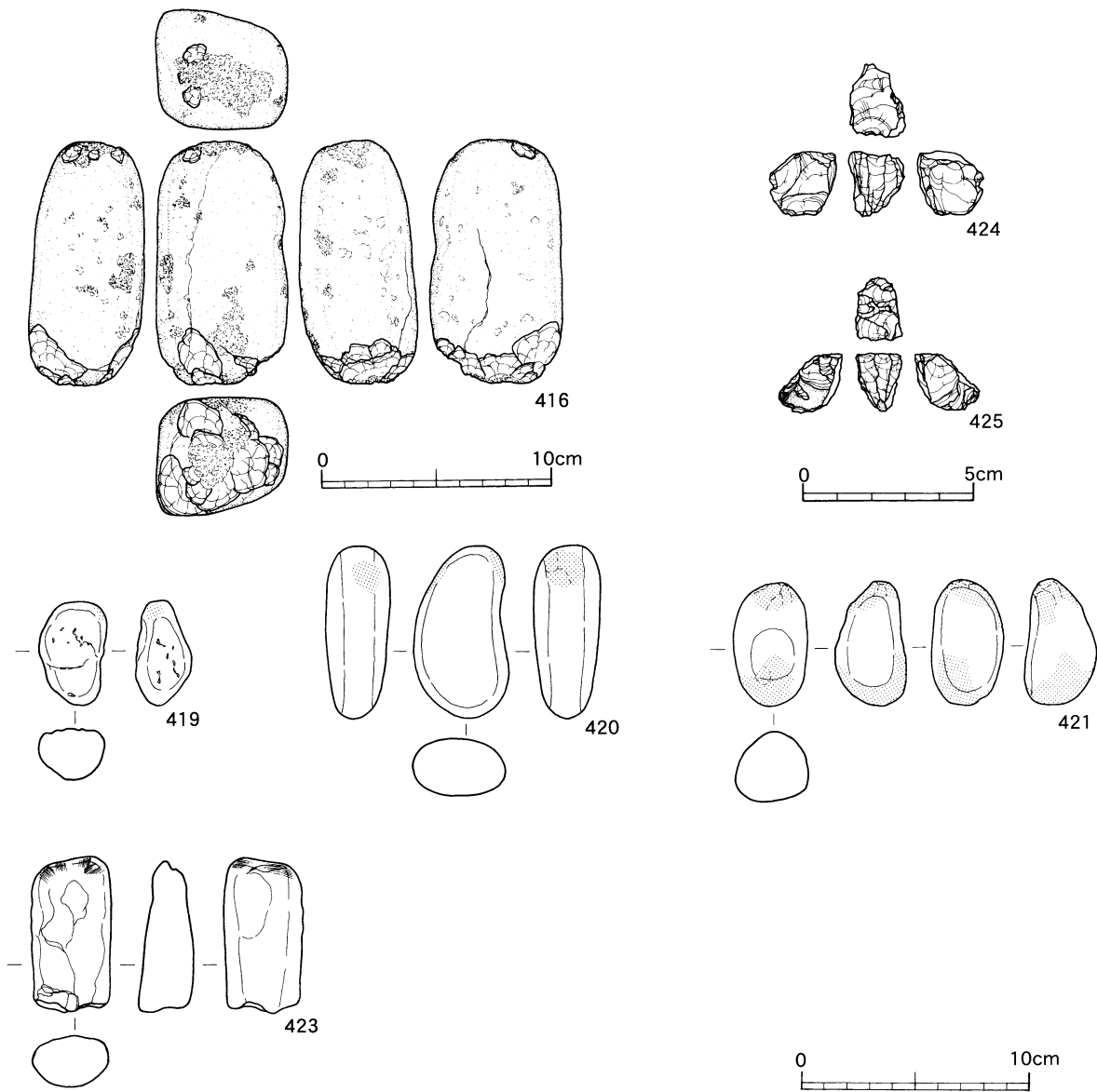
第55図 磨石兼敲石(2)・磨石



第56図 凹石(1)



第57図 凹石(2)・敲石(1)・その他の石器



第58図 敲石(2)・細石核・用途不明石器

422は敲石の長軸の一方に刃部を付けている。敲石からの転用と考えられる。423は蛇紋岩製の用途不明石器である。全体に手ずれのような光沢があり、先端部に微細な研磨痕をもつ。

細石核 (第58図 424・425)

424と425は旧石器時代のものと考えられる細石核である。桑ノ木津留及び上牛鼻産の黒曜石製である。

原石 (図版49 426～430)

426～430は図版のみの掲載であるが、水晶の原石である。426は柱状で両尖端部にわずかな欠損がみられるが、人為によるものか判別できなかった。427から430は白色の円礫である。430は紫水晶が観察できる。

第9表 III・IV層石器観察表(1)

遺物番号	区	層	注記番号	器種	石材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	挿図
234	F11	VI	39169	石鏃	黒曜石I類	1.10	1.10	0.25	0.20		39
235	G11	V	38617	石鏃	黒曜石I類	1.50	1.30	0.29	0.30		39
236	F3	IV	41863	石鏃	黒曜石II類	3.60	1.70	0.30	1.10	鋸歯	39
237	F16	IIIa		石鏃	黒曜石IV類	2.10	(1.30)	0.30	(0.60)		39
238	I5	IIIb	41162	石鏃	黒曜石III類	1.60	(1.25)	0.30	(0.40)		39
239	H5	IIIa	19545	石鏃	黒曜石II類	2.20	(1.60)	0.38	(0.60)		39
240	G4	IIIa	3032	石鏃	安山岩	2.10	1.80	0.40	0.60		39
241	H4	IIIa	44526	石鏃	黒曜石II類	1.90	1.20	0.30	0.40	鋸歯	39
242	H4	IIIa	44663	石鏃	黒曜石III類	1.60	(1.30)	0.50	(0.80)		39
243	H6	IIIa	19482	石鏃	チャート	2.00	1.70	0.30	0.50		39
244	H5	IIIa	20566	石鏃	黒曜石I類	(1.50)	(0.80)	0.32	(0.20)	鋸歯	39
245	I5	IIIa	41406	石鏃	黒曜石II類	(2.50)	(1.60)	0.50	(0.80)		39
246	H3	III	42809	石鏃	黒曜石II類	2.30	(1.60)	0.40	(0.90)		39
247	J5	IIIa	40265	石鏃	黒曜石I類	2.40	1.38	0.28	0.60		39
248	G4	IIIa	42974	石鏃	安山岩	1.80	1.60	0.30	0.50		39
249	H5	IIIa	43823	石鏃	黒曜石III類	1.20	1.28	0.38	0.40		39
250	I4	IIIa	3295	石鏃	安山岩	2.50	1.62	0.38	1.20		39
251	F4	IIIa	31767	石鏃	黒曜石III類	2.30	1.40	0.40	1.10		39
252	G4	IIIa	44332	石鏃	黒曜石III類	(1.30)	(1.00)	0.30	(0.20)		39
253	H6	IIIa	19491	石鏃	黒曜石I類	1.70	(1.50)	1.70	(0.70)		39
254	I4	IIIa	44456	石鏃	鉄石英	2.80	2.50	0.50	2.40		39
255	I5	IIIa		石鏃	黒曜石VI類	2.20	1.50	0.30	0.90		39
256	G3	IIIa	42892	石鏃	安山岩	2.30	(1.60)	0.50	(1.00)		39
257	G5	IIIa	43353	石鏃	黒曜石IV類	1.70	1.40	(0.30)	(0.50)		39
258	E12	IIIa	39038	石鏃	黒曜石I類	1.10	0.90	0.20	0.10	透明	39
259	K4	IIIa	1870	石鏃	安山岩	2.60	1.90	0.40	1.30		39
260	H3	IIIa	42760	石鏃	黒曜石V類	2.60	2.30	0.50	1.70		39
261	H5	IIIa	18631	石鏃	安山岩	1.20	1.30	0.25	0.30		39
262	J5	IIIa	41523	石鏃	黒曜石I類	2.00	1.40	0.30	0.50		39
263	H6	IIIa	15675	石鏃	黒曜石III類	2.50	2.20	0.70	2.90		39
264	F5	IIIa		石鏃	軟質頁岩	2.20	1.60	0.40	0.90		39
265	J5	IIIa	9946	石鏃	黒曜石II類	(1.80)	1.60	0.30	(0.80)		39
266	F5	IIIa	42094	石鏃	頁岩	2.20	1.60	0.40	1.00		39
267	G5	IIIb	18200	石鏃	安山岩	2.60	1.10	0.40	1.00	半月形	39
268	H3	IIIa	42741	石鏃	安山岩	(2.00)	2.10	0.50	(1.40)		39
269	H3	IIIa	44817	石鏃	黒曜石V類	2.90	2.70	0.50	2.80		40
270	I4	IIIa	44501	石鏃	タンパク石	(1.90)	1.90	0.50	(1.10)		40
271	G2	IIIa	42203	石鏃	黒曜石IV類	2.10	1.80	0.40	0.90		40
272	F5	IIIa	42092	石鏃	黒曜石IV類	(1.60)	(1.60)	0.40	(0.60)		40
273	G4	IIIa	43242	石鏃	鉄石英	(2.30)	2.50	0.50	(2.40)		40
274	J5	IIIa	25159	石鏃	軟質頁岩	(2.20)	1.90	0.50	(1.10)		40
275	I5	IIIa	16974	石鏃	黒曜石I類	1.20	1.30	0.40	0.40		40
276	J4	IIIa	3357	石鏃	チャート	(1.40)	(1.30)	0.30	(0.40)		40
277	I5	IIIa上	12136	石鏃	チャート	1.60	1.60	0.40	0.60		40
278	F3	IIIa	25068	石鏃	黒曜石VI類	(1.10)	1.50	0.30	(0.30)		40
279	A14			石鏃	黒曜石IV類	(1.40)	(1.60)	0.30	(0.50)		40
280	H5	IIIa	19268	石鏃	頁岩	2.10	(0.80)	0.30	(0.40)		40
281	I5	IIIa	16347	石鏃	黒曜石III類	2.00	1.50	0.50	1.10		40
282	H5	IIIa上	20011	石鏃	黒曜石IV類	1.60	(0.90)	0.20	(0.20)		40
283	H5	IIb	12931	石鏃	黒曜石III類	(2.10)	1.80	0.40	(1.00)		40
284	H5	IIb	37708	石鏃	黒曜石II類	2.50	(1.40)	0.30	(0.70)		40
285	F6	IIb	33175	石鏃	黒曜石III類	2.00	1.40	0.40	0.90		40
286	G5	IIb	20426	石鏃	タンパク石	1.60	1.10	0.40	0.60		40
287	E6	IIb	39780	石鏃	安山岩	1.90	1.70	0.30	0.70		40
288	F5	IIa	32840	石鏃	タンパク石	1.90	1.50	0.30	0.50		40
289	F3	IIb	25748	石鏃	頁岩	(2.00)	1.50	0.40	(0.80)		40
290	F3	IIa	21560	石鏃	安山岩	1.90	1.30	0.30	0.50		40
291	G5	IIb	20615	石鏃	黒曜石III類	1.40	1.30	0.40	0.60		40
292	E6	IIb	37243	石鏃	頁岩	1.80	1.80	0.40	1.00		40
293	F4	IIb	25556	石鏃	黒曜石VIII類	(2.20)	1.30	0.40	(0.80)		40
294	F5	IIa	27730	石鏃	黒曜石III類	(1.80)	1.60	0.50	(0.80)		40
295	G5	IIa	11569	石鏃	安山岩	(2.20)	(1.90)	0.50	(0.90)		40
296	F4	IIa	27357	石鏃	安山岩	(1.80)	1.30	0.40	(0.50)		40
297	H5	IIb	7596	石鏃	黒曜石III類	(3.60)	1.60	0.40	(0.50)		40
298	F5	IIb	38006	石鏃	安山岩	(1.70)	1.80	0.50	(1.30)		40
299	G5	II	1411	石鏃	黒曜石III類	(1.40)	(1.60)	0.50	(1.20)		40
300		表		石鏃	黒曜石II類	1.80	1.20	0.30	0.30		40
301	F2G3	表		石鏃	安山岩	(2.00)	(1.40)	0.30	(0.60)		40

第10表 III・IV層石器観察表(2)

遺物番号	区	層	注記番号	器種	石材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	挿図
302	H 4	表		石鏃	黒曜石Ⅰ類	(1.90)	(2.20)	0.40	(1.40)		40
303	H 5			石鏃	黒曜石Ⅵ類	1.80	1.20	0.30	0.50		40
304				石鏃	安山岩	(2.80)	(2.40)	0.50	(2.30)		40
305	F 5	Ⅳ	42325	石匙	安山岩	2.90	10.20	0.50	32.90		41
306	J 3	Ⅲb	19595	石匙	黒曜石Ⅲ類	3.30	2.70	0.80	5.90		41
307	G 2	Ⅲa	42201	石匙	安山岩	6.40	5.60	1.65	44.70		41
308	J 3	Ⅲa	44397	石匙	軟質頁岩	5.30	4.40	0.70	12.20		41
309	I 5	Ⅲa	20290	石匙	黒曜石Ⅲ類	(2.10)	(2.00)	(0.60)	(2.70)		41
310	F 2	Ⅱa	22292	石匙	頁岩	3.40	2.00	0.65	4.60		41
311		表		石匙	黒曜石Ⅴ類	(3.30)	(3.60)	0.75	(9.20)		41
312	D13	Ⅵ	39072	削器	黒曜石Ⅲ類	2.80	3.10	1.20	10.80		42
313	H 5	Ⅳ	44954	削器	黒曜石Ⅴ類	2.40	2.90	0.90	5.80		42
314	G 5	Ⅲa	19142	削器	チャート	2.50	2.30	0.80	4.90		42
315	G 4	Ⅲa	37801	削器	頁岩	3.80	6.80	0.80	26.70		42
316	I 5	Ⅲa	41454	削器	黒曜石Ⅱ類	8.80	5.00	2.40	104.80		42
317	J 4	Ⅲa	44116	削器	黒曜石Ⅶ類	2.90	3.80	0.90	8.10		42
318	J 5	Ⅲa	40138	削器	黒曜石Ⅵ類	4.20	3.10	1.00	11.50		42
319	F 4	Ⅲa	42997	削器	黒曜石Ⅲ類	(3.50)	(2.30)	0.60	(5.00)		42
320	F 4	Ⅲa	24802	削器	黒曜石Ⅳ類	2.40	1.80	0.85	4.30		42
321	H 3	Ⅲa	42806	削器	安山岩	7.00	2.75	1.80	23.20		42
322	G 6	Ⅲa	43609	削器	安山岩	4.80	4.20	0.70	22.30		42
323	I 3	Ⅲa	44396	削器	チャート	5.00	3.70	0.85	25.10		43
324	H 3	Ⅲa	2410	削器	ハリ質安山岩	1.70	3.30	0.60	4.30		43
325	E 5	Ⅱb	28556	削器	頁岩	(2.50)	(2.50)	(0.60)	(5.70)		43
326	F 4	Ⅱb	31629	削器	黒曜石Ⅲ類	2.75	1.80	1.00	4.10		43
327	F 5	Ⅱb	29305	削器	黒曜石Ⅲ類	2.15	2.00	0.75	3.10		43
328	F 6	Ⅱb		削器	黒曜石Ⅲ類	3.70	6.10	1.10	24.60		43
329	K 3	表		削器	黒曜石Ⅶ類	5.60	3.70	1.30	21.00		43
330	G 4	Ⅳ	43233	石槍	安山岩	3.00	1.20	0.50	1.80		44
331	I 5	Ⅲa	19800	石槍	黒曜石Ⅳ類	3.30	1.40	0.50	2.00		44
332	H 5	Ⅲa	43132	石槍	黒曜石Ⅲ類	4.10	1.30	0.70	4.10		44
333	H 5	Ⅲa	19069	石槍	上牛鼻	2.50	1.40	0.60	2.30		44
334	F11	Ⅲa	39086	石槍	頁岩	(2.20)	2.10	0.50	(3.00)		44
335	G 5	Ⅱb	17732	石槍	頁岩	6.70	3.00	0.90	22.20		44
336				石槍	安山岩	(4.90)	1.50	0.40	(3.15)		44
337	K 4	Ⅲa	19567	石錐	黒曜石Ⅲ類	4.20	3.50	1.05	11.50		44
338	E12	Ⅳ	38693	石錘	安山岩	4.50	3.50	0.80	17.20		44
339	G 3	Ⅱa	22371	石錘	安山岩	4.40	4.72	1.40	38.00		44
340	G 2	Ⅲa	42200	玦状耳飾	蛇紋岩	2.70	10.90	0.40	18.90		44
341	K 5	表		異形石器	黒曜石Ⅲ類	2.60	2.30	0.70	3.10		44
342	F 6	Ⅱb	39790	鏢器	安山岩	16.12	7.15	2.45	366.00		45
343	G 4	Ⅲa	43000	剥片	安山岩	6.10	4.50	0.60	13.90		45
344	H 4	Ⅲa	42715	剥片	安山岩	5.50	8.75	1.40	35.30		45
345	E 6	Ⅱa	39591	軽石	軽石	10.20	8.70	4.25	120.90		45
346	D13	Ⅵ	39071	石核	針尾	3.30	3.80	1.35	13.00		46
347	H 3	Ⅲa	44820	石核	鉄石英	6.50	7.40	4.90	261.00		46
348	J 4	Ⅲa	44127	石核	上牛鼻	3.15	2.65	2.05	13.90		46
349	E 6	Ⅲa	41402	石核	鉄石英	3.85	3.80	3.50	62.90		46
350	G 3	Ⅲa	43300	石核	鉄石英	5.50	5.70	5.70	172.10		47
351	K 5	Ⅲa	44078	石核	チャート	4.00	5.90	5.65	160.00		47
352	E 5	Ⅱa	37844	石核	針尾	2.20	3.70	2.50	17.30		47
353	G 5	Ⅲa	43397	磨製石斧	硬質砂岩	9.70	6.95	3.90	434.00		48
354	H 5	Ⅲa	36000	磨製石斧	硬質砂岩	10.40	4.40	2.20	163.00	刃部	48
355	E 5	Ⅱa	34649	磨製石斧	硬質砂岩	9.10	6.00	3.15	245.00	刃部	48
356	E11	Ⅲb	38716	磨製石斧	頁岩	9.00	7.70	3.45	256.00	刃部	48
357	F 4	Ⅲa	41210	磨製石斧	頁岩	(12.50)	(7.20)	(4.60)	(605.00)	基部	48
358	F 3	Ⅲa	43312	磨製石斧	頁岩	16.05	6.75	3.05	400.00		48
359	J 4	Ⅲa	3342	磨製石斧	硬質砂岩	(4.45)	(5.70)	(2.45)	(70.00)	刃部	48
360	F 5	Ⅱb	35589	磨製石斧	頁岩	(2.30)	(4.40)	(1.50)	(15.00)	刃部	48
361		表		磨製石斧	頁岩	(11.50)	(5.15)	(3.55)	(320.00)		48
362		表		磨製石斧	頁岩	(5.10)	5.70	(1.50)	(55.00)	刃部	48
363		表		磨製石斧	ホルンフェルス	(8.00)	(5.25)	(1.70)	(80.00)	刃部	48
364		表		磨製石斧	頁岩	(4.70)	(5.05)	(2.80)	(50.00)	刃部	48
365	F 3	Ⅲa	27097	打製石斧	安山岩	19.40	10.40	2.40	516.00		49
366	I 5	Ⅲa	18567	打製石斧	安山岩	15.70	9.40	2.60	436.00		49
367	J 6	Ⅲa	44996	打製石斧	頁岩	11.60	5.00	1.85	123.00		49
368	H 3	Ⅲa	37768	打製石斧	安山岩	11.50	9.35	1.95	204.00		49
369	F 3	Ⅲa	40459	打製石斧	頁岩	14.80	6.45	3.00	245.00	2つに切断	49
370	F 3	Ⅲa	41315	打製石斧	頁岩	17.55	6.85	2.25	340.00	2つに切断	49

第11表 III・IV層石器観察表(3)

遺物番号	区	層	注記番号	器種	石材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	挿図
371	G 4	Ⅲa	24662	打製石斧	頁岩	12.00	7.50	1.85	130.00		49
372	E11	Ⅲa	38760	打製石斧	安山岩	13.15	10.85	2.05	265.00	2つに切断	49
373	G 4	Ⅲ	361	打製石斧	安山岩	16.20	13.35	2.45	380.00	刃部	50
374	F 3	Ⅲa	40457	打製石斧	頁岩	10.55	6.30	2.60	137.00		50
375	G 3	Ⅲa	42768	打製石斧	頁岩	12.15	5.55	2.25	122.00		50
376	G 4	Ⅲa	43023	打製石斧	安山岩	11.25	6.70	2.10	120.00		50
377	F 6	Ⅱb	39788	打製石斧	安山岩	22.50	11.60	2.10	595.00	4つに切断	50
378	F 4	Ⅱb	26272	打製石斧	安山岩	16.55	8.10	3.20	265.00	2つに切断	50
379	H 6	Ⅱb	35989	打製石斧	安山岩	14.10	6.20	1.85	194.00		50
380	E 5	Ⅱb	38452	打製石斧	頁岩	11.00	6.50	1.85	135.00		51
381	E 6	Ⅱb	38152	打製石斧	頁岩	(7.95)	(4.10)	1.30	(40.00)	基部	51
382	G 5	Ⅱb	20466	打製石斧	頁岩	11.70	5.30	2.30	150.00		51
383	E 6	Ⅱb	38156	打製石斧	頁岩	(9.65)	5.80	1.70	(100.00)		51
384	F 6	Ⅱb	33136	打製石斧	頁岩	13.20	4.30	2.25	142.00		51
385	F 5	Ⅱb	39789	打製石斧	頁岩	11.65	6.45	2.25	145.00		51
386	G 5	Ⅲa	42335	打製石斧	安山岩	13.35	5.75	2.15	170.00		51
387	G 2	Ⅱa	42210	打製石斧	頁岩	11.05	5.60	1.95	124.00		51
388	F 3	Ⅲa	41284	打製石斧	頁岩	11.40	5.70	2.05	145.00		51
389	E 6	表		打製石斧	安山岩	15.55	7.90	2.15	280.00		51
390	K 3	表		打製石斧	頁岩	12.60	8.15	2.30	215.00		51
391	H 3	V	42799	石皿	安山岩	27.75	13.30	5.65	3300.00		52
392	G 4	Ⅲa	43268	石皿	安山岩	35.40	14.90	10.40	7900.00	砥石	52
393	G 6	Ⅲa	43638	石皿	安山岩	22.60	27.50	7.35	5300.00		52
394	J 5	Ⅲa	41000	石皿	安山岩	20.75	23.62	7.55	4200.00		52
395	F 3	Ⅲa	42162	石皿	安山岩	22.67	9.90	3.25	1300.00		53
396	E 5	Ⅱb	38001	石皿	安山岩	11.90	15.88	2.05	534.00		53
397	F 5	Ⅱb	32542	石皿	安山岩	13.40	10.37	3.00	658.00		53
398	F 4	Ⅲa	24855	研磨器	安山岩	10.23	5.10	2.10	185.40		53
399	F 3	Ⅲa	41318	礫器	安山岩	14.30	13.97	4.30	900.00		53
400	G 3	Ⅲa	42785	礫器	安山岩	13.53	15.30	2.60	916.00		53
401	T 3	Ⅲa	44277	磨石兼敲石	砂岩	8.15	6.43	4.10	310.00		54
402	E 3	Ⅲa	34126	磨石兼敲石	安山岩	6.38	5.88	2.05	117.20		54
403	H 3	Ⅲ	42819	磨石兼敲石	安山岩	8.00	6.20	3.30	249.00		54
404	G 5	Ⅱb	20434	磨石兼敲石	安山岩	5.10	7.56	4.30	246.00		54
405	G 5	Ⅱb	35973	磨石兼敲石	安山岩	12.28	10.47	5.30	1100.00		55
406	F11	Ⅲa	39143	磨石		10.98	6.84	4.20	360.00		55
407	E11	Ⅲa	38849	磨石	花崗岩	10.80	7.80	4.25	610.00		55
408	G 4	Ⅳ	43180	磨石	安山岩	6.25	5.80	3.55	186.60		55
409	G 5	Ⅲa	19200	磨石	安山岩	11.40	9.90	5.75	974.00		55
410	J 3	Ⅲa	42830	磨石	砂岩	10.70	9.70	5.95	896.00		55
411	H 5	Ⅲb	10931	凹石	安山岩	10.50	8.20	5.20	643.00		56
412	H 5	Ⅲa	19393	凹石	安山岩	13.35	9.20	4.95	972.00		56
413	J 5	Ⅲa	40174	凹石	安山岩	6.90	5.58	3.50	207.80		57
414	F 5	Ⅱb	38614	凹石	安山岩	11.30	7.87	5.60	720.00		56
415	G 6	Ⅱb	35981	凹石	砂岩	10.70	(10.50)	5.00	(760.00)		56
416	F 6	Ⅳ	43422	敲石	安山岩	10.68	5.80	5.15	446.00		58
417	F 5	Ⅳ	42670	敲石	安山岩	8.70	5.04	3.40	231.00		57
418	F11	Ⅲa	38824	敲石	安山岩	7.95	4.90	4.55	232.00		57
419	I 5	Ⅲb	41133	敲石	石英	4.50	2.90	3.10	41.25		58
420	G 5	Ⅱb	20551	敲石	石英	7.50	4.15	2.90	122.67		58
421	I 5	Ⅲa	16950	敲石	石英	5.40	3.15	3.00	70.87		58
422	F 6	Ⅱa	39538	その他の石器	安山岩	8.18	3.30	3.55	125.00		57
423	J 3	Ⅲa	44849	用途不明石器	蛇紋岩	6.80	3.60	2.45	84.09		58
424	I 5	Ⅲa	41005	細石核	黒曜石Ⅳ類	1.90	1.95	1.60	4.60		58
425	I 5	Ⅲa	40368	細石核	黒曜石Ⅲ類	1.65	1.90	1.30	3.50		58
426	G 4	Ⅱ	1334	原石	水晶	3.10	1.40	1.10	7.09	図版49	
427	G 3	Ⅱa	22421	原石	水晶	4.70	4.90	3.60	105.84	図版49	
428	J 4	Ⅲa	44163	原石	水晶	4.90	4.80	3.80	131.04		
429	F 5	Ⅱb	33385	原石	水晶	4.00	3.80	2.80	63.46	図版49	
430	F 5	Ⅳ	42669	原石	水晶	3.10	4.20	2.40	45.80	図版49	

第6節 III a層の調査 1

1. 遺構（埋壺）

F-11区でまとまって4基の埋壺が検出された。東側から順にA・B・C・Dと呼称した。

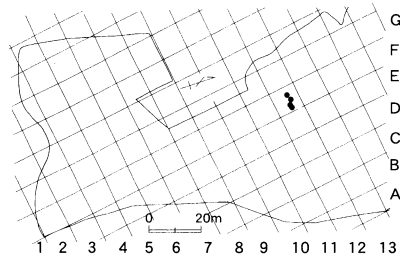
Aは最も東側から検出されたものである。36cm×36cmの範囲に壺形土器の底部のみの残存が確認された。接合した土器は第61図の431である。底部径13.0cm，残存高9.0cmで，平たく安定した底部から大きく広がりながら胴部に向かっている。上部は大きく削られているため全体の形は不明であるが，底部の形状から弥生時代前期の壺と考えられる。胎土には石英・長石・角閃石が含まれており，内外面とも明褐色で剥落が著しい。掘り込みは40cm以上あったと考えられるが，上部は壺本体とともに削られており，掘り方の始まりが不明で，土坑の形状も判然としない。

壺の底部より11cmほど下に掘り方の底があり，その形がややU字状となっている様子がうかがえることから，埋める壺の形に合わせた円形の土坑であったと推定される。土坑を掘った後，11cmほど土を戻してから壺の底を下にして安定した状態に据え付けていたと考えられる。底部の大きさから壺自体は相当に大きかったと考えられる。おそらく，胴部の直径が50cm位，高さは60cm程度あったのではないかと想像される。つまり，この埋壺の集中域は，当時の面から50cm以上削平されていることが考えられる。

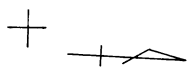
BはAの西1mほどのところに確認された。64cm×51cmの範囲に散らばった状態で検出された。極めて微細に割れているほか，焼成も悪く，剥落が著しいことから接合に耐えなかったため，底部だけしか図化できなかった。底部には穿孔が見られ，葬送儀礼の一環が理解できるものである。底部は安定した平底であり，Aと同様にすぐに大きく広がりながら胴部に向かっている。内面の剥落も非常に著しい。黄褐色で，胎土には砂粒・角閃石・石英を含み，焼成は非常に粗である。（第61図432）Aと同様に底がU字形の土坑に納められており，掘り方下面にほぼ接するように底を下にして安定した状態に据え付けていたと考えられる。土坑は残存部で約55cmほどあることから，壺の胴部の直径はそれよりは小さく30cm程度であったと推定され，高さも40cm～50cm程度であったと想定される。

CはBから大きく離れ，真西よりやや南に約4m離れて，Dと近接した状態で検出された。52cm×38cmの範囲に元の形を維持しながらまとまって出土した。口縁部から底部近くまで残っているが，底は打ち欠かれたために残っていないのか，それとも削られたために残存しないのかははっきりしない。ただ，置き方が口縁部をやや下に向けてはいるものの，ほぼ横向きに平行に置いてあった様子がうかがえることから，後世の削平によって底部が失われたと見るほうが自然なように思われる。掘り込みは確認できなかったが，横方向にほぼ平行に据え付けられていたことから，本来は楕円形なりの土坑の掘り込みがあったと考えられる。その際は，幅約50cm，長さは約60cm～70cm程であったものと推定される。復元された壺は，口縁部径27.6cm，胴部最大径43.6cmで，残存高さは46.2cmである。外に平たく開いた口から内側に小さくすぼまるように落ちた頸部が，再び外に開いて一つの段を作って緩やかなカーブで胴部を張り，そしてまた緩やかなカーブで底部へと流れて行っている。底部は欠失しているが，弥生時代前期の高橋式の壺と考えられる。胎土に石英・長石・砂粒を含み，明褐色を呈しており，焼成は極めて良好である。（第62図433）

DはCに近接してあり，当初合わせ口壺棺かと考えられたが，レベル的には同様な高さに位置す



埋壺概略位置図

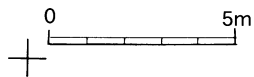


G-11区 G-12区
F-11区 F-12区

A

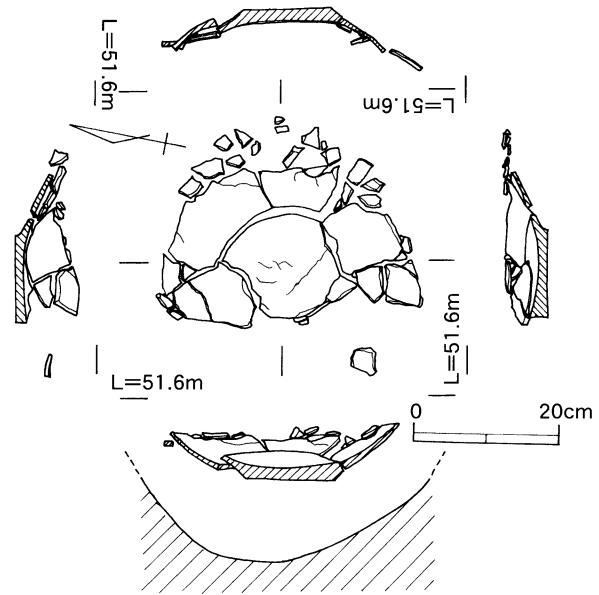
B

C
D

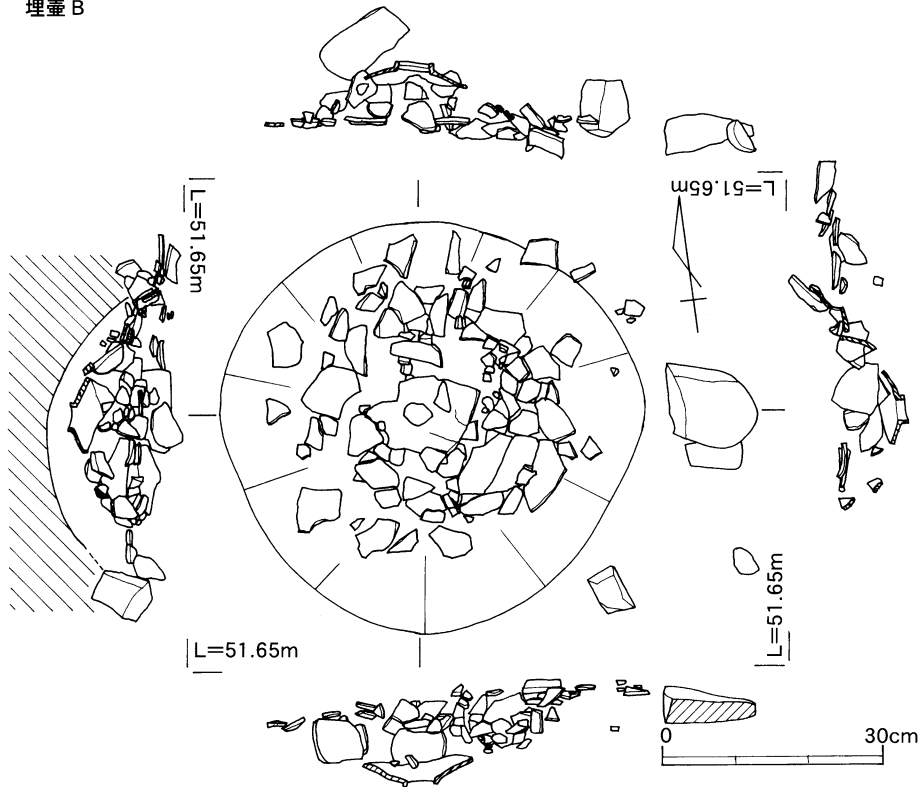


埋壺位置図

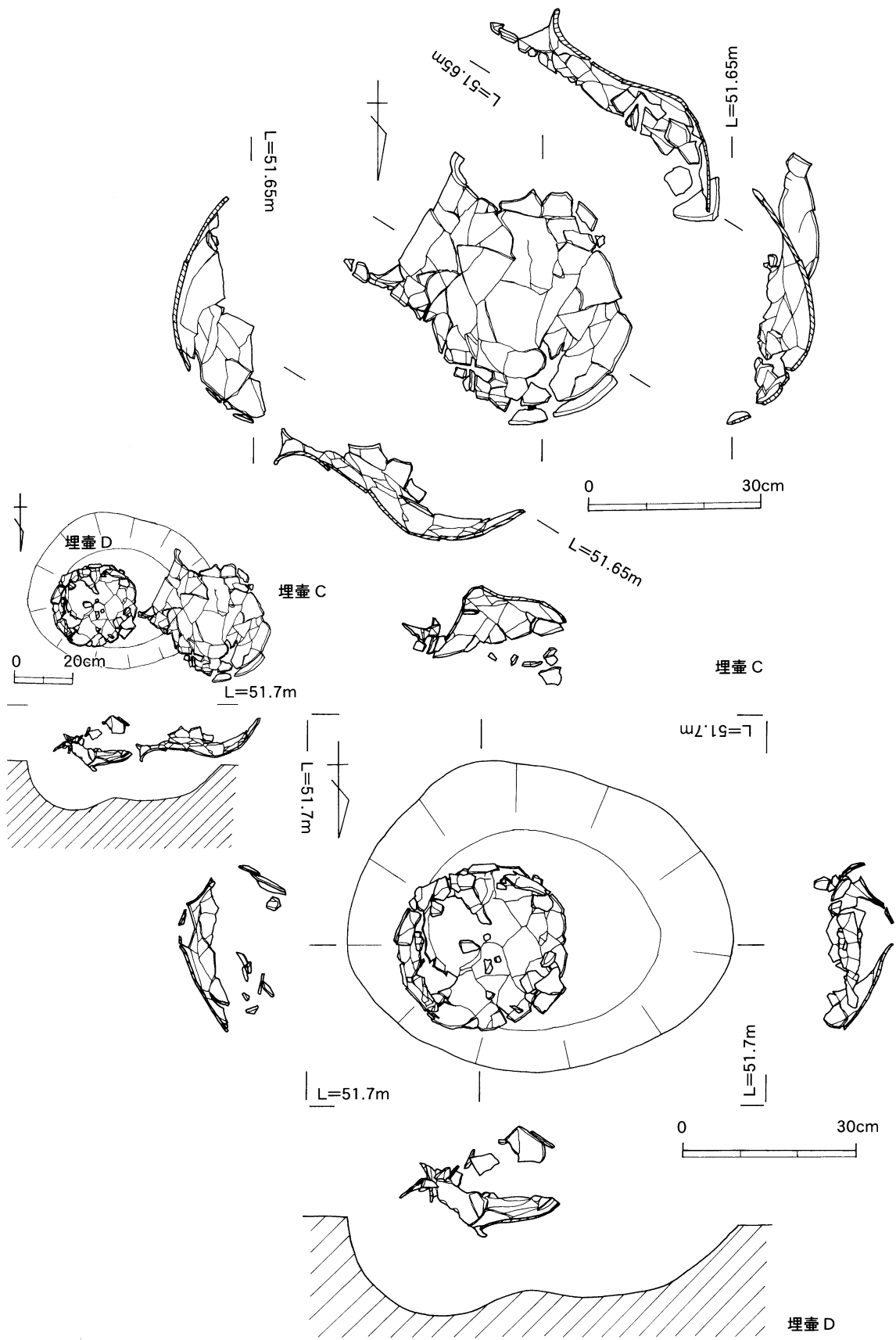
埋壺 A



埋壺 B



第59図 埋壺検出状況(1)

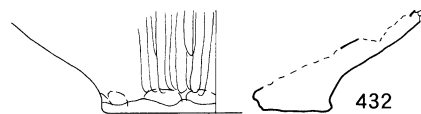


第60図 埋壺検出状況(2)

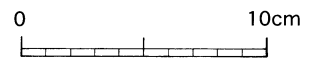
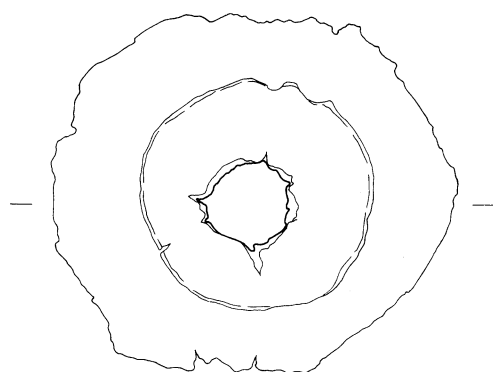


434

431



432

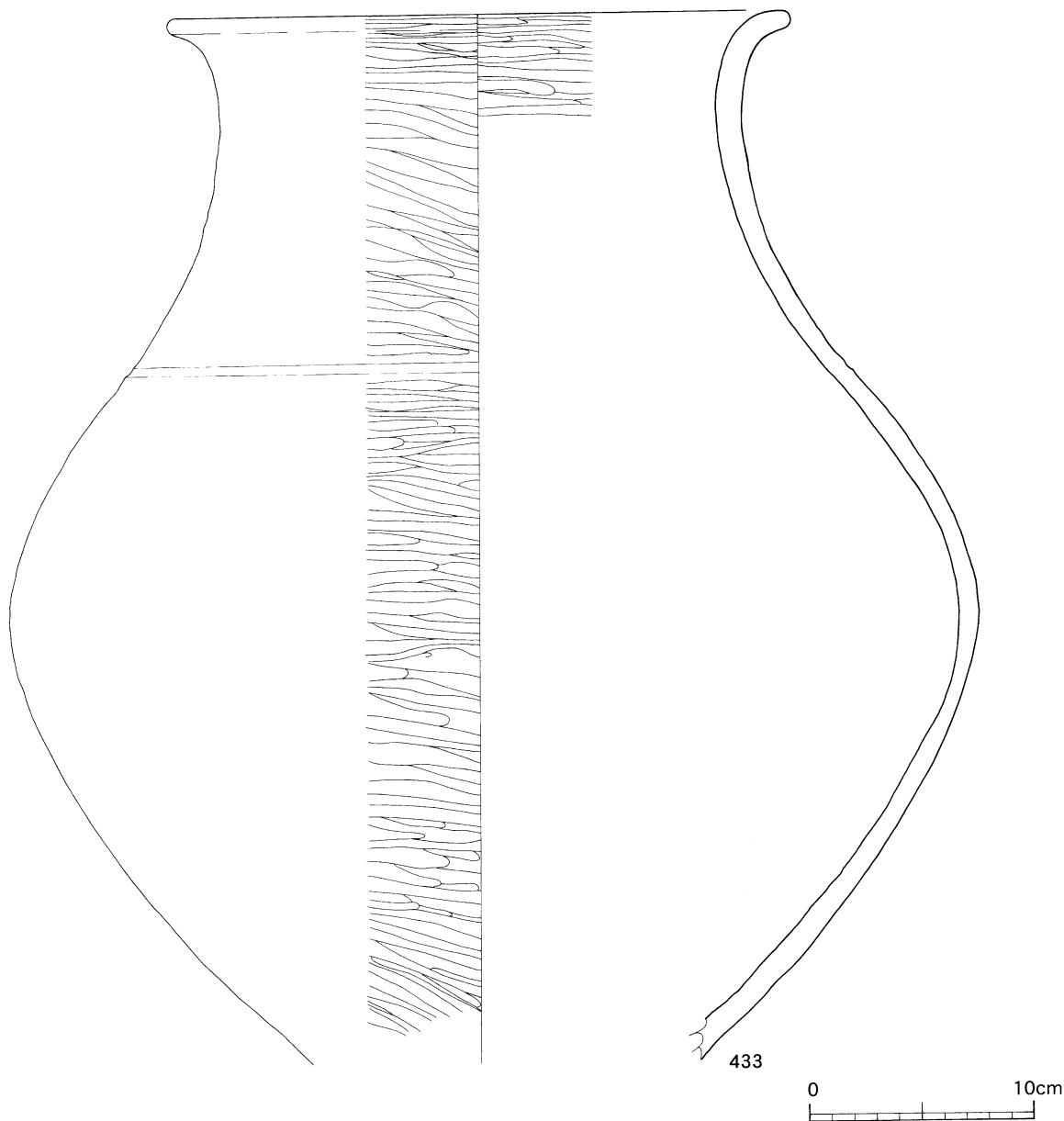


第61図 埋壺(1)

るものの、Dの土坑とCの壺の軸の方向が異なることなどから、別固体とするほうが自然であろうと判断された。30cm×30cmの範囲にまとまっており、壺の口が下向きに据えられている。そのため、胴部以下が後世に削られており、全く残存していない。また、口縁部もないが、これは、据え付ける際に打ち欠かれたものであろうと推定される。胴部最大径が27.0cmあり、残存する高さは14.4cm、残存の口縁部径は11.8cmである。角閃石・長石を胎土に含み、赤褐色を呈し、焼成は良好である。壺の形状はCに似ると思われるが、その大きさは非常に小さい。(第61図434) 土坑は、54cm×67cmの楕円形をしており、東側は一段落ちている。掘り方の最下面から10cmほど上に壺が据え付けられ

ていることから、土坑を掘ったのち、10cmほど埋め戻して壺を下向きに据えているが、それほど安定した状態となるように置いたとは考えられない。

これら4基の埋壺は、AとB、CとDという組合せが考えられるように思われる。それは、それぞれの組の壺の形状が似かよっているためである。ただ、それらの時期差、時間差がいかほどあるかについては明確にしえなかった。



第62図 埋壺(2)

第12表 埋壺観察表

番号	区	遺構	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	備考	挿図
431	F11	埋壺A	壺	底部	普通	暗黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	○		61
432	F11	埋壺B	壺	底部	普通	黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ	○		○	底部に穿孔	61
433	F10	埋壺C	壺	口縁部~胴部	良好	黄橙色	黄褐色	ナデ・ミガキ	ナデ	○	○	○		62
434	F11	埋壺D	壺	胴部	良好	明赤褐色	暗赤褐色	ミガキ・重弧文	ナデ	○	○	○	赤色顔料塗布	61

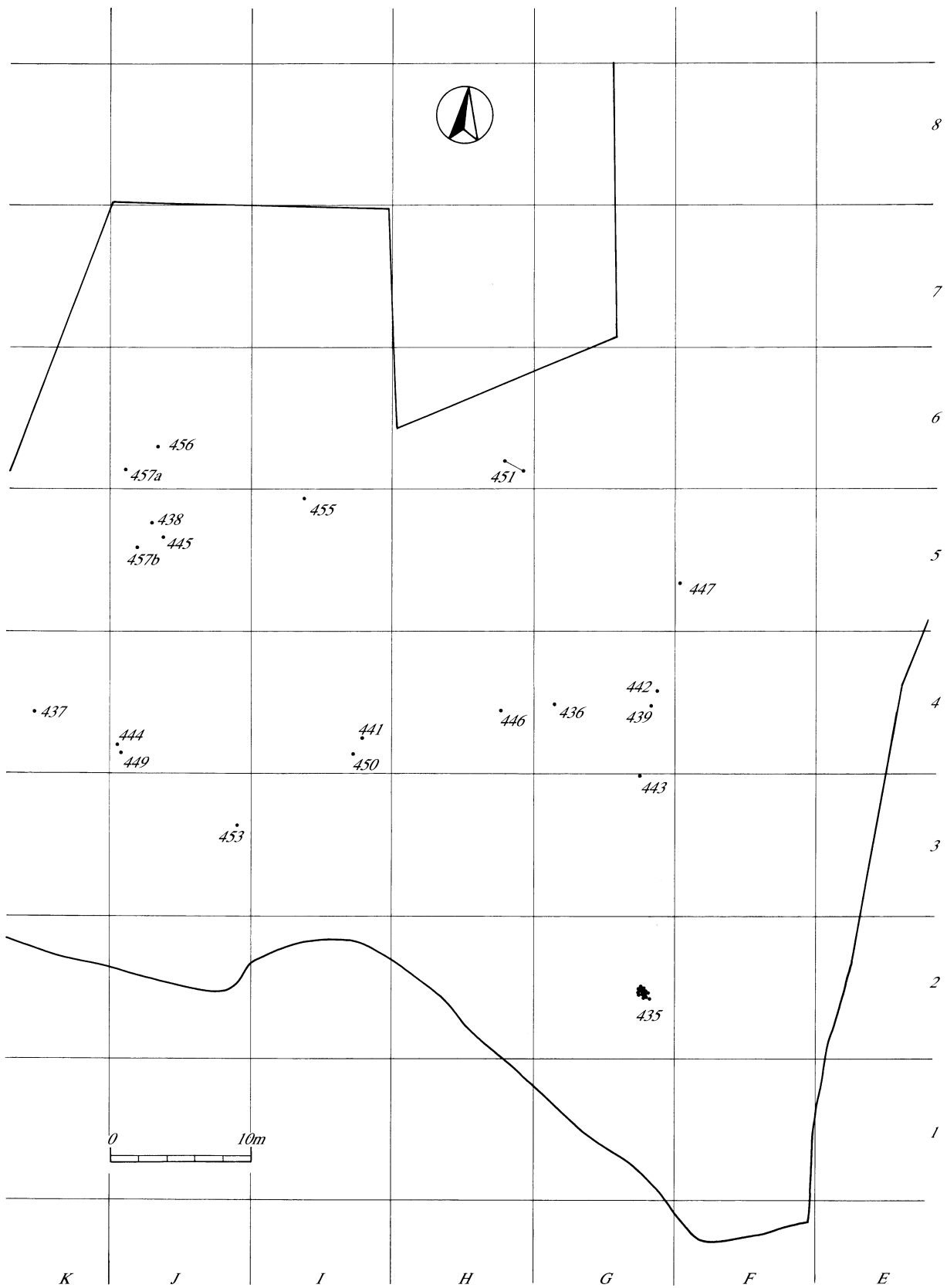
2. 土器

調査区域の3～6区にかけて弥生時代の遺物が出土した。遺物は前期から中期にかけての甕形土器と高坏である。

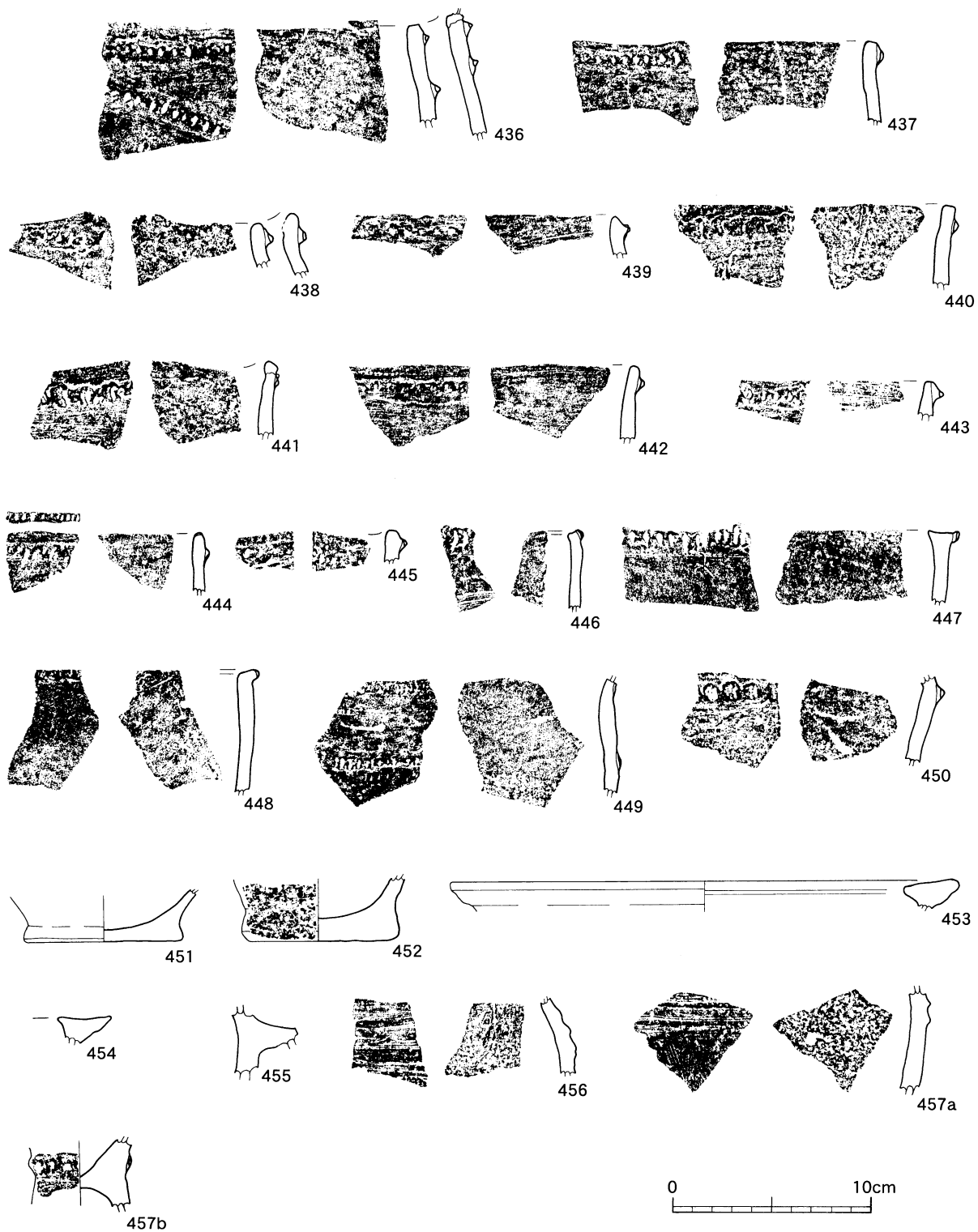
435から452は高橋I式を含む甕形土器である。口縁部はわずかに内傾している。口縁部とその下位の胴部上部に2条の貼付突帯を巡らせ、細かな刻みを施している。435は外面黄橙色の焼成良好な完形品である。胎土に2mm程度の小白粒を含み、工具を使って下部から上部に向かって斜位にナデあげることによって調整されている。外面の調整は粗いが内面は幾分丁寧にナデられている。また外面胴部には煤が付着し、内面の下部は剥落がみられる。口唇部の断面は先細るが、外面に突帯を貼り付けて上部を平坦にナデて肥厚させている。突帯はヘラ状の施文具で刻目を施しているが、刻目の角度と間隔は部分により異なる。底部は一旦底部に向かって狭まる胴部下端から横につまみ出すようにして平底の底部を成形している。436から450は435と同様な前期突帯文土器の口縁部である。そのうち436から439は口縁部が内傾している。436は口縁部である口唇部にリボン状の突起をもつ口唇部外面直下と頸部に2条の刻目突帯が巡る。頸部の下の1条が斜めに走り、口縁部は内面に傾く。437は口唇部外面直下と頸部に2条の刻目突帯が巡る。内面は赤褐色でナデ調整が施されている。438は口唇部に突起を持つ突帯の貼り付け方が粗い。439は口唇部外面直下の突帯に、右方向から刻みを入れているのが観察できる。440は両面淡褐色で突帯の幅が広い。突帯に指頭による刻目がみられる。441は緩やかな波状口縁部をもつ。口唇部がやや外傾し、外面直下の幅の広い突帯に指頭による刻目が施される。442は両面とも横位の丁寧なナデがみられる。口唇部は丸く調整され、焼成は良好である。443は尖端部を薄く調整した口唇部外縁に突帯を貼り付けることで口唇部を肥



第63図 III a層出土土器(弥生土器)(1)



第64図 III a層遺物（彌生時代）出土状況



第65図 III a層出土土器（弥生土器）(2)

厚かつ平坦に調整している。刻みが非常に浅く、間隔がせまい。444は両面とも暗褐色で、研磨されている。口縁端部からやや下がった外面に突帯が貼り付けられ、爪を押しつけたと思われる刻目が不規則な間隔で刻まれている。口唇部に細かい刻目を持つ。445は緩やかな波状口縁部である。口唇部からやや下がった部分に貼り付けられた突帯には刻目が粗略に施されている。446は口唇部

からやや上に突帯が貼り付けられている。突帯の刻みは長く深い。両面とも丁寧にナデられ、焼成は良好である。447は口唇部が平坦にナデられ、内縁はわずかに内傾している。内面は斜位のナデ調整がみられ、外面は突帯直下に1条横位のナデがみられるが、それ以外の調整は丁寧にナデ消されている。448は両面とも丁寧にナデられている。内面に浅く指押さえ痕がみられる。口唇部はわずかに内傾している。口唇部は平坦に調整され、突帯は口唇部外縁をつまみ出すように形成されている。刻目は浅く細かい。449は口唇部と胴部上部に2条の突帯がみられる。胎土に角閃石を多量に含み、口縁部はわずかに内傾しており、口唇部分で緩やかに立ち上がる。口唇部の突帯の刻みは極浅く、密に施されている。調整は両面ともやや粗略で、外面のナデ調整痕が明確に残る。450は胴部である。他に比べて約8mmと幅の広い突帯に指頭による刻目が施されている。両面とも調整は非常に粗く、胎土に長石が目立つ。色調が異なるが、441と同一個体の可能性がある。451と452は同時期の甕形土器の底部であり、内面は丸く調整されているのに対して、外形は安定した平底である。

453～455は中期の甕形土器の平坦に調整された口縁部（453・454）と丁寧に調整された胴部突帯（455）である。456と457aは壺形土器の胴部に施された三角突帯部分である。454は断面三角形を呈する突帯が3条巡る。突帯部分は突帯の両縁辺部を横位にナデることによって成形されている。457aは2条の突帯が巡っているが、突帯の断面は、456より稜線部分を強調した形状である。2点とも胎土に透明な火山ガラスを含み、焼成は非常に良好である。また2点とも外面は丁寧にナデ調整が施されているが、内面にナデた様子はみられない。457bは前期の高環形土器の脚部である。竹管状の施文具による連続刺突文を施した貼付突帯が脚部を巡る。脚部内面は丁寧にナデられている。

第13表 III a層（弥生時代）観察表

遺物番号	区	層	注記番号	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	雲母	火山ガラス	その他	備考	挿図
435	G 2	III a	42204	甕	完形	普通	灰褐色	淡褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○		○			小白粒		63
436	G 3	III a	43303	甕	口縁部	普通	黒褐色	茶褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○		○					65
437	G 3	II b	2138	甕	口縁部	普通	黒褐色	茶褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
438	J 5	II b上	6894	甕	口縁部	普通	淡黄色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
439	G 4	III a	25286	甕	口縁部	普通	暗黄褐色	暗黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
440				甕	口縁部	普通	明黄褐色	暗黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
441	I 4	III a	2915	甕	口縁部	普通	暗黄褐色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○		○					65
442	G 4	III a	42983	甕	口縁部	普通	黒褐色	灰黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
443	G 4	III a	43013	甕	口縁部	普通	明褐色	明褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
444	J 4	III a	44108	甕	口縁部	普通	暗黄褐色	暗黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
445	J 5	III a	6880	甕	口縁部	普通	暗黄褐色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
446	H 4	III a	2289	甕	口縁部	普通	暗黄褐色	茶褐色	突帯文・ナデ	ナデ		○	○					65
447	F 5	III a	30590	甕	口縁部	普通	灰黄褐色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
448	F 3	表		甕	口縁部	普通	灰黄褐色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
449	J 4	III a	44109	甕	胴部	普通	明黄褐色	灰黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
450	I 4	III a	2913	甕	胴部	普通	暗黄褐色	暗黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
451	H 6	III a上	20131	甕	底部	普通	灰黄褐色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
452	E 4	II b		甕	底部	普通	茶褐色	灰黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
453	J 3	III a	3823	甕	口縁部	普通	淡黄色	淡黄色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
454				甕	口縁部	普通	淡黄色	淡黄色	突帯文・ナデ	ナデ		○	○					65
455	I 5	II b上	6626	甕	突帯	普通	にぶい橙色	にぶい橙色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65
456	J 6	III a	4544	甕	胴部	普通	暗褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○					65
457a	J 6	II b	12235	甕	胴部	普通	黄橙色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	○	○	○					65
457b	J 5	II b上	6902	高環	底部	普通	黄橙色	明黄褐色	突帯文・ナデ	ナデ	○	○	○					65

第7節 III a層の調査 2

古墳時代の土器

古墳時代の土器は、在地性の強い成川式土器がほとんどである。概略を述べていく。

458～478は甕形土器，479～495は壺形土器，496は鉢形土器，497は高坏，498・499は埴である。

458は「く」の字状に外反する口縁からほぼ直線的に底部に向かい，底部は若干上げ底気味の平底である。外面の器面調整にミガキが見られることから，いわゆる成川式土器ではないと考えられる。黄色味を帯びることから，肥後系の土器の可能性はある。

459は大きく外反する「く」の字状口縁から張りながら胴部につながり，胴部のやや上部で最大径となった後，緩やかなカーブを描きながら底部へと向かう。底部には高い脚台が付き，端部は外に向かって大きく張り出す。外面縦方向，内面横方向の刷毛目が鮮やかに残る。

460は458と同程度の「く」の字状に外反する口縁部から底部に向けて直線的に大きくすぼまっているため，口縁径に対して深さが浅い印象を持つ。底部には高い脚台が付くが，端部は外へは開かず，直線的である。外面は主に縦方向，内面は上部で斜め方向，下部で縦方向の刷毛目が残る。

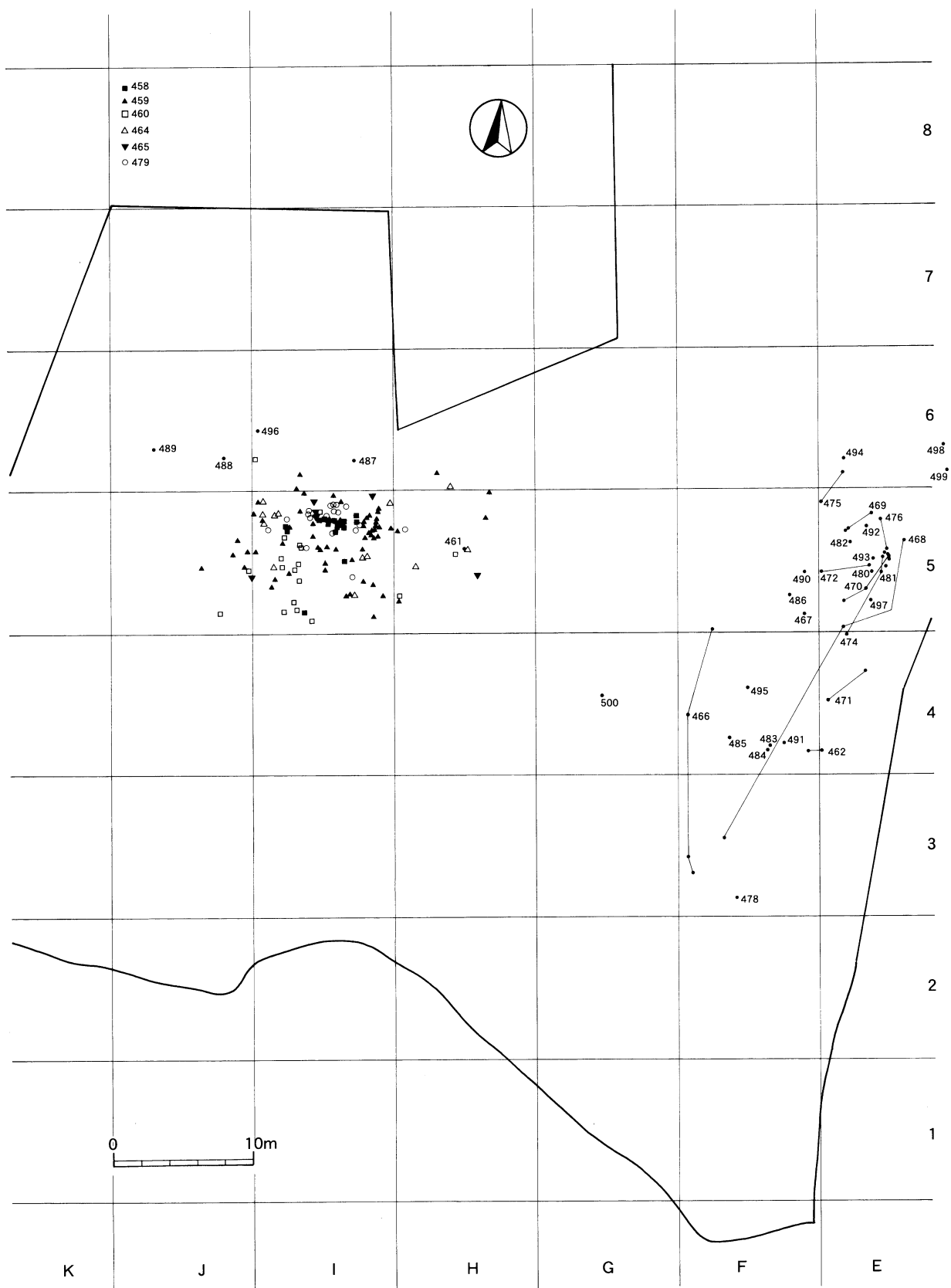
464も「く」の字状の口縁部を持つが，推定復元ではあるが460に比べて長胴である。器面の調整も類似する。口縁端部は前者が丸まるのに対して，後者は平らで浅い沈線が施されている。

461～469は口縁部から胴部にかけてを集めたものである。ほとんど「く」の字状を呈するものであるが，468と469は外反の程度が弱まり，次第に直立する傾向がうかがえる。また，466と467は明確な稜をもたず，緩やかなカーブをもつものとなる。

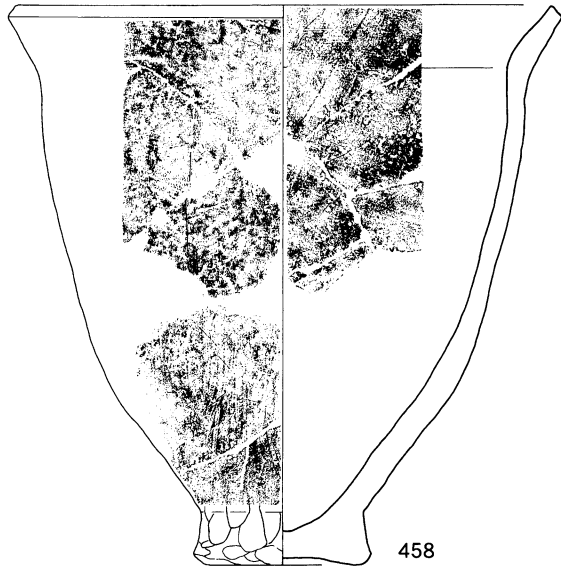
461は「く」の字状の口縁部から外に少し膨らんだ後，すぐに内側に向かうことから，胴部の張りは弱いと考えられる。462も胴部に向かうカーブは短く，張りは小さいと考えられる。461は頸部が鈍く，462は幅広く深い頸部を持つ。463は頸部から段を持つように胴部がやや厚みを持っている。器面調整はナデ仕上げである。465も胴部の張りは小さい。466の外面には頸部から口縁部に向けて上方向の刷毛目の搔き上げが見られる。467にも同様な刷毛目の搔き上げが見られるが，全体的な形状は大きく異なっている。468は463に似て，頸部から胴部にかけてやや肥厚する。469の口縁部は頸部が不明瞭となり，直立気味となる。外面刷毛目，内面ナデ調整が行われている。

470～478は底部を中心に集めてある。470は底部から胴部及び脚部いずれにかけても直線的に広がっている。脚台は高く，調整は外面縦方向の刷毛目，内面は横方向のナデで仕上げている。底部への脚部の貼り付けは，平底気味の丸底の底部の中心から離れたところに環状に施してある。472は，底部と脚部の貼り付けの後，接合部がなめらかなカーブを描くように仕上げている。477は手捏ね的な土器である。底部と脚部の貼り付けを指頭で行っており，脚部の内外両面に指頭の痕跡が明瞭に残っている。478は若干上げ底の底部の上部に絡状の突帯を巡らせている。両面とも明黄褐色を呈し，胎土・焼成共に良好である。

479は頸部が小さくすぼまり，胴部にかけては大きく広がりながら膨らむ，割合に長胴の壺形土器といえる。外面刷毛目，内面ナデによる調整が見られる。頸部から口縁部にかけては直線的に広がり，長さもさほど長くないと考えられる。480～489は胴部に施された突帯及び文様である。480～487は突帯に刻み目の付くものである。刻みの幅や向き，長さなどは個々に異なっている。488と489は直線の沈線で文様を描いている。横方向の沈線の中に3本の斜め方向の短い直線がへの字状



第66図 III a層遺物（古墳時代）出土状況



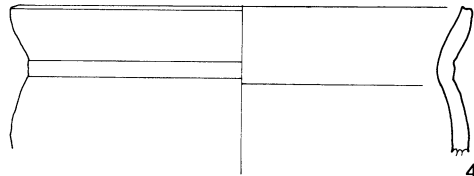
458



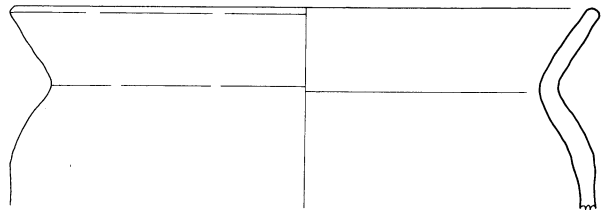
459



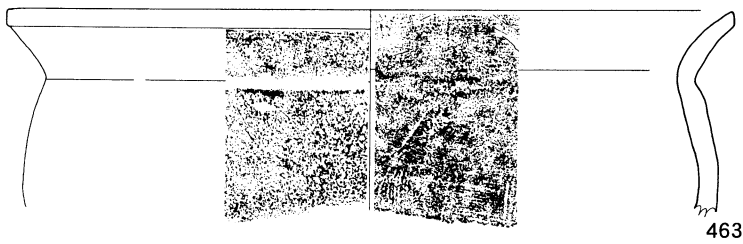
460



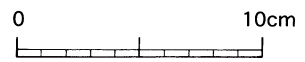
461



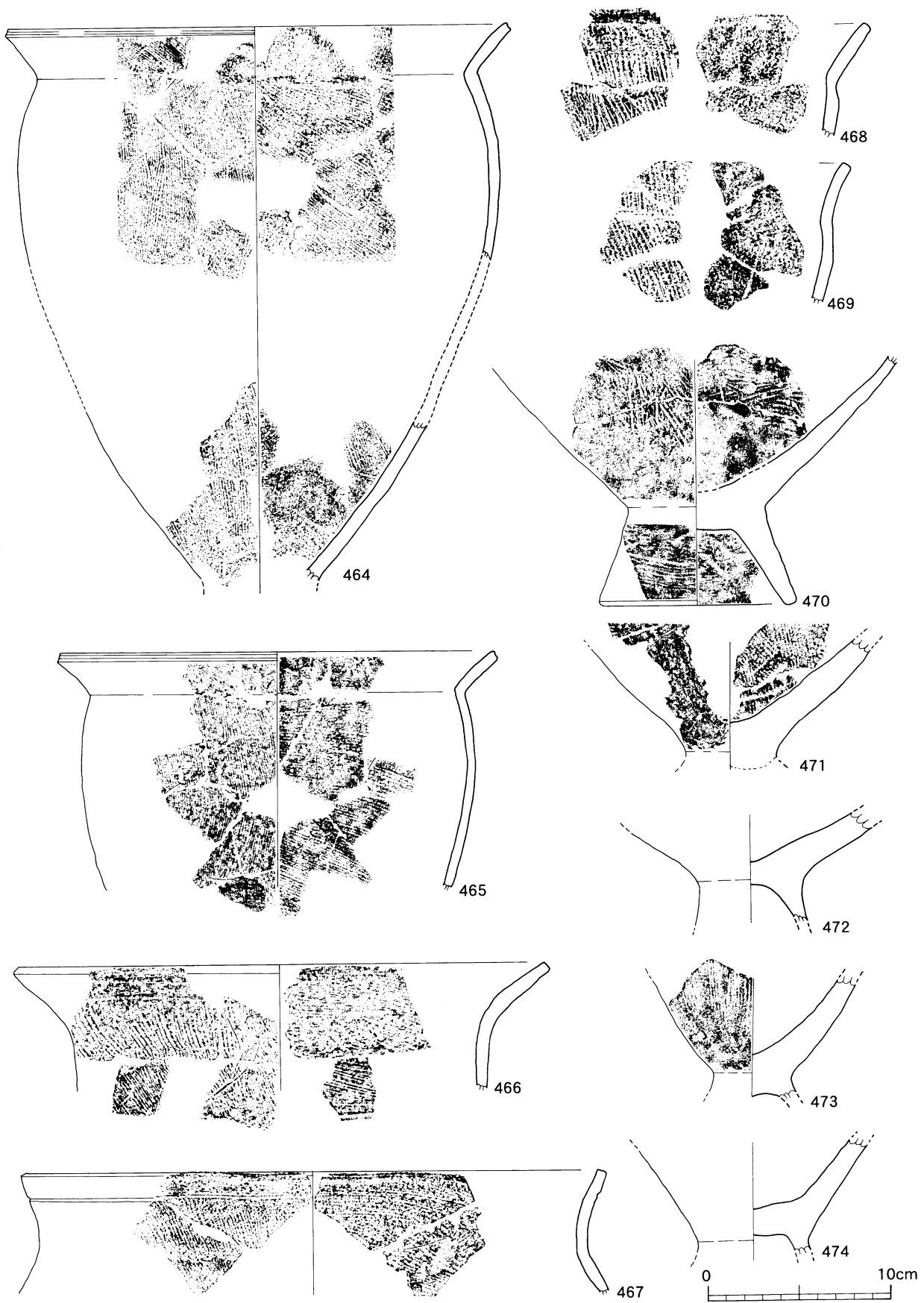
462



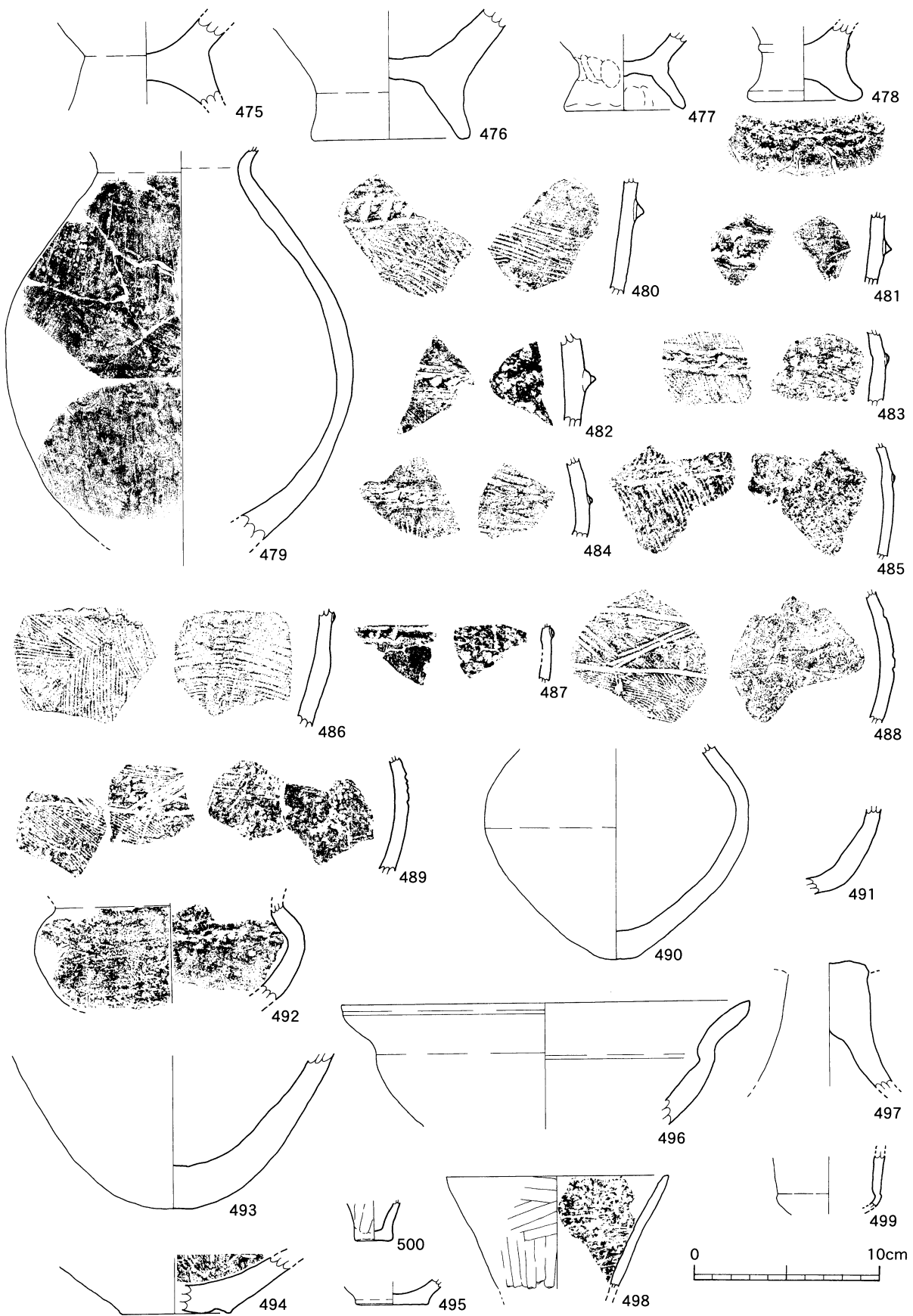
463



第67図 III a層出土土器（古墳時代）(1)



第68図 III a層出土土器（古墳時代）(2)



第69図 III a層出土土器（古墳時代）(3)

に繰り返した文様となっており、これは考えようによっては絡状の突帯を表したものともいえよう。490は尖底気味の丸底、493は安定した丸底である。494と495はいずれも安定した平底である。これらを見ても、壺形土器にもいろいろなタイプのあることがわかる。

496は鉢形土器の口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部外面に1条の沈線が巡っており、内面には底部にかけて大きく屈曲しており、深さは割合に深いといえよう。

497は高杯の脚部である。非常によく精選された粘土を用いており、焼成も極めて良好である。

498と499は罎（小型丸底壺）である。前者は口縁部であるが、非常に高い口縁である。後者は胴部から底部にかけての部分であり、底部は内面にくぼみをもって大きく丸まる。胎土は非常に良く精選された粘土を用いており、焼成も極めて良好である。

第14表 III a層（古墳時代）観察表

遺物番号	区	層	注記番号	器種	部位	焼成	外面色調	内面色調	外面調整	内面調整	石英	角閃石	長石	火山ガラス	その他	備考	挿図
458	I 5	Ⅲa上	19962	甕	完形	良好	明褐色	黄褐色	ナデ・ミガキ	ナデ			○				67
459	H 5	Ⅲa	16218	甕	完形	良好	褐色	明褐色	ハケ目	ナデ			○				67
460	I 5	Ⅲa	20249	甕	完形	良好	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ		○					67
461	H 5	Ⅲa	16288	甕	口縁部	良好	橙色	橙色	ナデ	ナデ	○	○	○				67
462	E 4	Ⅲa	40562	甕	口縁部	良好	黄橙色	灰褐色	ハケ目	ハケ目	○	○					67
463	E 11	V	38729	甕	口縁部	良好	黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ	○	○	○				67
464	I 5	Ⅲa	20258	甕	口縁部~胴部	良好	黒褐色	淡褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				68
465	I 5	Ⅲa	15409	甕	口縁部~胴部	良好	淡褐色	淡褐色	ハケ目	ナデ	○	○					68
466	F 3	Ⅲa	34135	甕	口縁部	良好	明褐色	黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○				68
467	F 5	Ⅲa	42090	甕	口縁部	良好	橙色	淡黄色	ハケ目	ハケ目	○	○	○				68
468	E 6	Ⅱb	37037	甕	口縁部	良好	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○		○				68
469	E 5	Ⅱb	38071	甕	口縁部	良好	明黄褐色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○						68
470	E 5	Ⅱb	38597	甕	脚部	良好	暗黄褐色	赤褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				68
471	E 4	Ⅱa	26943	甕	底部	良好	茶褐色	暗褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				68
472	E 5	Ⅲa	38244	甕	底部	良好	橙色	暗橙色	ハケ目	ナデ	○	○					68
473	B 13		トレンチ	甕	底部	良好	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○	○	○				68
474	E 5	Ⅱb	38112	甕	底部	良好	橙色	橙色	ハケ目	ハケ目	○	○					68
475	E 5	Ⅱb	33977	甕	底部	良好	橙色	黄橙色	ハケ目	ナデ	○	○	○				69
476	E 5	Ⅱb	36787	甕	脚部	良好	黄褐色	黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				69
477	D 11	Ⅲa	38779	甕	脚部	良好	茶褐色	茶褐色	ハケ目	ナデ	○	○					69
478	F 3	Ⅲa	25070	甕	脚部	良好	明黄褐色	明黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				69
479	I 5	Ⅱa	20308	壺	胴部	良好	暗褐色	暗褐色	ハケ目	ナデ		○					69
480	E 5	Ⅱb	38404	壺	胴部	良好	暗黄褐色	茶褐色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
481	E 5	Ⅱb	37503	壺	胴部	良好	淡黄褐色	黄橙色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○						69
482	E 5	Ⅱb	38534	壺	胴部	良好	淡黄色	淡黄色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○		○				69
483	F 4	Ⅲa	41613	壺	胴部	良好	黒褐色	淡黄色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
484	F 4	Ⅲa	41612	壺	胴部	良好	茶褐色	淡黄褐色	刻目突帯・ハケ目	ナデ			○				69
485	F 4	Ⅳ	41891	壺	胴部	良好	淡黄褐色	明褐色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○						69
486	F 5	Ⅲa	34071	壺	胴部	良好	黄橙色	暗黄褐色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
487	I 6	Ⅱb	19788	壺	胴部	良好	黄橙色	淡黄褐色	刻目突帯・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
488	J 6	Ⅲa	4478	壺	胴部	良好	淡黄色	淡褐色	沈線・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
489	I 6	Ⅱa	3993	壺	胴部	良好	淡黄色	淡褐色	沈線・ハケ目	ナデ	○	○	○				69
490	F 5	Ⅱb	38616	壺	胴~底部	良好	淡黄色	明褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				69
491	F 4	Ⅲa	40728	壺	底部	良好	明黄褐色	黒褐色	ハケ目	ナデ	○						69
492	E 5	Ⅱa	38441	壺	胴部	良好	黄橙色	黄橙色	ハケ目	ナデ	○						69
493	E 5	Ⅱb	38602	壺	底部	良好	淡褐色	明褐色	ハケ目	ナデ	○	○	○				69
494	E 6	Ⅱ	39590	壺	底部	良好	明褐色	淡黄褐色	ハケ目	ナデ	○	○					69
495	F 4	Ⅲa	40819	壺	底部	良好	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○	○					69
496	I 6	Ⅲ上	13804	浅鉢	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○						69
497	E 5	Ⅱb	37170	高杯	脚部	良好	明褐色	黒褐色	ハケ目	ナデ	○						69
498	E 6	Ⅱa	39769	罎	口縁部	良好	淡黄褐色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○						69
499	E 6	Ⅱb	42137	罎	胴部	良好	淡黄色	淡黄色	ハケ目	ナデ	○						69
500	G 4	Ⅲa	3027	埴輪	底部	普通	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○				69

第8節 II層の調査 1 (古代)

1 古代の遺構

古代の遺構は、掘立柱建物跡15棟と、建物としてまとめることのできなかった数多くのピット、土坑及び溝状遺構などが挙げられる。まず、建物として復元することができた15棟の掘立柱建物跡について説明を行ない、次いで土坑、そして溝状遺構という順でその概略を記していきたい。

① 掘立柱建物跡

1号建物跡はG・H-4区で確認された1間×3間の身舎の四周に半間の廂が取り付く四面廂建物である。本遺跡のほぼ中央部に当たり、本遺跡の中核となる建物と考えられる。軸方向はN-90°-Eである。

2号建物跡は1号建物跡の南西約3mのH・I-3・4区で確認され、2間×3間の身舎の北側に半間の廂が取り付く片廂建物である。軸方向はN-95°-Eである。

3号建物跡は2号建物跡とほぼ同位置のやや南側のH・I-3・4区で確認され、2間×5間の西側に半間の廂が取り付く片廂建物である。軸方向はN-104°-Eである。

4号建物跡は2号建物跡の北側に接したH・I-4区で確認され、2間×3間の身舎の西側に1間の、また、東側に半間の廂がそれぞれ取り付く両廂建物と考えられる。ただ、西側のものは中央の柱穴を結ぶ線で間仕切となっている可能性も考えられ、その場合は2間×4間の身舎の東側に半間の廂が取り付く片廂建物ということになる。軸方向はN-100°-Eである。

5号建物跡は4号建物跡とほぼ同位置のやや東側のH・I-4区で確認され、2間×2間の総柱建物である。軸方向はN-100°-Eである。

6号建物跡は1号建物跡と軒を接するすぐ東側のG-4区で確認され、2間×3間の身舎の北側に半間の廂が取り付く片廂建物である。軸方向はN-20°-Eである。

7号建物跡は6号建物跡と軒を接してすぐ南側のG-3・4区で確認された2間×2間半の建物である。南側の半間が性格的によくわからないが、廂とはならないようである。軸方向はN-95°-Eである。

8号建物跡は7号建物跡の西側のG・H-3区に接続して建てられており、2間×3間の建物と考えられる。ただ、北側には半間毎に柱穴が見られ、また、東側の中央の柱穴が北に半間ほどずれているのは気にかかる。軸方向はN-90°-Eである。

9号建物跡は1号建物跡の北西のH-4・5区に軒を接するように建てられており、2間×3間の建物である。ただ、北側の中央の柱穴がないことが気に掛かる。軸方向はN-10°-Eである。

10号建物跡は1号建物跡の北側の東寄りに接続するように軒を接してG・H-4・5区に建てられている。2間×3間の建物であるが、北側と西側の柱と柱の中にも柱が見られる。軸方向はN-50°-Eである。

11号建物跡は1号建物跡の北西約8mのF・G-5区で確認され、2間×3間の建物である。他の建物に比べて、若干柱穴が小さいような印象を受ける。軸方向はN-95°-Eである。

12号建物跡は11号建物跡の南東約5mのE・F-4・5区で確認され、2間×2間の建物となり、



第70図 II層検出遺構配置図

15号建物と共に、最も規模の小さい建物といえよう。軸方向は $N-100^{\circ}-E$ である。

13号建物跡は、7号建物跡の南東約7mのF-2・3区で確認され、2間×2間の総柱建物になると考えられる。東西方向よりも南北方向が広く、ほぼ2間の間隔である。軸方向は $N-20^{\circ}-E$ である。

14号建物跡は11号建物跡の北側やや東寄り約6mのE・F-6区で確認され、2間×3間の身舎の東側に1間の廂が取り付く形となるが、廂はすべて半間であるとする、東側に間仕切りを持つ2間×4間の建物といえるかも知れない。軸方向は $N-95^{\circ}-E$ である。

15号建物跡は2号建物跡の西側約3mのI・J-4区で確認され、2間×2間の建物である。12号建物跡と共に本遺跡では最小規模の建物といえよう。軸方向は $N-20^{\circ}-E$ である。

以上、15棟の掘立柱建物跡は、全部が同時期に建っていたのではない。2号と3号、及び4号と5号、それに1号と10号がそれぞれ重なっているか、軒の幅にほとんどゆとりがないことから、少なくとも2時期、建物の軸方向から考えると3時期あるように推定される。

軸方向から考えられる同時期の建物は、次のようになる。

まず、軸方向によって、それぞれの建物跡を分けてみる。

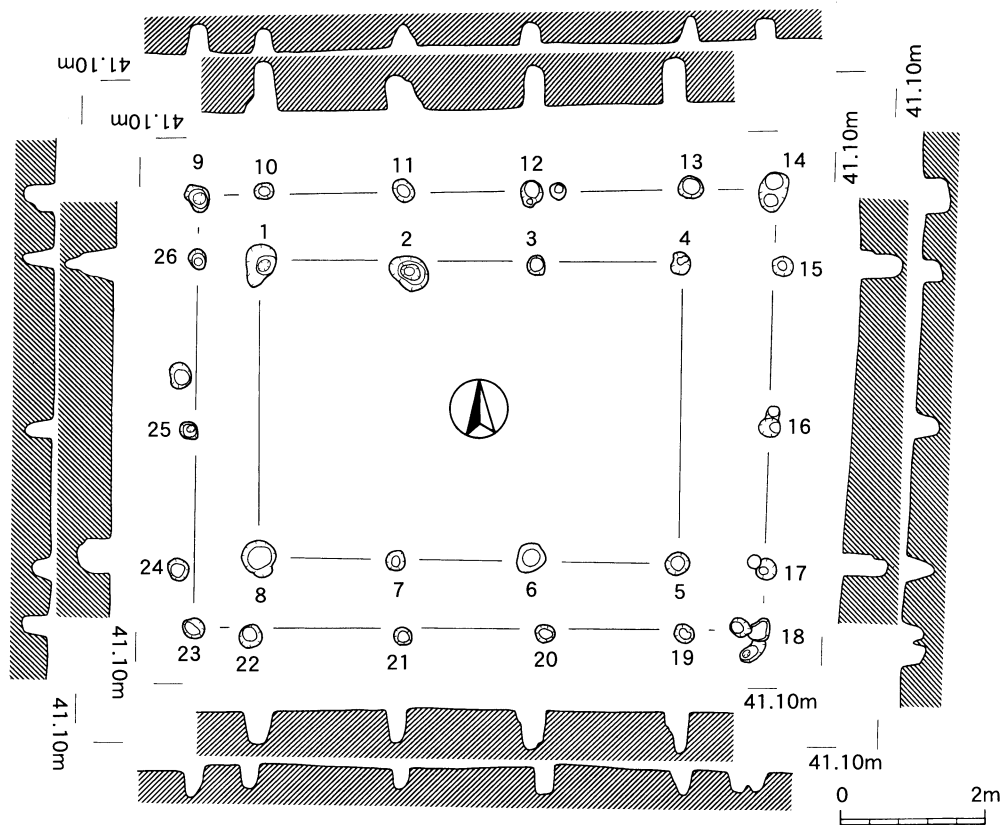
$N-10^{\circ}-E$ ……9号	1棟
$N-20^{\circ}-E$ ……6・13・15号	3ヶ
$N-50^{\circ}-E$ ……10号	1ヶ
$N-90^{\circ}-E$ ……1・8号	2ヶ
$N-95^{\circ}-E$ ……2・7・11・14号	4ヶ
$N-100^{\circ}-E$ ……4・5・12号	3ヶ
$N-104^{\circ}-E$ ……3号	1ヶ

上の分類で、 10° と 20° 、 90° と 95° 、それに、 100° と 104° は、ほぼ同様とみなしてよいようであり、そうすると 50° を1群として、4つのグループに分類することが可能となりそうである。つまり、下のようになろう。

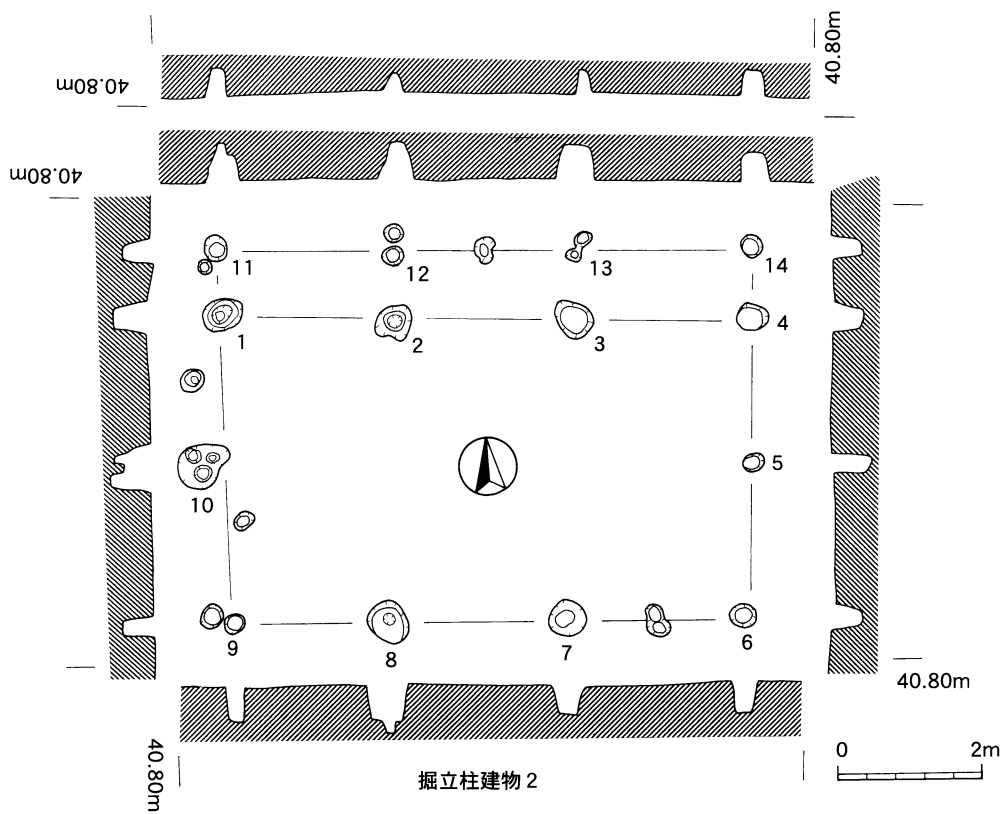
10° 群……6・9・13・15号	4棟
50° 群……10号	1ヶ
90° 群……1・2・7・8・11・14号	6ヶ
100° 群……3・4・5・12号	4ヶ

ひとつの可能性として、これら4つのグループに分けることが考えられる。一般に、軸方向が同じであれば同時期に建っていたと考えることには矛盾はないが、ただ、同じ時期に軸方向の異なった建物は絶対になかったかと言われると、それは不明であるといえる。

これによれば、規模やその位置などから中心的な建物と考えられる1号建物は 90° 群に分類されることから、この時期に建っていたのは6棟だった可能性がある。この位置関係を図で見ると、

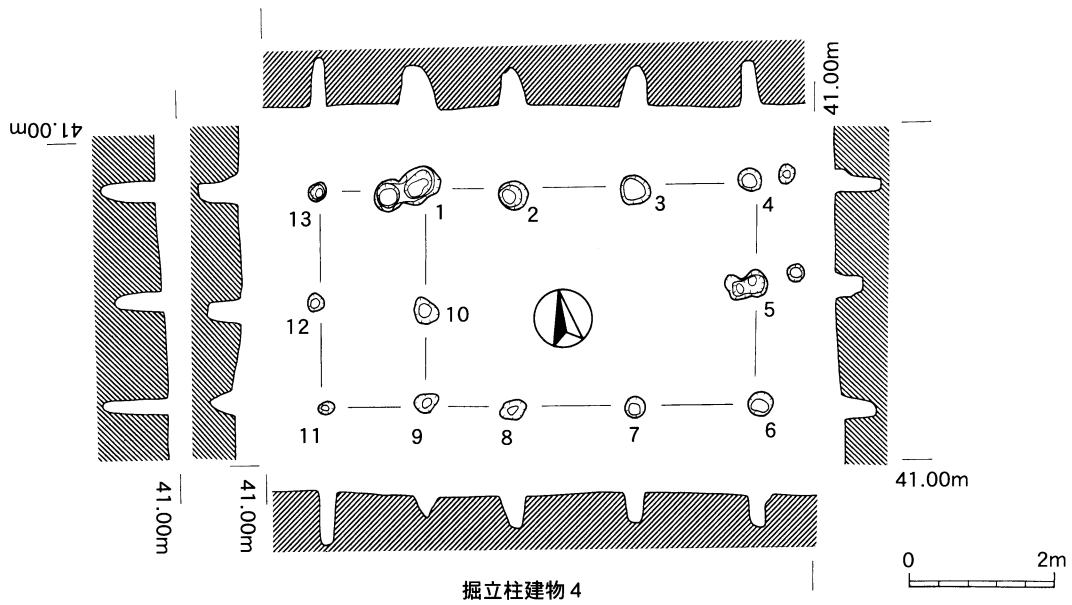
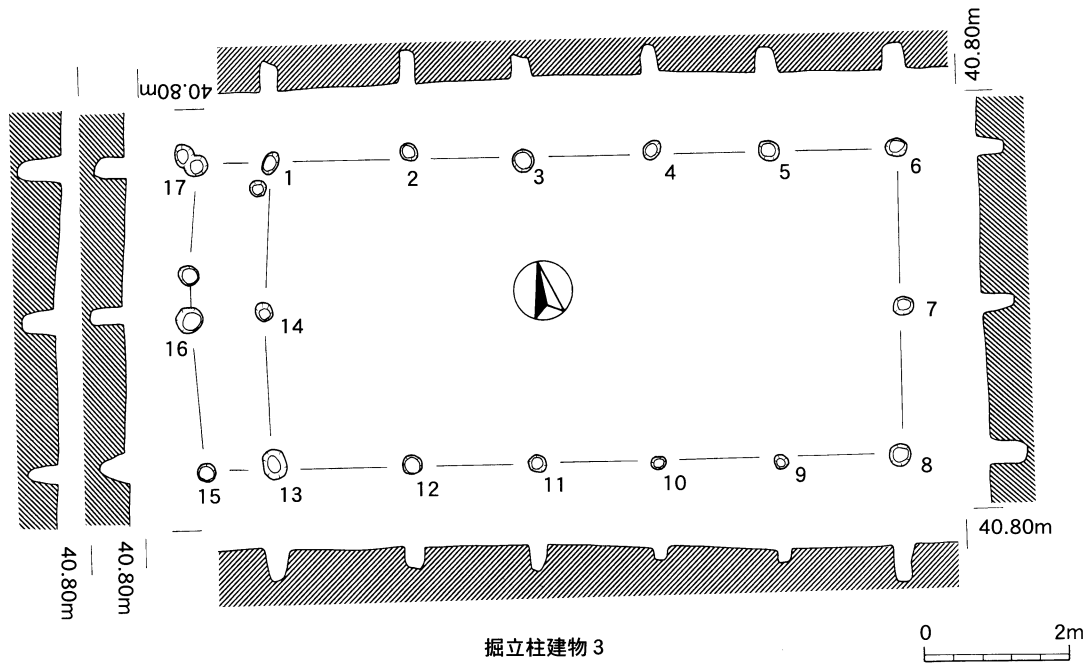


掘立柱建物 1

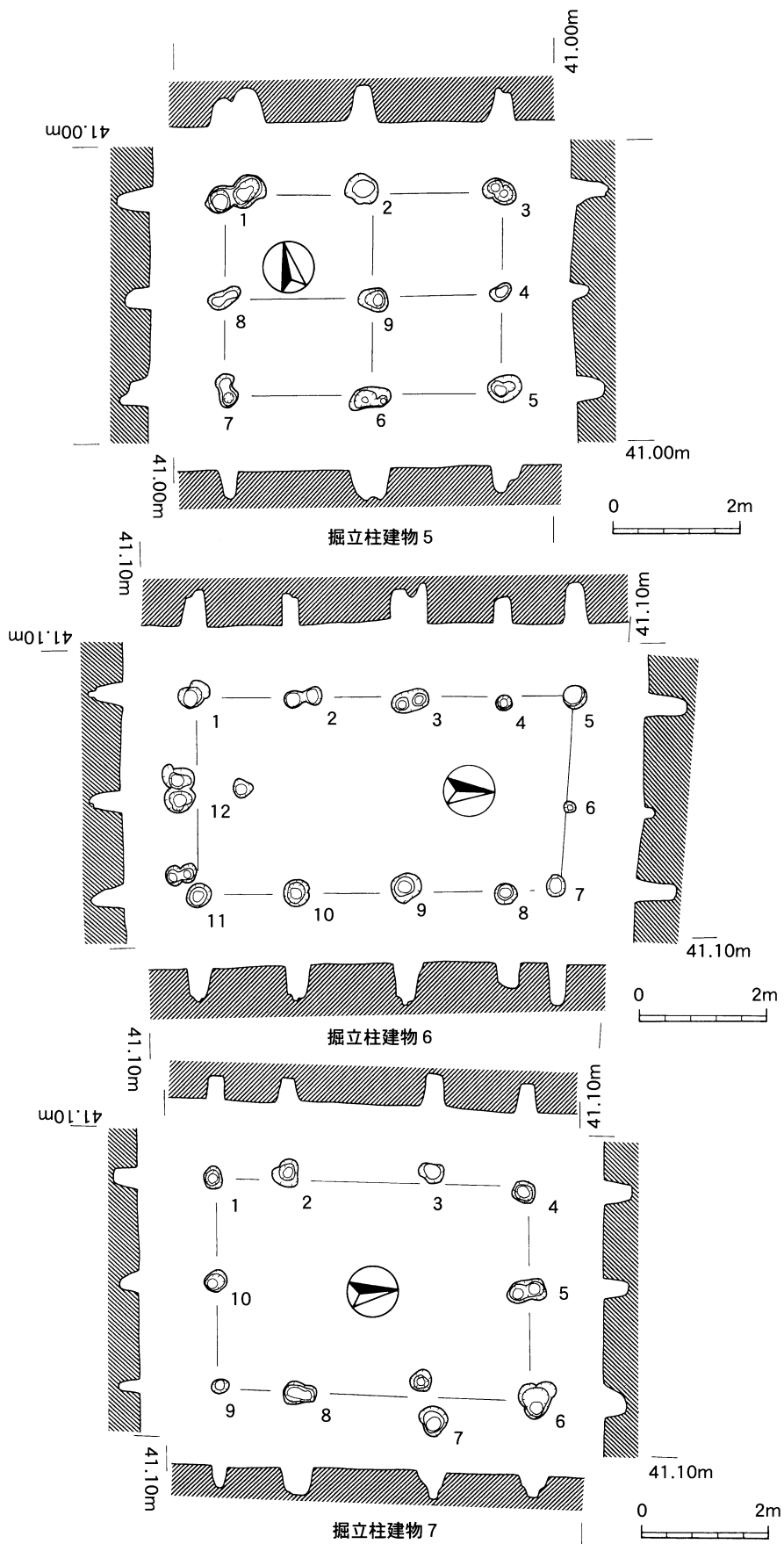


掘立柱建物 2

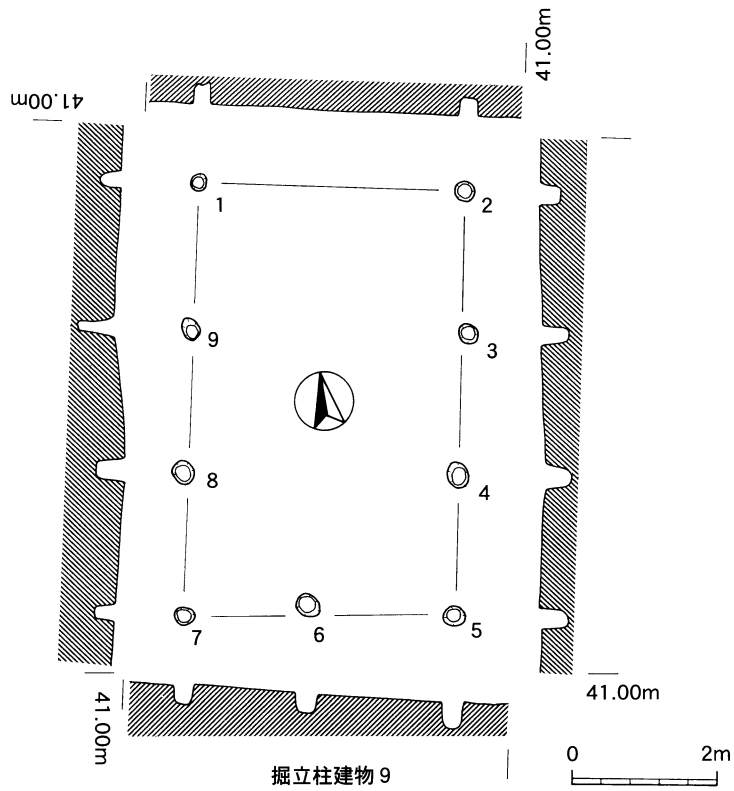
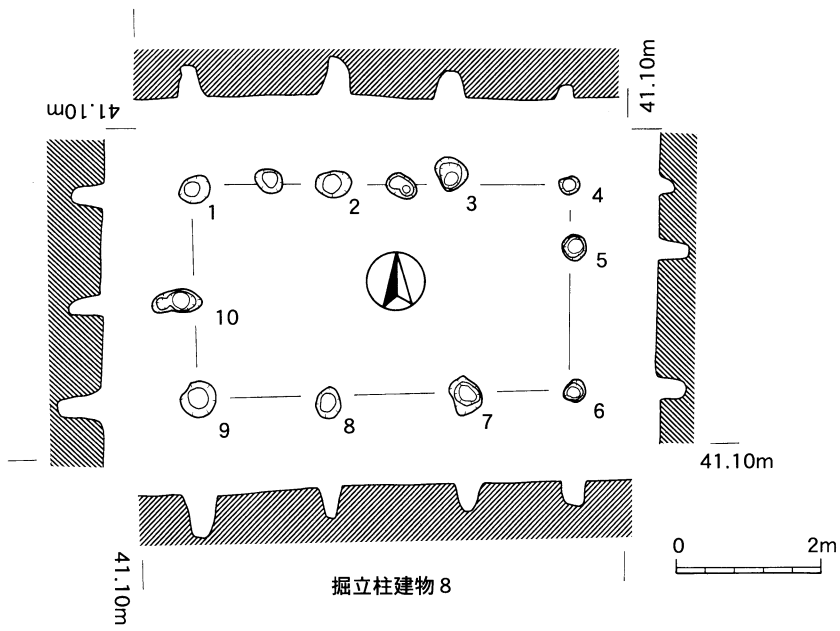
第71図 掘立柱建物跡実測図(1)



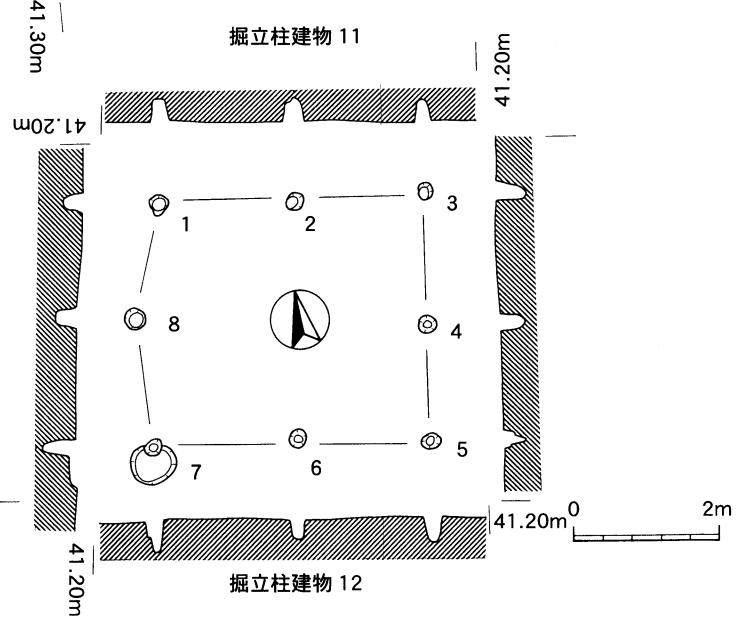
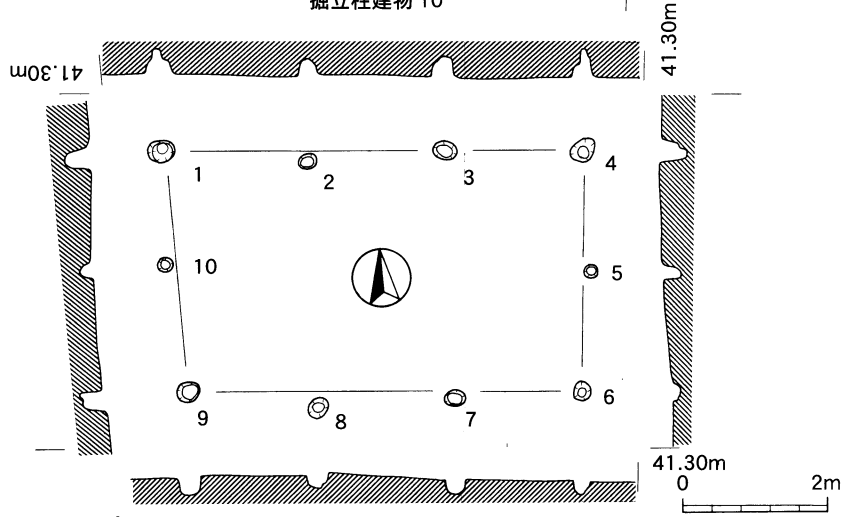
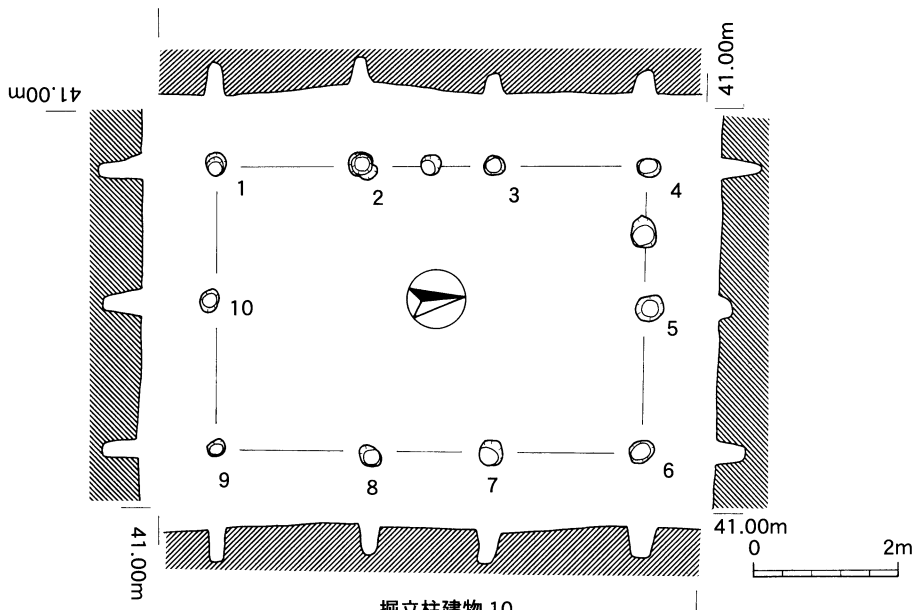
第72図 掘立柱建物跡実測図(2)



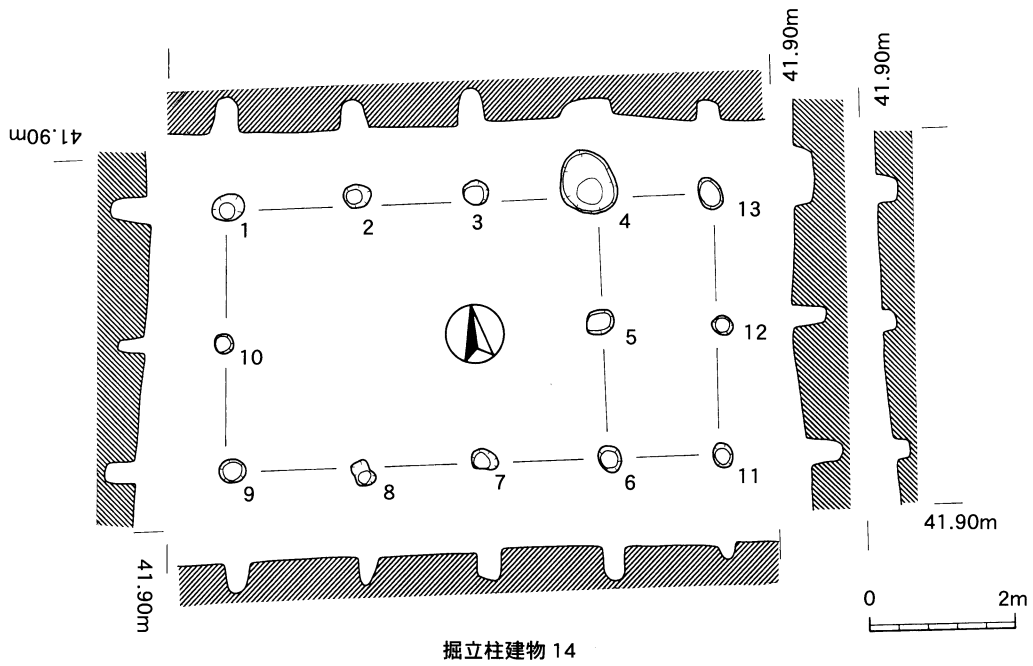
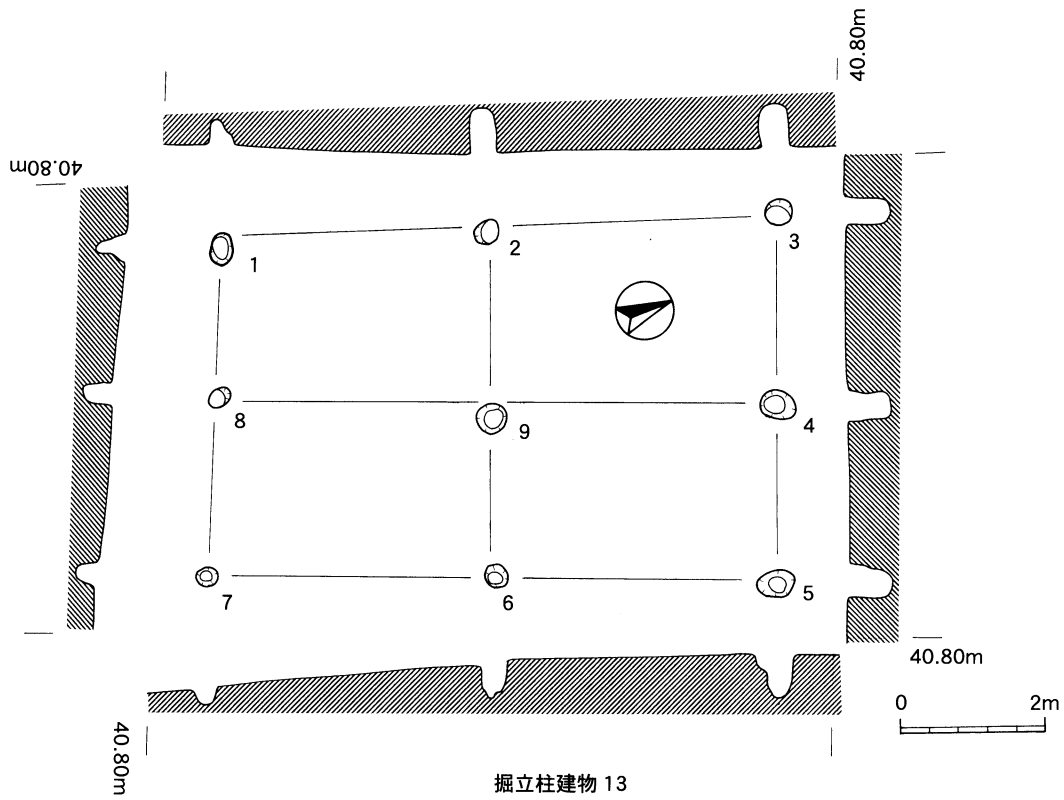
第73図 掘立柱建物跡実測図(3)



第74図 掘立柱建物跡実測図(4)



第75図 掘立柱建物跡実測図(5)



第76図 掘立柱建物跡実測図(6)

7号と8号の間隔が狭いようであり、建て替えの可能性も考えられなくはない。それ以外の建物の位置は、適度な間隔を保っていることから、同時に建っていたものと考えて支障はないようである。

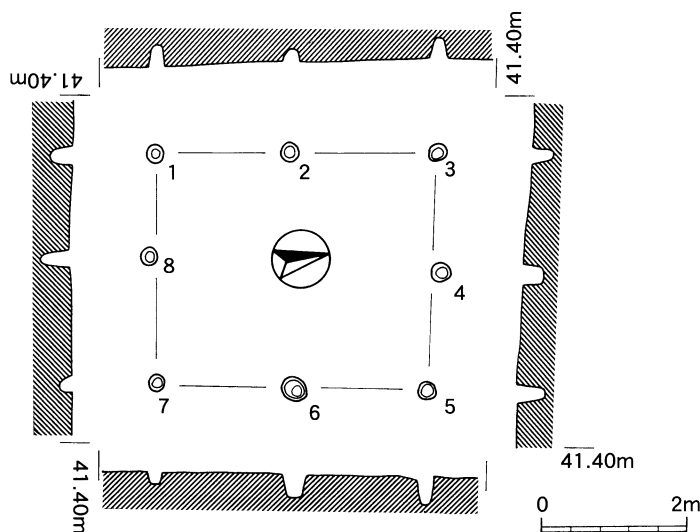
次に、10°群について見てみよう。6号以下適度な間隔をもって並んでいるようであるが、これについては中心となる建物がどれであるのかが不鮮明である。梁間と桁行とが東西と南北方向の軸の違いであると考えれば、これらの間隔なども合わせ考えたときに、これら10棟のうち7号または8号のどちらか一方が同時に建っていたとしても、格段、不都合は感じられない。つまり、1号を中心とした9棟からなる建物群と捉えて、何ら支障はないと思われるのである。

100°群については、4号と5号は確実に重複しているため、時期差あるいは時間差を考えなければならぬことは当然である。また、3号も2号との重複であるため、同様に考えて処理しなければならぬまい。つまり、2号・3号と、4号・5号とが時期差あるいは時間差として捉えるならば、それぞれが個別に1号に付随して同時に建っていたと考えるのに不都合は感じられない。12号の位置も適度な間隔であるので、同時併存を考えるのも無理はない。

ただ、50°を軸とする10号のみは、1号と接しているため、時期をずらして考えるのが妥当と思われる。

以上を総合して考えると、建物跡として残された柱穴の位置関係からはある程度の時期差あるいは時間差は考えられるものの、ほとんど同様な時期の建物として使われた可能性がある。したがって、最盛期の本遺構群の在り方は、1号建物を中心として最大11棟の建物が並ぶ、壮大な建物群だったことが推定されるということである。

ただ、それぞれの建物の性格等については、出土した遺物の散らばり具合や、地面に残された柱の跡などからは追求することはできなかった。



掘立柱建物 15

第77図 掘立柱建物跡実測図(7)

掘立柱建物跡 1 計測表

2間×4間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=90°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 8 - P 1	400	596	P 8 - P 7	186	571	P 1	67	60	42	
P 7 - P 2	396		P 7 - P 6	185		P 2	46	55	49	
P 6 - P 3	402		P 6 - P 5	200		P 3	56	38	23	
P 5 - P 4	413		P 1 - P 2	188		P 4	62	30	23	
P 23 - P 24	84		P 2 - P 3	175		P 5	63	33	29	
P 24 - P 25	196		P 3 - P 4	199		P 6	52	46	40	
P 25 - P 26	228		P 23 - P 22	79		P 7	44	31	27	
P 26 - P 9	88		P 22 - P 21	212		P 8	53	50	46	
P 22 - P 10	606		P 21 - P 20	194		P 9	40	41	36	
P 21 - P 11	611		P 20 - P 19	190		P 10	30	26	25	
P 20 - P 12	609	P 19 - P 18	103	P 11	28	32	29			
P 19 - P 13	614	P 25 - P 16	797	P 12	27	39	30			
P 18 - P 17	84	P 9 - P 10	88	P 13	33	34	31			
P 17 - P 16	200	P 10 - P 11	191	P 14	34	55	33			
P 16 - P 15	220	P 11 - P 12	175	P 15	26	30	26			
P 15 - P 14	92	P 12 - P 13	218	P 16	32	41	17			
			P 13 - P 14	112	P 17	38	43	29		
平均	328	596		205	674		40	37	30	

掘立柱建物跡 2 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=95°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 14 - P 4	98	506	P 14 - P 13	242	732	P 6	40	36	34	
P 4 - P 5	198		P 13 - P 12	248		P 7	38	50	43	
P 5 - P 6	210		P 12 - P 11	242		P 8	68	60	51	
P 18 - P 3	91		P 4 - P 3	240		P 9	45	29	28	
P 3 - P 7	49		P 3 - P 2	246		P 10	54	73	60	
P 12 - P 2	90		P 2 - P 1	239		P 1	52	58	50	
P 2 - P 8	410		P 5 - P 10	730		P 2	50	56	41	
P 11 - P 1	92		P 6 - P 7	244		P 3	45	56	48	
P 1 - P 10	218		P 7 - P 8	242		P 4	40	43	38	
P 10 - P 9	211		P 3 - P 9	210		P 11	40	38	30	
				P 14	40	34	30			
				P 13	32	41	20			
				P 12	24	30	26			
平均	167	514		288	718		44	45	37	
						P 5	52	30	25	

掘立柱建物跡 3 計測表

2間×5間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=104°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 6 - P 7	217	423	P 6 - P 5	175	959	P 8	50	21	20	
P 7 - P 8	206		P 5 - P 4	161		P 9	18	21	18	
P 5 - P 9	427		P 4 - P 3	176		P 10	16	20	17	
P 4 - P 10	429		P 3 - P 2	157		P 11	36	26	23	
P 3 - P 11	415		P 2 - P 1	190		P 12	28	28	26	
P 2 - P 12	429		P 1 - P 17	100		P 13	42	40	33	
P 1 - P 14	206		P 7 - P 14	855		P 14	45	27	26	
P 14 - P 13	208		P 14 - P 16	101		P 1	41	33	21	
P 17 - P 16	212		P 8 - P 9	165		P 2	45	28	22	
P 16 - P 15	210		P 9 - P 10	168		P 3	30	32	30	
				P 4	37	30	23			
				P 5	33	31	27			
				P 6	36	29	25			
				P 7	45	28	25			
				P 15	39	25	23			
				P 16	42	35	33			
				P 17	59	51	28			
平均	296	420		205	956		38	30	25	

掘立柱建物跡 4 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=100°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長さ (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 4 - P 5	137	309	P 4 - P 3	160	593	P 6	44	34	32	
P 5 - P 6	172		P 3 - P 2	170		P 7	41	29	28	
P 3 - P 7			P 2 - P 1	128		P 8	43	38	25	
P 2 - P 8			P 1 - P 13	135		P 9	28	33	25	
P 1 - P 10	169		P 6 - P 7	173		P 10	45	38	30	
P 10 - P 9	128		P 7 - P 8	166		P 1	54	95	44	
P 13 - P 12	153		P 8 - P 9	118		P 2	50	40	35	
P 12 - P 11	195		P 9 - P 11	134		P 3	53	43	38	
			P 12 - P 10	150		P 4	60	34	30	
			P 10 - P 5	420		P 5	37	54	35	
平均	159	310		175	585		53	40	30	
						P 11	90	25	18	
						P 12	68	28	23	
						P 13	71	31	25	

第15表 掘立柱建物跡観察表(1)

掘立柱建物跡5 計測表

2間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=100°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 3 - P 4	154	308	P 3 - P 2	217	442	P 5	44	53	42	
P 4 - P 5	154		P 2 - P 1	225		P 6	50	67	34	
P 2 - P 9	175	332	P 4 - P 9	194	445	P 7	47	53	32	
P 9 - P 6	157		P 9 - P 8	251		P 8	39	54	28	
P 1 - P 8	153	308	P 5 - P 6	212	425	P 1	58	38	34	
P 8 - P 7	155		P 6 - P 7	213		P 2	58	53	50	
						P 3	56	54	25	
						P 4	29	36	25	
						P 9		46	37	
平均	158	316		219	437		48	50	34	

掘立柱建物跡6 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=2°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 5 - P 6	174	299	P 5 - P 4	108	598	P 11	52	38	35	
P 6 - P 7	125		P 4 - P 3	160		P 12	50	78	45	
P 4 - P 8		297	P 3 - P 2	170	608	P 1	57	48	35	
P 3 - P 9			P 2 - P 1	160		P 2	50	59	24	
P 2 - P 10		302	P 6 - P 2		560	P 3	45	58	30	
P 1 - P 12	158		P 7 - P 8	79		P 4	41	24	24	
P 12 - P 11	151	309	P 8 - P 9	157	P 8	38	36	30		
			P 9 - P 10	170	P 9	64	48	40		
			P 10 - P 11	154	P 10	55	40	38		
					P 7	65	34	29		
					P 6	14	19	18		
					P 5	64	36	34		
平均	152	298		144	588		49	43	31	

掘立柱建物跡7 計測表

2間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 9 - P 10	160	323	P 9 - P 8	125	500	P 9	32	27	22	
P 10 - P 1	163		P 8 - P 7	191		P 10	30	35	30	
P 7 - P 3		342	P 7 - P 6	184	481	P 1	38	36	28	
P 6 - P 5	180		P 1 - P 2	118		P 2	37	44	33	
P 5 - P 4	156	336	P 2 - P 3	216	P 3	50	40	28		
			P 3 - P 4	147	P 4	45	39	32		
					P 5	38	60	32		
					P 6	35	63	44		
					P 7	42	46	32		
					P 8	43	51	32		
平均	165	333		164	491		39	44	31	

第16表 掘立柱建物跡観察表(2)

掘立柱建物跡8 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 4 - P 5	98	298	P 6 - P 7	147	516	P 9	60	50	44	
P 5 - P 6	200		P 7 - P 8	191		P 10	44	24	22	
P 3 - P 7		296	P 8 - P 9	178	544	P 1	43	46	39	
P 2 - P 8			P 5 - P 10			P 2	51	48	40	
P 1 - P 10	153	289	P 4 - P 3	160	515	P 3	40	47	36	
P 10 - P 9	136		P 3 - P 2	164		P 4	20	31	24	
			P 2 - P 1	191	P 5	42	36	33		
					P 6	38	32	30		
					P 7	41	53	49		
					P 8	45	43	36		
平均	146	295		171	525		42	41	35	

掘立柱建物跡9 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 5 - P 6	204	374	P 5 - P 4	191	584	P 5	37	29	26	
P 6 - P 7	170		P 4 - P 3	198		P 6	27	35	29	
P 4 - P 8		378	P 3 - P 2	195	588	P 7	26	24	28	
P 3 - P 9			P 7 - P 8	198		P 8	40	34	27	
P 2 - P 1		367	P 8 - P 9	194	588	P 9	49	32	23	
			P 9 - P 1	196		P 1	29	25	22	
					P 2	25	29	28		
					P 3	30	30	26		
					P 4	38	38	28		
平均	187	374		195	586		34	31	26	

掘立柱建物跡10 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 9 - P 10	202	383	P 9 - P 8	213	582	P 9	48	28	20	
P 10 - P 1	181		P 8 - P 7	159		P 10	53	33	24	
P 8 - P 2		401	P 7 - P 6	210	592	P 1	58	32	24	
P 7 - P 3			P 1 - P 2	201		P 2	34	42	32	
P 6 - P 5	196	395	P 2 - P 3	181	592	P 3	28	26	24	
P 5 - P 4	199		P 3 - P 4	210		P 4	56	30	24	
					P 5	19	40	34		
					P 6	44	38	31		
					P 7	48	38	30		
					P 8	40	34	27		
平均	195	395		196	587		43	34	27	

掘立柱建物跡11 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 4 - P 5	164	332	P 6 - P 7	170	534	P 6	29	29	24	
P 5 - P 6	168		P 7 - P 8	188		P 7	22	31	24	
P 3 - P 7	150	340	P 8 - P 9	176	584	P 8	21	30	28	
P 2 - P 8		338	P 5 - P 10	188		P 9	25	34	30	
P 1 - P 10	150	317	P 4 - P 3	190	576	P 10	17	22	22	
P 10 - P 9	167		P 3 - P 2	198		P 1	35	40	20	
			P 2 - P 1			P 2	24	26	22	
						P 3	29	34	28	
						P 4	40	40	32	
						P 5	26	22	20	
平均	162	331		185	565		27	31	23	

掘立柱建物跡12 計測表

2間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 3 - P 4	179	339	P 1 - P 2	181	363	P 7	48	28	23	
P 4 - P 5	160		P 2 - P 3	182		P 8	30	30	28	
P 2 - P 6	162	325	P 8 - P 4	198	391	P 1	28	28	26	
P 1 - P 8		337	P 7 - P 6			181	P 2	33	28	
P 8 - P 7	175		P 6 - P 5		379	P 3	42	27	20	
						P 4	33	28	27	
						P 5	37	30	23	
						P 6	26	28	26	
平均	169	334		185	378		35	28	25	

掘立柱建物跡13 計測表

2間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=00°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 3 - P 4	258	505	P 3 - P 2	385	745	P 7	29	30	26	
P 4 - P 5	247		P 2 - P 1	360		P 8	40	34	24	
P 2 - P 9	257	476	P 4 - P 9	385	755	P 1	40	43	28	
P 9 - P 6	219	370	P 9 - P 8	370		P 2	61	38	33	
P 1 - P 8	217	461	P 5 - P 6	380	770	P 3	59	38	35	
P 8 - P 7	244		P 6 - P 7	390		P 4	57	50	39	
						P 5	60	52	36	
						P 6	48	33	30	
						P 9	41	41	40	
平均	240	481		378	757		49	40	32	

掘立柱建物跡14 計測表

2間×3間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=95°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 9 - P 10	175	358	P 9 - P 8	180	675	P 9	42	38	32	
P 10 - P 1	183		P 8 - P 7	162		P 10	35	25	24	
P 8 - P 2	190	386	P 7 - P 6	176	675	P 1	53	46	36	
P 7 - P 3		366	P 6 - P 11	157		P 2	40	39	32	
P 6 - P 5	190	369	P 10 - P 5	510	675	P 3	48	35	32	
P 5 - P 4	179		P 5 - P 12	165		P 4	22	90	76	
P 11 - P 12	180	361	P 1 - P 2	175	660	P 5	48	42	40	
P 12 - P 13	181		P 2 - P 3	160		P 6	46	39	30	
			P 3 - P 4	160		P 7	40	36	29	
			P 4 - P 13	165		P 8	36	37	26	
						P 11	22	36	27	
						P 12	18	30	29	
						P 13	30	44	31	
平均	181	368		201	670		37	41	34	

掘立柱建物跡15 計測表

2間×2間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	N=20°E (cm)	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
P 3 - P 4	167	331	P 5 - P 6	178	363	P 7	18	25	22	
P 4 - P 5	164		P 6 - P 7	185		P 8	40	26	24	
P 2 - P 6	144	330	P 4 - P 8	202	400	P 1	32	28	24	
P 1 - P 8		318	P 3 - P 2			183	P 2	18	28	
P 8 - P 7	174		P 2 - P 1		385	P 3	29	28	26	
						P 4	28	27	26	
						P 5	39	24	23	
						P 6	31	40	33	
平均	162	326		187	383		29	25	22	

第17表 掘立柱建物跡観察表(3)

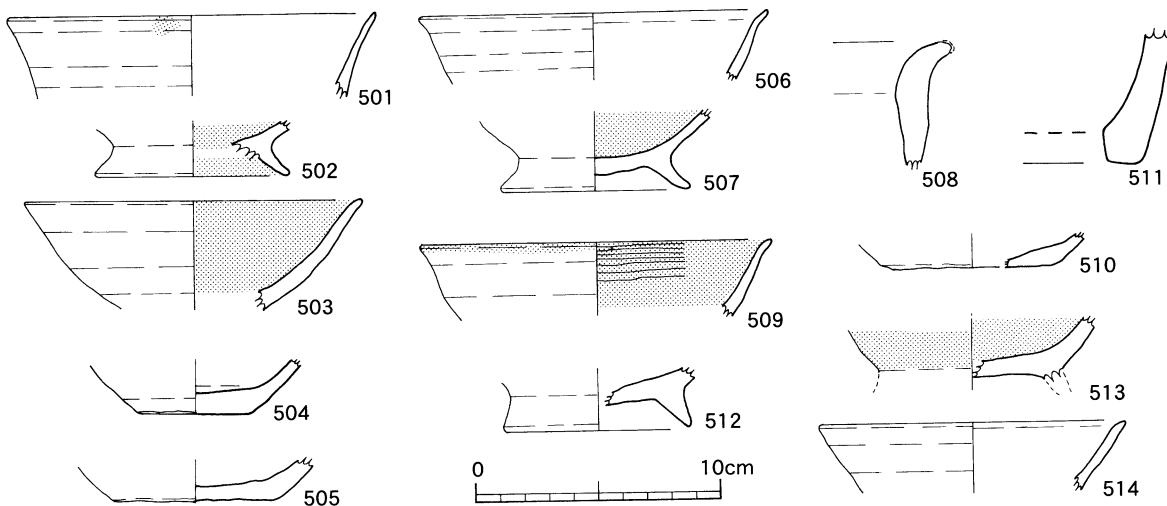
○ 掘立柱建物跡出土の遺物

15棟の掘立柱建物跡のピット内から出土した遺物はそれほど多くはない。加えて、小破片が多かったために、図化できるものはなかった。そんな中で、14号建物跡のみは数量共に多く、図化した。

土師器の碗・坏・皿のほか、内黒土師器の碗・坏、それに甕や甑などが出土している。

501は碗の口縁部であるが、外面には淡い赤色塗彩の痕跡がかすかに残っている。502と503は内黒土師器の碗と坏である。前者は内外面共にナデ調整による整形であるのに対して、後者は両面共にミガキ調整によって整形されている。504と505は坏の底部である。底の径が前者よりも後の方が広く、安定している。

506は碗の口縁部であるが、内面にミガキ調整が見られる。507は碗の底部であるが高台部分の広がり大きい。508は甕の口縁部である。内面には鈍い稜が見られ、小さく外反している。器壁もそれほど厚くはない。511は底部であるが、下面部分には幅の広い穿孔が見られ、形状も不明なため器種が特定できない。穿孔が円形であれば甑の可能性があるとされる。512と513は、それぞれ外面に赤色の塗彩のあとが辛うじて観察できる。



第78図 掘立柱建物出土遺物

第18表 掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	部位	焼成	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	長石	石英	角閃石	砂粒	その他	備考
501	14号建物P1	碗	口縁部	普通	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○		○			赤色塗彩
502	〃 P3	内黒碗	底部	良好	黒色	黄白色	ナデ	ナデ	○	○				
503	〃 P6	内黒坏	口縁部	良好	灰色	黄白色	ミガキ	ミガキ		○	○			
504	〃 P7	坏	底部	普通	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	○		○			
505	〃 P8	坏	底部	普通	灰白色	灰色	ナデ	ナデ	○		○			
506	〃 〃	坏	口縁部	良好	明褐色	黄白色	ミガキ	ナデ	○					
507	〃 P12	碗	底部	良好	灰色	黄白色	ミガキ	ナデ	○					
508	〃 〃	甕	口縁部	良好	黒褐色	褐色	ナデ	ナデ	○	○				
509	〃 P19	坏	口縁部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○					
510	〃 〃	坏	底部	普通	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	○		○			
511	〃 〃	甑	底部	良好	赤褐色	赤褐色	ケズリ	ナデ	○	○				
512	〃 P20	碗	底部	普通	橙褐色	橙褐色	ナデ	ナデ	○		○			赤色塗彩
513	〃 〃	碗	底部	良好	橙褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		○				赤色塗彩
514	〃 P26	碗	口縁部	普通	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ	○	○				

② 土坑

E・F-7・8区を中心に、F～H-4～6区からも土坑が検出された。埋土の中に古代の遺物が含まれるものがあることや、全体的な埋土の様子などからこの時期のものとして説明していきたい。

遺構は、おおよそ検出した順に従って、1号、2号、3号、……23号土坑と呼称した。

1号は、E-8区で検出された。長径は144cm、短径は79cm、深さは35cmであり、平面形は長方形である。ほぼ東西方向に位置している。埋土は茶褐色の砂質土である。

2号もE-8区で検出され、長径は143cm、短径は127cm、深さは53cmであり、方形に近い楕円形をしている。ほぼ東西方向に位置しており、下面にはさらに2つの小ピットが見られる。埋土中に碗の完形品を始めとして、土師器の破片が含まれていた。埋土はⅢa層主体でやや濁っている。

3号は、H-6区で検出された。長径は208cm、短径は200cm、深さは55cmあり、形状はほぼ円形といえる。坏の完形品を始め、100点を越す土師器などの破片が出土した。埋土は3層に分層できるようである。aは黒色粘質土でⅡa層に相当し、bは暗褐色粘質土でⅡb層に相当することから、c層が埋まった後、凹んでいたところにⅡa層及びⅡb層が堆積したものと判断される。cは茶褐色粘質土で、Ⅲa層にややⅡb層の土が混入したもので、土坑が遺棄された後にⅡ層が堆積する際に流水作用などで周辺の土が崩壊して土坑底部の土と混ざって堆積したものかと考えられる。

4号は、H-4区で検出された。長径は100cm、短径は83cm、深さは34cmであり、円形に近い楕円形である。土師器の碗などの割合に大きな破片が上部から出土している。東側が2段になっている。埋土はⅡ層にⅢ層が混じる。

5号は、H-4・5区にまたがって検出された。長径は117cm、短径は112cm、深さは34cmであり、略方形といえる。土師器の破片が相当数出土した。埋土はaがⅡa層、bがⅡb層、cはⅢa層である。

6号は、G-6区で検出され、長径は101cm、短径も101cmであり、円形といえる。深さは23cmである。割合に大きな破片が出土した。埋土はⅡb層が主体である。

7号は、F-6区で検出された。長径は69cm、短径は67cm、深さは10cmであり、楕円形である。埋土はⅡa相当層である。

8号は、F-5区で検出され、長径は80cm、短径は67cm、深さは21cmであり、楕円形といえる。土師器や須恵器などの小破片が出土した。埋土はⅡa層主体である。

9号は、D-8区で検出され、長径は139cm、短径は96cm、深さは47cmであり、長方形である。埋土はⅡb層である。

10号もD-8区での検出である。長径100cm、短径97cm、深さは12cmで、略円形である。埋土はⅡ層である。

11号は、D-7区で検出され、長径91cm、短径80cm、深さは27cmであり、略円形を呈する。土師器の碗や甕が出土しており、埋土はⅡb層である。

12号は、D-8区で確認され、長径56cm、短径は60cmで、深さは77cmと他の土坑と異なり、非常に深い。埋土はⅡ層と考えられる。形状はほぼ円形である。

13号は、D-7・8区にまたがって確認された。長径は150cm、短径が74cm、深さは44cmであり、

楕円形をしている。南側は2段となり、円形となっている。埋土はⅡ層を主体とする。

14号は、D-6区の用地境付近で確認され、長径は103cm、短径は99cm、深さは42cmである。やや崩れた形ではあるが、長方形といえよう。埋土はⅡ層を主とする。

15号は、D-7区で検出され、長径64cm、短径は54cm、深さは14cmで、楕円形である。埋土はⅡb層である。

16号は、E-7・8区にまたがって検出され、長径は78cm、短径75cm、深さは40cmある。形状は楕円形をしており、埋土はⅡ層主体である。

17号は、E-7区で検出された。長径70cm、短径63cm、深さ37cmで、楕円形である。埋土はⅡ層が主体となっている。

18号は、E-7区で確認され、長径は88cm、短径85cm、深さは19cmのほぼ円形をしている。土師器の甕や碗などの割合に大きな破片が出土し、埋土はⅡb層である。

19号は、E-7・8区で検出された。長径101cm、短径82cm、深さは31cmあり、不整形といえる。埋土はⅡ層主体である。土師器など土器の小破片が6点出土した。

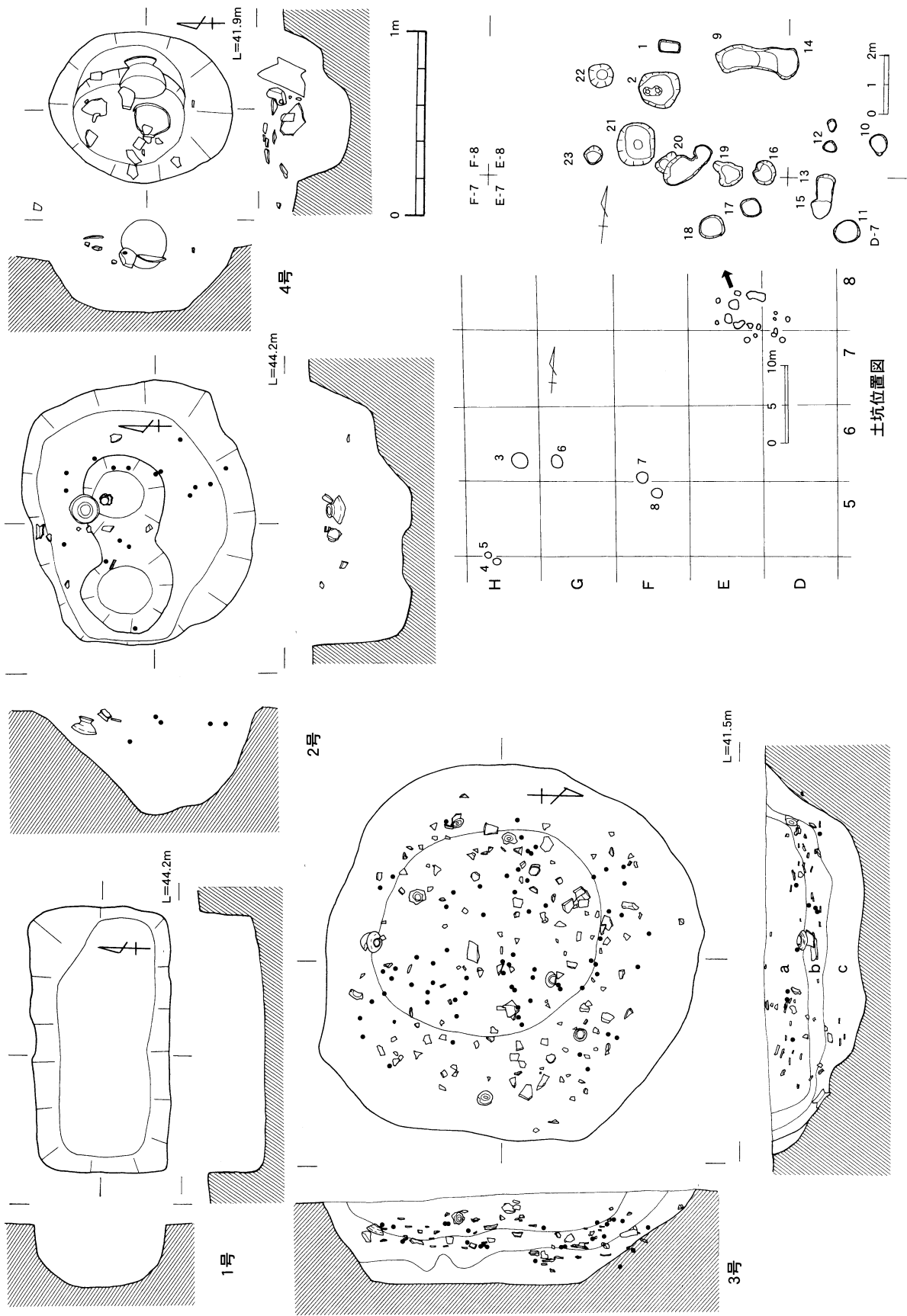
20号もE-7・8区で確認され、長径は199cm、短径が118cm、深さ51cmであり、形状は不整形である。礫と、土師器の小破片が合計6点出土した。埋土はⅡ層主体である。

21号は、E-8区で検出され、長径は138cm、短径は136cm、深さは66cmあり、遺物も土師器や須恵器などが多数出土した。形はほぼ円形といえる。埋土は暗褐色土であり、Ⅱb層として捉えられる。

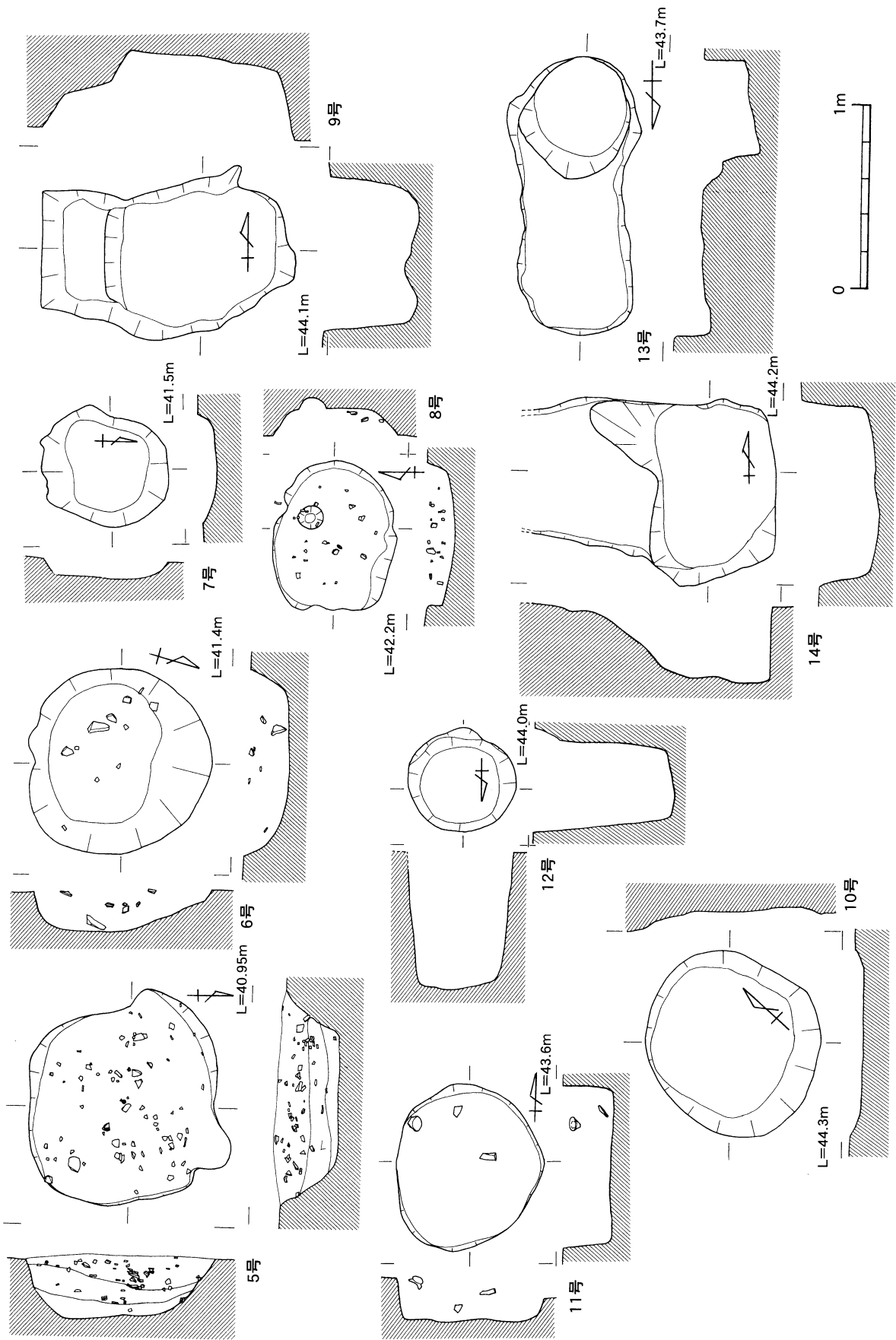
22号もE-8区で確認され、長径78cm、短径は69cm、深さ30cmであり、楕円形といえる。埋土はⅡ層を主とする。

23号も、E-8区で検出された。長径が69cm、短径68cm、深さは57cmで、円形である。埋土はⅡ層を主体とする。

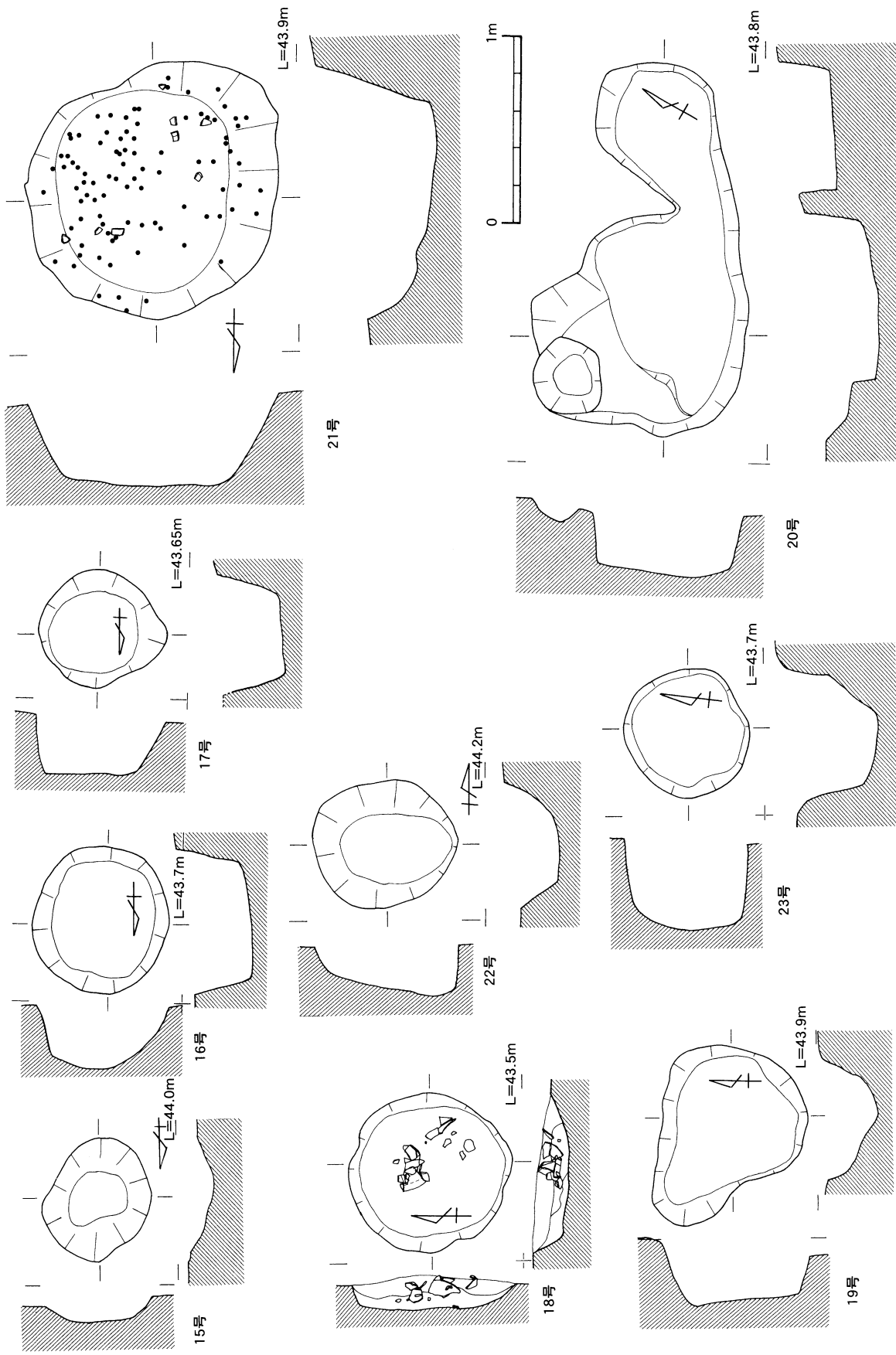
これらの土坑の中には、土師器などの遺物が入っているものとそうでないもの、また、入っているものでも小破片のものと割合に大きな破片として入っているものなどのように、いくつかのパターンがあることから、性格としていくらか分かれるかもしれない。ただ、深さがそれほど深くないことからすると、そのいくらかを除いては墓壙と考えることは難しく、土器の破片などが遺棄されていることから推定すると、ゴミ捨て場のような性格が強いように思われる。ただ、割合に大きな破片が出土したものについては、それらとは異なった性格を考えたほうがよいものがあるかも知れない。たとえば、祭祀的な性格などである。



第79图 土坑(1)



第80图 土坑(2)



第81図 土坑(3)

○ 土坑内出土の遺物

土坑内出土の遺物の中で、図化できたものを掲載した。3号土坑出土のものが相当に多かったものの、それ以外の土坑からの出土はそれほど多くはなく、そのなかでも図化できるものは極めて少数であった。

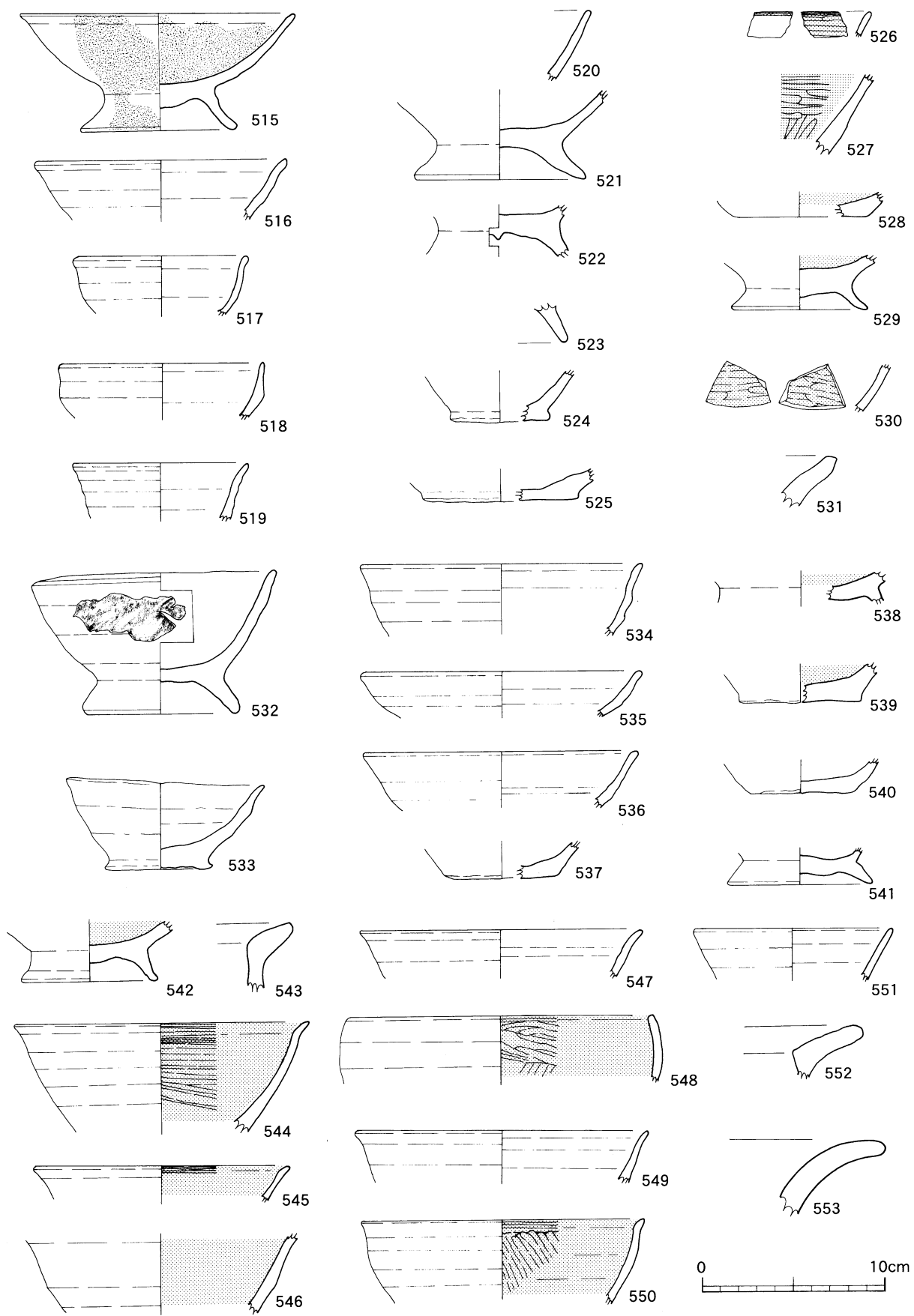
515～531は2号土坑出土である。515は完形の甕である。底面にヒビが入っているものの、胎土・焼成共に良好である。内面及び外面の一部にはススと思われる淡黒色のシミが見られる。口径14.8cm、内面の深さは3.9cmあり、胴部・脚部とも大きく広がっている。器壁は薄く丁寧に調整されているが、外底が丸く張り出している。516～520は土師器の甕及び坏，521～530は内黒土師器・黒色土師器である。518は胴部で大きな張り出しをもち，519は外反する口縁をもっている。521は大振りの甕で高台が大きく開く。522は外底にろくろでの製作時に中央に寄った粘土が除去されずに残っている。526～529は内黒土師器である。526は内面と口唇部外縁に横方向のミガキがみえる。527は底部近くには縦方向の、胴部から口縁部にかけては横方向のミガキがある。529は外底が肥厚した甕の底部である。530は黒色土器B類の胴部である。両面とも横方向のミガキがあり，外面は赤みを帯びる黒色である。焼成は良好である。

532と533は4号土坑からの出土である。532はやや立ち上がった器形の甕である。全体的に器壁が分厚く口縁部から底部まで均一の厚みをもつ。外面及び内面の一部には淡黒色のススの付着が見られる。口縁直径は13.6cm、内面の深さは5.2cmあり，胎土・焼成共に良好な完形品である。533も完形に復元された充実高台の甕である。口縁直径11.2cm、深さは3.9cmである。口縁の一部がやや曲がっているが，耳皿ほどではなく，意図的なものとは考えにくい。

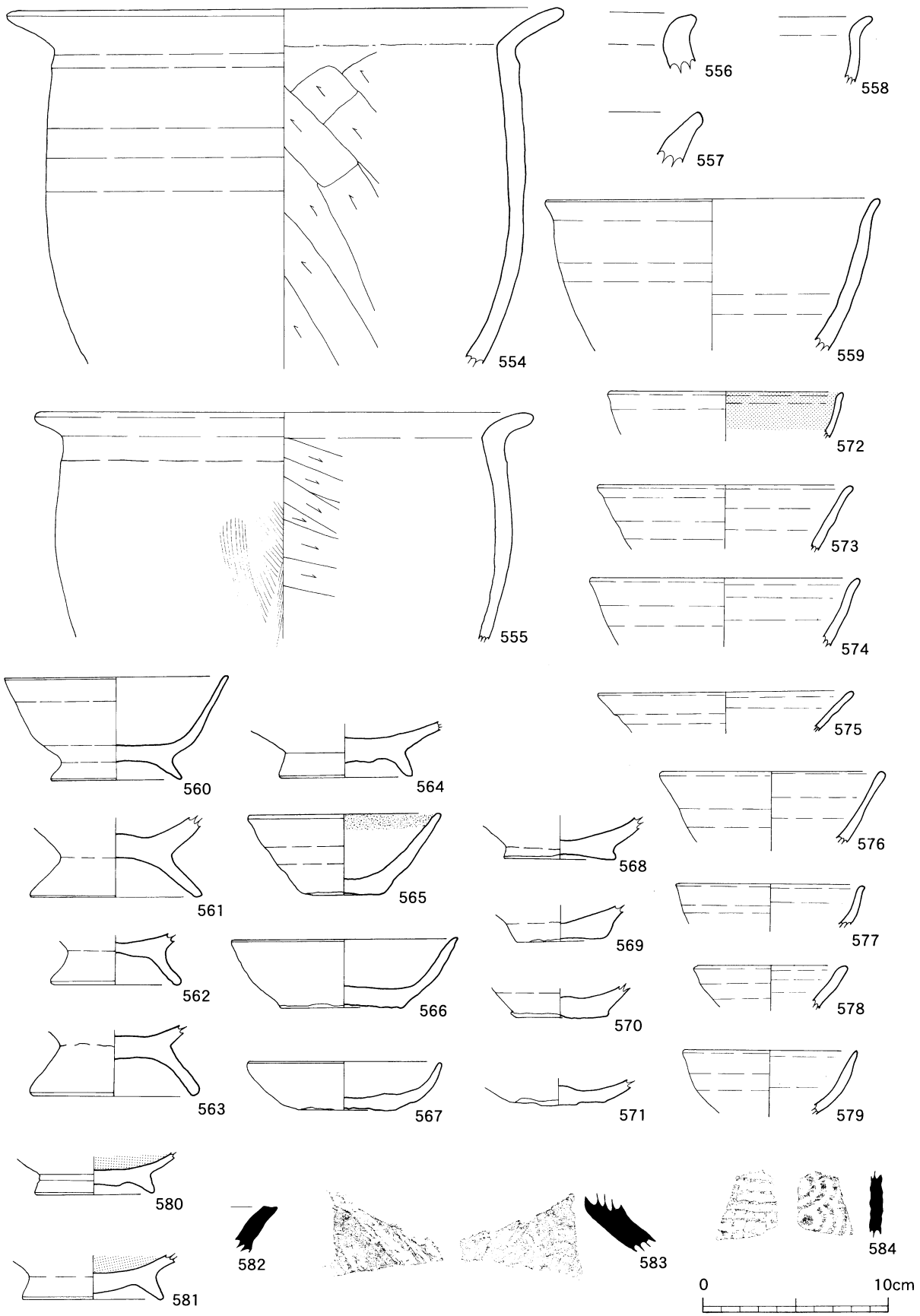
534～536は5号土坑出土である。いずれも甕あるいは坏の口縁部付近である。538は6号土坑出土の内黒土師器の甕，539～541は8号土坑の甕及び坏の底部である。541は高台の高さは低いが横に広がる器形である。542と543は11号土坑出土の甕の底部と土師甕の口縁部である。後者は内面をヘラケズリによって調整されており，胎土・焼成共に極めて良好である。544と545は19号土坑出土である。いずれも甕の口縁部であり，内黒の土師器である。

546～549は20号土坑の出土である。549以外は内黒土師器である。548は口縁部が大きく内傾しており，鉢と考えられる。550～553は21号土坑出土である。前2点は土師器の甕・坏の口縁部，後2点は土師器の甕の口縁部である。甕はいずれも外側に大きくカーブするもので，553は内面に明瞭な稜を有する。

554～584は3号土坑から出土したものである。554～556は土師器の甕の口縁部である。554は底部を欠くものの，その大部分を復元できるものである。口縁直径30.0cm，残存深さは19.5cmであり，底部は緩やかな丸底と考えられる。557と559は深さの深い鉢と推定される。558・560～564は甕，565～571は坏および充実高台の底部と考えられる。561は甕であるが，内底に布目の圧痕が1cm×2cmの範囲に残っている。非常に丁寧な作りをしている。565は内面の口縁に，全周の5分の2ほどにわたってススの付着が見られることから，灯明用の器として使用されたものと考えられる。572～579は甕または坏の口縁部である。580と581は内黒土師器甕の底部である。582～584は須恵器で，582は壺の口縁部，583は甕の頸部である。584は甕の胴部と考えられる。外面に格子タタキ，内面に同心円状の当て具痕跡が鮮明に残っている。



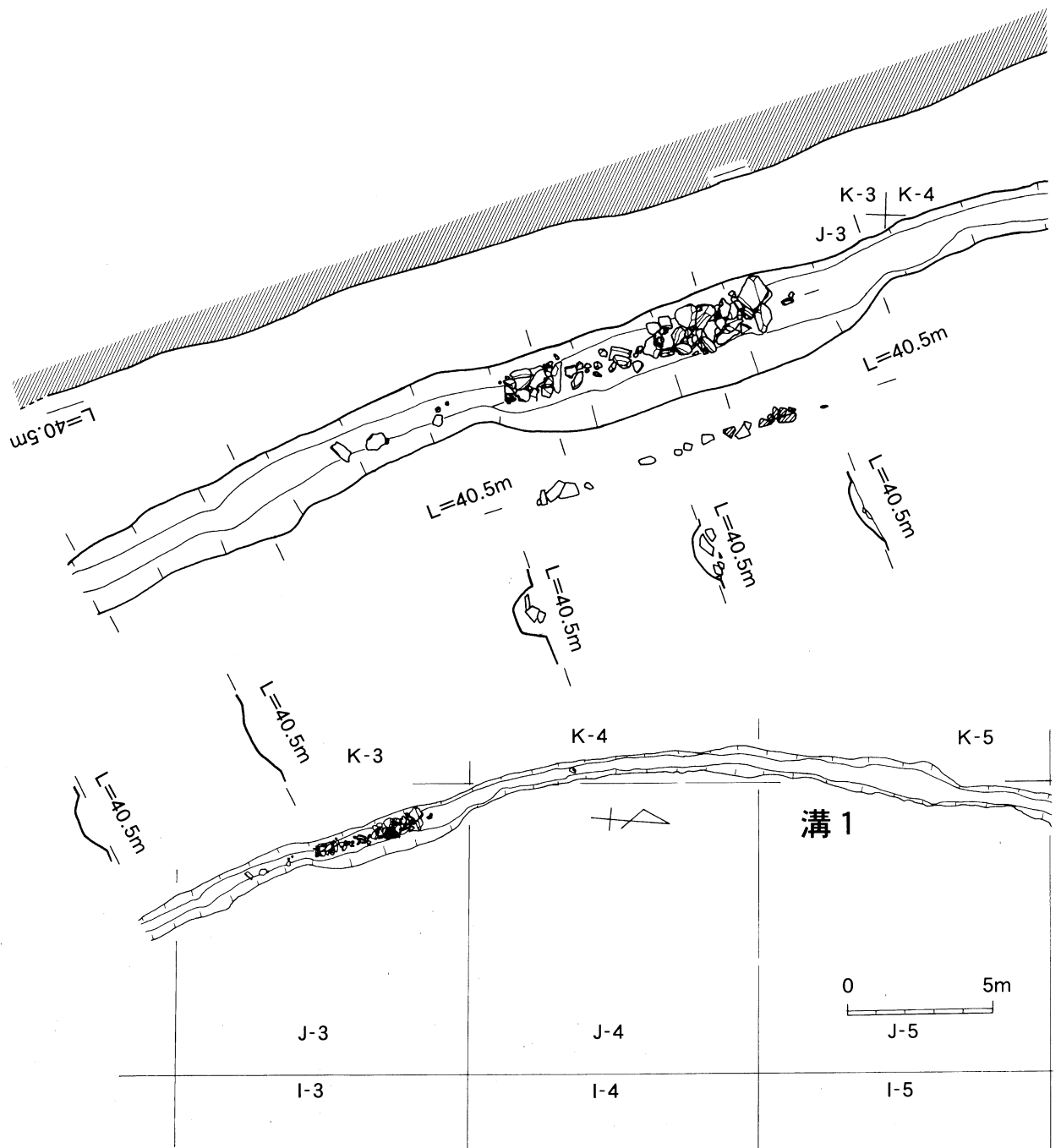
第82图 土坑内出土遺物(1)

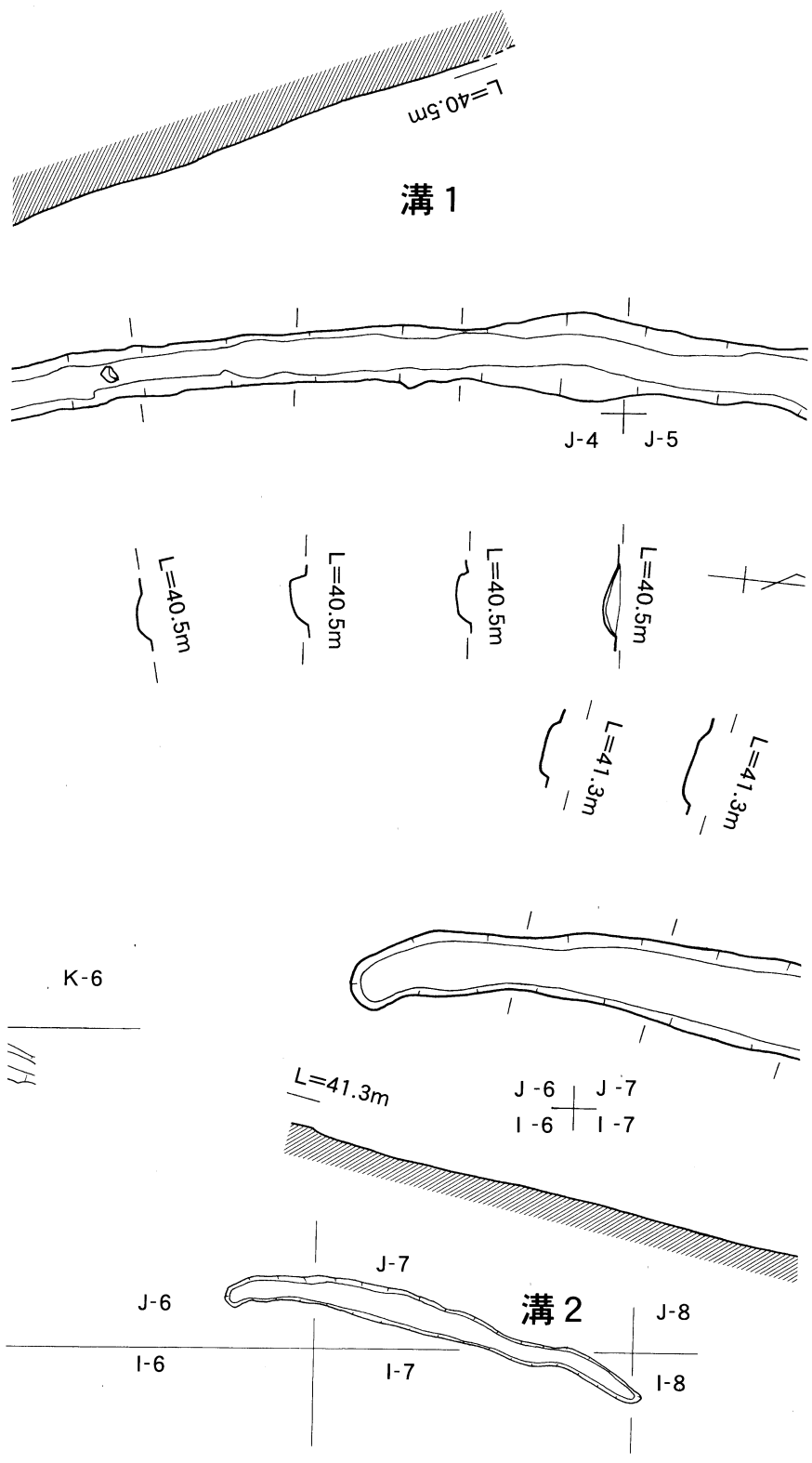


第83图 土坑内出土遺物(2)

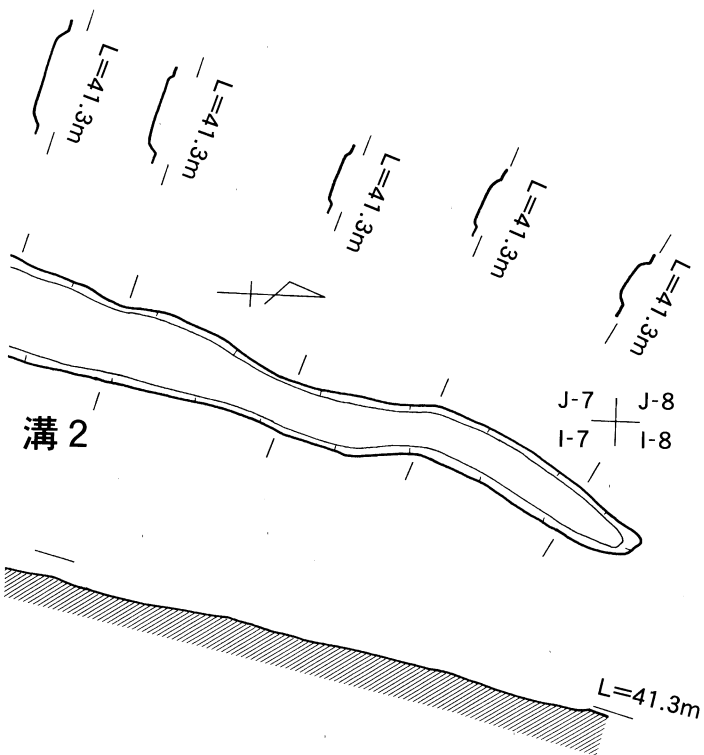
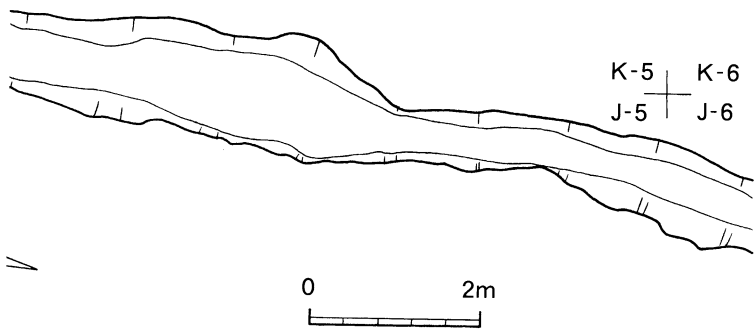
第19表 土坑出土遺物観察表

遺物番号	出土遺構	器種	部位	焼成	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	長石	石英	角閃石	砂粒	備考
515	2号土坑	碗	完形	良好	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	○		○	○	
516	2号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
517	2号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
518	2号土坑	坏	口縁部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ	○				外面煤付着
519	2号土坑	碗	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○		○		
520	2号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
521	2号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
522	2号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				外底ヘソ
523	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
524	2号土坑	坏	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
525	2号土坑	坏	底部	良好	黄白色	灰色	ナデ	ナデ	○				
526	2号土坑	内黒碗	口縁部	良好	黒色	淡灰黄色	ミガキ	ナデ	○				
527	2号土坑	内黒碗	胴部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○				
528	2号土坑	内黒坏	底部	良好	黒色	淡褐色	ミガキ	ナデ	○			○	
529	2号土坑	内黒碗	底部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○				
530	2号土坑	内黒外黒	胴部	良好	黒色	黒赤色	ミガキ	ミガキ	○				
531	2号土坑	土師甕	口縁部	普通	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○		○		
532	4号土坑	碗	完形	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○	○	外面煤付着
533	4号土坑	坏	完形	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
534	5号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
535	5号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
536	5号土坑	碗	口縁部	良好	灰色	灰色	ナデ	ナデ	○				
537	6号土坑	坏	底部	普通	灰色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
538	6号土坑	内黒碗	底部	良好	灰色	淡褐色	ミガキ	ナデ	○				
539	8号土坑	内赤坏	底部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		内面赤彩
540	8号土坑	坏	底部	良好	灰色	灰色	ナデ	ナデ	○	○			
541	8号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		両面煤付着
542	11号土坑	内黒碗	底部	良好	黒色	赤褐色	ミガキ	ナデ	○			○	
543	11号土坑	土師甕	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ナデ	○				
544	19号土坑	内黒碗	口縁部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○				
545	19号土坑	内黒碗	口縁部	普通	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○		○		
546	20号土坑	内黒碗	口縁部	良好	黒色	明褐色	ミガキ	ミガキ	○				
547	20号土坑	内黒碗	胴部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○		○		
548	20号土坑	内黒鉢	口縁部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○				
549	20号土坑	碗	胴部	良好	黒色	明褐色	ナデ	ミガキ	○				
550	21号土坑	碗	口縁部	普通	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
551	21号土坑	碗	口縁部	普通	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
552	21号土坑	土師甕	口縁部	良好	赤褐色	黒色	ナデ	ナデ	○				外面煤付着
553	21号土坑	土師甕	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○			○	
554	3号土坑	土師甕	口～胴部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○			
555	3号土坑	土師甕	口～胴部	良好	赤褐色	赤褐色	ヘラケズリ	ナデ	○	○			
556	3号土坑	土師甕	口縁部	良好	黒色	赤褐色	ナデ	ナデ	○	○	○		
557	3号土坑	土師甕	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
558	3号土坑	鉢	口縁部	良好	灰色	灰色	ナデ	ナデ	○	○			
559	3号土坑	鉢	口～胴部	良好	黄白色	赤褐色	ナデ	ナデ		○	○	○	
560	3号土坑	碗	完形	普通	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
561	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				内面布圧痕
562	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
563	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○	○	○		
564	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
565	3号土坑	坏	完形	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		内口縁煤付着
566	3号土坑	坏	完形	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○	○			
567	3号土坑	皿	完形	普通	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
568	3号土坑	碗	底部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○	○		
569	3号土坑	碗	底部	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ	ナデ		○	○		
570	3号土坑	碗	底部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○	○			
571	3号土坑	碗	底部	良好	淡褐色	淡褐色	ナデ	ナデ		○			内面赤彩
572	3号土坑	内赤坏	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ミガキ	ミガキ	○				
573	3号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
574	3号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
575	3号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
576	3号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○		○		
577	3号土坑	碗	口縁部	良好	灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	○				
578	3号土坑	碗	口縁部	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ	○				
579	3号土坑	碗	口縁部	良好	黄白色	黄白色	ナデ	ナデ	○				
580	3号土坑	内黒碗	底部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ	○		○		外面赤彩
581	3号土坑	内黒碗	底部	良好	黒色	黄白色	ミガキ	ナデ		○	○		
582	3号土坑	須恵壺	口縁部	良好	灰色	灰色	ナデ	ナデ	○				
583	3号土坑	須恵壺	頸部	良好	灰色	灰色	同心円オサエ	平行タタキ	○				
584	3号土坑	須恵大甕	胴部	良好	赤紫色	灰色	同心円オサエ	格子タタキ	○				





第84図 溝状遺構



③ 溝状遺構

J・K-2～6区とI・J-6～8区に2本の溝状遺構が確認された。いずれもほぼ南北に走るものであり、長い方を溝1、短い方を溝2として説明していきたい。

溝1は検出した長さが32.4m、幅が70cm～180cm、深さが12cm～32cmであった。南の方へはまだ続くと考えられたが、調査箇所が崩壊する可能性があったため台地の端部までは調査が行なえなかった。J-3区の溝の中には拳大から人頭大の礫が60個ほど投げ込まれていた。この付近のみ幅も広がっていることから、溝が遺棄される段階で埋められるなどした際に破棄されたものと考えられる。この礫があるあたりを最高所として、北および南側に緩やかに傾斜している。ただ、このあたりは礫とともに周辺と同じような成分の土からなる廃土も同時に捨てられたことも想像されることから、本来のレベルはもっと下にあったことも考えられ、そうすると全体として南側へ傾斜していた可能性が考えられるかもしれない。埋土はやや濁った黒褐色土を主体としているが、場所によっては下部にやや砂質の暗褐色土の見られるところもある。

溝2は、溝1の北東約10mのところであり、北からやや東に向かって開いている。長さは13.5m、幅は64cm～120cmあり、深さは7cm～16cmである。埋土は溝1とほぼ同様である。礫は投げ込まれておらず、傾斜方向は南である。割合に緩やかであるといえるが、溝1よりは若干、傾斜の角度が大きいということはいえよう。

この2本の溝状遺構は、その位置や方向、それに埋土などから、ほぼ同時期と考えられる。その時期を確定するために、溝状遺構の中から出土した遺物を見てみると、土師器や染付などの陶磁器類であった。一部攪乱されていることから、明確な時期までは確定できないものの、おおよそ古代末から中世の頃と考えて大過ないと思われる。

そう考えると、この東側に広がる掘立柱建物跡群とさほど変わらない時期のものであると推定されることから、この面の遺構を全体的に捉えて考えなければならないといえそうである。そう考えると、この溝はとりもなおさず区画溝という性格をもつものということになる。当台地の使われ方から考えても、台地の西の方に段を離れた区画溝を掘り、その内側（東側）の安定した場所に何棟もの建物を建てて使用していたことが考えられ、遺跡の性格等を推定するのに都合がよいように思われるのである。

II層出土遺物

II層では9世紀第4四半期から10世紀前半頃のものと思われる遺物がE・F-4・5区H・I-5・6を中心に約2万5000点出土した。遺物の内訳は土師器・内黒土師器・内赤土師器・須恵器・越州窯青磁・焼塩土器・耳皿・紡錘車・高坏・金属器・石器・墨書土器などである。各器種のうち土師器の坏または碗と思われるものが最も多く出土した。

1 土師器

土師器の器種には坏・碗・皿・鉢・甕・甌がある。

1) 坏 (第86図 585~594・第87図 595~624)

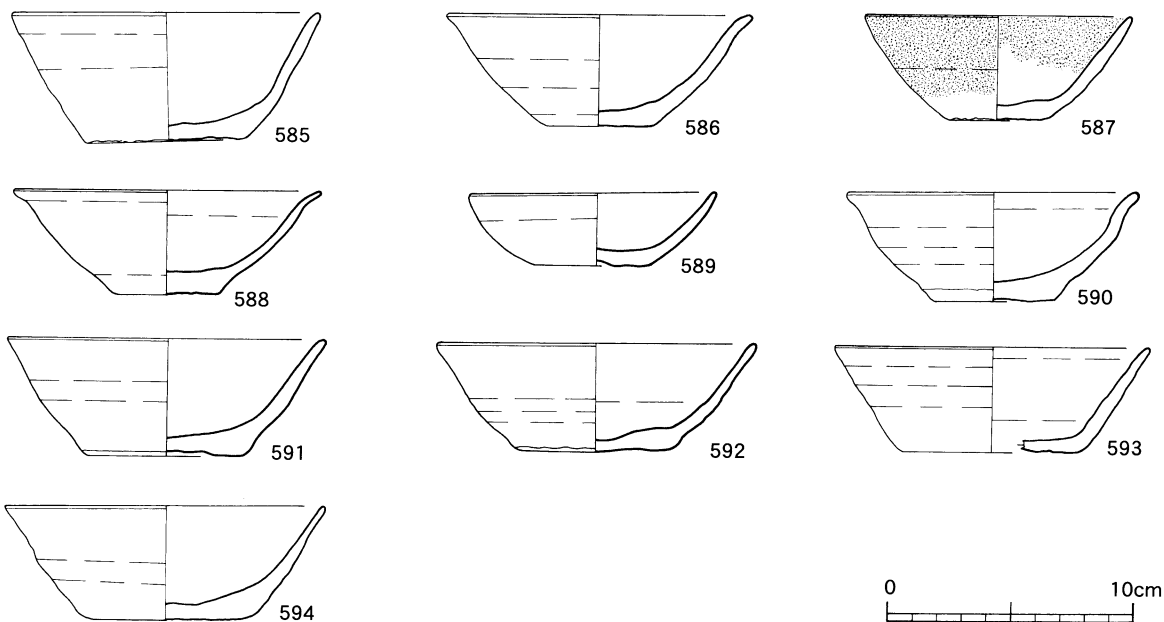
坏は底部の出土数から、最も高い割合で使用されていたと思われる。ろくろで製作され、底部はヘラ切り離しが行われているものが多い。精美なものと粗雑なものがみられる。精美なものは器壁が薄く、全体にナデ調整が施されるが、底部の器厚は胴部とあまり変わらないものと、肥厚したものがみられる。外底は完全にヘラ切り痕をナデ消すものとかすかに残るものがある。

粗雑なものは全体的に分厚く外面はろくろ使用による横ナデ状の調整痕が多段になって残る。外底は回転ヘラ切り痕が「の」の字状に明瞭に残り、はみでた粘土塊が底部の周囲を巡る。

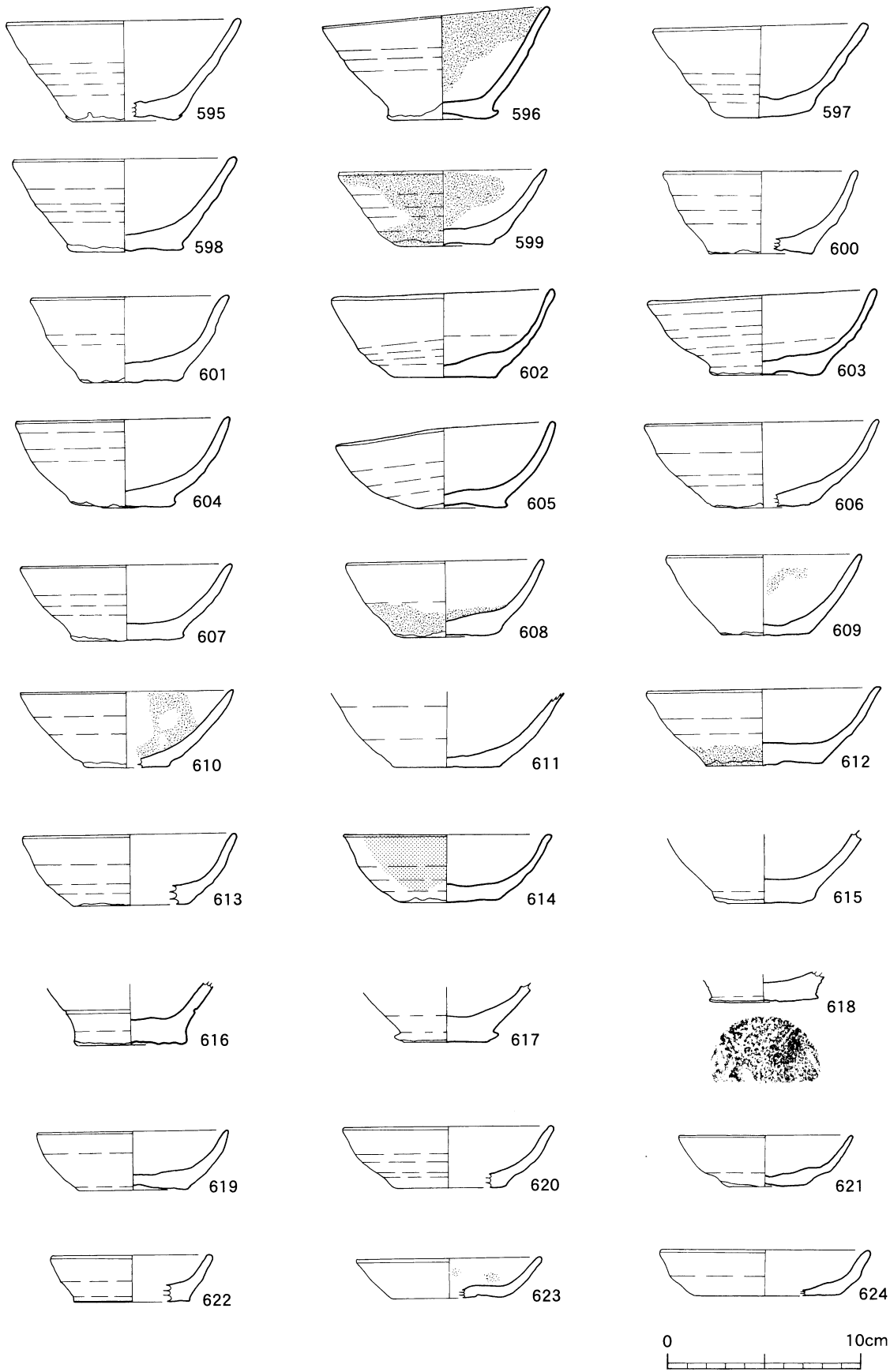
両者とも焼成には差はみられない。また内面も丁寧に調整されているが、内底に凹凸がみられるのも同様である。

585~594は作りの精美な坏である。器形は全体的に口縁部が直行または外反し、器壁が薄く精緻な調整がなされている。底部に回転ヘラ削り痕がみられるが、ケズリ痕がそのまま残されたものと、ナデ消されたものがみられる。ほとんどが黄橙色で一部煤が付着したものがみられ、灯明皿として使用されたものと思われる。器高の高いものと低いものがみられる。焼成は普通だが、堅く焼かれたものもある。

585・593・594は底部から直線的に立ち上がり口縁部に至る。内底から胴部への立ち上がり部分はナデで調整されている。全体的に、丁寧な横ナデが施されるが、585は内底にろくろ使用のため



第86図 土師器：坏(1)



第87図 土師器：坏(2)

とみられる凹凸がある。内面は丁寧にナデられているが、土師器坯のほとんどが底部から胴部への立ち上がりを肥厚させてなだらかに整形している中で、593だけは底部から屈曲して胴部に立ち上がる器形である。底部の器厚が胴部とほとんどかわらない。586・588・590は口径に対して底径が小さい。いずれも胴部は丸みをもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。588・590は底部が分厚く、充実高台に似る。587は口縁部が直線的に伸びる形で両面に煤が付着している。灯明皿として使用されたと思われる。589は小型の坯で丸みをもった器形である。

595から618は胴部が多段で先の7点に比べて粗に作られている。595から599は底部から直線的に口縁部まで伸びる器形をもつ。胴部の器厚が口唇部までほぼ均一で、口唇部は丸みをもつが、底部は側縁も含めて丸くナデられた比較的精緻なものから粗雑なヘラ切りまで変化に富む。596と599は煤が付着していることから灯明皿として使用されたと思われる。596・602・605は底部に対して口縁部が傾いている。596は底部切り離しの際の粘土が側縁ににじりでている。

600から613は胴部が丸みをもって立ち上がる器形である。口唇部は丸みをもつ。604・605・607は胴部の立ち上がり部分をナデあげ、充実高台状にしあげている。これにくらべて609・611・612は底部から直接丸みをもって胴部が広がる器形である。

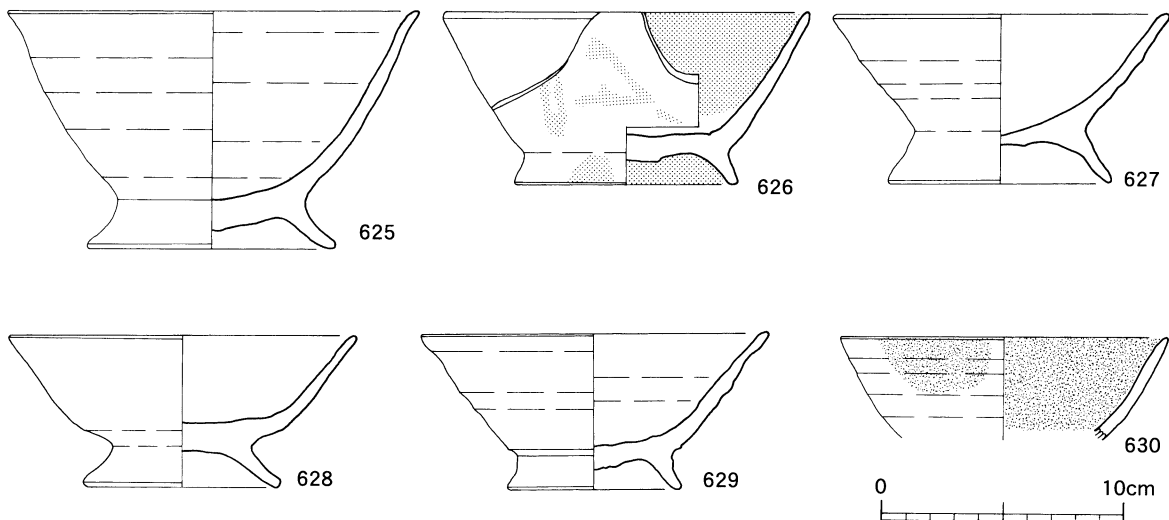
614は内面に不明瞭だが同一の道具かなにかによる圧痕が観察された。615から618は底部である。充実高台に近い形態をもつものを並べた。ほとんどが底部は回転ヘラ切りだが、618の底部には鯨の脊椎骨を土台にしたと思われる痕跡がみられる。

2) 碗 (第88・89図 625～641)

625から641は碗である。外面は多段なもの丁寧になデ調整が施されたものがあるが、内面は全て丁寧にナデられている。高台は緩やかな曲線をもって外側に張った形態で接地面の径が7.2cmから10cmほどになる。高台の調整が胴部の調整よりも精緻なものも多く、ヘラ切りが残ることの多い坯と好対照をなす。

煤が付着したものがあり、灯明皿として使用されたと思われるものもある。

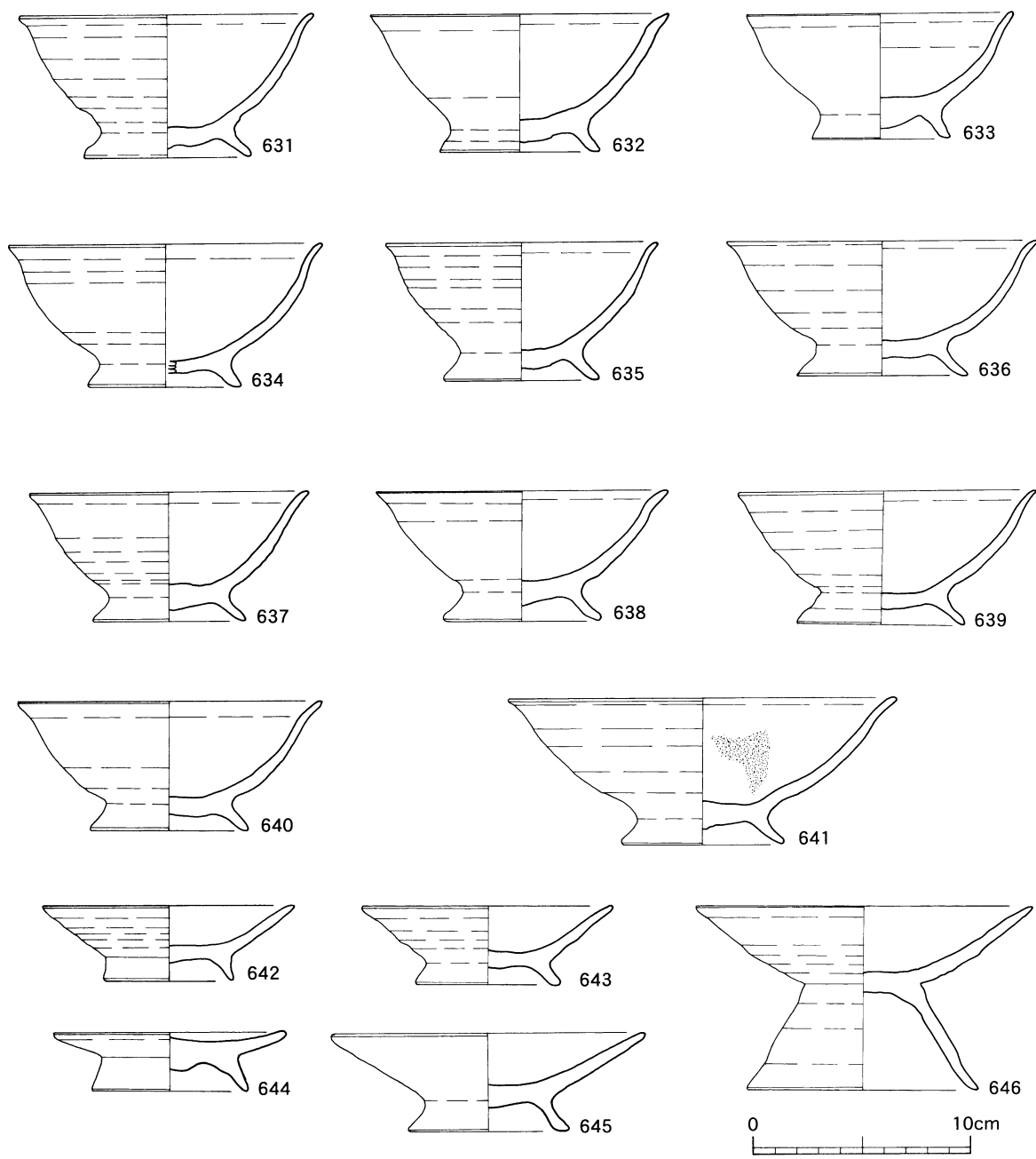
625から630は胴部が直線的に立ち上がる器形のものを集めた。器壁は薄く口唇部は先細る。内面は629を除いて丁寧にナデられ、凹凸に乏しい。色調は黄橙色を中心に淡褐色・赤褐色・黄白色の



第88図 土師器：碗(1)

ものがみられる。胎土は粒子の細かいものと粗いものがあるが、口径が大きいものに調整・胎土とも精緻なものが多くなり、逆に小型のものには調整や胎土が粗雑なものが多い。しかし胎土が粗くても調整は丁寧なものも多い。焼成は大部分が普通だが、中に少数だが、堅く焼かれたものがみられる。

625は口径17cmの大型の碗である。やや立ち上がった器形で口縁部がわずかに外反する。全体的に器壁は薄く、胴部に凹凸がみられるのに対して高台は丁寧にナデられ、外に向かって緩やかなカーブをもって張り出す。626はのちに赤色土器であることが判明した。内面の胴部途中から口唇部にかけて薄く赤彩が残る。内面が塗布されたような均一の彩色であるのに比べ、外面は滴が落ち

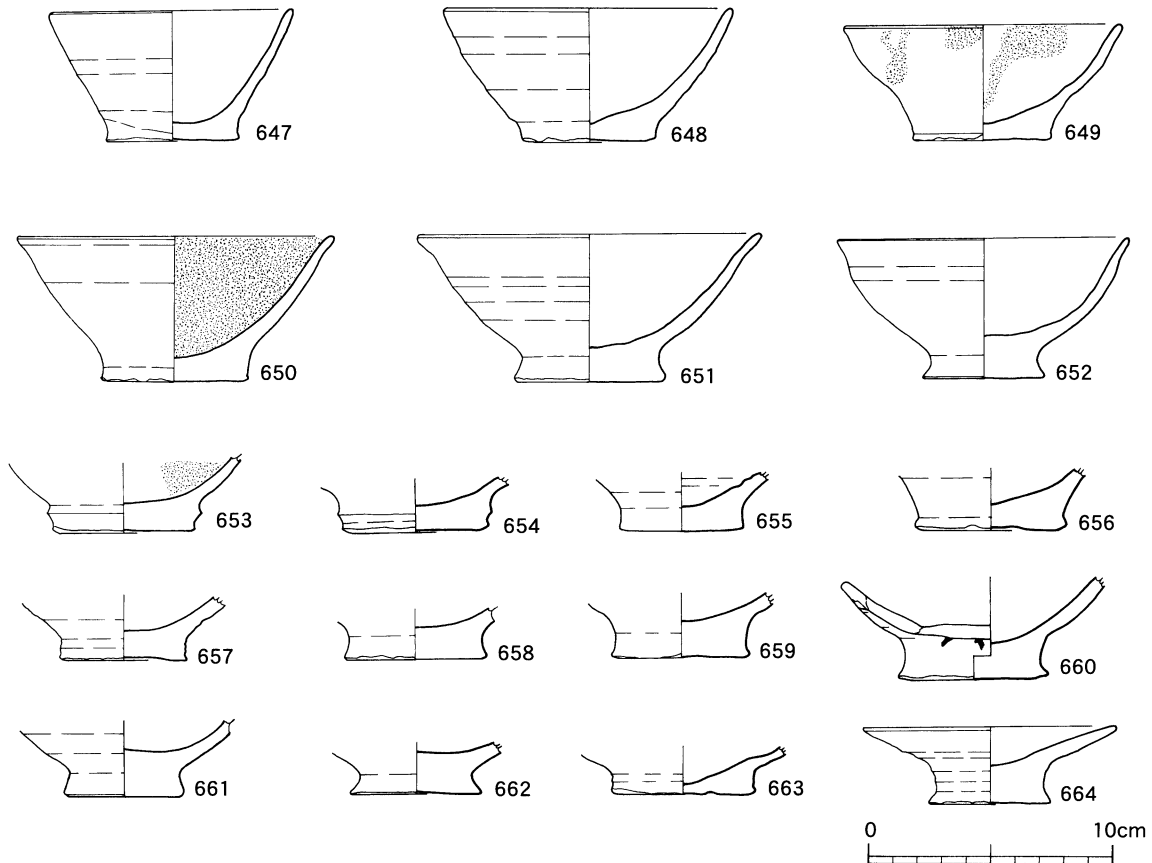


第89図 土師器：碗(2)・皿

たように赤彩がみられる。高台は短く立った器形をもつ。627は全体の調整がやや粗雑で胎土の粒子も粗い。高台も直線的に外に張り出す。高台の高さも1.7cmと最も高く端部は先細る。628は腰が張った器形で胴部から口縁部は直線的に開く。口唇部でわずかに外反し、先端部は先細る。高台は内面が中心までいねいに丸くナデられ、端部は丸みをもつ。胴部よりも高台の調整が丁寧に施されている印象をもつ。629の胴部は両面ともろくろ使用による凹凸が目立つ。内底や他の部分は丁寧にナデられているので胴部の凹凸は作為的に残された可能性がある。口唇部はわずかに肥厚し、高台はやや立ち上がった器形である。高台内面は周縁部は丁寧にナデられているが、中心部分の直径2.7cmほどを3mmほど盛り上がらせ、ろくろ使用による渦巻を模様のように残している。630は非常に焼きが堅い。煤が付着しており、灯明皿の可能性はある。

631から641は胴部が緩い丸みをもって開く器形のものである。口唇部はわずかに外反し、端部は先細る。胴部から高台へは接着した上から指頭で曲線に調整し、高台は緩やかに外側に開く。高台の端部は丸みをもつものと先細るものがあり、高台内面まで丁寧に調整されている。

638は、胴部と高台の接着面がわずかに残り、その部分が屈曲部になっている。胎土に粒子を含むが焼成は良好で調整は接着部を除いて精緻である。632は胎土の粒子が細かい。高台内面全体と外面の下部にかけてわずかに赤色を帯びている。633は口径が12.2cmとやや小振りな碗である。高台が立ち上がった器形で、やや粗雑な作りである。外底が丸く膨らんだように調整されている。634は調整・胎土は精緻だが、焼成がやや不良で柔らかい。器壁は薄く、胴部と高台の接着部が観察される。高台内面は平坦に調整され、そのため底部の器壁は薄い。641は底径に対して口径が非



第90図 充実高台：碗

常に大きい。胴部が大きく開いている。器壁が薄いためかわずかだが口縁部に歪みが生じている。

647から664は充実高台である。充実高台独特の器形（647～649）と高台以外は碗と同じ形態をもつもの（650～652）とに分けられる。647は口径と底径の比率が小さく、広東碗のような器形をもつ。652は丸みを帯びた器形である。649は高台から胴部にかけて外反し、胴部上部から丸みをもって開く独特の器形をもつ。653から663は充実高台の底部である。形態が4つに分類できる。

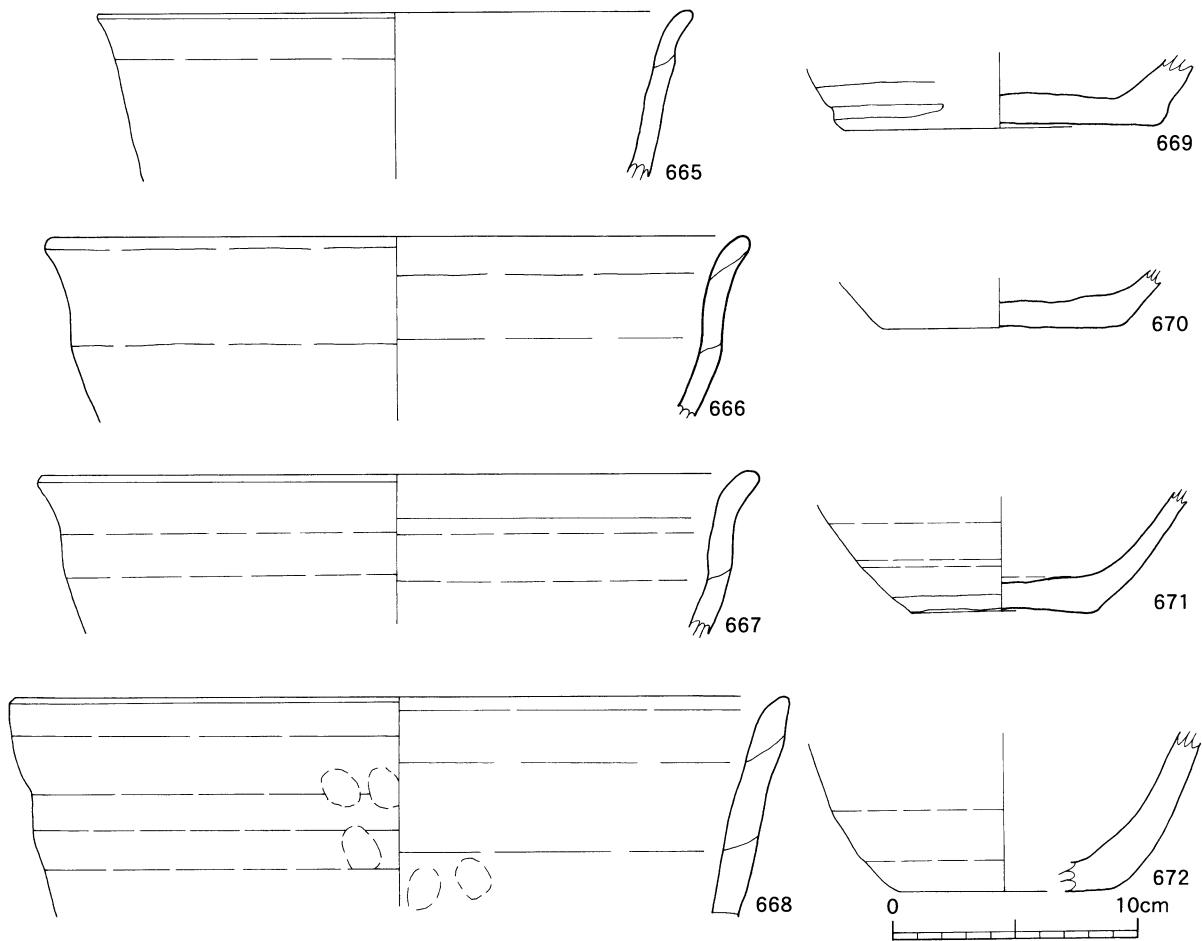
A：底部から高台側面をナデ調整し、丸みをもった分厚い底部にしあげている。または高台の側面に指頭使用による段を持つもの（653・654）

B：高台側面をナデ調整して垂直に直立した円筒形の高台を整形し、底部の台から切り離した痕跡を丁寧にナデ消している。底径が極端に小さくなるものがみられる（655・657～659）

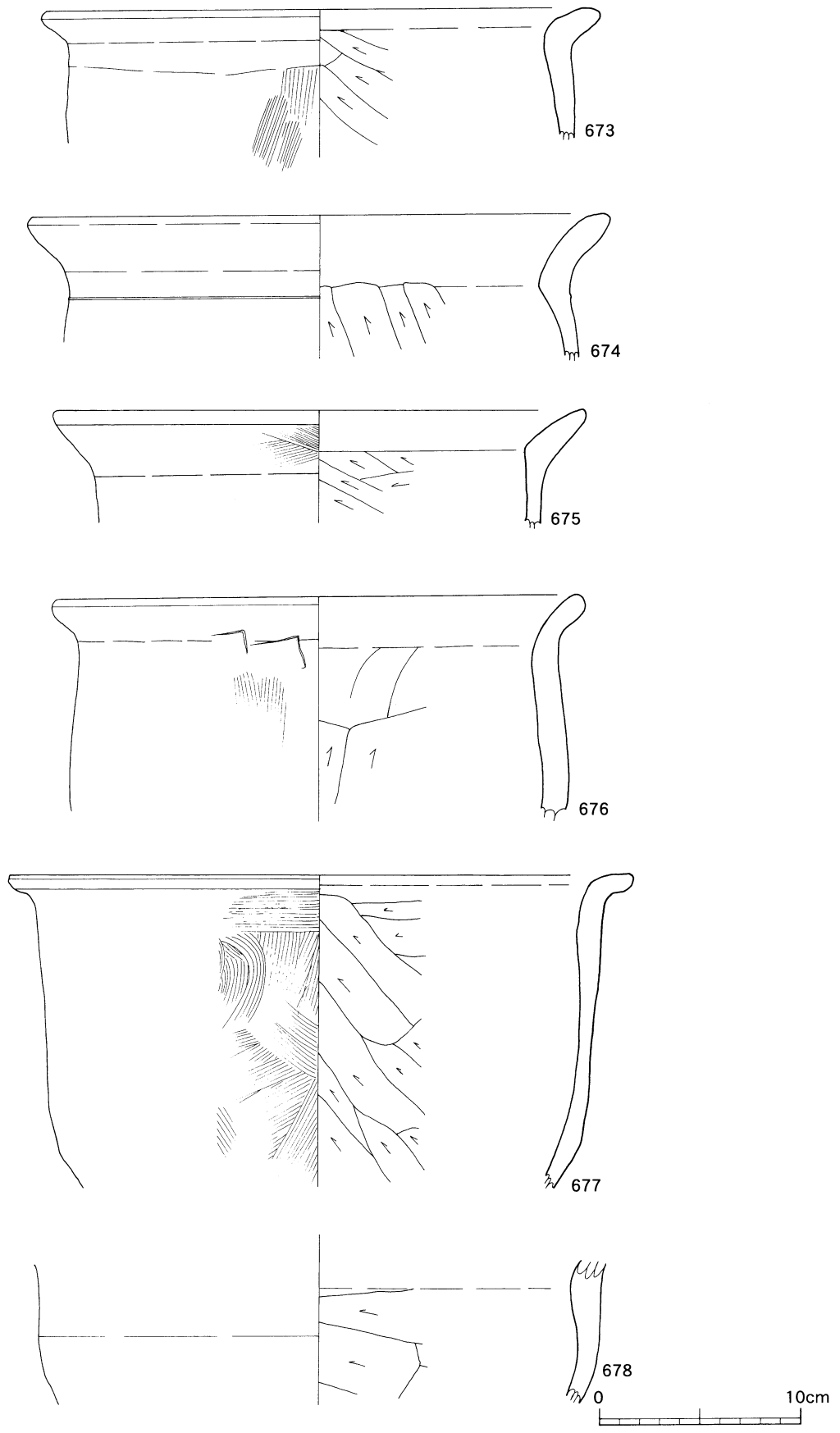
C：高台が横に張り出し、断面がやや台形に近づく。外底に一方向や回転によるヘラ切り痕がわずかに残るもの（660・661）

D：粘土が高台外縁にはみ出し、ヘラ切り痕を残すもの（656・662・663）

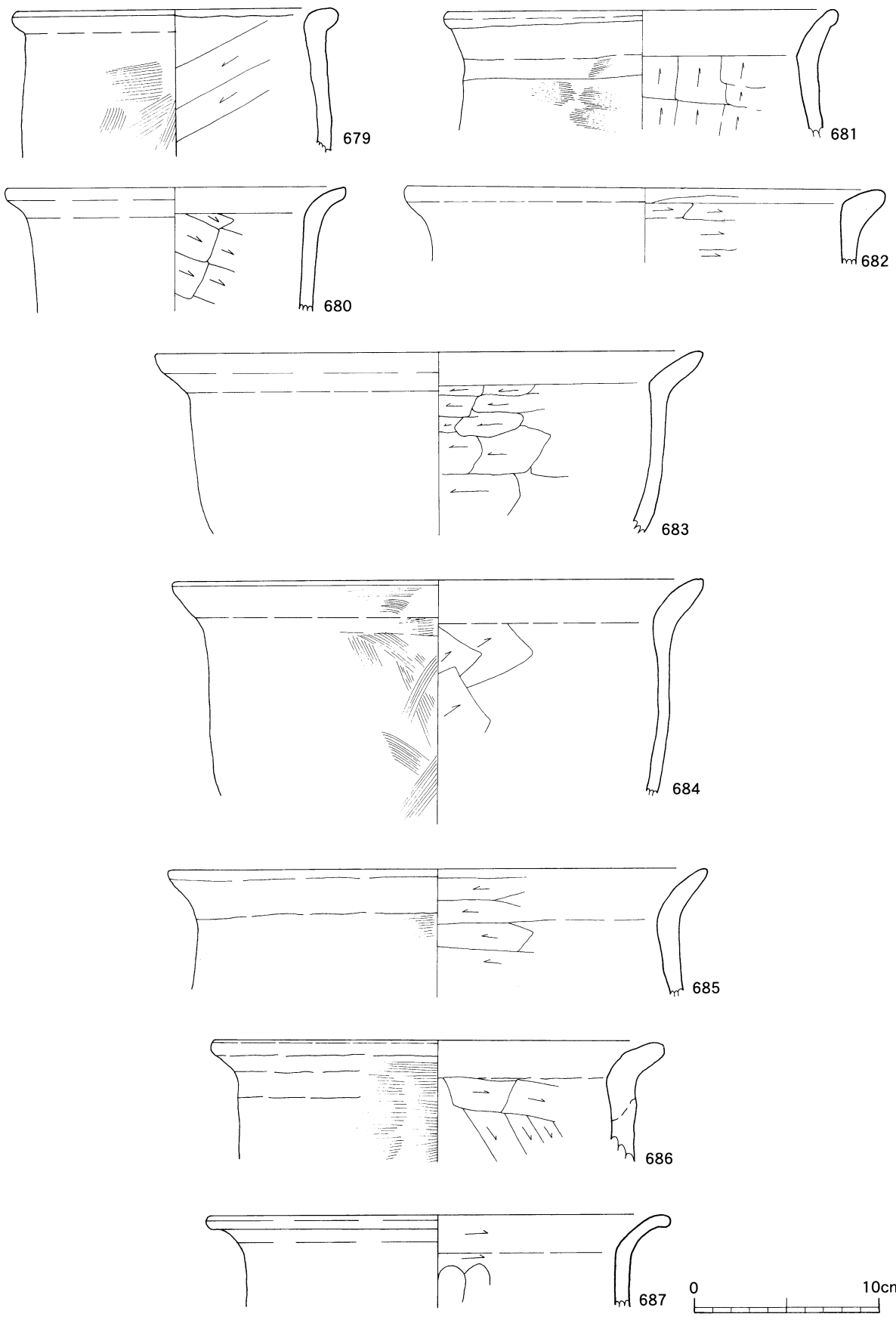
観察から、通常の坏の胴部立ち上がり部分の外縁をナデ調整して製作する際に、底部をより肥厚させたAが先に作られ、それから高台の高さがより意識された結果Bの円筒形の高台がつくられた。Cの段階で高台側面のナデ調整が失われ、同時に精美に整形する意識が薄くなり、Dで外底の調整や高台を高く作る意識も薄れてくる、という考え方ができなくもないと思う。製作方法や高台以外



第91図 土師器：鉢



第92図 土師器：甕(1)



第93図 土師器：甕(2)

の器形等も考慮にいれた考察を今後重ねたい。

3) 皿 (第87図 619~624・第89図 642~646・第90図 664)

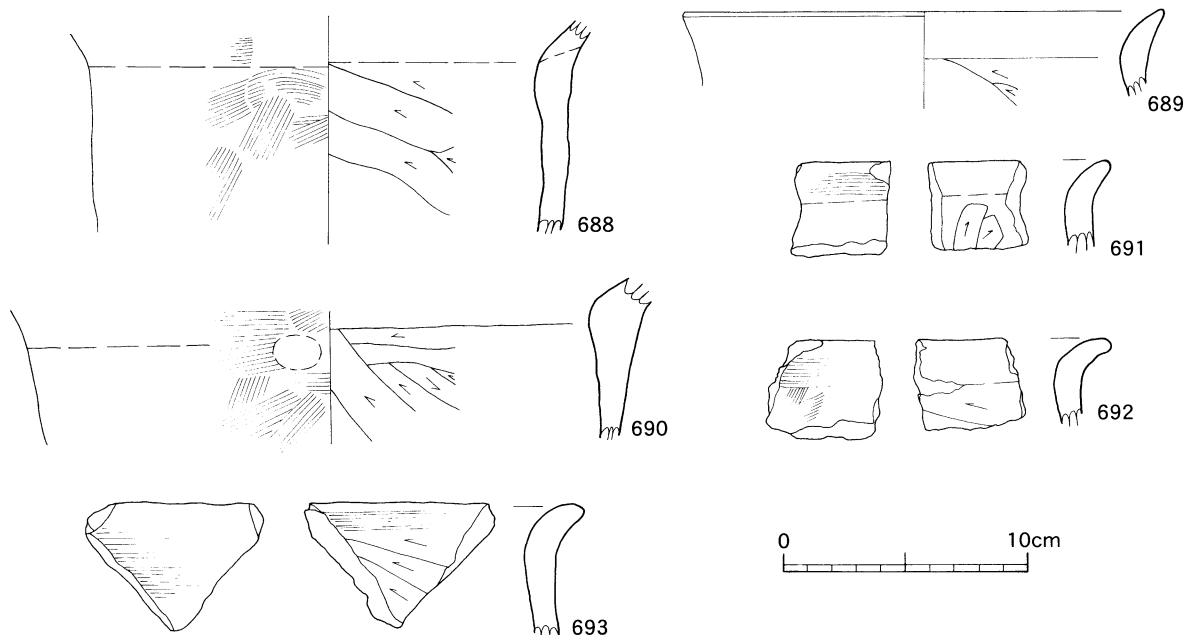
口縁直径が5.5~7cm, 高さ2cm前後, 底部直径4~5cmの平底皿と, 口縁直径が7~9.5cm, 高さ2~3cm前後, 高台直径7cmの高坏状皿とがある。口縁は内湾気味に丸くまとまり, 底部は丸くなるものと, 段をもつものがある。619から624は口径に対して器高が低い皿である。内底はろくろ使用による渦巻状の凹凸があり, 底部は回転ヘラ切りである。621は器壁が薄く腰が張った器形である。高台付皿は胴部がまっすぐ外へ伸びている。高台は642のように立つもの以外は横に張り出すが, 碗ほど極端には張り出さない。644は胴部が極端に浅く, 外底が外にとび出している。高台端は強く外へ開くものとやや開くものがある。646の高台は高く, 大きく開く。664は充実高台の皿で胴部は外に大きく開く。

4) 鉢 (第91図 665~672)

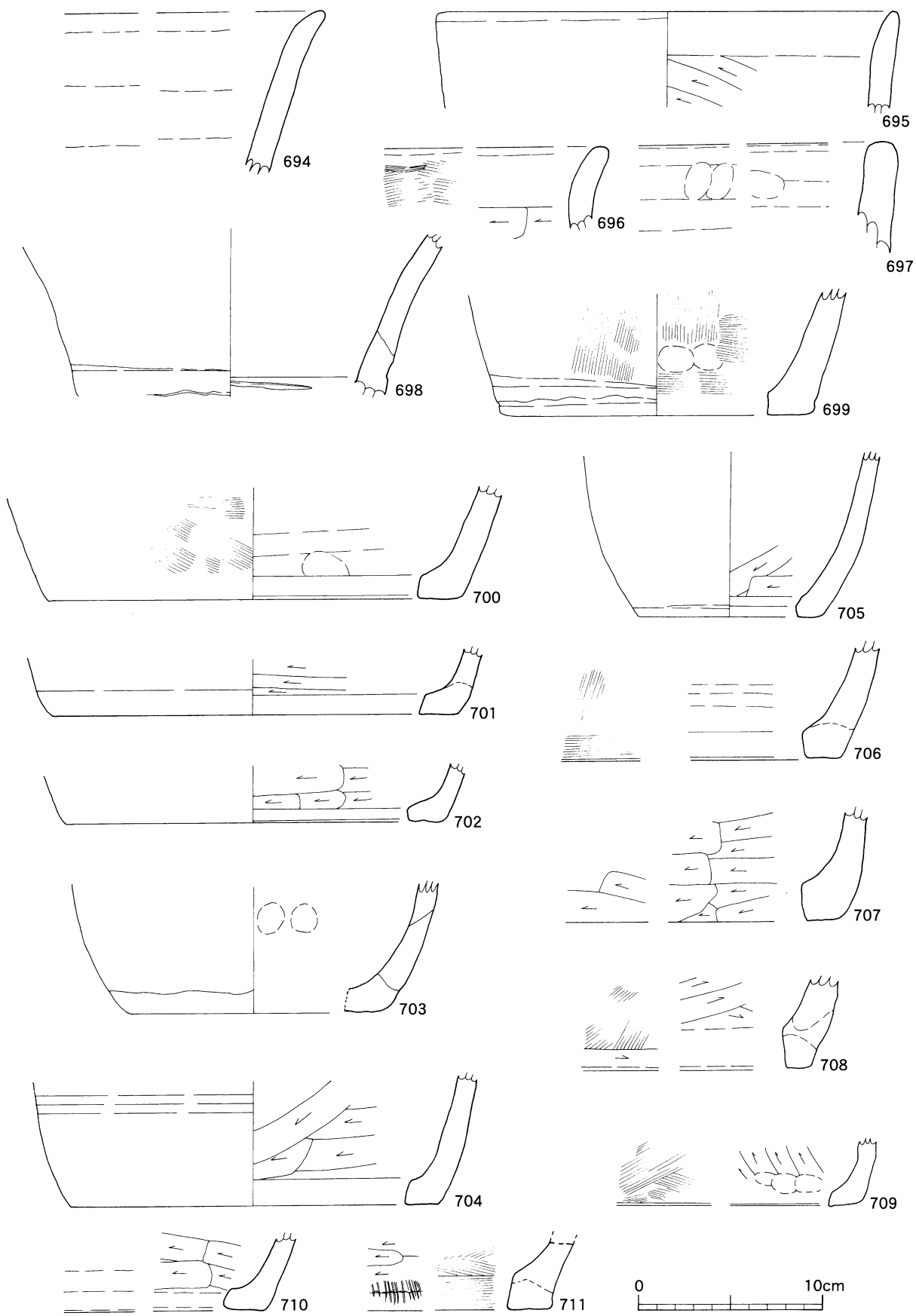
口縁部が短く外反するものと, まっすぐに伸びるものがある。また口唇部は丸くしあげるもの(665・666)と平坦にするもの(667・668)がみられる。口縁直径は24~31.6cmある。底はいずれも平底でナデ調整が施されているが, 安定したものと丸みをもって胴部へ立ち上がるものがあり, 直径は7.8~13cmである。両面とも整形は横ナデで, 輪積み仕上げである。

5) 甕 (第92~94図 673~693)

多くの破片が出土している。口縁部はいずれも短いものが多く, く字に折れ曲がるものだが, 逆L字状に近いもの, く字状のもの, 緩やかに曲折するものなど多種である。口縁の直径も26.4~33cmの大型のものと17.8~18cmの小型のものに分れる。内面も屈曲線のはっきりしたものと, 緩やかに曲がり, 屈曲部の線がはっきりしないものがある。外面仕上げはハケナデのものとヘラナデのものがあるが, 指頭によるナデも多くみられる。内面は斜方向あるいは縦・横方向のヘラケズリであるが, 口縁部付近はヘラナデで仕上げている。



第94図 土師器：甕(3)

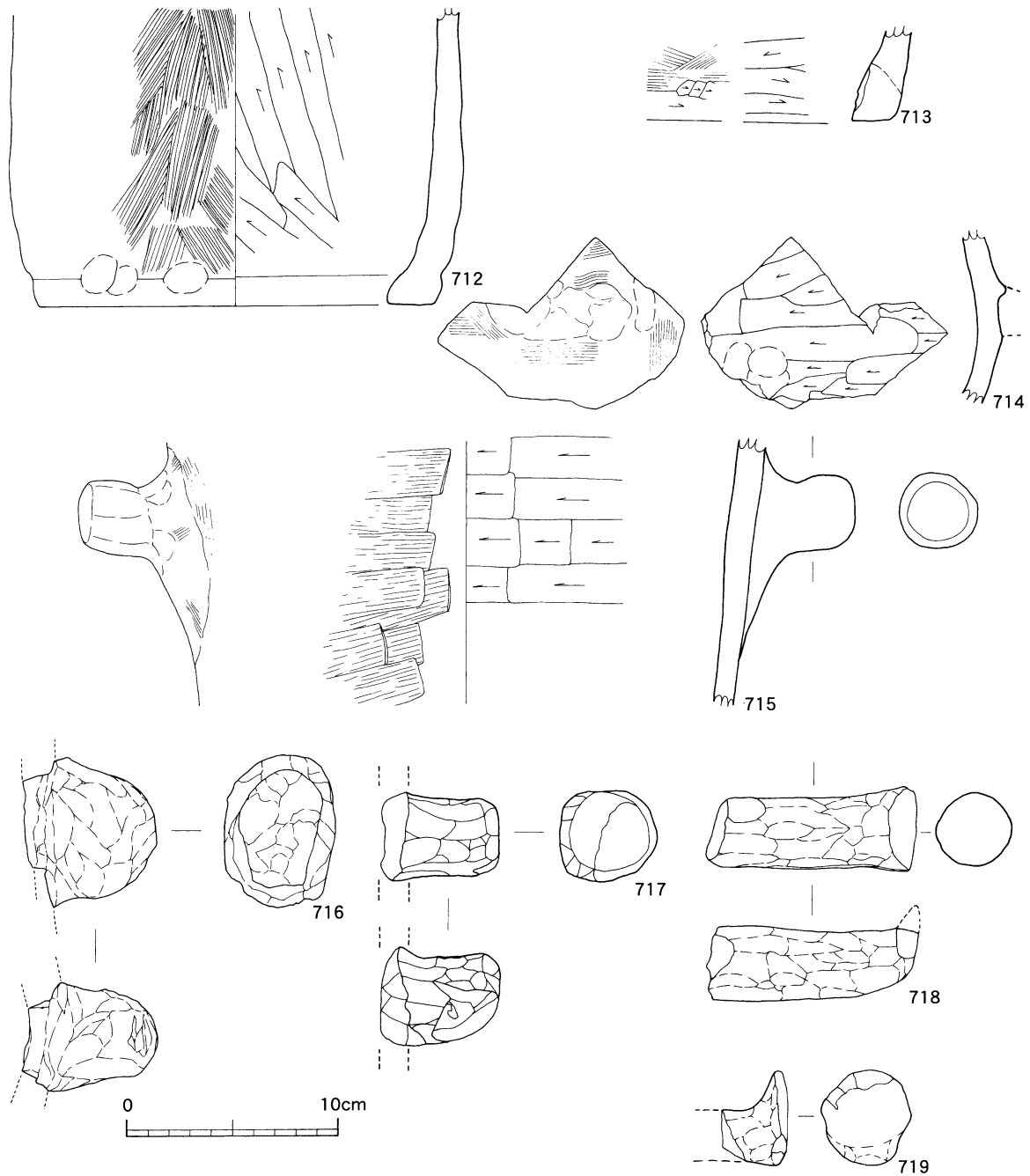


第95図 土師器：甑(1)

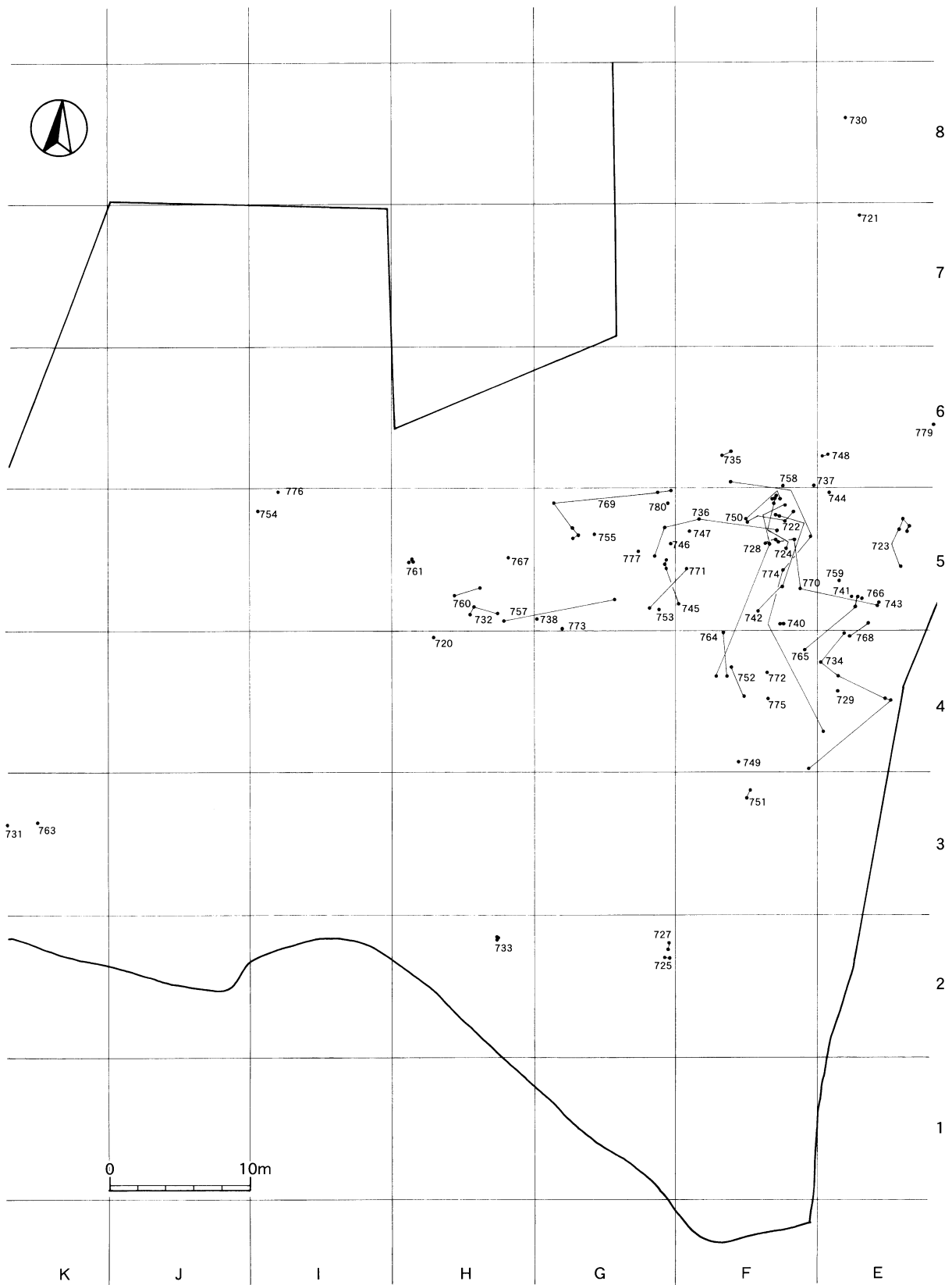
全体の形は不明であるが長胴形を呈するものが多く、丸底になるものと思われる。

6) 甑 (第95・96図 694~719)

口縁部は外へまっすぐに開くもの、上へまっすぐに伸びるもの、やや外反するものの3種類がある。695の直径は27cmである。胴部はやや丸みをもって底へ移るものと、筒状のものがある。底は丸みをもって直に移るものがあり、内側への伸びは短い。底部の直径は10.2~22cmである。単穴のものばかりと思われる。胴部には棒状の把手があり、短いものと長いもの、牛角状のものなどがある。外面仕上げはナデ、内面は横方向のヘラケズリである。淡褐色・黄橙色のほか赤褐色を帯びるものもみられる。



第96図 土師器：甑(2)



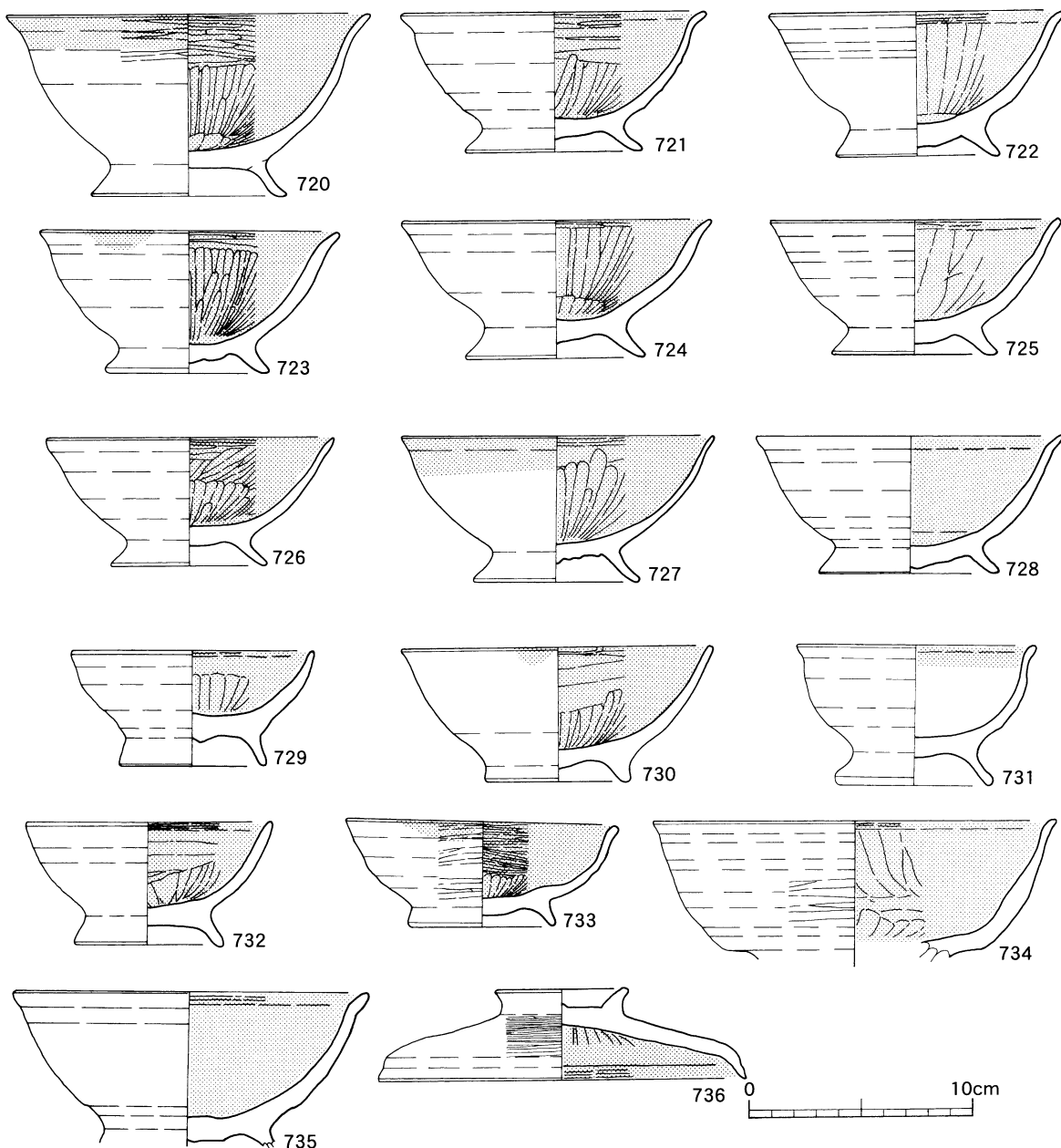
第97図 II層内黒土師器出土状況

2 内黒土師器

内黒土師器の器種には碗・蓋・坏・鉢がある。土師器より概して焼成が良く、色調も均一である。内面は大部分が艶のある黒色で、わずかに灰色を帯びるものと暗褐色を帯びるものが3点ほどみられた。黒色土師器が1点出土した。

1) 碗 (第98図～101図 720～780)

高台の付く碗である。口縁直径が6.5～8 cmほどの小さいもの、9 cm前後のもの、10cmを越える大型のものがある。また口縁は外反するもの、(720～725・727・728・731・733～735) まっすぐに伸びるもの、(730・732) 内湾するもの(729)があり、外反するものも、緩やかに曲がるものと、731のように立ち上がりが強く、口縁付近で強く曲がるものがある。碗部も内面が外へ伸びるも

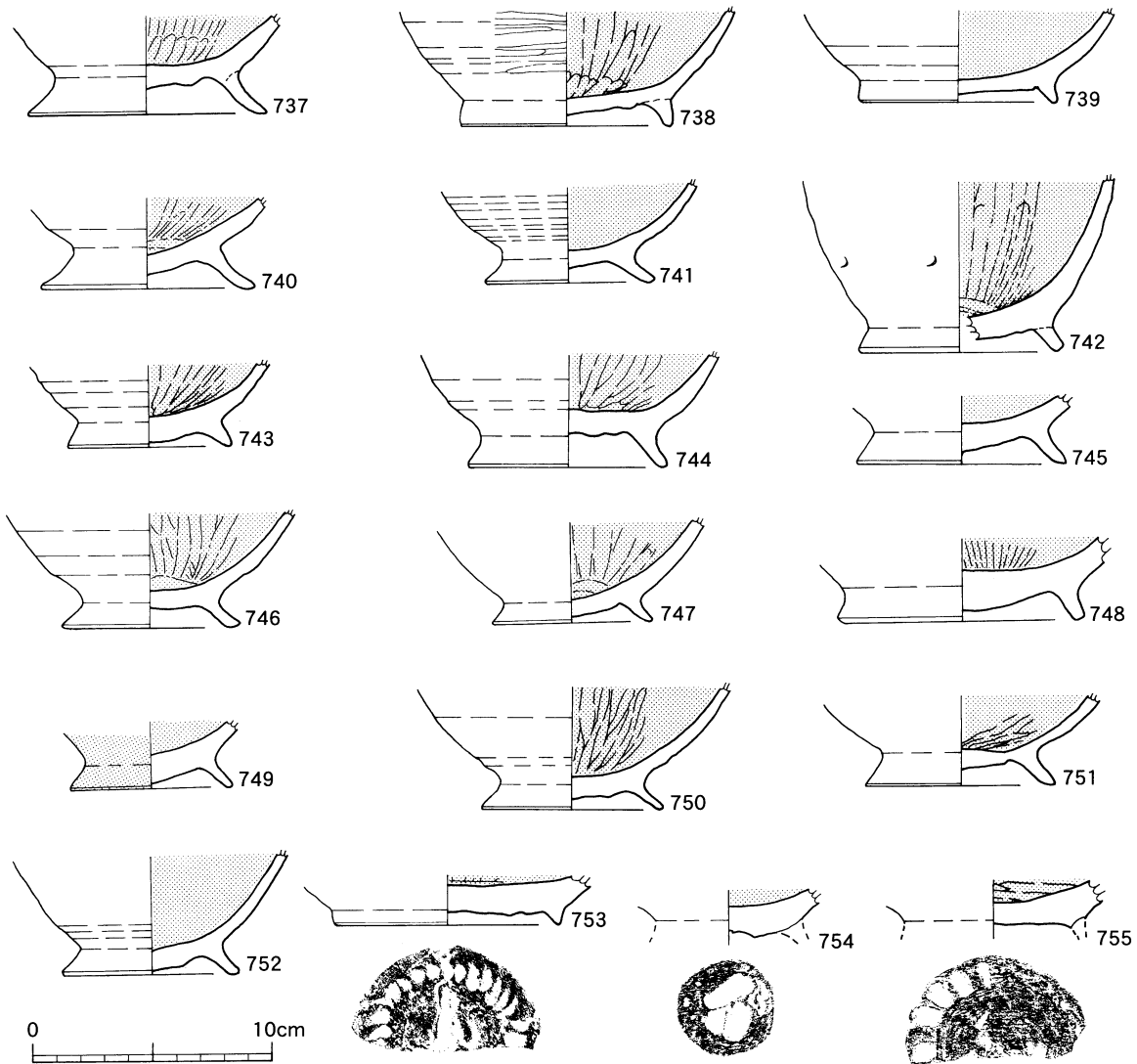


第98図 内黒土師器：碗(1)・蓋

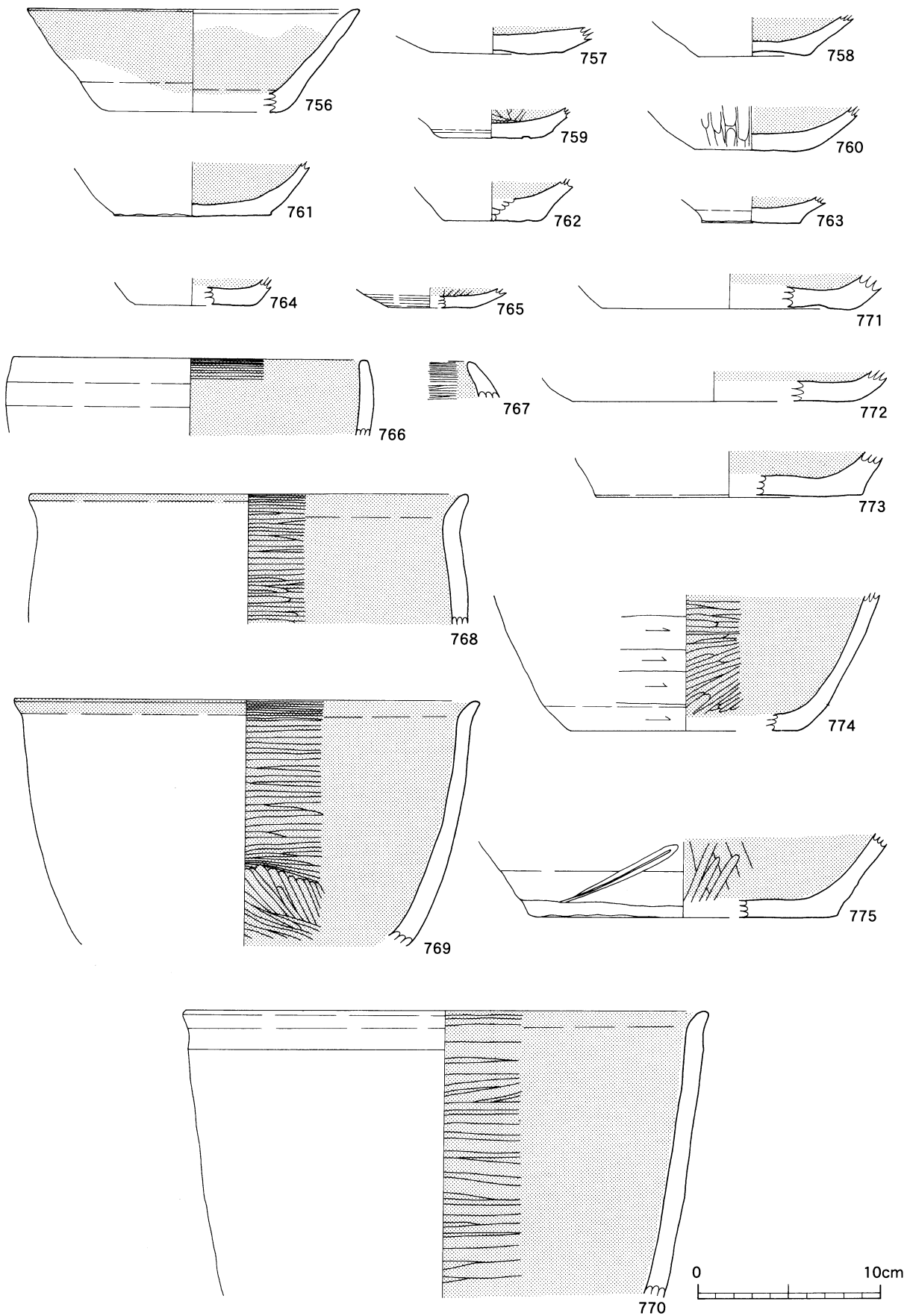
のと、丸みをもって深く立ち上がるものがある。高台は720・727・729・731・744などのように高いものもあるが、概して浅いものが多い。その場合、外底は平坦に調整されている。高台の端部は多くが外へ緩やかに広がっているが、730・733・738・748などのように低く垂直気味に立ち上がるものもある。内面調整は縦方向のヘラミガキが基本的であるが、口縁部近くは横方向のミガキである。外面調整はろくろびきで仕上げている。内面は全面が黒色を呈しているが、731は口縁付近だけが黒色化している。また720・727は外面上部まで黒色化し、723・730・733は外面口縁の一部が黒色化している。749は外面も黒色だが内面のようなミガキはない。753～755のように高台の貼り付け部分の土をヘラで押した痕跡がはっきり残っているものもある。焼成・調整とも極めて良好なものが多い。

2) 蓋 (第98図 736)

倒坏状の蓋でつまみの直径が6 cm、高さ4 cm、受け部の直径が16.4cmである。つまみは外へ開いて丸く収まっている。内面は縦方向のヘラミガキ、外面はナデで仕上げている。内面は黒色、外面は淡黄橙色である。焼成は良い。



第99図 内黒土師器：埴(2)



第100図 内黒土師器：鉢(1)

3) 坏 (第100図 756~765)

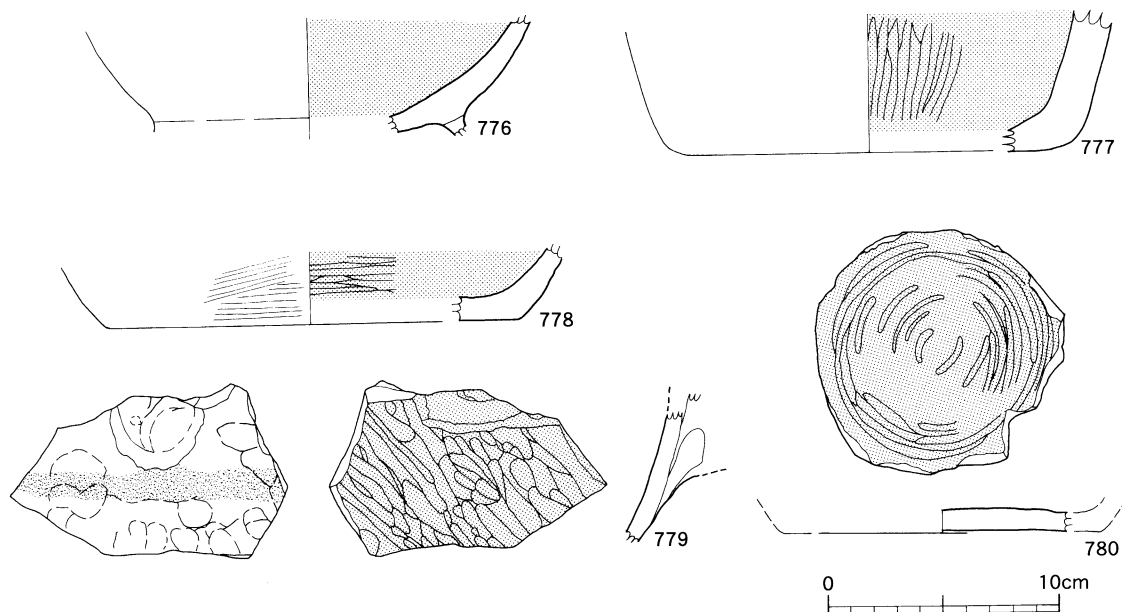
全体的に安定した平底で、口縁部へまっすぐ伸びる坏である。756は完形品で口縁直径が18.2cm高さが5.6cm、底部直径が9.4cmである。内面の口縁部付近と、外面の底部付近は露胎となっている。底部直径は3cmほどのものから、6cmほどのものがあり、底部から丸みをもって体部に移るものと、外部へやや立ち上がってから、体部に移るため段をもつものがある。758はやや上げ底となっている。765は外面を横位にミガキを巡らせ、多段にみえるように仕上げている。底部も磨かれ焼成が良く、強固である。

4) 鉢 (第100・101図 766~780)

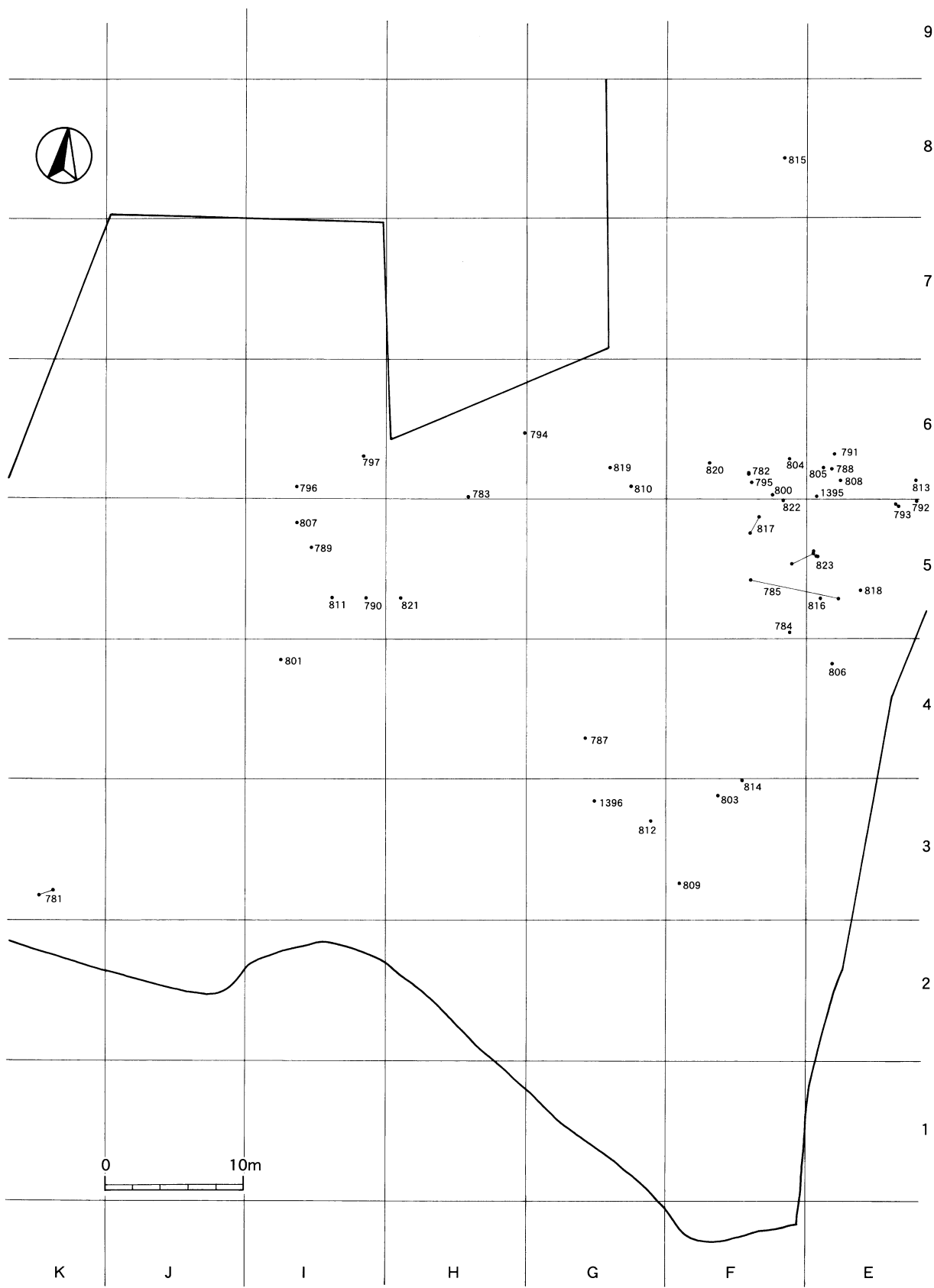
口縁部が内湾するもの (766・767) と、短く外反するもの (768・769・770) とがある。766は直径が19.4cmあり、やや丸みをもっている。外反するものの中には、壺状に丸くなるもの (768)、鉢状に丸くなるもの (769)、外へまっすぐ伸びながら広がり、端部が外反するもの (770) とがある。口縁直径は768が24.0cm、769が25.5cm、770が28.8cmである。底部の直径は12cmから18cmあり、平らの底から丸みをもって胴部へ移るものと、やや立ち上がってから段をもって立ち上がるもの、高台のつくものがある。779は把手の付く胴部で外面に煤が付着していることから煮炊き用のものと思われる。内面は丁寧な斜方向のヘラミガキで仕上げ、ツルツルしている。把手の形態は不明であるが、団子状の塊を積み上げて作っている。内面は丁寧なヘラミガキで仕上げているが、上部は横方向、下部の底部近くは縦あるいは斜方向に施されている。777は底部で放射状にミガキがかけられている。外面は横方向にナデている。780の外底にはヘラケズリが残る。

3 赤色土師器

内外面とも赤色顔料が塗布された土師器で坏 (781・788・789) と碗 (782~787・790) 鉢 (813) がある。彩色の上からミガキがかけられたものと、塗布だけのものがみられる。また両面に均一に塗布したものと内面により分厚く赤彩色したものがみられる。



第101図 内黒土師器：鉢(2)



第102図 II層赤色土師器出土状況

1) 坏 (第103図 781・789・790)

781は口縁直径が9.2cm, 高さ2.6cm, 底部直径5.0cmの小型完形品で, 口縁端部は丸く収まり, ほぼまっすぐ外へ伸びている。底はいずれも段をもっている。

2) 碗 (第103図 782~788)

高台が外に曲線をもって長く張り出すものと, 短く踏ん張る器形のものが見られる。器壁も薄くナデ調整が施されたものと調整が粗雑なものがあるが, 外底の調整は全て丁寧になされている。782は口縁直径13.4cm, 高さ6.0cm, 高台直径7.4cmで口縁端部近くが短く外反している。全体が丁寧にナデて調整されているが, 内底から胴部への立ち上がり部分に少量の粘土塊が輪状にめぐる。器壁は薄い底部は他に比べて厚く作られている。全体的に高台は低いものが多いが, 783は2.2cmと高い。端部は外へ広がり, 細くなって終わる。785は内面全体と外面胴部の高台直上まで赤彩色され, 高台は塗布しない意識が見られる。内面に横位のヘラミガキがあり外面に比べて内面は分厚く赤彩されている。787は底部のみの出土だが, 高台内側から外底は丁寧に調整され, 外底は平坦につくられている。788は大型の碗で外底に爪状の圧痕が巡る。

3) 鉢 (第104図 813)

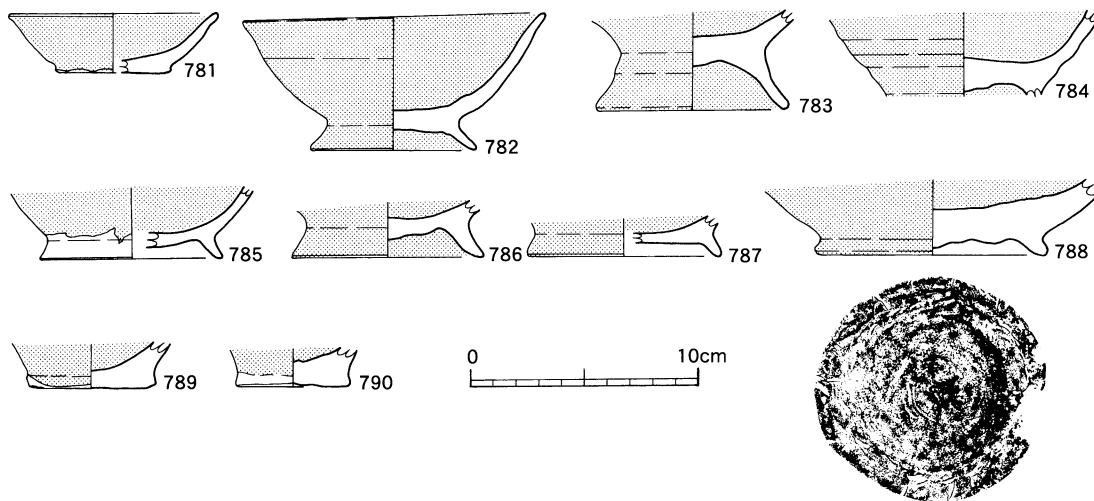
813は鉢の口縁部である。筒状に立ち上がり, 内面は斜位にミガキがかけられている。赤彩色は厚く, 均一に塗布されている。口縁端部は外傾したうえで平坦にナデられ, ナデた際に余った粘土が外側ににじりでている。外面の調整は粗く, ナデてはいるが幾分凹凸がある。胎土に直径2mmほどの粒子を含む。

4 内赤土師器

内側のみに赤色顔料を塗布された土師器で碗と坏・皿・鉢がある。全体を均一に塗布されたものと, 指頭または刷毛による塗りつけた様子が観察できるものがある。

1) 碗 (第104図 791~808・1395)

口縁は外へまっすぐ伸びるもので, 口縁直径が791は13.6cm, 797は14.4cmある。底にはいずれも高台が付いており外底部が中央へ下るものと, 上がるもの, まっすぐなものがある。端は外へ細



第103図 赤色土師器

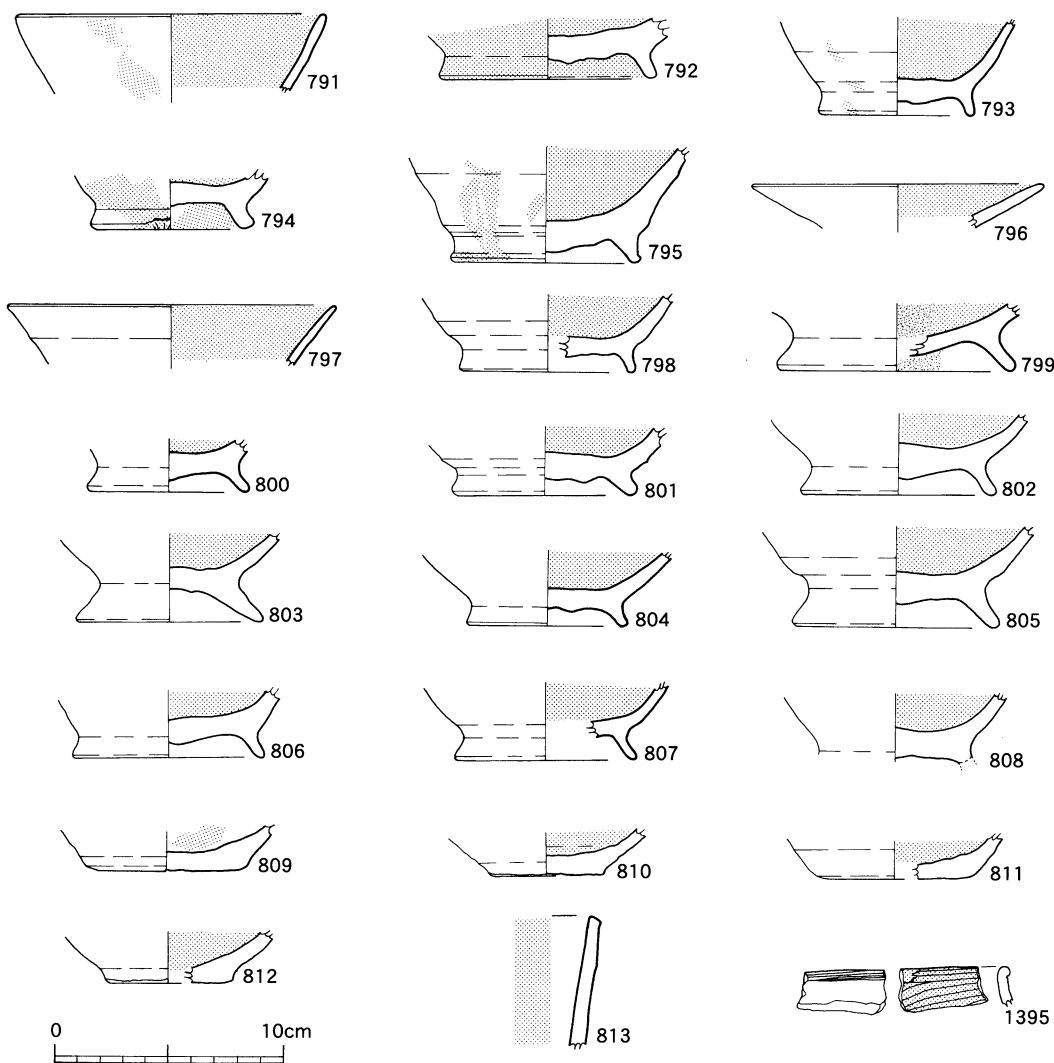
くなって広がるが、793と798はまっすぐ立ち上がっており、器形も鞠状になっている。内面は横位のヘラミガキがみられ焼成は非常によい。791・793～795は外面にもまだら状に赤色顔料が付着している。795は全体的に分厚く、胴部が立ち上がっている。高台は端部が丸く、外側に張り出さない直立した器形でどっしりとした安定感のある器形である。792も同じく大型の底部であるが外底にも薄く赤彩がみられる。内面全体に赤彩がみられる他、胴部上方に約1cm幅の黒色の帯が巡る。794と804は底部から放射状のヘラミガキがみられる。808は高台の接着面で剥がれた様子が観察できる。

2) 坏 (第104図 809～812)

平底である。丸みをもって立ち上がるものと段をもつものがある。809は底部のみの出土だがヘラ切り痕や胴部立ち上がりの部分にナデが施されている。810は底径が4.8cmと小さく、全体の調整が粗い。

3) 皿 (第104図 796)

口縁部のみである。796は内黒土師器の上に赤色顔料が厚く塗布されており、丁寧にヘラミガキがかけられている。外面に比べて内面は非常に滑らかに仕上げている。



第104図 内赤土師器

5 外赤土師器 (第105図 814~823)

外側のみ赤色顔料が塗布された土師器で、碗・坏・鉢の器種がある。

1) 碗 (814・816~820)

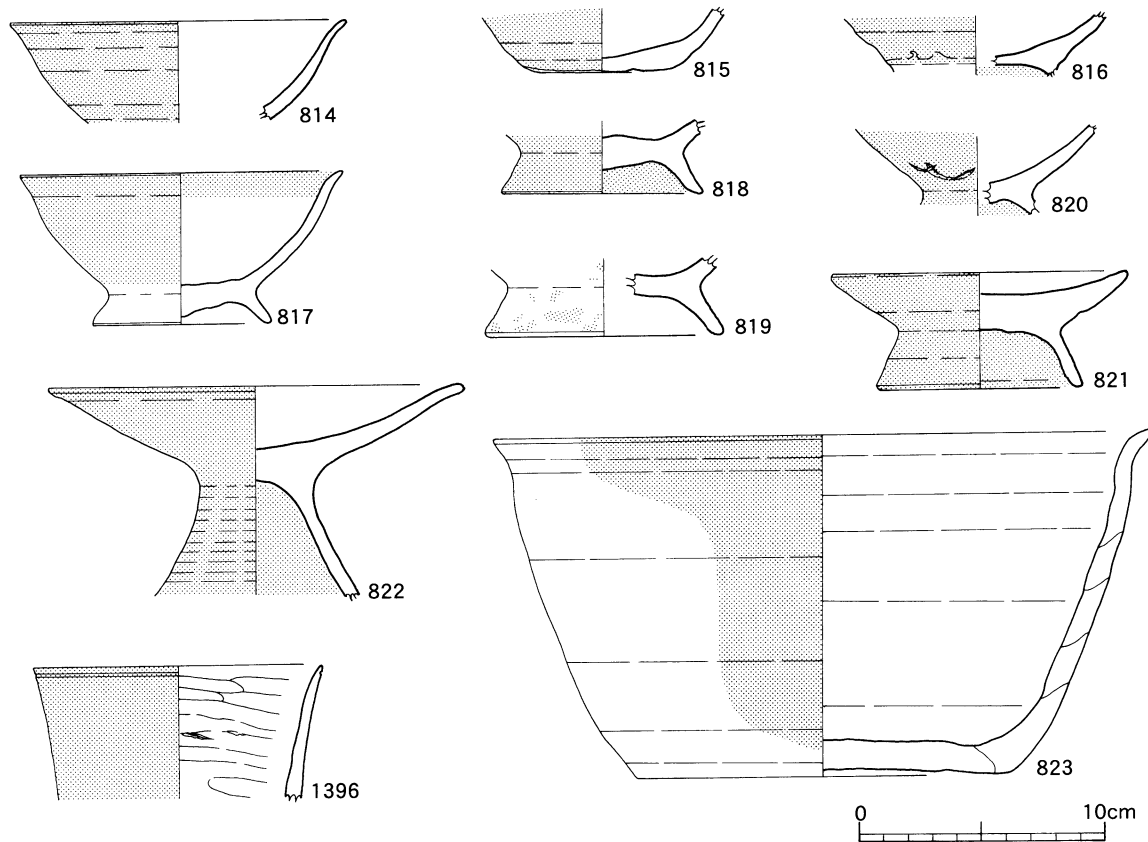
口縁が外反し、高台の付くものである。814は口縁直径13.8cmで端部で緩やかに外反する。817は口縁直径が13.2cm、高さが6.2cm、高台直径が7.2cmあり、口縁端部が外反している。底部は中央へ向かって下がっており、低い高台が付く。赤色顔料は高台付近にはつかないが、口縁内面にはついている。819の高台は高い。817・819・820の高台内面にも赤色顔料が塗布されている。

2) 坏 (821・822)

ともに高台の付く坏である。821は口縁直径12.0cmで、坏部は内外とも外へまっすぐ開くもので、口唇部から内底まで0.9cmと浅い。822は高台高が3cm以上あり、高坏状となっている。822は口縁直径17.0cm、器高は8.5cm以上、高台直径8.5cm以上の高台付皿である。まっすぐに開き、端部がわずかに外反する。整形は精美で器壁は薄手、高台部分は多段に仕上げている。焼成もよい。

3) 鉢 (823)

口縁直径26.8cm、高さ13.9cm、底部直径15.4cmの口縁が短く外反し、安定した平底の鉢である。輪積みで整形され、外面の赤色顔料が部分的にみられる。



第105図 外赤土師器

2. 須恵器（第107図～第113図 824～901）

須恵器は1004点出土した。器種には坏・壺・甕がある。

1) 坏（第107図 824～827）

824と825は口縁部であるが、前者が外へ開きながら真っすぐ立ち上がるのに対して、後者は外反する。

826と827は底部で、前者は平底、後者は削りだしによる高台がある。

2) 壺（第107図・第108図 828～854）

口縁部のうち、828は細く締まった頸部から大きく外反した後、直立する。内外面共に灰がかかって黄白色となる。830も同様な形状であるが、口径は大きく、色調が黄白色を呈することから、焼成温度は低かったものと考えられる。829と838も口径の大きな壺と考えられるが、色調は青灰色をしていることから焼成温度は高かったと推定される。831は828に似るが、頸部につながる肩部が大きく張る。胴部にも832のようになで肩になるものと、833のように肩に稜をもつものがある。833の高台は削りだしによって、外に踏ん張る形となっている。836も壺の底部であるが、高台部分で剥離しており、貼り付け高台だったことがわかる。837は全体的に大きい壺の底部と考えられ、高台は削りだしである。839は器形が不明なものの底部である。胴部が張り、頸部が締まることから壺の中を含めた。割合に頸の長い小型壺かとも考えられる。水注（文具）の可能性もある。

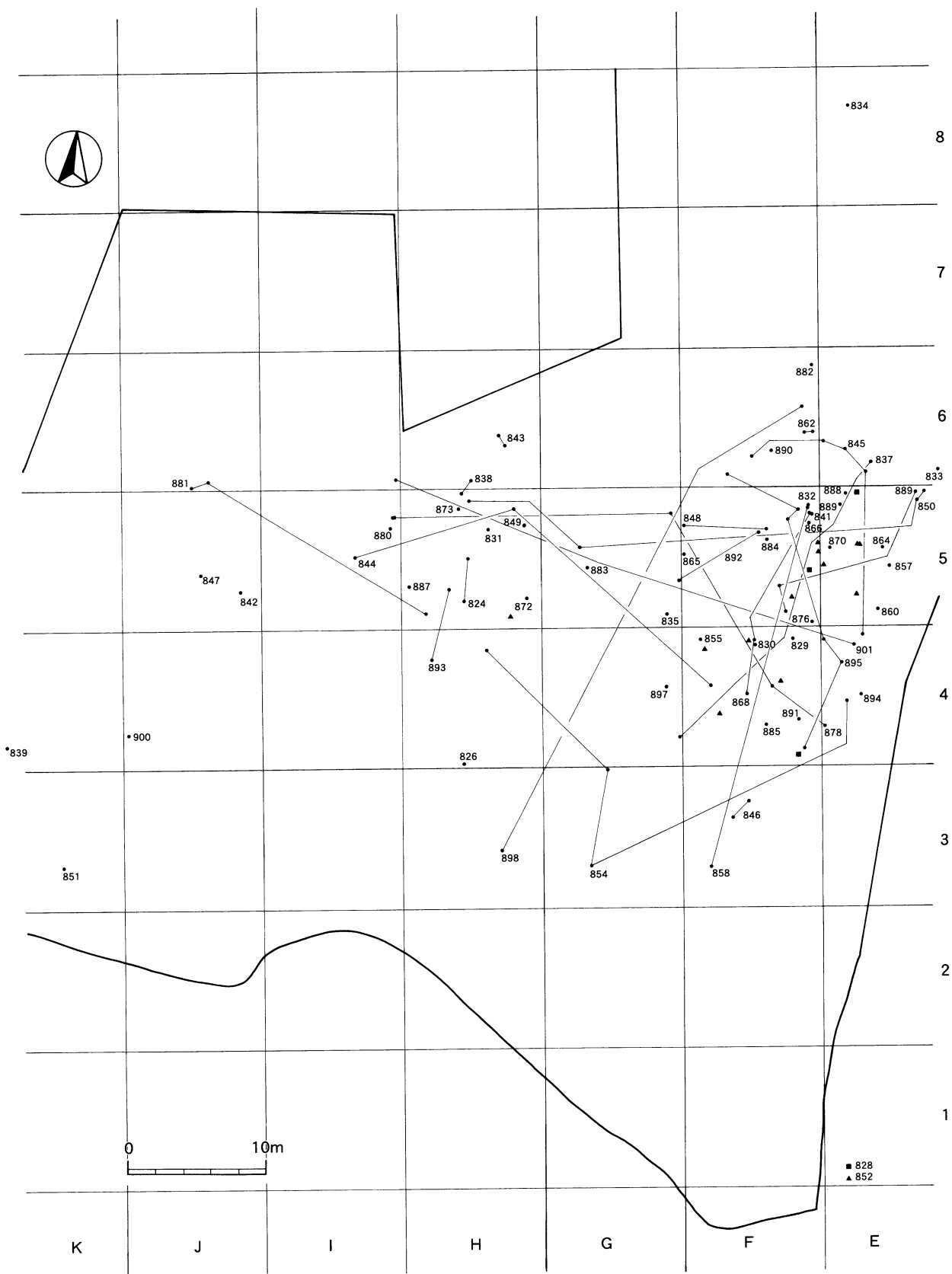
840～842は頸部、843～846は肩部から胴部にかけて、847～854は底部である。840と841は外面に格子のタタキ、内面に同心円の当て具痕がみられ、842の外面は平行タタキ目である。

843と844の外面は肩部を中心に格子目でタタキしめた後、丁寧にナデて仕上げている。846は外面を平行タタキ目によってタタキしめた後、ナデて仕上げているものの、焼成温度が低かったためか全体的に軟質で摩滅している。これらはいずれも輪積みの痕跡がよく残っており、特に843と844は明瞭である。845は肩部に短く小さな板状の把手が付けてあり、把手の上部には篋によると考えられる刻みがみられることから、把手を付ける位置を表したのと考えられる。外面には格子目のタタキが残り、内面には爪の痕が残っている。847は赤焼きの須恵器、848・851・853・854には灰釉がかかっている。848の外面には他の壺の口縁部が固着しており、原因がこの灰釉によると推定される。850の底には同心円の当て具痕が残っている。852は肩部から底部まで残存する壺である。外面は平行タタキの後、ナデて仕上げているが、タタキ目が浅く残る。内外面共に灰色で、焼成は極めて良好である。

3) 甕（第109図～第113図 855～901）

第109図は甕の口縁部から頸部、胴部にかけてのもので、口縁部が外反するタイプである。端部は855のように丸みをもっておわるものと、856のように浅い凹線が入っているものの2つのタイプがある。ここに載せたものは、いずれも全体的には小型のものと考えられる。外部は855のような平行タタキと864のような長格子タタキが見られ、内面はほとんどが同心円当て具痕であるが、863はナデ調整、865には指頭痕が残っている。862は外面に藁灰の溶融したものが固着しており、黄褐色でザラザラした状態が残っている。

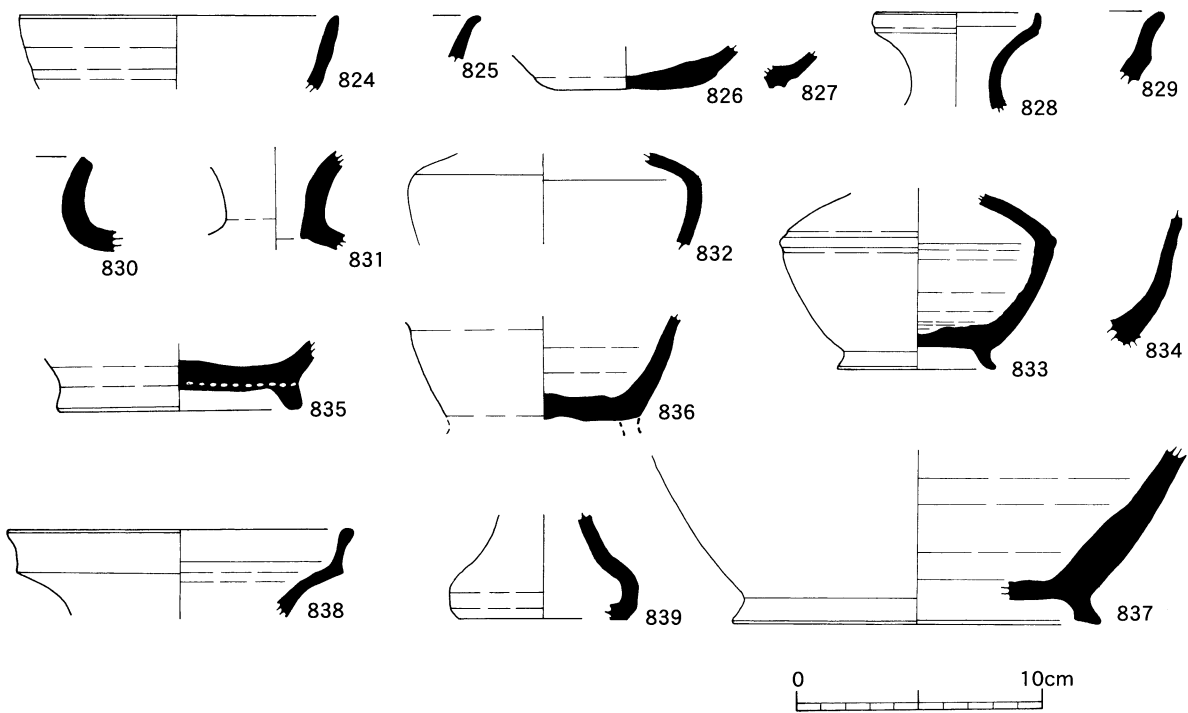
第110図も甕の口縁部から胴部にかけてであるが、口縁部が外に強く反った後に短く立ち上がるため、二重口縁風になっている。基本的に口唇部はフラットであるが、869のように若干凹んだり、



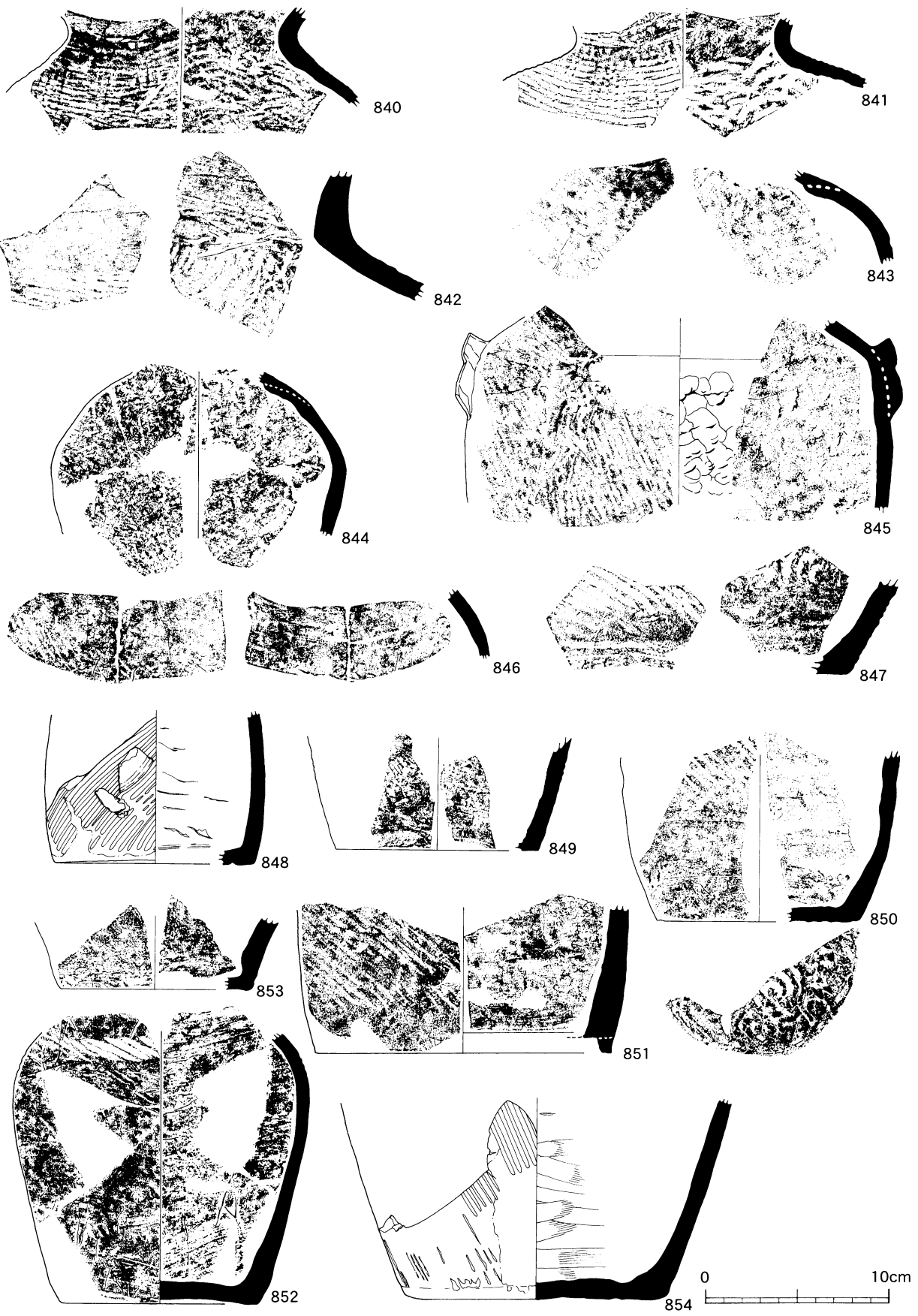
第106図 II層須恵器出土状況

872のようにふくらんだりするものが見られる。869～871と877には口縁部と頸部の境付近にヘラ描き波状文が1条巡っている。878～881までの胴部外面のうち、879は格子タタキ目であるが、それ以外は平行タタキである。内面は、全体的に平行当て具痕であるが、878のみ肩部に同心円文当て具痕がみられる。

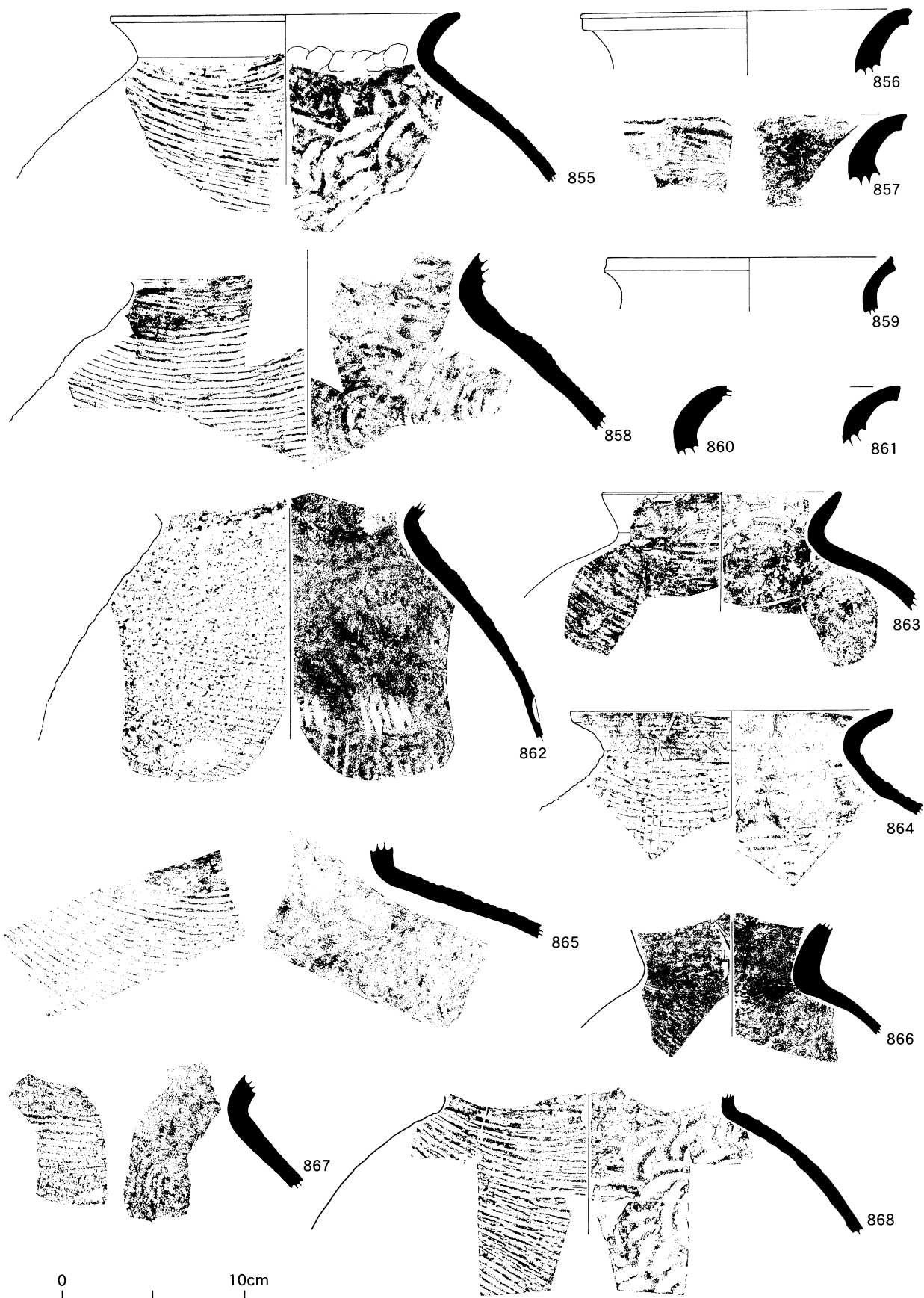
第111図から第113図は、胴部片である。外面のタタキ目は平行のものと長格子文がある。内面の当て具痕は小型の同心円文が多いが、大きい同心円文もある。また878～881は平行当て具である。第113図899は内面に菊花文状の当て具痕がみられる。



第107図 須恵器(1)：坏・壺

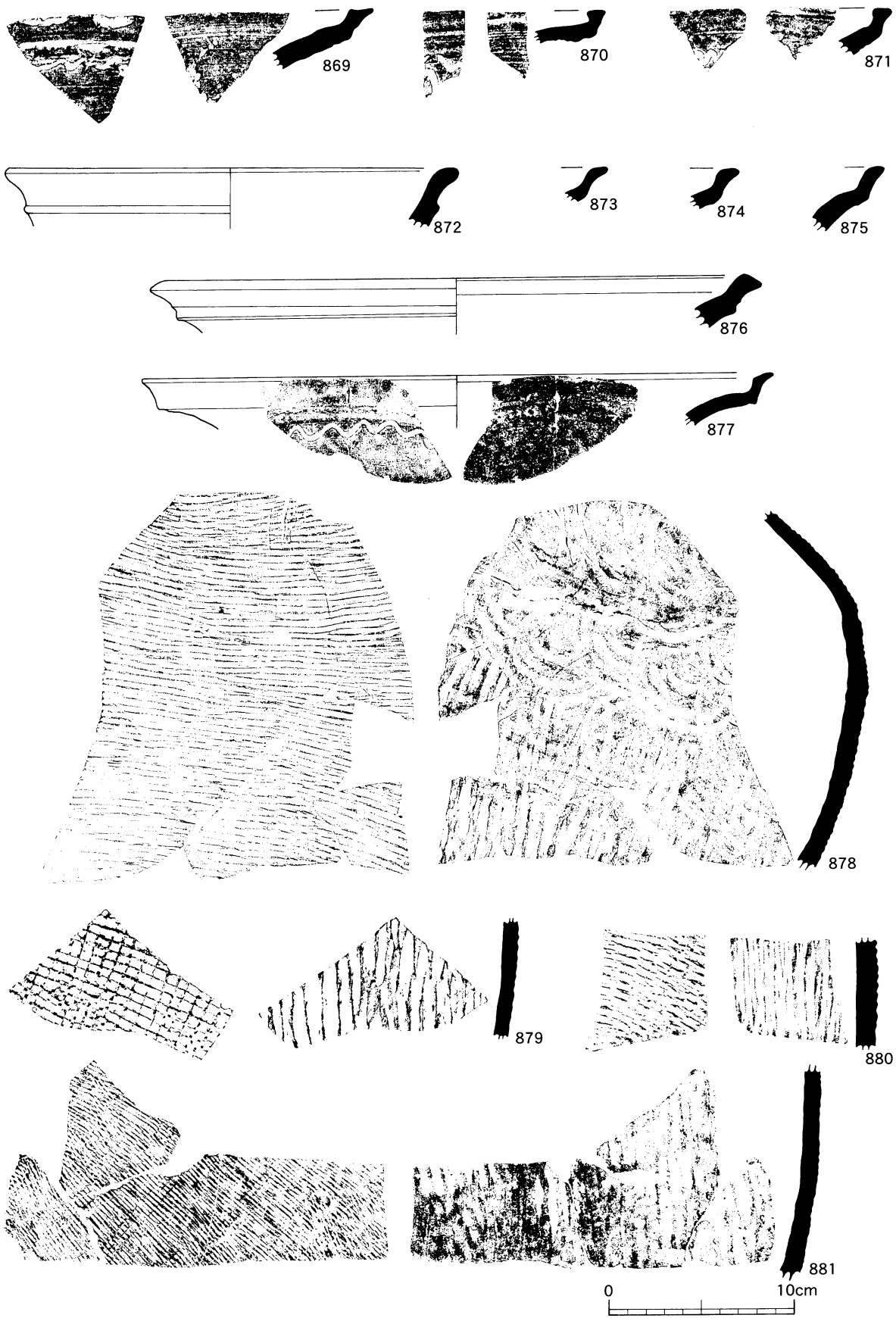


第108図 須恵器(2)：壺



0 10cm

第109図 須恵器(3): 甕



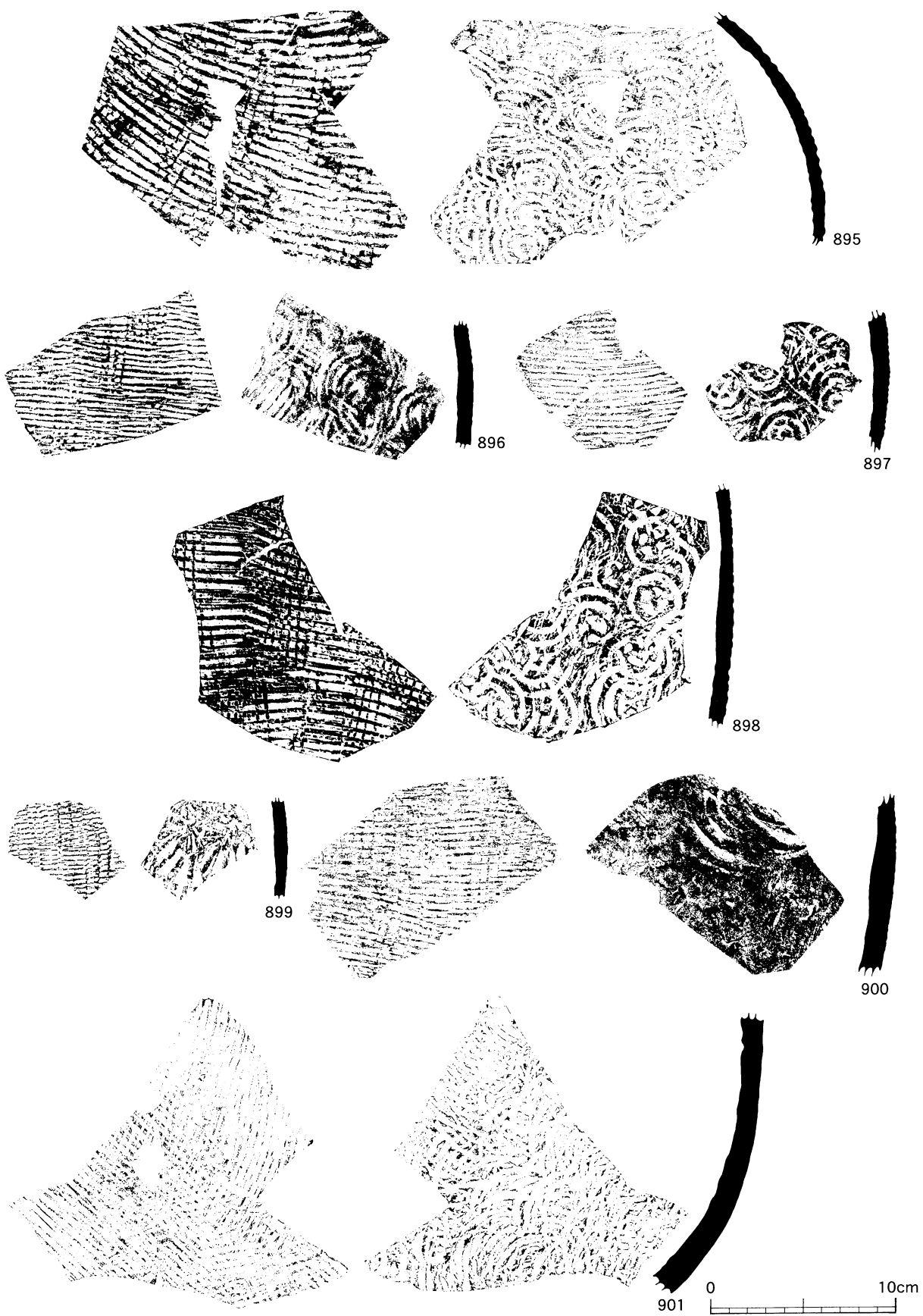
第110図 須恵器(4): 甕



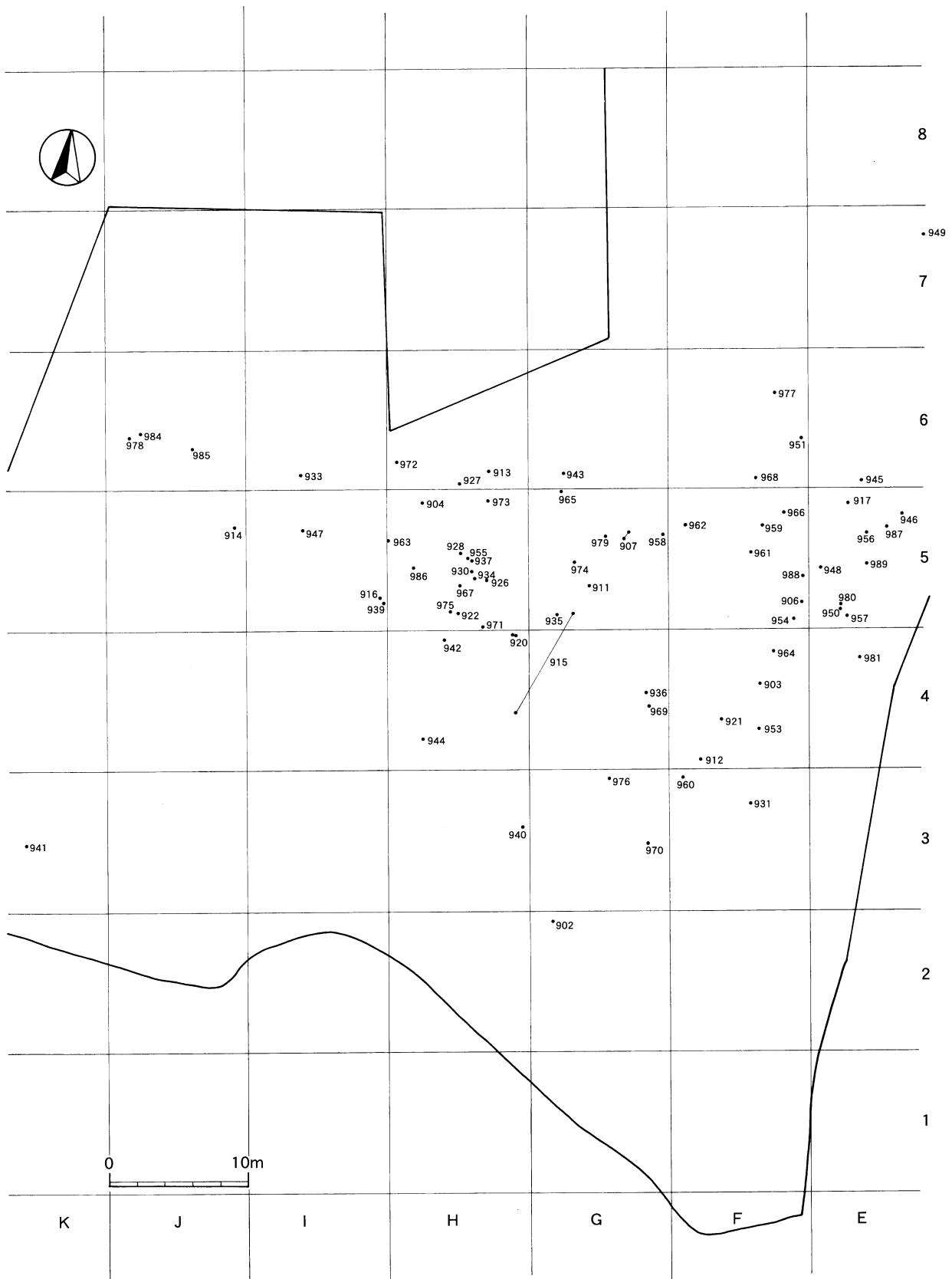
第111図 須恵器(5): 甕



第112図 須恵器(6)：甕



第113図 須恵器(7)：甕



第114图 II層越州窯青磁他出土狀況

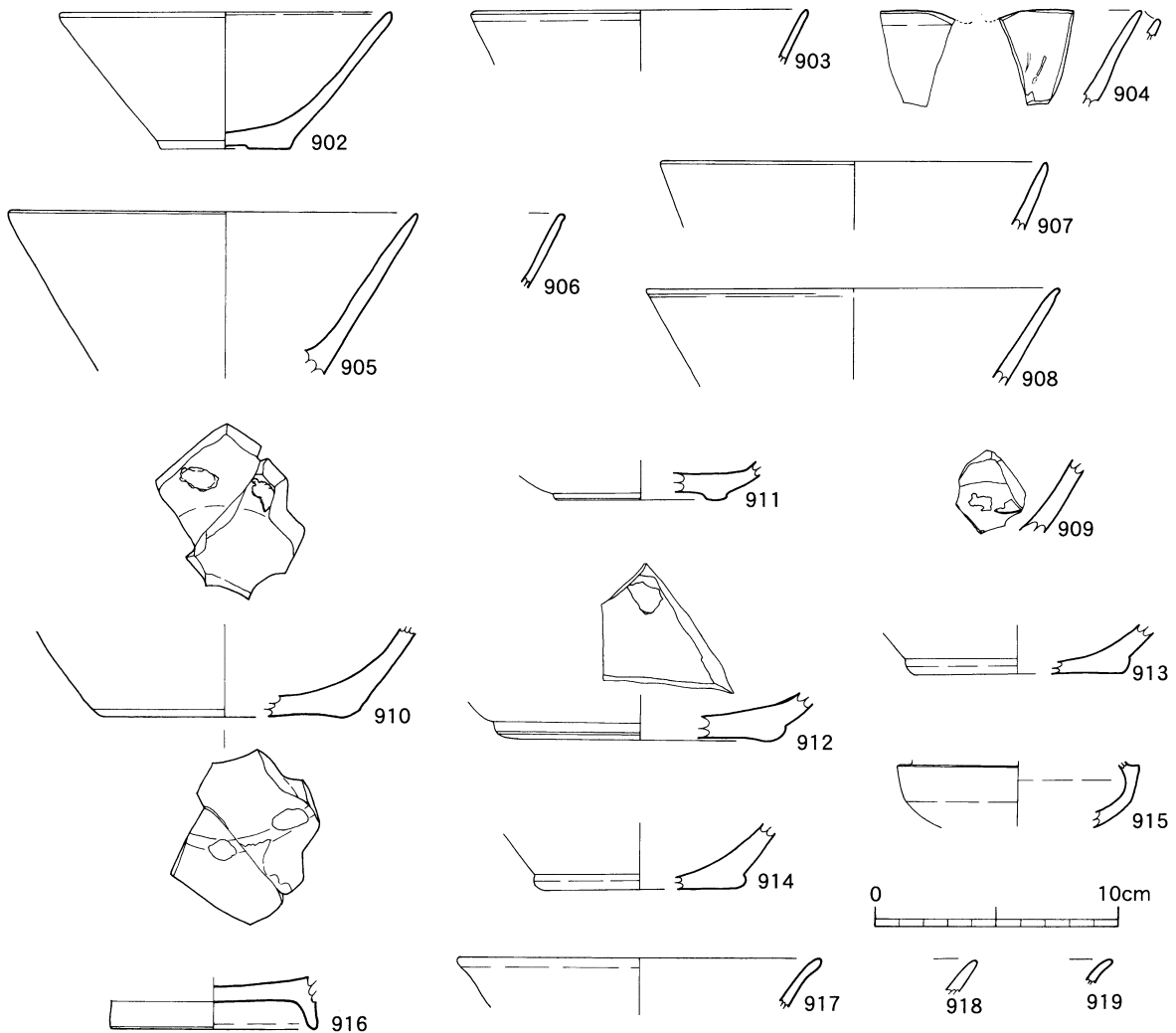
3. 越州窯青磁 (第115図 902~915)

器種には碗・合子がある。

902は完形に復元したもので、高台は幅の広い削り出しである。内外面共に濁ったような青灰色である。905も902に類似するが、やや大ぶりである。色調はさらに濁った感じのする灰色である。903と906は内外面の色調が割合に澄んだ淡青色であることや釉がかりがきれいなガラス質であることなどから同一個体かと考えられる。904は輪花である。釉がかりが澄んでおり、内面には斜めの短線が描かれている。907と908は釉が濁っており、きれいなガラス質とはならない。色調などは905に似る。910~914は底部である。910は削り出しの高台部分に目跡が残り、釉は澄んだ薄緑色である。911・912・914は底部がいずれも露胎で、外底を極めて浅く弧状に削りだし、端部を少し外に張り出す。913は内面に砂の目跡が残る。915は受け部の最大径が10cmある合子の身と考えられる。貫入の入った澄んだ深い緑をしており、蓋受部は釉を掻き取っている。

4. 緑釉陶器 (第115図 916~919)

916~919は緑釉陶器で、916は碗の底部である。薄い透明感のある緑の釉葉をていねいに塗する。高台は段有輪を有し、外底は回転による糸切り底で、見込みには重ね焼きの痕が観察される。胎土



第115図 越州窯青磁・緑釉陶器

も良質であることから、百瀬正恒氏によると近江産の9世紀末～10世紀前半と考えられるとのことである。917～919は碗の口縁部である。軟質の焼きで薄い釉薬がかかっていることから、先の百瀬氏によると平安京周辺で焼かれた、9世紀第4四半期～10世紀の第1四半期に位置付けられるものであるとの所見を得た。

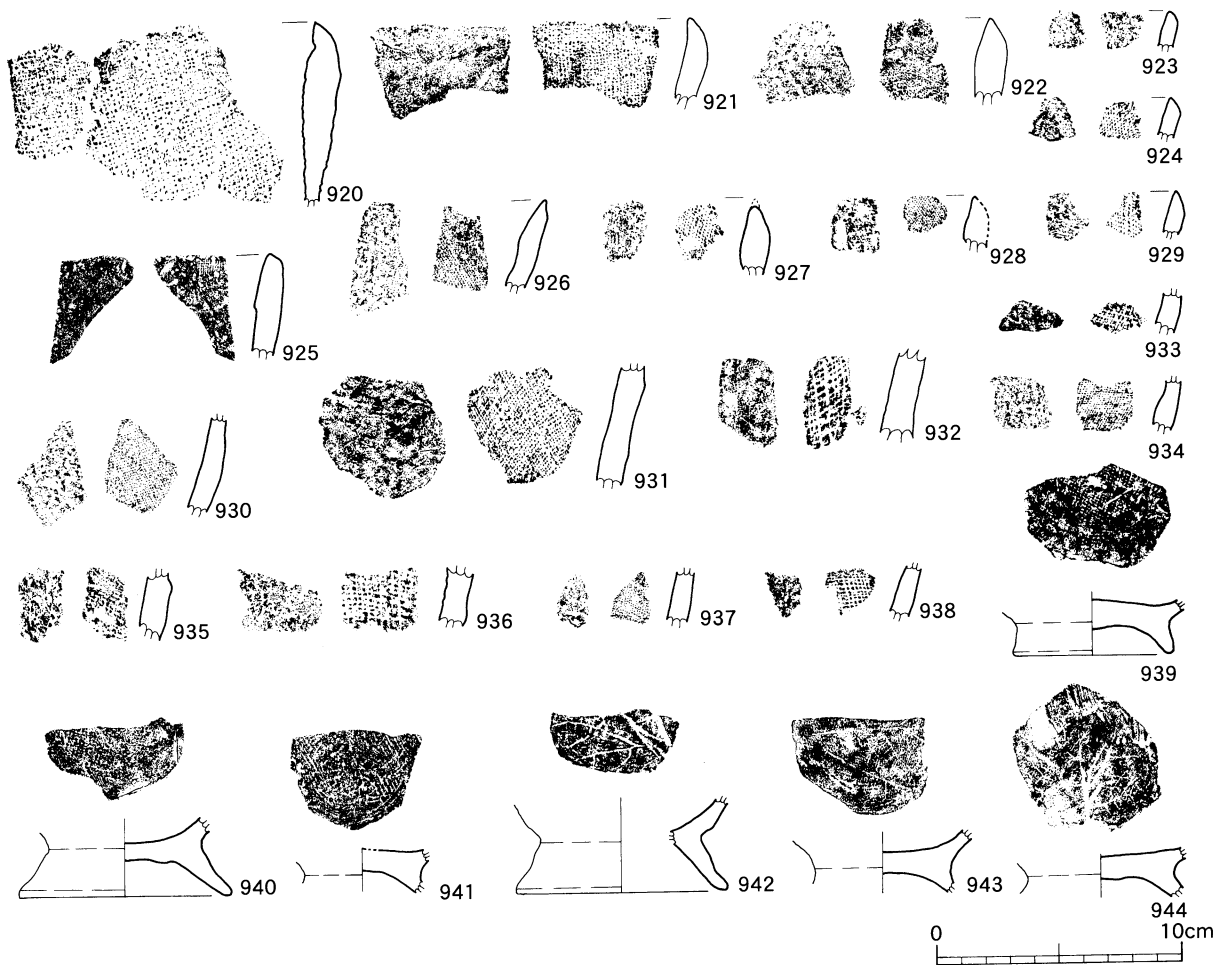
5. 焼塩土器 (第116図 920～938)

第116図は焼塩土器と圧痕土器である。

920から938は内面に布の痕跡が残り、外面は基本的にはナデ調整で仕上げる焼塩土器である。胎土には長石・石英など砂粒を多く含み、色調は内外面共に赤褐色・明褐色を呈している。口縁部は鋭い三角形に作っているが、器壁は厚く、器面の調整は凹凸が大きく残っており、壺や甕・鉢などのように整えてはいない。全体的な形状は鉢形土器に似ている。ただ、底部は検出されていないため、不明である。おそらく、平底あるいは丸底と考えられる。外面は剥離が著しく、ほとんどのものは器面がごく一部にしか残っていない。破片の数としては多いものの、個体数としてはそれほど多くはないように思われる。

6. 圧痕土器 (第116図 939～944)

939～944は圧痕土器である。939から941は高台付き碗の内底に布の圧痕が残るものである。これら3点は中央部にのみ布目の痕跡を残し、周囲は円形にナデ消している。942から944は同じ器形の



第116図 焼塩土器・圧痕土器

碗の内底に木の葉の圧痕が残るものである。広い葉を用い、葉脈が明瞭に残るように押しつけられており、布目圧痕と異なる点はほとんどナデ消さないことであり、残っている内底の全面に圧痕が見られる。これら6点はすべて外底にろくろ痕が残っている。全体的に黄褐色、明褐色を呈しており、胎土は細かく、焼成は極めて良好である。

7. 土錘ほか (第117図 945~969)

第117図はその他の遺物を集めた。

945~953は管状土錘、954~957は靱痕土器、958~961は耳皿、962~966は土製紡錘車、967は石製紡錘車、969は土製紡錘車に似るものの、穴が貫通していない円盤形土製品である。管状土錘は、いずれも胴部(中央部)が膨らむ紡錘状のものであるが、953のみは胴部をヘラと考えられる工具を用いて全体的に削っており、形状としては角柱状をしている。胴部が膨らむものの中でも、膨らみの度合いが945のように非常に大きいもの(橢形)から949などのように小さなもの(長楕円形)までいろいろなバリエーションが見られる。また、孔の大きさも小さなものから大きなものまで各種見られる。なお、管状土錘の出土数は総計32点であり、形状から分類すると次のようになる。

形 状	橢 形	紡 錘 形	長楕円形	角 柱 状	合 計
点 数	7 点	5 点	19 点	1 点	32 点

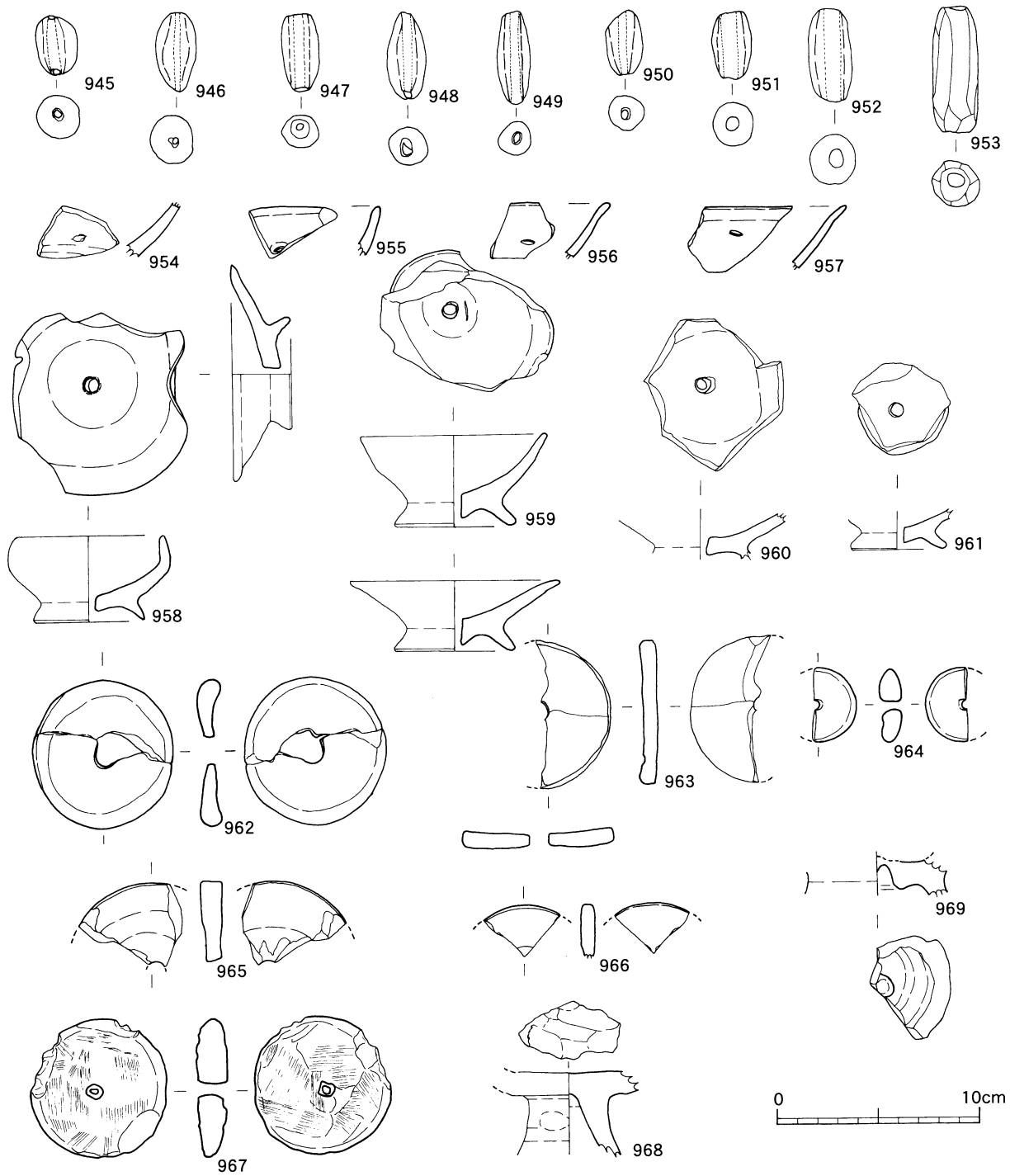
靱痕土器は、954が坏の外面上部に、955が碗か皿の内面底部近くに、また、956と957は坏の外面上部~中部に付いている。なお、957は内黒土師器である。これらの靱痕はすべて意図的に付けたとは考えられない。例えば、955は靱痕の周囲が剥げていることから、焼成前に靱を取り外したものと考えられ、その意味からも意図的ではないことが推定されるからである。

耳皿は958のみ完形として復元できた。底部中央に直径6mmほどの穴を貫通させ、口縁の2か所を強く曲げている。959も完形に復元できるが口縁の曲げが始まったところで破損しているため、全体の形状ははっきりとはしない。960・961は底部のみの残存である。いずれも高台が見られることから、同様な器形と考えられる。

紡錘車のうち、967の石製のものは素材は滑石で、表裏2面を擦って仕上げているが、細かい孔が貫通していないものも多数見られることから、素材としては決して上質のものとは考えられない。側面は一部欠損しているが、仕上げは割合に丁寧である。

962~966の土製のものは、962と963は直径が7cm程度と類似するものの、前者は高台付きの碗の高台部分を使って厚い紡錘車として使用しているのに対して、後者は高台部分の使用ではなく、962に比して薄いものである点が異なっている。964は直径3.6cmの小型のものである。側面に擦った痕跡が見られず、色調が同一であることから、碗や坏などからの転用というよりは、紡錘車として製作したものと考えられる。969は形状的には961に似るものの、貫通していない点で異なっている。961には力を入れて孔をあけたことによる粘土の盛り上がりが見られるため製作時にあけられたものと推定されるが、969は完全に焼成後に工具を使って孔をあけようとしたことが明白であり、この点で2つのものは異なっているといえる。しかし、孔を高台付きの碗の底部の中央にあけようとしていることや、その直径が7mm程であることなどから、当初は紡錘車として転用しようとの意図を以て穿孔を試みたものの、その途中で何らかのトラブルが発生したために中断したと推定され

る。それは、おそらく穿孔の方向が、当初の意図から外れて軸方向が斜めになってしまい、紡錘車としての使用が不可能になったと判断したためと考えられる。それは、底部の水平方向に対して



第117図 土錘・粘痕土器・耳皿・紡錘車

10°ほど傾いていることから理解できる。

8. 石製品・鉄・鞆羽口（第118図970～985）

第118図は古代の遺物のうち、石製品や金属製品、鞆の羽口を集めた。

970は軟質の砂岩製砥石である。表面と裏面、それに破損していない一方の側面の3面を砥面として使用している。相当に使い込んだと考えられ、特に裏面の使用が著しく、大きく凹んでいる。

971は安山岩の自然礫で、敲打痕や擦痕が全体的に見られるほか、三角形に割った先端部やそれに続く稜の部分に短く直線的に削った線が多数見られることから、砥石として使用した後、割って先を三角形に尖らせた面を丁寧に整えて切損防止にして、上下方向に動かしたものと考えられる。

また、弧状となった断面三角形の部分も横方向にも使用していることから、多目的に使用された礫といえる。

972～981は鉄製品などである。972と973は釘の先端部と中央部、974は刀子の一部と考えられ、975は一方が緩やかな角を持って曲がっていることから何らかの農耕具の可能性が考えられる。976は何らかの製品であろうが、詳細については不明である。977と978は鉄滓と推定される。

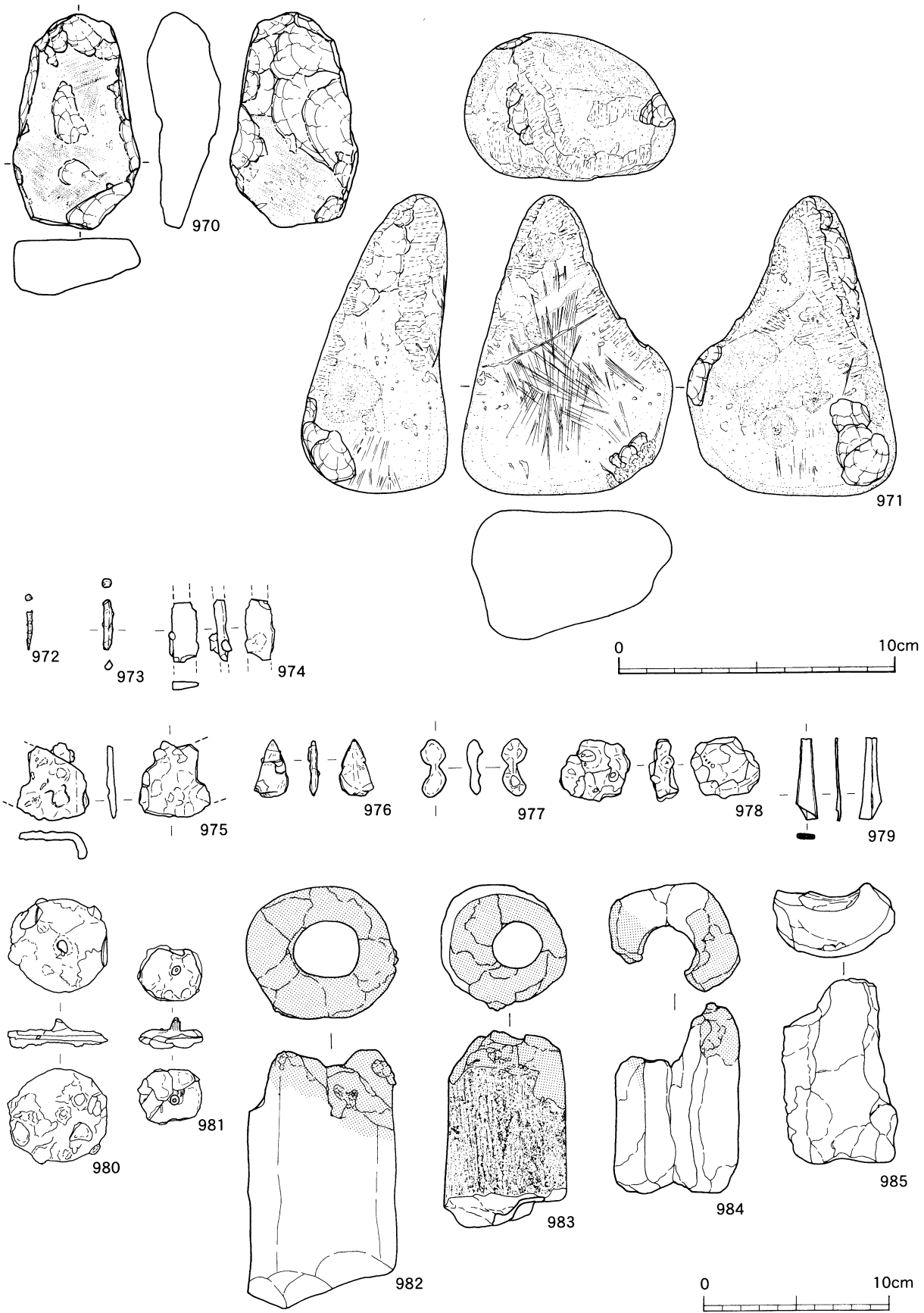
979は銅製品である。一枚板の銅板を敲打によって曲げて形を整えている。一方が徐々に広がり、もう一方が次第に細くなる傾向をもつ製品と考えられ、装飾品の一部かと推定される。

980・981は鉄製の紡錘車である。前者は直径が5.1cm、後者は3.0cmであり、いずれも中央に軸が残った状態で出土している。後者に残された軸は8本の歯が付いたもので、固着した形であることから紡錘車の軸受け部分自体がこの軸を挿入できるようになっていたものと推定される。

982～985は鞆の羽口である。985以外は先端部が火熱を受けて赤化しているほか、製鉄時の残滓や鉄分が付着している様子が観察される。983は縦方向に多くの筋が見られることから、穴となる部分を直径2.5cmほどの棒状のもので利用し、その周囲に粘土紐あるいは粘土板を厚く巻き付けるが、その際は厚い部分とそれより薄い部分というように厚さに変化を付けて巻き付ける。外面は、粘土がまだ完全には乾いていない状態、もっといえば粘土がまだ濡れている状態の時に縦方向にナデて調整したために、このような縦方向の多くの筋が残ったと考えられる。鞆の火にあたる部分は相当な高温だったと推定され、先端部がガラス化したものもみられる。

炭化物（図版）

炭化物は18点出土した。内訳は炭化木が11点・種子が4点・不明1点である。図版に記載した種子986から989のうち、2点が梅、又は桃の種子で、2点がコナラ属と思われる。木炭については2点を種の同定および年代測定を行った。詳細は本報告書の分析報告書に記載している。（付篇参照）



第118図 石製品・金属製品・鞆羽口

第20表 古代遺物観察表(1)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図
585	E 5	II b	38430	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	12.6	5.3	6.5		○	○	○			86
586	E 6	II b	34000	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	12.4	4.5	4.2		○		○	○		86
587	K 3	III a	39893	土師器	坏	完形	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	10.8	4.2	4.0		○	○	○	○	煤付着(内・外面)	86
588	G 5	II a	18014	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.6	4.2	4.6		○	○	○			86
589	K 4	III a	42491	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	10.0	3.0	4.8		○	○	○			86
590	E 5	II b	29470	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.0	4.4	5.0		○	○	○	○		86
591	E 5	II b	36727	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.0	4.7	6.4				○	○		86
592	E 5	II b	37470	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.0	4.4	6.5		○		○	○		86
593	H 3	III a	2897	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.8	4.2	7.4		○	○	○	○		86
594	J 2	III a	44956	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.0	4.6	6.8		○		○	○		86
595	G 5	III a	25029	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	12.1	5.2	5.4				○	○		86
596	K 3	II b	39801	土師器	坏	完形	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	11.7	5.7	5.6		○		○	○	煤付着(内面)	86
597	F 7	II	42491	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.2	5.0	5.2			○	○	○		86
598	H 4	III a	3291	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.6	4.8	6.0		○		○	○	角閃石が多い	86
599	H 6	II b 下	14372	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.8	3.8	4.8		○		○	○	煤付着(内・外面)	86
600	G 4	III	6914	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.2	4.2	5.4		○		○	○		86
601	H 5	II b	12956	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	10.2	4.4	5.3				○	○		86
602	J 5	III a	6845	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.5	4.6	5.5		○	○	○	○	同一箇所	86
603	J 5	III a	6836	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.9	4.5	5.9		○	○	○	○	同一箇所	86
604	H 5	II b	37707	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.1	4.6	5.4		○		○	○	同一箇所	86
605	H 5	II b	12930	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	11.4	4.5	5.0		○		○	○		86
606	F 4	III a	24882	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	12.2	4.4	5.2				○	○		86
607	G 4	II b	37802	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.0	3.9	5.8		○		○	○		86
608	K 3	II	2208	土師器	坏	完形	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	10.2	3.9	5.4				○	○	火山ガラスが多い	86
609	K 3	II b	39808	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.2	4.2	4.5		○		○	○		86
610	K 3	III a	39863	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	11.0	3.9	4.4				○	○	煤付着(内面)	86
611	G 5	II b	17387	土師器	坏	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			5.6		○		○	○		86
612	H 5	III a 上	20061	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.2	3.9	6.0		○		○	○		86
613	B13	表		土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.2	3.6	6.0				○	○		86
614	H 2	III a	44822	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.8	3.5	5.4		○	○	○	○		86
615	G 5	II a	11535	土師器	坏	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.2		○		○	○		86
616	I 5	II b	9057	土師器	坏	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8		○	○	○	○		86
617	K 4	表		土師器	坏	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			5.2		○	○	○	○		86
618	K 4	表		土師器	坏	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8				○	○		86
619	K 3	IV a	3804	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	10.0	3.0	5.6				○	○		86
620	G 6	III a	41373	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.0	3.1	5.6		○	○		○		86
621				土師器	坏	完形	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	9.0	2.6	4.3		○	○	○	○		86
622	J 5	II b 上	6738	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	8.4	2.4	6.0		○	○	○	○		86
623	K 3	III a	1865	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	9.6	2.0	5.8		○	○	○	○		86
624	K 3	II a	1844	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.0	2.4	7.4				○	○		86
625	F 6	II b	35893	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	17.0	9.7	10.2	1.3	○			○		88
626	E 6	II a	39305	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	15.2	7.0	9.2	1.2	○	○	○	○		88
627	J 5	II b 上	6853	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.8	6.9	9.2	1.7	○	○	○	○		88
628	H 5	II b 下	16680	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	14.4	6.2	8.2	1.5	○	○	○	○		88
629	I 5	III a 上	17983	土師器	坏	完形	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	14.4	6.4	7.2	1.2	○	○	○	○		88
630	I 6	III a	4861	土師器	坏	口縁部	灰茶褐色	灰茶褐色	ナデ	ナデ	13.6						○	○		88
631	F 6	III a	30531	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.6	6.5	7.6	0.8	○	○	○	○		89
632	F 5	II b	32543	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.8	6.3	7.2	0.9			○	○		89
633	K 3	III a	2656	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.2	5.7	6.4	1.1			○	○		89
634	E 8	III a	431	土師器	坏	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	14.4	6.5	7.0	0.8	○	○		○		89
635	F 6	II a	35438	土師器	坏	完形	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	12.5	6.3	7.2	1.0				○		89
636	F 5	II b	30785	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	14.4	6.2	7.8	1.0			○	○		89
637	E 5	II b	38127	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	12.8	5.9	7.0	0.8			○	○		89
638	E 5	II b	29520	土師器	坏	完形	鈍い橙	鈍い橙	ナデ	ナデ	13.4	5.9	7.2	1.1			○	○		89
639	F 5	II b	33036	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	14.0	6.2	7.6	1.0			○	○		89
640	F 5	II b	35595	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	14.0	5.9	7.2	0.7	○	○	○	○		89
641	F 6	II b	35940	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	17.8	6.7	7.4	1.1			○	○		89
642	E 6	II a	39333	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.6	3.4	6.0	1.0			○	○		89
643	I 6	III a	5347	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.6	3.6	6.6	0.8	○	○		○		89
644	H 5	II b	19450	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.8	2.7	7.2	1.3	○	○	○	○		89
645	H 3	III a	20695	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	14.4	4.5	7.4	1.3	○	○	○	○		89
646	K 3	III a	3799	土師器	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	15.6	8.3	10.6	4.4	○	○	○	○		89
647	H 5	III a 上	15544	土師器	土師器高台	完形	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	10.0	5.3	5.4		○	○	○	○		90
648	K 3	II b	39797	土師器	土師器高台	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	11.8	5.5	5.6				○	○	煤付着(内・外面)	90
649	K 3	III a	39894	土師器	土師器高台	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	11.4	4.7	5.6		○			○	煤付着(内面)	90
650	F 6	II b	39697	土師器	土師器高台	完形	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	13.0	5.9	6.0		○	○		○		90
651	E 5	II b	36060	土師器	土師器高台	完形	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	ナデ	14.0	6.0	6.2		○	○		○		90
652	K 4	III a	44932	土師器	土師器高台	完形	明褐色	明褐色	ナデ	ナデ	12.0	5.7	5.0		○	○	○	○	煤付着(内面)	90
653	E 8	II	42427	土師器	土師器高台	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8				○	○		90

第21表 古代遺物観察表(2)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図
654	E 5	II a	34466	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8							90
655	G 5	II b	15148	土師器	光素高台:環	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			5.2		○	○	○	○		90
656	G 5	II a	8659	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			6.2			○	○	○		90
657	F 6	II a	35427	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.0		○	○		○		90
658	E 4	II b	34217	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8		○		○	○		90
659	E 4	II b	28291	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.6		○	○	○	○		90
660	E 4	III a	31704	土師器	光素高台:環	胴~底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			6.2		○	○	○	○	墨書土器	90
661	F 4	II a	27400	土師器	光素高台:環	底部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			5.0		○			○		90
662	E 5	II b	36254	土師器	光素高台:環	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			5.4			○	○	○		90
663	F 4	III a	31721	土師器	光素高台:環	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.8				○	○		90
664	J 4	III a	3340	土師器	光素高台:皿	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	10.4	3.2	5.0		○		○	○		90
665	F 6	表		土師器	鉢	口縁部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ	24.0					○	○	○		91
666	G 3	II a	21919	土師器	鉢	口縁部	黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	29.0				○	○	○	○		91
667	F 4	III a	24975	土師器	鉢	口縁部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	29.2				○	○	○	○		91
668	I 6	II b	4575	土師器	鉢	口縁部	黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	31.6					○	○	○		91
669	G 4	II b	1651	土師器	鉢	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			13.0		○	○	○	○		91
670	E 6	II a	39295	土師器	鉢	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ			10.0			○	○	○		91
671	F 6	II b	37635	土師器	鉢	底部	黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ			7.8		○	○	○	○		91
672	E 5	II b	36400	土師器	鉢	底部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			9.0			○	○	○		91
673	F 6	II b	32767	土師器	土師甕	口縁部	暗褐色	暗褐色	ハラケズリ	ハラナデ	27.8				○	○	○	○		92
674	F 6	III a	39441	土師器	土師甕	口縁部	暗黄褐色	暗黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	29.0					○	○	○		92
675	E 6	II b	39781	土師器	土師甕	口縁部	黄褐色	黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	26.4					○	○	○		92
676	E 6	II b	38285	土師器	土師甕	口縁部	黄褐色	黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	26.5				○	○	○	○		92
677	F 6	II b	37683	土師器	土師甕	口縁部	淡茶褐色	黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	31.0					○	○	○		92
678	F 5	II b	35757	土師器	土師甕	胴部	暗赤褐色	明赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ						○	○	○		92
679	K 3	III a	39870	土師器	土師甕	口縁部	灰黄褐色	暗茶褐色	ハラケズリ	ハラナデ	17.8					○	○	○		93
680	F 5	III a	42099	土師器	土師甕	口縁部	暗褐色	黒褐色	ハラケズリ	ハラナデ	18.2					○	○	○		93
681	I 6	III a	10080	土師器	土師甕	口縁部	明褐色	明褐色	ハラケズリ	ハラナデ	21.2				○	○	○	○		93
682	F 5	II b	30714	土師器	土師甕	口縁部	黄褐色	黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	26.0					○	○	○		93
683	E 6	II b	39782	土師器	土師甕	口縁部	茶褐色	黄茶褐色	ハラケズリ	ハラナデ	28.4					○	○	○		93
684	F 5	II a	28807	土師器	土師甕	口縁部	暗褐色	暗赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ	28.6					○	○	○		93
685	E 5	III a	38312	土師器	土師甕	口縁部	赤褐色	赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ	29.0					○	○	○		93
686	E 7	III a	42565	土師器	土師甕	口縁部	灰黄褐色	暗黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ	24.4					○	○	○		93
687	F 6	II b		土師器	土師甕	口縁部	淡褐色	淡褐色	ハラケズリ	ハラナデ	25.2					○	○	○		93
688	E 5	II b	37474	土師器	土師甕	胴部	黄褐色	明赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ					○		○			94
689	E 4	II b	28600	土師器	土師甕	口縁部	明赤褐色	黒褐色	ハラケズリ	ハラナデ	19.6					○	○	○		94
690	I 5	III a	5983	土師器	土師甕	胴部	淡黄色	黄褐色	ハラケズリ	ハラナデ					○	○	○			94
691	F 5	II a	32859	土師器	土師甕	口縁部	茶褐色	淡赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ						○	○	○		94
692	F 3	II a	22511	土師器	土師甕	口縁部	暗褐色	茶褐色	ハラケズリ	ハラナデ						○	○	○		94
693	J 5	II	1048	土師器	土師甕	口縁部	淡赤褐色	淡赤褐色	ハラケズリ	ハラナデ					○		○	○		94
694	E 5	II b	29801	土師器	甌	口縁部	淡黄色	明赤褐色	ナデ	ナデ						○	○	○		95
695	E 6	II a	37559	土師器	甌	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	ハラケズリ	ナデ	25.0					○	○	○		95
696	E 4	II a	24104	土師器	甌	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	ハラケズリ	ユビナデ						○	○	○		95
697	G 4	III a	24673	土師器	甌	口縁部	明赤褐色	暗赤褐色	ハラケズリ	ユビナデ					○		○	○		95
698	J 5	III a	6772	土師器	甌	胴部	淡黄色	淡黄褐色	ユビナデ	ユビナデ						○	○	○		95
699	E 4	II a	27509	土師器	甌	底部	明赤褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ			17.2			○	○	○		95
700	F 5	表		土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ユビナデ	ユビナデ			22.0				○	○		95
701	F 6	II b	32608	土師器	甌	底部	暗赤褐色	暗赤褐色	ハラケズリ	ナデ			22.0			○	○	○		95
702	E 5	II a	34929	土師器	甌	底部	赤褐色	赤褐色	ハラケズリ	ナデ			20.4			○	○	○		95
703	H 4	表		土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ユビナデ	ナデ			14.0			○	○	○		95
704	E 5	II b	29800	土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ハラケズリ	ナデ			20.0			○	○	○		95
705	J 5	II b	5244	土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ハラケズリ	ナデ			10.2			○	○	○		95
706	E 5	II b	33728	土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ユビナデ						○				95
707	F 5	II b	35371	土師器	甌	底部	淡褐色	暗褐色	ハラケズリ	ハラケズリ							○	○		95
708		表		土師器	甌	底部	黄褐色	淡黄色	ナデ	ユビナデ							○	○		95
709	E 6	表		土師器	甌	底部	淡黄褐色	淡黄褐色	ハラケズリ	ハラケズリ							○	○		95
710	E 6	II b	36372	土師器	甌	底部	暗赤褐色	暗赤褐色	ハラケズリ	ナデ					○	○	○	○		95
711	G 4	III a		土師器	甌	底部	淡黄色	淡黄色	ユビナデ	ハラケズリ						○	○	○		95
712	G 5	II a	18128	土師器	甌	底部	暗黄褐色	茶黒褐色	ハラナデ	ユビナデ			18.6				○	○		96
713	F 4	III a	24884	土師器	甌	底部	茶褐色	茶褐色	ハラケズリ	ナデ						○	○	○		96
714	E 6	II b	37036	土師器	甌把手	胴部	灰赤褐色	淡赤褐色	ハラケズリ	ナデ						○	○	○		96
715	H 6	III a		土師器	甌把手	胴部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ					○	○	○	○	3号土坑	96
716	E 5	II b	36311	土師器	甌把手	把手		淡赤褐色	ナデ	ナデ					○		○	○		96
717	F 4	III a	24857	土師器	甌把手	把手		暗赤褐色	ナデ	ナデ						○	○	○		96
718	J 5	II b	9842	土師器	甌把手	把手		赤褐色	ナデ	ナデ						○	○	○		96
719	H 5	II b	7446	土師器	甌把手	把手		黄褐色	ナデ	ナデ						○	○	○		96
720	H 4	III a		甌	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	16.4	8.1	8.9	1.2	○		○			4号土坑	98
721	E 7	II	42348	甌	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	13.6	6.2	7.8	0.9	○		○				98
722	F 5	II b	38003	甌	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	13.2	6.3	7.4	0.8	○		○				98

第22表 古代遺物観察表(3)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図
723	E 5	II b	36121	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	13.4	6.4	7.0	0.8	○	○	○			98
724	F 5	II b	30235	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡橙色	ハラミガキ	ナデ	14.0	6.2	8.0	1.0	○		○	○		98
725	G 2	II a	20962	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	13.0	6.0	7.4	0.8	○		○	○		98
726	J 4	表		内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	13.0	5.7	7.0	1.0		○	○	○		98
727	G 2	III a	25194	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	14.0	6.5	7.2	1.1	○	○	○	○		98
728	F 5	II b	26669	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ	13.8	6.1	8.0	0.8	○		○	○		98
729	E 4	II a	26952	内黒土編年	壺	完形	灰黄褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ	11.0	5.1	6.6	1.4			○	○		98
730	E 8	III a	413	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	14.0	6.6	6.0	0.8		○		○		98
731	K 3	III a	1850	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ	10.8	6.3	7.0	1.5		○	○	○		98
732	H 5	II b	17886	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	11.0	5.5	6.8	0.9			○	○		98
733	H 2	III a	44707	内黒土編年	壺	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	12.2	4.8	6.6	0.7		○	○	○		98
734	E 4	II b	29509	内黒土編年	壺	口~胴部	黒褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ	18.2					○	○	○		98
735	F 6	II b	32656	内黒土編年	壺	口~胴部	黒褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ	16.0				○	○	○	○		98
736	F 5	II a	29027	内黒土編年	蓋	完形	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	16.4	4.0	2.6	2.6	○		○	○		98
737	F 6	II b	38280	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			9.9	1.5			○	○	○	99
738	G 5	II b	35971	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ			8.8	0.9		○	○	○	99	
739	F 11	III a	39225	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			8.4	0.6		○	○	○	99	
740	F 5	II b	37888	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			9.0	1.2			○	○	99	
741	E 5	II b	36936	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			7.0	0.9		○	○	○	99	
742	F 5	II b	32472	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			8.6	0.9		○	○	○	99	
743	E 5	II a	35016	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			6.6	0.5	○			○	99	
744	E 5	II b	31899	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			8.2	1.4			○	○	99	
745	G 5	II b	30663	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			8.8	1.1				○	99	
746	F 5	II b	30668	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			7.2	0.9				○	99	
747	F 5	II a	27593	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			6.7	0.7	○			○	99	
748	E 6	II a	39571	内黒土編年	壺	底部	暗茶褐色	茶褐色	ハラミガキ	ナデ			9.5	1.1	○	○	○	○	99	
749	F 4	III a	31812	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	黒褐色	ハラミガキ	ナデ			6.8	0.8				○	99	
750	F 5	II b	32424	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			7.6	0.7				○	99	
751	F 3	III a	25124	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			7.8	1.0			○	○	99	
752	F 4	II b	31525	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			7.2	0.7		○	○	○	99	
753	G 5	II a	30623	内黒土編年	壺	底部	黒褐色	淡褐色	ハラミガキ	ナデ			9.4	0.5			○	○	99	
754	I 5	II b 下	12328	内黒土編年	壺	胴部	淡灰色	淡茶褐色	ハラミガキ	ナデ								○	99	
755	G 5	II b	15168	内黒土編年	壺	胴部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ							○	○	99	
756	H 3	表		内黒土編年	坏	完形	灰黄褐色	灰黄褐色	ハラミガキ	ナデ	18.2	5.6	9.4					○	100	
757	H 5	II b	17811	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	明褐色	ハラミガキ	ナデ			7.4			○	○	○	100	
758	F 6	II b	35853	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			6.0			○		○	100	
759	E 5	II b	36870	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	明黄褐色	ハラミガキ	ナデ			5.5				○	○	100	
760	H 5	II b	19403	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			6.2			○		○	100	
761	H 5	II b	12747	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			8.5					○	100	
762	G 6	表		内黒土編年	坏	底部	淡灰褐色	明黄褐色	ハラミガキ	ナデ			5.4			○		○	100	
763	K 3	II	2023	内黒土編年	坏	底部	淡灰色	淡黄褐色	ハラミガキ	ナデ			5.5					○	100	
764	F 4	III a	24932	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			6.6				○	○	100	
765	F 4	II b	26084	内黒土編年	坏	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			4.6					○	100	
766	E 5	II b	36226	内黒土編年	鉢	口縁部	黒褐色	黒灰褐色	ハラミガキ	ナデ	19.4							○	100	
767	H 5	III a	19375	内黒土編年	鉢	口縁部	黒褐色	黒茶褐色	ハラミガキ	ナデ								○	100	
768	E 4	II b	37823	内黒土編年	鉢	口縁部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	24.0							○	100	
769	G 5	II a	8650	内黒土編年	鉢	口縁部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	25.5						○	○	100	
770	E 5	II b	36025	内黒土編年	鉢	口縁部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ	28.8						○	○	100	
771	G 5	II a	30610	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			14.0				○	○	100	
772	F 4	II b	26211	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			15.4				○	○	100	
773	G 5	II b	37782	内黒土編年	鉢	底部	灰色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			14.6			○	○	○	100	
774	F 5	II b	35678	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			12.6			○	○	○	100	
775	F 4	III a	31726	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			17.0		○		○	○	100	
776	I 5	II b 上	6691	内黒土編年	高台付鉢	胴部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ								○	101	
777	G 5	II a	15832	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			15.6				○	○	101	
778	E 7	II	42394	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ			17.5				○	○	101	
779	E 6	II a	39267	内黒土編年	鉢	胴部	暗茶褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ							○	○	101	
780	G 5	II b	18828	内黒土編年	鉢	底部	黒褐色	淡黄色	ハラミガキ	ナデ							○	○	101	
781	K 3	II b	39827	赤色土編年	坏	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	9.2	2.6	5.0				○	○	103	
782	F 6	II b	39665	赤色土編年	壺	完形	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.4	6.0	7.4	0.9		○	○	○	103	
783	H 6	II a	19440	赤色土編年	壺	底部	淡黄色	黄橙色	ナデ	ナデ			8.4	2.2			○	○	103	
784	F 5	III a	38224	赤色土編年	壺	底部	明褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ						○	○	○	103	
785	F 5	II b	30951	赤色土編年	壺	底部	明褐色	明褐色	ハラミガキ	ハラミガキ			8.0	0.8		○	○		103	
786	F 4			赤色土編年	壺	底部	黄橙色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ			8.4	1.2		○	○	○	103	
787	G 4	III a	25217	赤色土編年	壺	底部	黄橙色	明褐色	ナデ	ナデ			8.4	0.6		○	○	○	雲母を含む	103
788	E 6	II a	39581	赤色土編年	坏	底部	明褐色	淡赤褐色	ナデ	ナデ			10.2	0.7			○	○	103	
789	I 5	II b 上	6653	赤色土編年	坏	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			5.6			○	○	○	103	
790	I 5	II b	7088	赤色土編年	壺	底部	黄橙色	淡黄色	ナデ	ナデ			5.0			○	○	○	103	
791	E 6	II a	39419	赤色土編年	壺	口縁部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ	13.6					○	○	○	104	

第23表 古代遺物観察表(4)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図	
792	E 5	II b	31848	純土器	塊	底部	黄橙色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			9.4	1.1			○	○		104	
793	E 5	II b	33550	純土器	塊	底部	茶褐色	黄橙色	ハラミガキ	ナデ			6.6	0.8				○		104	
794	H 6	II b	35984	純土器	塊	底部	黄橙色	黄橙色	ナデ	ナデ			7.0	1.1			○	○		104	
795	F 6	II b	38190	純土器	塊	底部	明褐色	黄橙色	ナデ	ナデ			8.0	1.0			○	○		104	
796	I 6	II b	4650	純土器	皿	口縁部	暗茶褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	12.8							○		104	
797	I 6	III a	4812	純土器	塊	口縁部	明褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ	14.4						○	○		104	
798	F 5	表		純土器	塊	底部	茶褐色	黄橙色	ナデ	ナデ			7.4	0.8				○		104	
799	E 6	表		純土器	塊	底部	暗茶褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			10.4	1.3			○	○	○	煤付着	104
800	F 6	II b	39651	純土器	塊	底部	黄橙色	明褐色	ナデ	ナデ			7.2	0.7				○	○		104
801	I 4	III a	2938	純土器	塊	底部	黄橙色	明黄褐色	ナデ	ナデ			8.2	0.8			○	○	○		104
802	F 6	表		純土器	塊	底部	明褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ			8.4	1.1			○	○	○		104
803	F 3	III a	25137	純土器	塊	底部	淡黄色	淡黄褐色	ナデ	ナデ			8.2	1.4			○	○	○		104
804	F 6	II b	37668	純土器	塊	底部	黄橙色	黄褐色	ハラミガキ	ナデ			7.0	0.7				○	○		104
805	E 6	II a	39376	純土器	塊	底部	明褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			9.0	1.3			○	○	○		104
806	E 4	II b	31197	純土器	塊	底部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			8.2	1.0			○	○	○		104
807	I 5	III a	17000	純土器	塊	底部	茶褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			8.0	1.1			○	○	○		104
808	E 6	II b	34014	純土器	塊	底部	灰黄褐色	明褐色	ナデ	ナデ							○	○	○		104
809	F 3	III a	25075	純土器	坏	底部	淡黄色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			6.9					○	○		104
810	G 6	II b	17784	純土器	坏	底部	明褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ			4.8				○	○	○		104
811	I 5	III a上	12196	純土器	坏	底部	黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			6.6				○	○	○		104
812	G 3	II b	23822	純土器	坏	底部	明褐色	黄褐色	ナデ	ナデ			5.6					○	○		104
813	E 6	II b	37216	純土器	鉢	口縁部	明褐色	赤茶褐色	ハラミガキ	ナデ							○	○	○		104
814	F 3	III a	41266	外土器	塊	口縁部	淡黄色	黄褐色	ナデ	ナデ	13.8						○	○	○		105
815	F 8	II	42439	外土器	塊	底部	淡黄色	黄褐色	ナデ	ナデ			6.2				○	○	○		105
816	E 5	III a	38307	外土器	塊	胴部	淡黄色	明褐色	ナデ	ナデ							○	○	○		105
817	F 5	II b	30284	外土器	塊	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	13.2	6.2	7.2	0.9			○	○	○		105
818	E 5	II b	32159	外土器	塊	底部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			8.2	1.3				○	○		105
819	G 6	III a	30557	外土器	塊	底部	黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ			9.6	1.6			○	○	○		105
820	F 6	II a	30506	外土器	塊	胴部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ							○	○	○		105
821	H 5	III a	25028	外土器	高台付皿	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	12.0	4.7	8.4	2.4			○	○	○		105
822	F 5	II b	35834	外土器	高台付皿	底部欠損	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	17.0						○	○	○		105
823	E 5	II b	33920	外土器	鉢	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	26.8	13.9	15.4				○	○	○		105
1395	E 6	II b	37546	外土器	鉢	口縁部	明赤褐色	淡褐色	ハラミガキ	ハラミガキ							○	○	○		104
1396	G 3	II a	21724	外土器	鉢	口縁部	明赤褐色	暗褐色	ハラミガキ	ナデ							○	○	○		105

須恵器

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	底部外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考				挿図		
824	H 5	III a	19355	須恵器	坏	口縁部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ	13.0									107
825				須恵器	坏	口縁部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ										107
826	H 4	III a	2854	須恵器	坏	底部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ			6.0							107
827				須恵器	長頸壺	底部	灰青色	灰青色		ナデ	ナデ										107
828	F 5	II b	35282	須恵器	坏	口縁部	黒灰青色	黒灰青色		ナデ	ナデ			6.7							107
829	F 4	II a	27112	須恵器	壺	口縁部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ										107
830	F 4	III a	24991	須恵器	壺	口縁部	白褐色	白褐色		ナデ	ナデ										107
831	H 5	II b	7939	須恵器	壺	頸部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ										107
832	F 5	II a	32814	須恵器	壺	胴部	黒灰青色	黒灰青色		ナデ	ナデ										107
833	E 6	II b	37304	須恵器	壺	胴部~底部	灰青褐色	灰青褐色		ナデ	ナデ			6.5	0.9						107
834	E 8	III a	415	須恵器	壺	胴部	黒灰青色	黒灰青色		ナデ	ナデ										107
835	G 5	II b	30351	須恵器	壺	底部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ			10.0	0.9						107
836	D 8	II	42549	須恵器	壺	胴部	黒灰青色	黒灰青色		ナデ	ナデ									14号土坑	107
837	E 6	II a	39311	須恵器	壺	底部	淡灰青色	灰青色		ナデ	ナデ			15.0	1.0						107
838	H 5	II b	13402	須恵器	壺	口縁部	灰青色	灰青色		ナデ	ナデ			14.2							107
839	K 4	III a	44909	須恵器	壺	底部	赤褐色	暗褐色		ナデ	ナデ			7.0							107
840	F 5	表		須恵器	壺	頸部	白褐色	白褐色		ナデ	平行叩き										108
841	F 5	II b	37365	須恵器	壺	頸部	赤褐色	灰青色		ナデ	平行叩き										108
842	J 5	II b下	9879	須恵器	壺	頸部	淡褐色	淡褐色		ナデ	平行叩き										108
843	H 6	II a	8207	須恵器	壺	肩部	淡褐色	淡灰青色		ナデ	平行叩き										108
844	H 5	II b	15275	須恵器	壺	肩部~胴部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	格子叩き										108
845	E 4	II b	28278	須恵器	壺	肩部~胴部	淡赤褐色	淡灰青色		ナデ	平行叩き										108
846	F 3	III a	27077	須恵器	壺	胴部	白褐色	白褐色		ナデ	平行叩き										108
847	J 5	II a	3524	須恵器	壺	底部	淡褐色	淡茶褐色		ナデ	平行叩き										108
848	F 5	III a	32009	須恵器	壺	底部	淡灰青色	暗褐色	暗赤褐色	ナデ	平行叩き			11.0							108
849	H 5	II b	13092	須恵器	壺	底部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	平行叩き			11.0							108
850	E 5	II b	29811	須恵器	壺	底部	灰青色	灰青褐色	淡灰青色	ナデ	平行叩き			11.0						底部に同心円文	108
851	K 3	II b	39965	須恵器	壺	底部	淡灰褐色	淡灰青色		ナデ	平行叩き			16.0							108
852	E 5	II b	38037	須恵器	壺	底部	灰青色	灰青色		ナデ	平行叩き			10.7							108
853				須恵器	壺	底部	灰青色	暗褐色	暗赤褐色	ナデ	平行叩き			10.4							108
854	E 4	II a	26935	須恵器	壺	底部	赤褐色	赤緑褐色	赤褐色	ナデ	平行叩き			14.0							108
855	F 4	III a	24813	須恵器	甕	口縁部	白褐色	淡灰青色		同心円文	平行叩き			19.0							109
856	J 5	表		須恵器	甕	口縁部	淡褐色	茶褐色		ナデ	ナデ			18.0							109

第24表 古代遺物観察表(5)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	底部外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
857	E 5	II b	36081	須恵器	甕	口縁部	白緑褐色	茶褐色		ナデ	ナデ					109
858	F 3	III a	25074	須恵器	甕	頸部	淡褐色	白緑褐色		同心円文	ナデ					109
859				須恵器	甕	口縁部	暗茶褐色	灰青色		ナデ	ナデ	15.6				109
860	E 5	II b	36013	須恵器	甕	口縁部	茶褐色	茶褐色		ナデ	ナデ					109
861	E 5			須恵器	甕	口縁部	淡灰青色	灰青色		ナデ	ナデ					109
862	F 6	II b	35499	須恵器	甕	胴部	茶褐色	白緑褐色		平行文	平行叩き					109
863	E 6	表		須恵器	甕	口縁部	白褐色	白褐色		ナデ	平行叩き	13.0				109
864	E 5	II b	32227	須恵器	甕	口縁部	灰赤褐色	灰青色		同心円文	平行叩き	17.6				109
865	F 5	II a	29060	須恵器	甕	頸部	灰青色	白青褐色		同心円文	平行叩き					109
866	F 5	II b	35163	須恵器	甕	頸部	赤褐色	赤褐色		ナデ	平行叩き					109
867		表		須恵器	甕	頸部	灰青色	白緑褐色		同心円文	平行叩き					109
868	F 5	II b	35576	須恵器	甕	頸部	白褐色	淡灰青色		同心円文	平行叩き					109
869	E 6	表		須恵器	甕	口縁部	暗灰青色	茶褐色		ナデ	波状文					110
870	E 5	II b	29719	須恵器	甕	口縁部	暗灰青色	黒褐色		ナデ	波状文					110
871	E 5	表		須恵器	甕	口縁部	暗赤褐色	暗灰青色		ナデ	波状文					110
872	H 5	II a	18726	須恵器	甕	口縁部	暗緑褐色	暗褐色		ナデ	ナデ	24.4				110
873	H 5	III a上	15491	須恵器	甕	口縁部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ					110
874	I 4	表		須恵器	甕	口縁部	白褐色	白褐色		ナデ	ナデ					110
875		表		須恵器	甕	口縁部	淡褐色	淡褐色		ナデ	ナデ					110
876	F 5	II a	37877	須恵器	甕	口縁部	淡灰青色	淡灰青色		ナデ	ナデ	32.8				110
877				須恵器	甕	口縁部	暗灰青色	赤褐色		ナデ	波状文	34.0				110
878	I 5	III 上	14255	須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡褐色	同心円文	平行叩き						110
879	I 6	表		須恵器	甕	胴部	青褐色	淡赤褐色		平行文	平行叩き					110
880	I 5	III a	18552	須恵器	甕	胴部	乳白色	灰青色		平行文	格子叩き					110
881	H 5	II	3737	須恵器	甕	胴部	赤褐色	赤褐色		平行文	格子叩き					110
882	F 6	II b	37616	須恵器	甕	胴部	淡灰青色	灰青色		同心円文	平行叩き				建物跡14号P 3	111
883	G 5	II b	17374	須恵器	甕	胴部	淡灰青色	淡茶褐色		平行文	平行叩き					111
884	F 5	III a	32034	須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡灰青色		同心円文	平行叩き					111
885	F 4	III a	40765	須恵器	甕	胴部	灰青色	暗灰青色		同心円文	平行叩き					111
886	J 7	表		須恵器	甕	胴部	暗灰青色	淡灰青色		同心円文	平行叩き					111
887	H 5	II b	7562	須恵器	甕	胴部	灰褐色	灰褐色		同心円文	平行叩き					111
888	E 5	II b	36452	須恵器	甕	胴部	灰青色	淡灰青色		同心円文	平行叩き					111
889	E 6	II a	34551	須恵器	甕	胴部	灰青褐色	明赤褐色		同心円文	平行叩き					111
890	F 6	II b	33138	須恵器	甕	胴部	淡赤褐色	淡茶褐色		同心円文	平行叩き					111
891	D 8	II	42481	須恵器	甕	胴部	灰青赤褐色	灰青緑褐色		平行文	平行叩き					112
892	G 5	II b	30365	須恵器	甕	胴部	灰青褐色	灰緑褐色		平行文	平行叩き					112
893	H 5	II b	13642	須恵器	甕	胴部	暗灰青褐色	灰赤紫色		平行文	平行叩き					112
894	E 4	II b	34267	須恵器	甕	胴部	白褐色	乳白色		同心円文	平行叩き					112
895	F 5	II b	33023	須恵器	甕	胴部	暗赤褐色	黒赤褐色		同心円文	格子叩き					113
896	E 6	表		須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡褐色		同心円文	平行叩き					113
897	F 4	II a	24738	須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡褐色		同心円文	平行叩き					113
898	H 3	III a	2384	須恵器	甕	胴部	暗青褐色	茶褐色		同心円文	平行叩き					113
899	E 5	II b	36710	須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡褐色		菊花文	格子叩き					113
900	J 4	II	2619	須恵器	甕	胴部	淡褐色	淡褐色		同心円文	格子叩き					113
901	E 4	II a	27000	須恵器	甕	胴部	淡灰青色	淡灰青色		同心円文	平行叩き					113

越州青磁

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	器面	胎土	底径(cm)	高台高(cm)	器高(cm)	口径(cm)	備考	挿図
902	G 2	II a	20906	越州窯青磁	碗	完形	暗灰緑色	青灰色	5.4	0.3	5.6	13.6	I- 1 a	115
903	F 4	II b	26275	越州窯青磁	碗	口縁部	暗灰緑色	青灰色				14.0		115
904	H 5	III a	19290	越州窯青磁	碗	口縁部	暗灰緑色	青灰色						115
905	H 6	表		越州窯青磁	碗	口縁部	灰褐色	青灰色				16.0	I- 1 a	115
906	F 5	II a	32942	越州窯青磁	碗	口縁部	暗灰緑色	青灰色						115
907	G 5	II a	16027	越州窯青磁	碗	口縁部	灰褐色	青灰色				16.0		115
908	H 6	表		越州窯青磁	碗	口縁部	灰褐色	青灰色				17.0		115
909		表		越州窯青磁	碗	胴部	暗灰緑褐色	青灰色					重ね焼	115
910	H 4	表		越州窯青磁	碗	底部	灰褐色	青灰色	10.0					115
911	G 5	II a	16082	越州窯青磁	皿	底部	灰緑色	青灰色	7.0	0.3			I- 5	115
912	F 4	II b	29387	越州窯青磁	碗	底部	灰緑褐色	青灰色	11.0				外底赤褐色	115
913	H 6	II b	15630	越州窯青磁	碗	底部	淡褐色	青灰色	9.0				外底赤褐色	115
914	J 5	II a	3437	越州窯青磁	碗	底部	淡褐色	青灰色	8.4				外底赤褐色	115
915	H 4	II b	10332	越州窯青磁	合子	胴部	灰緑褐色	青灰色					最大径9.9cm	115

緑釉陶器

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	器面	胎土	底径(cm)	高台高(cm)	器高(cm)	口径(cm)	備考	挿図
916	I 5	II	827	緑釉陶器	碗	底部	暗緑色	暗青灰色	8.6		1.1		京都長門産	115
917	E 5	II b	36743	緑釉陶器	碗	口縁部	灰緑色	淡褐色				15.0		115
918		表		緑釉陶器	碗	口縁部	薄緑色	淡褐色						115
919	E 6			緑釉陶器	碗	口縁部	薄緑色	淡褐色						115

第25表 古代遺物観察表(6)

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図		
920	H 4	II b	37720	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
921	F 4	III a	40836	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
922	H 5	II	3692	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
923		表		土師器	焼塩壺	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
924		表		土師器	焼塩壺	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
925		表		土師器	焼塩壺	口縁部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
926	H 5	II a	14775	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
927	H 6	II b	8342	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
928	H 5	II b	14282	土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
929				土師器	焼塩壺	口縁部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
930	H 5	II b	13195	土師器	焼塩壺	胴部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
931	F 3	II a	22548	土師器	焼塩壺	胴部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
932	H 4	表		土師器	焼塩壺	胴部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
933	I 6	III a	18590	土師器	焼塩壺	胴部	黄褐色	黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
934	H 5	II b	13181	土師器	焼塩壺	胴部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
935	G 5	II	1240	土師器	焼塩壺	胴部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
936	G 4	III a	25274	土師器	焼塩壺	胴部	黄褐色	明褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
937	H 5	II b	11898	土師器	焼塩壺	胴部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
938	H 6	II b F	16209	土師器	焼塩壺	胴部	灰黄褐色	灰黄褐色	布痕	ナデ						○	○	○	○		115	
939	I 5	II	1140	土師器	布痕土器	底部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ			6.2	1.1			○	○	○	○	115	
940	H 3	III a	37773	土師器	布痕土器	底部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ			8.5	1.4			○	○	○	○	115	
941	K 3	III a	2658	土師器	布痕土器	胴部	灰黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ							○	○	○	○	115	
942	H 4	II b	562	土師器	布痕土器	胴部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ						8.4	1.9			○	○	115
943	G 6	II	1561	土師器	布痕土器	胴部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ										○	○	115
944	H 4	III a	2322	土師器	布痕土器	胴部	淡黄褐色	淡黄褐色	布痕	ナデ										○	○	115

土錘

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	外面色調	外面調整	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図		
945	E 6	II b	33491	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	2.9	2.1	0.3	11.92				○	○		A 1 類	117
946	E 5	II b	37063	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	3.9	2.1	0.2	11.66				○	○		A 2 類	117
947	I 5	II b	9467	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	3.8	1.8	0.4	12.94				○	○		A 3 類	117
948	E 5	II b	38558	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	4.3	1.8	0.4	11.04				○	○		A 4 類	117
949	E 7	II	42378	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	4.5	1.6	0.4	8.53				○	○		B 1 類	117
950	E 5	II a	34707	土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	3.1	1.8	0.5	7.18				○	○		B 2 類	117
951	F 6	II b	33197	土師質	土錘	完形	黄褐色	ナデ	3.3	2.0	0.7	10.87				○	○		C 1 類	117
952	I T	表		土師質	土錘	完形	淡黄褐色	ナデ	4.5	2.2	0.7	16.58				○	○		C 2 類	117
953	F 4	II b	26480	土師質	土錘	完形	黄褐色	ナデ	4.5	2.2	0.9	27.28				○	○		C 3 類	117

刃痕土器

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図		
954	H 5	II b	33376	内黒土器	刃痕土器	胴部	暗灰色	淡黄色	ミガキ	ナデ						○	○			モミ痕	117	
955	H 5	II b	13203	土師器	刃痕土器	口縁部	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ							○	○			モミ痕	117
956	E 5	II b	33623	土師器	刃痕土器	口縁部	明褐色	黄褐色	ナデ	ナデ							○	○			モミ痕	117
957	E 5	II b	36251	内黒土器	刃痕土器	口縁部	黒褐色	明黄褐色	ミガキ	ナデ							○	○			モミ痕	117

耳皿

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図	
958	G 5	II b	29316	土師器	耳皿	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	10.6	2.9	5.5	0.8			○	○			117
959	F 5	II b	30183	土師器	耳皿	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	9.1	4.4	5.8	0.8			○	○			117
960	F 3	II a	22763	土師器	耳皿	胴部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ							○	○			117
961	F 5	II a	27826	土師器	耳皿	底部	黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ			4.8	0.6			○	○			117

紡錘車

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図		
962	F 5	III a	30319	土師質	紡錘車	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	7.3	0.6	46.77				○	○			117
963	H 5	III a	18353	土師質	紡錘車	完形	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	7.1	0.7					○	○			117
964	F 4	II b	24185	土師質	紡錘車	完形	灰黄褐色	淡黄色	ナデ	ナデ	3.6	0.9					○	○			117
965	G 5	II b	18198	土師質	紡錘車	完形	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ							○	○			117
966	F 5	II b	33811	土師質	紡錘車	完形	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ							○	○			117
967	H 5	II b F	16626	滑石	紡錘車	完形	灰色	灰色	研磨	研磨	6.8	1.0	97.92								117

高坏・用途不明

遺物番号	区	層	記録	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	石英	長石	角閃石	火山ガラス	備考	挿図	
968	F 6	II b	38195	土師器	高坏	胴部	淡黄色	黄褐色	ミガキ	ナデ							○	○			117
969	G 4	II a	23076	土師質	用途不明	胴部	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ							○	○			117

石製品

遺物番号	区	層	記録	器種	内面色調	外面色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考	挿図
970	G 3	II b	22391	砥石	明褐色	淡赤褐色	7.7	4.6	95.40		118
971	H 5	II b	37762	刃痕のある石器	灰黄褐色	灰黄褐色	10.8	7.6	467.00		118

金属製品

遺物番号	区	層	記録	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考	挿図
972	H 6	II b	4869	釘	2.1	0.4	0.29		118
973	H 5	II	5434	釘	2.7	0.9	1.26		118
974	G 5	II b	18906	鉄製品	3.4	2.9	3.48	刀子	118
975	H 5	II a	18431	鉄製品	4.4	4.0	10.88		118
976	G 3	II a	21802	鉄製品	3.2	2.0	2.58		118
977	F 6	III a	33196	鉄製品	3.2	1.5	4.36		118
978	I 6	II b	12224	鉄製品	3.5	4.0	17.62		118
979	G 5	II b	20614	銅製品	4.5	1.6	3.48		118
980	E 5	II b	33753	鉄製品	5.1	5.5	24.25		118
981	E 4	II b	34218	鉄製品	3.0	3.4	14.12		118

鞆羽口等

遺物番号	区	層	記録	器種	内面色調	外面色調	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	備考	挿図
982	F	表		鞆羽口	淡黄色	淡黄色	(13.8)	8.2	640.00		118
983		表		鞆羽口	黄褐色	黄褐色	(10.8)	6.7	331.42		118
984	I 6	II a	4541	鞆羽口	黄褐色	黄褐色	(10.2)	6.8	225.48		118
985	I 6	II b	12248	鞆羽口	明褐色	茶褐色	(9.8)	(6.5)	211.61		118
986	H 5	II b	11649	種子			1.8		1.13		図版50
987	E 5	II b	37083	種子			1.8		1.27		図版50
988	F 5	II b	35712	種子			1.2		0.41	コナラ属	図版50
989	E 5	II b	37127	種子			0.9		0.26	コナラ属	図版50

9. 墨書土器・刻書土器

調査区域の南側、掘立柱建物跡や溝・土坑などが検出されたエリアで総数200点の墨書土器及び刻書土器が出土した。遺物の分布は南側全体に及んでおり、特定の遺構に伴うものであるか否かについては確定できなかった。墨書土器が191点、ヘラ書・刻書土器が9点である。

記載されている文字は、判読可能なものもあるが、ほぼ半数の110点は“とめ・はね・はらい”などの文字のごく一部であったことから、不明であった。判読可能な文字は、若干の疑問はあるものも含めて90点であった。その内訳は以下のとおりである。

文字	数	文字	数	文字	数	文字	数		数
万	44点	得兵	1点	條	1点	九字(𠄎)	2点	解読不能	3
万万	24	弥	1	□来□	1	米	1		
八万	1	安	1	将	1			不明	107
厨	4	松	1						
春	2	仲	1					合計	200
九	2	真	1						
		奉	1						
		以上墨書	84	以上ヘラ書	3	以上刻書	3		

「万」および「万万」と読めるものが68点と解読した文字90点のうちの約7.5割に当たっている。吉祥文字として捉えられようが、本遺跡の中核となる文字である。

「万」という、日常的に使用する数(字)の中で最も大きい数(字)として記載したもののように考えられる。「万万」はさらにその数(字)を重ねることによって、吉祥を呼び込もうとしたものとも思われる。「万」のつくものとして「八万」と読めるものが見られることから、『末広がり』という考え方がこの頃すでにあった可能性も考えられ、興味深いことと思われる。また、「万万」は合わせ文字と考えられ、それぞれの「万」の文字が組み合わせられていることから、当初は判読に非常な困難を伴った。さらに、破片として文字の一部しか出土しないものがほとんどであることから、合わせ文字の「万万」であるのか、単一の「万」という文字なのかの判断には非常に難しいものがある。したがって、合わせ文字でないと判断したものは「万」として処理しているために、「万」の文字が多くなっている。「万」はこれまでに金峰町の筆付遺跡や輝北町の鳥居ヶ段遺跡などからも出土しているが、「万万」は初めての出土である。

それ以外の文字としては、「厨」と読めるものが4点見られる。同じ市来町の川上にある安茶ヶ原遺跡でも「日置厨」と書かれた墨書土器が出土しており、同町では2遺跡で見つかったということになる。県内ではこれまでに川内市の薩摩国府跡から「国厨」、指宿市の橋牟礼川遺跡と鹿児島市の一之宮B遺跡から「厨」銘の墨書土器が出土しており、合わせて5遺跡での出土となっている。

そのほか、「春」と「九」がそれぞれ2点ずつ出土している。これまでに、「春」は薩摩国分寺での出土例が、また、「九」は栗野町の山崎B遺跡での出土が知られている。

また、1点出土の文字のうちこれまでに出土例のあるものは、「真」が指宿市の橋牟礼川遺跡で、「仲家」が始良町の小瀬戸遺跡で、「安」が金峰町の小中原遺跡で、それぞれ出土している。それ以外の「條」・「将」・「弥」・「松」・「前」・「奉」や「得兵」と読めるものについては出土例は知られておらず、初めての出土ということになる。

九字と呼ばれる「井」のマーク（印）には縦に4本、横に5本線が引かれている正式なもの3本、2本に略されたものがある。すなわち、平川南国立歴史民俗博物館副館長によると、この九本の線による九の字は井戸の「井」のマークの元の形であるとしておられることからすると、「井」の文字（あるいはマーク）は金峰町の山野原遺跡からの出土が知られている。これについては、あるいはこれまでに出土していても、単なる引っ掻き傷か発掘時に付けられた傷などと考えられて、九の字とは認識されていないという可能性も考えられ、類例が増加する可能性も残されている。「得兵」かと考えられる文字は、意味深なものであるが、崩し方がきわめて個性的なため、明確には判読しえないものである。前述の平川副館長に再度解読をお願いして判明したものである。

解読不能のものが3点あるが、これについても崩し方が個性的であるために、似たような文字とまではたどり着いても、最終的な解読までには至らなかったものである。

不明については、前述したように“とめ・はね・はらい”のごく一部のみの残存であることから何という文字のどの部分であるという推定にすらも至っていないものである。

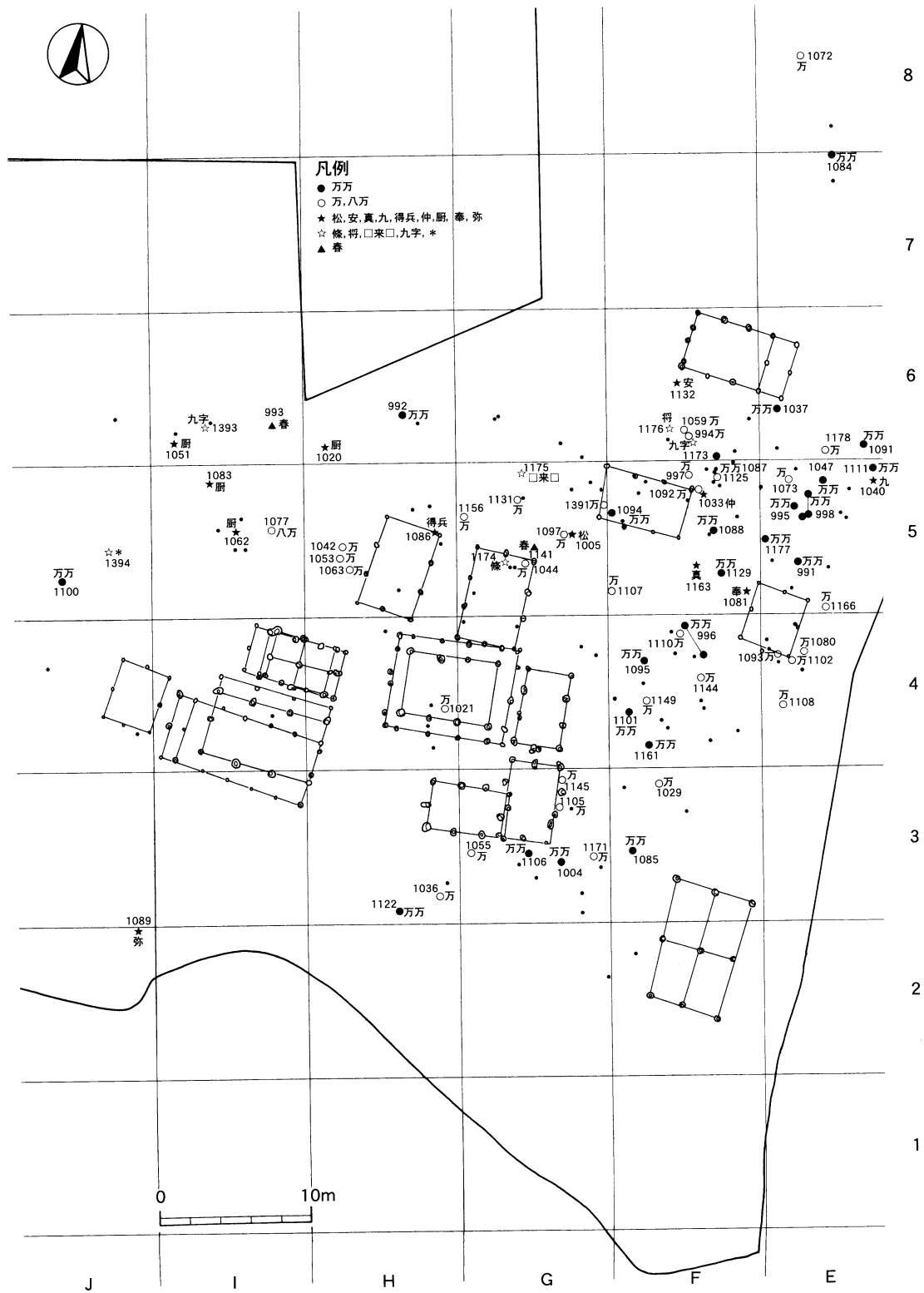
次に、書かれる部位についてである。記載位置と記載方向でまとめた。

記載位置	数	記載方向 - 1	数	記載方向 - 2	数
体部外面	183点	正位置	151点	横位置	1点
体部内面	1	正位置?	22	横位置?	2
底部外面	8	逆位置	2	外底	8
底部内面	8	逆位置?	5	内底	9
計	200点	計			200点

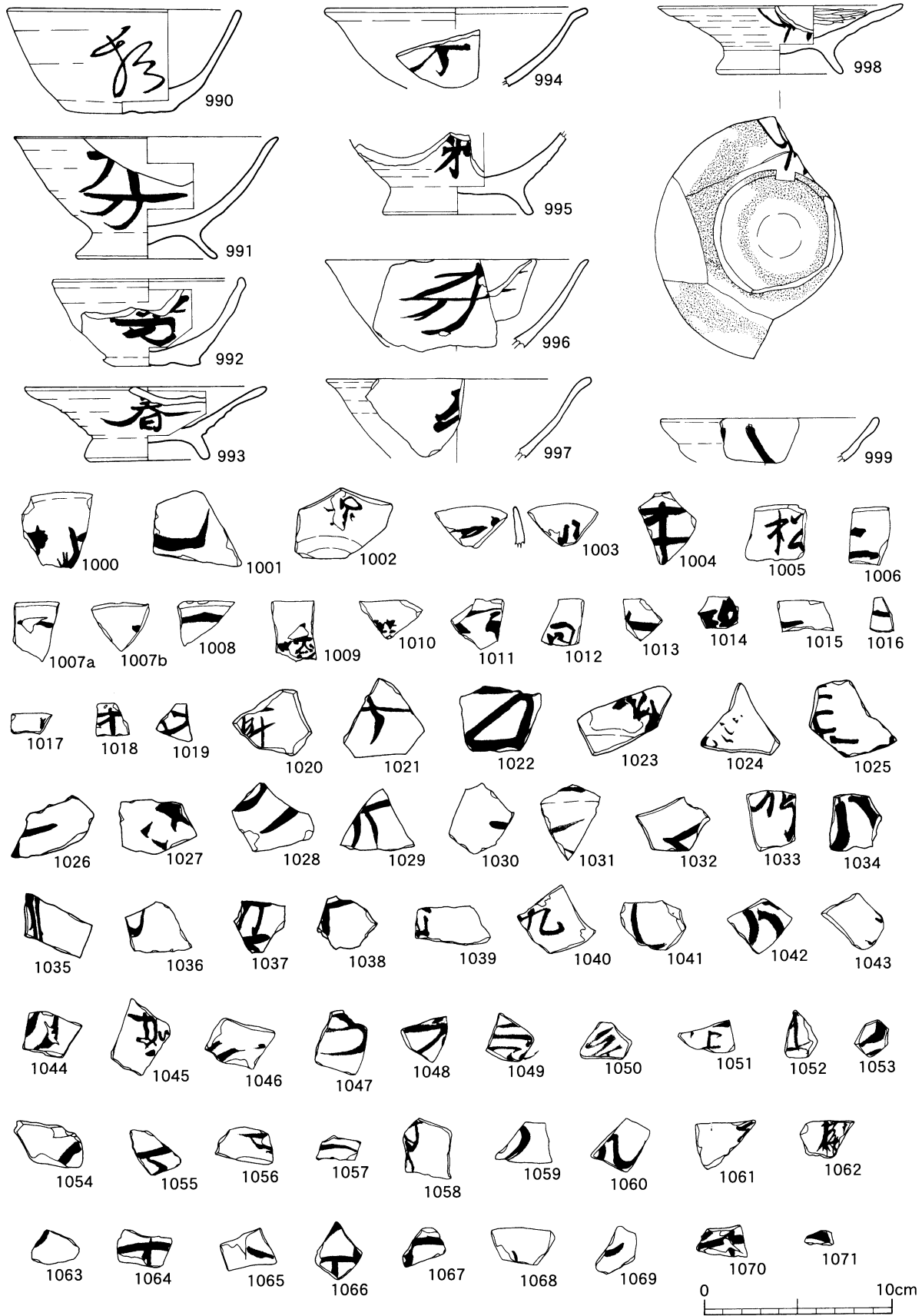
記載位置では圧倒的に体部外面が多く、体部内面は1点のみである。また、底部の外面に記載するものが8点、底部の内面への記載は9点に見られる。内底へ記載するものは、墨書とヘラ書きのものである。記載方向については、やはり圧倒的に正位置が多く、疑問のあるものも含めると9割近くにもなる。逆位置や横位置もそれぞれ少しずつは見られるものの、1割にも満たない。本遺跡から出土した墨書土器の記載については、体部外面に正位置で記載するものがほとんどであるとまとめることができる。これは、ヘラ書・刻書以外では、焼成後に碗・坏などを正位置に、つまり置かれた状態のまま持ちあげて、そのまま文字を記載したといえるのである。最後に、文字の判読にあたっては、ラ・サール学園の永山修一氏、宮崎産業経営大学の柴田博子氏、それに、国立歴史民俗博物館の平川南氏に指導いただいた。また、永山氏および柴田氏、当埋文センターの池畑耕一作成の墨書・刻書土器出土の一覧表を参考にさせていただいたことを付記しておく。



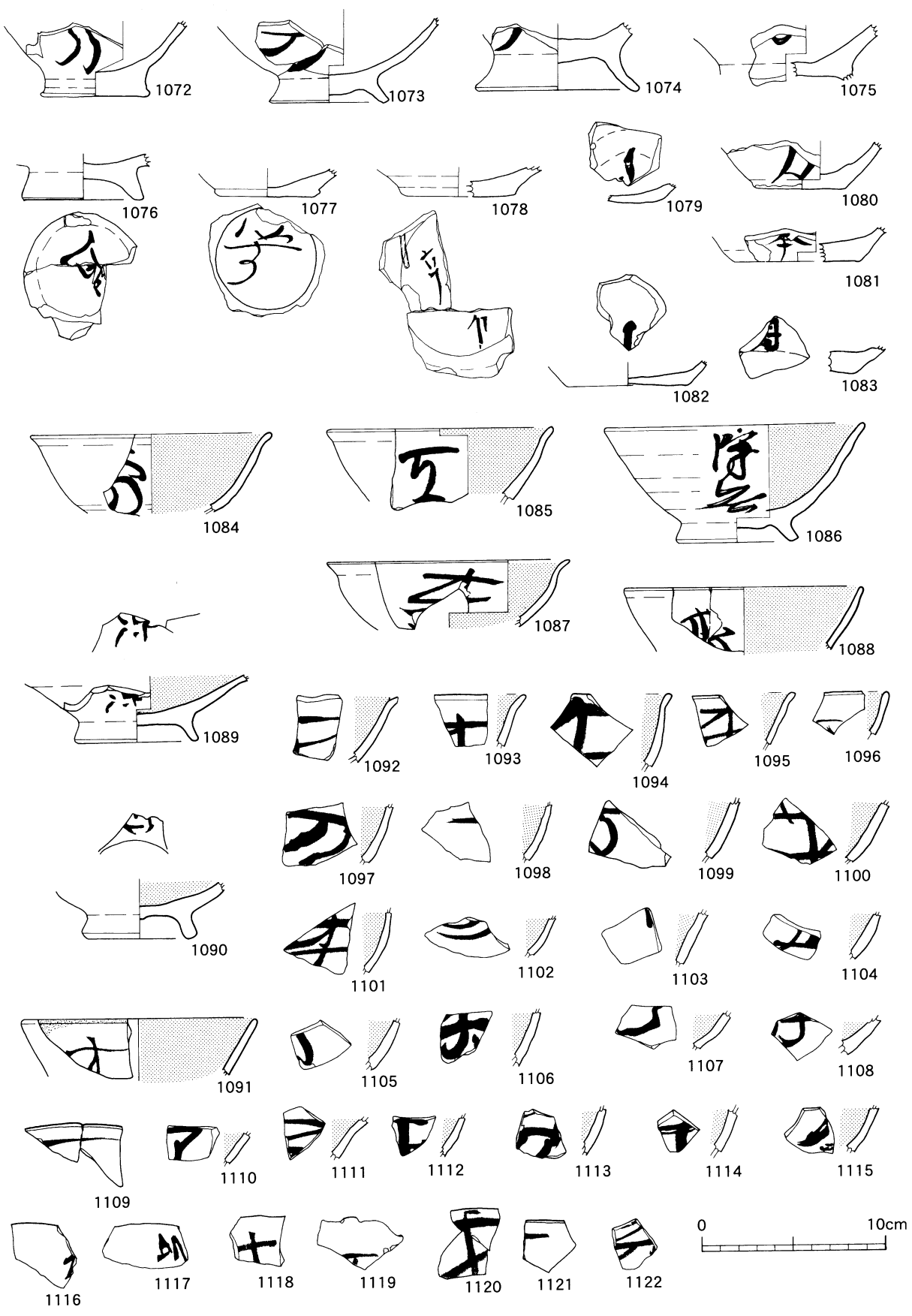
第119図 II層墨書土器出土状況(1)



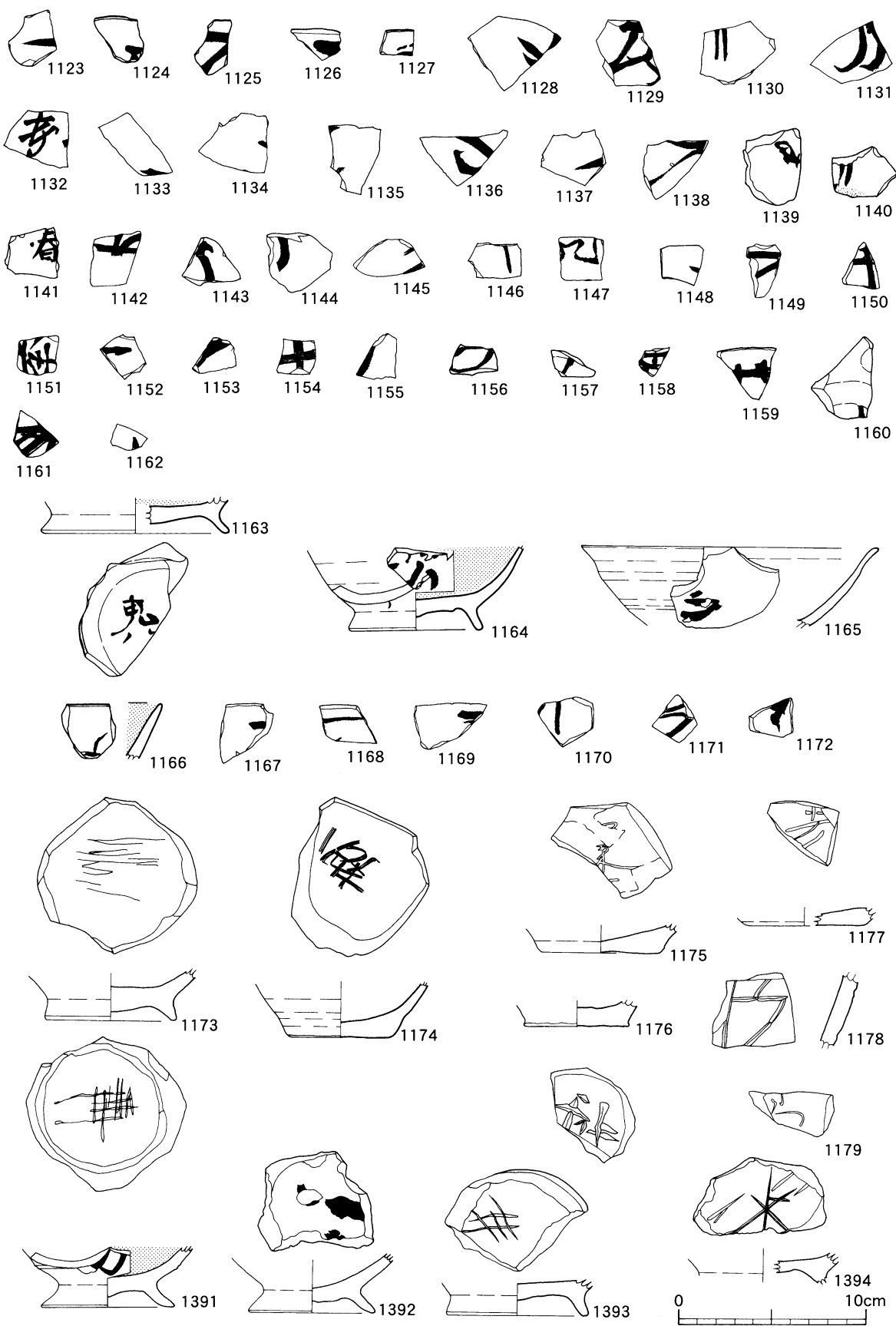
第120図 II層墨書土器出土状況(2)



第121图 墨書土器(1)



第122図 墨書土器(2)



第123図 墨書土器(3)刻書土器

第26表 墨書土器觀察表(1)

遺物番号	区	層	注記番号	墨書・刻書	部位	器種	正・逆位置	文字	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
990	F 6	Ⅱ b	32800	墨書	胴部外面	土師碗	正	不明	12.5	5.5	5.8			121
991	E 5	Ⅱ b	33715	墨書	胴部外面	土師碗	正	万万	14.0	6.4	7.6	1.4		121
992	H 6	Ⅱ b	40041	墨書	胴部外面	土師坏	正	万万	10.3	4.6	5.4			121
993	I 6	Ⅲ a	5284	墨書	胴部外面	土師高台付皿	正	春	12.8	3.9	6.8	1.3		121
994	F 6	Ⅱ b	39621	墨書	胴部外面	土師	正	万	14.0					121
995	E 5	Ⅱ b	36655	墨書	胴部外面	土師碗	正	万万			8.0	1.5		121
996	F 4	Ⅱ b	26589	墨書	胴部外面	土師碗	正	万万	14.0					121
997	F 4	Ⅱ b		墨書	胴部外面	土師	正	万カ	14.0				8号土坑	121
998	E 5	Ⅱ b	36782	墨書	胴部外面	土師高台付皿	横	万万	13.2	3.6	6.8	1.3		121
999		表		墨書	胴部外面	土師	横?	不明	11.5					121
1000	I 4	Ⅲ a	2443	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1001	F 5	Ⅱ b	30760	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1002	G 5	Ⅱ b	17309	墨書	胴部外面	土師	逆?	不明						121
1003	F 4	Ⅱ b	26425	墨書	胴部内外面	土師皿	正	不明						121
1004	G 3	Ⅲ a	23647	墨書	胴部外面	土師	正	万万						121
1005	G 5	Ⅱ b	17480	墨書	胴部外面	土師	正	松						121
1006	E 5	Ⅱ b	36614	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1007a	J 4	Ⅲ a	3339	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1007b	E 7	Ⅱ	42351	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1008	G 5	Ⅲ a	19115	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1009	E 4	Ⅱ b	25962	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1010	G 5	Ⅱ b	17309	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1011	K 3	Ⅲ a	2660	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1012	G 4	Ⅱ b	1663	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1013		表		墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1014		表		墨書	胴部外面	土師	逆?	不明						121
1015	G 3	Ⅱ a	21005	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1016	F 3	Ⅲ a		墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1017	G 3	Ⅱ b	21355	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1018				墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1019	I 5	Ⅱ b	9272	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1020	H 6	Ⅱ a	8526	墨書	胴部外面	土師	正	厨						121
1021	H 4	Ⅲ a	2704	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1022	E 4	Ⅱ b	28645	墨書	胴部外面	土師	正	万						121
1023	H 5	Ⅱ a	14833	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1024	G 5	Ⅱ b	15075	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1025	J 6	Ⅲ a	20664	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1026	H 3	Ⅱ a	2898	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1027	J 4	Ⅲ a	3356	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1028	G 2	Ⅲ a	24649	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1029	F 3	Ⅲ a	41317	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1030	G 6	Ⅱ a	8633	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1031	G 2	Ⅱ a	22300	墨書	胴部外面	土師	逆?	不明						121
1032	F 4	Ⅲ a	24974	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1033	F 5	Ⅲ a	31947	墨書	胴部外面	土師	正	仲カ						121
1034		表		墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1035	E 5	Ⅱ a	34506	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1036	H 3	Ⅲ a	3126	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1037	E 6	Ⅱ a	39427	墨書	胴部外面	土師	正	万万						121
1038	G 3	Ⅲ a	23603	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1039	E 5	Ⅲ a		墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1040	E 5	Ⅱ b	36143	墨書	胴部外面	土師	正	九						121
1041	E 5	Ⅱ a	34947	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1042	H 5	Ⅱ b	13602	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1043	E 5	Ⅱ b	29889	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1044	G 5	Ⅱ b	19638	墨書	胴部外面	土師	正	万						121
1045	F 6	Ⅱ b	33097	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1046	G 6			墨書	胴部外面	土師	正	不明					6号土坑	121
1047	E 5	Ⅱ b	29603	墨書	胴部外面	土師	正	万万カ						121
1048	E 6	Ⅱ b		墨書	胴部外面	土師	正	万						121
1049	F 5	Ⅱ b	35834	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1050	F 3	Ⅱ a	22773	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1051	I 6	Ⅲ a	18619	墨書	胴部外面	土師	正	厨カ						121
1052	F 5	表		墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1053	H 5	Ⅲ a上	15542	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121

第27表 墨書土器觀察表(2)

遺物番号	区	層	注記番号	墨書	部位	器種	正・逆位置	文字	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1054	H 5	表		墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1055	G 3	Ⅱa	21306	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1056	E 5	Ⅱb	36268	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1057		表		墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1058				墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1059	F 6	Ⅱb	35871	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1060	E 6	Ⅱa		墨書	胴部外面	土師	正	九カ						121
1061	I 5	Ⅱb下	12541	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1062	I 5	Ⅲa	20215	墨書	胴部外面	土師	正	厨カ						121
1063	H 5	Ⅲa上	15532	墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1064		表		墨書	胴部外面	土師	正	万カ						121
1065	F 5	表		墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1066	F 3	Ⅱa	22544	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1067	F 4	Ⅱb	29348	墨書	胴部外面	土師	正?	不明						121
1068	F 5	Ⅱb	30933	墨書	底部内面	土師	内底	不明						121
1069	F 2	Ⅱa	22269	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1070	E 4	Ⅱb	28620	墨書	胴部外面	土師	正	不明						121
1071	H 5	Ⅲa	13218	墨書	胴部外面	土師碗	正	不明						121
1072	E 8			墨書	胴部外面	灰高台坏	正	万			5.8		2号土坑2	122
1073	E 5	Ⅱa	34791	墨書	胴部外面	土師碗	正	万			6.0	0.7		122
1074	G 2	Ⅲa	24659	墨書	胴部外面	土師碗	正	万カ			8.6	1.8		122
1075	G 6	表		墨書	胴部外面	土師碗	正	万カ						122
1076	F 5	Ⅱa	28835	墨書	底部外面	土師碗	外底	不明			6.6	1.1		122
1077	I 5	Ⅱb下	12619	墨書	底部外面	土師坏	外底	八万			5.3			122
1078	E 6	Ⅱb	36583	墨書	底部外面	土師坏	外底	不明			5.8			122
1079	F 4	Ⅱb		墨書	底部内面	土師坏	内底	不明						122
1080	E 4	Ⅱb	34227	墨書	胴部外面	土師坏	正	万			5.0			122
1081	F 5	Ⅱb	38613	墨書	胴部外面	土師碗	正	奉			6.6			122
1082				墨書	底部内面	土師坏	内底	不明			6.6			122
1083	I 5	Ⅱb下	12398	墨書	胴部外面	土師坏	正	厨						122
1084	E 7	Ⅱ	42365	墨書	胴部外面	土師	正	万万	13.2					122
1085	F 3	Ⅱa	22055	墨書	胴部外面	土師	正	万万	12.2					122
1086	H 5	Ⅲa	44841	墨書	胴部外面	内黒碗	正	得兵力	14.2	6.3	6.7	0.9		122
1087	F 6	Ⅱb	35838	墨書	胴部外面	内黒	正	万万	13.2					122
1088	F 5	Ⅱb	32045	墨書	胴部外面	内黒	正	万万	13.0					122
1089	J 2	Ⅲa	44956	墨書	胴部外面	内黒高台皿	正	弥			6.4	0.9		122
1090	I 6	Ⅲa	18617	墨書	胴部外面	内黒碗	正	不明			5.5	1.2		122
1091	E 6	Ⅱa	34563	墨書	胴部外面	内黒	正	万万	12.8					122
1092	F 5	Ⅲa	31939	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						122
1093	E 4	Ⅲa	40620	墨書	胴部外面	内黒	正	万						122
1094	F 5	Ⅱb	30689	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1095	F 4	Ⅱb	26657	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1096	I 5	Ⅱb	12528	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1097	G 5	Ⅱa	15836	墨書	胴部外面	内黒	正	万						122
1098	E 4	Ⅱb	31242	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						122
1099	F 6	表		墨書	胴部外面	内黒	正	万						122
1100	J 5	Ⅱa	6910	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1101	F 4	Ⅱb	26706	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1102	E 4	Ⅱa	31657	墨書	胴部外面	内黒	正	万						122
1103	I 6	Ⅲa	13781	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						122
1104	F 5	Ⅱb	34194	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1105	G 3	Ⅲa	23553	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						122
1106	G 3	Ⅲa	23472	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1107	F 5	Ⅱb	30338	墨書	胴部外面	内黒	正	万						122
1108	E 4	Ⅱa	26927	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						122
1109	F 5	Ⅱb	32519	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1110	F 4	Ⅱb	26596	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						122
1111	E 5	Ⅱb	31851	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1112		表		墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						122
1113	H 5	Ⅱa	6253	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1114	F 4	表		墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1115	E 8			墨書	胴部外面	内黒	正	不明					21号土坑47	122
1116	H 6			墨書	胴部外面	内黒	正?	不明					3号土坑	122
1117	F 5	Ⅲa	30586	墨書	胴部外面	内黒	横?	足カ						122
1118	E 5	Ⅱb	37458	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122

第28表 墨書土器觀察表(3)

遺物番号	区	層	注記番号	墨・刻	部位	器種	正・逆位置	文字	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1119	F 5	II a	27694	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1120	G 3	II a	21155	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						122
1121	F 5	II b	30234	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						122
1122	G 2	II b	20707	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						122
1123	G 3	II a	21829	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1124	F 4	II b	34392	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1125	F 5	II b	30780	墨書	胴部外面	内黒	正	万						123
1126	F 5	II b	29024	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1127	F 4	II b	391	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1128	F 3	III a	24578	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1129	F 5	II b	35741	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						123
1130	E 5	II b	29856	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1131	G 5	II b	20499	墨書	胴部外面	内黒	正	万						123
1132	F 6	II b	32717	墨書	胴部外面	内黒	正	安						123
1133	G 5	II a	16124	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1134	H 4	III a	3147	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1135	F 6	II b	35830	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1136	F 5	II b		墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						123
1137	F 6	II b		墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1138	E 5	II a	36047	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1139	G 4	II b	37796	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1140	G 4	II a	23106	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1141	G 5	II b	15137	墨書	胴部外面	内黒	正	春						123
1142	E 6	表		墨書	胴部外面	内黒	逆?	万カ						123
1143	F 4	II a	27389	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1144	F 4	II b	26276	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						123
1145	G 3	II b	23688	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						123
1146	F 4	II b	29365	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1147	F 4	III a	24961	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1148	G 6			墨書	胴部外面	内黒	正?	不明					6号土坑	123
1149	F 4	II b	26784	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						123
1150	G 6	II b	10759	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1151	E 5	II		墨書	胴部外面	内黒	正?	万カ						123
1152	F 4	II b	24263	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1153	G 4	II a	22990	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1154	F 4	II b	26391	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1155	E 4	II b	25881	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1156	G 5	II b	16924	墨書	胴部外面	内黒	正	万カ						123
1157		表		墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1158		表		墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1159	G 5	II b	18840	墨書	胴部外面	内黒	正	不明						123
1160	I 5	II b	9343	墨書	高台裏	内黒杯	外底	不明						123
1161	F 4	II b	31362	墨書	胴部外面	内黒	正	万万						123
1162	H 4	III a	3141	墨書	胴部外面	内黒	正?	不明						123
1163	F 5	II b	30082	墨書	高台裏	内赤碗	外底	真			9.6	0.8		123
1164	I 6	III a	4862	墨書	胴部外面	内赤碗	正	不明			7.2	1.1		123
1165	F 5	II b	30860	墨書	胴部外面	内外赤	正	不明	15.7					123
1166	E 5	II b	38371	墨書	胴部外面	内赤	逆	万						123
1167	H 4	III a	3158	墨書	胴部外面	内外赤	正	不明						123
1168	G 3	III a	42879	墨書	胴部外面	内赤	正	不明						123
1169	F 5	II b	32513	墨書	胴部外面	内外赤	正	不明						123
1170	H 6			墨書	胴部外面	内外赤	正	不明						123
1171	G 3	II a	21907	墨書	胴部外面	内赤	正	万カ						123
1172	H 5	II b	17861	墨書	胴部内面	内赤	正	不明						123
1173	F 6	II b	38179	刻書	底部外面	土師碗	外底	九字			6.7	0.7		123
1174	G 5	III a	19171	刻書	底部外面	土師杯	内底	條カ			5.4			123
1175	G 5	II b	15062	刻書	底部外面	土師杯	内底	□来□			6.4			123
1176	F 6	II b	32672	刻書	底部外面	土師杯	外底	将カ			5.6			123
1177	E 5	II b	36627	刻書	底部外面	土師杯	内底	十方カ			6.4			123
1178	E 5	II a	34749	刻書	胴部外面	土師	外底	万カ						123
1179	H 4	III a	3248	刻書	胴部外面	土師	逆?	不明						123
1391	G 5	II b	29314	墨書	胴部外面	内黒土師器	正	万			6.9	0.9		123
1392	F 5	III a	24866	墨書	底部内面	土師碗	内底	試し書き?			6.9	0.7		123
1393	I 6	III a	18601	刻書	底部内面	土師碗	内底	九字			7.2	1.1		123
1394	J 5	II a	4173	刻書	底部内面	内黒土師器	内底	米						123



第124図 II a層遺物（中世）出土状況

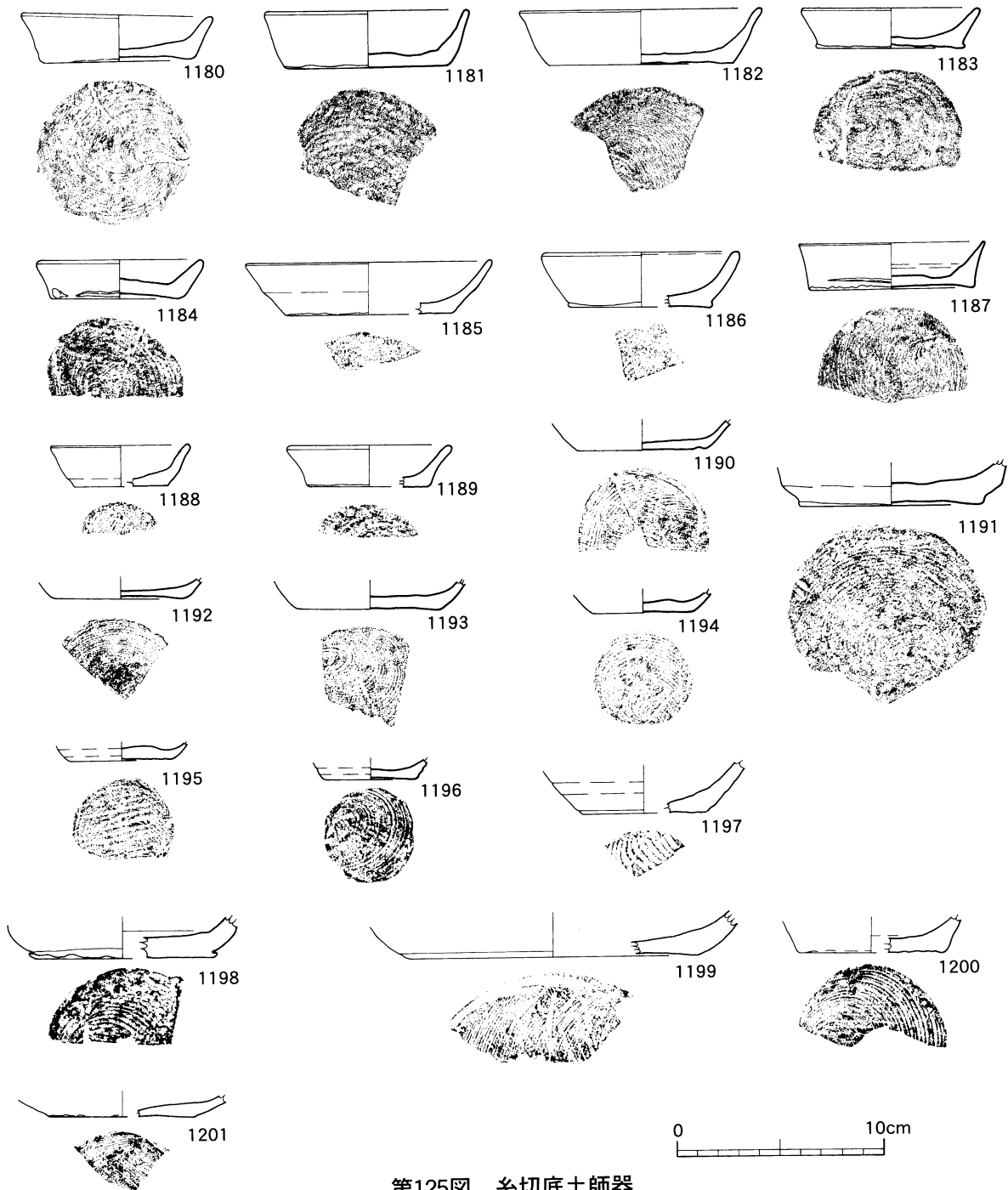
第9節 II層の調査2（中世）

1. 土師器-糸切り底（第125図 1180~1201）

第125図は土師器の坏及び鉢・皿である。底に糸切りの痕跡が残り、この時期の切り離しの技法が伺えるものである。

1180は外底が若干上げ底となるもので、口縁部にかけてはほぼ直線的に開いている。同様なタイプでも1187は口縁端部が薄く、鋭い三角形に見える。1181は安定した平底で、口縁部にかけては真っすぐに立ち上がる。1185はやや内湾気味に立ち上がる。1189は外反している。

鉢のうち1199は口径が15cmを越えると思われる。1201は皿で内赤土師器である。



第125図 糸切り底土師器

2. 播鉢ほか (第126図1202~1219)

第126図は中世に位置付けられる、播鉢、捏鉢、羽釜および染付である。

1202~1209は播鉢および捏鉢である。1203や1204のように注ぎ口の付いたものが見られる。また、播鉢のかき目には1203や1205のように深くつけられたものと、1207のように浅いもの、あるいは疎なものや密なものがある。底部の形状は安定した平底である。1209は東播系と思われる。

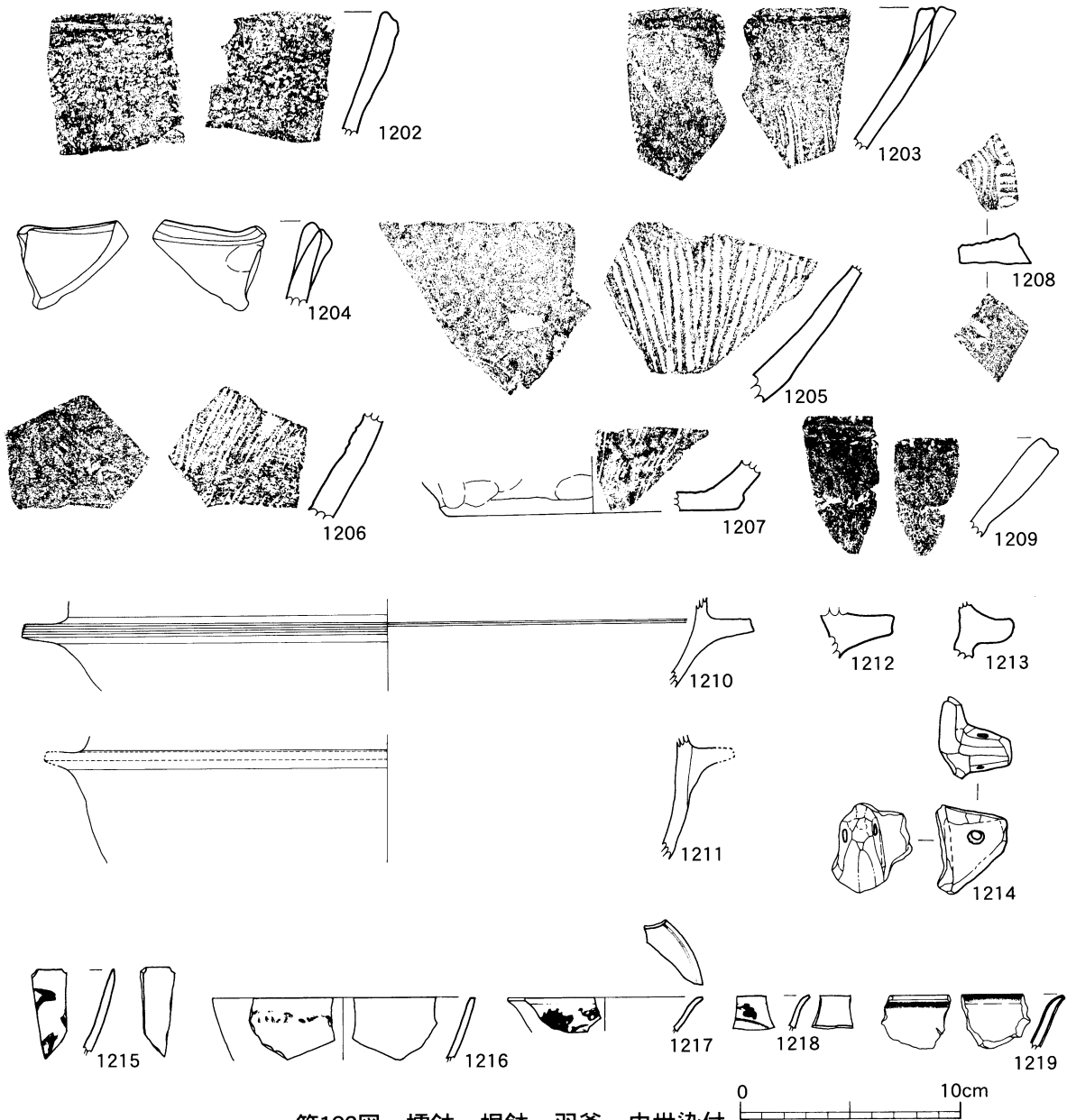
1210~1213は羽釜の鰐の部分である。鰐の端部は四角く角ばるものと丸くなるものがある。

1214は羽釜に付く把手部分である。把手上部に小さな穿孔がある。

1215~1218は明代に位置付けられる染付である。青花が描かれ、1215と1216は碗、1217と1218は皿と考えられる。

3. 青磁 (第127~129図 1220~1276)

第127図~第129図は青磁である。第127図が稜花の皿、第128図が碗および盤である。また、第



第126図 播鉢・捏鉢・羽釜・中世染付

129図は無文の碗や皿と底部である。

第127図は1220～1229は稜花皿，1230と1231は皿である。

稜花皿の内面には緩い弧状の線が見られる。口縁部付近には基本的に2本の弧状の線が描かれるが、内底近くにも描かれるものと描かれないものの両方がある。全体的に透明な釉が掛かっているが、中には1220や1224のように濁った黄色味がかかった釉のかかるものも見られる。

1230と1231はいずれも皿であるが、前者は器壁も厚く、径も大きく、深さも深い。内面には円弧が連続的に施されているようである。それに対して、後者は割合に深さが浅いものと考えられ、内面には外面の稜に対する位置に界線が巡っている。

第128図の1232は小碗で、外面に蓮弁が見られ、口径10.0cm、底径5.1cm、高さは3.1cmに復元される。

1233～1257は碗で、そのうち1233～1249は口縁部，1250と1251は胴部，1252～1257は底部である。

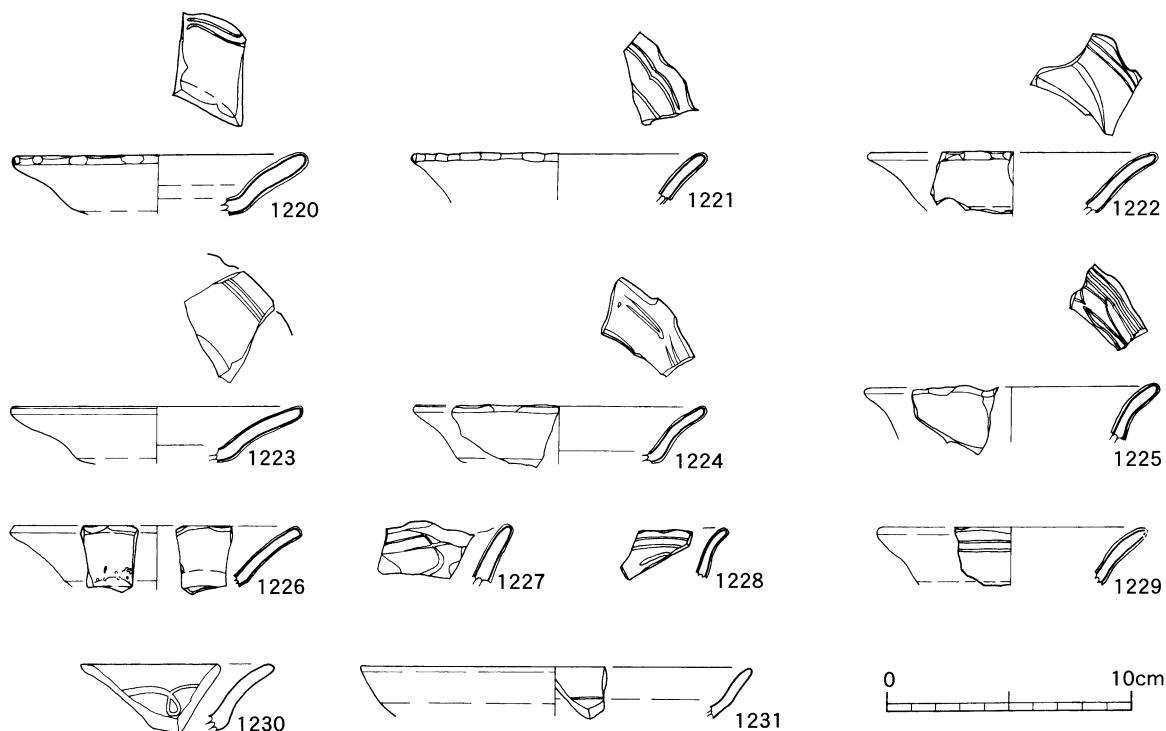
1233～1245は蓮弁の見られるものであるが、1233～1236が蓮弁を丁寧に表現しているのに対して、それ以外のものは縦の直線と横方向の波線で蓮の花を表現している。特に1244は蓮弁とは見えないような表現のものである。1246～1249は雷文と思われる文様が施されている。口縁部の形状はほとんど直立あるいはやや内湾するが、1233と1235のみは外反している。

胴部の破片のうち、1251は円形主体の施文である。1252は底部だが、全面施釉のあと、外底は蛇の目状にかきとられている。

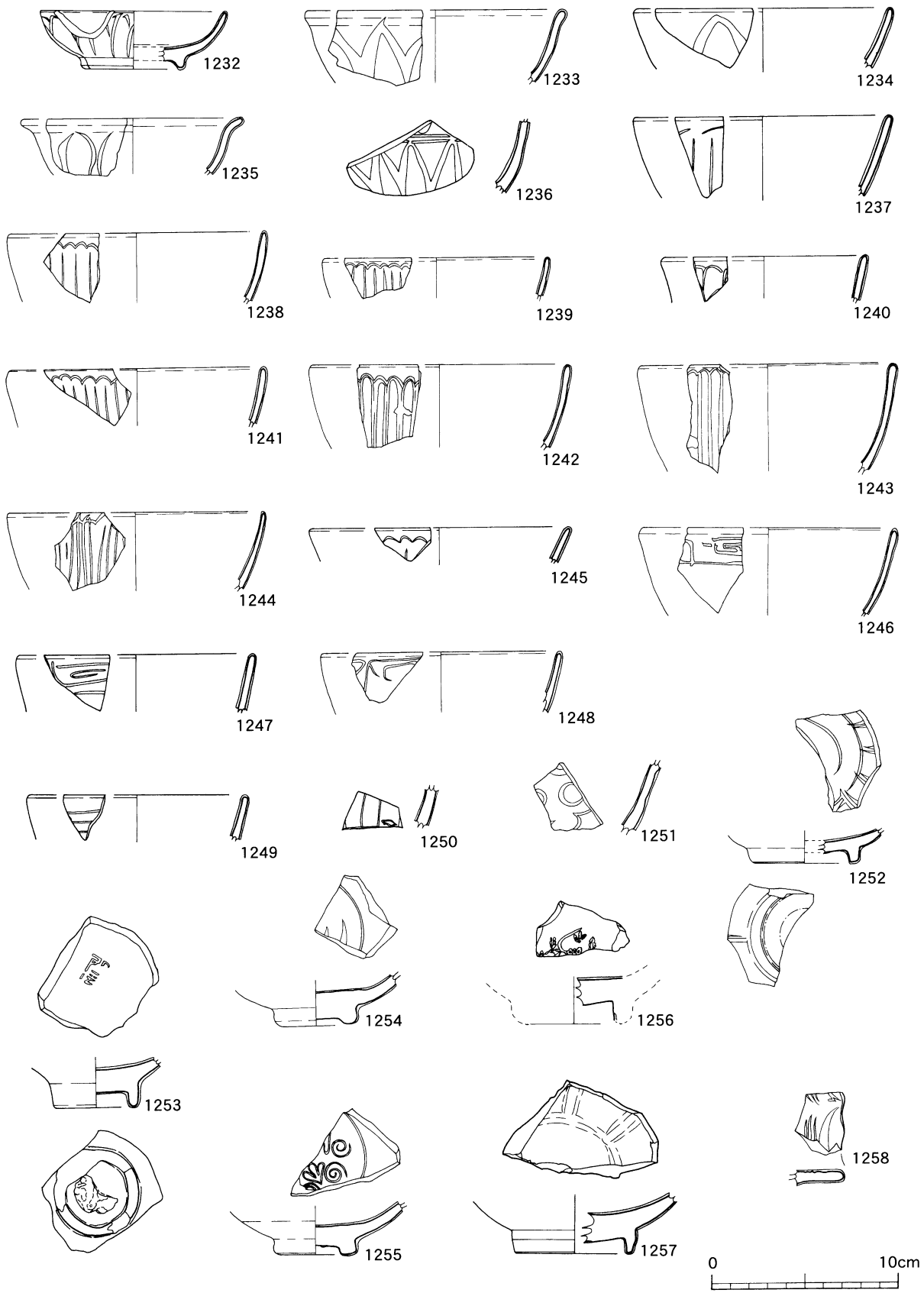
底部の内底にも渦状文（1255）・印花文（1256）・「顧氏」銘（1253）などが見られ、バリエーションが豊富である。

盤は極めて小片である。内面には弧状の文様が見られる。

第129図の1259～1270は口縁部および口縁部から胴部，1271～1276は底部および胴部から底部で



第127図 竜泉窯青磁：皿



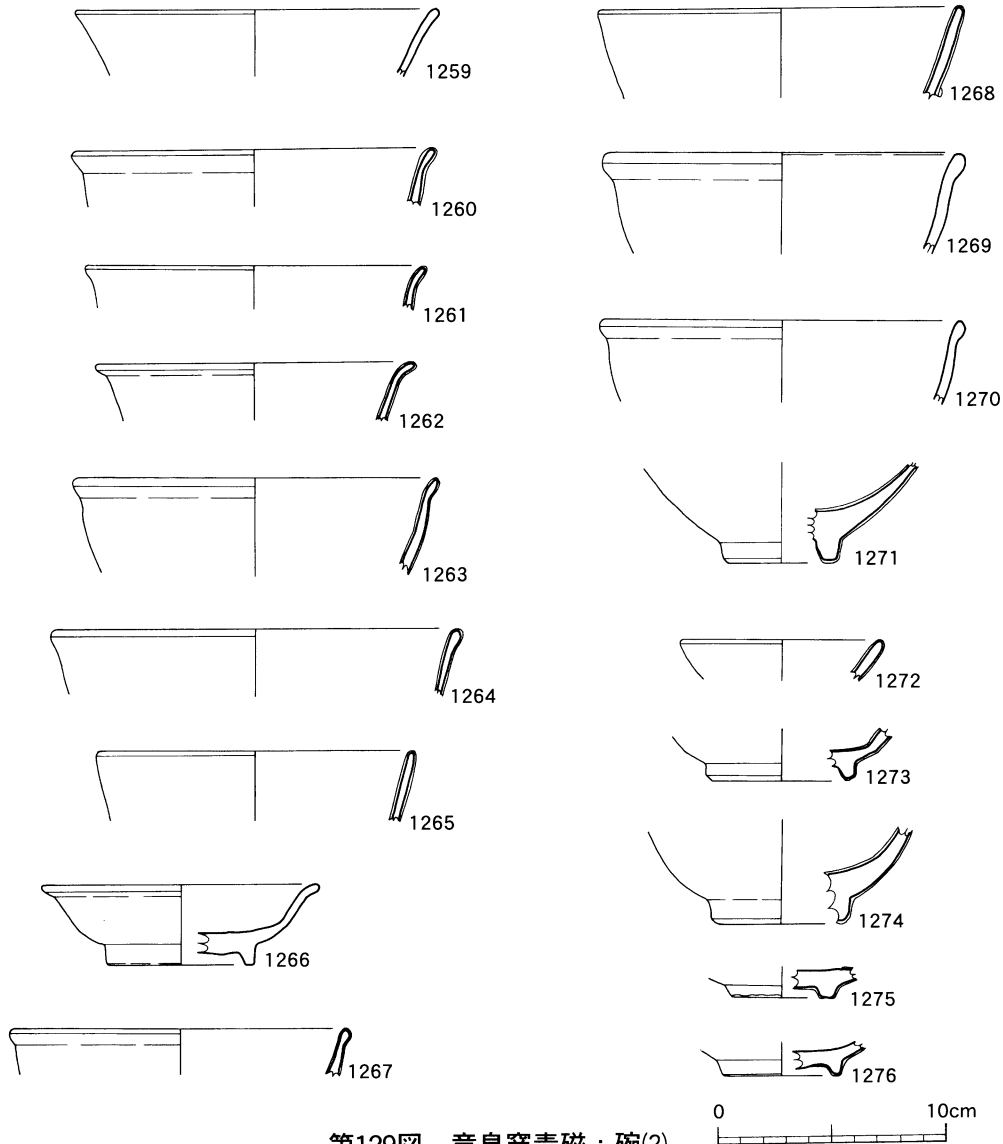
第128図 竜泉窯青磁：碗(1)・盤

ある。

いずれも無文のものであるが、口縁部の形状は1265のように直立するもの、1259のように小さく外反するもの、1260のように体部はほぼ真っすぐに立ち上がるものの端部を玉縁に作るもの、1262のように同様な形態で端部が反り気味に開くものなど、さまざまなバリエーションが見られる。ほとんどは碗と考えられるが、中には1266のように小碗も見られる。これは口径13.3cm、底径6.6cm、高さ3.5cmに復元される。内面見込みは露胎であり、外底も同様である。

底部もそのほとんどは碗と考えられるが、1276などは高台が低く、底径も小さいことから皿の可能性もある。1275は内面見込みが露胎であるが、それ以外のものは釉がかかる。

青磁全体として、釉の色にもバリエーションが見られる。透明感のあるきれいな深緑色を呈するもの、透明度は若干落ちるものの緑色が鮮やかなもの、透明感に乏しく濃い緑色に見えるものなどのほか、淡い青色に近いもの、澄んだ淡い緑色に薄く青色が混じるもの、落ち着いた褐色となるものなどが見られる。また、透明なガラス質のものから、少し濁りのあるガラス質のもの、それに透明感を欠いて光の反射が見られないほどに濁って沈んだものなどがある。



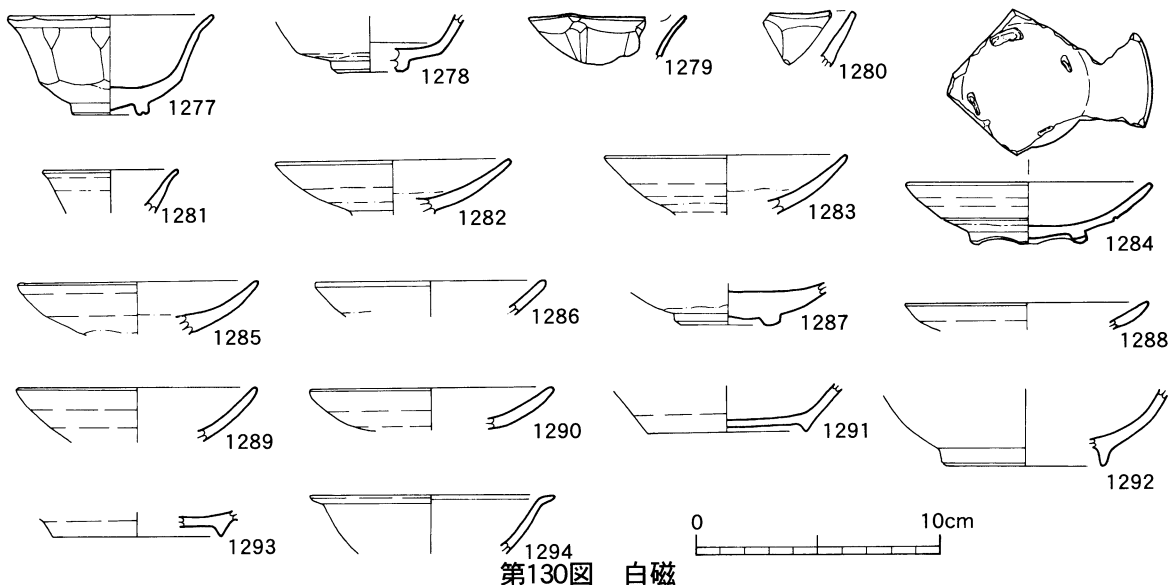
第129図 竜泉窯青磁：碗(2)

4. 白磁 (第130図 1277~1294)

第130図は白磁を集めた。

1277は体部を八角形に面取りしたもので、多角坏と考えられる。口縁部も直線的な八角形に整えられており、内面および外面の体部まではやや黄色味を帯びた白釉が掛かり、それより下位、畳付きおよび外底は露胎である。1278~1280も同じく多角坏と推定される。釉は1279が透明感のある白色であるのに対して、それ以外はやや薄い緑色を帯びた透明感のある白色である。1279と1280は八角であるが、1281は円形と考えられる。

1282~1294は碗および皿と考えられる。1284は皿で完形に復元できたものである。内底には目跡が4か所に残り、外面の3分の2まで黄色味がかかった白釉が掛かり、それ以下は露胎である。畳付きは平らではなく、4か所で小さく底をなし、その間は広く直線的に削っている。4か所の目跡と底の畳付きの場所はほぼ同じである。1282・1283・1285も同様な器形と考えられるが、内面見込みは露胎となっている。1289・1290もほぼ同様なものと考えられる。1287は碗の底部である。やや薄緑を帯びた透明度の高い白釉がかかっている。外底には扇状に削りとった痕跡が残る。1291は皿、1292・1293は碗のそれぞれ底部である。両方共に畳付きの部分のみ露胎となっている。1294は碗の口縁部である。ゆるやかに立ち上がった体部の上部が大きく外反した口縁となっている。やや濁った灰色がかかった白釉がかかっている。これは、1291~1293も同様である。



5. その他の遺物

貝

1295は貝である。完形であるが、白化した状態で検出された。バイ貝とみられる。

滑石片 (図版)

1296~1299は滑石片である。いずれも最大厚が2 cm 内で、石鍋の破片とみられる。

小石 (図版)

1300~1306は小石である。いずれも直径4 cm内の小さなものであるが、手ずれのような光沢を持つために記載した。ほとんどがG 3区で出土している。

第29表 中世遺物観察表(1)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	内面色調	外面色調	内面調整	外面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1180	I 3	Ⅲ a	42838	土師器	坏	完形	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り	9.2	2.4	7.4			125
1181	I 4	Ⅱ	756	土師器	坏	完形	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り	10.0	2.7	8.0			125
1182	G 5	Ⅱ	1426	土師器	坏	完形	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り	11.6	2.6	9.0			125
1183	I 3	Ⅲ a	44419	土師器	坏	完形	淡灰褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り	8.7	1.9	7.2			125
1184	I 4	Ⅲ a	2433	土師器	坏	完形	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り	8.0	1.8	6.4			125
1185	H 4	表		土師器	坏	完形	淡灰褐色	淡灰褐色	ナデ	回転糸切り	12.0	2.5	8.0			125
1186	G 5	Ⅱ a	11564	土師器	坏	完形	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り	9.4	2.7	7.0			125
1187	I 3	Ⅲ a	3860	土師器	坏	完形	黒赤褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り	9.0	2.2	8.0			125
1188	H 4	表		土師器	坏	完形	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り	6.6	2.0	4.5			125
1189	J 4	Ⅲ a	2934	土師器	坏	完形	淡褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り	7.8	2.0	6.0			125
1190	H 4	表		土師器	坏	底部	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り			6.2			125
1191	I 3	Ⅲ a	44416	土師器	鉢	底部	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り			8.6			125
1192	H 4	表		土師器	坏	底部	淡灰褐色	黒色	ナデ	回転糸切り			6.4			125
1193	F 2	Ⅱ a	22296	土師器	坏	底部	暗褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り			7.0			125
1194	J 4	Ⅱ	699	土師器	坏	底部	暗褐色	黒褐色	ナデ	回転糸切り			4.8			125
1195	H 3	Ⅲ a	3405	土師器	坏	底部	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り			4.8			125
1196	J 5	Ⅱ a	4163	土師器	坏	底部	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り			4.5			125
1197	G 4	Ⅱ b	1668	土師器	坏	底部	淡褐色	淡褐色	ナデ	回転糸切り			6.0			125
1198	F 5	表		土師器	鉢	底部	薄赤褐色	薄赤褐色	ナデ	回転糸切り			8.6			125
1199	I 4	表		土師器	鉢	底部	暗褐色	淡褐色	ナデ	静止糸切り			14.0			125
1200	F 4	表		赤土器	坏	底部	赤褐色	薄赤褐色	ナデ	回転糸切り			7.0			125
1201	G 4			内赤土器	皿	底部	明赤褐色	淡赤褐色	ナデ	回転糸切り			7.0			125
1202	F 2	表		土師質	挿鉢	口縁部	淡黄色	淡黄色	ナデ	ナデ						126
1203	J 4	Ⅲ a	2550	土師質	挿鉢	口縁部	黄橙色	黄橙色	ケズリ	ナデ						126
1204	I 5	Ⅱ a	3463	土師質	挿鉢	口縁部	灰黄色	灰黄色	ケズリ	ナデ						126
1205	H 4	表	一括	瓦質	挿鉢	胴部	灰黄色	灰黄色	ケズリ	ナデ						126
1206		表		瓦質	挿鉢	胴部	暗黄白色	暗黄褐色	ケズリ	ナデ						126
1207		Ⅱ b		須恵質	挿鉢	底部	灰黄色	灰黄色	ケズリ	ナデ			13.0			126
1208	J 7	表		瓦質	挿鉢	底部	暗黄褐色	暗黄褐色	ケズリ	ナデ						126
1209		表		須恵質	挿鉢	口縁部	青灰色	青灰色	ナデ	ナデ						126
1210	J 4	Ⅱ b	一括	瓦質	羽釜	胴部	灰黄色	灰黄色	ナデ	ナデ						126
1211	H 4	表		瓦質	羽釜	胴部	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ						126
1212		表		瓦質	羽釜	鋳状突帯	灰黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ						126
1213		Ⅱ b		瓦質	羽釜	鋳状突帯	灰黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ						126
1214	F 2	Ⅱ b	22273	瓦質	羽釜	把手	灰色	灰色	ケズリ	ケズリ						126
1215				青花	碗	口縁部									明代	126
1216	H 4	表		青花	碗	口縁部					11.8				明代	126
1217	H 4	表		青花	皿	口縁部					8.8				明代	126
1218		表		青花	皿	口縁部									明代	126
1219		表		青花	碗	口縁部									明代	126

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	器面色調	胎土色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	上田分類	備考	特徴	挿図
1220	E 7	Ⅲ a	土坑31	青磁	稜花皿	口縁部	淡灰青緑色	淡青緑色	12.0					細貫入一部白濁	波状口縁	127
1221	I T	表		青磁	稜花皿	口縁部	灰青緑色	淡青緑色	12.0					細貫入	波状口縁	127
1222		表		青磁	稜花皿	口縁部	暗灰青緑色	淡青灰色	12.0					粗い貫入	波状口縁	127
1223		表		青磁	稜花皿	口縁部	暗灰青緑色	淡褐色	12.0					貫入	波状口縁	127
1224		表		青磁	稜花皿	口縁部	白灰青緑色	淡青灰色	12.0					白濁している	波状口縁	127
1225	H 4	表		青磁	稜花皿	口縁部	薄青緑色	淡青灰色	12.0					貫入	波状口縁	127
1226	I 4	表		青磁	稜花皿	口縁部	暗灰青緑色	暗青灰色	11.6					貫入	波状口縁	127
1227		表		青磁	稜花皿	口縁部	薄青色	淡青灰色							波状口縁	127
1228	G 3	表		青磁	稜花皿	口縁部	淡灰緑色	薄青灰色							波状口縁	127
1229	H 4	表		青磁	稜花皿	口縁部	暗緑褐色	淡青灰色	10.0						波状口縁	127
1230	F 9	一括		青磁	皿	口縁部	暗灰青緑色	淡青灰色							皿	127
1231	E 5	Ⅱ b	28422	青磁	皿	口縁部	灰褐色	淡灰褐色	16.0					貫入	皿	127
1232	F 4	表		青磁	皿	完形	暗灰緑色	暗灰褐色	10.0	3.1	5.1	0.4	B II	貫入	蓮弁	128
1233	J 3	表		青磁	碗	口縁部	薄緑色	白灰色	13.8				B II	粗い貫入	ヘラガキ蓮弁	128
1234	J 3	表		青磁	碗	口縁部	薄灰緑色	青灰色	13.8					貫入	蓮弁	128
1235	H14	表		青磁	碗	口縁部	薄緑色	青灰色	12.0					貫入	蓮弁	128
1236	J 3	表		青磁	碗	胴部	青灰色	暗青灰色					B II		蓮弁	128
1237	I 3	表		青磁	碗	口縁部	青灰色	青灰褐色	14.0				B III ? IV	貫入	蓮弁	128
1238	E 4	表		青磁	碗	口縁部	暗灰緑色	暗青灰色	13.7				15c~16c	貫入	剣先蓮弁	128
1239	F 4	表		青磁	碗	口縁部	薄青灰緑色	白灰色	12.0				15c~16c	気泡	剣先蓮弁	128
1240	H 4	表		青磁	碗	口縁部	青灰緑色	暗青灰色	10.8					貫入	蓮弁	128
1241	I	表		青磁	碗	口縁部	灰緑色	青灰色	13.7					気泡	蓮弁	128
1242	G 3	表		青磁	碗	口縁部	灰緑水色	青灰色	14.0				B III	貫入	蓮弁	128
1243	F 2	表		青磁	碗	口縁部	暗緑褐色	明青灰色	13.7					貫入	剣先蓮弁	128
1244	J 4	表		青磁	碗	口縁部	明黄褐色	淡褐色	14.0				15c~16c	細貫入	剣先蓮弁	128
1245	H 3	表		青磁	碗	口縁部	灰緑水色	青灰色	14.0					貫入	蓮弁	128

第30表 中世遺物観察表(2)

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	器面色調	胎土色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	上田分類	備考	特徴	挿図
1246	F 3	表		青磁	碗	口縁部	青灰緑色	青灰色	14.0				14c~15c	貫入	雷文帯	128
1247	I 5	Ⅲa	4285	青磁	碗	口縁部	暗灰緑褐色	暗青灰色	12.7					貫入	雷文帯	128
1248		表		青磁	碗	口縁部	薄緑色	白青灰色	13.0							128
1249	I T	表		青磁	碗	口縁部	薄緑色	白青灰色	12.0						雷文帯	128
1250	I 5	Ⅲa	4348	青磁	碗	胴部	灰緑色	暗青灰色					15c~16c	貫入	細蓮弁	128
1251		表		青磁	碗	胴部	薄緑色	白青灰色					14c~15c		雲文	128
1252	H 4	表		青磁	碗	底部	薄水色	暗灰褐色			5.7	0.6	B II	高台に貫入	蓮弁	128
1253	H 3			青磁	碗	底部	薄緑色	青灰色			4.6	0.6		貫入	見込みに文	128
1254		表		青磁	碗	底部	暗灰緑色	暗灰褐色			4.0	0.4		貫入	見込みに文	128
1255	GF 5・6		GF 5・6杭	青磁	碗	底部	暗灰緑色	白青灰色			4.3	0.5			見込みに文	128
1256	E 6	表		青磁	碗	底部	青灰緑色	白青灰色						貫入	見込みに文	128
1257	I 3	Ⅲa	42851	青磁	碗	底部	青灰緑色	赤褐色		6.4	1.0	0.8		貫入	見込みに文様あり	128
1258		表		青磁	盤	口縁部	青灰緑色	青灰色						貫入	波状口縁	128
1259	H 6	Ⅱb上	10312	青磁	碗	口縁部	灰色	青灰色	16.0					貫入		129
1260	H 3	表		青磁	碗	口縁部	暗灰緑褐色	青灰色	16.0					貫入		129
1261	H 5	Ⅱb下	16216	青磁	碗	口縁部	薄青灰緑色	青灰色	15.0						気泡白濁	129
1262	I 4	表		青磁	碗	口縁部	薄青灰緑色	青灰色	14.0					貫入		129
1263	J 3	表		青磁	碗	口縁部	暗青灰緑色	暗青灰色	16.0							129
1264	G 5	Ⅱ		青磁	碗	口縁部	暗青灰緑色	青灰色	18.0					貫入		129
1265	E 6	表		青磁	碗	口縁部	薄青灰緑色	青灰色	14.0					貫入		129
1266	I 3	Ⅲa	3865	青磁	小碗	完形	薄緑色	白青灰色	12.2	3.5	6.6	0.5		細貫入	見込丸剥皿	129
1267		表		青磁	碗	口縁部	淡灰緑色	青灰色	15.0					貫入		129
1268	J 3	表		青磁	碗	口縁部	淡灰緑色	白青灰色	16.0							129
1269	K 5	表		青磁	碗	口縁部	暗灰緑色	暗青灰色	15.4							129
1270	H 5	Ⅱb	7984	青磁	碗	口縁部	淡灰緑色	青灰色	16.0							129
1271	K 3	表		青磁	碗	底部	暗灰緑色	暗青灰色			5.0	0.5	Da II	貫入		129
1272	F 5			青磁	小碗	口縁部	暗灰緑色	暗青灰色	9.0					貫入		129
1273	E 6	Ⅲb	41967	青磁	碗	底部	暗灰緑色	淡褐色			6.0	0.6		貫入		129
1274		表		青磁	碗	底部	淡灰緑色	淡青灰色			5.6			貫入		129
1275	E 8	表		青磁	碗	底部	淡灰緑褐色	明褐色			4.5	0.4			見込丸剥皿一部白濁	129
1276	J 3	表		青磁	碗	底部	淡灰緑色	明褐色			5.0	0.4				129

遺物番号	区	層	注記番号	類別	器種	部位	器面色調	胎土色調	器面調整	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1277	H 5	Ⅱb	14915	白磁	多角坏	完形	乳白色	白褐色	貫入	8.4	4.2	3.2	0.5	森田D15	130
1278	H 3			白磁	多角坏	底部	青白色	白灰色				3.2	0.6	森田D14	130
1279	F 4	表		白磁	多角坏	口縁部	青白色	白灰色							130
1280	F 14	表		白磁	多角坏	口縁部	青白色	白灰色							130
1281	F 6	Ⅱb	30444	白磁	坏	口縁部	青白色	白灰色		5.5					130
1282	J 3	表		白磁	皿	口縁部	乳白色	白褐色	貫入	5.6				森田D	130
1283	I 3	Ⅲa	3854	白磁	皿	口縁部	乳白色	白褐色	貫入	10.0				森田D	130
1284	E 5	Ⅱb	28489	白磁	皿	完形	乳白色	白褐色	貫入	10.2	2.5	4.8	0.6		130
1285				白磁	皿	口縁部	青白色	白灰色	貫入	10.0				森田E27	130
1286	H 3	表		白磁	皿	口縁部	乳白色	乳白色		9.4					130
1287	J 4	表		白磁	皿	底部	乳白色	乳白色	貫入		4.6	0.5		森田D17	130
1288		表		白磁	皿	口縁部	乳白色	乳白色	貫入	10.0					130
1289	H 3	Ⅲa	2869	白磁	皿	口縁部	乳白色	乳白色	貫入	10.0					130
1290	H 4	Ⅱb	37722	白磁	皿	口縁部	乳白色	乳白色	貫入	10.0					130
1291	F 4	表		白磁	碗	底部	青白色	白灰色	貫入		6.4			森田E20	130
1292	H 5	表		白磁	碗	底部	青白色	白灰色			0.8			森田E21	130
1293				白磁	皿	底部	青白色	白灰色			6.8	0.7		森田E27	130
1294	F 4	表		白磁	皿	口縁部	青白色	白灰色		10.0				森田E30	130

遺物番号	区	層	注記番号	類別	最大長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
1295	E 12	Ⅲb	38697	バイ貝			19.42		
1296	F 5	Ⅱb	33385	滑石片	4.3	1.4	19.96		図版49
1297	F 4	Ⅱb	26274	滑石片	7.4	1.4	68.16		図版49
1298	F 5	Ⅱa	32860	滑石片	5.2	1.8	22.96		図版49
1299	G 3	Ⅱa	21236	滑石片	6.0	1.5	35.93		図版49
1300	G 3	Ⅱa	21177	小石	2.9	1.1	12.46	研磨痕有り	図版49
1301	G 3	Ⅱa	21171	小石	3.7	1.2	13.84	研磨痕有り	図版49
1302	G 3	Ⅱa	21822	小石	2.5	0.9	7.88	研磨痕有り	図版49
1303	G 3	Ⅱa	22421	小石	4.0	1.5	29.59	研磨痕有り	図版49
1304	H 5	Ⅱa	18313	小石	2.4	1.0	7.02	研磨痕有り	図版49
1305	F 6	Ⅱb	39674	小石	1.7	0.4	1.50	研磨痕有り	図版49
1306	G 5	Ⅱb	17725	小石	2.5	0.5	2.83	研磨痕有り	図版49

第10節 近世・近代の調査

1. 近世墓壙

F-7・8区で12基の墓壙が検出されたが、副葬品として寛永通寶が六道銭として入っていたことなどから、近世のものと判断された。いずれも方位は北向きであり、1か所にまとまっている。

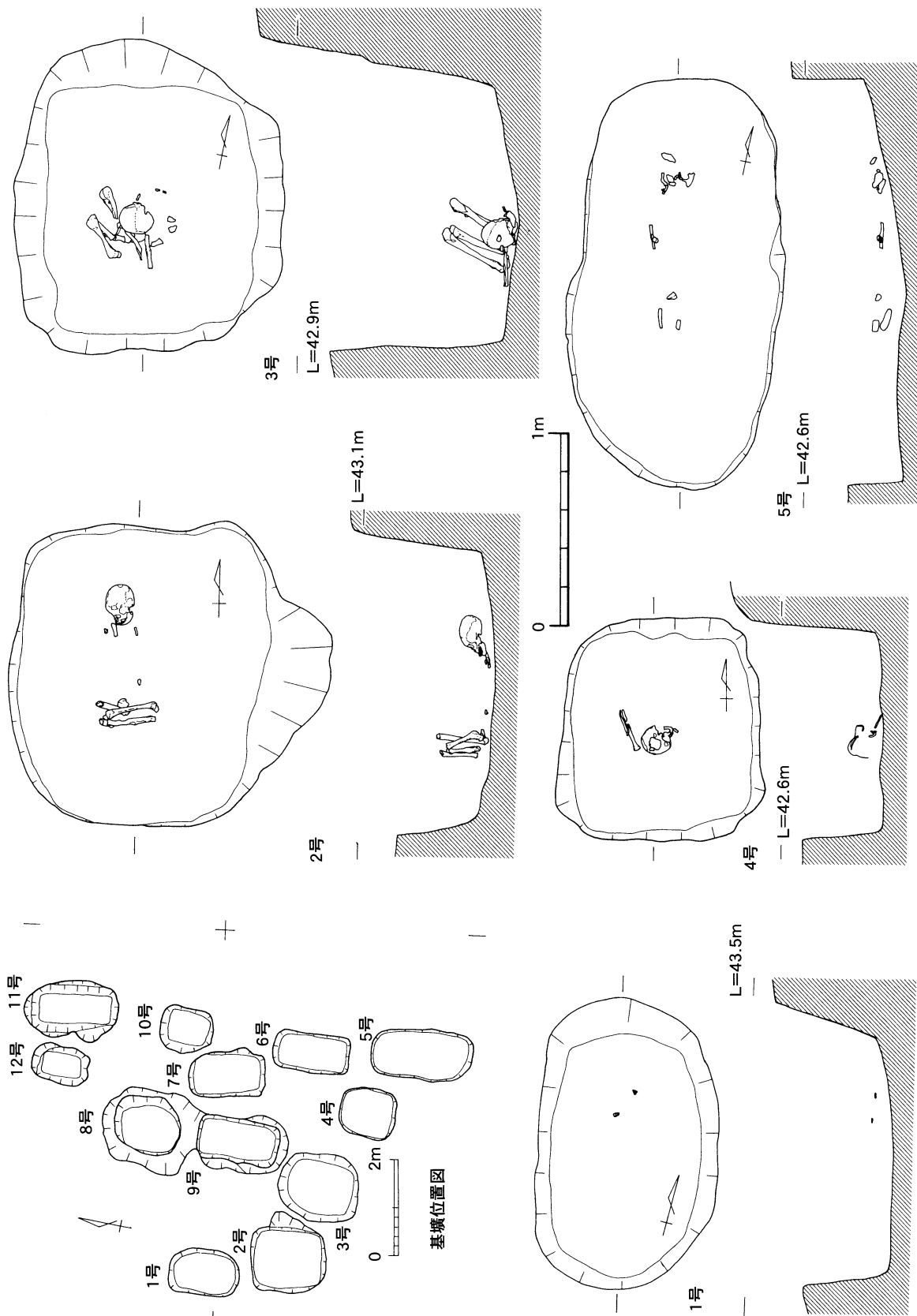
1号は、長径が152cm、短径が95cm、深さが65cmの、形状が楕円形のものである。骨は小破片が2点出土している。部位など明確でないために詳細は不明であるが、縦長の木棺に身を横たえて埋葬された“寝棺”と推定される。2号は、長径162cm、短径172cm、深さ78cmで、形状は正方形に近い。頭骨及び足の骨が良好な状態で残っており、深さがそれほど深くないことから、“寝棺”と推定される。3号は、長径162cm、短径141cm、深さ134cmあり、形状は正方形に近い。2号に似ているものの深さが深いことから、座った状態で膝を抱えた姿勢の“座棺”であると考えられる。4号は、長径116cm、短径110cm、深さ79cmあり、形状は正方形である。深さはそれほど深くはないものの、全体的に規模が小さいことから、一応“座棺”として捉えておきたい。5号は、長径が214cm、短径が114cm、深さは59cmであり、楕円形といえる。辛うじて頭骨の位置がわかり、六道銭も見られる。形状から“寝棺”と考えられる。6号は、長径が164cm、短径が85cm、深さが71cmであり、長方形を呈する。頭骨や足の骨などがよく残っており、六道銭を伴う。形状から“寝棺”と推定される。7号は、長径が161cm、短径が101cm、深さが79cmあり、長方形である。六道銭を伴い、“寝棺”と考えられる。8号は、長径が187cm、短径が173cm、深さが149cmあり、2段掘りになって、長方形を呈す。深さから“座棺”と考えられる。9号は、長径182cm、短径122cm、深さ92cmあり、長方形といえるが、四方がやや崩れたようになっている。骨片が辛うじて残っており、形状から“寝棺”と推定される。副葬品に六道銭が見られる。10号は、長径115cm、短径98cm、深さ98cmあり、正方形に近いといえる。頭骨や足の骨が割合にしっかりと残っており、形状から“座棺”と考えられる。六道銭を伴っている。11号は、長径が208cm、短径が128cm、深さが123cmと深い。長方形を基本形とするが、二段掘りになったところや、崩れたようになっている部分も見られる。頭骨や足の骨の位置から“寝棺”であろうと考えられる。六道銭を伴う。12号は、長径123cm、短径80cm、深さ111cmあり、楕円形であるが、南側がピット状に凹んでいる。形状は南北に長い、凹んだ部分に集中的に骨が見られることから、“座棺”ではないかと考えられる。六道銭を副葬していた。

一般的に、墓は同族あるいは同じ地域の人々が設営し、葬ることが多いことから、これら12基の墓は短期間に同族あるいは同地域の人々の墓として造られ、そして遺棄されたもののように考えられる。おそらく、墓を放棄すると同時に、この地域を去っていったものと考えられる。すべて六道銭は7枚だったと考えられる。

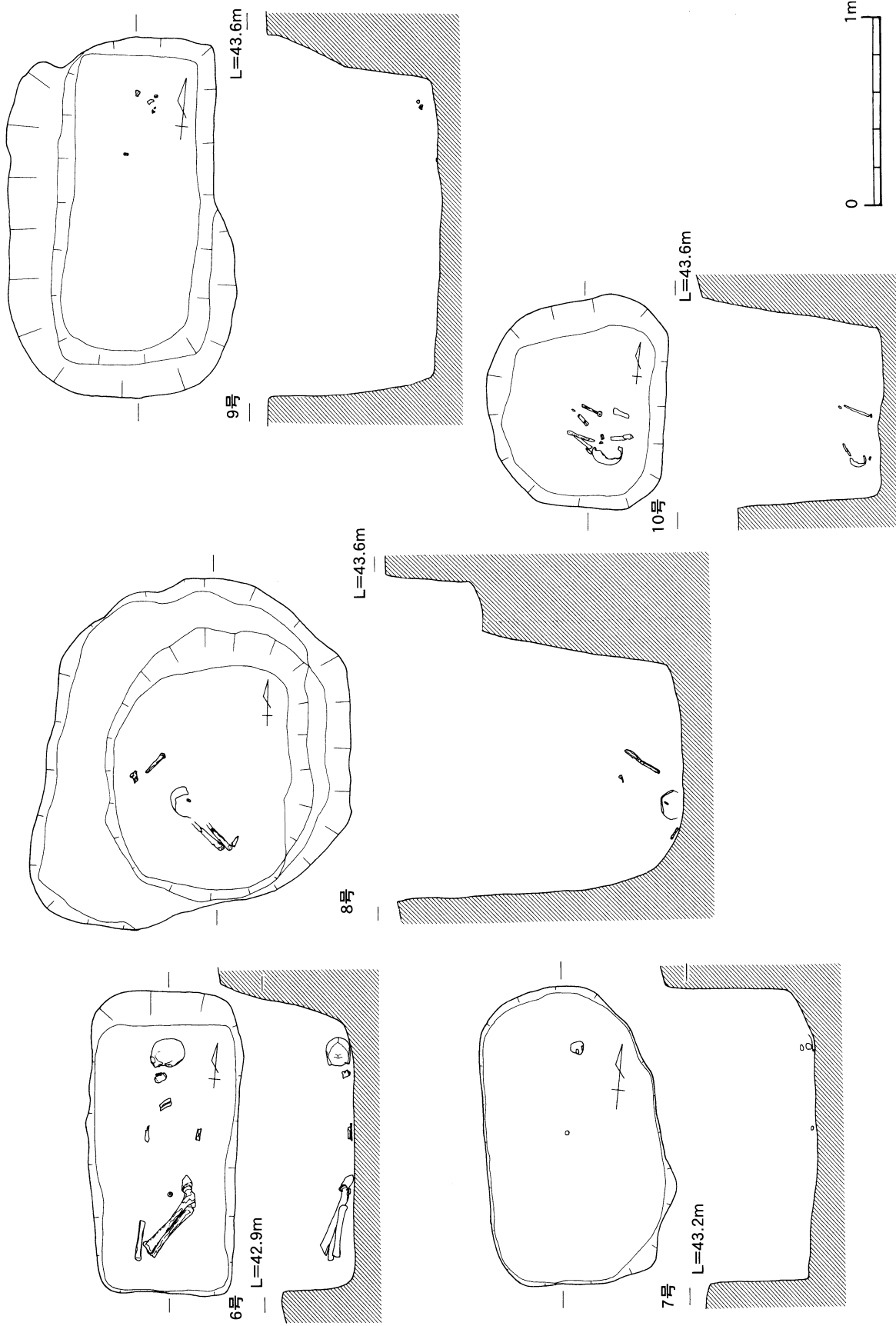
第31表 近世墓壙内出土銅銭観察表

遺物番号	墓壙	種類	状況	直径(cm)	器厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
1307	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.15	3.99		134
1308	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	3.09		134
1309	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	4.03		134
1310	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	2.85		134
1311	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.45	0.15	3.22		134
1312	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.30	0.10	3.18		134
1313	1号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.15	3.25		134
1314	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.15	3.88		134
1315	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	2.97		134
1316	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	3.08		134

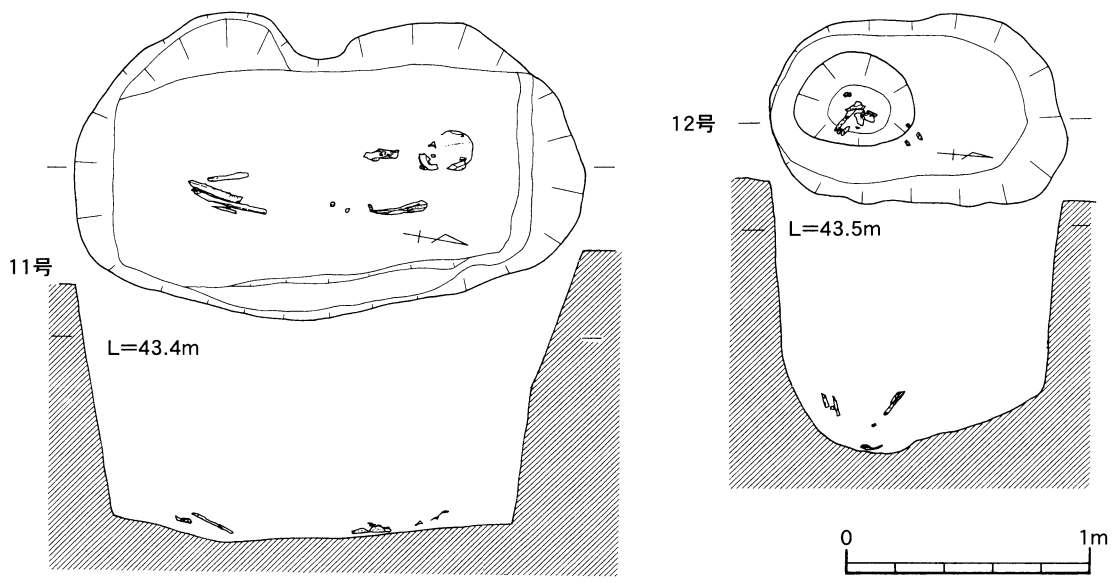
遺物番号	墓壙	種類	状況	直径(cm)	器厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
1317	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.50	0.10	2.67		134
1318	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.40	0.10	3.08		134
1319	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.30	0.10	2.61		134
1320	4号墓壙	寛永通宝	1枚	2.30	0.10	2.80		134
1321	9号墓壙	寛永通宝	1枚	2.30	0.10	2.25		134
1322	9号墓壙	寛永通宝	4枚接着	(2.40)	(0.20)	13.54		134
1323	9号墓壙	寛永通宝	2枚	(2.70)	(0.50)	5.27		134
1324	11号墓壙	寛永通宝	7枚接着	(2.80)	(0.90)	21.38	布痕付着	134
1325	12号墓壙	寛永通宝	7枚接着	(2.80)	(0.90)	22.11	布痕付着	134



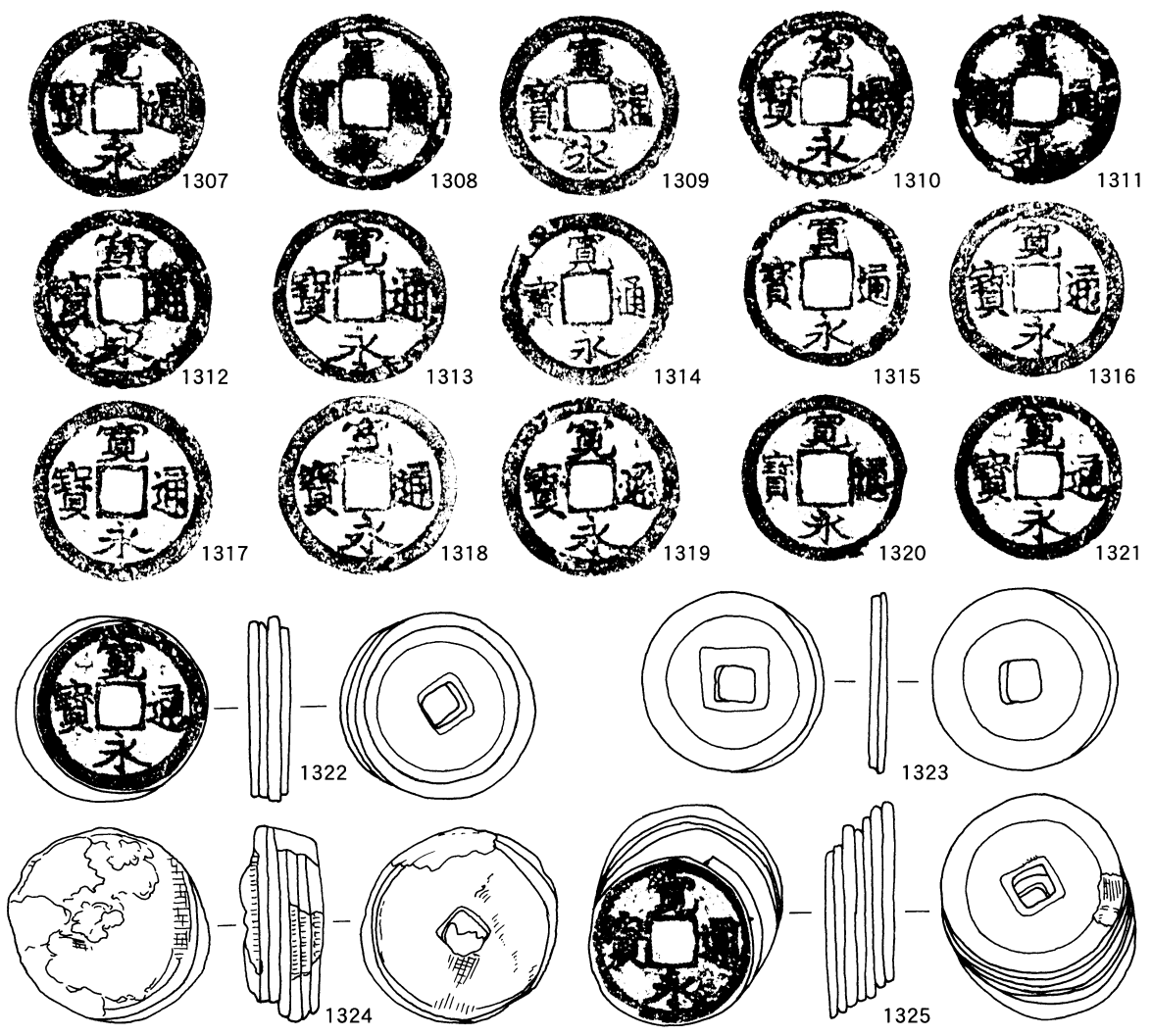
第131图 近世墓墳(1)



第132図 近世墓墳(2)



第133图 近世墓壙(3)



第134图 近世墓壙内遺物(六道銭)(S=1/1)

2. 道跡

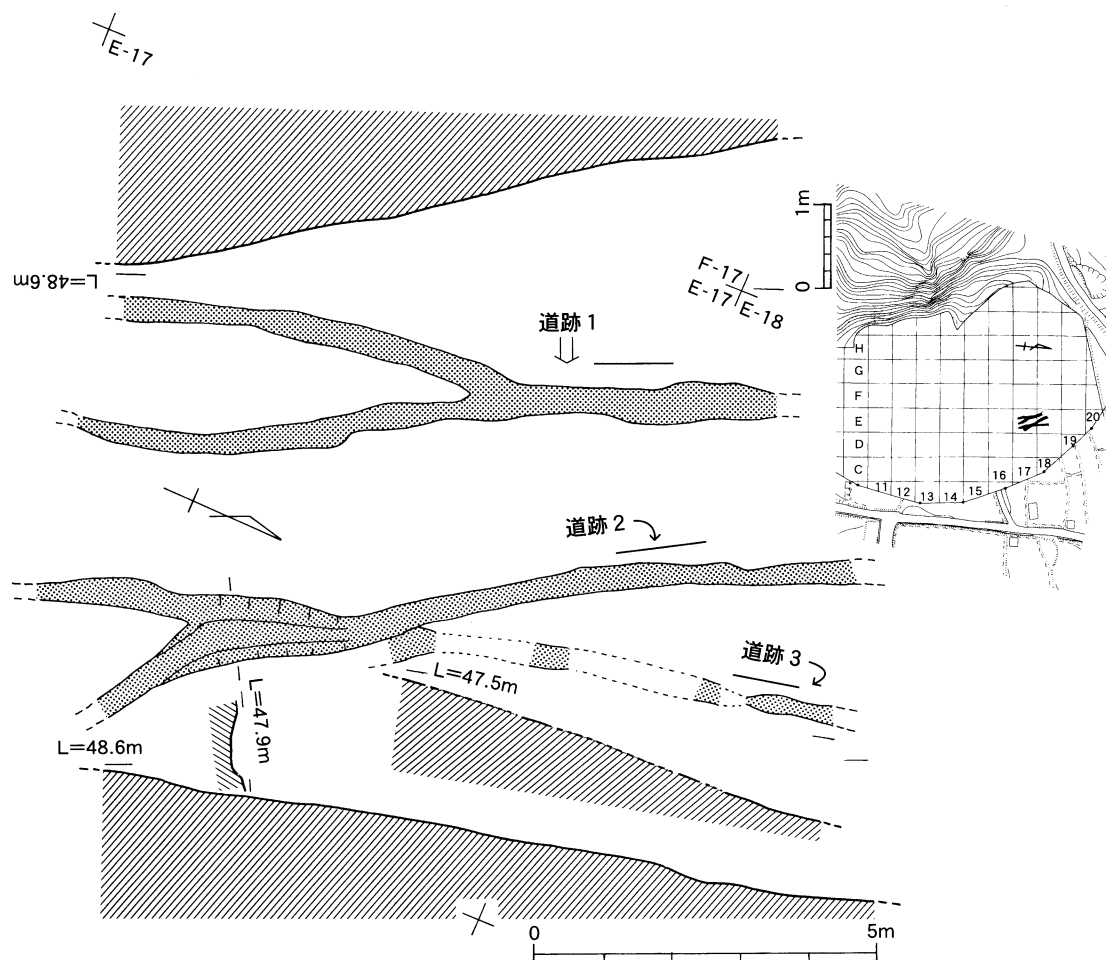
E-17・18区から3本の道跡が確認された。すべて北側に向かって下っていることから、台地の
上から麓へ下りる道であったと考えられる。

東側から順に道跡1・道跡2・道跡3として説明をしていきたい。

道跡1はY字状に枝分かれしており、別の言い方をすれば、上から下りてきた2本の道が、E-
17区の西側のこの地点で合流して下に下りているということである。長さは長いもので10.2mが検
出され、その幅は25cm~65cmあり、しっかりした硬化面が見られた。傾斜角度は約13度であり、地
形にそって割合に急角度で下っている様子が観察される。

道跡2は、道跡1の東側約2.5mのところを、ほぼ平行に、並んで走っていることがわかる。や
はりY字状に枝分かれしており、長さは長いほうで12.1mあり、幅は33~125cmある。また、途中
の分岐点（別の言い方をすれば合流点ということになるが）付近では、約10cmほど凹んでいる。こ
れは、土質が周囲よりも軟質であったためか、または傾斜が割合に急勾配であって雨水の流水作用
によって削られたためか、またはその双方の要因に起因するものかはにはわかには判断しえない。し
かし、そのいずれであったにしても、路面には相当な硬化が見られた。傾斜角12度である。

道跡3は、道跡2の分岐点に取り付く。断続的な検出である。幅は10cm~40cm、傾斜角は13度で、
共伴遺物から、これらの道跡はいずれも近世以降と考えられる。



第135図 道跡

3. 近世の染付 (第136図 1326~1347)

第136図は染付などで、近世およびそれ以降の遺物である。

1326は碗と考えられ、淡い青色の呉須で外面および内底に荒磯文を描く。釉薬はやや濁った薄い灰色であり、外面には黒色の細かな粒子が付いており、釉薬を掛ける際に混入したものと考えられる。

1327 a・bは蓋付碗である。内面上部には交互の斜線を基本とした文様帯が見られるほか、内底には圏線と共に五弁の花の模様らしいものが付されている。蓋部・碗部とも外面に青磁釉がみられる。広瀬向窯等で焼かれた物と思われる。

1328は小碗と考えられるもので、外面には木または波が描かれているようであり、内面の見込みには圏線が巡っている。1329は端反碗である。外面には薄い青色で山様の文様が描かれるが、内面には圏線すらも見られない。釉薬は極めて透明感のあるガラス質で、ひび釉がみられることから19世紀のものと思われる。1331は盃と考えられる。口唇には薄い茶色が巡る。外面には現在染色体文と呼ばれる文様が2つと3つに分かれて交互に付されており、内底にも折り花の文様が描かれる。釉薬はやや不透明な白色を呈しており、畳付きの部分のみ露胎である。瀬戸美濃産と思われる。1332も盃と考えられるものである。不透明な濁りの強い白い釉薬がかけられており、外面に笹と思われる文様と千鳥に似た文様がみられる。肌が粗く、磁器の焼き損ないと思われる。1330は腰が張った碗で、外面に草花の描かれるいわゆる碗形のものである。後者の口唇内面と畳付きは露胎となっている。

1333は仏飯具であろう。全体的に濁った白い釉薬が大らかにかけており、ところどころ釉垂れが見られる。1334の内底には草花が描かれ、高台の外面は櫛高台となっている。底部のみの出土だが19世紀代の端反碗と思われる。

1335は内底に蒟蒻印の五弁花がみられるが、全体的に暗緑色で、18世紀の発色が悪い物と考えられる。1336は皿かと思われ、外底中央には福文が、内底には五弁花文が描かれている。内面の周囲には草の中に笹が描かれる。

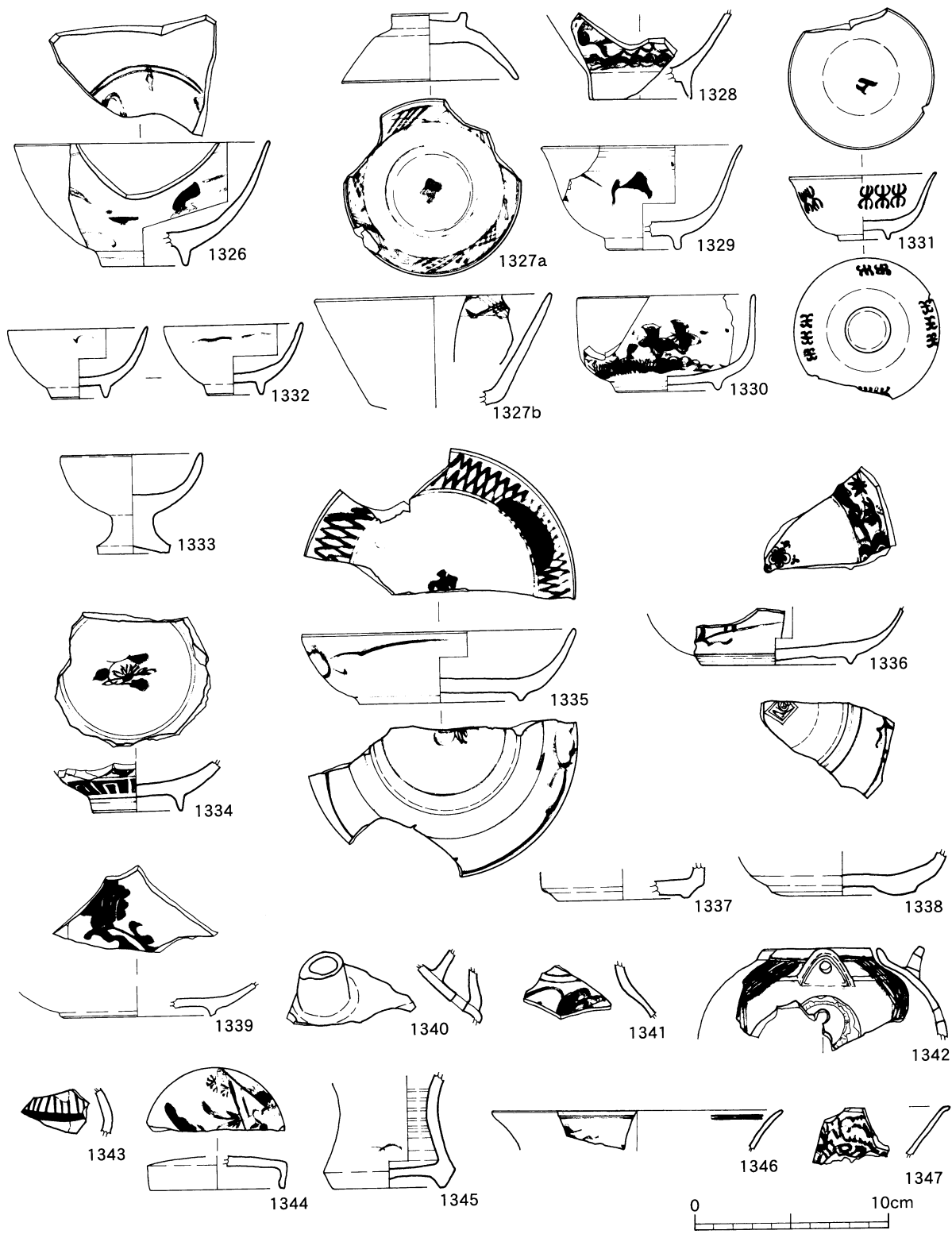
1337は畳付きから外底にかけては露胎となっており、外底の調整は中心部に向けて小さな刷毛により整えられている。1338は内面に釉薬がみられず外面には青磁釉が施される。1337・1338は火入れと思われる。1339は中国陶磁器である。内底の薺手の葉脈に墨弾きがみられるが17世前半と思われる。1340・1341はからから、1342は急須と考えられる。1342は青・緑・茶色などの琉球焼特有の釉薬が掛けられているが、作りなどから19世紀以降のものに感じられる。

1343は赤絵である。器形は不明であるが、胴部の張り具合から推定すると油壺の可能性も考えられる。

1344は合子の蓋であろう。草花が描かれており、口唇から内面の一部にかけて露胎となる。

1345は花瓶の底と思われ、濁った白色の釉薬がかかり、外面には青で描かれた千鳥が見られることから豎野窯のものかと推定される。

1346と1347は透明感のある釉薬が掛かっており、前者は飛雲、後者は唐草が描かれているように思われる。前者は内外面、後者は内面に2~1本の圏線が巡っている。どちらも中国陶磁器で1347は17世紀前半の明代のものと思われる。



第136图 陶磁器

4. 薩摩焼 (第137～139図 1348～1384)

第137図～第139図は薩摩焼である。そのうち第137図は碗や壺・鉢であり、第138図は鉢・壺・盤など、第139図は急須や円盤状加工品などである。

第137図の1348と1349は碗、1351は皿であろう。1351は内面見込みに砂目が5か所残る。1350は高台付きの碗と考えられるが、直径はそれほど大きくならないと推定される。

1352は筒形の壺かと思われる。

1353は片口の鉢である。初めにやや内湾した口縁を持つ鉢に幅広の口唇を貼りつけて一周させ、胴部の最大径となる部分に半月形の孔をあけ、そこにU字状の口を貼りつけて作っている。

1354～1359は鉢と考えられる。口唇部を幅広く作るが、1354のように平たくなるもの、1355のように丸くやや上がるもの、1356のように微妙に丸味をもってやや上がるもの、1353のように下がるものなどが見られる。また、1358は内面に著しい掻き目が残る播鉢である。

第138図の1359は胴部がやや膨らむ播鉢、1360は壺であろう。1361も底径が小さいことから壺の底部と考えられる。1363と1364は口縁部の張り出し部を指によって抓んで曲げている。器高が不明なため全体の形は明確ではないが、鉢の口縁部ではないかと考えられる。

1365は盤である。外面に異なる幅の細線が上下2段に巡っている。直径から考えると1363や1364も盤かもしれない。1366は橋状の把手の付いたものであり、全体の形状が不明なため絶対的ではないが、把手付きの鉢である可能性も考えられる。

1362は底部が上げ底となる壺か甕と考えられる。

1369は小型の壺とみられる。口縁部は器壁が厚く作られており、底部近くがやや膨らんでおり、内面にはろくろの回転による筋が顕著に残る。

1368は把手付きの容器で、把手には孔が貫通しており、茶家の可能性が考えられる。

1369は甕の底と考えられる。残存する破片の形状から、相当に器高の高いものと推定される。

第139図の1370～1377は土瓶あるいは急須と、その蓋と考えられるものである。

1370は1353に似るが、注ぎ口の上部に把手の付く部分のあることが異なっている。孔は半月状を呈している。

1371は1370とは異なり、小さな円形の孔が3つ穿たれており、また、注ぎ口も円形の筒状のものを上向きに取り付けている。把手の形状はほぼ1370と同様であるが、取り付ける向きがほぼ真っすぐである点が異なっている。

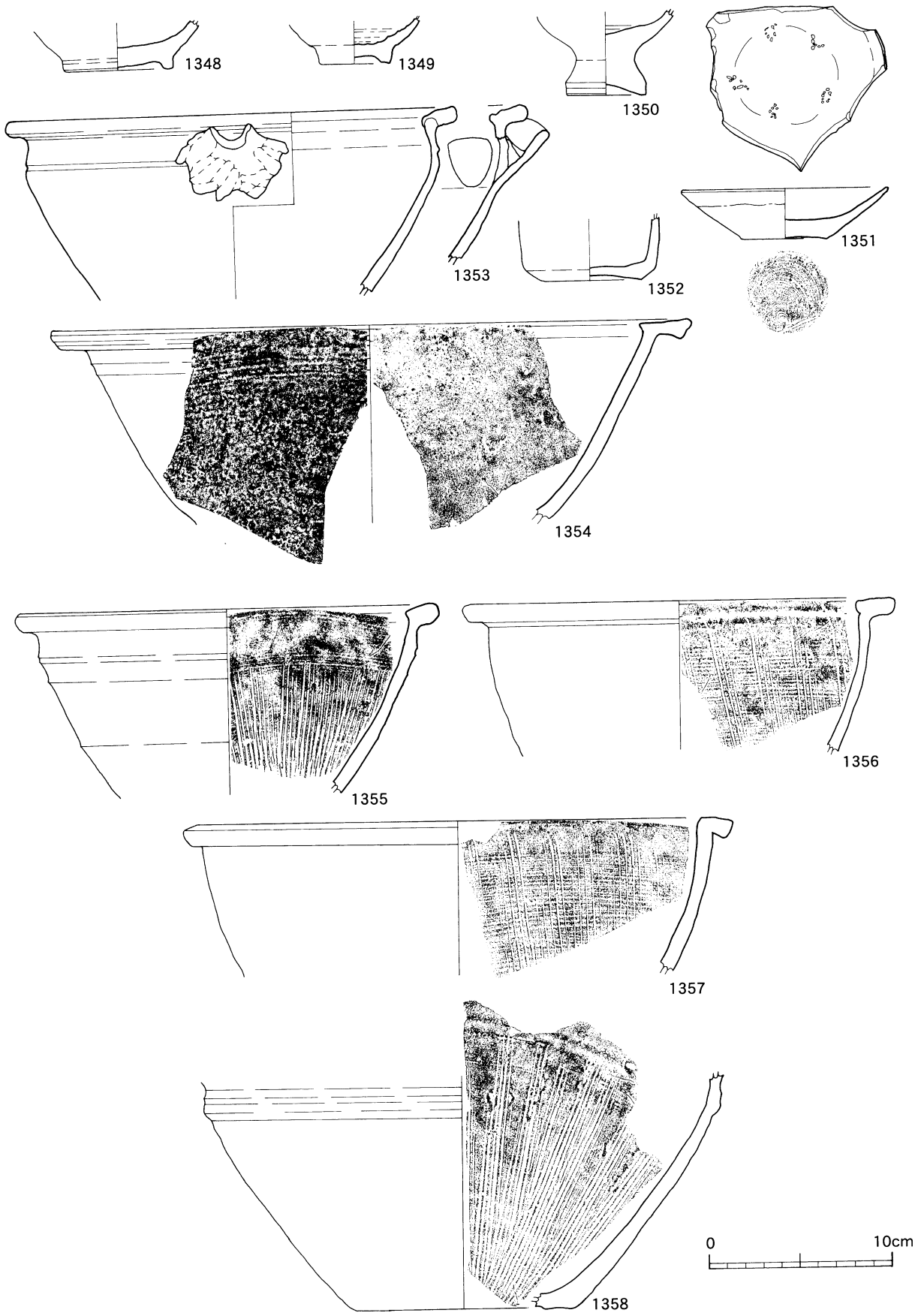
1372・1373は注ぎ口の部分がないためはつきりとはしないが、急須の可能性はある。

1374～1377は蓋である。1374のみ大振りであるが、その他はほとんど同様な大きさ、形状といえよう。

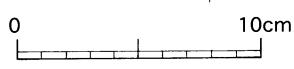
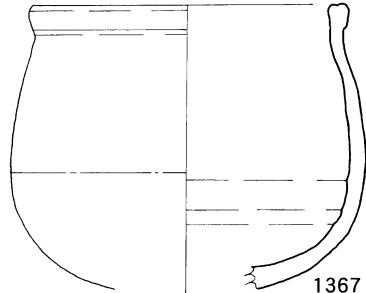
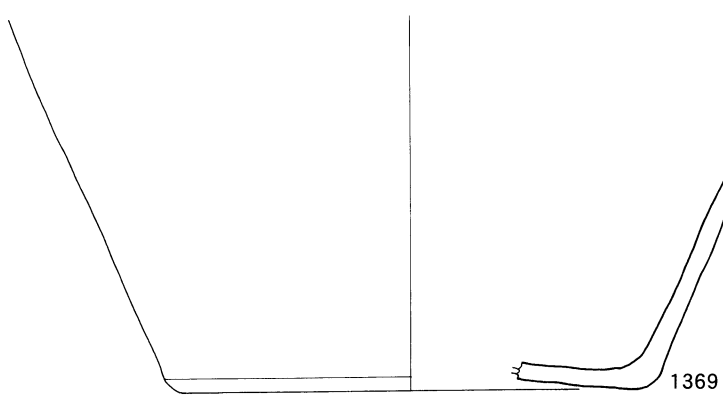
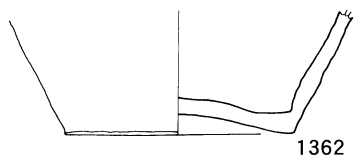
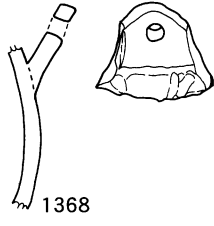
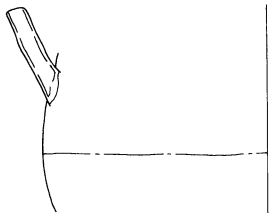
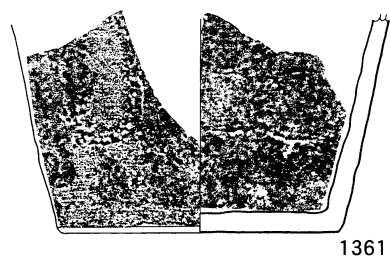
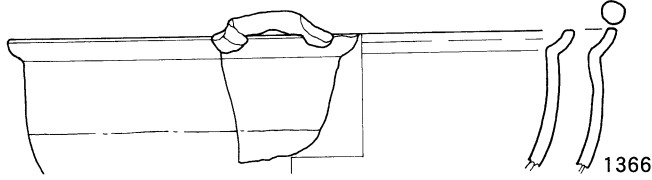
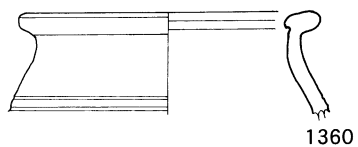
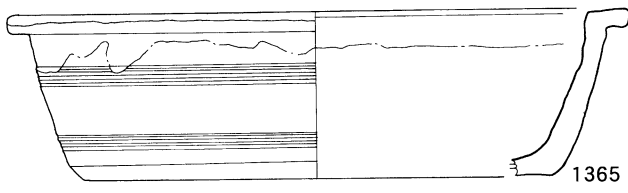
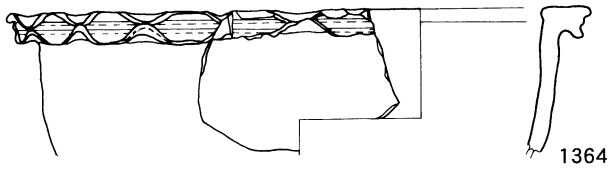
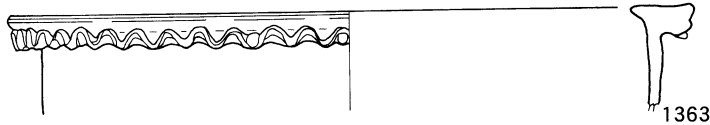
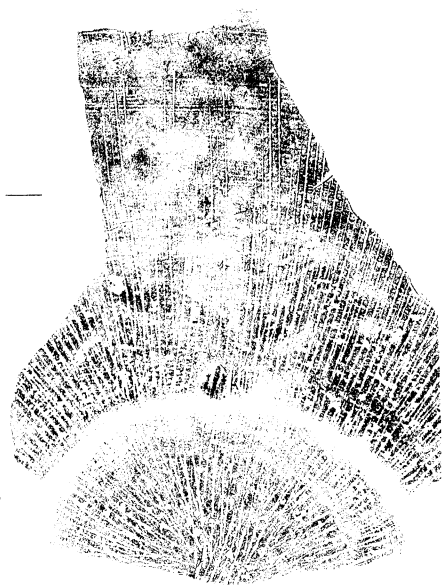
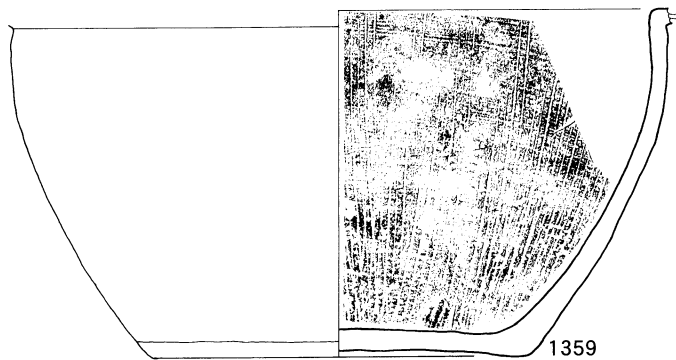
1378は特異な形状をしている。筒形の器形を基本にして、外面下部に輪状の受け部をめぐらしており、灯火具のなかでも灯明受皿（ことぼし）である可能性が高い。

1379～1383は陶器の破片を二次的に加工したもので、通称“メンコ”と呼ばれるものである。無文のものに加えて、1379や1380のような刷毛目の残るものを加工したものも見られる。

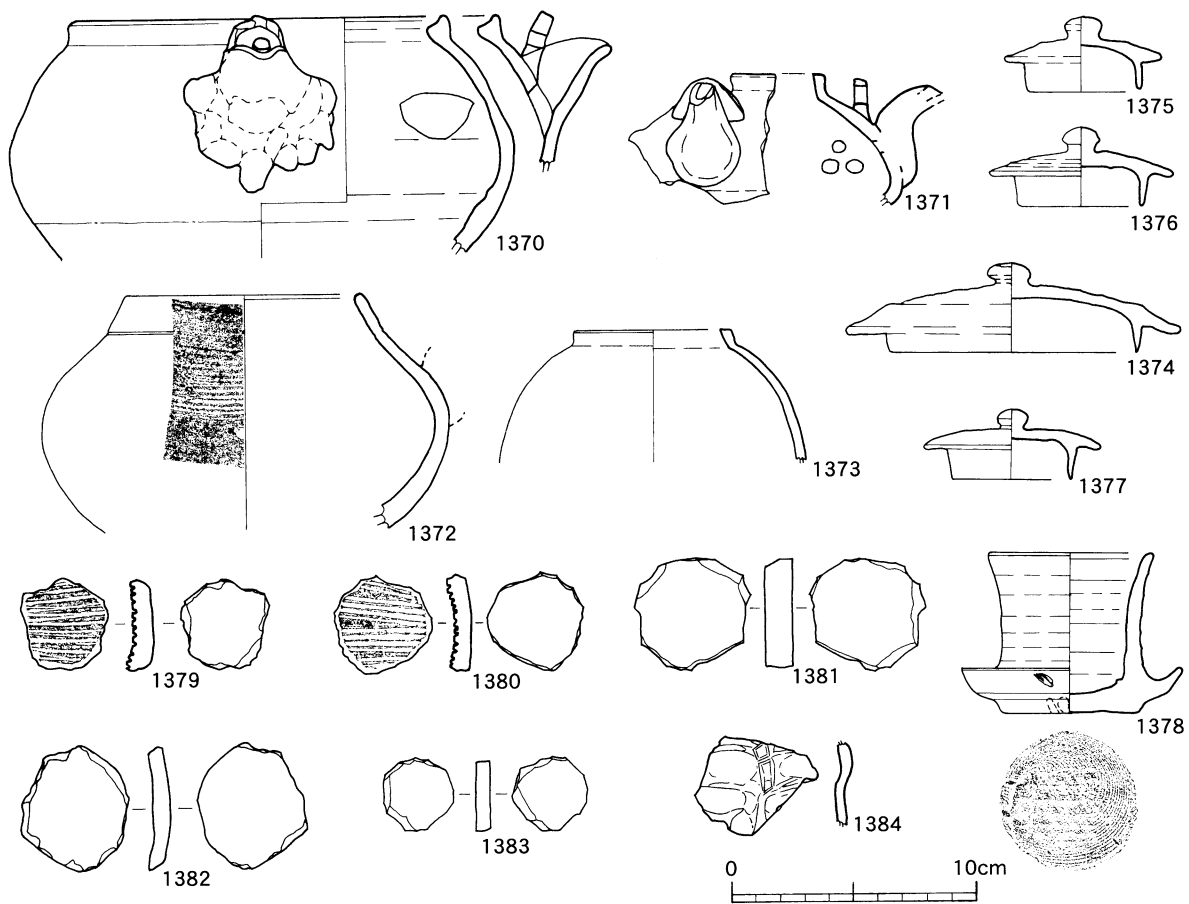
1384は型押しによって製作された土人形の顔の部分と考えられるものである。



第137図 薩摩焼(1)



第138图 薩摩焼(2)



第139図 薩摩焼(3)

5. 五輪塔ほか (第140図 1385~1390)

第140図はその他の遺物を集めたものである。

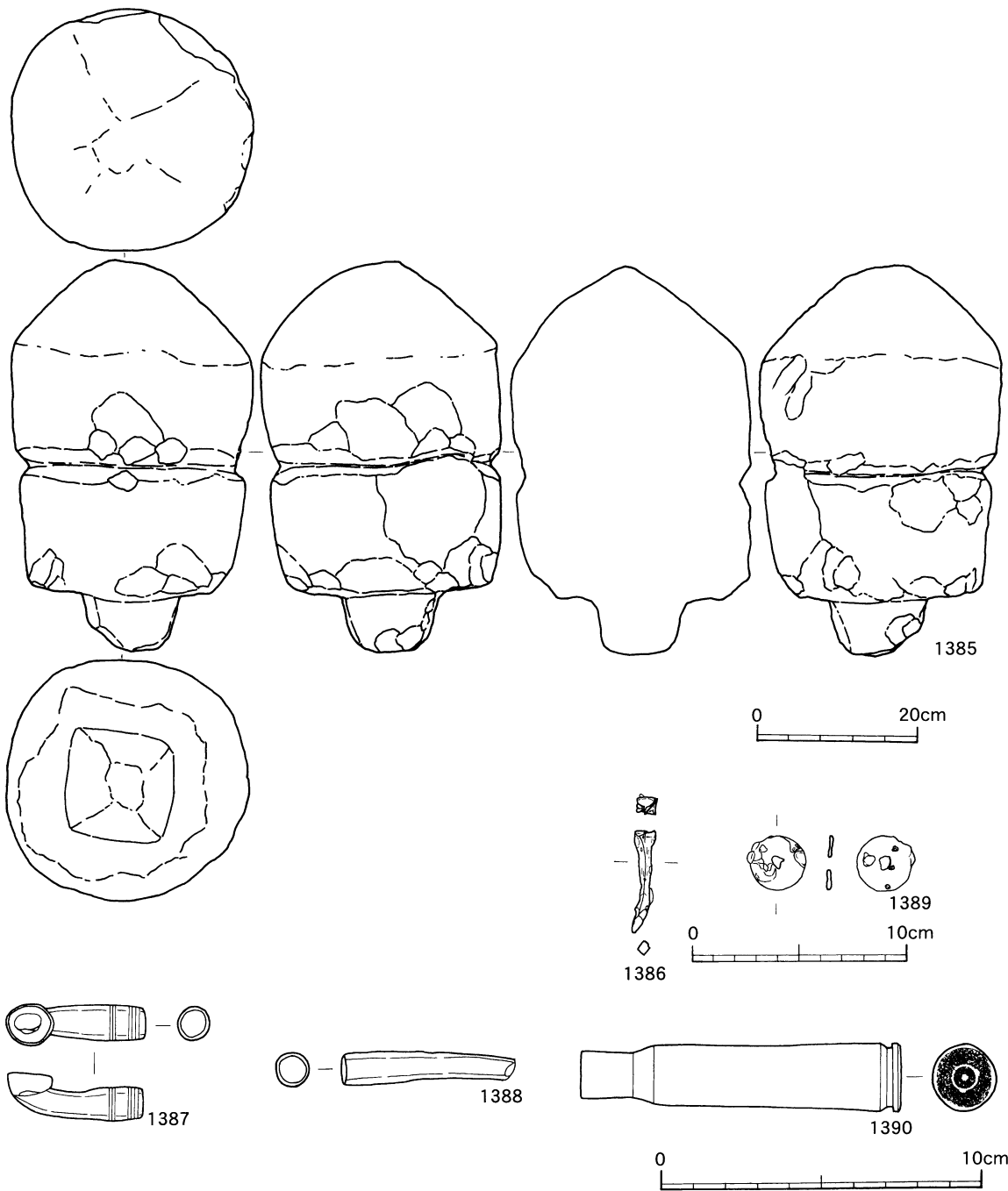
1385は五輪塔の残欠である。中世のものと考えられ、宝珠形をしていることから最上部の空輪であろう。灰色の凝灰岩製で、割合に丁寧な作りである。

1387~1389は表土から出土した金属製品である。

1388は管状の金属製品である。口径が右側に行くほど小さくなっていることから、キセルの吸い口と考えられる。それに対する火口(ひくち・ほくち)に当たる部分が1387と考えられる。青銅製で、金メッキが施してある。

1386は断面が四角形を呈する鉄製品で、赤茶色の錆が固着していることから釘と考えられる。

1390は銅製の筒状のもので、その形状から20mm砲弾の薬莖と考えられる。



第140図 五輪塔・金属器

第32表 近世～近代遺物観察表(1)

遺物番号	区	層	器種	類別	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1326		表	碗	染付	完形	13.10	6.20	4.40	0.90	風水文	136
1327 a			蓋	染付	完形	8.90	3.40	3.90	0.40	外面青磁	136
1327 b			碗	染付	口～胴部	12.10				外面青磁	136
1328			碗	染付	胴～底部			5.40	0.80	広東碗	136
1329			碗	染付	完形	10.30	5.30	3.90	0.70	山水文	136
1330			碗	染付	完形	9.30	4.90	5.20	0.20	植物文	136
1331			小碗	染付	完形	7.40	3.30	2.60	0.40	染色体文	136
1332		表	小碗	薩摩焼	完形	7.20	3.60	2.80	0.60	千鳥・山水文	136
1333			仏飯碗	薩摩焼	完形	7.80	5.00	3.50	0.40		136
1334			皿	染付	胴～底部			4.60	0.80		136
1335	F 7	表	皿	染付	完形	14.00	3.60	8.20	0.50	外面唐草文	136
1336			皿	染付	胴～底部			7.70	0.40	外面唐草文	136
1337	J 7	表	火入	磁器	底部			6.60	0.10		136

第33表 近世～近代遺物観察表(2)

遺物番号	区	層	器種	類別	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	備考	挿図
1338			火入	磁器	底部			7.00	0.50		136
1339			皿	青花	底部			7.90	0.50		136
1340			からから	染付	胴部						136
1341			からから	染付	胴部						136
1342			急須	琉球焼	口～胴部	6.00					136
1343			油壺	染付	胴部						136
1344			蓋	染付	完形	7.00	1.60				136
1345			仏花器	薩摩焼	胴～底部			5.70	0.60	千鳥文	136
1346			碗	青花	口縁部	14.80					136
1347			碗	青花	口縁部						136

薩摩焼

遺物番号	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	高台高(cm)	内面色調	外面色調	備考	挿図
1348	碗	底部			4.80	0.40	暗緑色	暗緑色		137
1349	小皿	底部			3.70	0.40	暗赤褐色	暗緑色・淡緑色	龍門寺系	137
1350	仏飯碗	胴～底部			4.30	0.50	暗緑色	暗緑色		137
1351	皿	完形	11.20	2.70	4.55		茶褐色	暗褐色	龍門寺系	137
1352	壺	胴部～底部			5.20		緑黒褐色	茶褐色		137
1353	片口	口縁部～胴部	24.60				暗緑色	緑黒褐色		137
1354	捏鉢	口縁部～胴部	35.60				暗緑色	暗緑色		137
1355	摺鉢	口縁部～胴部	23.00				暗緑色	暗緑色		137
1356	摺鉢	口縁部～胴部	23.50				暗緑色	暗緑色		137
1357	摺鉢	口縁部～胴部	29.80				暗緑色	暗緑色		137
1358	摺鉢	胴部～底部			12.00		暗緑色	暗緑色		137
1359	摺鉢	胴部～底部			15.20		暗緑色	暗赤褐色		138
1360	短頸壺	口～胴部	12.20				暗緑色	暗緑色		138
1361	壺	底部			10.30		暗緑色	暗緑色		138
1362	壺	底部			9.20		暗緑色	暗緑色		138
1363	鉢	口縁部	28.00				淡緑色	淡緑色		138
1364	鉢	口縁部	24.00				暗緑色	暗緑色		138
1365	浅鉢	口縁部～胴部	23.20	6.70	19.20		淡緑色	暗緑色		138
1366	手付浅鉢	口縁部～胴部	25.40				暗赤褐色	暗赤褐色		138
1367	土鍋	完形	13.20				暗緑色	暗緑褐色		138
1368	手付土鍋	口縁部～胴部					暗緑色	暗赤褐色		138
1369	甕	胴～底部					暗緑色	暗緑色		138
1370	土瓶	口縁部～胴部	15.40				暗緑色	暗緑色		139
1371	急須	口縁部～胴部					暗緑色	暗緑色		139
1372	急須	口縁部～胴部	9.60				暗赤褐色	暗緑褐色		137
1373	急須	口縁部～胴部	6.30				暗緑色	暗緑色		139

蓋

遺物番号	器種	部位	内面色調	外面色調	最大径(cm)	器高(cm)	装着部径(cm)	備考	挿図
1374	土瓶(蓋)	完形	淡緑色	茶褐色	13.60	3.65	10.00		139
1375	急須(蓋)	完形	明茶褐色	茶褐色	6.50	3.00	4.60		139
1376	急須(蓋)	完形	暗茶褐色	暗赤褐色	7.50	3.20	5.10		139
1377	急須(蓋)	完形	暗緑色	茶褐色	7.30	2.85	5.10		139

灯明受皿

遺物番号	器種	部位	内面色調	外面色調	口径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	挿図
1378	灯明具	完形	淡褐色	淡褐色	6.80	6.50	9.00	5.50		139

メンコ等

遺物番号	器種	部位	内面色調	外面色調	最大長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
1379	メンコ	完形	暗緑色	暗緑色	3.70	0.80	15.95	摺鉢転用	139
1380	メンコ	完形	暗緑色	暗緑色	4.00	0.75	16.44	摺鉢転用	139
1381	メンコ	完形	暗褐色	暗褐色	4.50	1.10	29.82	捏鉢等転用	139
1382	メンコ	完形	淡緑色	淡緑色	5.00	0.70	19.76	捏鉢等転用	139
1383	メンコ	完形	暗緑色	暗緑色	2.80	0.65	8.36	捏鉢等転用	139
1384	土人形	部分(顔?)	淡褐色	淡褐色	(3.90)	0.50	9.49	素焼	139

石塔・その他

遺物番号	器種	部位	最大長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考	挿図
1385	石塔	空風輪	24.13	15.10	4600.00		140
1386	釘	完形	4.80	1.00	4.17		140
1387	キセル	雁首	4.22	1.10	8.36		140
1388	キセル	部分	5.40	1.05	7.85		140
1389	金属器		2.55	0.22	2.56		140
1390	薬莢	完形	10.00	2.15	53.83	VII層出土20mm 機銃	140

第5章 ま と め

市ノ原遺跡第1地点は日置郡市来町島内にあり、平成8年度に確認調査、同9年度に本調査が行なわれた。調査により、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代及び中世から近世、近代にかけての遺構・遺物が発見された。以下、その概略を記してまとめとしたい。

1 縄文時代

早期は安山岩を主体とする集石3基が検出されたほか、土器・石器が多量出土した。土器のうちⅠ類は口縁外面にアナガラ属と思われる貝殻腹縁による連続刺突文が見られ、胴部には同一施文具によるとと思われる横位または斜位の条痕が付されていることから田代町荒田原遺跡などから出土するタイプの前平式土器と考えられる。Ⅱ類は、口縁部から内面にかけて丁寧に磨かれ、口唇部は平坦であり、口縁外面に横位あるいは斜位に連続刺突文が巡るものとそうでないものがあり、また胴部に貝殻条痕が施されるものがあることなどから、やはり前平式の一類型と捉えられる。Ⅲ類は、口唇が先細っており、口縁外面に棒状の施文具による連続刺突文が巡り、胴部には貝殻腹縁による浅い条痕が見られることなどから、前平式の一類型と考えられる。Ⅳ類は、早期と考えられる土器群であり、貝殻腹縁による押圧が見られることから、前平式の一類型と考えたい。Ⅴ類は、口縁部がラップ状に開くことや楔の貼り付けが見られるものがあること、角筒形やレモン形があることなどから吉田式と考えられる。Ⅵ類は器面に押引文が施されることから吉田式土器であろう。Ⅶ類は綾杉状の条痕から石坂式、Ⅷ類は口縁部から胴部上部にかけて割合に長い沈線が斜状に交互に施され、下剥峯式であろう。Ⅸ類はⅠ類に似る。Ⅹ類はⅡ類に似ており、前平式のバリエーションで捉えられる。ⅩⅠ類は押型文土器、ⅩⅡ類は平椀式土器であろう。ⅩⅢ類は口縁部に貝殻による押圧と幾何学的線状文帯が見られることから塞ノ神B式と考えられる。

前期以降では安山岩の集積が確認されたのを始め、集石も6基検出された。安山岩の集積は厚さや大きさなどをある程度調整してあり、次の工程を考慮に入れた素材の剥片の集積と考えられる。前期の土器は、刷毛状の文様が器面に広く見られるもので、深浦式土器である。中期の土器は口縁部がキャリパー状を呈していることから春日式と思われる。後期の土器は沈線が口縁部付近にのみ見られることから南福寺式と思われ、胴部に磨消縄文の施されるものは西平式と考えられる。晩期の土器には上加世田式と入佐式および黒川式がある。

石器について見てみると、石鎌には小型の三角鎌、平基式・凹基式の鎌、長脚鎌などがあり、全期にわたっていると考えられる。石匙も横長、縦長の双方あるほか、削器や石槍、石錐、石錘、剥片や石核、それに磨製・打製の石斧、磨石・叩石、石皿などに混じって瑛状耳飾や軽石加工品も出土しており、石鎌と同様に各時期にわたった遺物と考えられる。

2 弥生時代

4基の埋壺が確認された。壺の形状や分布の状態から大きく2つの時期やタイプに分類できる可能性がある。その他の土器は、前期の突帯文系の土器や中期の北九州系とも考えられる土器など、割合に限定されているように思われる。

3 古墳時代

遺構は確認されなかったが、土器が出土した。そのほとんどは在地性の強い成川式土器である。甕はくの字状となる口縁部を持ち、内外両面に刷毛目による器面調整が施されている。底部には高い上げ底となる脚台が付く。壺は口縁部がラッパ状に小さく開き、頸部が締まって胴部はそれほど膨らまず、底は丸底あるいは平底である。他に、鉢や埴（小型丸底壺）、高坏なども見られる。

4 古 代

古代から中世にかけての時代であるが、中心は古代末の平安時代後期頃と考えられる。溝によって区画された平たい台地に多くの柱穴が確認され、15棟の建物として復元された。遺構によっては重複もあることから、1時期に15棟全部が建っていたわけではないが、それでも建物の向きと間隔を考慮すると、9棟から最大で11棟の建物が同時に建っていた可能性が考えられる。その際は、1号建物を中心建物として西に3棟、すぐ東に2棟、南東に離れて1棟、北側に1棟、北西に3棟の合計11棟である。建て替えなどが考えられるその他の建物も、時期差あるいは時間差はそれほどあるようには思えない。

それでは、それぞれの建物の性格はどのように考えられるだろうか。1号は主屋、2号または3号が副屋、14号が離れと推定され、6号及び7号は1号とつながっており、8号は7号にさらに建て増しとしてつなげられたことも考えられる。12号と15号は規模が最も小さいことから土間を持つ倉庫的な収納の建物と推定される。12号は総柱とはなるものの、南北方向の柱間が2間であることから、床貼りの倉庫と考えるのは難しいかもしれない。束柱でもあれば、そうも考えられるものの、それが見られないことから、別な用途を考えるか、または軽量のものを収納する倉庫と考えたほうが良いように思う。地形上の全体的な位置関係からは、西側に隙間を持つ溝で区画され、溝から東側の広い平らなスペースを、主屋を中心とした多くの建物からなる建物群として使用している。北側には離れて14号があるものの、山の傾斜面が広がっていることを考慮に入れると、南側に向いた建物の造りだったと考えられる。そうすると、侵入口は1号建物の南西にあるコンターラインの混んだ部分か、西側から取りついて先ほどの溝と溝との隙間から入る道が考えられるようである。そう考えたとき、最も南側にある3号建物から南側の斜面までの距離は12m程はあることから、建物からのロケーションという意味からも、条件のよい場所の占地ということが言えると思われる。

それでは、これらを総合的に考えたとき、この建物群の性格をどう捉えればよいかという問題に直面する。ここで参考となるのが出土遺物であろう。

この場所からは、古代を中心とした実に数多くの種類の土器を始めとする遺物が出土している。土師器の坏・皿・碗・鉢・甕・甑、内黒土師器、内赤土師器・赤色土師器のほか、越州窯の青磁、緑釉陶器、焼塩土器それに墨書土器などが挙げられる。これらの遺物の中で、内赤土師器や赤色土師器、越州窯青磁、緑釉陶器、焼塩土器、墨書土器などは一般庶民が持つようなものとは考えられず、その多くは官衙など古代における地方の役所か寺院、中世に入ってからには荘園のような当時の公共的な施設で用いられたようなものと考えられる。特に、墨書土器には『厨』の文字のものも見られることから、その感を強くするものである。ほかには、『真』『春』『万』『万万』『八万』や

『安』、それに『得兵』や『仲』『條』『将』などと読めるようなものも出ている。これら『厨』を始めとする多様な文字の出土からは、日常的な文字の使用が必要とされる人たちの存在が考えられる。『厨』銘の墨書土器は、本県ではほかにはいずれも官衙と推定される場所か、郡内を巡回した国司の饗宴の開かれたと推定される場所にのみ出土が知られることから、本遺跡の性格は官衙を中心に考えることが常道と思われる。そうしたとき考えられるのは、本遺跡の所在地の旧所属郡が日置郡であることから、まずは日置郡衙が考えられるが、それは伊集院町に比定されていることから除外される。そうすると、あとは郷家か寺院、または有力豪農の居宅などが考えられることになる。ただ、郷家とするには主となる生産地域の水田とは離れた場所に、しかも背を向けるような方向に所在することが気に掛かる。そうすると、残りは寺院か豪農の居宅との考え方である。寺院として考えられる点は、1号建物を本堂と考え、その周囲にある建物群を庫裏や僧房、住職の居住家などと推定し、さらにその外側の建物を経蔵や倉庫、離れの修行の場などに比定できるように思われることである。また、豪農の居宅としての考え方としては、同じ市来町の安茶ヶ原遺跡で検出された四面廂建物跡と形状やその他の建物の位置関係などが若干類似していることによる。そう考えると、安茶ヶ原遺跡からも『(日置)厨』銘の墨書土器が出土していることから、国司の饗宴の場として豪農の居宅を使用した可能性が共通項として考えられなくはないと思うのである。さらに、東シナ海に注ぐ大里川の河口近くにあることから、津の可能性が指摘するむきもある。最終的には不明とせざるをえない。

5 中世以降

中世の遺物として、青磁や染付、陶器類が出土している。これらの中には、当時としては割合に希少価値のあるものも見られることから、上記の建物群の性格にもよるが、もし寺院か豪農の居宅であったのであれば、中世に至っても（建物の重複関係などから短期間とは考えられるが）その勢力を保っていたことが推定される。

近世の遺構としては12基の墓壙が挙げられる。寛永通寶の六道銭が入るものがあることから、近世の極めて短期間に墓所となっていたと考えられる。近世あるいはそれ以降の遺構として北側の傾斜面に検出された3条の道跡がある。遺跡を含む市ノ原台地と北側に広がる水田とを結ぶ交通路として考えられる。

近世の遺物としては、染付や薩摩焼を主とする陶器、金属製品、それに五輪塔などが挙げられる。特に薩摩焼は、隣町にその窯があることから、割合に多く出土したと考えられる。

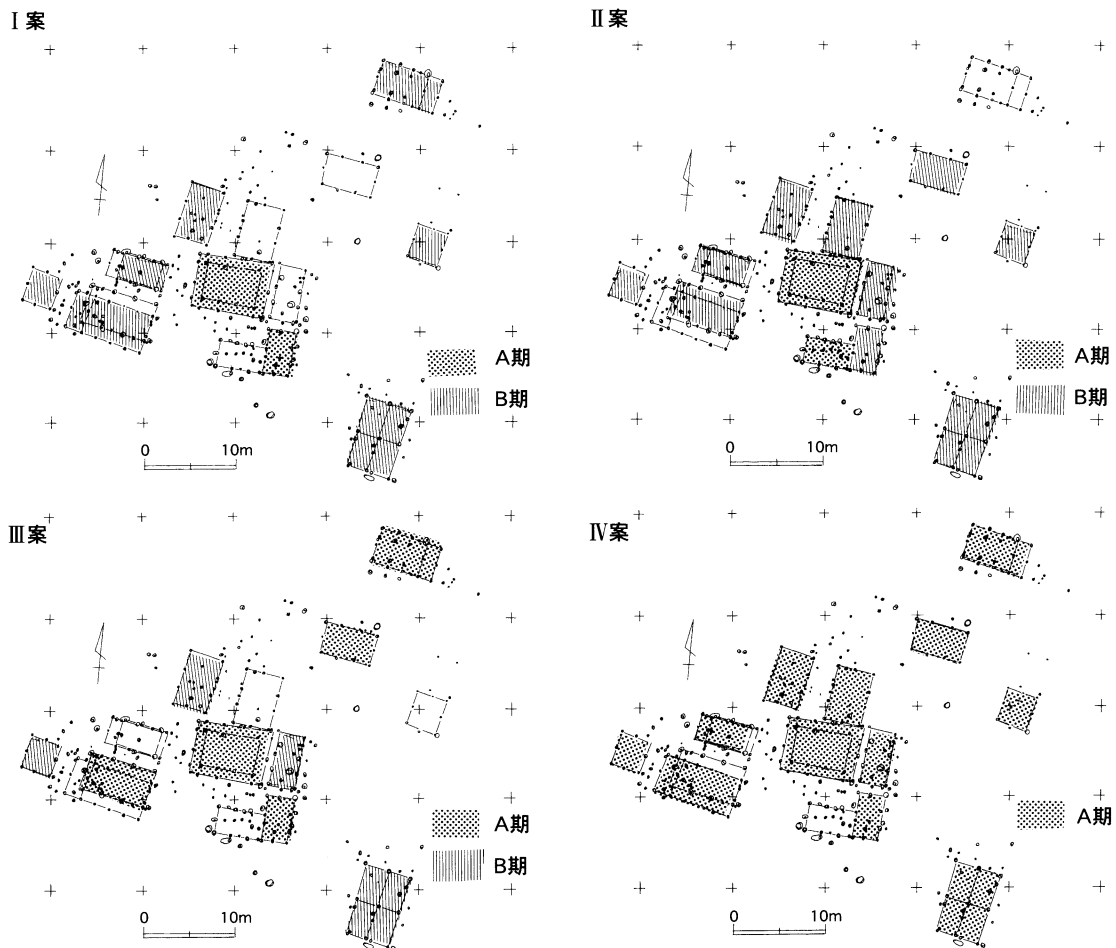
以上、市ノ原遺跡第1地点は、古代が中心と考えられる建物群とその時期の出土遺物が殊に重要とされる遺跡である。建物跡や遺物などから寺院またはこの地方の豪農の居宅かと推定され、寺院・豪農の居宅のいずれであっても、文字の使用を頻繁に行なう階層の人（々）がそこに生活していたことは事実であり、それは薩摩国司が直接間接かは不明としても管轄する場所であったことが想定される。

そして、その勢いは中世の初めごろまでは温存されていたと考えられる。

- 註1 縄文土器の分類については当センター職員新東晃一，黒川忠広のアドバイスを得た。
- 2 古代の土器等については当センター職員池畑耕一，中村和美，橋口亘（現 坊津町教育委員会）のアドバイスを得た。
- 3 墨書・刻書土器の判読については国立歴史民俗博物館副館長平川南氏，宮崎産業経営大学助教授柴田博子氏，ラ・サール学園教諭永山修一氏の指導を受けた。
- 4 古代の建物跡の配置および建物の性格については当センター職員池畑耕一のアドバイスを得た。

古代建物配置（案）模式図

○ 4つの案を提示した。A期，B期は前後関係ではなく，時期を別に考えた方が良くを示している。



第141図 古代建物配置（案）模式図

鹿児島県立埋蔵文化財センター

市ノ原遺跡第1地点出土炭化物の 14C年代測定報告

貴，鹿児島県立埋蔵文化財センター殿より御依頼のありました「市ノ原遺跡第1地点出土炭化物の14C年代測定」が終了いたしましたので，その結果を御報告申し上げます。

パリノ・サーヴェイ株式会社

市ノ原遺跡放射性炭素年代測定および樹種同定結果報告

<目次>

はじめに	p.206
1. 試料	p.206
2. 分析方法	p.206
(1) 放射性炭素年代測定	
(2) 樹種同定	
3. 結果	p.207
(1) 放射性炭素年代測定	
(2) 樹種同定	
4. 考察	p.207

<図表・図版一覧>

表1 放射性炭素年代測定結果

図版1 炭化材

はじめに

市ノ原遺跡の発掘調査では、9世紀後半～10世紀前半頃と考えられる土師器や須恵器などの遺物が出土し、また同時代と考えられる掘立柱遺構が検出されている。本報告では、これらの遺物や遺構に関連していると考えられる炭化物について放射性炭素年代測定を行うことにより、土器型式より推定される掘立柱遺構の形成時期を検証する。なお、ここでは炭化物の樹種同定も行い、当時の植生や植物利用状況に関する資料とする。

1. 試料

試料は、炭化物Aと炭化物Bの2点である。炭化物Aは土坑内より土師器の椀と坏に挟まれた状態で出土し、炭化物Bは掘立柱遺構の柱穴付近の土坑内より出土した。特に炭化物Bは、掘立柱の柱材が炭化した可能性もあり、掘立柱遺構の年代を決める重要な手がかりとなる。しかし、炭化物Bが採取された土坑内の埋土については、その由来が判別し難いため、縄文時代まで遡る可能性もある。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

a) 前処理

乾燥、粉碎したものを水に入れて、浮上してきたものを除去した。通常は、次に水酸化ナトリウム溶液で煮沸し、室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去するが、今回はどちらの試料も少量であるためにこの作業を省略した。次に濃塩酸を加えて煮沸した。室温まで冷却した後、傾斜法により除去した。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させた。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収した。

b) 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン3ml（足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して3mlとした）にシンチレーターを含むベンゼン2mlを加えたものを測定試料とした。

c) 測定

測定は、液体シンチレーションカウンターにより、1回の測定時間50分間を20回繰返し計1,000分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料を一緒に測定した。

d) 計算

放射性炭素の半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用した。

(2) 樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 分析結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果を表1に示す。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料		年代値 年前	誤差		Lab No.
試料名	性状		+	-	
炭化物 A	炭化材	990	190	180	PAL-231
炭化物 B	炭化材	1,120	220	220	PAL-232

注. (1) 年代値:1,950年を基点とした値。

(2) 誤差:測定誤差 2σ (測定値の95%が入る範囲) を年代値に換算した値。

(3) PAL:パリノ・サーヴェイ(株)で測定。

(2) 樹種同定

炭化材はいずれもコナラ属アカガシ亜属に同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。

4. 考察

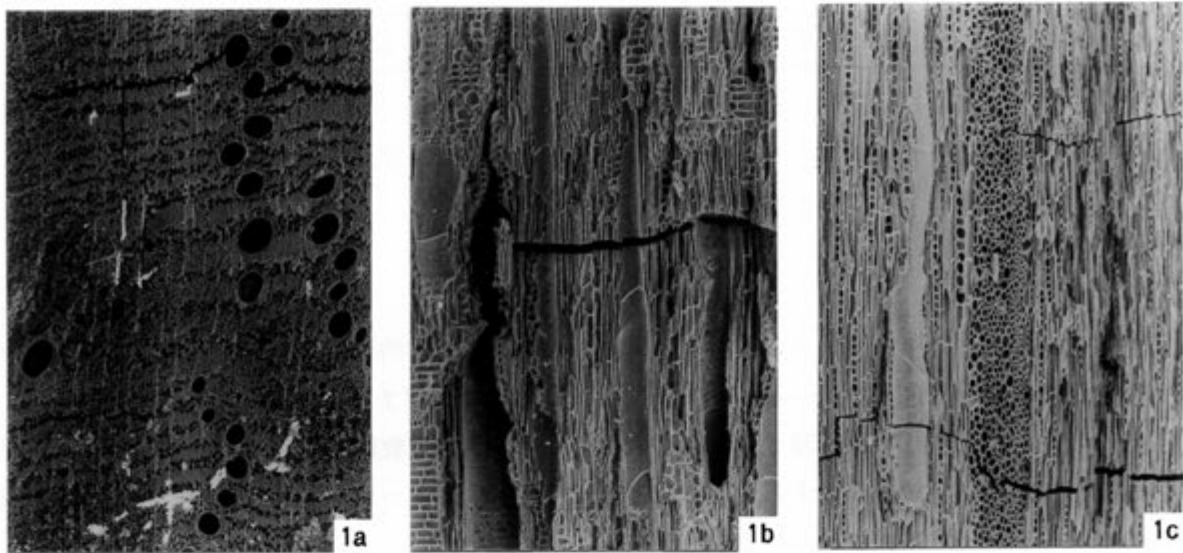
今回の年代値をそのまま暦年に直すと炭化物AはA. D. 960年、炭化物BはA. D. 830年であり、土器から推定された9世紀後半～10世紀前半という年代観にほぼ一致すると考えて良い。また、炭化物Aは炭化物Bより100年くらい新しいものである可能性もある。これは、本遺跡の継続期間に関連する資料になるかもしれない。より詳細な掘立柱遺構の年代の特定にはより多くの年代測定資料を得るなどの検討が必要であろう。

さて、今回の測定年代を10年単位で考えるならば、どちらも土器の年代観とは数十年のずれがある。これをあえて土器の年代観に一致すると述べたのは、暦年代と測定年代との間にずれが存在するからである。これは、良く知られていることであるが、過去の大気中のCO₂における¹⁴Cの濃度が現在のそれとは同一でないことや年代測定の計算に用いられている半減期の年代がその後の実験により実際の半減期とは2%ほど異なっていることなどの理由により、測定年代と暦年代は必ずし

も一致しない。暦年代への補正は、年輪年代のわかっている樹木について年輪毎の放射性炭素年代を測り、暦年代と測定年代とを対応させた曲線を用いることによって行われるが、現在はまだ様々な曲線が存在し、多くの問題点も含んでいる。したがって、ここでは特に補正は行わないが、数十年ぐらいの幅は補正值の中に含まれてしまう場合が多い。現時点では、遺跡の発掘状況などから、上述のような評価でよいと考えるが、今後の暦年代補正の研究の進展によっては、本測定値の評価も変わる可能性がある。

ところで、同定されたアカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹の主構成種の一つであり、現在の鹿児島県にも広く分布している。この結果から、古代においても周辺はアカガシ亜属などの常緑広葉樹が生育する、現在とよく似た植生であったことが推定される。また、アカガシ亜属の木材は、比較的強度が高いことから、構築材等としても適材といえる。したがって、炭化物Bが掘立柱建物の柱材としても矛盾はなく、強度の高い木材を柱材として選択していた可能性が指摘できる。

図版1 炭化材



1. コナラ属アカガシ亜属（炭化物A）
a：木口，b：柁目，c：板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

東市来町市ノ原遺跡の近世土壌墓人骨について

峰 和治・竹中正巳・小片丘彦

(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ)

1. はじめに

平成10年1月、鹿児島県日置郡市来町大里字上ノ原前所在の市ノ原遺跡第1地点の発掘調査で、12基の土壌墓から各1体の人骨が出土した(表1)。所属年代は、副葬された六道銭などから江戸時代とみられている。腐食の進んだ人骨が多かったが、南部九州近世人の形質を知るための貴重な追加資料である。各個体についての基本所見を記載した後、九州における近世人について若干の人類学的考察を加えた。

2. 基本所見

[1号土壌：性別不詳・成人]

左の側頭骨および前頭骨を含むごく少量の頭蓋破片が遺存するだけである。側頭骨の大きさから成人と推測される。

[2号土壌：女性・壮年]

頭蓋と体肢骨が遺存しており、保存不良ながらいくつかの主要な項目が計測可能であった。頭蓋長幅示数は81.5(最大長173mm, 最大幅141mm)と短頭型に属す。右大腿骨の中央断面示数は89.3, 上骨体断面示数は80.6, 右脛骨の中央断面示数は70.4であり、柱状性や扁平性は認められない。

[3号土壌：男性・熟年]

ほぼ全身の骨格が遺存する。大腿骨頭垂直径は47mmと大きく、身長も157~158cm程度と推測される。右大腿骨の骨体中央断面示数は90.3で、柱状形成はない。特記所見として腰椎から仙骨にわたる強い変形性脊椎症が認められ、椎体辺縁の骨棘が增生して強直をきたしている。また、右寛骨にも多くの病的変形があり、脊柱の病変と関連している可能性が高い。

[4号土壌：性別不詳・小児(7歳)]

保存不良であるが、ほぼ全身の骨格が遺存する。歯列の状態や長骨骨端の化骨程度から7歳前後の小児と推定される。

[5号土壌：男性・成人]

頭蓋冠と3歯の歯冠片、およびごく少量の下肢骨破片が遺存する。頭蓋冠の頑丈さや咬耗の少なさから成人男性と推測される。

[6号土壌：男性・壮年]

保存状態の比較的よい頭蓋冠と下肢の主要骨が遺存する。臼歯部の咬耗がやや進んでいるが、頭

蓋の縫合に閉鎖は見られない。右脛骨の栄養孔位断面示数は77.8で、扁平性は認められない。わずかに骨端を欠く左脛骨から、155cm内外の身長と推測される。

[7号土壙：性別不詳・成人]

右側頭骨を含む、ごく少量の頭蓋破片だけが遺存する。

[8号土壙：男性・熟年]

頭蓋冠の破片と下肢を主体とした少量の体肢骨が遺存する。緻密質は非常に薄く、全身的に骨梁が粗である。体肢関節面の辺縁に骨増生が見られる。頭蓋冠の縫合閉鎖が一部始まっている。頭蓋の上面観からは長頭傾向が見てとれる。右大腿骨頭垂直径は47mmと大きいですが、骨体中央の柱状形成はみられない。

[9号土壙：性別不詳・壮年]

ごく少量の頭蓋破片と数本の歯が遺存するだけである。左の上顎第3大臼歯を含むこと、臼歯の咬耗がある程度進んでいることから壮年と推測されるが、性別判定の決め手には欠ける。

[10号土壙：女性・壮年]

頭蓋冠およびごく少量の体肢骨破片が遺存する。頭蓋は全体的に小さく、前腕骨体も華奢である。計測はできないものの、脳頭蓋の上面観からは長頭に傾くことが見てとれる。

[11号土壙：男性・壮年]

頭蓋冠およびごく少量の体肢骨破片が遺存する。10号土壙人骨と同じく、長頭であろう。

[12号土壙：女性・壮年]

上下顎7歯の歯冠と下肢骨破片が遺存する。右大腿骨体の細さから女性、歯根の形成度や咬耗の進行度から壮年と推測される。

3. 形質のまとめと考察

市ノ原遺跡出土の近世人骨12体からは、保存不良ながらいくつかの特徴が見てとれた。体格は全体に小柄であるが、中にはやや身長が高いと推測される男性が含まれていた。また、短頭の1例を含むものの、頭蓋の上面観は前后的に長い傾向があり、現代人に比べれば明らかに長頭的であった。体肢については、大腿骨の柱状性や脛骨の扁平性は認められなかった。なお、顔面部や上肢に関しては、破損のためほとんど所見が得られなかった。

日本人の形質が近世以降、現代に向かって急激に変化してきたことはよく知られているが、同じ近世人の間でも地域によってかなり違った特徴をもつことが骨格資料の研究で明らかになりつつある。これまで江戸時代の人骨は、大量出土をみることの多い大都市部に集中する傾向があつて、それ以外の地域の住民についてはまだ不明な点が多いと言わざるをえない。形質変化の要因を明らか

にしていくためには、時代変化を追究すると同時に、地域差や異なる環境のもとに暮らす人々の間にどのような違いがみられるかを明確にしておく必要がある。

近年、九州北部の各所でかなりまとまった数の近世墓が調査されており、前記の課題を検討していくための有力な手掛かりが得られるものと期待されている。一方、南部九州では今のところ、保存状態のよい人骨を出土する大規模な墓地の調査は枕崎市松之尾遺跡（松下，1981）の他に例がない。少数の散発的な資料をまとめることには問題も多いが、大まかに当地域での傾向を把握することを目的として、いくつかの遺跡から発掘された江戸時代の資料を集計して、他地域の同時代人と比較を行った。資料は市ノ原近世墓のほかに、筆者らが直接携わった都城市貴船寺跡、大口市王城古墓、串良町稲村城跡、南種子町広田近世墓出土のものである。これらは、すべて土壙墓から検出されており、木棺や早桶の痕跡が残っている場合もあった。所属階層を判断する決め手には欠けるが、副葬品は六道銭などを除いて全般にわずかであり、少なくとも武士階級ではない。詳細な計測値は省略するが、概要はほぼ次のようにまとめられる。

a. 頭蓋の形質

南部九州近世人の頭蓋長幅示数は男女とも長頭型に属す。男性を比較した場合、熊本県の桑島ほどではないが、枕崎市の松之尾（中世末～近世）や山口県の吉母浜（中世）に匹敵する。短頭性の強い南部九州の現代人はもとより、大坂や江戸の同時代人との差が目立つ。また、バジオン・ブレグマ高が低く、長高示数や幅高示数も小さい。

顔面部では、頬骨弓幅などの幅径が広く、高径が低いいため、顔示数や上顔示数は低・広顔の度が強い。やや歯槽性突顎の傾向が見られる。鼻根部はそれほど扁平でない。

b. 体肢骨の形質

女性の計測例数が極めて少ないので、男性のみの比較を行った。とはいえ、男性の場合も例数が少なく代表性には問題があるが、長径は比較群と同等以上の大きさをもつ。骨体の幅径や周径に比較群と目立った違いはない。上腕骨や脛骨骨幹の扁平性は認められない。大腿骨骨幹の柱状性は弱い、上部はやや扁平である。大腿骨から求めた推定身長は男性160.8cm（2例）、女性は147.9cm（2例）である。

c. 小括

以上、南部九州5か所の近世人骨を集計して比較した結果は次のようにまとめられる。

- ①脳頭蓋は長頭性が強く、頭高は低い。
- ②顔面部は低・広顔の度が強い。やや歯槽性突顎の傾向が見られるが、鼻根部はさほど扁平ではない。
- ③体肢骨は近世人集団の中では長いほうである。骨幹の幅径に比較群との違いは目立たない。骨幹断面の形状では、上腕骨や脛骨の扁平性はなく、大腿骨の柱状性も弱い。

南部九州近世人に見られた顕著な特徴は長頭性で、北部九州でもこうした傾向にあることが既に

指摘されている（中橋，1987）。ただし，南部九州においてはその度合いが全般に強く，低・広顔性と併せて中世の特徴が他の地域よりも色濃く残っていた可能性を示唆している。頭蓋9項目を用いて南部九州近世人からのペンローズ形態距離を算出してみると，比較群の中では同一地域の松之尾中・近世人が最も近いという結果となった。次いで中世の吉母浜がくるが，大坂や江戸の近世人とともに桑島は少し離れる。最も距離が大きいのは南部九州の現代人である。北部九州では少なくとも明治・大正期まで長頭傾向が遺存したと考えられるが，南部九州人については江戸時代における長頭傾向から一転して，近代以降は強い短頭性を示すことが生体計測の立場からしばしば指摘されてきた。こうした形質変化の方向性の違いが九州の南北で認められる。その具体的な要因は不明であるが，南部九州でいつ頃から短頭化が急激に進行し出すのかを明らかにできれば，ひとつの手掛かりとなろう。

<主要参考文献>

松下孝幸，1981：鹿児島県松之尾遺跡出土の人『松之尾遺跡』（枕崎市），pp. 215-228.

中橋孝博，1987：福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨．人類学雑誌 95：89-106.

表1 市ノ原遺跡第1地点出土の近世人骨資料

土壙番号	性	推定年齢	特記所見
1号	不詳	成人	腰椎から仙骨にわたる強度の変形性脊椎症
2号	女性	壮年	
3号	男性	熟年	
4号	不詳	小児（7歳）	
5号	男性	成人	
6号	男性	壮年	
7号	不詳	成人	
8号	男性	熟年	
9号	不詳	壮年	
10号	女性	壮年	
11号	男性	壮年	
12号	女性	壮年	

註：年齢は20歳以上を成人とし，壮年は20～40歳，熟年は40～60歳の範囲を目安とする。

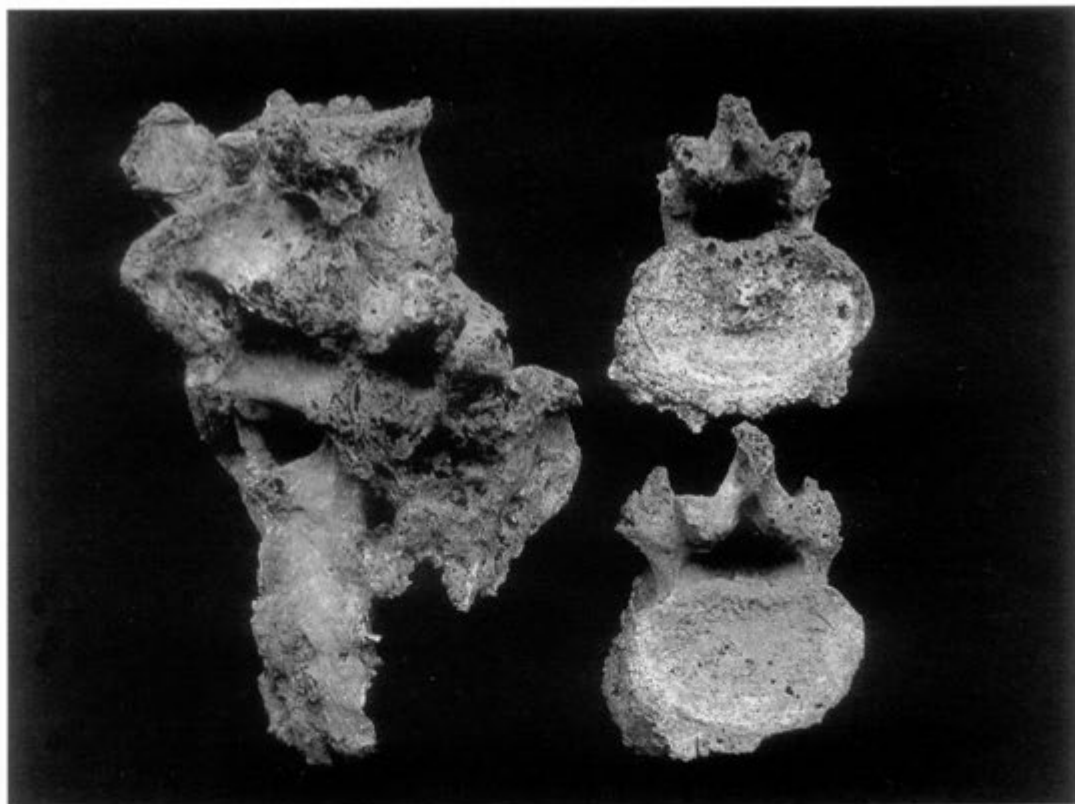
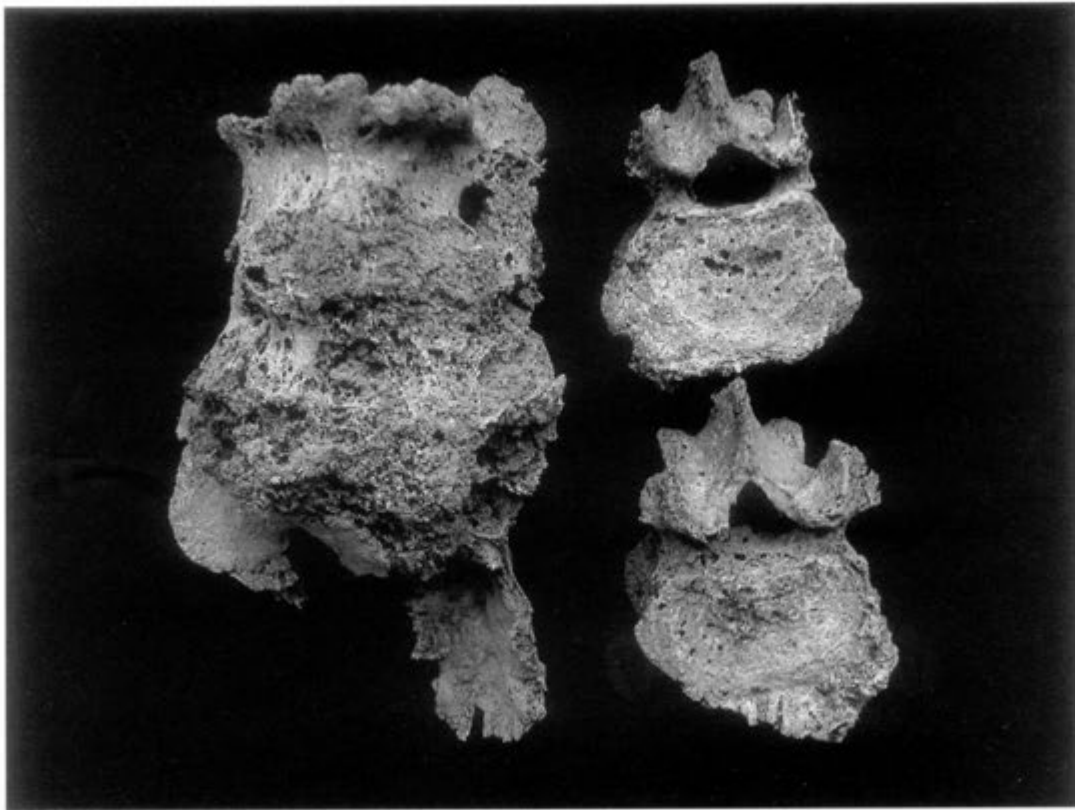


写真1 腰仙椎部の強直性病変（3号土壙人骨，男性・熟年）
上：第2，3腰椎上面と第4腰椎～仙骨の前面
下：同 後面

写 真 图 版



市ノ原遺跡第1地点遠景



土層



8号集石



4号集石



7号集石



2号集石



3号集石



9号集石



5号集石



6号集石



安山岩集積遺構



貝殻条痕文土器出土状況



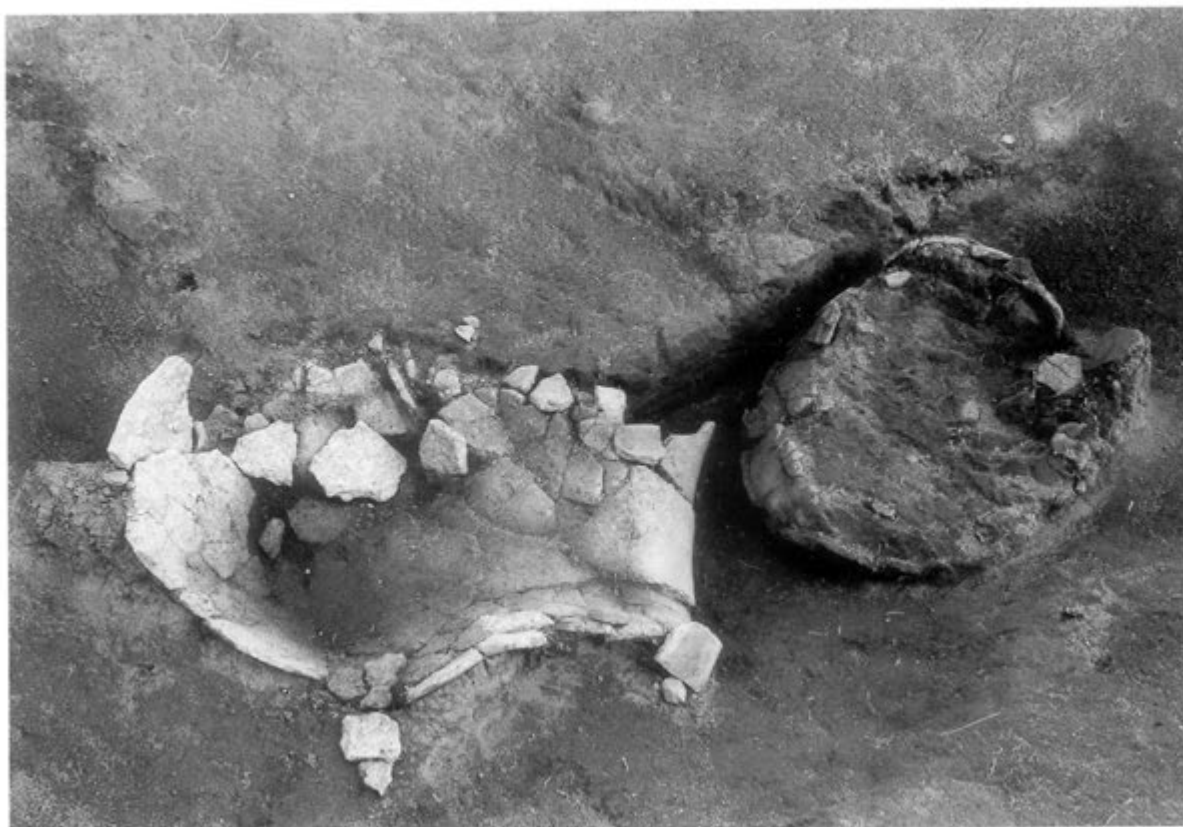
山形押型文土器出土状況



玢状耳飾出土状況



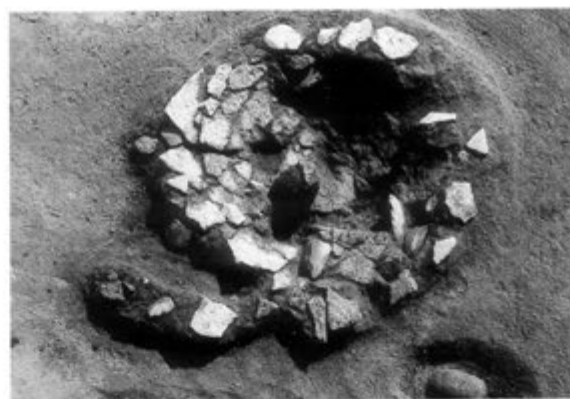
石匙出土状況



埋壺C・D検出状況



弥生土器出土状況



埋壺B検出状況



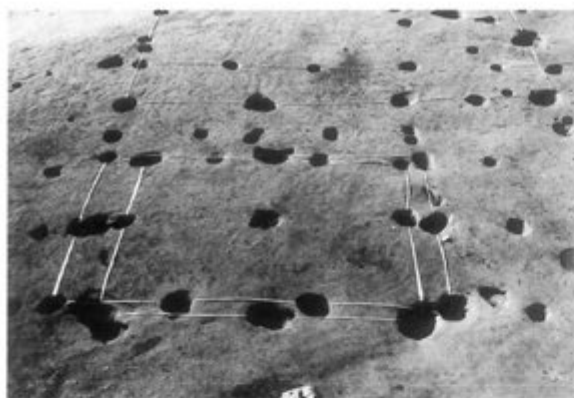
埋壺A検出状況



成川式土器出土状況



古代掘立柱建物跡検出状況



古代掘立柱建物跡検出状況



古代掘立柱建物跡検出状況



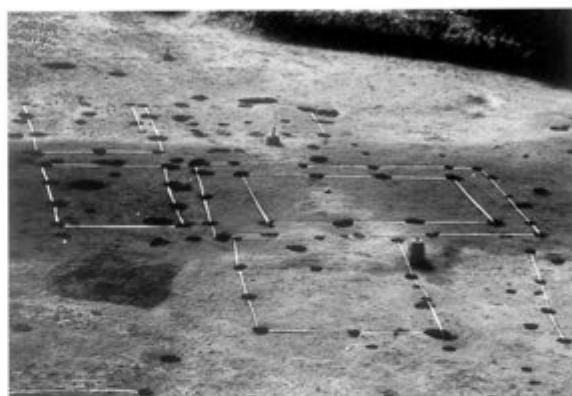
古代掘立柱建物跡検出状況



1号建物跡検出状況



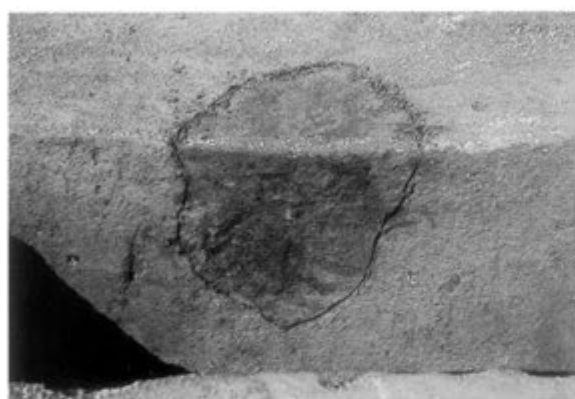
12号建物跡検出状況



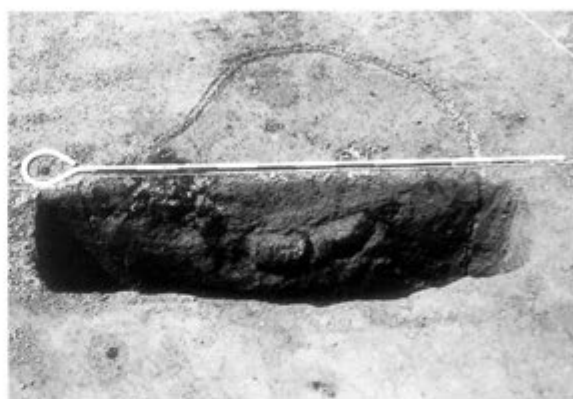
13号建物跡検出状況



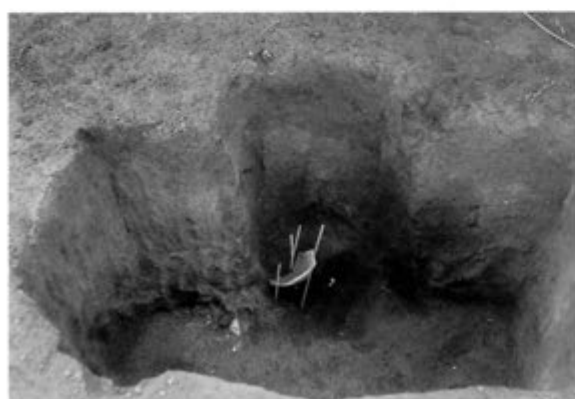
J3・4区溝検出状況



15号建物跡柱穴4断面



G 4区柱穴内炭化物検出状況



柱穴内遺物検出状況



柱穴内遺物検出状況



J 2区土師器碗出土状況



J 5区土師器出土状況



K 3区土師器出土状況



16区土師器皿出土状況



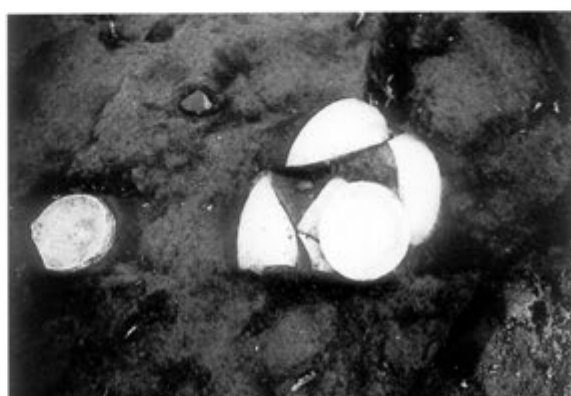
F 7区土師器坏出土状況



K 3区土師器出土状況



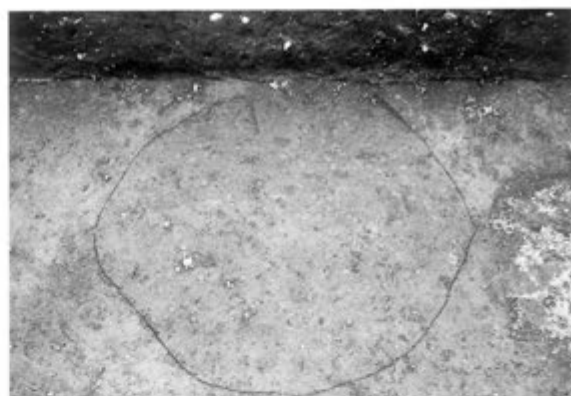
J 5区土師器碗出土状況



土師器碗出土状況



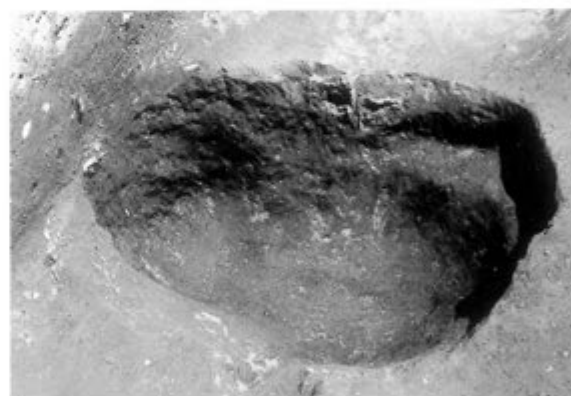
15区Ⅱ層遺物出土状況



2号土坑検出状況



2号土坑内遺物検出状況



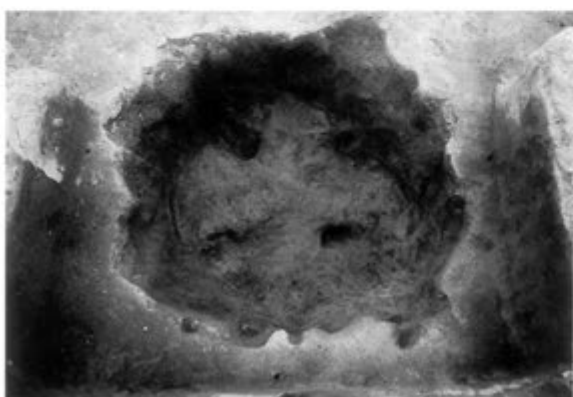
2号土坑完掘状況



3号土坑検出状況



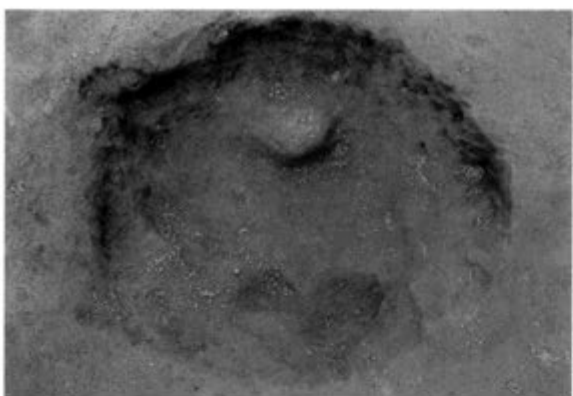
3号土坑内遺物検出状況



3号土坑完掘状況



4号土坑内遺物検出状況



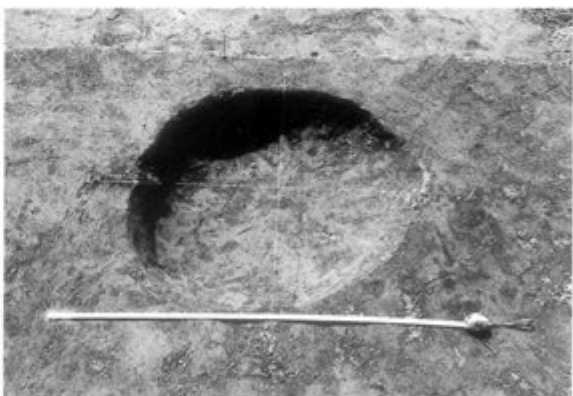
4号土坑完掘状況



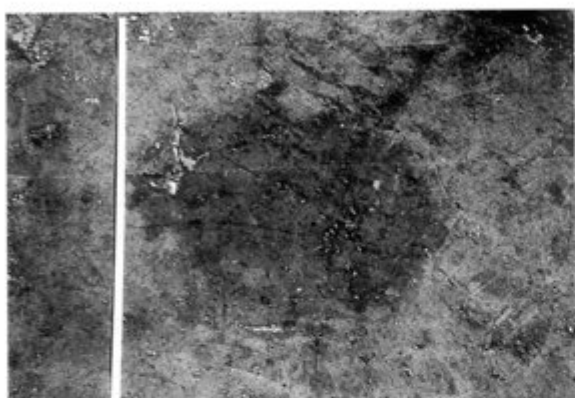
5号土坑完掘状況



8号土坑完掘状況



11号土坑完掘状況



7号土坑检出状况



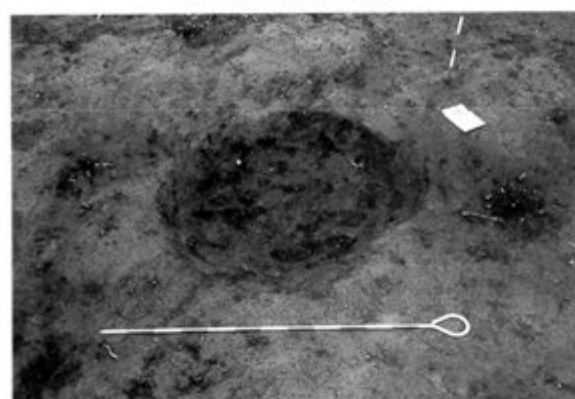
7号土坑完掘状况



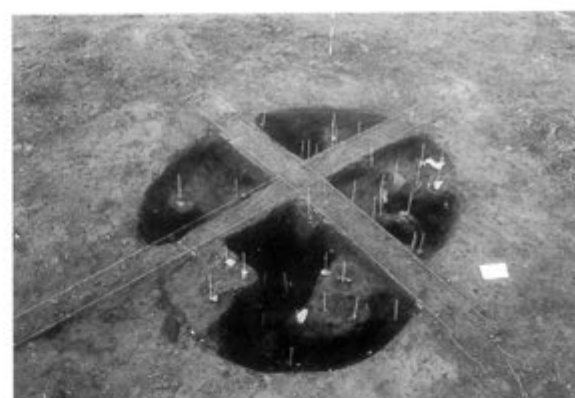
15号土坑检出状况



16号土坑完掘状况



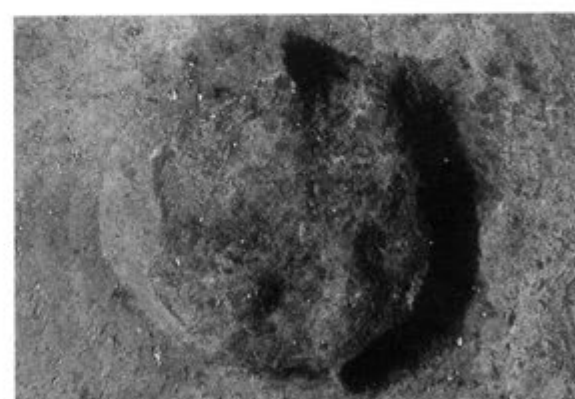
19号土坑完掘状况



21号土坑完掘状况



18号土坑检出状况



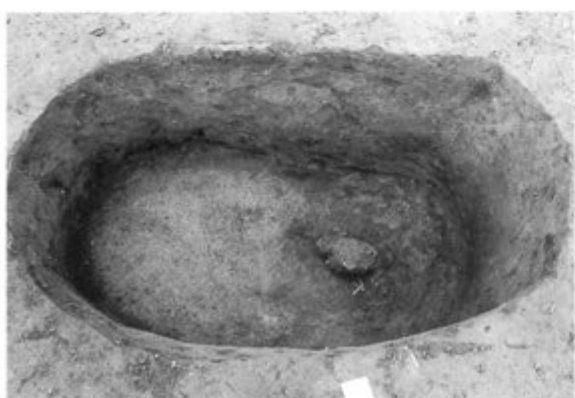
18号土坑完掘状况



近世墓壙調査風景



近世墓壙検出状況



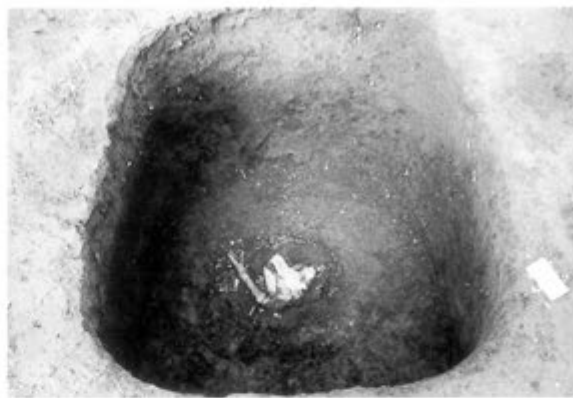
1号墓壙完掘状況



2号墓壙人骨検出状況



3号墓壙人骨検出状況



4号墓壙人骨検出状況



5号墓壙人骨検出状況



6号墓壙人骨検出状況



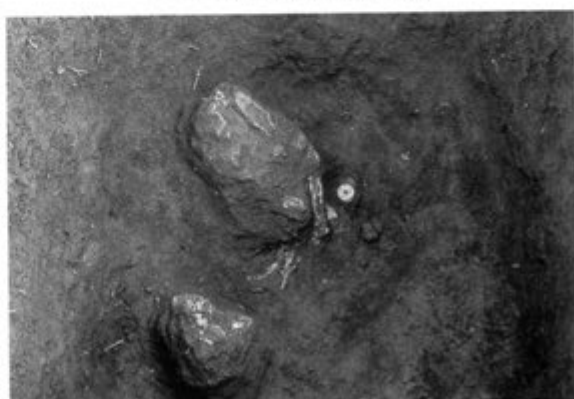
7号墓塚完掘状況



8号墓塚人骨検出状況



10号墓塚完掘状況



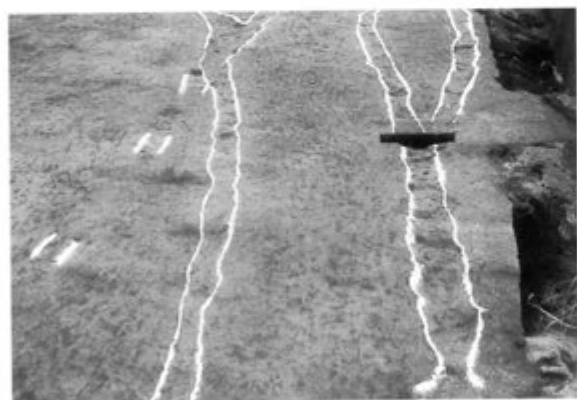
11号墓塚人骨検出状況



12号墓塚人骨検出状況



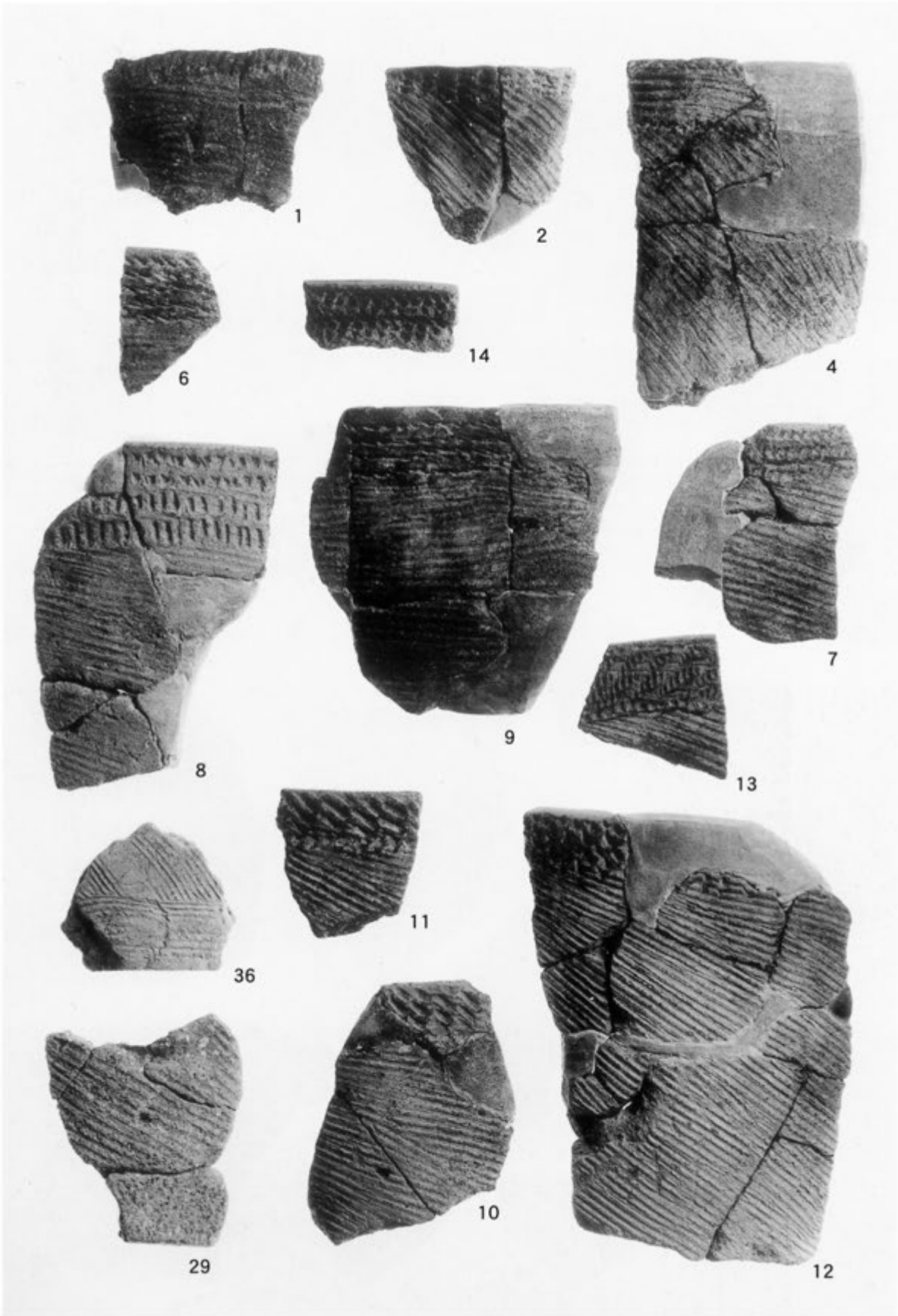
人骨取り上げ風景

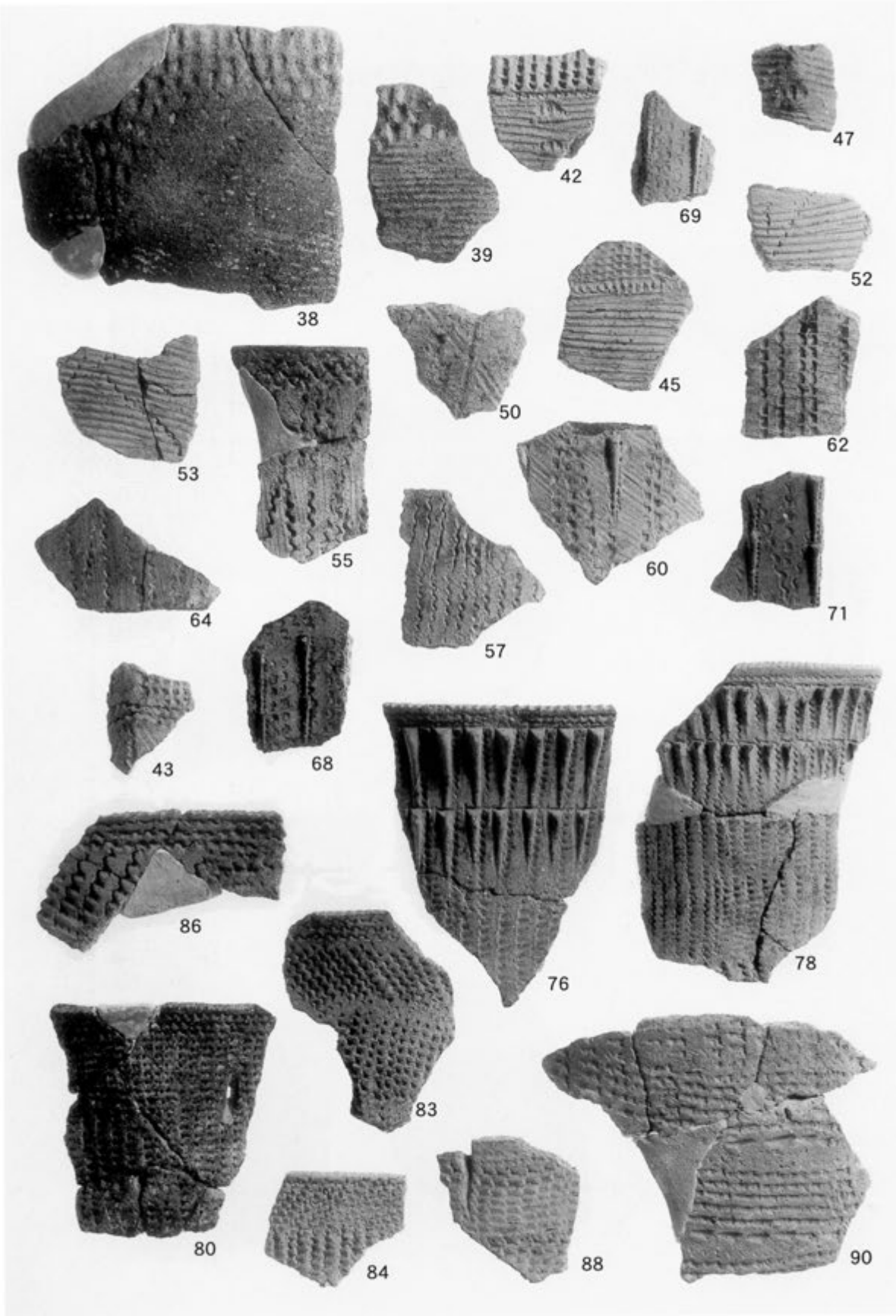


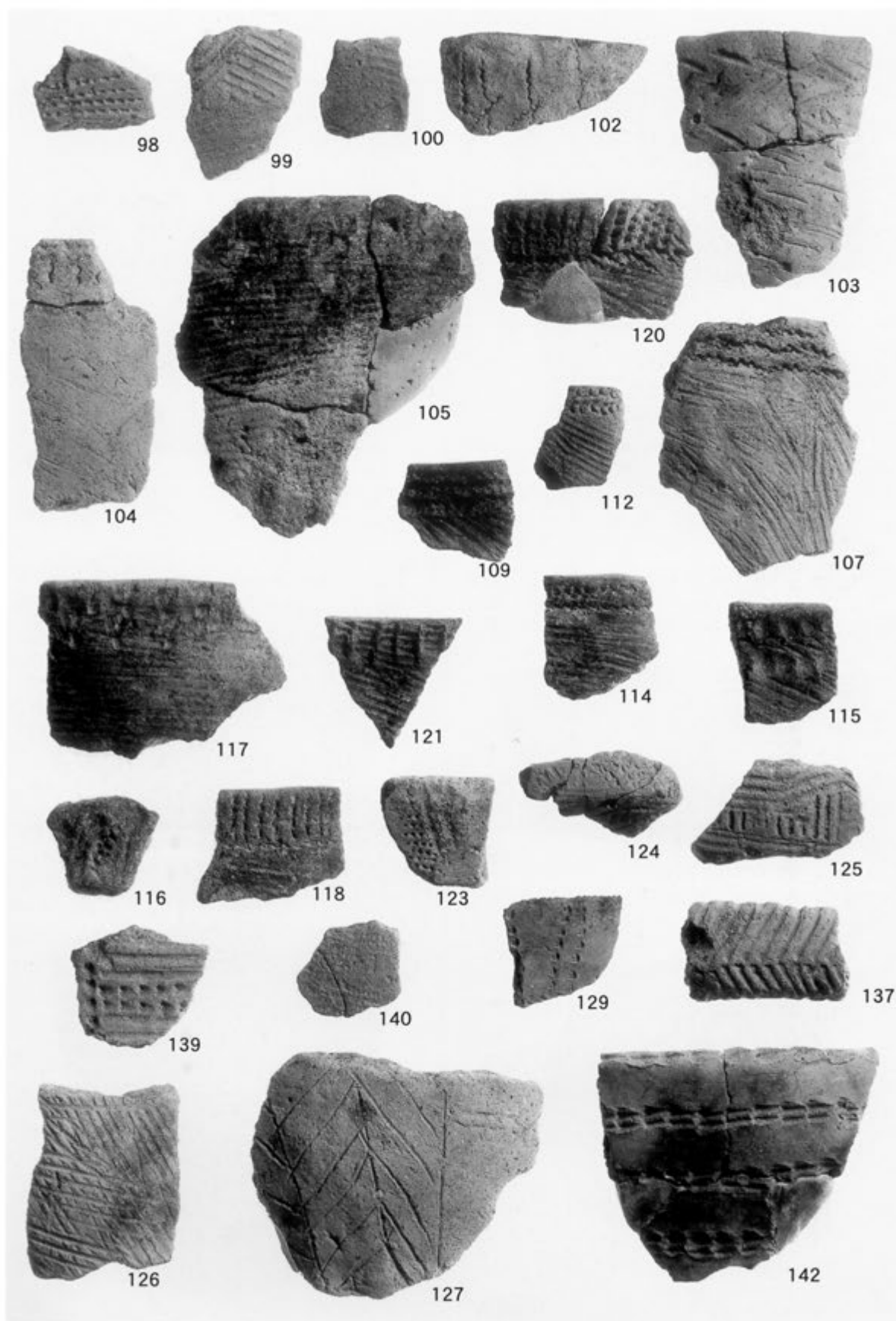
近世道跡



遺物指導風景









133



3



135



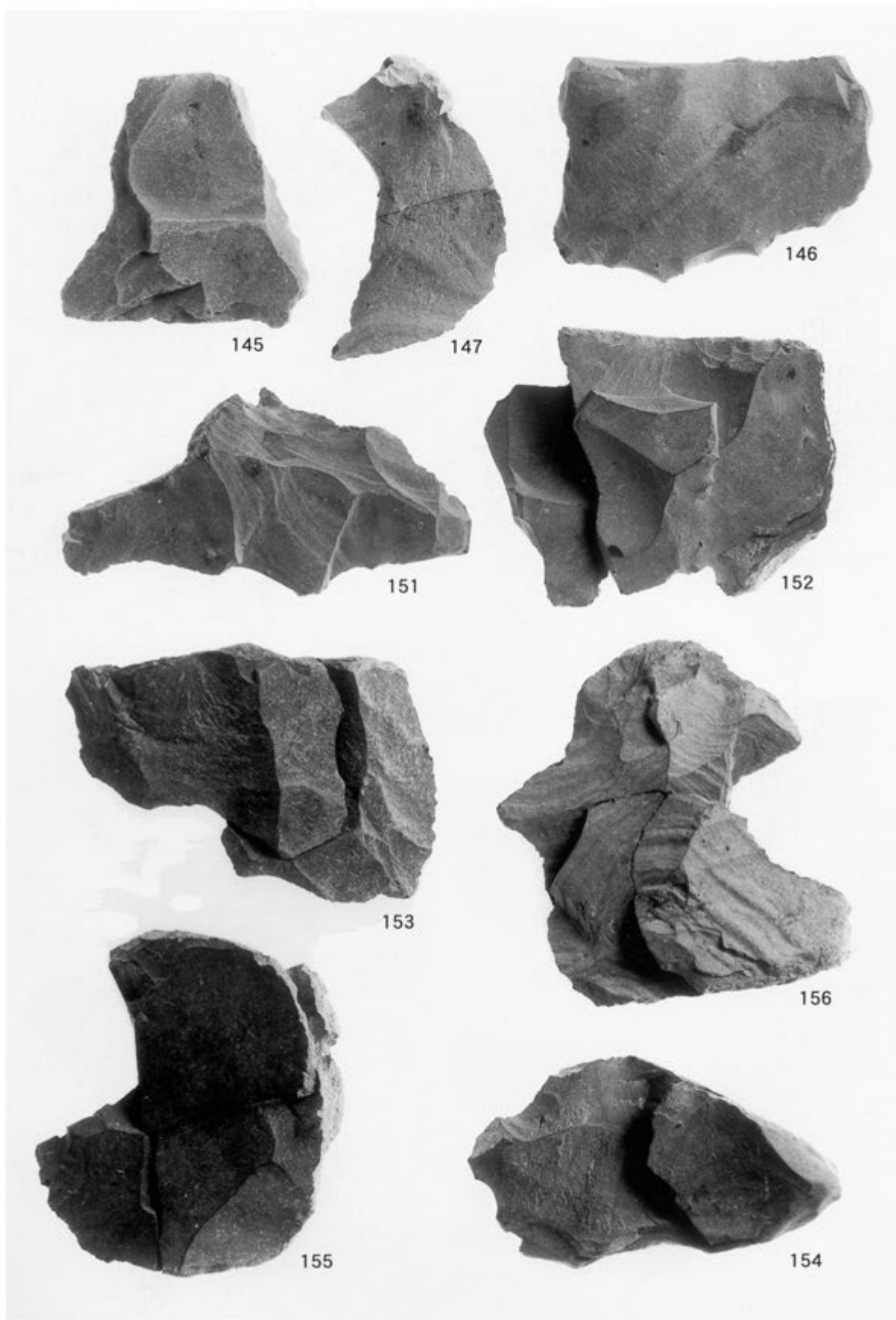
134

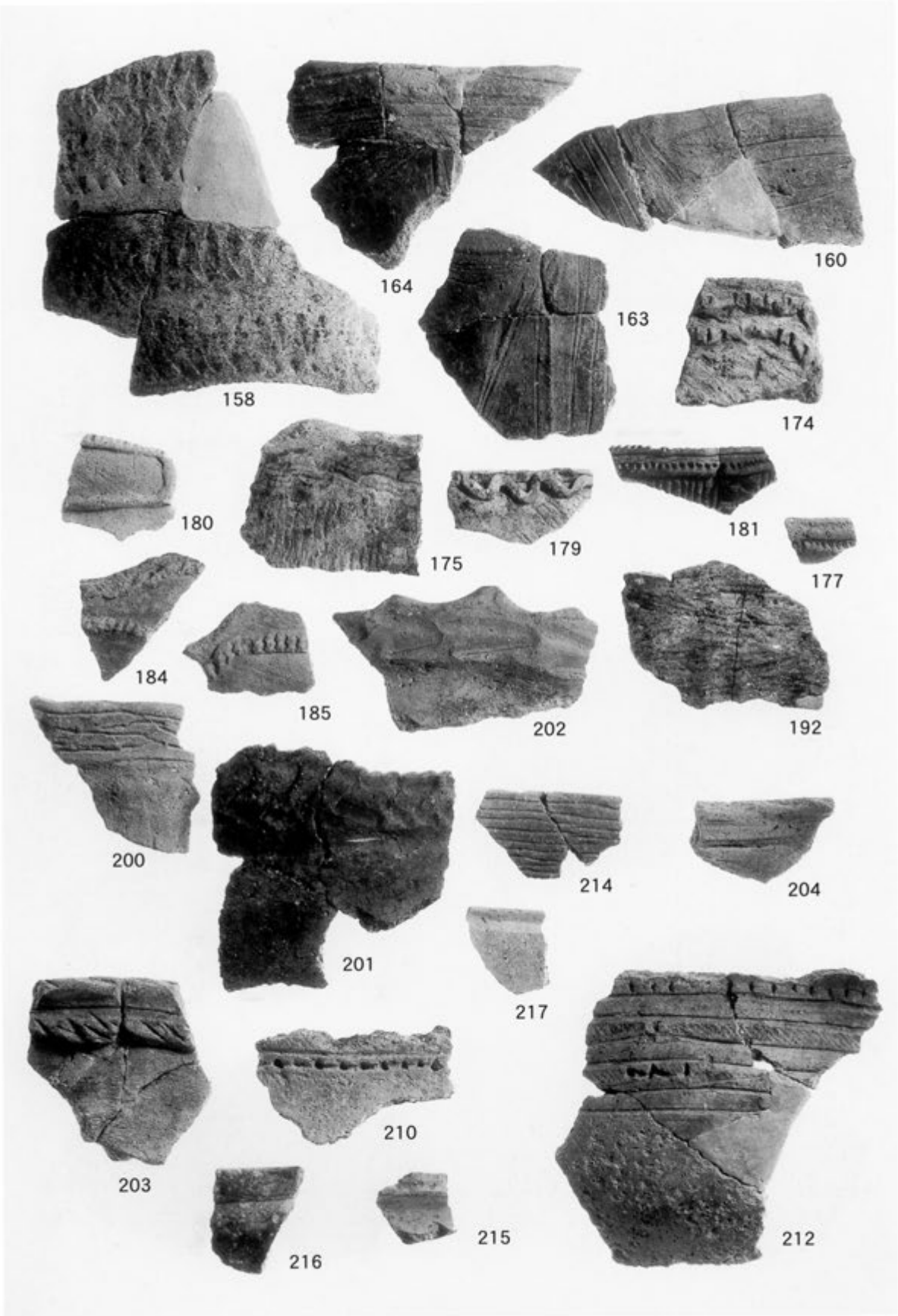


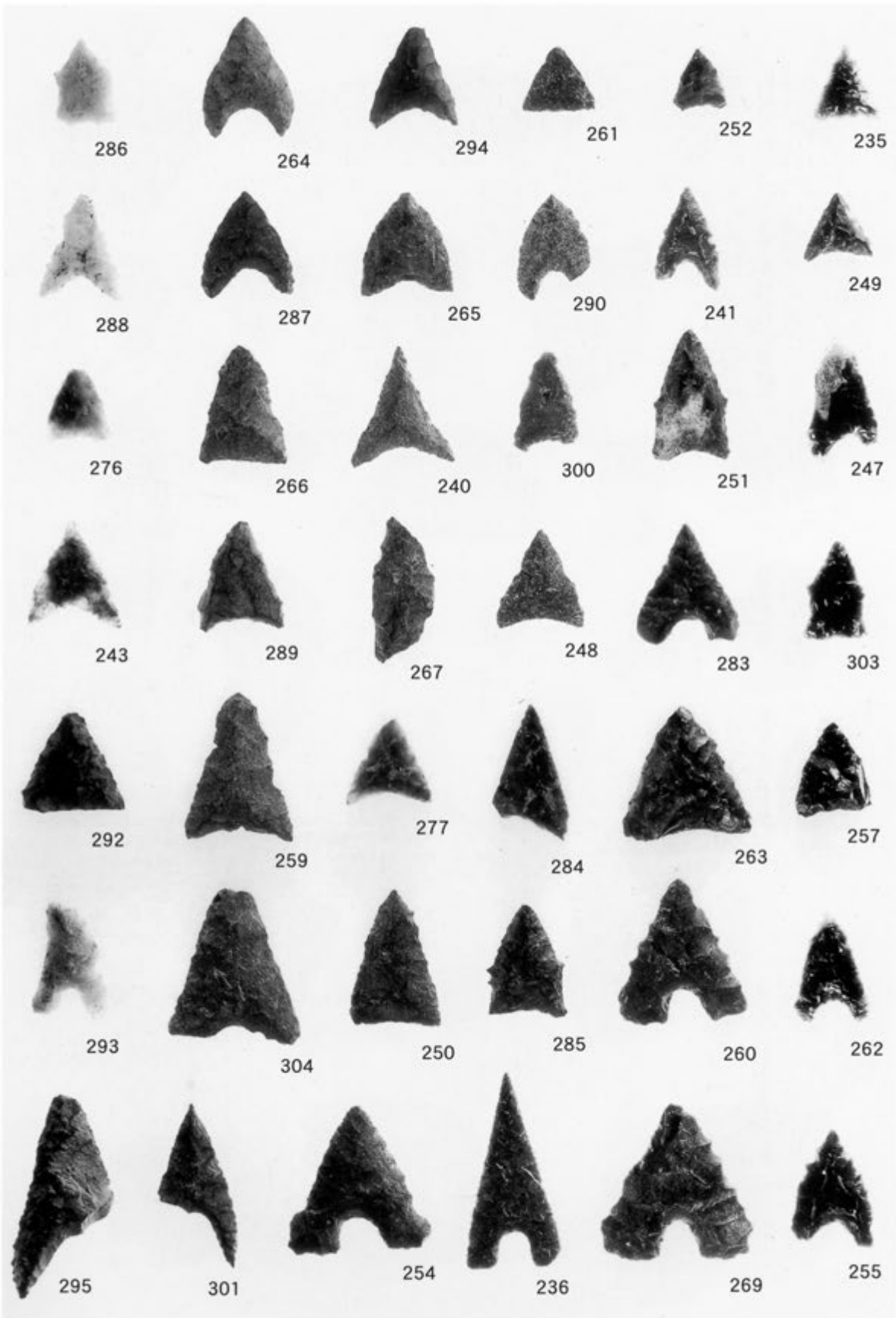
135底部

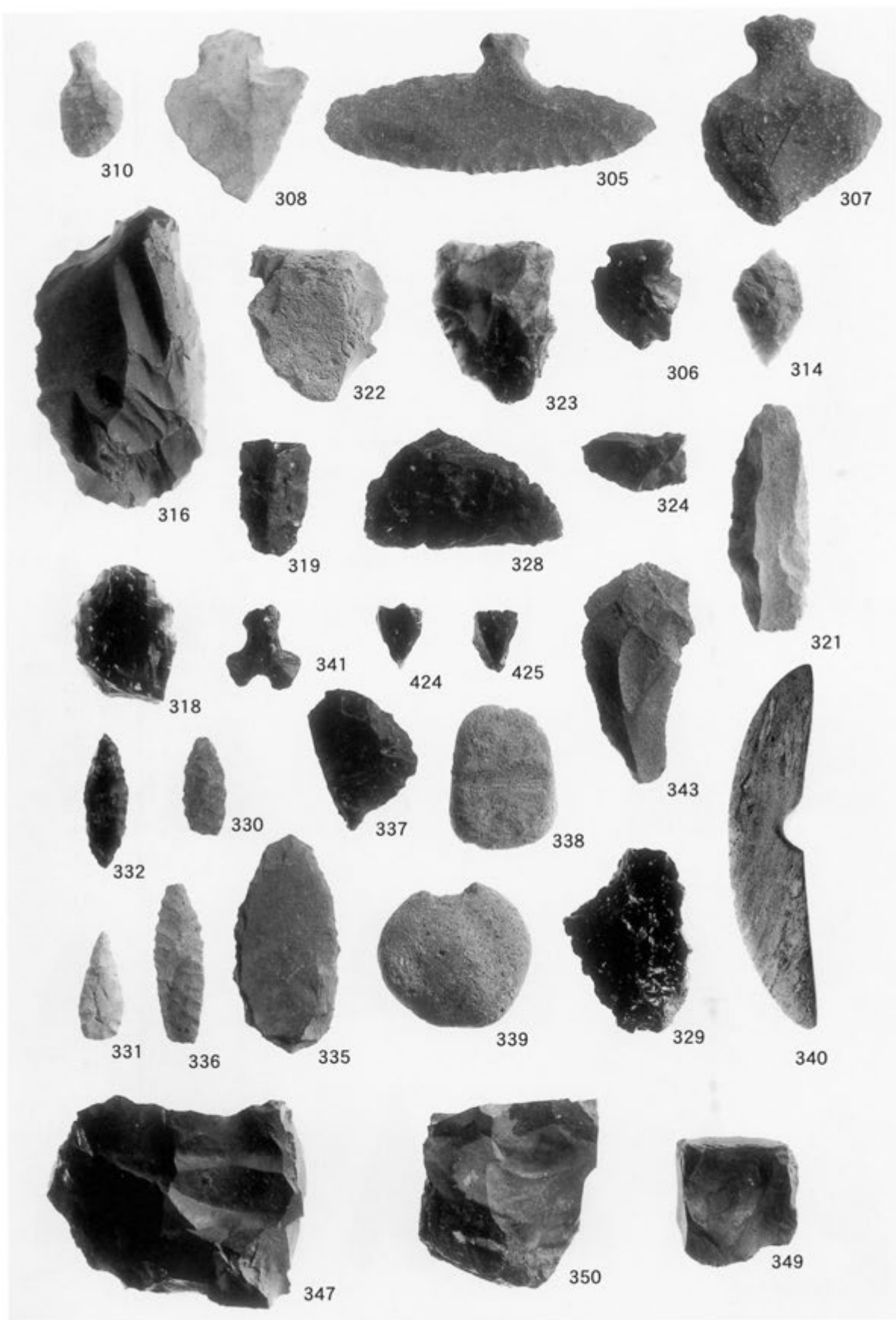


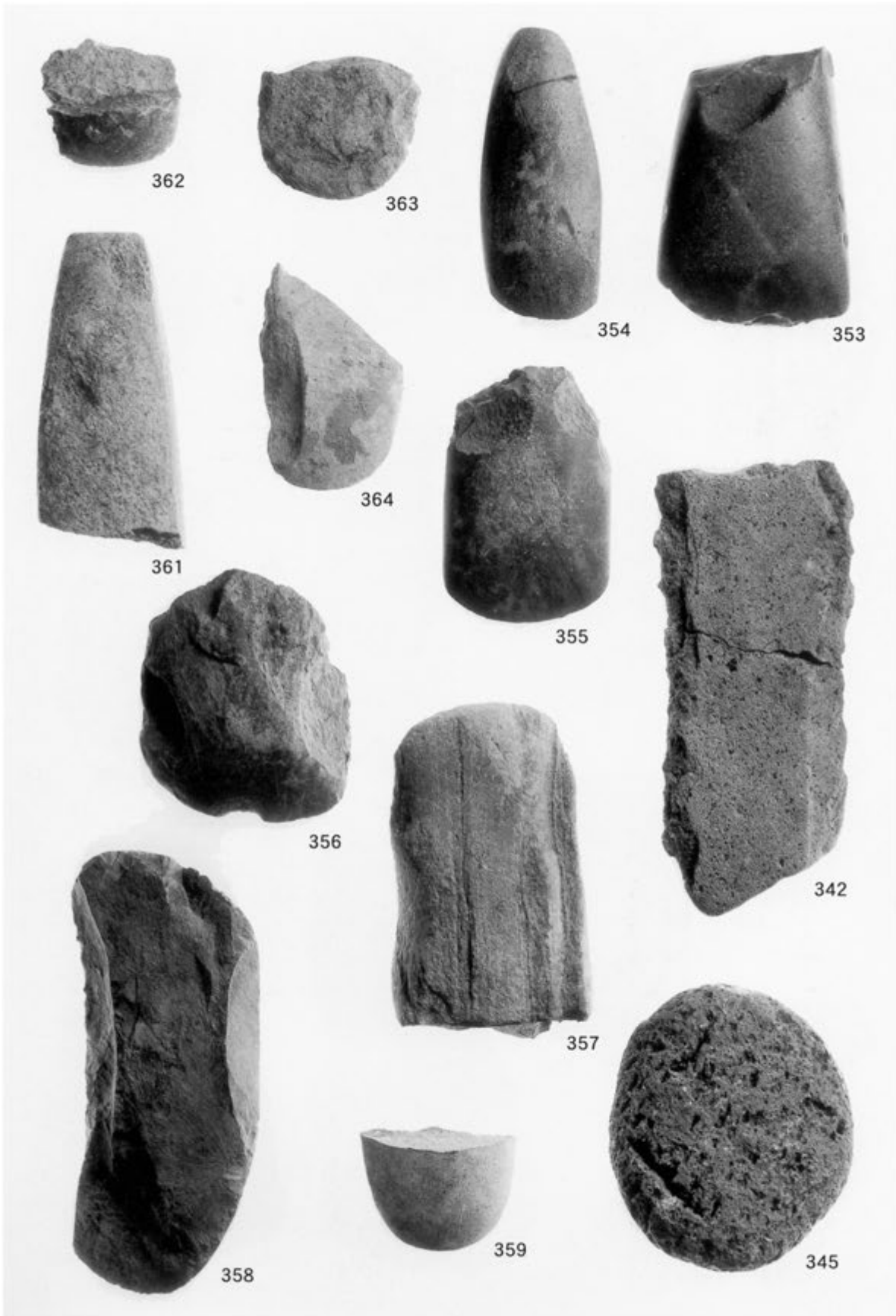
136

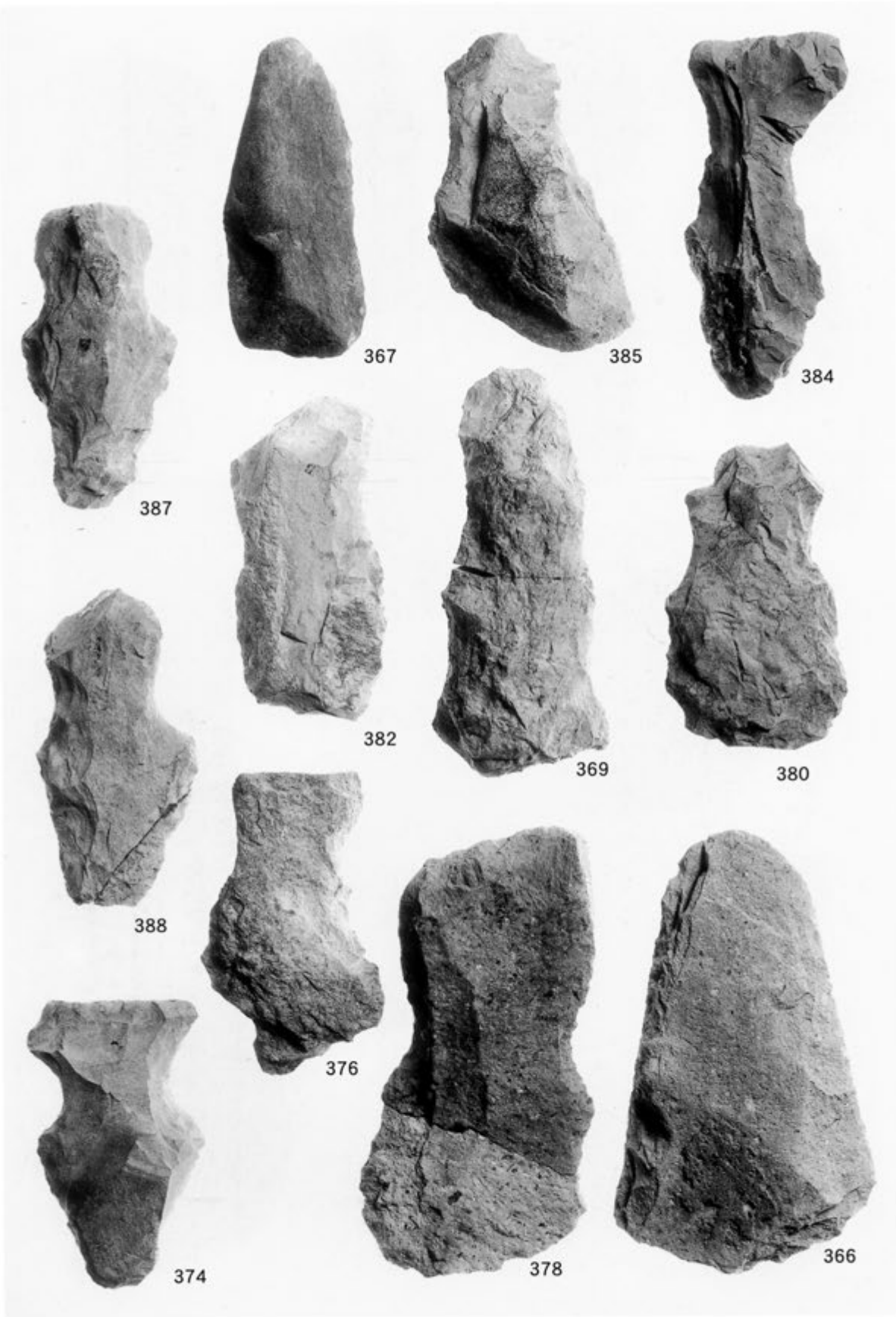


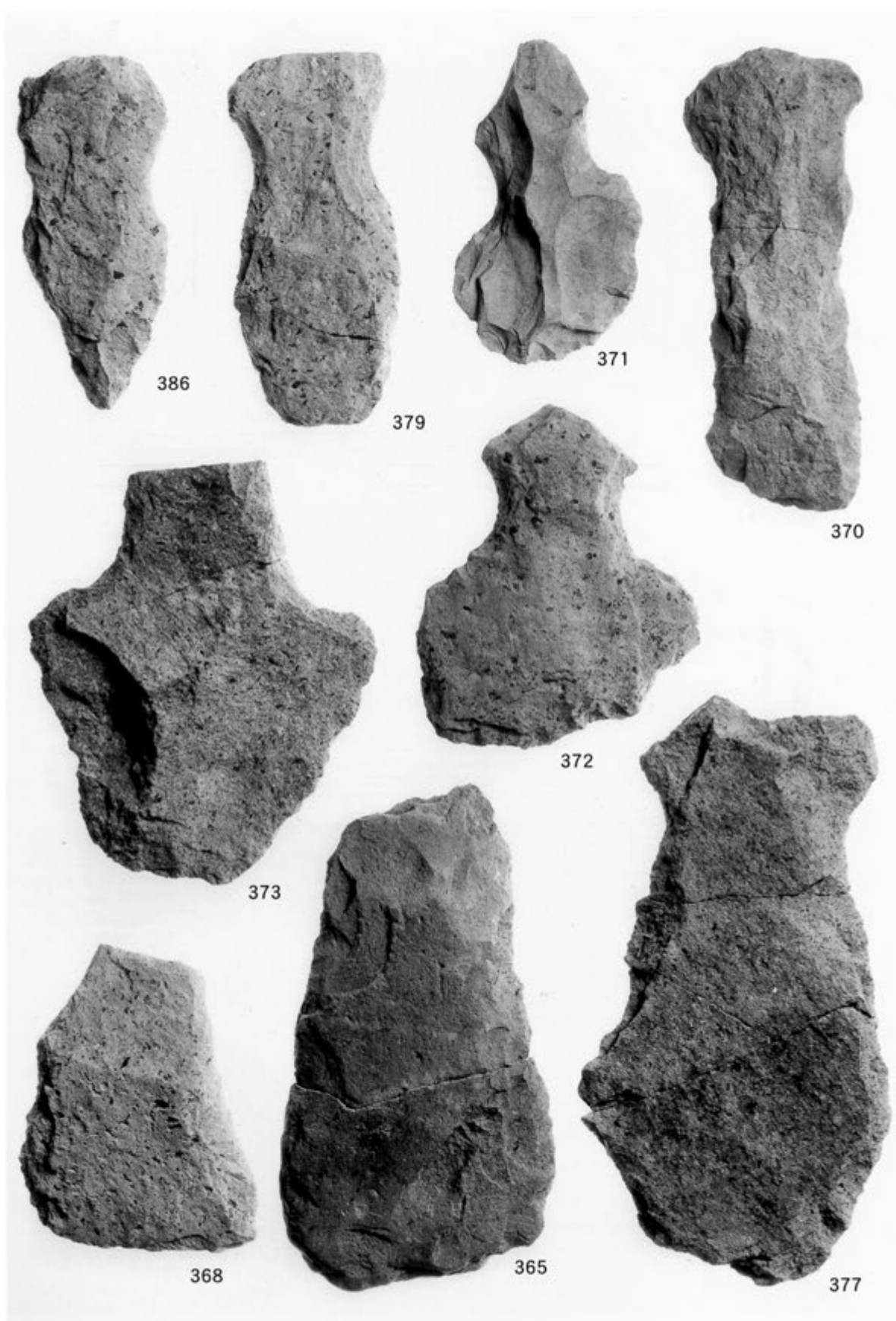


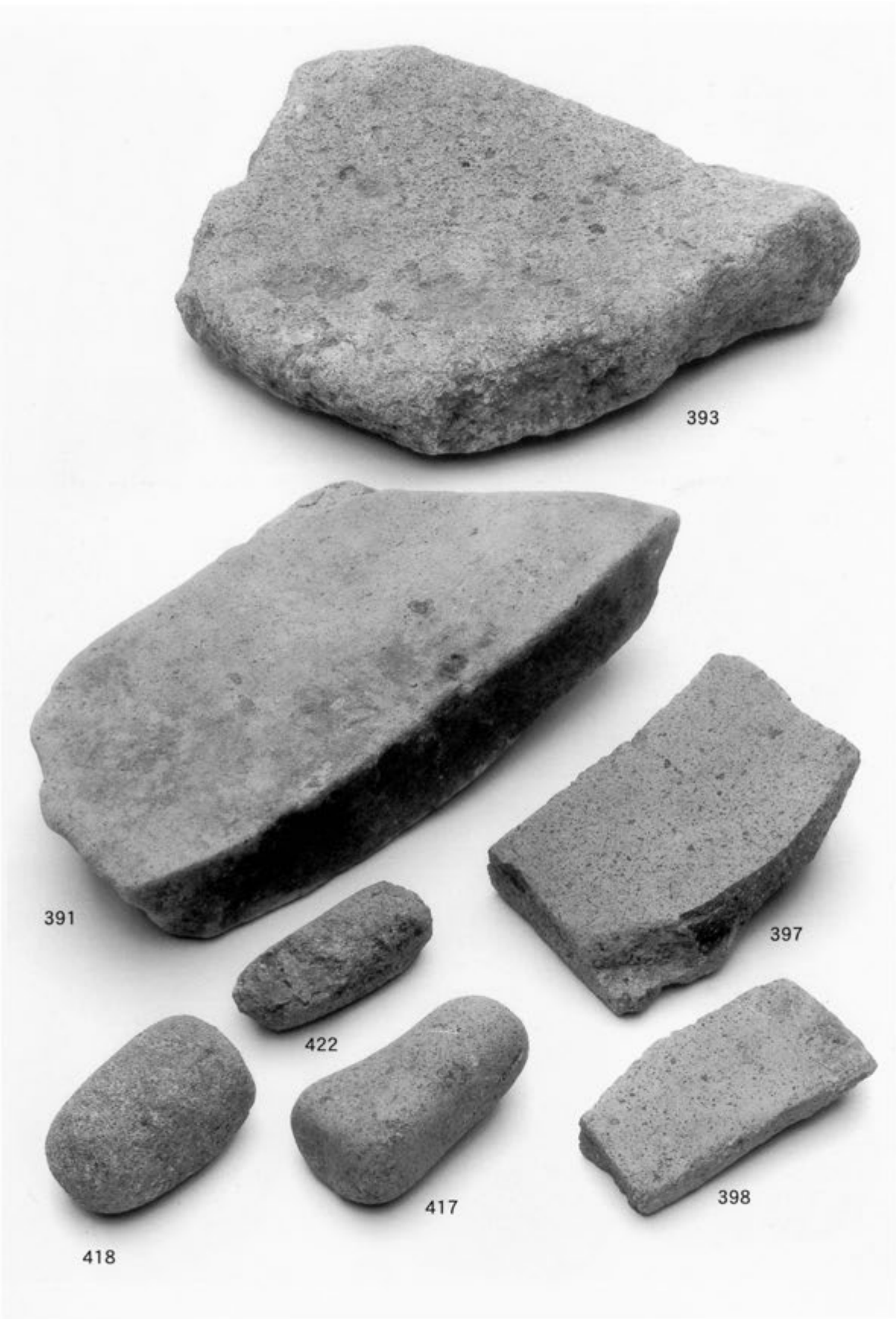


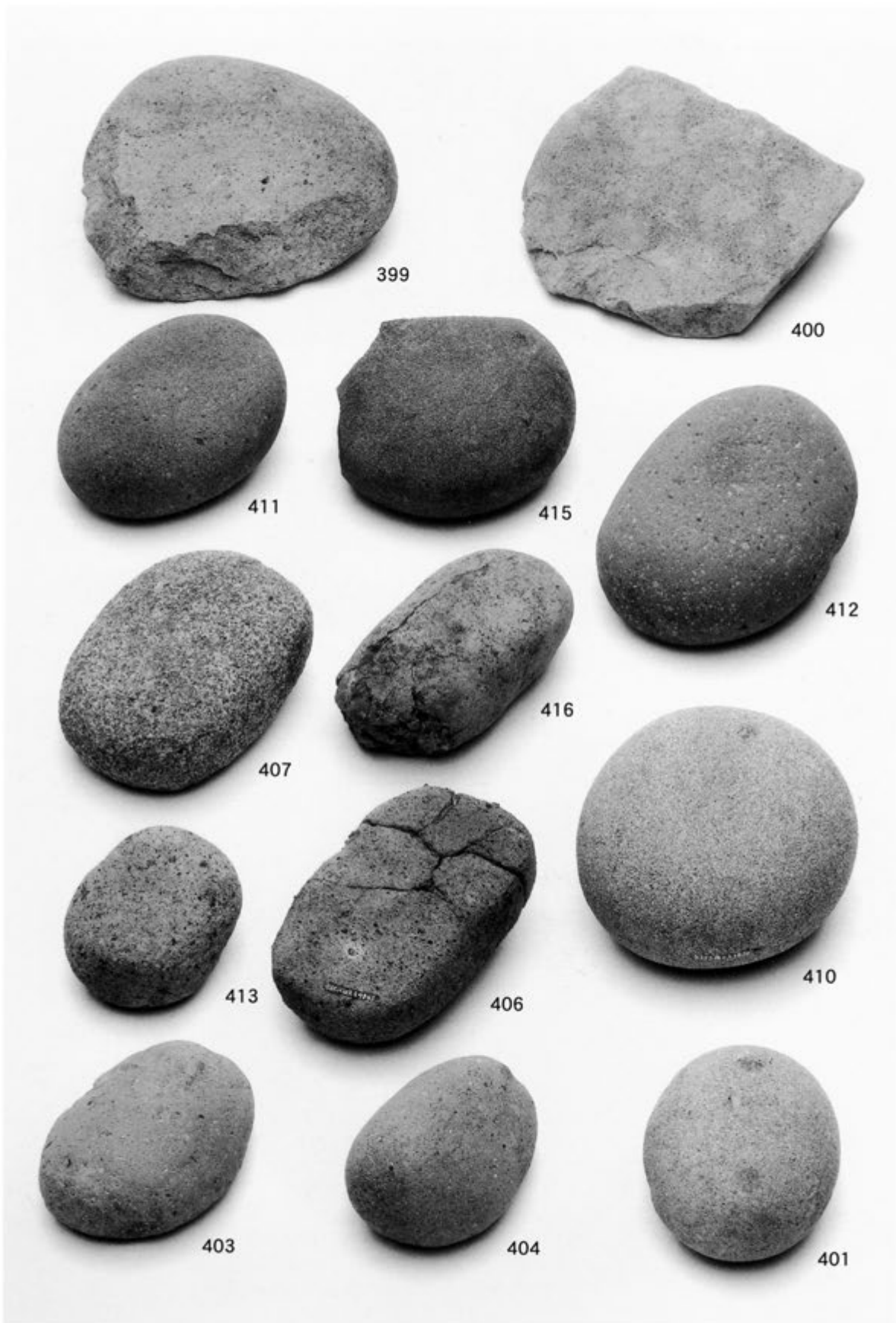














432



434



432

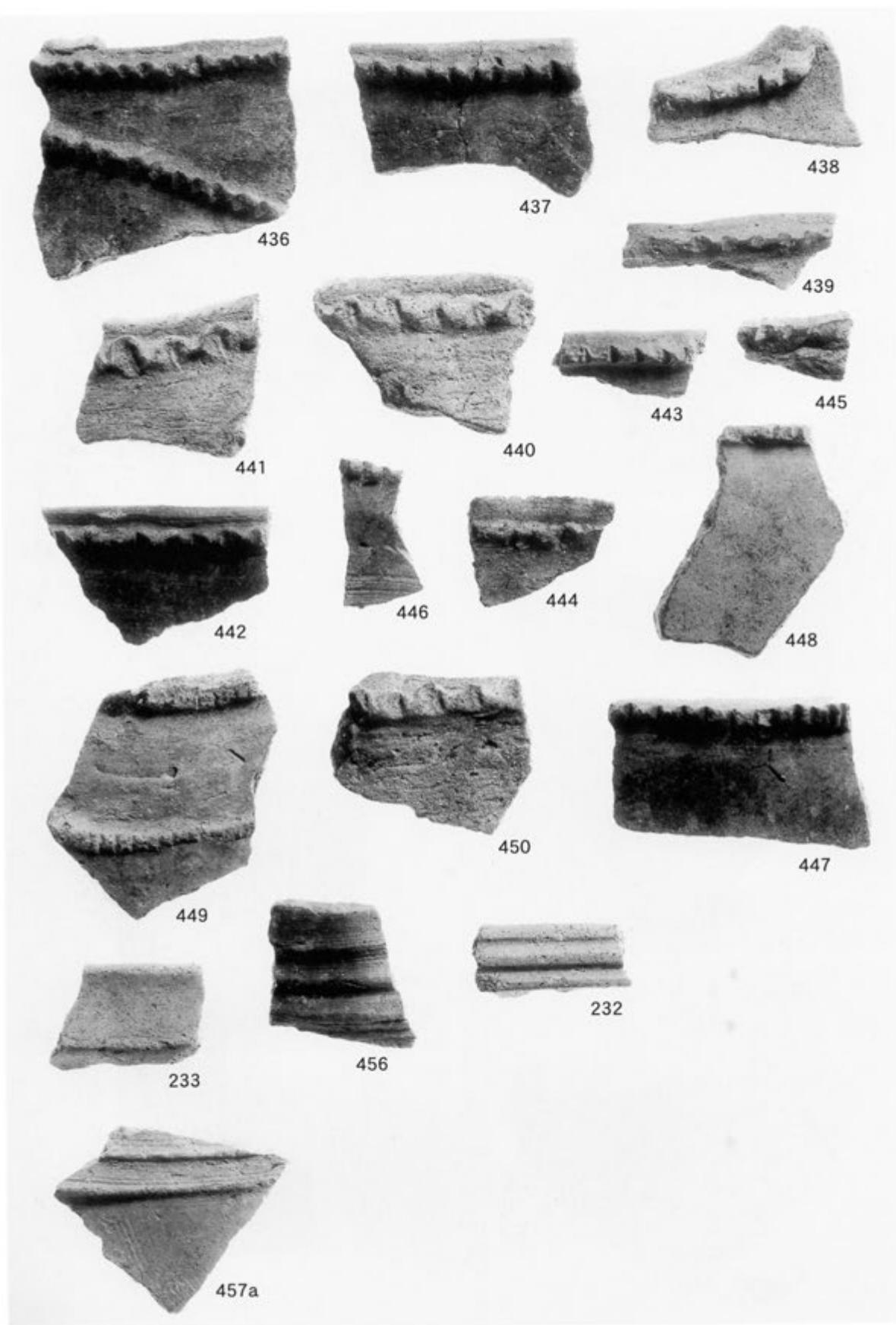


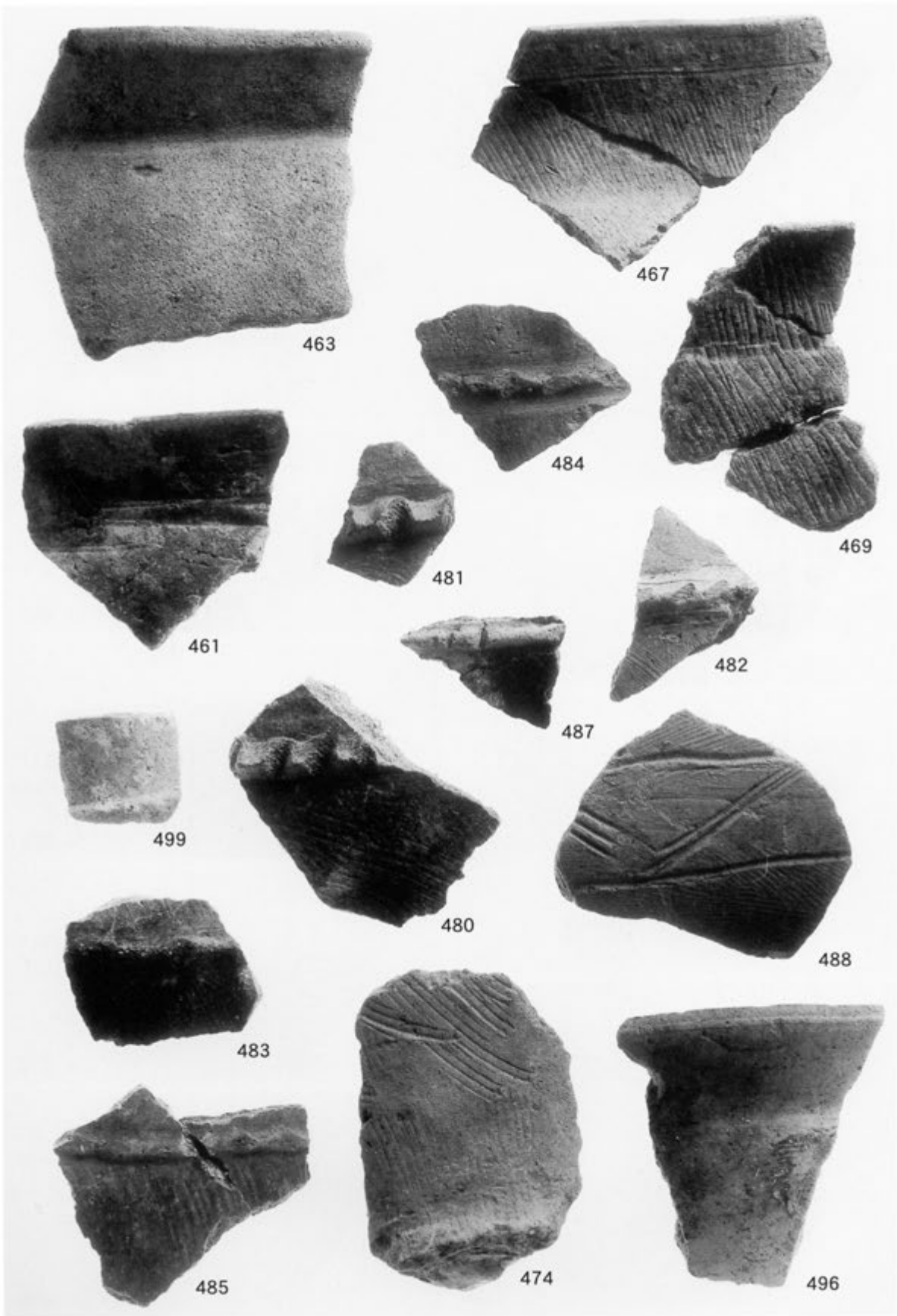
431



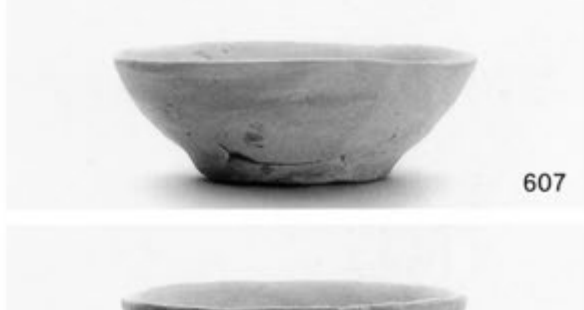
433









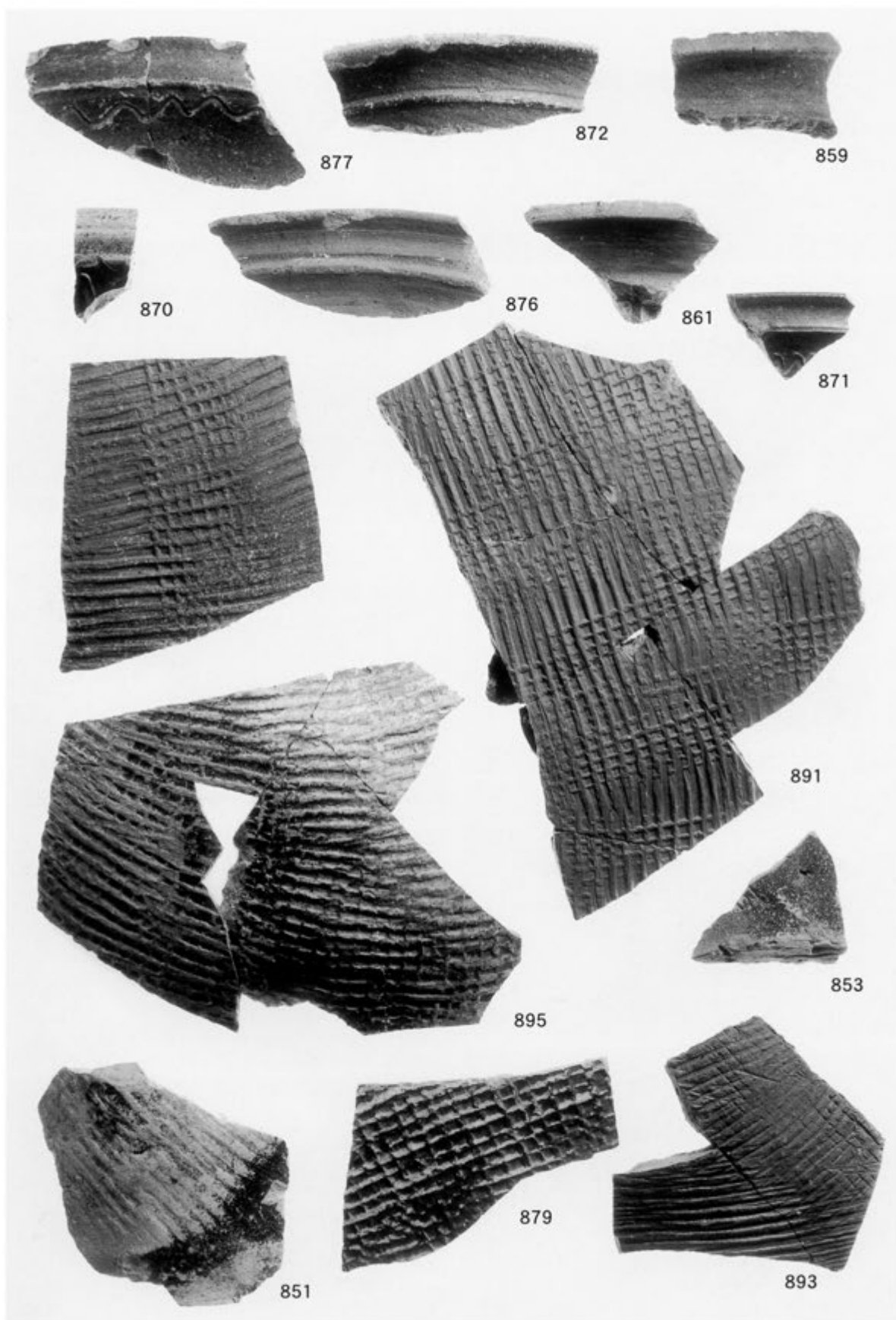


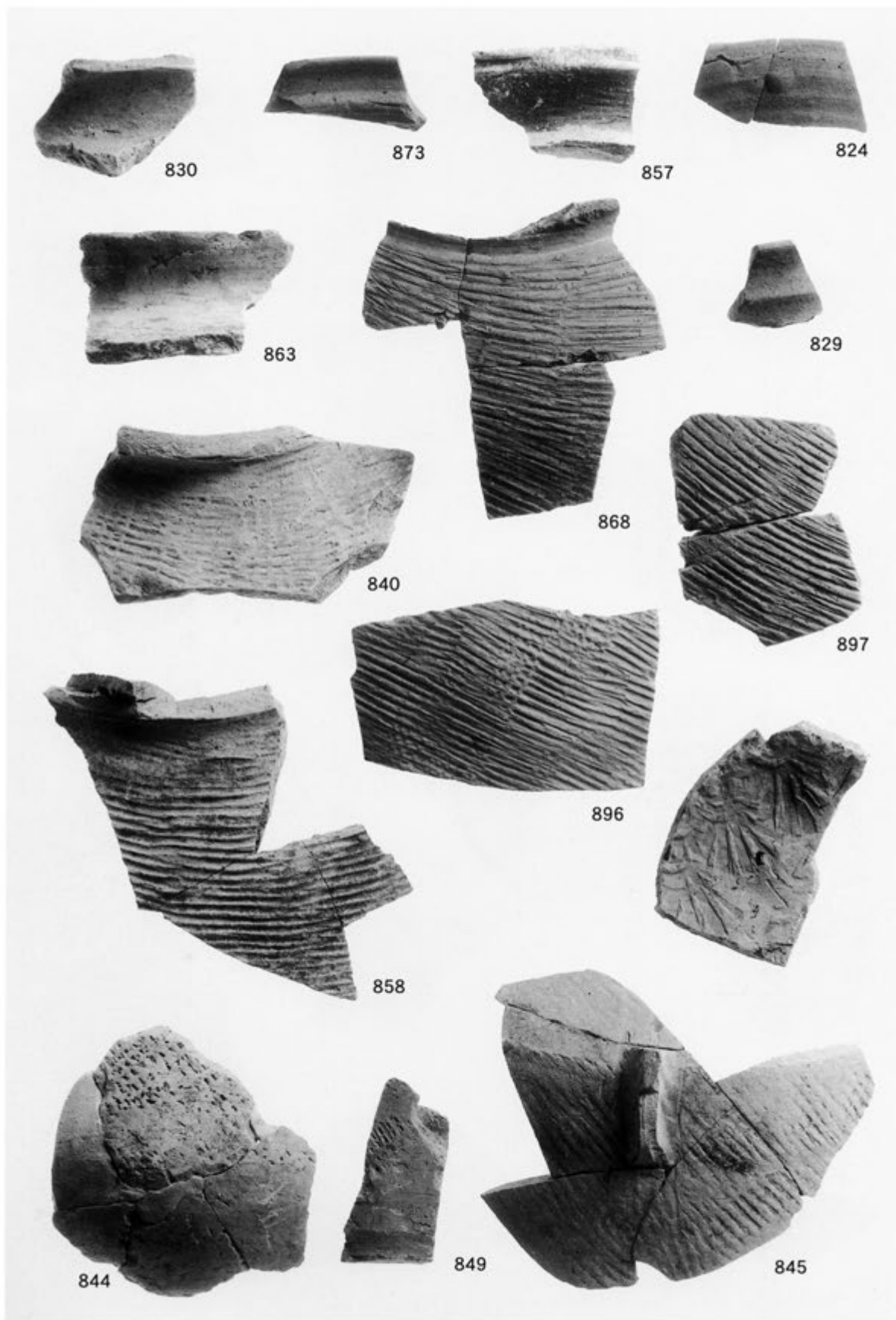


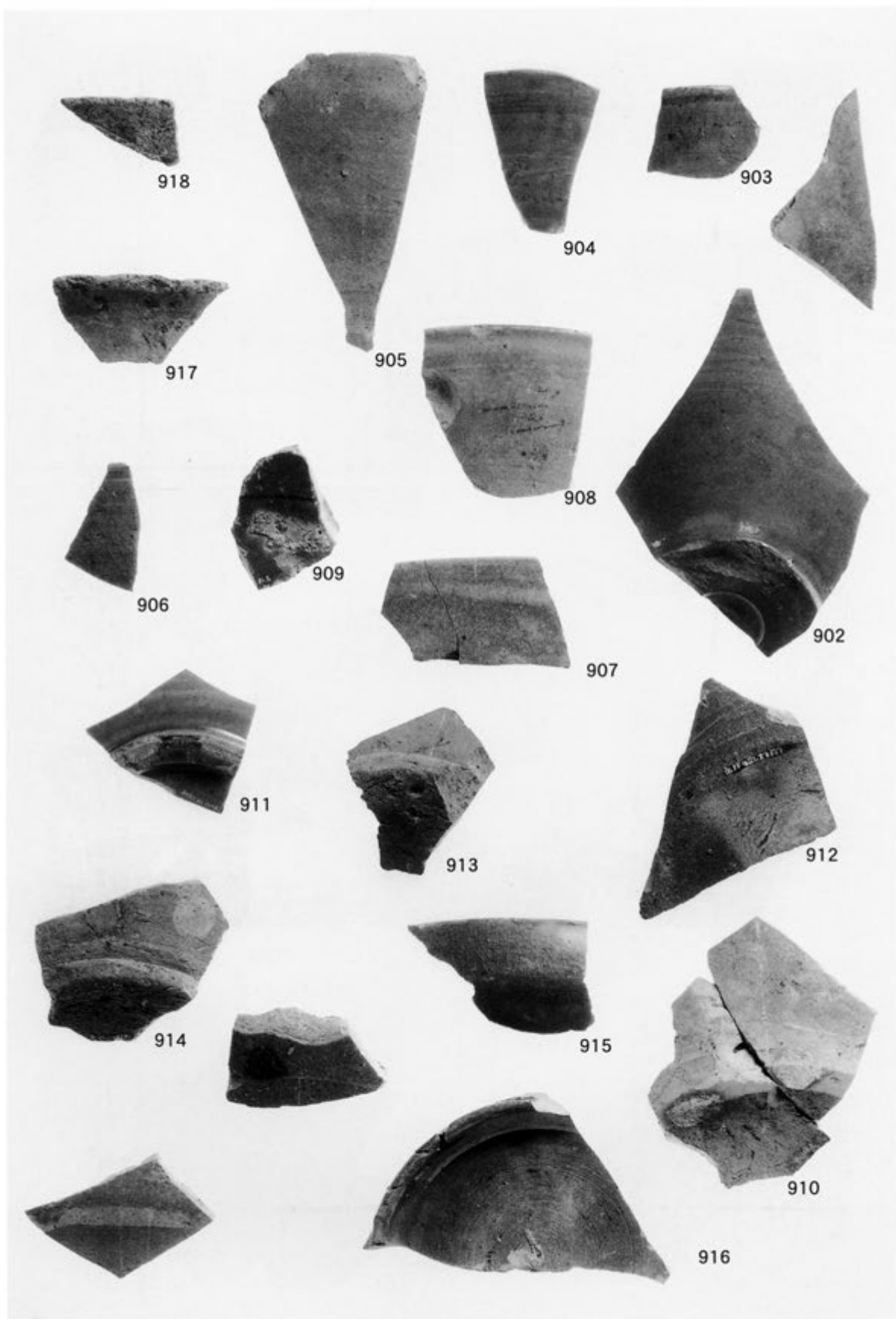


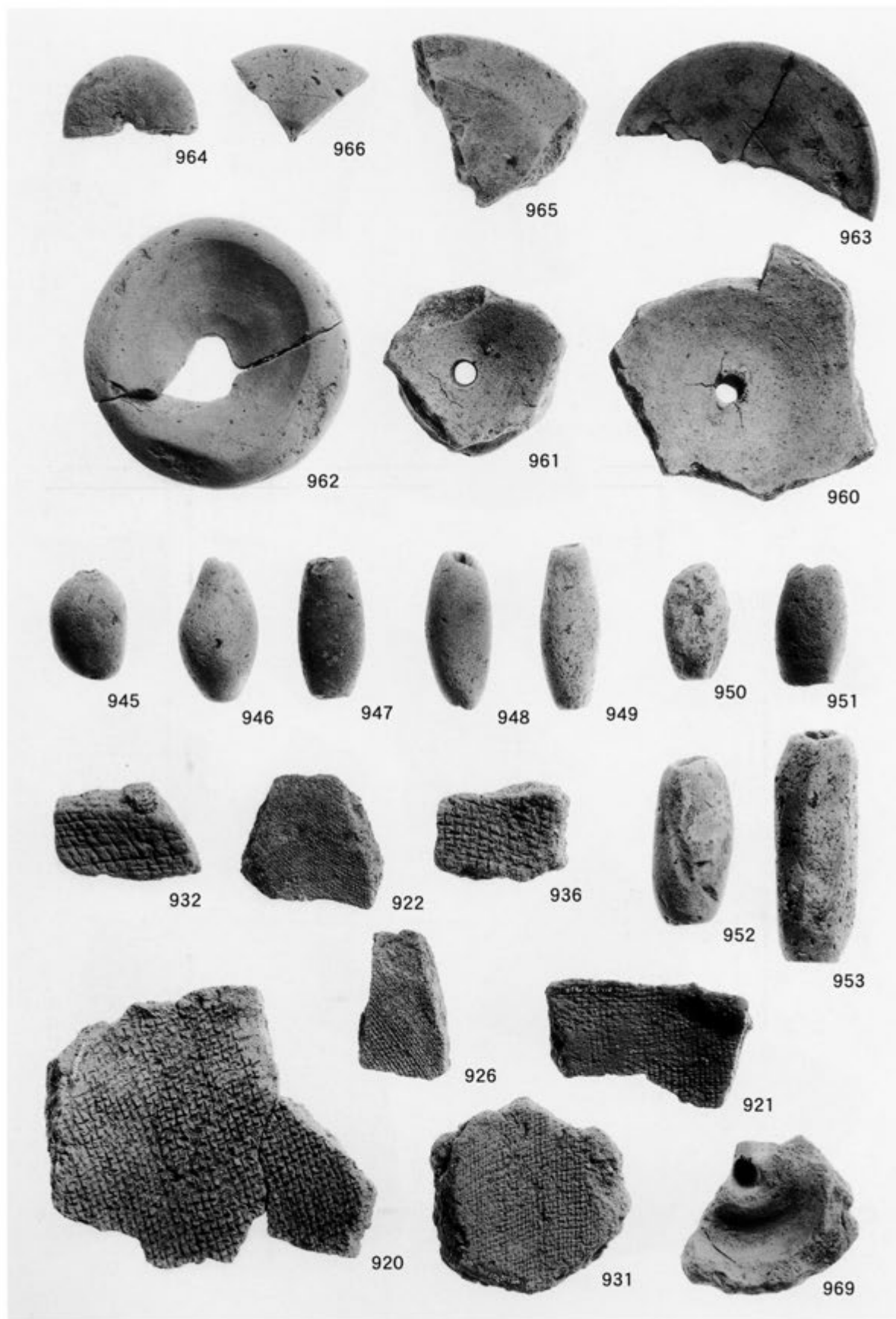


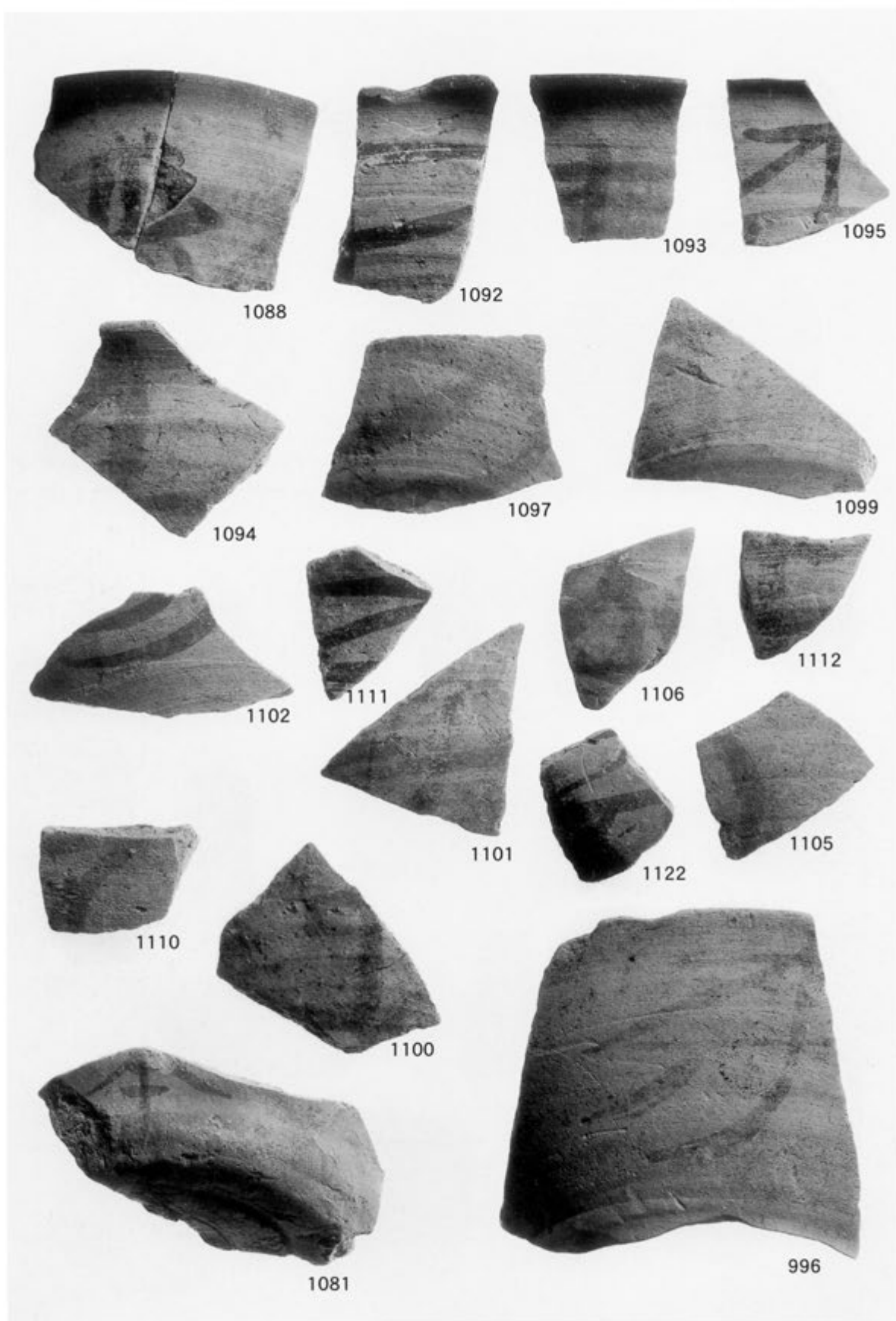


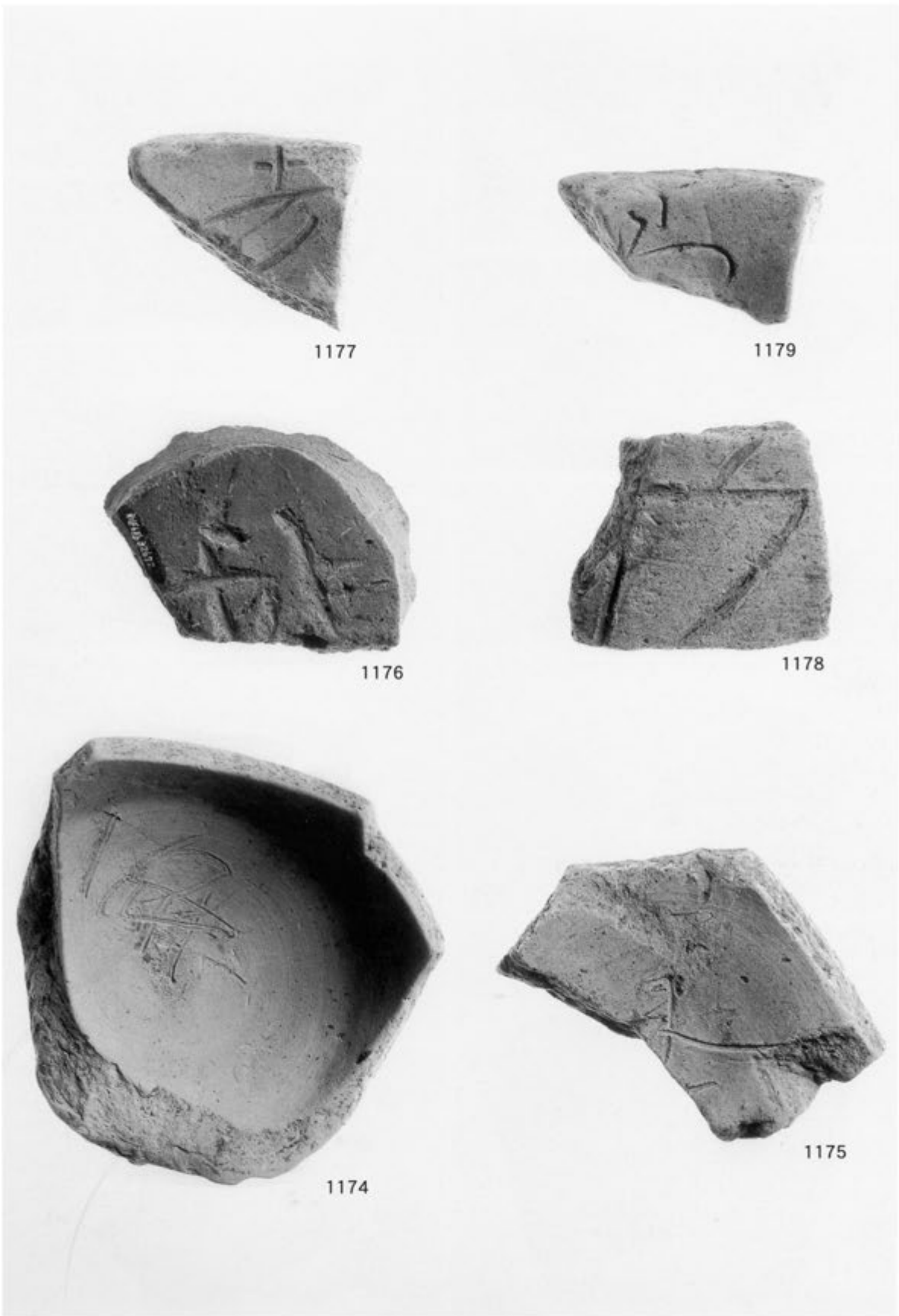












1177

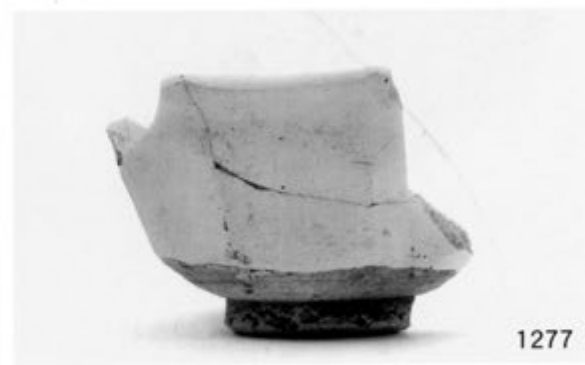
1179

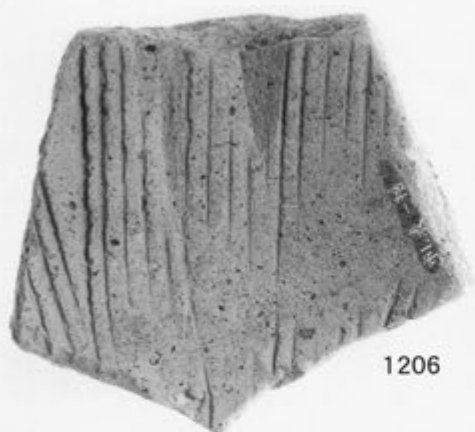
1176

1178

1174

1175





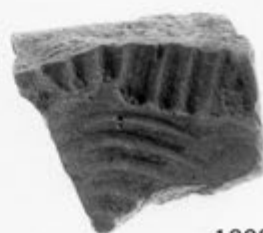
1206



1203



1211



1208



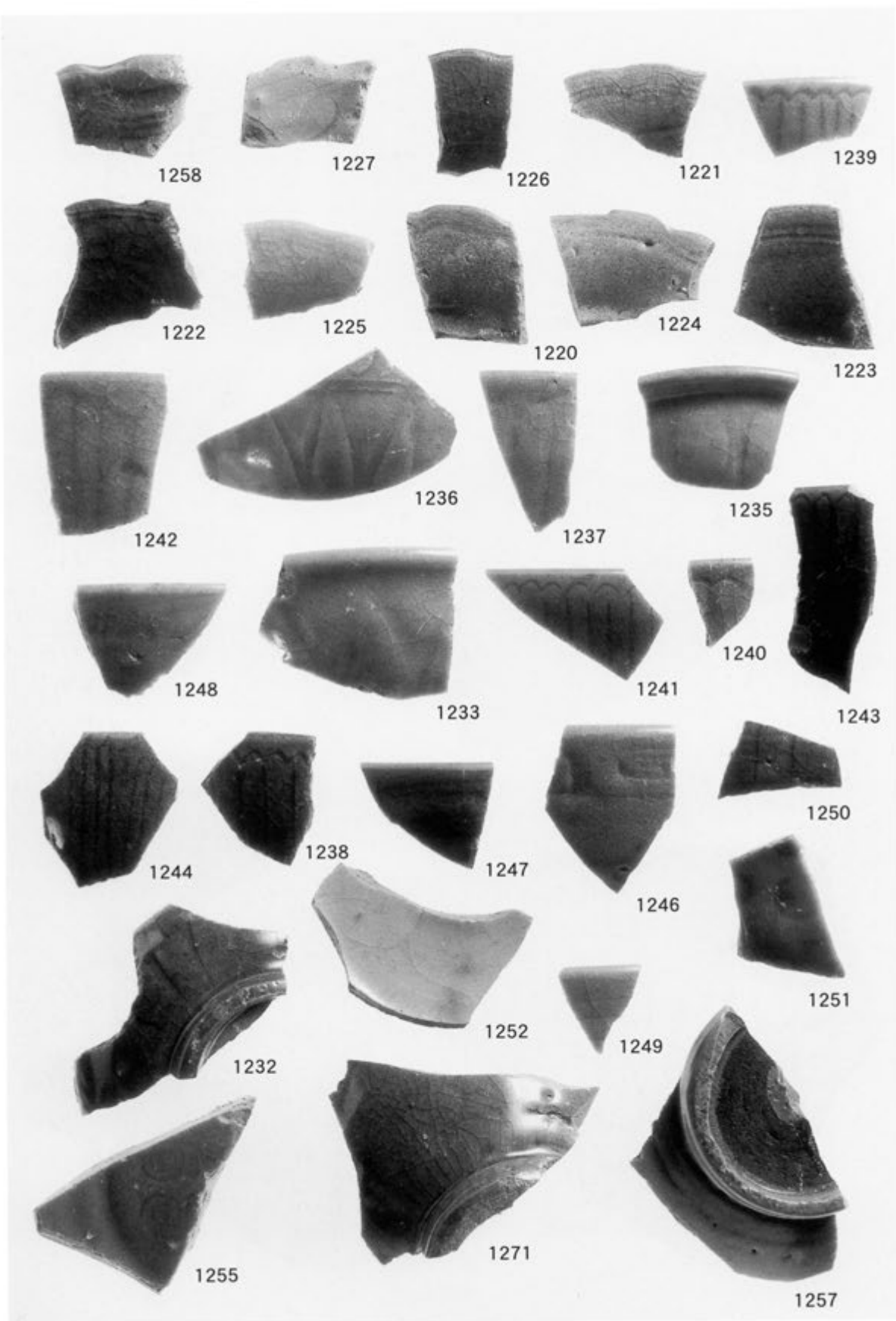
1204

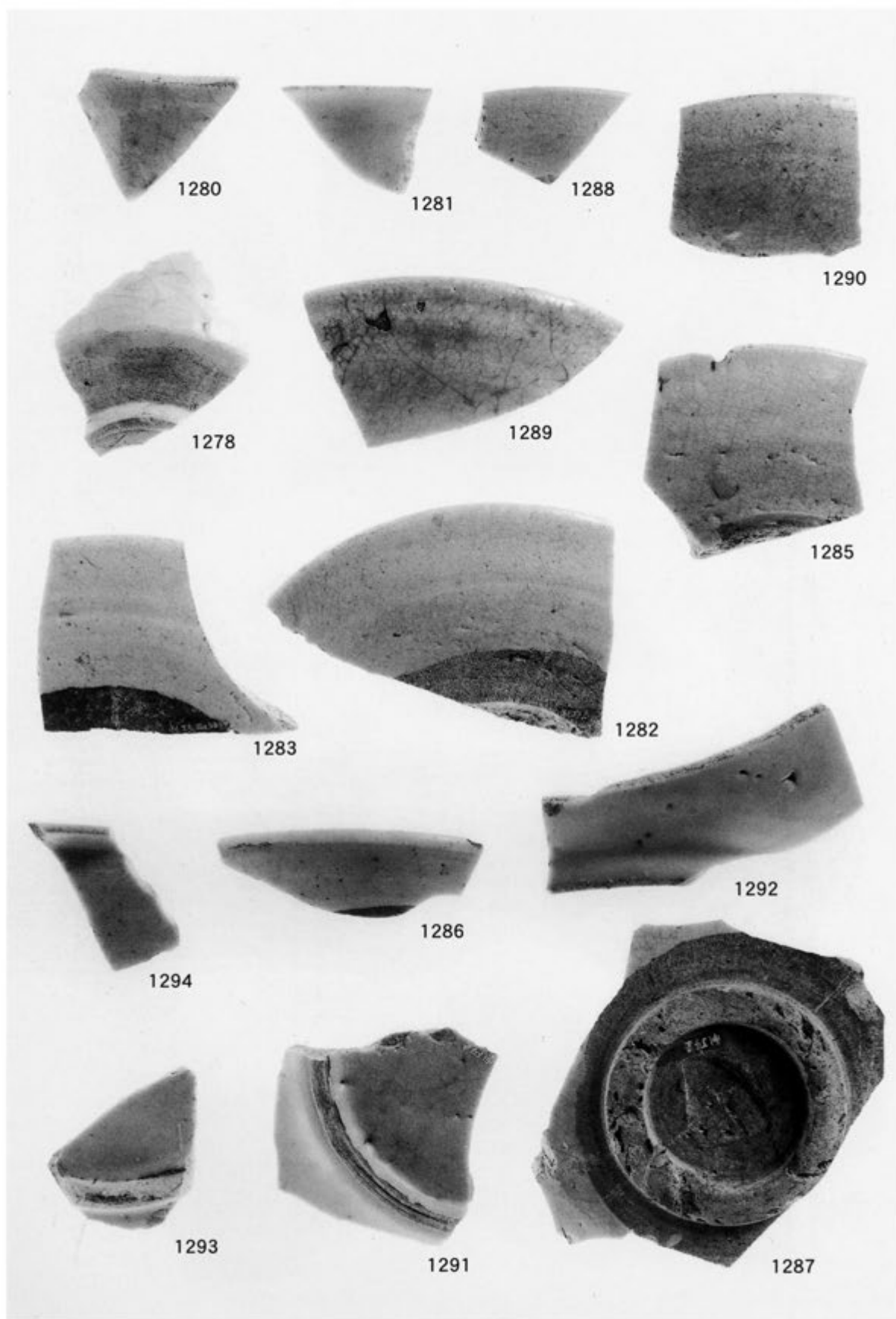


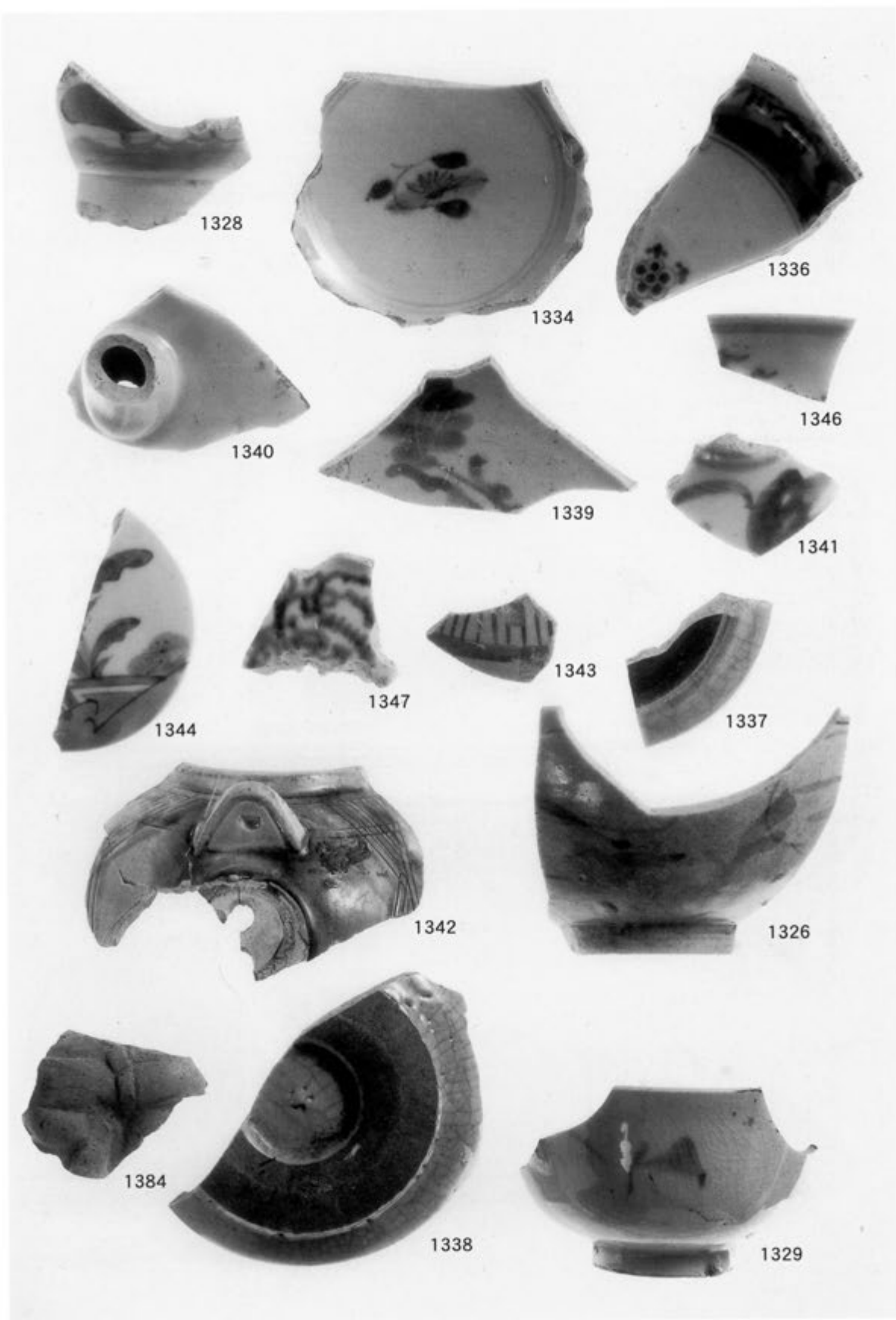
1205

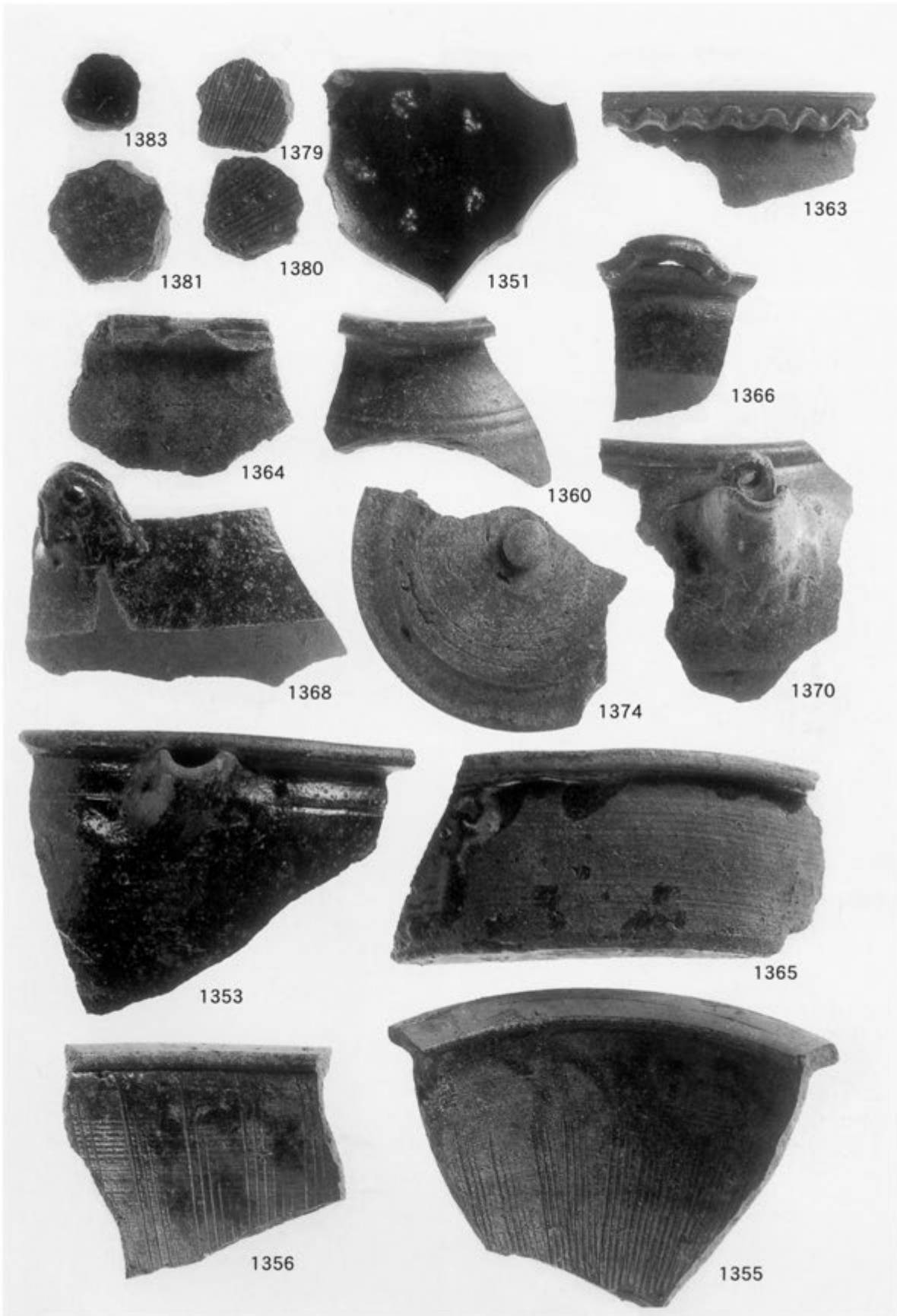


1207

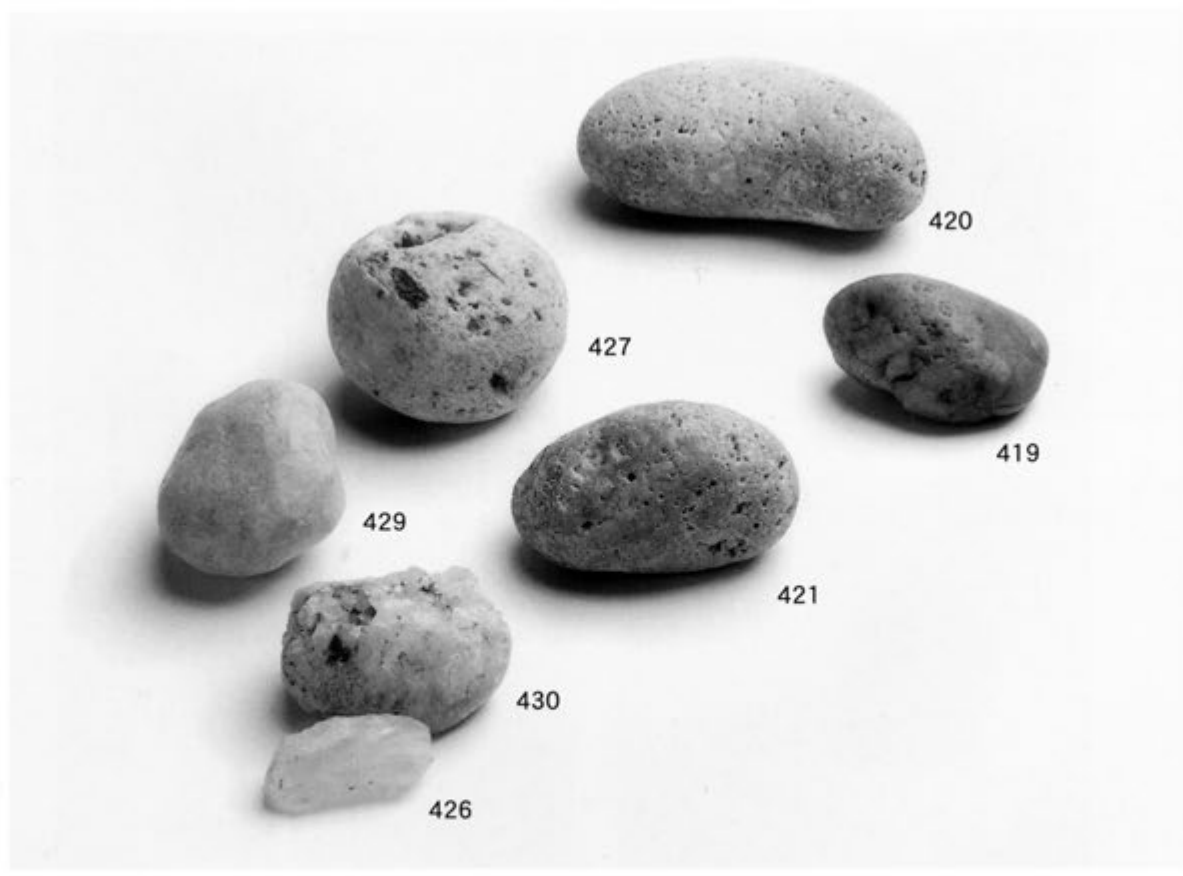


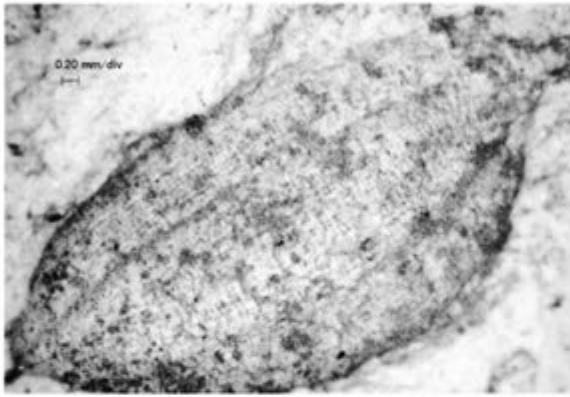




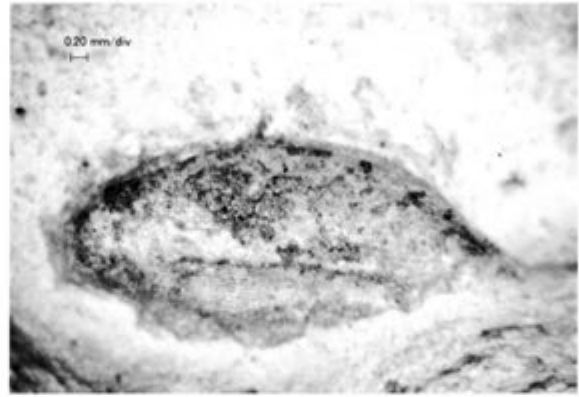








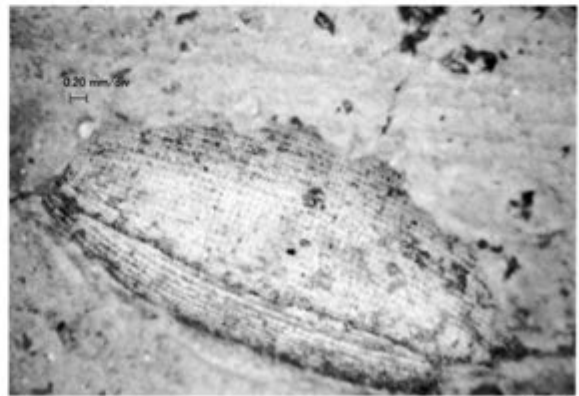
954



955



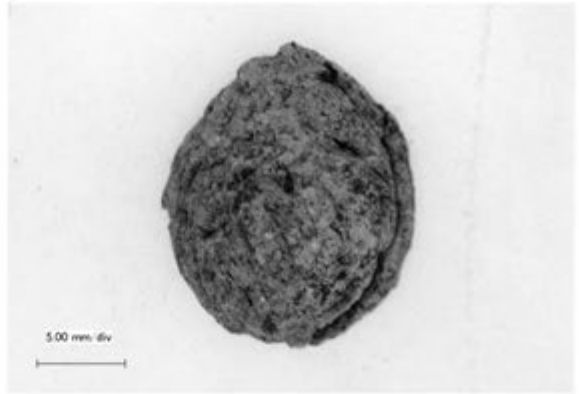
956



957



986



987



988



989

あ と が き

平成14年5月、開通したての南九州西回り自動車道市来インターに行った。丘陵はごっそり削られ、平成9年度に寺師・藤野両文化財主事が調査していたころを思い出させるものは一つもない。ここにあった遺跡の報告書を書くのかと思うと身が縮む思いだった。縄文時代から近世にわたる、おびただしい数の遺物と遺構図面に当惑していたころのことである。

東シナ海に近いこの台地はさまざまな時代の人々にとって魅力的だったのだろうか。縄文時代早期の土器が多量に出土した台地の上に古代の建物が並び、近世墓地からほど近い場所からは弥生の埋壺が出土した。

直接調査した遺跡でなかったため苦労した面が多々あったが、多くの方々の御協力・御指導を得て、ここに報告書を発刊するに至った。今後、検討を要するものも多いと思うが、機会をみて不備を修正し、その責務を全うしたい。

調査にあたり便宜を図ってくださった市来町教育委員会、発掘作業員として御協力いただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた県立埋蔵文化財センターの方々に心より感謝申し上げます。

整理作業員（平成10年度）：篠原香代子・富田恵子・永田よしえ・東 志津子・本多直子
（平成13年度）：槐島孝子・岩城カヨ子・西川明美
（平成14年度）：春山まり子・竹添つるえ・岩爪美津子・古川陽子・
久米村美穂子・西中蘭加代子・石田眞美・西川明美・森口美佐



平成9年度市ノ原遺跡第1地点発掘調査メンバー一同

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

市ノ原遺跡 （第1地点）

発行日 2003年3月20日
発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
TEL (0995) 48-5811
印刷所 株式会社あすなろ印刷
〒899-0041 鹿児島市城西2-2-36
TEL (099) 250-7033